

---

# 仮面ライダーディライト-世界の光導者-

トライR

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーディライト - 世界の光導者 -

### 【Nコード】

N9670K

### 【作者名】

トライR

### 【あらすじ】

ディケイドが旅した9つの世界とは正反対の9つのダークライダーの世界。その世界のライダー達が抱えている迷いという「闇」…。そんな中、世界の光導者「仮面ライダーディライト」こと煌闇影が現れた。これは、そんな「闇」を背負う彼等に希望という「光」を差し、導き救うもう一人の「世界を旅するライダー」の物語である…。世界の光導者、ディライト！その瞳は、何を照らす？全ての闇を、光へ導け！

たまたま一部シナリオ修正しますので悪しからず。

## 主人公&ライダー紹介（前書き）

「ダークライダーの世界があったら…？」という憶測から生み出した超駄作でございます！

今回は主人公の紹介を書いてみました。初めてなので自身はないし、矛盾している点が多々ありますが、何卒温かい目で見守って下さいませm(\_\_\_\_)m(\_\_\_\_)。  
では、どうぞ！

（勝手ながら設定の大部分を修正いたしました。誠に申し訳ありません！）

## 主人公&ライダー紹介

煌 闇影（きら みかげ）/仮面ライダーディライト

23歳。本作品の主人公。前髪がカールがかつた黒い短髪で、服は茶色のジャケットを着こみ、上はワイシャツ、下は黒ズボン。明朗活発で誰に対しても優しく、他人の悩みに真剣に相談に乗り力になりたがる熱血漢な男。その性格故に他人からは疎ましく思われる事がよくあり、最悪騙されてしまう事もある。

基本的に争いは好まないが、他人の夢や悩みを笑ったり、傷つける者がいればその相手に怒りを露にするという若干血がのぼりやすい性格の持ち主。

仮面ライダーディライト

闇影がディライトドライバーで変身するライダー。別名、「世界の光導者」。

外見はディケイドに酷似しているが、体色はライトオレンジ（前側）と白（後側）で、プレートは金色に近い黄色で、胸のXの部分は黒で、複眼は青色。クウガ／キバの9つのシャドウライドカード（最終フォーム）を所持している。

戦闘能力はディケイドより高いが、ディケイドとは違い他のライダーにカメンライドは出来ないが、シャドウライドが使用可能。

FAR/ディメンジョンプロミネンス

ディライトのFAR。両手にライトオレンジの次元エネルギーを球状に凝縮、拡大させ敵に放つ。

ディライトドライバー

外見はディケイドドライバーに酷似しているが、色は白じゃなく金に

近い黄色。ライダークレストはクウガ、響鬼、カブト、電王、キバ以外はダークライダーの物となっている。

ライトブッカー

こちらもライドブッカーを金に近い黄色にした物。柄を伸ばしてスピアモードに変化可能。

シャドウライドカード

裏が黒色のライダーカード。ディライトドライバーに装填する事で自身の影をカードに描かれたライダーに変化する。ディケイドコンプリートフォームの様なシンクロ攻撃やディエンドの召喚ライダーの様な援護攻撃に切り替える事が可能だが、このライダーが受けたダメージを本体も同じく受けてしまうというデメリットがある。

## 主人公&ライター紹介（後書き）

初の投稿、結構しんどいッスね〜（-o-;）  
デリライトの能力は簡単に言えば、デイケイドコンプリートフォー  
ムの簡易版って感じですよ！

本格的なスタートは次回更新からです！以上、虎居合瑠でしたm）

――）m

## 第1導 プロローグ(前書き)

皆様、大変長らくお待たせしました事をお詫びいたしますm( )  
—( ) m

なかなか上手く書けなくて難儀してました…(T|T)

下手くそな駄文ですが、仮面ライトディライト！スタートします！

では…どござー！



## 第1導 プロローグ

とある地で、一人の男が戦っていた…。

「…はあ…はあ…全く…随分…しつこく…湧いて…くるなあ…はあ…はあ…」

と、疲れ気味な表情をした男の名は煌闇影（きら みかげ）。漆黒色の短髪に茶色のジャケットそして、髪と同じ色をしたジーパンと今風の若者を現わした格好だ。何故疲れているかというと…

『グオオオオオオツツツ！！！！』

『ヒへへへへ…』

『お前の望みを言え…言わないと勝手に決めちゃうよ…「楽に死にたい」ってなあああああつっ！！！！』

見ての通り…無数の各ライダー達の世界の怪人が闇影を囲んでいるからだ。彼は襲いかかる怪人を千切っては投げ、千切っては投げ…と素手で戦っている。だが、新たな怪人は次々と現れてくる…。こんな事が続けばバテるのは当然だ。

『もう終わりか？ だったらさっさと死になっ！』

『人間ごときが俺達怪人に敵うと思ってるのかよっ！』

確かにただの人間が「怪人」という異形の存在に立ち向かって戦うのは無謀だ…。

……「ただの人間」ならば……。

「…やっぱり、『これ』を使うしかないな…」

そう言いながら、懐からカメラ状のアイテム「デイライトドライバ―」を取り出しそれを腰に当てた時、ベルトが現われ巻き付いた。更にバックルを開き、一枚のカードを装填した…。

【KAMEN - RIDE…】

「変身!」

【DELIGHT!】

バックルを閉じた瞬間、電子音と共に闇影の身体に複数のライダー  
クレストが重なり、オレンジ色のスーツに包まれ、金に近い黄色の  
ライドプレートが頭部に刺さった、青色の複眼を輝かせた戦士、世  
界の光導者「仮面ライダーディライト」に変身した。

『さて…輝く道へと導きますか!』

…どつやら、これが彼の決め台詞らしい。どこぞの電車ライダーじ  
やあるまいし…

『ふざけんなあああつつつ!』

と、ディライトの決め台詞に怪人がぶちキレている…。当然だ。自分達に劣ると思っっている人間が突然ライダーに変身し挙げ句、変な台詞をほざけば何か言いたくなるのは仕方ない…。

『死ねえええつつつつ！！！』

先程ぶちキレた怪人は勢いそのままディライトを襲いかかるが…

『あらよつと！！』

バックステップで攻撃をよけつつ、ライトブッカーをガンモードに変形し、カードをドライバに装填した。

【ATTACK・RIDE…LASER!】

ライトブッカーを構え、黄色のレーザーを三発放つ「ディライトレーザー」で怪人を狙撃した。

『グアアアアツツ！！』

撃たれた怪人は爆発音と共に消滅した。

『あーびっくりしたー…急に飛び出してくるから…。』

と驚きながら、今度はライトブッカーをソードモードに変形させ…

『セイツ！セイツ！セイツ！』

『ギアアアアツツ！！！』

目にも止まらない速度で、敵を次々と斬り裂いていくデイルイト。

『クソがあ…こうなったら一気に攻め込むぞおおつつつ!!!』

『グオオオオオツツツ!!!』

その一言で怪人数十体がデイルイトに一斉に襲いかかった。…だが…

『一斉攻撃か…ここは援軍を「作る」か!』

デイルイトは一枚の黒いカードを取り出し、ドライバーに装填した。

『FINAL - SHADOW - RIDE : FA・FA・FA・FA  
IZ!』

電子音が鳴りドライバーから光がデイルイトの「影」を射し込む。その瞬間、影がデイルイトの隣に現れ、「仮面ライダーファイズ」の最終形態「ブラスターフォーム」に変化した。

『な、何だコイツ!何故影がライダーになったんだ!』

『いや、そんな事言われても…こういう仕様なんだから仕方ないだろ?』

『FINAL - ATTACK - RIDE : FA・FA・FA・FA  
IZ!』

デイルイトは答えになってない返答をしながら必殺技用のカードを使用し、ガンモードに切り替えたライトブツカー<sup>シャドウ</sup>を構えた。Sフア

イズBFもそれに合わせてファイズブラスターを構え、二人同時に「フォトンバスター」を回る様に放った。

「こ、答えになつてなグアアアアツツツ!!」

襲いかかってきた怪人達は一瞬で消滅した。デイルイトのライダー実体化能力に狼狽した怪人諸とも…。

「まだだ！続けええつつつ!!」

デイルイトの強大な能力に怯まず、怪人達はまた一斉攻撃を仕掛けた。

「あまり倒したくないんだけどな。」

「FINAL - SHADOW - RIDE… K I ・ K I ・ K I ・ K I  
VAI!」

ライダーにしては珍しい発言をしながらデイルイトはまたも黒いカードを使用し影をライダーに実体化させ、蝙蝠をイメージさせるライダー「仮面ライダーキバ」の最終形態「エンペラーフォーム」を実体化した。

「FINAL - ATTACK - RIDE… K I ・ K I ・ K I ・ K I  
VAI!」

デイルイトは素早くソードモードに切り替えたライトブツカーを、SキバEFはザンバットソードを構え、刀身を赤く光らせ剣を振るう「ファイナルザンバット斬」を怪人達に喰らわせた。

『なあ、此処までやって悪いけどもう降伏しないか？それ以上やってもそつちの被害も増える一方だぞ。』

なんと、デイルイトは怪人軍団に降伏を勧めた。普通ライダーは怪人を倒すのが定石なのだが、このライダーだけは違う考えの持ち主らしい…。

『な、舐めてんじやねえぞオオオツツツ！！このクソがあつ！！降伏だど！？んな事すると思つてんのかよ！さつきからふざけた態度を取りやがって…大体手前が何で追われてんのか理解してんのかよ！この…裏切り者』があつっ！！』

『！！！！！』

デイルイトの降伏勧告を全く聞かずに彼に罵詈雑言を放つ怪人。そして、デイルイトは最後の言葉に強く反応した…「裏切り者」という言葉に…。

『ガアアアアツツツ！！！！』

怪人は腕を大きく広げ、他の怪人達を黒いオーラに変換し体内に吸収した。

『オオオオオオオツツツ！！』

みるみる内に怪人の肉体は黒く染まりながら巨大化していった。さらにそれは複雑に変化し、翼を広げ、大きな二本の角を生やした黒い影の悪魔の様な姿になった。

『グオオオオオオツツツ！！』

こうした怪人達を吸収した黒き集合体…その名は「シャドウ・イー  
ヴィル」…。

『グオオオオオオツツツ!!!』

『うわっ!!!』

Sイーヴィルは巨大な爪をデイライトめがけて大きく振りかぶった  
が、デイライトは真横になんとか避けた。

『影の集合体か…こつちも一気に決めますか!』

黄色いカードを取り出し、ドライバーに装填した。

『FINAL - ATTACK - RIDE...DE・DE・DE・DE  
LIGHT!』

『はああああ…!!!』

デイライトは両手を胸の前で覆うように構え、光の球体エネルギー  
をチャージして大きくし、そして…

『はあああああつつつつ!!!』

『グアアアアツツツ!!!』

両腕を強く突きだし、エネルギー波を打ち出した。まともに喰らっ  
たSイーヴィルは悲鳴をあげながら爆発音と共に消滅した…。これ  
がデイライトのFAR「デイメンションプロミネンス」である。

『ふう…やっと終わったか…。』

ドライバーを腰から外し、デイトライトから闇影の姿に戻った。 が…

「はあ…はあ…やっぱあまり無理するもんじゃないよな…。」

闇影は、手で支えながら片足の膝先を地に付いた。最初に生身で怪人を投げ飛ばしたり、変身して必殺技を使い過ぎたのだ。疲労が激しいのも頷ける。

「…少し休んでから 動こう…。もう怪人も現れそうにないし…。」

そう思っていた瞬間…！『ジネエエエツツツ…！！』

死んだと思っていたSイーヴィルの分身なのか？黒い影の怪人が手から黒いエネルギー弾を闇影に向かって放った…！

「うわあああつつつつ…！！！」

闇影はに直接エネルギー弾を受けてしまい大きな爆発に巻き込まれた。

## 謎のオーロラ

背景全体が真っ黒の空間の中で、闇影は大の字で浮いた状態のまま仰向けになっていた。その表情は、まるで魂が抜けた様にやや虚ろ



だった。

…あれ？ここは…何処だ？…そういや俺、敵の攻撃をモロに喰らって…それから…？…ああ、死んだんだな、俺。…て事は、ここは…地獄か…？

どうやら今いる場所を地獄と思い込んでいるようだ…。

…ここまでか…。

…嫌だ…。まだ死ねない…死んでる場合か…。こんな所で終われない…。俺には…やるべき事があるんだ…「あの人」と約束したんだ…初めて信じてくれたあの…人…と…き…さん…。

闇影の意識はそこで落ちる寸前だった…。その時…

「デイルイト、目覚めて下さい…。」

闇影以外誰もいない筈の空間に一人の青年が現れた。

「デイルイト、今貴方は『闇の牢獄』の中にいます。ここに閉じ込められた者はまず意識が薄れていき、感情が一つずつ失っていき…最後には『心』を失ってしまいます。」

ここは地獄ではないと判明したが、状況的には何ら変わらない。だが、この青年が呼び掛けてくれたおかげで意識を取り戻した。…未だまともに喋れないが。

「『本来の貴方』なら自力でこの空間を抜け出す事が可能なのです

が、今の状態ではそれは不可能ですね…。」

青年は悲しげな表情でそう呟いた。彼の言う通り此処から出る事は出来ないのか？そう悲観的になっていた時、彼は口を開いた。

「ですが、今回は僕の力で貴方を脱出させましょう。」

なんと青年は此処を出る術を持っていたのだ。正に「地獄に仏」とはこの事だ。… 実際それに近いのだが。そう思っている内に、青年が両腕を垂直にして瞑想した。すると…

な、何だ？体が…光ってきたぞ…！

闇影の身体に光が包まれている。おそらくこれは空間移動の類だろう…。

「デイトライト、貴方にはいずれ大きな使命が待っているでしょう。」

待ってくれ！使命って何なんだっ！？それに君は何者なんだ！？  
そもそもどうして俺の事を知ってるんだ！？

「…近い内に分かります。これは貴方にしか出来ないのです。『闇』を操る光の戦士』である貴方にしか…。」

待ってくれっ…！おいっ…！まっ…て、くっ…！！意識が…

光に包まれ、闇影の意識は完全に閉じた…。

降りしきる大雨の中、一人の制服を着た少女は傘も差さずに下を向いて歩いていった…。

「……………」

少女の名は白石黒深子（しらいし くみこ）。カチューシャかけた漆黒色のセミロングの髪に整った顔立ちと、世の男がほっとけないくらいの美少女だ。そんな彼女が何故雨の中で悲しそうな表情をしているのか？

「……………どうしたらいいんだろっ…私、人を…クラスメイトを…殺しちゃっ…た…っ…っ…！」

なんと、黒深子は同級生を殺してしまったのだ。その美しい外見からとても考えられない事…だが、本当に「ただ」殺しただけなのだろうか？次の言葉でその疑問は解消される。

「わ…た…し…、ぐすっ…！灰色の化物になって…人を…人を…うっ…っ…！うっ…っ…！」

そう… 黒深子は一度死を経験した者が全身灰色の異形に変貌する「ファイズの世界」の怪人、「オルフェノク」に覚醒してしまったのだ。彼女がずっと悲しげな様子なのは、その後悔の念に苛まれていたからだ…。

「これから…どうすればいいのかしら…。私…。」

異形の存在になり、更に人を殺めてしまったという、どうにもならない現実…。

もし、誰かがこれを知ったら？

こんな自分を受け入れてくれる人間がいるのか？

…いる筈がない。人を殺したただけならまだしも、異形の存在である自分を受け入れる人間等いるわけがない…。

なら、黙っているか？

いや…出来ない。それを出来るほど人間の精神は強くない…。

そんな様々な思考をしながら、家路に向かう黒深子。漸く自宅が見えてきたその時…。

「ん？何だろあれ？」

自宅の前に何かの物体がある…。近づぐことにそれははっきりと見えてきた。黒深子が見た物体の正体は…。

「つて！エエエエツツツ！！！！？？？？」

思わず大声で叫ぶ黒深子。家前にあるそれは「物体」ではなく…

「は…腹…減つ…た…。」

あの謎の空間から脱出した、煌闇影という青年だ。

「だ、大丈夫ですかっ！？」

黒深子は闇影の近くに向けより声を掛けた。闇影は今かなり衰弱し

ている。このままでは死んでしまっただろう。

「お…おお…ついに見つかったぞ…。食べ物が…林檎が…二つも…」

そう言いながら、闇影は手を伸ばした…

…黒深子の胸に…。

「！！！！！！／／／／」

幻覚を見ているのか？今の闇影には黒深子が林檎の木に見えているのだろう。そして、黒深子の胸が林檎に見えたのでそのまま掴んだのだ。だが…

「…き…」

「キヤアアアツツツ！！！！何すんのよッ！この変態！！！！！！／／／／」

「ぐおっ！…！」

幻覚を見てる事など微塵も知らず、黒深子は顔を林檎みたく真っ赤にしながら闇影の顔面にパンチを繰り出した。

「…って！ごめんなさい！大丈夫ですかっ！？」

黒深子は殴った事を謝罪し慌てて完全に闇影の身体を揺さぶりながら呼び掛けるが、完全にノックアウトKOした彼の耳にそれが届く事はなかった…。

これが、「闇を操る光の戦士」ディライトと一人の少女の出会いだった…。

次回、仮面ライダーディライト！

「助けてくれたお礼にこの家の手伝いをさせて下さい！」

「私に構わないで下さい…。」

「悩みがあるなら、俺が相談に乗るぞ！」

「ほっといてって言うてるでしょ！」

悩みに乗りたがる闇影とそれに反発する黒深子。

「世界が…闇に染まっていく…。」

「貴方には9つの影の世界を救う旅に出てもらいます。」

闇に覆われる世界…。謎の青年が告げる闇影の大きな使命…。

「世界が闇に支配されるなら、俺が光へ導いてやる！」

次回、「闇への旅立」

全ての闇を、光へ導け！

## 第1導 プロローグ（後書き）

いかがでしたか？

「何処がスタートだよ」「さっさと旅立たせろや」「  
なんて抗議のお言葉がありましたら、甘んじて受け止める所存でございます…」。

物語の最初は主人公とヒロインの出会いから始まるものだと、私は考えております。それにしても書き過ぎたなあ…（遠い目で）

ヒロイン、黒深子の詳細は次回説明いたします。

以上、虎居合瑠の言い訳に満ちた後書きでした。

## 第2導 闇への旅立（前書き）

今回二度目の更新になります！

闇影と黒深子の出会い、ダークライダーの世界の旅のスタート地点  
到達までを書いたせいで文章が無駄に長いです（<―>）

文章も無茶苦茶なのはお気になさらずに読むだけ読んで下さい  
！（無理言っな）

ではー！ごっぞー！



## 第2導 闇への旅立

「いや、すいません！食料が無くて四日間ずっと水だけで過ごしてたモンでしたから…あ、おかわり下さい！」

ここ、白石家で飯をほおぼる闇影は頭を掻きながら、お椀を差し出した。それにしても、何杯目になるのか…。いくら死にかけたとはいえ凶々しいとは思わないのだろうか…。

「いいえ、いいですよ。遠慮せずにどんどん食べて下さい。」

そう優しく返し、差し出されたお椀を受け取り白飯をよそい闇影に差し出したのは、白石 影魅璃（しらいし えみり）という女性。

彼女は先程闇影に鉄拳を喰らわせた黒深子の母親である。三十代後半の年齢なのだが、容姿がそれを思わせない程とても美しいのだ。

「もう一時はどうなるかと思いました…。本当にありがとうございました。ますー！」

箸を止め、闇影は感謝の言葉と共に深く頭を下げた。

「元気になって何よりです。あら、黒深子…今上がったの？」

開いたドアから、湯気を立たせながら、頭にタオルを巻いて白いTシャツに生地が薄い青いズボンと、湯上がりの格好をした黒深子の姿が見えた。

「…。」

しばらく闇影の姿を見て、すぐに違う方向に向いて、自分の部屋に向かった。

「こら、闇影さんに挨拶しなさい！黒深子！」

「あれ？どうしたんだろう？俺何か悪い事したかな？」

何も言わずにこの場を去った黒深子に首を傾げた闇影。

「ごめんなさい、闇影さん。でもあの子、何時もは人に挨拶はするのにどうしたのかしら？」

影魅璃は闇影に詫びながら、何時もと違う娘の態度に疑問を抱いた。

「（ふむ…何か悩みでもあるかもしれないな…。）」

闇影は顎に親指と人差し指をあてながら、黒深子が悩みがあると推測した。そして…

「（…よし！あの子の悩みを解決しよう！）影魅璃さん！」

「は、はい！何でしょう？」

「助けてくれたお礼がしたいので、この家の手伝いをさせて下さい！お願いします！」

なんと、闇影は命を救われた恩返しのためにこの家の手伝いを影魅璃に申し出した。この言葉に影魅璃は啞然とした…。

世界の光導者、デイライト！9つの影の世界を巡り、その瞳は、何を照らす？黒深子は部屋に閉じこもり、ベッドの上に仰向けになり天井を見つめながら、今日の出来事を思い返していた…。

「キヤアツ！い、痛いッ！やめて！」

「白石…てめえ、ちょっと男子にちやほやされて調子こいてんじゃねえよっ！」

「お前、マジでムカつくんだよっ！」

校舎の屋上で、黒深子は複数の女子生徒に囲まれ一人の女生徒に髪を掴まれながら振り回されている…。所謂いじめを受けているのだ。

理由は容姿端麗で、成績優秀、友達も何人もいて、男子生徒からも人気があつた黒深子が気に食わないからだ。

いじめはどんどんエスカレートし、黒深子の頬を叩き、腹に蹴りを入れた。

「うっつ…！い…痛い…！」

「いい気味。さっさと立てよ！」

腹の強い痛みで悶絶する黒深子に構わず再び彼女の髪を掴むリーダー格の女生徒。そのまま、黒深子を屋上の出入口の壁に強く叩きつけた。

「キヤアアアアツツツ!!」

大きな悲鳴をあげながら、黒深子は下から力が抜けた様にずり落ちて気を失った。

…壁に頭の部分に「赤いもの」を残して…。

「お、おい！今鈍い音が鳴らなかった？しかもなんか壁に血がついてるし！」

「これってヤバくない？」

流石に流血沙汰は不味いと感じ、女生徒達が動揺し始めた…。その中でリーダー格の女生徒は、

「…このままこいつを落とすしちまおう。事故死って事にしちまえばいいんだよ。」

事もあるうちに、黒深子を屋上から突き落として事故死に見せかけようとするでもない提案を出した。

「で…でもそれって犯罪じゃない？」

「元々こいつが悪いんだよ。それにあんた達も同罪じゃない。逃げようなんて考えるなよ。」

その言葉に恐れを感じ、やむなく提案を受け入れる他の生徒は黒深子の身体を持ち上げた。

コノママデイイノ？

…？…誰？

意識を失い、暗闇の中にいる黒深子はその中で謎の声を耳にした。

ワタシハアナタノ影… イイエ、モウ一人ノアナタト言ウベキカシ  
ラ…。

謎の声は黒い人影となって黒深子の前に現れた。そして、自分は「  
もう一人の黒深子」と名乗った…。

な、何言ってるのよ！あなたが私だなんて…！冗談を言わないで  
！そ、そう…！こんなの…夢よ！夢なんだわ！

黒深子は強く否定した。これは夢だ、有り得ない…。そう否定した。

否定スルノハ勝手ダケド、アナタガ今死ンデイルト言ウ事ハ本当  
ヨ。

！…！！

その言葉に黒深子は激しく動揺した。そして、影は続けた。

ダケド、アナタヲ生き返ラセル事ハ出来ルワ。

え！それ、本当！？

なんと、影は黒深子を生き返らせる事が出来ると言っただ。だが…

エエ、本当ヨ。但シ、タダ生き返ル訳ジヤナイ…。

何？

アナタハ普通ノ人間トハ違ウ存在ニ生マレ変ワルノ。最モ、何ニ生マレ変ワルカハ分カラナイケドネ。

な！何よそれ！それって化物になるって事！？嫌よ！そんなの！

黒深子は人間とは違う異形の存在に変わってしまう事に強く拒絶した。当然だ。化物に生まれ変わってしまうなんて事実を受け入れられない。

別ニイイノヨ。コレハアナタガ決メル事ナンダカラ。私ハアクマデ生キルカ死ヌカノ選択権ヲアナタニ与エタダケ…。

！…それは…！…それは…。

このまま黙って死ぬなんて御免だ。かといって化物に生まれ変わってしまうのも嫌だ…。

2つの選択肢の中、黒深子が選んだ答えは…

「……っ！」

「な、何こいつ！？まだ生きてる！」

暫く意識を閉ざしていた黒深子が急に目を見開いたので、身体を背負おうとした女生徒達は驚いた。そして、黒深子は立ち上がり女生徒達を睨みつけた。

無表情のまま…。

「な、何よ！やる気っ！？そのまま死んどけばよかったのに…。」

「そ、そうよ！あんたが悪いのよ！」

「さっさと死ね！」

等と黒深子に罵詈雑言を吐きまくる女生徒達。彼女等は「自分達は悪くない。」「こいつが悪いんだ」と自分達の行動を棚にあげて正当化しているのだ。罪の意識等欠片も感じていないのがよく分かる…。だが、暫くすると黒深子に異変が…！

「……………！」

黒深子の顔に何かの形をした薄黒い模様が浮かび、みるみる内に彼女の身体は灰色の異形へと変化していった…。

「キヤアアアアツツツツ！！！！な、な、何よアレ！？」

白石黒深子「だった」存在は、頭が「龍騎の世界」の白鳥をイメージしたライダー「仮面ライダーファミ」、身体は「電王の世界」の白鳥をイメージしたイマジン「ジーク」、ボディラインは「ファイズの世界」の「クレインオルフェノク」より細いという特徴をした「スワンオルフェノク」に変わり果てた…。

『ハアアアアツツツ!!』

スワン〇は、悲鳴をあげる生徒達に急速に近づいていき、手元から実体化した細剣で心臓を突き刺した。

「ギャアアアアツツツ!!」

「い、嫌アアアアツツツ!!」

「た、助けてえ…!グアツ!!」

彼女達の命乞いを耳に貸さず、殺戮を繰り返すスワン〇…。その瞳には一つの感情だけしか感じ取れなかった…。

「憎しみ」の感情しか…。

雨が降ってきた…。生徒「だった」大量の灰も溶けていき、降ってくる雨の速度はどんどん増していった…。

『う…うふふふふふ…あは…あははははは…あーっはははははははは…!!』

灰色の身体の影から聞こえる彼女の狂った様な笑い声と共に…。

『あは…あははは…はは……ううっっ…!ううううう…!!』

同時にそれは彼女から狂気を洗い流し、後悔と悲しみの感情を露にした…。



（私…何である時「生きる」事を選んでしまったのかしら…。）黒深子は「あの空間」での自分の選択を後悔していた…。

（どうして、わざわざ化物に生き返ってまで人を殺したの…？あんな事をしたって何も解決しなかったのに…！こんな事になるくらいなら…いっそ…！）

そう考えていた時…！「黒深子ちゃん？いるかな？俺だよ！」

「……！」

ドアのノックと共に闇影の自分を呼ぶ声が聞こえた。

「…何の御用ですか？」

「ちょっと話がしたくてね…。開けてくれるかな？」

闇影は黒深子と話をする為に部屋に入れるよう尋ねた。

（何？話したい？今日会ったばかりの人間に対して馴れ馴れしくない？今、話す事なんて…事…なんて…。）

黒深子は少し疎ましく感じたが、こうしていったって何も変わらない…。まあ、少し話す程度なら…と考え、

「…いいですよ。」

闇影の部屋への入室を許可した。

「失礼します。いや、綺麗な部屋だな〜！」

闇影は入るや否や部屋の事を誉め出した。

「そう言えばまだ自己紹介してなかったね。俺は煌闇影。職業は…  
教師…かな？助けてくれて本当にありがとう！」

闇影は自己紹介をし始め、同時に救われた事を感謝した。職業が曖昧なのが気になるが…。

「私は、白石黒深子…。高校二年生です…。」

「そっか、高二か…。もし解らない事があったら何でも聞いてくれ！家庭教師になってもいい！勿論無料で。」

「は、はあ…それはどうも…って、え？」

黒深子は闇影の言葉に疑問を感じた。今はまるで暫くこの家にいる様な口振りではないか。

「ああ、実は俺、暫くこの家で家事を手伝い事になったんだ。君のお母さんには許可も貰ったよ。」

等と彼女の疑問に答える様に話す闇影…。

「ええええええええつつつ…！！！！！」

黒深子は部屋一帯をつんざくように驚き叫んだ。確かにいくら命を

救われたからって見ず知らずの男が女手しかないこの家で家庭教師だの家事だの、しかも無償で行うなんて…こんな馬鹿げた話は後にも先にもこれだけしかない。

「今言った事以外で困ってたり、悩みがあるなら俺に話してくれ！何時でも相談に乗る！」出てって下さい。「るぞって…え？」

闇影は熱く語るも、黒深子の冷たい一言にポカンとした。

「ここから出ていって下さい！」

黒深子は闇影の背中を強く押し、部屋から追い出しドアを閉めた。

「ちよつ…ちよつと待ってくれ！お母さんは君が何時もと様子が変だと心配していたぞ！今日何かあったのか？話してくれないか？」

閉まったドアを叩きながら尚も悩みを聞き出す闇影。

「…私に構わないで下さい…」

「黒深子ちゃん…」

そう言った後、黒深子は眠りについた…。

「（…そうよ。私に構わないで…いや、構われちゃいけないの…。）」

黒深子は異形になった自分は誰とも関わってはいけないと思い、闇影を拒否したのだ。

「ふああああ…お母さん…おはよ…って、えっ!？」

「ああ!おはよう!黒深子ちゃん。」

目覚めてダイニングルームに入った黒深子が見たものは、三角巾にエプロンをし、朝食の準備をしている闇影の姿だった。

「な!何で貴方がいるのよ!?!帰ったんじゃないの!?!」

「何でって…言っただろ?」この家の手伝いをする『って。』

黒深子の疑問に闇影はニツと笑い、そう言った。

「ホントに家事を手伝うなんて…」

黒深子は顔に手を当てて、闇影の能天気ぶりに呆れていた。

「こら、黒深子。突っ立ってないで早く食べなさい。学校に遅れるわよ?」

「あ、ごめん…って違うわよ!何でこの人を家においでるのよ!?!」

「だからって…ああ、もう…。」

母・影魅璃のこれまた能天気な発言に黒深子は両手に頭を抱えた。

「それにしても、美味しそうですね。私より上手いかも。」

「いえいえ…。それより早く召し上がって下さい。冷めてしまいませんよ?」

「そうですね。黒深子、食べましょ。」

「…はあ、わかったわよ…。」

「では、いただきます!」

黒深子は観念して椅子に座った…。

「いってきます…。」

「はい、いってらっしゃい。気をつけてね。」

黒深子は家を出て、学校に行った。

「さて!掃除しますか!」

闇影が掃除をしようとした時、

「闇影さん。」

「はい。何でしょう?」

「あの子、お弁当を忘れて行ってしまったみたいで…申し訳ないんですが、黒深子に渡してもらえませんか?」

影魅璃は黒深子に弁当を渡すよう、闇影に頼んだ。

「分かりました！俺が黒深子ちゃんに渡してきます！」

闇影は快く承諾し、弁当を片手に家を出た。

## 通学路

「おい！黒深子ちゃん！！」

「…何ですか？あと余り大声で話かけないでください。」

「あゝごめん！君、弁当を忘れてたぞ！ほれ！」

闇影は黒深子に弁当を渡した。

「…ありがとうございます。では。」

「ああ！ちょっと待ってくれ！」

再び学校へ向かおうとする黒深子を闇影は呼び止めた。

「まだ何か用ですか？私、急いでるんで。」

自分を呼び止めた闇影に少し苛つきながらも、話を聞く黒深子。

「余計なお世話かもしれないけど、何か悩んでないか？見かけた時、君ずつと元気がなかったから…。」

「…そんなの…貴方には関係ありません。」

闇影はやはり黒深子に何か悩みがあるのかを問いただした。しかし、彼女は相変わらず冷たく返した。

「関係ない事ないだろう？俺は君に命を救われた。だから今度は俺が君の助けになりたいんだ！悩みがあるなら…俺が、「ほつ」といつて言ってるでしょ！！！」

「！！！！！」

黒深子はしつこく話かける闇影に大声で怒鳴った。

「さつきから聞いていれば、『私に命を救われたから』？『私に悩みがある』？全部貴方が勝手に思い込んでるだけじゃない！昨日今日会ったばかりの貴方に私の何が分かるのよ！」

続けて黒深子は闇影を捲し立てた。

「…今日中にあの家から出ていって。二度と私の前に現れないで！！！」

そして闇影に家を出るように告げ、黒深子は踵を返して再び学校へ向かった。

## 通学路

「全く…！どこまでしつこいのよ…。あの人は！」

黒深子は闇影のしつこい心配に未だ怒りを感じながら歩いた。が…

「……少し言い過ぎたかな…。私、一度頭にカツと来るとつい余計な事を言っちゃうからなあ…。」

先程の闇影に対する怒号を悔やみ出した…それと同時に彼女の足は止まった。

「…お節介はともかく、さっきの事は後で謝ろう…。」

黒深子は闇影へ先程の発言を謝罪する事を決めた。…やはり言い過ぎた、と。

そっ心に決めたその時…！

「な！何！？急に辺りが暗くなった…！」

未だ夜でもないのに突然周囲が暗くなった。黒深子の様に今のこの現状に驚くのは無理もない。

「…学校に行ってみよう！」

黒深子は急いで学校に向かって走り出した。…その時、

「……。」



「な、何か用ですか？ すいません！ 今急いでいますの…で？」

突如、スーツを着たサラリーマン風の男が目の前に立っていたので、急いでいる事を告げたのだが、全て言い切る前に男に「ある異変」が起きた…！ それは…「ウオオオオツツツツ！！」

男は、全身から黒いオーラを発しながら、顔からステンドグラス状の模様を浮かばせ、同じくステンドグラスの皮膚をした異形に、「キバの世界」の怪人、ファンガイアに変貌したのだ。

「な、何でっ！？ 何で人が化物に！？」

『へゃアアアアツツツツ！！！！！！』

「キヤアツツツツ！！！！！！」

ファンガイアとなった男は、人間からライフエナジーを吸い取る二つの牙「吸命牙」を黒深子の頭上から急降下させた。だが、黒深子は何とかそれを避けた。

「い、嫌アアアアツツツツ！！！！！！」

黒深子はその場を逃げ出した。だが、ファンガイアは逃がすまいと追って来る。

「と、とにかく早く家に戻らないと！！」

尚もしつこく追ってくるファンガイアから何とか撒いた黒深子とはとりにあえず、自宅に戻る事にした。その途中で彼女は信じられない光景を目にした。

「い、これは!?!」

『グアアアアツツツツ!?!?!?!』

『シャアアアツツツツ!?!?!?!』

それは信じがたい光景だった…。人々が先程の男と同様に謎の黒いオーラを全身から発しながら悶絶していたのだ。そして、中には異形の怪物に変貌する者がいた。

「…どうして…どうして、こんな事に!?!」

黒深子はただただ困惑していた。突然辺りが暗くなったり、人から黒いオーラが出て、怪物に変貌したりと、あまりに常識から逸脱した現実のうちひしがれている…。そして、更なる現実が彼女を襲う。

「あ…貴女は!?!」

「……………」

何と黒深子の前に、昨日「異形になった自分」が殺した筈のいじめグループのリーダーが現れたのだ。

「白石い…よくも私を殺してくれたわねえ…。…やっぱりアンタムカつくわ…!」

黒深子に呪詛を吐きながら、少女は次第に顔から紋章の様な物が浮かばせて豹をモチーフとしたジャガーオルフェノクに変貌した…。

『今度はアンタを殺してやるよ!』

「ひ…。」

黒深子はオルフェノクに変貌した少女に怯えの顔を見せた。

『何ビビってんの?アンタだって同じ姿になってんじゃん。何だつたら今度は殺し合う?どっちかが「もう一回死ぬ」までさあっ!』

「い、嫌…。来ないで…。」

そう言いながら、黒深子は後ずさっていった。その度にジャガー〇は近づいてくる…。

『どうしたの?かかって来なよ。あん時見たく、あたしを殺してみなよ!白石イイイッツツツ!…!』

恫喝の如く挑発しながら、ジャガー〇は黒深子に自身の爪を降り下ろした…。

「い、嫌アアアアツツツ!…!」

『ギアアアアツツツ!…!』

黒深子が悲鳴をあげたと同時に別の悲鳴が聞こえた。その理由は…。

『……………はっ!』

気が付いたら黒深子はスワンオルフェノクに変化しながら、細剣でジャガー〇を突き刺していた…。

『グッ…また…アンタに…殺される…なんて…』

再びスワン〇に殺された事を悔やみながらジャガー〇の身体は全身を青白く燃えて灰と化した…。

「わ…私…また…人を…！」

スワン〇は黒深子の姿に戻りつつ、また人を殺してしまった事を悔いている…。その時…。

「く…黒深子…ちゃん…。」

「…！！み、闇影…さん…！」

最悪な事に今までの一部始終を闇影に目撃されてしまった…。言い逃れなど出来ない事実を…。

「…そう言う事だったのか…。」

「ち、違うわ！わ…私は…私は…！」

殺したいから殺したんじゃない。勢いあまって殺してしまったと弁明するつもりだった黒深子。しかし、どんな言葉を並べたってやった事の罪が消える筈がない…。そう考えている時…！

『グアアアアツツツ…！！！！』

『へヤアアアツツツ…！！！！』

『ゲギギギギギギギ…』

無数の怪人達が闇影と黒深子の周囲を囲む様に現れた…。

「くそっ！また囲まれたかつ！こつなつたら…！」

闇影はデイライトドライバーを取り出し腰に巻き、カードを装填した。

「変身！」

【KAMEN - RIDE… DELIGHT!】

闇影はオレンジを主体としたライダー、デイライトに変身した。

「…！？み、闇影さんが…変身した…！？」

黒深子はデイライト（闇影）の変身を初めて目の当たりにし、驚いた。

『黒深子ちゃん。ちょっと目を瞑ってて！』

【ATTACK - RIDE… FLASH!】

デイライトは自身が白く輝いているイラストのカード、「フラッシュ」を使い「デイライトフラッシュ」を発動させ、全身から強烈な白い光を発し、怪人達の目を眩ませた。

『グアッ…！ま、眩しいっ…！』

『この隙に逃げるよ!』

「は…はい…。」

デイルイトは黒深子の手を取り、高速移動の様に怪人の群れから逃げ出した。

『ふう…。此処まで来ればとりあえず大丈夫だろう。』

デイルイトと黒深子は人気の少ない公園まで移動した。

「あ…あの…闇影さん。その姿は何なんですか？貴方は何者なの？それに何故さつき私を助けたんですか？」

黒深子は矢継ぎ早に聞いた。デイルイトもとい闇影は何者なのか？何故異形である自分を助けたのか？聞きたい事は沢山あった。

『それは…』

『見つけたぞ…。貴様等…。』

黒深子の疑問に答える前に先程の怪人達が再び現れた。

『やっぱり目眩まし程度じゃ駄目か…。こうなったら援軍を作るか!』

【FINAL・SHADOW・RIDE…KA・KA・KA・KA  
BUTTO!】

デイルイトの影が本体の横に現れ、最速の守護神「仮面ライダーカブト」の最終形態「ハイパーフォーム」にシャドウライドした。

『一瞬でカタを付けるぞ!!!』

【ATTACK・RIDE…HYPER・CLOCK・UP!】  
「ハイパークロックアップ」のカードを使用した瞬間、デイルイトとスカブトHFは姿を消した…様に見えるが、実際はハイパークロックアップ空間に突入しただけだ。このクロックアップは通常のそれ以上の速度を持ち、過去と未来を行き来する程の力を持っている。そこでは通常空間にいる者は全て止まって見えると言っ…。

『ハアツ！ハアツ！セイヤツ！』

デイルイトとスカブトHFは「止まっている」怪人達を次々と切り裂いていった。

『脱出!』

『ギヤアアアツツツ!!!』

彼等が脱出した時には、怪人達は何が起きたのか理解する前に爆死した。

『ふう…これで敵は片付いて…「キヤアツツ!」黒深子ちゃん!』

『ギへへ…其処までだ。デイルイト…。この女の命がどうなってもいいなら俺ごと撃つてみるよ!』

「あ…ああ…。」

『貴様ツ!!!』

一体だけ残った怪人は、黒深子の首筋に爪を当てて人質にした。

『どうした？この女は俺達と同じ「化物」何だぞ？何も気兼ねする必要はない筈だぜ？』

『くっ…!』

デイライトが如何に強いとは言え人質を、黒深子を見殺しには出来ない…。手に持っているライトブッカーを手放そうとしたが…

「…いいよ。撃つても。」

『…!!黒深子ちゃん!?!』

なんと、黒深子は自分に構わず怪人ごと撃てとデイライトに言った。

「もういいの…。私、どの道今日死ぬつもりだったの。」

そして、最初から死ぬつもりでいたのだった…。

「だってそうじゃない？そもそも私は一度死んでるんだし、人だつて何人も殺しちゃってるもの。その上こいつ等と同じ化物に変わり果てて…本当に救い様の無い存在なの…。だから、さっさと殺し…」

『…れ…な…。』!?!?」

黒深子の投げ遣いな言葉をデイライトが遮った。



『甘ったれるなっ！！救い様の無い命なんてこの世には無い！！』

デイライトは黒深子の発言に激怒していたのだ。優しそうな彼からは想像出来ない程の怒りだった。

『君…自分が死んで残った人間がどういう気持ちになるか想像出来るか？死んだ者は一瞬だが、残った者はずっと悲しい思いをするんだぞ！』

「！！！！！」

『君がやった事は確かに許されない事だ。でも、そこで死んでしまふのはその事実から逃げる事になるんだぞ！それは人を殺める以上に許されない事だ！』

デイライトは黒深子に続けて語り出した。

『一度死んでまた生き返ったって事は、君は未だこの世界に必要な存在だからなんだ。君にしか出来ない何かがある！それを探して生きるのも悪くないぞ。俺も手伝ってやる。』

デイライトは、最初の怒号とは違った優しい口調で黒深子を諭した。すると、「う…うう…。」

気付けば彼女の目から涙がこぼれ出していた。

『何ゴチャゴチャ言ってるんだ！この女がどうなってもいいの…』  
撃つさ。』って！オイッ！』

デイライトはライトブッカーガンモードを構えて狙撃の準備をした。

『しよ、正気か？テメエツ！？この女ごと撃つつもりかッ？』

【ATTACK-RIDE…LASER-BLADE!】

カードを使用した瞬間、銃口から細い光の刃が伸びて、真っ直ぐ突き抜けた。

怪人の脳天めがけて…。

『そ…そんなバカなアアアツツツ!!!!!!』

頭だけ爆発し、残った体は力が抜けて黒深子から離れた。これがデイルイトの技の一つ「デイルイトレーザーブレード」である。

「大丈夫か？黒深子ちゃん。」

「え…ええ…だい…じょう…ぶ…」

変身を解いたデイルイトは黒深子の涙を見て、こつ言った…。

「辛かったんだな…。いじめにあつて、一度死んで…オルフェノクになつてしまつて…本当に辛かったんだな…。苦しいなら、思い切り泣け。顔は隠してやる。」

その言葉を聞いた瞬間、黒深子の悲しみの感情は一気に爆発し、闇影の胸に抱きついた。

「う…う…うあああああああ…!!!」

自分はなんて愚かなんだ。ずっと心配してくれていたのに、それを拒んでいたなんて…。そう思いながら黒深子は闇影の胸の中で子供のように泣きじゃくった…。

「…スッキリした？」

「…うん。／＼／」

「そうか。」

闇影は黒深子の頭をゆっくりとくよくに撫でながら落ち着かせた。もう安心だ…。そう思っていた時…。

「…デイルイト。」

「…いき、君は！あの時の…！」

「お久しぶりです。デイルイト。」

謎の灰色のオーロラと共に謎の青年は闇影達の前に現れた。

「そう言えば、お礼を言うのを忘れてたよ。ありがとう！」

「助けられたって…闇影さん。どういう事なんですか？話して下さい。」

「ああ、それは…」

闇影は青年にあの時の危機を救ってくれた事に感謝し、黒深子の質問に答えようとしたが、青年は話を続けた。

「デイトライト。今世界がどうなっているかお分かりですか？」

「ああ、人々の身体から黒いオーラが出て怪人になってしまう現象だろ？」

「その通りです。今からその原因を説明いたします。」

青年は、一息ついて口を開き出した。「まず『負』の感情についてです。『負』とは人の心の中にある怒り、憎しみ、妬み、裏切りそして殺意…。それらの黒い感情を『負』の感情と言います。」

「…そして今、この感情が強まった者は『闇の牢獄』に閉じ込められてしまう様になってしまいます。」

「確か、意識が薄れて感情がなくなり、最後には『心』をなくす…。だったよな？もう少し詳しく話してくれないか？」

闇影は以前説明された通りの言葉を青年に返した。

「ここで言う『心』をなくすとは、厳密には人間としての『心』を失ってしまう事を示します。」

「！……！！」

黒深子はその言葉に心当たりを感じていた。

「そう言えば、私もあの中にいた時、何か人影みたいなモノに話しかけられました！『自分はもう一人の自分だ』って！」

「それは恐らく、貴女の負の感情の集合体です。そして、生きるか死ぬかの選択を出されたと思いますが、その辺は？」

「…はい。間違いありません。そして怪人に生き返るか死ぬかの選択で、私は…。」

「そうだったのか…。だが、今の話と何の関係があるんだ？」

「…これをご覧下さい。」

青年が腕をあげると、空に真っ黒になりかけている9つの地球の絵が浮かび出した…。

「な、何だ。地球が、世界が闇に染まっている…。」

「この9つの影の世界は『闇の牢獄』に支配されそうになっているんです。このままでは全ての人々が怪人と化してしまう…。」

ここまで言えば、彼が何を言うのか想像はつくだろう…

「デイトライト。貴方には9つの影の世界を救う旅に出てもらいます。」

「俺が!？」

「貴方にしか出来ないんです。『闇を操る光の戦士』である貴方にしか。」

闇影は少し悩んだ。このままでは世界が怪人達の世界に変わる…。黒深子の様な人間が増える可能性もある。…この事態を捨て置けな

い。彼の答えは…

「世界が闇に支配されるなら…俺が光へ導いてやる！」

闇影は世界を救う旅に出る事を決意した。

「ありがとうございます。その間、僕や僕の仲間達が進行を食い止めます。貴方達の旅に幸運があらんことを…。」

その言葉を最後に闇影達は光に包まれた。だが、

「待ってくれ！最後に一つ聞かせてくれ！君は何者なんだ!?!」

青年は自分の素性を問われ、名前だけ名乗った…その名は…、…  
野上…良太郎…。」

闇影と黒深子は何時の間にか白石家の前に立っていた。

「あれ？ここ家じゃない？さっきまで公園にいたのに。」

「とりあえず中に入ろう。」

「そうですね。」

闇影と黒深子はとりあえず家の中に入った。

「「ただいま!」」

「お帰りなさい。ってあら、二人で到着？いつの間に仲良くなった

のかしら？」

「あ…い、いや…これは…その…／／／」

影魅璃は二人の仲の進展をからかい、二人は顔を赤くした。

「も、もう！何言い出すのよ！ねえ？…『先生』。」

「え…今俺の事、『先生』って言ったのか！？」

黒深子は闇影を「さん」付けから「先生」と呼び方を変えた。

「私の家庭教師なんだから『先生』でいいでしょ？後、私の事は…呼び…捨てていいから…。これから一緒に旅していくんだし。／／／って！聞いている？先生。」

「…ああ、すまん！先生って呼ばれて嬉しいんだ…って、一緒について…君もついていくのか！？危険だぞ！」

闇影は「先生」と呼ばれた事に嬉し泣きをしていると、黒深子の旅の同行の意思に驚いた。

「先生お人好しだから、一人で行く方が危険でしょ！それにこれは私の旅でもあるの…。」

「君の旅？」

闇影の言葉に頷き、彼女は言った…。

「そう。私にしか出来ない事を探す旅なの…。」

黒深子の決意は固かった。ここまで腹を決めているなら追い返すのは野暮な話だ。

「わかった。一緒に行こう！そして見つけよう！君の…黒深子の夢を！」

「先生…／＼／」

こうして二人の9つの影の世界を巡る旅は始まった…。

「ねえ、黒深子。そう言えば、昔貴女が使ってた絵のキャンバスが見つかったんだけど…」

影魅璃は昔黒深子が使っていたという大きな白いキャンバスを持ち出した。

「何で今頃そんな物が…って！え！何！？これ…。」

黒深子はキャンバスに絵が勝手に浮かびあがり驚いた。

その絵は二人の西洋の兜風のバイザーを着けた赤い戦士と黒い戦士が背中合わせになっており、背景は無数の鏡に囲まれるという奇妙な絵だった…。

その絵を見て闇影はこう呟いた…。

「…リュウガの…世界…！」 「次回！仮面ライダーディライト！」



「ここは勝ち残った者の望みを叶えるライダーの世界だ。」

「人を犠牲にしてまで願いを叶えるなんて…！」

人の命を踏みじじる戦いに憤りを感じる闇影…そして、

「俺、あの現実世界で生きてみたいんだ。」

純粹に生きる事を目指すリュウガ…。

「おい！何するんだ！」

「ついに現れたか…！デイルイト…世界の灰塵者！」

「お前の存在は世界を焼き付くす…。」

デイルイトを灰塵者と呼ぶ謎のフードの女…。

激突するデイルイトとリュウガ…。

願いを叶えるのは誰だ！？

次回、「リュウガの夢」

全ての闇を、光へ導け！

## 第2導 闇への旅立（後書き）

### ヒロイン紹介

白石 黒深子（しらいし くみこ）/スワンオルフェノク

本作品のヒロイン。17歳。黒髪のセミロングにカチューシャを着けた美少女。言いたい事ははっきり言う活発な性格であり、怒ったり照れると得意の正拳突きを相手に喰らわせる。彼女を妬んだいじめグループにより一度命を落とすが、『闇の牢獄』の影響によりスワンオルフェノクに異質覚醒した。当初は闇影を疎ましく思い、前述の事情により死を望んでいたが、彼の励ましにより考えを改め、闇影の事を「さん」付けから「先生」と呼び慕うようになった。（闇影が自分の家庭教師をやると言い出した事から）

### スワンオルフェノク

特徴は頭部が「龍騎の世界」のファム、身体が「電王の世界」のジークをイメージした物で、ボディラインは「ファイズの世界」のクレインオルフェノクより細い。飛翔可能で、高速移動にて相手を翻弄するヒット&アウェイを戦術とする。武器は柄が翼の細剣。

### 白石 影魅璃（しらいし えみり）

黒深子の母親。年齢は30代後半で、茶色の長い巻き髪にポリウラムのある胸が特徴だが、20代後半にしか見えない程美しい容姿をしている。

性格はやや天然ボケで、滅多な事ではあまり動じない度量の持ち主。彼女の夫、つまり黒深子の父親は数年前に姿をくらましている。

如何でしたか？黒深子は555本編の長田結花をイメージしたもの

です。

彼女もいじめを受けていましたから…（いじめは犯罪です）

そして謎の青年を良太郎にしたのは、単に青年版を書きたくなくなったからです。（オイ）

先々週まで人気野球ドラマの再放送をやってたので…（関係ねえだろ）

次回からダークライダーの世界に突入いたします！

以上、虎居合瑠でした！

### 第3導 リュウガの夢（前書き）

皆様！大変お待たせ致しました！（待ってねえと思いますが）

ついにダークライダーの世界の旅が始まりました！「リュウガの世界」についてはうる覚えの記憶とWikipediaの情報だけで書いてしまいました！申し訳ありません！m（＿）＿（m

それでは！言い訳がましい前書きはここまでにしてリュウガ編スタートです！

合言葉は、りゅりゅりゅりゅうが（ウザッ！）です！

では、ごんごん！

### 第3導 リュウガの夢

「こ、これって、私が中学の美術部の時に使ってた…」

「今日、押入れを整理してたら見つかったの。まだ綺麗だったから出してみたんだけど…。」

このキャンバスは黒深子が中学生の時に使用していた物らしい。

「この絵は何なんだろう…?」

黒深子はキャンバスに描かれている二体の戦士の絵が何を意味しているのか考えている…。

「さっきも言ったぞ。ここは『リュウガの世界』だって。」

「そうじゃなくて、これがどういう意味…って！先生！何？その格好!？」

黒深子が闇影の方を振り向いてみると、彼の格好に驚いた。

「どうやらそのキャンバスに描かれている絵がどのライダーの世界なのかを教えてくれるようだな。」

「ああ、成程…じゃないわよ！何で 子の 将みたいな服着てるのよ!？」

闇影は構わずキャンバスの絵について説明するが、黒深子は闇影の 子の 将の料理人の様な服装について全力で突っ込んだ。

「分からない。多分この世界での俺の役割なのかもしれないな。」

「子の 将の料理人が？何故に？」

黒深子は闇影の返答に疑問を抱くが…

「お〜い！注文をしたいんだが〜！」

「すみませ〜ん！ラーメンが食べたいんですが〜！」

そうこうしている内にどういう訳か、客が次々と来客してきた。

「え？え？え？ちよ、ちよと待って下さい！ウチはラーメン屋じゃありませんよ！」

黒深子は突然入ってきた客達にここはラーメン屋じゃないと訂正するが…

「何すつとぼけてんだよ！看板が出てるじゃねえかよ！」「光導軒」  
つて看板がよ」

「えっ？何？どついつ事？」

客の返答に「？」で頭の中がいつぱいになっている黒深子は家の玄関を出てみると…

「な！ちよ、え、えええええつつっ！……い、家が変わってるうううつつっ！……！」

確かに『光導軒』という大きな看板がデカデカと出ていた。それと同時に白石家も変化していた。

「分かったか？さつさと注文を聞いてくれ！腹減ったぜ！」

「お客様！申し訳ありません！此方の席へどうぞ！黒深子！お客さんの注文を聞いてきてくれ！俺は厨房で調理するから！」

外に出てきた闇影は客を席へ誘導し、黒深子に的確な指示を出して中に戻った。

「ようし！調理開始！」

世界の光導者、デイトライト！9つの影の世界を巡り、その瞳は、何を照らす？「はあ…つ、疲れた…」。

「お疲れさん！」

昼時なのか客が多かったおかげで店はてんでこ舞いだった。そのせいか黒深子は相当疲れた表情をしている。

「それにしても先生、凄い手際よく調理していたわね。プロ顔負けかも。」

「ホントね。もう、惚れ惚れするくらい…」。

「い、いやあ…／＼／」

黒深子と影魅璃の称賛に指で頬をなぞり照れる闇影。その時…

「な、何だ！この嫌な音は！？」

「ううう…鳥肌が立つ…」

突然聞こえてきたガラスを引つ掻いた様な音に不快感を持つ闇影と、それを過剰に感じる黒深子。

この音の正体は何なのか…そう考えていた時…

「現れたか！ミラーモンスター！」

「ミラーモンスター？」

声を上げたのは、一人の女性の客だった。白い帽子を被った茶髪のポニーテールに、きりっとした目と強気な性格を強調した女性である。この耳障りな音の正体を知っているようだ。

「あ、あの…」

「今度こそ手掛かりを掴んでやる！」

黒深子の言葉に耳を貸さずに女は懐から白く四角い物体を取り出し、壁に掛かっている鏡にそれを写す様に突き出した。その瞬間、鏡から黒いベルト「Vバックル」が実体化し彼女の腰に装着された。そして…

「変身！」

そう叫びながら、四角い物体…カードデッキをベルトに装着した時、



彼女の身体に何かの影が纏われ、白鳥をイメージさせる戦士「仮面ライダーファム」に変身した。そして、そのまま鏡の中に飛び込んだ…。

「…どうやら『ミラーワールド』の中に入ったようだ。さっきの人なら何か知ってるかも…変身！」

【KAMEN - RIDE… DELIGHT!】

『んじゃ…入って来る！ほい！』

闇影もディライトに変身し、鏡の中に侵入した。

「気をつけてね…先生。」

ミラーワールド

『ギギギギギギギギ…』

『く…なんて数だ…！キリが無い…。』

ファムはミラーモンスター・ギガゼールの大群に苦戦していた。

『グギヤアアアアアツツツ！…！！』

『…！！』

万事休す…そう覚悟した時…

【ATTACK - RIDE… LASER!】

『グギヤアアアアツツツ!!!』

デイルイトの「デイルイトレーザー」がファムに襲い掛かったギガゼールに命中し、爆発した。

『だ、誰なんだ？お前は!?!』

『仮面ライダーデイルイト、参上!…なんてね!はっ!ていつ!そりゃっ!』

『グアアアアアツツツ!!!』

ファムの質問にやや軽い口調で返したデイルイトはライトブッカーで次々とギガゼールを切り裂いていった。

『数が減ってきたから、こいつでとどめだ!』

【FINAL - ATTACK - RIDE… DE・DE・DE・DE  
LIGHT!】

『はあああああつつつつ…はあっ!…!』

『グギヤアアアアツツツ!!!』

デイルイトは自身のFAR「デイメンションプロミネンス」で、残り少ないギガゼールの群れを消滅させた。

『ふう…こんなところかな？さて、貴女に聞きたい事があるんですが…』

『デイルイト…？そんなライダー、今回のバトルにいたのか？』

『今回のバトル？何の事ですか？』

ファムの「今回のバトル」という単語に首を傾げるデイルイト。

『…周りを見れば解る…』

『うん？周り？…って！何だこれは！？』

ファムの言葉にデイルイトは馬鹿正直に周りを見渡す。その光景とは…

【SHOOT - VENT】

【STRIKE - VENT】

『ウオオオオツツツツ！！！！』

デイルイトの視線は銃撃を仕掛ける緑の牛をモチーフとしたライダー「仮面ライダーゾルダ」と、それをかわしながら巨大な爪でゾルダに向かう白虎をモチーフとしたライダー「仮面ライダータイガ」達に向いていた。

『俺の願いの為に倒されてくれな?』

【FINAL - VENT】

ゾルダはそろそろ決着を付ける為に必殺技用のカード「ファイナルベント」を使い、契約モンスター「マグナギガ」を召喚しタイガを倒そうとするのだが…

【FREEZE - VENT】

『何!?凍つただと!?!』

マグナギガは、タイガ特有のライダー以外の物を凍らせる特殊カード「フリーズベント」で凍ってしまったのだ。

『そっちこそ僕の素晴らしい人生の足掛かりになってもらっよ。』

【FINAL - VENT】

タイガはすかさず自分のファイナルベントを発動させ、契約モンスター「デストワイルダー」を召喚した。そして、デストワイルダーはゾルダの身体に爪を突き刺し倒したら、タイガの下まで引き摺り、

『ぐ、ぐああああ!?!!』

タイガの装備する巨大な爪「デストクロー」でゾルダを突き上げ結晶爆発させた。

『ギヤアアアアツツツ!?!?!!』

これが、タイガのファイナルベント「クリスタルブレイク」の威力だ…。

『…な…何でだ…。何で人と人がこんな戦いを!?!』

デイライトは先程の戦いに強い憤りを感じていた。人と人が殺し合う戦いに…。

『これが三年ごとに行われる、ライダー同士が最後の一人になるまで戦い合うバトル「ライダーロワイヤル」だ。』

『ライダー…ロワイヤル…。』

『そして、勝ち残った者にはどんな願いも叶える「ウィツシユスフイア」が手に入る。だから皆あんなに躍起になってるのさ。』

『そんな…人の命を踏みにじってまで願いを叶えるなんて…』

『この世界では勝ち残ったライダーのみが望みを叶える事など当たり前になっている。』

ファムの冷静な言葉にうちひしがれるデイライト。

『じゃあ…貴女も?』

『…違う!』

デイライトの質問に先程の冷静な声とは違い強い口調で否定した。

『私はこんな他人を踏みにじる下衆なバトル等どうでもいい!私が

戦っているのは…』

どうやらファムは他のライダーとは違いライダーロワイヤルにも、ウィッシュユスフィアにも、興味を示していないようだ。彼女が他に戦う理由を語るその時、龍の顔を象ったバイザーを付けた黒い戦士が現れた。

『…！ついに姿を現したか！龍騎！』

ファムは突如現れた黒い戦士を「龍騎」と呼び白鳥型のバイザー「羽召剣ブランバイザー」を構えた。だが…

『え！ちょ、ちよつと！俺、龍騎じゃ…！』

黒い戦士は龍騎ではないと両方の掌を前に出し、否定の合図を出した。

『問答無用！はあああああつっつっ！！』

言葉通り、問答無用で黒い戦士に斬りかかるファム。このままでは危険だと判断し黒い戦士は黒い龍の形をしたバイザーにカードを読み込ませた。

【SWORD・VENT】

黒い戦士の手元に日本刀を模した黒い剣「ドラグセイバー」が出現し、そのままブランバイザーと斬り結んだ。

『何故だ！何故私の前から姿を消したんだ！…コウイチ！』

『だから！俺は龍騎じゃないし、コウイチなんて人、知らないよ！』  
ファムは黒い戦士に問い詰めるが、彼は知らないの一点張りだった。  
このままでは拉致があかないと感じ、ファムは斬り結びをやめ間合  
いを取り、ファイナルベントのカードを使おうとするが…

『…くっ…！時間切れか！』

突然、ファムとデイライトの身体が粒子化し始めた。このミラーワ  
ールドに十分間留まると、身体が粒子化し最後には消滅してしまう  
のだ。

『一先ず退却だ！だが、次こそはお前を止めて見せるぞ！コウイチ  
！』

そう言って二人はミラーワールドから脱出した。

## 現実世界

「あつ！帰ってきた！どうだった？何か分かった？先生。」  
ミラーワールドから帰ってきた闇影に黒深子はリュウガについて聞  
いた。

「くそっ！やっと龍騎を見つけたのに…！」

ファムだった女性は拳を握り締め、悔しそうな顔をしていた。

「いや、あれは龍騎じゃないですよ？」

「何を言っている！あれはどう見ても…！」

「龍騎は赤色じゃないんですか？」

「あ…／／／」

女性は色の違いに気付き、顔を真っ赤にした。

「じゃあ…あれは何だ？」

「あれは仮面ライダーリュウガ…俺達がこの世界で救うべきライダーです。」

闇影は先程のライダーの名前を女性に教えた。だが、同時に目的まで言ってしまった…。

「リュウガ？この世界？お前達は一体何者なんだ？」

「…ああ、そうでした。実は…。」

闇影はこれまでの経緯を女性に語った。そして、この世界の仕組みについて彼女に質問した。

彼女の名前は羽鳥（はっとり）ミホ。3年前のライダーロワイヤルで行方不明になっていた仮面ライダー龍騎である親友の赤竜（せきだつ）コウイチを探す為に仮面ライダーファムとしてこのバトルに身を投じていたのだ。



「この世界が闇に支配されそう…か。にわかには信じ難い…が、お前達が嘘をついている様には見えんな。」

「分かるんですか？」

「カメラマンを職業としているから、顔の表情で本当か嘘がよく分かるんだ。」

「なんか凄いですね！」

「あまり自慢にはならんがな。それにしても、アイツは何処にいるんだ…。」

ミホは龍騎の行方を気にしていた。何故自分の前から姿を消してしまったのか…

「まあまあ、ミホさん。きっとコウイチさんって人は無事ですよ。貴女が信じている限り、きっと…ね？」

ミホの暗い表情を察して影魅璃は彼女に優しい言葉を掛けた。

「ああ…そうだな！ありがとう。」

「どうでもいいけど、お母さん…何でチャイナドレスを着てるのよ！」

黒深子がツツコミを入れるのも無理はない…。影魅璃の服装が何故か緑色のチャイナドレスになっていたのだから。

「あら？一応中華料理店なんだからそれっぽい格好を…」  
「せんでえ

えわー!!」

「す、凄い格好ですね… / / /」

闇影も顔を赤らめながら影魅璃の姿を見ていた。

「先生も見るな!!」

「ぐほッ!」

だが、黒深子の正拳突きで地に沈んだ。

「(こ…こいつらにこの世界を任せていいのか?)」

ミホは闇影達のやり取りに一抹の不安を感じた。

## ミラーワールド

ただ一人佇んでいる黒い龍騎、リュウガ…。本来ライダーでも十分間しか留まらないミラーワールドに何故いるのか…。それは彼はこの世界で生まれたライダーだからなのだ。この無人の世界で彼は何を思っているのか？

『「アイツ」は一体何処にいるんだ。この世界にいる筈なんだが…。

』

リュウガもとある人物を探している様だ。その時、彼の元に契約モ

ンスター「暗黒龍ドラグブロッカー」が現れた。

『……………!!』

『大丈夫だよ、ブロッカー。もう一度探せば見つかるって。』

通常、契約モンスターとライダーとは主従の関係でしか無いのだが、このリュウガとドラグブロッカーのそれは友情で結ばれている様だ。

『……………!!』

『え？この戦いが「まとも」なら何を願うかって？』

ブロッカーはリュウガの願いについて聞いた。

『そうだな…。あの現実世界で生きてみたい…。ここから向こうの人の生活を見ていたら俺も…って思ってたな…なんてね。』

リュウガの願い、それはミラーワールドではなく現実世界で暮らす事だ。

『……………!!』

『そうか…ありがとう。でも俺には…いや、誰の願いも叶わないんだ…。「今の状況」じゃ…な…。』

仮面から表情は読み取れないが、リュウガは何故か悲しげな顔をしている。何故誰の願いも叶わないのか？「普通」や「今の状況」という言葉にその真意が隠されているのか？それから彼は一言も話さなくなつた。

現実世界

白石家で一晚世話になったミホと闇影はもう一度ミラーワールドに行こうとしている。

「今日こそ龍騎を……」

「俺はリュウガを……」

「「見つけるぞ!」!」

見事にハモった二人、だが目的は違う。ミホは龍騎を、闇影はリュウガを探すからだ。

「とりあえず、龍騎が見つかるまでは一時停戦といこうか。煌。」

「いいですよ!俺もミホさんの手伝いをしたいし。」

「ふん、好きにすればいい。さて…見つけたらどんな仕置きをしてやるつか……。」

「「(何か怖い事言ってるんですけど!!)」」

闇影と黒深子はミホの最後の言葉に恐怖した。出来れば自分達が先に彼を見つげようかと考える程…。



上に金色の龍を象った飾りが特徴の、ファムが血眼に探している龍騎の最終形態「龍騎サバイブ」にFSRした。

『影が龍騎に！？でも違う…。煌：お前は一体？』

デイライトの影が龍騎となった事に驚きを隠せないファムは彼の素性を改めて気にした。

『後でお話しますよ。お互いの目的が果たせたらね！』

【FINAL - ATTACK - RIDER: RYU・RYU・RYU・RYU・RYU・RYUKI!】

龍騎のFARを発動し、デイライトはライトブッカーを、S龍騎Sは赤い龍の頭部を象った拳銃型の武器「ドラグバイザーツヴァイ」を構えてエネルギーをチャージし、巨大な火炎弾「メテオバレット」を放ち、ミラーモンスター達を焼滅させた。

『凄い…これが煌：デイライトの能力か…！』

ファムはデイライトの他のライダーとは一転した能力に感嘆の声を漏らした。だがその時…

『デイライト…デイライト…だと！？』

二人が後ろを向くとドラグセイバーを携えたリュウガが現れた。仮面で表情は見えないが、デイライトに対して強い敵意の視線を感じる。

『おおおおおおおつつつつ…！！！！！！』

『くっ！おい！いきなり何をするんだ！』

突然デイルイトに向かって斬りかかるリュウガ。だが、間一髪の所を剣状に変形したライトブツカーで防いだ。

『ついにこの世界に現れたか！デイルイト、いや…世界の灰塵者！』

『な、何の事だ！』

『とぼけるな！お前は全ての世界を焼き付くす存在だと聞いている！だが、この世界はお前の思うようにはさせない！』

デイルイトには全く思い当たりが無い事ばかりだ。自分が世界を焼き付くす存在？灰塵者？全く聞かない単語が彼の頭の中でぐるぐる渦巻いている…。

『…何か知らないけど、いきなり斬りかかるのは感心しないな！』

デイルイトはリュウガの剣を斬り払い、彼の身体に蹴りを入れた。

『ぐっ！こいつー！』

【STRIKE・VENT】

蹴られた事により間合いを空けられたリュウガはストライクベントを発動し、腕に黒い龍の形をした「ドラグクロー」を装着し、黒い炎をチャージした。

『そっちが肉弾戦で来るならこっちも！』

【FINAL・ATTACK・RIDE…DE・DE・DE・DE  
LIGHT!】

デライトも自身のFARを発動し、右腕に光のエネルギーを込めた。

『はあああああつつつ…!!!!』

『うおおおおおつつつ…!!!!』

デライトの「デメンションフィスト」とリュウガの「ドラゲクロー・ファイヤー」。  
二体の必殺技が激突しようとしたその時…

【STRIKE・VENT】

別の電子音が鳴り、巨大な火炎弾が二人を襲った。『ぐわあああああつつつ…!!!!』

『煌!大丈夫…!お、お前は…!』

火炎弾の爆炎がやむと、そこには龍を象ったバイザーを付けた赤い戦士が立っていた…。

『…今度は間違えんぞ…。龍騎!!!』

ファムはその人物にブランバイザーを向けた。彼こそ、彼女が探していたライダー「仮面ライダー龍騎」であった。



『……………!』

『く……!まさかここで出てくるなんて……!』

デイルイトは大ダメージを受けたが、なんとか無事であった。しかし……

「……くっ!」

リュウガは先程の攻撃により変身が解除されてしまった。

『な……!何故だ……!』

『……ミホさん?』

ファムは変身の解けたリュウガの正体を見て愕然としていた。その理由は……

『何故お前がリュウガなんだ……コウイチ……!』

『……………!』

なんと、リュウガの正体は、ファムが探していた龍騎の正体である筈の赤竜コウイチだった……。

一方、デイルイト達の様子を赤いフードを着込んだ謎の女性が見下ろしていた。

「ついに現れたか。デイライト…。お前の存在は世界を焼き付くす。このまま龍騎によって抹殺されるがいい！」

どうやらリュウガにデイライトが灰塵者であると告げたのはこの女性の様だ。

彼女の思惑は？灰塵者とは何か？リュウガの謎は？

そして、最後に望みを叶えるのは誰だ！？次回、仮面ライダーデイライト！

「コウイチ…お前は龍騎なのか？リュウガなのか？」

『俺は…コウイチであって、コウイチじゃないんだ…。』

自身をコウイチの影と語るリュウガ…。

『お前は生きる…！自分の夢を叶えろ…！』

『俺には…夢を持つ資格なんてないんだ！』

様々な犠牲を目の当たりにし、夢を棄てようとするリュウガ。しかし…！

『お前がどんな存在だろうと、夢を持つ資格は誰にでもある！』

『これが夢を持つ者の力だ！』

ライダーロワイヤル、ついに決着の刻が来た…！！願いを叶えるのは誰だ？

次回、「真なる虚像」

全ての闇を、光へ導け！

### 第3導 リュウガの夢（後書き）

如何でしたか？リュウガ編でのリュウガ、龍騎、ファム以外のライダーは殆ど空気でした。そのライダーのファンの方々、申し訳ありませんでした！

やっぱり初っぱなからリュウガは無理があったかな…（＜―＞）

今回はリュウガ編後半です！またグダグダですがどうか見捨てず、見るだけ見てって下さい！（見苦しい）

以上！虎居合璫でした！

#### 第4導 真なる虚像（前書き）

リュウガ編ついに完結です！

前編より長くなってしまった事をお詫び致します。 m | | m

では、どうぞ！

## 第4導 真なる虚像

『コウイチ…!!』

ファムは変身が解けたリユウガモとい親友の赤竜コウイチと「同じ顔をした男」を見て唾然としていた。

「く…、くそっ！ここで変身が解けるなんて…！一旦退却だ！」

コウイチに似た青年は分が悪いと感じ、この場を去っていった。

『お、おい！待てお前！』

『煌！今は放っておけ！それより…』

『……………!!』

『こいつを止めるのが先だあああつつつつ…!!』

ファムはブランバイザーを構えて、龍騎に斬りかかっていった。

【SWORD・VENT】

龍騎はブランバイザーに対抗する為に、ソードベントで剣を呼び寄せ、そのまま斬り結んだ。

『な…何！？貴様！何故それを持っている！？』

ファムは龍騎が使っている剣に疑問を抱いた。何故なら、彼専用の

武器「ドラグセイバー」ではなく紫の蛇をモチーフとしたライダー「仮面ライダー王蛇」の専用武器「ベノサーベル」を使用しているからだ。

『……………!』

『な、何故なんだ!どうして他のライダーの武器を使えて…ぐわあ  
あああつつつつ!』

僅かな隙を付かれたのか、ファムはブランバイザーを勢いよく弾かれベノサーベルの袈裟斬りを受けてしまった。

『ミホさん!』

世界の光導者、デイルイト!9つの影の世界を巡り、その瞳は、何を照らす?『うつ…くつ…!』

『羽鳥さん!大丈夫ですか!?!しっかりして下さい!』

ファムの受けたダメージは相当大きくまた、ベノサーベルによって斬られた傷に毒素が入り込み、彼女の身体を蝕んでいる。

『な…なんとかな…。だが、何故奴が別のライダーの武器を使えるんだ…?』

ファムはふらつきながらもなんとか起き上がり、武器を構えた。だが…

【TRICK - VENT】

今度は黒い蝙蝠の騎士をイメージしたライダー「仮面ライダーナイト」のトリックベントを使い、「シャドールージュン」で四人に分裂した。

『何！また別のライダーのカードを！？』

龍騎が王蛇だけでなくナイトのカードを使用した事に動揺するファム。そんな事は構わず分裂した龍騎四人がディライトとファムに襲いかかる。

『くそっ！羽鳥さんは休んで下さい！俺がやります！』

ディライトはライトブッカー・ソードモードで龍騎二体の攻撃を防ぐが、流石に一人で二体相手では分が悪い。そして、他二体の龍騎の攻撃を受けてしまう。

『ぐあああああつつつつ！！！！！！！』

『き…煌…！！うつ…！！傷が…。』

ファムは胸を押さえながら、ディライトの身を案じる。だが、傷の痛みで身体がまたふらつく。

『くっ…ここまでか…！！』

龍騎四体がベノサーベルをディライトに振り上げるその時…

『……………！！』



龍騎の身体が粒子化し始めた…。時間切れを現わす証拠だ。

『……………！！』

龍騎は一体に戻り、その場を去っていった。

『俺達も…戻りましょう…ミホさん…』

デイルイトはファムの身体を支えながら担ぎ、ミラーワールドから脱出した。

## 現実世界

現実世界に戻った闇影とミホは、黒深子と影魅璃から治療を受けた。闇影の傷は大事には至らないが、ミホの方は傷が激しい為しばらく寝かせる事にした。

「二人共、大丈夫！？」

「俺は大丈夫だが、ミホさんが…。」

黒深子の心配する言葉に闇影は眠っているミホの方に目をやりながら無事だと返した。

「それにしても、リュウガの正体もコウイチって人だったなんて…。」

「ああ、おまけに龍騎も他のライダーの能力を使える様だし…一体何がどうなってるんだ。」

闇影と黒深子は先程の出来事に頭を悩ませていた。その時…

「…ん？こ…こ…は…？」

ミホの目が覚め、弱りながら身体を起こした。

「ミホさん！まだ寝てなきゃ駄目です！」

無理に起きようとするミホを黒深子が抑えて寝かした。

「煌…すまないな…。お前を巻き込んでしまった…。」

「気にしないで下さい。こんな怪我、大した事ありませんから。」

ミホは自分のせいで闇影を巻き込んだと思いついて謝罪したが、闇影は特に気にしてなかった。

「そうか…私は…もう一度…ミラーワールドに向かう…。龍騎は…コウイチは私が止める…。絶対に！」

なんとミホは三度ミラーワールドへ向かうと言いつ出した。

「何言ってるんですか！貴女はまだ傷が治ってないじゃないですか！」

当然それを許す筈はないと、闇影は強く注意した。だがミホはカードデッキを出し、鏡につき出してVバックルを実体化しデッキを装

着した。

「変…身！」

ファムに変身したミホはそのままミラーワールドへと向かおうとするが…

『…！な、何をする！放せ！』

闇影がファムを抑えつけた。

「駄目だ！行ってはいけない！傷が治ってからでも遅くはない筈だ！」

『そんな悠長な事を言っでられるか！！』

「ぐっ！！！」

「先生！！！」

ファムはあくまで行かせようしない闇影を力任せに突き飛ばし、ミラーワールドへ向かった。

ミラーワールド

『くっ…！く…そ…僕は…素晴らしい人生を過ごしたただけなのに…。』

別の場所でタイガは、何者かに倒されうつ伏せになっていた。スーツアーマーは所々傷付いており、デストクローも全て折られている。

『……………』

そんな彼を冷たく見下ろすのは、ファムが探している龍騎であった。そしてそのままタイガに近づく。

『ひっ！な…、何だよ、お前！僕に何をするつもりだよ！や、止める！止めてくれ！うわあああああつっつ！！！！！！』

タイガは龍騎が「何か」しようとし、怯えていた。だがその願いは叶わず、彼の悲鳴が消えた頃にはその場には龍騎だけしかいなかった…。

『（コウイチ…。お前は一体どうしてしまったんだ…！）』

一方、ミラーワールドに到着したファムは再び龍騎を探しながら、三年前の事を思い返していた…。

三年前

「うっむ。なかなか良い景色が見つからんな。」

ミホはカメラを構えながら良い景色を探すが、なかなか見つからな

いよいよだ。その時…。

「ほれっ!」

「きゃっ!冷たい!」

背後からミホの顔に缶コーラを当てたコウイチ。

「コウイチ…何しとるんだ!貴様あっ!」

驚かされたミホはコウイチにヘッドロックをかけた。

「ぎゃああっ!ゴメン!ギブギブ!もうやりません!神に誓ってもやりません!」

「全く、人が悩んでいるのに…」

目の前の男は直ぐに良い景色を見つけ撮影してるのに、ミホはそれが見つからなくて悩んでいる。そのせいなのか、目が普段以上に鋭くなっている。

「ああ、本当にゴメン。でもなミホ…。」

ようやく解放されたコウイチはミホに謝りつつ、何かを言おうとする。

「景色を撮るのにちょっと力いれ過ぎじゃないか?」

「え?」

ミホの悩みに気付いたのか、コウイチはアドバイスを言う。

「良い景色つて、目で追っただけが全てじゃないんだ。もう一つ大事な事があるんだ。」

「もう一つ？何だ、それは？」

コウイチは勿体ぶるように間を空け、右手を胸に当てて口を開いた。

「それはな」

『…！見つけたぞ！龍騎！…！』

龍騎はファムの声に振り向き、ドラグセイバーを構えた。

『龍騎…いやコウイチ…お前は…私が止める…！』

ファムもプランバイザーを構え、龍騎に斬りかかった。

『……………！…！』

『コウイチ、いい加減こんな戦いを止めるんだ！！人を犠牲にしてまで叶えたいお前の願いは何なんだ！！』

ファムは龍騎に戦いを止めるよう呼びかけるが、彼は一言も喋らない。

『……………。』

『黙ってないで何とか言え!!』

ファムは龍騎と斬り払い、間合いを空けて距離をとった。

『チツ…!こっとなったら…!』

このままでは埒があかないのか、ファムはソードベントのカードを使い薙刀型の武器「ウィングスラッシャー」を呼び出したが…

【FREEZE・VENT】

『!!…こ…凍った!!』

なんと龍騎は、先程倒したタイガの専用カード「フリーズベント」を使いウィングスラッシャーを凍らせた。

『…またか!一体何故なん…ぐっ!!』

まだ傷が完治していないファムの身体に痛みが走り体勢を崩し膝を地につけた。龍騎は彼女に近づき止めをさそうとするが…

『うおおおおおつつつ!!…!!』

『…………!!』

間一髪の所を黒い龍騎…もとiriユウガが駆けつけ、龍騎と同じ剣で止めの一撃を受け止めた。

『ミホ…!大丈夫か!?今の内に早く逃げろ!!』

『…え？そ、その声はコウイチか！？』

ファムはリュウガの声に覚えがあった…自分が先程まで戦っていた相手の正体の筈の…コウイチの声に…。

『…俺は…コウイチであって…コウイチじゃないんだ…。』

『？一体どういう事だ！？…なら、あの龍騎は誰なんだ！？』

リュウガの不可解な言葉にファムは困惑していた。その時、龍騎に異変が…

『ギギギギギ…どいつもこいつも間抜けな奴等だよなあっ！！オラアツ！！』

『ぐああっ！！』

なんと今まで口を開かなかった龍騎が喋り出したのだ。

『…喋った！？おい！お前は誰なんだ！』

『ああん！？俺が誰かって？ギギャギャギャギャギャ！俺はコ・ウ・イ・チだよ！た〜だし…』

ファムの質問に、小馬鹿にするような態度で返事をする龍騎。そして…

『「身体」の話だなあっ！』

『な！何だと？どういう事だ！？』



『答えの通りですよ！ミホさん！』

【ATTACK - RIDE... LASER!】

『グギャアツ！！』

ファムに追ってきたディライトはディライトレーザーで龍騎の顔を撃った。

『...痛つて...なああああつつつつ...!!!』

撃たれた龍騎の割れた仮面の下半分の中は、透明の顔に三日月の様に裂けた口がついており、胸部に黒いオーラが渦巻いた水晶玉のような物が浮かび上がってきた。

『な！何なんだ！？その姿は！？』

ファムは龍騎の奇怪な身体に畏怖しながら問い詰めた。

『あゝあ。バレちまったか！なら自己紹介してやるよ！俺の名はスフィアミラージュ。元はこの水晶玉...ウィツシユスフィアが俺そのものだったんだよ！』

龍騎...もといスフィアミラージュは胸部に親指を指し、自分はこのバトルの賞品、ウィツシユスフィアであると言った。

『俺は他人の身体に取り込み内側から喰らい尽くす事で力を手に入れてきた！そして、三年毎にあるこのバトルの優勝者の身体を何度も何度も取り込みまくってやったぜ！』

『その方法で前のライダーロワイヤルで彼を取り込んだのか！？』

デイルライトは怒りをなんとか抑えながらスフィアミラージユに問い出した。

『ああ、その通りだよ。こいつの願いつてのが笑えて堪えんのに必死だったぜ。その願いつてのがよお…その女が良い景色とであえますように』だってよ！！マジで笑えたぜ！！』

『貴様…！！』

『だが、俺に取り込まれる寸前に肉体と魂を分離する「スピリットベント」を使って魂だけを切り離れた。そしてその魂の正体が…』

『止めろ！それ以上言うな！！』

リュウガの制止の言葉を無視し、スフィアミラージユは続けた。

『そこにいるリュウガなのさ！奴は赤竜コウイチの「亡霊」なんだよ！未練がましいいったらありやしねえぜ！』

## 【ADVENT】

スフィアミラージユは龍騎のアドベントを発動し、ドラグレッダーを召喚して腕を上げた。

『ライダーの身体になっちまったせいでの世界にも長時間いられなくなっちまった。だが、お前を取り込めば俺は二つの世界を支配する事ができる！だからよお…』

彼は腕を振り下ろし、ドラグレッダーにリュウガを襲う様に促した。

『さっさとくたばれ!!!!!!』

「グオオオオツツツ!!!!!!」

『く…クソオオオツツツ!!!!!!』

リュウガは自分の無力さを嘆いて叫んだ。その時…

『キヤアアアアツツツ!!!!!!』

なんとファムがリュウガの前に立ち彼を庇った。そして代わりに彼女が喰われてしまい、噛みつかれたまま宙を舞い地面に叩きつけられた。

『チッ!』

『お、おい!大丈夫か!?しっかりしろ…!ミホ!』

リュウガはファムの身体を支えながら呼び掛けた。

『…やっぱり…お前が…コウイチなんだな…』

『あ…ああ…』

リュウガは先程のスフィアミラージュの言葉を気にしているのか返事に言い淀んでいる。

『お前が…名乗らなかったのは…アイツが言った事を…気に…しているから…だろ?』

『そ…それは…。』

ファミはリュウガの考えている事をそのまま聞いたので、リュウガは更に焦った。

『私は…そんな事気にしていない。』

『!!--』

ファミはリュウガの事を「亡霊」だとは思っていないのだ。

『あの時…お前が私に言った言葉…覚えて…いるか?』

『ああ…良い景色は目で追うだけじゃなく、』

『『心で感じるものだ。』』

ファミとリュウガは、あの時の言葉を同時に言った。

『あの時は…何の事だかよく分らなかったが…今は分かる…。こうして…お前と…心の固まりなお前と話していると…な。』

ファミの声はだんだん弱々しくなってきた。

『おい!しっかりしろ!すぐに病院に連れてってやる!』

リュウガはファミを病院に連れていこうとした。この傷では手遅れ

だと分かっているけど…その時だった。

『…コウ…イチ…最後に…言って…おきたい…。』

『最後なんて言うなよ…!!縁起でもない!!』

ファムは力を振りしぼり、最後の言葉をリュウガに伝える。

『お前は…生きる…!自分の夢を…本当に叶えたい夢の為に生きるんだ!』

『ミホ…。』

『私の為…に戦っていたんだな…ありがとう…。』

ファムは仮面の中で涙を流しながら、リュウガに感謝の言葉を言った。その時…

「グオオオオツツツツ!!!!!!」

『!!!!!!…ミ…ミホオオオツツツ!!!!!!』

ドラグレッダーがファムの身体を啜えてスフィアミラージュの前まで近づけ、彼の口が大きく裂けファムを喰らった。

『ああ。やっぱり旨いなあ…ライダーの身体はよお…特に女つてのが最高のグルメだぜ!!何も出来ねえまま悔しんでる野郎の女を野郎の前で喰うつてのはよおつつつ!!!!ギギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤ!!!!!!』

スフィアミラージュは、聞くに堪えない下卑た笑い声を上げながらファムの身体を喰った。どうやら今まで奴が他のライダーの能力を使ったのはそのライダーを文字通り喰ってきたからだ。

『う…うああああ…！…！…！』

リュウガは怒りに身を任せてスフィアミラージュに向かっていった。

『弱えくせに突っかかってんじゃねえよ！』

【STRIKE・VENT】

スフィアミラージュはタイガのデストクロウを装備しリュウガを引き裂き、蹴飛ばした。そのはずみでリュウガは変身が解けてしまった。

「くっ…！くそっ！」

『亡霊のてめえには何も出来ねえ！虚像のてめえには何も守れねえ！偽者のてめえなんか夢を持つ資格なんてねえんだよ…！』

「そっだ…こんな姿になって未練がましく生きて…大事な人を守れなかった…そんな俺に…夢を持つ資格なんてないんだ…！！！」

コウイチは自分の存在を強く否定され、完全に心を折られてしまい、その場で両膝を付いた。ずっと顔を伏せたまま…

『…人の夢を…』

『ああ？』

突然デイルライトがスフィアミラージュの前に現れた。  
そして…

『馬鹿にするんじゃないやねええええつつつ！！！！！』

『ぐあああああつつつつ！！！！！！』

そのまま力の籠ったパンチを打った。

『こいつの…いや、人の夢や命を否定する資格なんて誰にも無い！』

『何だと…。』

『こいつは、例え自分がどんな存在になろうと…大切な人の為に  
ずっと一人で戦ってきた！』

「……………！！」

『…！ウゼえんだよっ！！てめえっ！！』

スフィアミラージュはドラグクローから炎を放ち、デイルライトに直  
撃させた。

「…！おい！デイルライト！」

コウイチはいつの間にか敵だった彼の身を案じていた。だが…

「この誰もいない空間にずっと一人にいる事は想像できない程の苦  
しみだった筈だ…。」

闇影は、それでも強く真つ直ぐな視線を向け話を続ける。周りの炎が、今の彼の闘気を思わせる程燃えていた。

「それに負けずに戦い続けていたこいつの心は…偽者なんかじゃない!!」

闇影は虚像であるコウイチのファムへの想い…「心」は偽者ではなく本物だと断言した。そして、視線を彼の方に向け…

「例えお前がどんな存在だろうと、夢を持つ資格は誰にでもある。一緒に戦おう…コウイチ!!」

「……!!闇影…。ああ!!」

闇影に手を差し伸べられたコウイチは手を取り立ち上がった。その瞬間、ライトブッカーから三枚のカードが闇影の手元に飛び出して黒と黄色のカードに変化した。

『てめえ…一体何者だ!!』

スファイアミラージユの問いかけに闇影はディライトのカードを見せつけるように前に出しこと言った…。

「お節介教師な仮面ライダーだ!!宜しく!!」

闇影はカードを装填し、コウイチもカードデッキを持った右手を左斜めにし、

「「変身!!」」



闇影はオレンジのボディに黄色いライドプレートが突き刺さったデ  
イライトへ、コウイチは灰色の人型がオーバーラップしその身体は  
闇を現わす「黒」だが、心は真実の「光」を示す龍の戦士、リュウ  
ガへ変身した。

『さてと…輝く道へ導きますか!!』

『うしっ!!』

デイライトはまたも決め台詞を言い、リュウガも両方の拳を握りな  
がら気合を入れ、声に力を入れて叫んだ。

『舐めんじゃねえええつつつつ!!!!』

【SWORD - VENT】

【STRIKE - VENT】

今の行動に頭に来たスフィアミラージュは先程喰らったファムの武  
器「ウイングスラッシャー」を、犀をイメージしたライダー「仮面  
ライダーガイ」のストライクベント「メタルホーン」を装備し、二  
人に突撃した。

『そんな単調な攻撃じゃ…』

【ATTACK - RIDE…LASER - BLADE!】

『俺たちは倒せないぜっ!』

【STRIKE・VENT】

『ぐああああつつつつ！！！！！！！』

デイルイトは「デイルイトレーザーブレード」のライトオレンジの光の刃でウイングスラッシャーとメタルホーンを破壊し、リュウガの「ドラグクロー・ファイヤー」の黒炎でスフィアマリージュを撃撃した。

『く…クソがあああつつつつ！！！！人間と虚像風情があああつつつつ！！！！』

『よし！止めだ！』

『待て！コウイチ！まだ何かある…』

【FINAL・VENT】

『これで…最後だあああつつつつ！！！！！！』

制止するデイルイトの話を聞かず、リュウガはファイナルベントでドラグブラッカーを召還し、「ドラゴンライダーキック」で止めを刺そうとするが…

【CONFINE・VENT】

『何！？ブラッカーが消えた！？』

突然、ドラグブラッカーがガラスが割れた様な音をたて消滅した。



デイルイトはリュウガの背中に手で叩いた。その瞬間、彼の腕にドラグシールド、ドラグセイバーが装備された。

『な、何じゃこれ!』

リュウガはカードを使用していないのに自分の武具が全て装備されたので驚いた。

『虚仮脅しがっ! 串刺しにしてやる!』

【SPIN・VENT】

今度は鹿をモチーフにしたライダー「仮面ライダーインペラー」のスピンベント「ガゼルスタップ」でリュウガを貫こうとした。しかし…

『そうはさせるか! ほいつ!』

『うわあああつつつつ!?!?!』

デイルイトはリュウガの肩を掴み、後ろへ倒した。その時、リュウガの身体が契約モンスター「ドラグブロッカー」に酷似した姿「リュウガドラグブロッカー」へと変形した。

『お、俺がブロッカーになってる!?!』

Rドラグブロッカーはあまりの展開に困惑していた。

『…だけど、強い力を感じる…これならいけそうだ!』



黒いオーラが漂う水晶玉が浮かび上がってきた…。これがスフィアミラージユの本体、ウィツシユスフィアである。

『俺は取り憑いた身体を捨てれば生き延びる事出来る…。そして、願いを叶えたり、俺に触れた奴は身体を奪われる…。』

つまり、彼を倒す手段は皆無に等しいのだ…。このままでは同じ悲劇が繰り返されてしまう…。

『人の欲望がある限り…俺は…永久に不滅だ…ギ…ギギヤギヤギヤギヤ…』

『…お前を倒す方法は一つだけある…！』

リュウガはスフィアの元に近づき、こう言った…。

『…ウィツシユスフィアよ！消滅しろ！』

リュウガの願いはウィツシユスフィアの消滅即ち、スフィアミラージユの死を願った。

『な！な！な！何だどっ！俺を消すだどっ！？』

その瞬間、スフィアの内側が光り出した。

『ギギヤアアアアツツツツ！…！な、何故だあっ！…！何故自分の願いを犠牲に出来るんだあっ！…！』



『…先程貴方達が消した黒いオーラ…。あれが私を操っていたのです。』

『何！黒いオーラだと！』

デイルイトは黒いオーラの名前を聞き、驚いた。

『数年前、この世界に突然現れ、私を操り、多くの勝ち残ったライダー達に取り憑き続けたのです。』

『黒いオーラの影響がそこまで及んでいるのか…一体何なんだ』

デイルイトは悲しげに呟いた。他者まで操る黒いオーラの正体は一体何なのか…。

『ですが、貴方達があのおーラから私を救って下さった。ご自分の願いを犠牲にしてまで…。本当にありがとうございます。』

ウィッシュスフィアは改めて二人に感謝した。

『お礼に、貴方達の願いを一つだけ叶えて差し上げましょう。』

ウィッシュスフィアは礼として願いを一つ叶えてくれるようだ。

『コウイチ。願いを言え。』

『闇影…。いいのか？』

『この世界のライダーであるお前が叶えるのは当然じゃないか。』



『そうか……。じゃあ、俺の願いは……』

一度デイルイトの方を向き、真っ直ぐに向いて願った。

『旅がしたい！世界中の大切な人を守る旅がしたい……！闇影達と一緒に……！』

その瞬間、デイルイトとリュウガは光に包まれて、現実世界へと向かった。

これで良かったんだよな……。ミホ。

## 現実世界

「あら、新しい絵がキャンバスに……。良い絵だわ。」

影魅璃はキャンバスに描かれた新しい絵を賞賛した。その絵は、旅に向かうリュウガを龍騎とファムが見守っている光景だった。

「存在が人と違って、心は人と同じ……か。」

「それだけ人々は平等に夢を持つ資格があるんだ。」

「そう言えば、闇影。何であるの『龍騎』が偽物だって解ったんだ？」

「うん：お前と斬り結んだ時、何かの勢いを感じたんだ。だが、奴にはそれが感じられなかったんだ。」

「心が無かったから、それが偽物だって解ったのね。」

闇影は龍騎とリュウガの心の違いでどちらが偽物かを判別出来たよ  
うだ。

「まあ、そんなところかな？それよりコウイチ、本当についてくるのか？」

「おいおい。何言ってるんだよ。言っただろ？大切な人を守る旅に出るって。それにはお前の旅について行くのが一番だと思ってな。」

「そうか！これから宜しくな！コウイチ！」

闇影は握手の手を差し伸べ、

「ああ！こちらこそ！」

コウイチはその手を握り二人は握手を交わした。

「なんか良いわね。男同士の友情って。宜しくね、コウイチ君。」

「悪くはないけどね。宜しく、コウイチ。」

黒深子と影魅璃もコウイチを歓迎した。

「じゃあ、コウイチ君の仲間入りを記念して、今日はご馳走に……」

影魅璃が料理の準備をしようとした時…

「な、何これ!?!」

突然、キャンバスに新しい絵が被さった。それは、巨大なビルの正面の左側に黒い戦士、右側に白い戦士が立つ光景だった。その絵に闇影はこう呟いた…。

「オーガの世界か…。」次回、仮面ライダーディライト!

「私が潜入してオーガの事、調べてみる。」

「お前、オーガを探してんのか?」

オルフェノクのみで編成された学園に潜入し、オーガを探す黒深子。

「オーガは我々同胞を殺した裏切り者…許しはしない!」

「貴方が…オーガなの…?」

裏切り者の名を持つ地の帝王、オーガ…。彼の目的は?

次回、「裏切の帝王・反逆のオーガ」

全ての闇を、光へ導け!

#### 第4導 真なる虚像（後書き）

赤竜（せきだつ）コウイチ／仮面ライダーリュウガ／仮面ライダー龍騎

「リュウガの世界」の主人公。23歳。（肉体年齢は後述の理由により20歳）特徴は肩まで伸びたウェーブがかった長い茶髪で少々スケベだが明るい性格である。

その正体は、三年前のライダーロワイヤル（この時は龍騎として戦っていた）にスフィアミラージュに取り憑かれた時、「スピリットベント」で肉体と分離した魂が自身の虚像として生まれた存在である。

事情を知らない羽鳥ミホ／仮面ライダーファムが龍騎を倒そうとしているのを知り、謎のフードの女からリュウガの力を受け取り変身し先に龍騎を倒そうとしつつ、ミホを見守っていた。彼女とは親友以上恋人未満の間柄である。デイルイトとの協力の元、スフィアミラージュ（ウィッシュユスフィア）を倒し、黒いオーラから解放されたウィッシュユスフィアの願いにより現実世界の住人となり闇影達の旅に同行した。

名前の由来はドラグレッダー（赤い龍）＋初代龍騎、榊原「耕一」

FFR／リュウガドラグブロッカー

リュウガのFFR形態。外見は自身の契約モンスター「暗黒龍ドラグブロッカー」と酷似している。また、自在に元の姿に戻る事も可能。この時のリュウガにはソードベント、ストライクベント、ガードベントによる武具が装備される。これらはコンファインベント等によって無効化されない。

FAR／デイルイトワイバーン

リュウガドラグブロッカーのFAR。上空に飛び上がったデイルイ

トに黒い炎のエネルギーを付加し、そのまま急降下の飛び蹴りをする。龍騎及びリュウガのファイナルベント「ドラゴンライダーキック」と酷似した連携技。

如何でしたか？リュウガ編後編！コウイチはディケイドでいうユウスケのポジションに当たります。彼のこれからの活躍にご期待下さい！次回のオーガの世界では、ほぼ空気だった黒深子が活躍しますのでファンの方々には必見（？）です！

以上、虎居合瑠でした！

## 第5導 裏切の帝王・反逆のオーガ（前書き）

久々に更新しました！今回は前半は黒深子の出番がやや多めで、デ  
イライトには刺客を差し向けました！

所々微妙な文章が目立ちますが、気になった方は是非ご報告を！

合言葉はオーガ！オーガ！で（性懲りもなく）

では、どうぞ！

## 第5導 裏切の帝王・反逆のオーガ

バーバー・フラッシュ

「いや！変わるの早過ぎでしょおおお！！！！何！？バーバーフラッシュって!?!」

ここ「オーガの世界」に移動した瞬間、白石家の形状が唐突に変化した為、黒深子の強烈なツツコミが炸裂した。

「く、黒深子ちゃん！落ち着いて！」

コウイチはそんな彼女を宥めようとした。

「それと同時に俺の服装…というより役割も変わるんだ。」

「って！普通の流れっぽく話さないで!…んで、その格好は？」

多少落ち着きを取り戻した黒深子は現れた鍔等の道具を挟んだベストを着た闇影の服装について聞いた。

「ん？ああ、多分美容師の仕事かな？二人共、折角だから髪切らない?。」

どうやらここでの闇影の役割は美容師の様だ。そのついでに黒深子とコウイチに髪を切るかを尋ねた。

「今のとこそんな予定はないわよ。先生。」

「俺はちよつと整えて貰おっかな。」

黒深子は切るのを断り、コウイチは切つて貰う事にした。その時…

【…次のニュースです。数ヶ月前に起きた流星学園の展示物…二つの「帝王のベルト」の内一つの「オーガギア」窃盗事件の直後に起きたオルフェノクの灰化事件が今月に入って五十件を越えました。…警察の調査によると…】

「オーガギアが盗まれた直後に、オルフェノクが倒されている…流星学園の関係者…事情は粗方解つた。」

今のニュースを見て、闇影は事件の状況を把握出来た様だ。

「えっ？解つたつて、犯人が？」

「いや違う。流星学園から盗まれたベルトの力でオルフェノクを倒しているのは、当然そのベルトの使い方を知ってる人物なんだ。つまり…」

「流星学園にいる誰かがオーガに変身してるって事だ！」

闇影はオーガの変身者は流星学園の内部の人間だと推測した。

「そうと分かれば、早く行こう！」

コウイチは直ちに流星学園に行く提案を持ち出した。



「でも、そう簡単にいかないわよ。」

影魅璃はいつの間にか開いたパソコンで流星学園のサイトを見て、侵入は困難だと判断した。

「な、何ですか？」

「あの学校はオルフェノクしか入れないのよ。」

そう、流星学園はオルフェノクのみで編成された学校なのだ。下手に侵入すれば自分達の命に危険が及ぶ。そう考えていた時…

「ねえ、先生…私が調べるわ！」

「何だって!?!」

なんと黒深子は自分がオーガの事を調べると言い出した。

「私だったら…オルフェノクだから侵入しても怪しまれないわ。だから…私が潜入してオーガの事を調べてみる！」

「ダメだ！一人じゃ危険だ！もしバレたら君の命が危な「前に！」」

闇影は当然この提案に反対した。だが、全て言い切る前に黒深子がそれを遮った。

「前に先生、言ってたよね？『私が蘇ったのは私にしか出来ない事がある。』って。多分、それが今だと思うの…。」

黒深子は闇影があの時自分に向けて言った言葉の意味が今の状況の為に行動する物だと強く反論した。

「…分かった。」

「み、闇影!？」

「そこまで言うなら、君に任せるよ。但し…!」

闇影は少し考え、黒深子の提案を承諾した。そして、条件を提示した。

「無理はしないでくれ。危なくなったら直ぐ逃げる!これだけは絶対守ってくれ!」

「先生…はい!」

世界の光導者、デイライト!9つの影の世界を巡り、その瞳は、何を照らす? 流星学園

「え、皆さん。今日からこのクラスの一員になる白石黒深子さんです。」

とあるクラスの朝礼で、担任の先生の言葉に、男子生徒は「おおっ!」と声をあげた。

「初めまして、白石黒深子です。宜しくお願いします!」

黒深子の挨拶が終わると、大きな拍手と口笛が喝采された。外見が美少女な為、男子生徒達の視線は黒深子へ向かっていた。

「では好きな席に座って。」

先生の言葉に従って空いてる席に向かった黒深子。そこへ…

「あ！ここ空いてますよ！」

一人の女子生徒が手を上げてその隣に座る様にアピールした。その生徒の特徴は黒髪のおさげに縁なしの丸眼鏡と、おとなしめな印象を表していた。

「ありがとうございます。貴女は？」

「私は鶴見（つるみ）ユカ。宜しくね、白石さん！」

「こちらこそ宜しく！」

見た目と違ってはきはきとした口調のユカだが、黒深子は彼女と友達になった。

「（こういうの久しぶりだな…。）」

潜入捜査とは言え、久々の学校生活に嬉しさを感じる黒深子だった。

休み時間

黒深子のクラスメイトから転校生お約束の質問攻めを受けていた。前はどこの学校だったとか、部活は何部だったとか等…。この場は聞かれた質問に全て答えて、逆に「あの事」を聞いた。

「ねえ。オーガについて知ってるかな？」

「……………！！！」

それを聞いた瞬間、教室にいた生徒達は静まりかえった。そして急によそよそしくなり、分からないといい離れていった。

その後、他の生徒にもオーガの事を聞きまわったが、誰もが話そうとせず、中には怯えて逃げ出す者もいたと言う…。

「はあ…。やっぱりオルフェノクを殺す様な人の話なんかしたくないよなあ…。」

裏で一休みした黒深子は皆がオーガの事を話さない理由を薄々理解し始めた。普通の人が近くに彷徨っている殺人鬼の話なんかしたくないように、オルフェノクを殺すオーガの話をここの生徒達が話したがるはずもない。

「おい、白石！」

すると、そこに同じクラスの複数の女生徒が黒深子の前に現れた。

「な、何ですか？」

「お前、何男子達に色目使ってたんだよ！」

「キヤアッ!!」

突然言いがかりをつけて黒深子を壁に突き飛ばした。そして「あの時」の恐怖が頭を過るうとした時、

「おいおい! つーか一人に寄ってたかって何やってんだよ!」

金髪で目つきも悪く、制服も着崩している不良の男子生徒が現れた。

「な、何の事…ヒッ!」

「俺ーやな! そういう奴見てると無性にムカつくんだよ! とつとと失せろ!」

不良は壁を拳で砕き女生徒達を脅した。それを見て、彼女達は逃げ出した。

「あ…あの…助けてくれてありがとう。」

「ああ? 何の事だよ。ちよいとムカつく事があったからそれ発散しただけ。つーかこの辺を一人でウロウロすんなよ、白石。」

「な、何で知ってるんですか?」

「つーか、俺お前と同じクラスだから。俺、蛇塚（へびづか）ナオヤ。じゃな。」

この不良生徒、ナオヤは黒深子と同じクラスメイトだったのだ。名を名乗り右手を横に振りながら去るうとした。

「待つて、蛇塚君！ちよつと聞きたいんだけど、貴方オーガについて知ってる？」

黒深子の質問にナオヤはその場に止まり、怪訝そうな顔で振り向いた。

「お前、オーガを探してんのか？」

「え！？え、ええ…。そう…。だけど…。」

黒深子はナオヤの質問に怯みながらも肯定した。すると…

「…ちよつと顔貸せ。」

「え？え？え！？ちよ、ちよつと離して！痛い痛い痛い！！！」

ナオヤは黒深子の手を掴み、何処かへ移動した。

### とある部室

「おい。相馬あ！連れて来たぞ。オーガ探してる奴。」

「蛇塚君。また無茶をして…先生に見られたら変に誤解されるよ？」

そこには、ナオヤの無茶な部室案内に注意をする丸っぽく短い茶髪の生徒に…

「本当よ。ま、学校クビになりたいなら止めないけどね」

皮肉を込めた冗談を飛ばすおさげの女生徒がいた。

「うるせえ。鶴見！おめえはいつも一言多いんだよ！」

「え？つ、鶴見さん!？」

女生徒の一人はなんと仲良くなったばかりのユカだったのだ。

「ユカでいいよ、クミちゃん。私達友達じゃん。」

「…ありがとう。ところでここは何部なの？」

黒深子はユカにここは何部かを聞いた。

「その前に自己紹介をするよ。僕も君と同じクラスの相馬（そうま）ユウジ。ここ『救事部』の部長さ。」

「救事部？」

黒深子は聞いた事の無い部活の名前に首を傾げた。

「うん。僕達は色々な学園行事の手伝いをする…。所謂助っ人部みたいな物だよ。」

「部活やその試合の助っ人に物探しに倉庫の掃除等…かなり大変な部活動なの。」

「へえ…そうなんだ。何か凄いわね。(…先生が聞いたら絶対この顧問になる！っていいそんな部活だね。)」

闇影の性格なら確実にそう名乗り出るだろうと思いつつ、黒深子は救事部の活動に関心を持った。

「あつ、そつだ。私がオーガを探してるって言ったらその…蛇塚君に連れられたんだけど…」

黒深子は自分がここに連れてこられた理由を尋ねようとした時…

「その部活動もVery用事があればのTalkですガネ。」

部室の入り口に四人の生徒が立っており、ウェーブのかかった金髪のリーダー格の男子生徒が話しかけてきた。

「…薔薇ノ宮先輩。」

「おつと、Sorry。転校生がいらしてたんデスネ。私は生徒会「ラッキークローバー」会長の薔薇ノ宮キョウジと申しマース。Nice to meet you。」

キョウジは英語混じりの言葉で黒深子に挨拶をした。彼等がここに赴いた理由とは…。

「その生徒会長様がこんなチンケな部室までご苦労なこつた。」

ナオヤはあからさまに嫌味つたらしく、彼等に挨拶した。

「貴方、会長に失礼ですよ！」



四人の内、唯一の女子生徒が今のナオヤの発言をきつく注意した。しかしキョウジは左手を上げ、落ち着く様に諫めた。

「例の、オーガをSearchする件はどうなっただいマスカ？」

「その件でしたら、申し訳ありませんが未だ見つかっていません。何せ誰がオーガなのかの検討もついていませんので。」

ユウジは丁寧にオーガの行方は未だ不明だとキョウジ達に告げた。

「あれからTwo mouth 経つのに未だ見つからないノデ、そろそろユー達に依頼のStopをかける為、ここにComeしまシタ。」

キョウジはユウジ達が何時まで経ってもオーガが見つけれられない事に痺れを切らしてオーガの搜索を中止する為に救事部まで赴いたのだ。

「もう少しだけ待って頂けませんか。お願いします。」

「ふむ…、まあいいでショウ…。もう少しだけ搜索を任せマス。But…」

キョウジは頭を下げるユウジを見て、オーガの搜索を暫くは続ける事を許可した。が、

「見つけ次第必ずEraseしなさい…。オーガは我々同胞を殺した裏切り者…絶対に許しはしない…！」

キョウジは一瞬だけ顔にオルフェノクの紋章を浮かばせ、口調も変わり、拳を血が出る程握り激昂した。どうやらこれが彼の本性のようだ。

「…！Sorry…私とした事が…。とにかく、オーガの件は頼みます。タヨ。」

キョウジは落ち着きを取り戻し再度依頼をした後、彼等は部室を去った。

「あ…あの…。」

その場の不穏な空気の中で黒深子は声をかけようとしたが…

「んじゃさつさとオーガを探してますか！」

「うん。」

「そうね。行こ！クミちゃん！」

何故か今のやり取りが無いかの様に三人は部室を出てオーガの搜索をしようとした。

「会長…。よろしいのですか！？あの件を彼等に未だ任せるなんて…。」

「何…見つければそれでGood…見つからなければそれをReasonにKillすれば良いのデス…フフフ…」

キョウジも内心では救事部を快くおもっていないかったのだ。

「それよりも『あの方』をSearchする事に専念して下さい。」

「…はい！」

キョウジ達もオーガとは別の「何者か」を探しているようだ。

バーバー・フラッシュ

「そっか…黒深子ちゃんがオルフェノクになったのはそういう事があつたのか…。」

コウイチは首から下に布を被さり座りながら、黒深子がオルフェノクになった経緯と潜入を買って出た理由を闇影から聞いていた。

「ああ。あの子は自分なりに考えていたんだな。自分にしか出来ない事を…。…ん？」

闇影はコウイチの髪を切りながら黒深子の想いに感心していた。その時、ガラス越しに何かを目撃した。

「おい、このガキ！人にぶつかつつといて詫びの一つも言えねえのか！？」

「ぶつかった詫び料として二万で勘弁してやるよ。」

それは、少年は二人の大柄な男達に因縁をつけられ金品を奪われよ

うとしていた光景だ。

「……」

「何とか言えよ！オラツ！！」

少年が一言も喋らない事に頭に來た男は彼を殴ろうとしたが…

「おい！二人がかりで何だ！」

闇影は男の拳を掌で受け止め、少年を救った。

「あんだよ、おっさん！てめえにや関係ねえだろっ！」

「関係ある無しの問題じゃない！」

「んだとお…！」

二人の男は顔に紋章を浮かばせ、オルフェノクに変化した。

「…！オルフェノクか！」

オルフェノクを目の当たりにした闇影はディライトドライバーを装着した。

「変身！」

【KAMEN・RIDE…DELIGHT!】

闇影はディライトに変身し、オルフェノクに立ち向かった。

『はあっ!!せいつ!!』

『グッ!!』

デイルイトは一体のオルフェノクに打撃と蹴りを打ち込んでいくが…

『シャアッ!!』

『ぐあっ!!』

もう一体のオルフェノクに背後から攻撃を受け、その隙に反撃を受けてしまいふき飛んだ。

『くっ…!やつぱ二人はきついな…。だったら!』

闇影は起き上がりながら、黒いカードを装填した。

【SHADOW・RIDE…RYUGA!】

その瞬間、デイルイトの影は一体の戦士に変化した。コウイチが変身する仮面ライダーリュウガに…

『更に…これだ!』

【ATTACK・RIDE…STRIKE・VENT!】

デイルイトとSリュウガは黒いドラグクローを装備した。だが、デイルイトのそれは全身が真っ黒の物だった。

『はあああつつつつ！！！！！』

『『グギヤアアアアツツツ！！！！』』

デイライトのドラグクローの黒い炎が一体のオルフェノクを焼きつくし、身体が青白く燃えて灰化した。

『グツ…！！』

内一体はダメージを受けながらも何とか生きている様だ。

『まだ生きているのか…だったらこの場は見逃してやる。早くいけ。そして、これを教訓に二度とこんな事はするな。』

なんとデイライトは、生き残ったオルフェノクを殺さずに見逃すというのだ。

二度と恐喝をしない様オルフェノクに言ったその時…

「…君は…今何してたの？」

一人の少年が現われ、デイライトを睨み付けた。

『た！助けてくれ！こ、こいつに連れを殺されて俺も殺されそうなんだよ！』

オルフェノクは、突然現れた少年に自分がデイライトに殺されそうだと嘘を言いその場から逃げた。

「…という事は、君がデイライトなのか！」

少年は強い剣幕を立て、鞆からベルトを取りだし腰に装着した。そして、茶色を基本とした携帯電話を開きボタンを押した。

【000】【STANDING・BY…】

くぐもった警告音が鳴り響き、携帯を真上に翳しベルトに装着した。

「変身！」

【COMPLETE!】

そう叫んだ少年の身体にクリアブラウンのフォトンブラットが包まれ、強い光を放った。それがやんだ時、そこには全身黒を基調としたローブを纏っており、赤い「」の形をした複眼のライダー「仮面ライダーオーガ」の姿があった。

『君が…オーガ…!』

ディライトはこの世界のライダー、オーガの正体がまだ少年である事に驚愕した。

『だあああつつつつ!?!?!?!』

『くっ…!』

突然殴りかかってきたオーガの攻撃をディライトは腕を掴み阻止した。

『お前がこの世界を焼きつくそうとしているのは分かっているんだ!灰燼者ディライト!』

『またか…何の事なんだ!』

『黙れ!』

またも灰塵者と呼ばれ襲いかかられたディライトは困惑しつつもオーガは距離を取り、大剣「オーガストランザー」で斬りかけた。

『ちっ…!手を出すなよ!』

【ATTACK・RIDE…SWORD・VENT!】

Sリュウガに手を出さぬ様命令し、またも全身が黒いドラグセイバーを構えオーガと斬り結んだ。

『倒れる!倒れる!』

『くっ…!落ち着け!』

オーガは幾重も剣を打ち込み、ディライトも負けじとドラグセイバーで防ぐ。

だが、大剣と日本刀では重量の差でいずれ後者が不利になるのは時間の問題、そして…

『お!折れたああっ…!!』

予想通りドラグセイバーは重量に負け、刀身が折れてしまった。この機を逃すまいとオーガはディライトを斬ろうとするが…

「ちよ、ちよっと待って!相馬君!」



『……………！』

突然第三者の、オーガを止める声が聞こえた。同時に複数の若者達  
がこちらに走って向かって来た。内一人の声は…

『く、黒深子（し、白石さん）！？』

複数の若者の一人の声の正体は黒深子だった。そして二人は互いの  
返事に顔を向き合った。

バーバー・フラッシュ

「もう、相馬君！いくら叫び声が聞こえたからって一人で突っ走ら  
ないで！」

「そーだぜ！つーかおめえ足速すぎ！」

黒深子とナオヤはオーガことユウジの単独行動に注意をした。

「う、ごめん…。それと…煌さんも先程はすいませんでした！」

ユウジは単独行動と闇影への襲撃を素直に謝った。

「いや、気にしないでいいよ。それより君達はどつやってオーガギ  
アを？」

闇影はユウジ達がオーガギアを所有している理由を尋ねた。

「今から数ヶ月前…僕達救事部は何時もの様に夜の見廻りをしていました…。すると、謎のオーラの中から赤いフードを被った女の人が見れてこれを渡してこう言ったんです。」

「いずれお前達の前に灰塵者、デイライトが現れる…。奴は全ての世界を焼きつくそうとしている。その時は、全力で排除しろ！」

「謎のフードの女…か…。」

「俺と同じだ！俺もその人にリュウガのデッキを渡されてそう言われたんだ！」

「コウイチもか！？」

先の「リュウガの世界」でコウイチとリュウガに襲われた理由が判明した。どうやらその赤いフードの女が関係している様だ。

「一体…灰塵者って何の事なんだ…？何故排除する必要があるんだ…？」

闇影は自身が何故灰塵者と呼ばれているのかを自問していた。

「それより、闇影…。」

「?どうしたんだ?」

「何時まで俺をこの髪型にしとくつもりだっ!」

「…あっ!」

闇影は未だ髪を散髪中の為、コウイチのもみあげが片方だけ短くなっているのに今頃気づいた。それを見て一同は笑い出した。

「ぶっはははは!な、なんだよ…それ!」

「コ、コウイチ…の髪が…お、面白い!」

「わ、笑ったら悪いよ、クミちゃ…あははは!」

「笑うなあああっつっつ!」

ナオヤ、黒深子、ユカに大笑いされたコウイチは涙目で叫んだ。だが、これがきつかけで闇影の心が和らいだ。

「ごめんごめん、直ぐに整えるからな。」

闇影は謝りながらコウイチを席に座らせた。

「…そう言えば一つ聞きたいんだけど…。」

闇影は話題を切り替えユウジに質問した。

「何ですか?」

「君達はオーガの力でオルフェノクを倒す以外に誰を探しているんだ？」

黒深子から聞いた話では、ユウジ達は人間に危害を及ぼすオルフェノクを倒す以外に「何者」かを探している様だ。「オーガを探す」という名目で…。

「そ、それは…」

ユウジが話すのを躊躇っていたその時…

「…！な！何だ！」

突然、理髪店に大きな光弾が直撃し爆発した。その為、中の物損が激しくなった。

「見つめましたよ。オーガ…いや、Mr・相馬！」

光弾を撃つたのはキョウジだった。傍らには他のメンバーと先程の男も一緒にいた。どうやらあの男がオーガの正体を密告した様だ。

「残念ですヨ…Mr・相馬。Youは一番信頼していたというノニ…。」

キョウジはそんな言葉とは裏腹に物凄い顔つきでユウジを睨んだ。

「私の期待を裏切った報い…」

オルフェノクの紋章を浮かばせ…

『…死を持って償って貰おうかあ…!!』

薔薇をイメージしたオルフェノク「ローズオルフェノク」へ変化した。それに伴って他の者もオルフェノクに変化した。

「…全員集合か…。皆！行くぞ！」

闇影が全員に戦う様号令をかけたその時…、

「な！何だ！？」

突然謎のオーラの壁が現れ、闇影はその中に飲み込まれる様に包み、その場から姿を消した。

「せ、先生が消えた…。」

「何処に行ったんだ、あいつ…。」

黒深子とコウイチは突然消えた闇影の安否を気にするが…、

「余所見して場合じゃねえぞ…！」

「今はあの人達を倒す事に専念して…」

「それから煌さんを探しましょう…！」

【OOO】STANDING・BY…【

「変身…！」

ナオヤは蛇を思わせる異形、スネークオルフェノクに、ユカは鶴の異形、クレインオルフェノクに、そしてユウジはオーガに変身した。

「俺も戦うぞ！変身！」

「（先生…。…ごめんなさい！後で探すから！）」

コウイチもリュウガへ変身し、黒深子は心の中で闇影に謝りながらスワンオルフェノクに変化した。

『（…そう言えば、さっきの子何処に行ったのかしら？）』

スワン〇は先程闇影が助けた少年の行方を気にした。

### 謎の場所

「…ここは、何処なんだ？コウイチ！黒深子！相馬君！」

謎のオーラによって周囲が複数の巨大なビルが建った場所に移動させられた闇影は、コウイチ達の名を叫んだ。だが、その返事が返る事はなかった。

「ビル街の筈なのに携帯も圏外。普通の場所じゃないな…。」

確かに周りにビルがあるのに携帯が圏外になるのはおかしい。とな

ると、ここは何らかの力で創られた空間なのかもしれない。等と思  
考していたその時…

『バーンッ　！！』

突然、紫色の光弾が闇影を襲った。だが、間一髪の所を辛うじて回  
避した。

「誰だ！…ラ、ライダーだと！？」

『お前が持つてるベルト、僕が貰っても良いよね？答えは聞かない  
けど！』

闇影を襲ったのは紫色の龍の仮面を着けた、宝珠を掴んでる様な龍  
の爪のアーマーを纏った子供っぽい口調が特徴の、時を守るライダ  
ー「仮面ライダー電王　ガンフォーム」だった。

「君…何故俺のベルトが必要なんだ！？誰に言われたんだ！？」

『赤いフードの人が、お前のベルト持って帰ったら時の列車の車掌  
にしてくれるんだって！良いよね』

「赤いフード！？」

闇影は電王GFの赤いフードという単語に強く反応した。つまり彼  
は、例の赤いフードの女の刺客なのだ。

「粗方解ったよ…。だが…！」

闇影はディライトドライバーを腰に巻き…

「今はやらなきゃいけない事があるんだ！変身！」

【KAMEN - RIDER DELIGHT!】

カードを装填し、デイルイトへ変身した。

『不本意だが、君を倒して戻らせて貰う！』

『倒せたら話だけどね！』

デイルイトはライトブツカーをソードモードにし、電王GFに斬りかかった。だが、彼は軽快なステップを踏み、攻撃を受け流した。元々電王の基本フォームの中で彼は瞬発力が速く、攻撃が回避され安いのだ。反面、攻撃に打たれ弱いのが弱点だが。

『くっ…！なかなか当たらない…！』

『そんなんじゃないだつて！ふっ！それっ！』

『ぐっ…！ぐわっ…！』

電王GFはその軽やかな動きと共にデイルイトに素早い打撃を繰り出した。攻撃力も相当強い様だ。

『まだまだっ…！』

更に打撃でデイルイトとの距離がかなり離れたら、銃を乱射した。



『があああああつつつつ！！！！！』

その攻撃でディライトはビルの壁まで押し出された。

一方、ユウジ達は…

『くっ…！』

『どうしまシタ？この程度なノカ？』

『何とか二人倒せたのはいいが…コイツは別物だな…。』

あれから、二人のオルフェノクを倒したのだが、ローズ○はその中でもかなり上位の力の持ち主だ。オーガやリュウガ、オルフェノク三人の力を持ってしても倒す事は敵わなかった。

『ま…まだだあああつつつつ！！！！』

『だ…駄目だ！ユウジ！そんな真正面から言っても…！』

リュウガの忠告を無視し、オーガストランザーでローズ○に斬りかかるオーガだが…

『何！？』

その瞬間、ローズ○は薔薇の花弁となり姿を消した。

『何処だ…何処にいる!』

『ここにいますヨ。』

『な!ぐあああつつつつ!?!?!』

ローズOはオーガの背後を取り、後ろに強く蹴り上げ光弾を撃ち出した。その弾みでオーガの変身は解除され、ベルトはローズOの足下まで吹き飛んだ。

『オーガギア…確かに返して貰いまシタヨ。』

そして、そのまま拾い上げた。

『やりましたね!会長!』

「エエ…。さて、後は彼等をEraseしたらあの方をSearchしましょう。我々の…『オルフェノクの王』を!」

キョウジ達の真の目的は「オルフェノクの王」を探す事だったのだ。

『オルフェノクの…王…?』

「Yes!我々オルフェノクは一度Deadし蘇り、強大なPowerを手にした。But、そのPowerに肉体が着いていけずやがては滅んでしまします…」

『……………!』

スワンOはキョウジの言葉に驚愕した。オルフェノクはその力に人

間の身体が着いていけず、最終的には自身が滅んでしまうのだ。

「だが、あの方は… Kingはその崩壊の危機から我々を Safeする Powerを持っていマス！そして、その Kingはまもなく目覚メル！それを守る為に作られたのがこの帝王のベルト、オーガギア…そして…！」

『……………か。』

『？相馬君？』

ユウジは下を向きながら何かを呟いていた。

『王の復活なんて…絶対に…させるかああああつつつつ…！！！！』

ユウジは強い咆哮をあげ、顔にオルフェノクの様を浮かばせ、チエスの駒「騎士」をイメージしたオルフェノク「ホースオルフェノク」へと変貌した。

『ウオオオオオツツツ！！！！！！』

そして、そのままキョウジに向かって走り出した。彼が王の復活を其処まで阻止する理由は…？次回、仮面ライダーデイライト！

「僕達は、一度あのオルフェノクに殺されたんだ…。」

一度、命を奪われ、夢をも失ったユウジ達…。

「帝王は何もオーガだけではナイ…。」

もう一つの帝王、サイガの猛攻に苦戦するオーガ…。

「デイルイト…貴様のせいで目覚めぬ筈の王が目覚める…！」

そして、ついに目覚めるオルフェノクの王…。

「人は遅かれ早かれ何れ死ぬ…。だからこそ皆精一杯今を生きてるんだ！」

次回、「限りある命、限りない想い」

全ての闇を、光へ導け！

## 第5導 裏切の帝王・反逆のオーガ（後書き）

如何でしたか？オーガ編。

登場人物の名前は「オルフェノクのモチーフとなった動物名」＋「555の登場人物の下の名前」にしました！

我ながらネーミングセンスは良いと思っています！（はい、自慢ですすいませんorz）

今回デライトには刺客として「リュウタ」をぶつけました！性格的には初期ですね（ただし、愛理さん一筋になる寸前）。

今後彼には様々な刺客とも戦って貰いますのでその辺も注目です！

次回更新までまた会いましょう！（会いたくねえよ）

以上、虎居合瑠でした！

第6導 限りある命、限らない想い（前書き）

ユウジ「皆さん。大変長くなってしまつて申し訳ありません！」

ナオヤ「オーガ編後編、やっと更新したぜ！」

ユカ「お馬鹿な作者のせいでまた文が長くなつちやつたけど、そこはごめんなさい。」

ユウジ「それでは皆さん……」

三人「どうぞご覧下さい……！」

## 第6導 限りある命、限りない想い

『ウオオオオツツツツ！！！！！！』

ユウジ「ホースオルフェノクは魔剣を携えて、キョウジに向かって突進した。

「ふっ！！」

だが、それは片手で軽々と受け止められてしまった。そしてもう片方の手から光弾を撃った。

『グアアアアアツツツ！！！！！！』

その衝撃でホースOは壁まで打ち出された。だが…

『…王は…復活させない！！グアアアアアツツツ！！！！！！』

またも咆哮をあげたホースOは足を四本にし、ケンタウロス形態となりキョウジに再び突撃した。

「ふっ…この程度のAttack等…何っ！グガッ！！」

キョウジはホースOを甘く見過ぎた為、彼の急スピードな突進を諸に受けて吹き飛んだ。そして、その弾みで持っていたオーガギアを落としてしまったのだ。

『…オーガギア…！！！！』





リュウガ、スネークO、クレインOはスワンOの正拳突きで気を失いホースOからユウジの姿に戻った光景に大きくツツコんだ。

「これで静かになった。さ、ウチに運ぼ？」

『『『は、はい！了解しました！！！！』』』』

三人は黒深子の笑顔に怯え、敬礼してユウジを運んだ。

世界の光導者、デイルイト！9つの影の世界を巡り、その瞳は、何を照らす？一方、デイルイトは、

『うつ…！くつ…！』

壁に打ち付けられ、ダメージが大きくなかなか動く事が出来ない。

【FULL・CHERGE!】

電王GFは止めを刺す為、ベルトにパスをセタッチした。そして、エネルギーが集中したデンガツシャーの銃口をデイルイトに向けた。

『最後いくよ、いい?…答えは聞いてない。』

『く、くそっ!』

【ATTACK・RIDE…ILLUSION・SHADOW!】

デイルイトは一枚のカードを装填する。それに気づかない電王GFは決め台詞を言いながら自身の必殺技「ワイルドショット」を放ち直撃させた。しかし、爆風が晴れたその場にデイルイトはいなかった。

『あれ？いない。消えたのかな？』

電王GFはあのまま消えたのだと推測していた瞬間：

『後ろだ！はあっ！』

『ぐあああつつつつ！！』

なんと電王GFの背後からデイルイトが攻撃した。

『な、何で！？何で何で！？』

予想外の事態に狼狽する電王GF。そんな彼に対してデイルイトは種明かしに一枚のカードを見せた。

『この「イリュージョンシャドウ」のカードを使って自分の影分身を作って身代わりにしたのさ。ちよつと悪い事したけどね。』

デイルイトは攻撃が来る寸前に力を振り絞り今のカードを使い、身代わりの影分身を作り何とか攻撃を回避したのだ。

『形勢逆転だな。君の負けだ！』

デイルイトはライトブッカーをガンモードに変形させ、電王GFに向けた。

『ど…どうしよ…！パ、パスは…！？』

電王GFはパスを探すが、先程の攻撃の際投げ捨ててしまった為何処にあるのか分からなかった。

「電王、もういい…。此処は下がれ…。」

突如謎のオーロラから赤いフードの女が現われ、電王GFに退避するよう命じた。それと同時に彼はそのオーロラへ吸い込まれる様に包みこまれた。

『いやだいやだ！！僕があいつをやっつけるんだあつ！！』

電王GFは駄々をこねながらオーロラの中へ消えていった。

『お前は…誰なんだ…！！』

デイルイトはダメージを受けた体を抑えながらフードの女に尋ねた。

「私の名は紅蓮<sup>グレン</sup>…。影を監視する者だ…。」

『紅蓮…。影を監視…？』

謎の女、紅蓮の「影を監視する者」という言葉にデイルイトは眉をひそめた。

「私は、影の世界に何らかの影響が及ばないかを監視、排除する使命…。」

『俺はその排除の対象になっているのか…!』

「デイルイト…、貴様が現れた事でこの世界に目覚めぬ筈の王が目覚める…!王を越えし王…オルフェノクの『帝王』が…!」

『…!オルフェノクの…帝王…!?!』

紅蓮は「オーガの世界」に目覚めぬ筈の「オルフェノクの帝王」が目覚めると言った。

「そして貴様は、その帝王に滅ぼされる運命を辿るのだ…!」

そう言い切った紅蓮は謎のオーロラの中へと消えていった。

『ま、待てっ…!』

デイルイトは紅蓮を呼び止めようとするが、自身もオーロラに包まれた。

「…!ここは…戻って来たのか…?!…黒深子の家に戻ろう。ん?君は…。」

いつの間にか変身が解け元の世界に戻った闇影は、一先ず黒深子達と合流する事にした時、ある人物と出会った。

一方、白石家では…

「ふう…。一先ずここへ寝かせましょう。」

家まで戻った黒深子達は気を失ったユウジをソファーに寝かせた。

「それにしても、相馬君はどうして彼処まで王を倒す事に拘っていたのかしら？」

黒深子は、あの温厚なユウジが王を倒す事に強い執着心を持っている事に疑問を感じた。

「つーかおめえ、あまり無茶す」「何か言った？」「すみません。」

ナオヤは先程の黒深子の行動を諫めたが、拳を握った彼女を見て即座に謝った。

「それよりこれからどうするの？オーガの正体がバレちゃったから学園には迂闊に近づけないわよ？」

確かに、ユウジがオーガである事がキョウジに知られた今、迂闊に流星学園に行くのは無謀だ。

「…今は下手に彷徨くより、暫く私の家にいた方がいいよ。」

黒深子はユウジ達に自分の家に匿う事を提案した。

「…いいの？迷惑かけちゃって。」

「私達友達でしょ？友達が困っているのを助けちゃ駄目？ユカちゃ

ん。」

ユカは黒深子に迷惑をかけてしまう事を案じるが、彼女の優しい言葉にその懸念は消えた。

「クミちゃん…ありがとう！」

「んじゃ！お言葉に甘えるぜ！」

ユカとナオヤは黒深子に感謝し、この家に匿わせてもらう事にした。

「ただいま。」

そこへ闇影の声が玄関から聞こえた。それを聞いた黒深子達は玄関へ向かった。

「ただいまって…先生！大丈夫だったの！？」

黒深子は闇影の能天気な口調に呆れつつ心配をした。

「ああ、何とかね。」

「でも…無事で良かった…。で、何でその子も？」

黒深子は闇影の無事な姿に安心した。しかし、一緒に連れてくる先程因縁をつけられていた少年に注目した。

「ああ。帰る途中で見かけて、何か一人で突っ立ってたんだ。何を聞いても全然答えないから、とりあえず此処で預かろうと思ってな。」

「

「また勝手なお節介を…何で警察に行かなかったの？」

謎の少年をこの家で預かろうと言う闇影に額に手を当てる黒深子は尤もな疑問を問うが…

「そうしようとしたら手を引っ張って首を振るんだ。何か嫌な事があるのかと思って…」

「この結果って訳ね…。」

「そゆ事。」

「はあ…もういいわよ。三人も四人も変わらないし…。」

「ありがとう！よかったな、テルオ君！」

「何でその子の名前知ってるんだ？」

コウイチは何故少年の名前を知っているのか闇影に尋ねた。

「ん？ほら、付けてる名札に『流星小学四年生 華方はながたテルオ』って書いてるだろ？」

「……あ、さいですか…。」

四人は普通過ぎる闇影の返答に呆れながら納得した。

「あら、今日は沢山料理をつくらなきゃね。」

こうして四人は黒深子の家で厄介になった。(その後ユウジは目覚めた)その日の夕食はとても賑やかであり、有意義な時間だった。夕食後は皆でゲームをしたり談笑したりと申し分がないくらい楽しんだ。

女性陣が風呂に上がった時、何故かコウイチとナオヤが横たわっていたのを除くと…。そんな日が数日続いた。

## 翌朝

「あれ？相馬君とテルオ君は？」

皆が目覚めた時、ユウジとテルオがいなくなっていた。

「おいおい！やべえんじゃねえか！？」

「相馬君は大丈夫かもしれないけど、テルオ君だけだと危険だわ！」

「落ち着いて！二人一緒かもしれないだろ！？」

二人がいなくなった事で皆は騒ぎだした。

「とにかく二人を探そうよ！」

「そうだな。」

二人を探そうと決めた時…



【朝のニュースです。オルフェノクの硬化した遺体が発見される事件が再び発生しました。最初の二丁目で起きた事件から今回で十件目です。警察の調査によると…】

何故かつけっ放しになっているテレビからのニュースが闇影の耳に流れた。

「（オルフェノクの帝王…：固まった遺体…二丁目…）！！」

「先生！どうしたの！？」

「急がないとまずい事になる！！」

闇影は突然その場を駆け出して、家を出た。

「ちょ、ちよっと待ってよ！先生！」

とある森

オーガに変身したユウジがテルオにオーガストランザーを振り上げようとした時…

「止める！！」

闇影と黒深子はその場に現れた為、オーガは寸止めをして変身を

解いた。

「二人共、何で此処に？」

「君こそ何しようとしてたんだ！！」

闇影はユウジの質問には答えず、逆に彼の行動を指摘した。

「僕は…を…」

「??？」

「僕は王を…オルフェノクの王を殺そうとしているだけだ！！」

「?!?!」

なんとユウジは、テルオの正体がオルフェノクの王だと言うのだ。

「何言ってるのよ！！テルオ君が王だなんて…そんな事…！」

「いや。間違いないよ。」

「先生!？」

「最初のオルフェノクの固まった遺体が発見されたあの二丁目は…俺がテルオ君を見かけた場所だったんだ…。」

「だからって…」

「それだけじゃない！その子が通っていた学校にも聞いたんだ！そ

したら彼は植物状態で入院していつと出席していなかったんだ！そしてその病院も彼以外皆灰になっていたんだ…。」

闇影は密かにテルオの近辺調査をし、その結果と先程のニュースを照らし合わせた結果、彼が王だと判断したのだ。

「そんな…。」

「分かっただろ？ 奴が僕の… 『僕達』 の人生を…。」

「『僕達』？ …！！テルオ君がいない！！！」

ユウジの言葉に疑問を持っていた時、いつの間にかテルオの姿が消えていた。

「奴め… 何処に!?!」

「… 王は覚醒の為にオルフェノクを多く喰らう必要がある…。そしてその餌場に相応しいのが…。」

「…！！流星学園!?!」

テルオは王の覚醒の為に流星学園に向かったのだと闇影は推測した。

「コウイチ達も其処で彼を探しに行っている…。直ぐに行こう!?!」

「…!! あいつは、僕が… 刺し違えてでも…!!」

「相馬君… 君は其処にいるんだ…。」

流星学園に向かおうとするユウジに闇影はこの場で待機する様に言った。

「何故ですか!?!」

「自分が今何を言ったのか全く解っていないからだ!?!」

「!?!?!?!何を言って!?!?!」

納得のいかないユウジは闇影に近づこうとした時…

「先生。私が説得するわ。」

黒深子は闇影を庇う様に前を遮った。そして、ユウジを説得すると言っただ。

「黒深子…しかし!」

「相馬君の気持ちは私がよく分かるの…だから先に行つて。」

「…分かった。また君に任せるよ。先に行く!?!」

闇影はこの場を黒深子に託し、流星学園へと向かった。

「…さて、貴方に聞きたい事があるの。貴方がそこまで王を倒そうとする理由は何かしら?」

「…。」

「『僕達』の人生って事は、蛇塚君とユカちゃんも…って事?」

「…!!」

ユウジは一向に口を開かなかったが、今の言葉に反応し口を開き始めた。

「…それだけじゃない…。」

「何が？」

「僕は…人間としての命だけじゃなく、大事な物迄奪われたんだ  
!」

「!」

## 流星学園

「ん？あれって…」

学園迄探しに行ったコウイチ達はテルオが園内に入るのを見かけた。

「テルオ君!!無事で良かった…」

テルオの下へ彼等が駆け寄ろうとしたその時…

「…!!」

「うぐっ!!」

「!?!?!?!え?」

テルオの影から飛蝗モデルと言うより、「守護のベルト」「ファイズ・カイザ・デルタギアの主本モデルであるオルフェノクの王」「アークオルフェノク」が現れ、掌からレーザーの様な物を生徒達に放った。その瞬間…

「グアアアアアツツツ!!?!?!」

「ギアアアアアツツツ!!?!?!」

生徒達は青白い炎に包まれ、その身体は化石の様に固まってしまった。そしてオルフェノクは固まった生徒達を喰らった。

「うっ…?!?!」

あまりの惨たらしい光景に目を反らすコウイチ達。

「っ…何なんだよ…これ…」

「最近ニユースでやってるオルフェノクの硬化事件に似ているわ…。」

「でもなんでテルオ君が…」

「そのBoyこそ、我々のKingなのデース!!」

「その声は…!!」

コウイチ達の前にキョウジと副会長の女生徒が現れた。

「っーかあの坊主が王って…どういう事だよ!!」

「いや、正確にはそのBoyはKingの依り代にしか過ぎません…。」

「…!!どういう事だ!!」

「Kingは九死に一生したChildの中に宿り、そのChildの意識やSoulを喰い尽くす…」

「何…!?!」

「そして!自身をAwakeするべくオルフェノクを喰らう為のWalkするDollになるDestinyなデース!!」

キョウジはテルオの現状を高らかに説明した。

「てめえ…そんなくだんねえ事の為にテルオを!!」

「お前は絶対に…!!」

「許さない…!!」

テルオを「人形」扱いするキョウジの発言に怒りを露にするコウイチ達。ナオヤとユカはスネークオルフェノクとクレインオルフェノクに変化し、コウイチはVバックルを召喚し…

「変身！」

カードデッキをセットしリュウガに変身した。

「ふ…。邪魔はさせませんヨ。」

キョウジは女生徒からアタッシュケースを受け取り、そこからベルトを取り出し腰に巻きつけ「ある物」も取り出した。

『お前…まさかそれは…!!』

キョウジが取り出した物は、全身が白色の携帯電話だった。無論只の携帯ではない…。

「『帝王』のベルトは何もオーガだけでは無いのデスヨ…。お見せしましヨウ！もう一つの帝王…」

【315】【STANDING・BY…】

「『天の帝王』の名を持つ…サイガのPowerを！！Change e!..!」

キョウジは白い携帯「サイガギア」で入力コードを押し、携帯を閉じてベルトにセットした。

【COMPRETE!】

その瞬間、キョウジの身体に青白いフォトンブラットが包まれ、強烈な光を放つ。光がやんだ時、全身を白を基調としたスーツと「」の形をした複眼が特徴の「仮面ライダーサイガ」へと変身した。



『It's show time!!』

サイガはそう言いながら親指だけ出した右手を首の左側まで持っていき右側にずらす、所謂「首斬り」のジエスチャーをした。

『あれが…もう一つの帝王…!!』

『こいつは気を引き締めねえとな!!』

『そっね…行くわよ!!』

【SWORD - VENT】

リュウガはドラグセイバーを召喚し、三人はサイガに向かって突撃した。しかし、ドラグセイバーは片手で受け止められ、スネークのパンチももう一方の片手で彼諸共弾かれ、クレインOの手刀も首を反らして回避し、サイガギアをガンモードに変形しリュウガとクレインOに銃撃した。

【BURST - MODE】

『ぐあああああつつつつ!!!!!!』

『きゃあああああつつつつ!!!!!!』

『無駄デスヨ。』

更にサイガは、背中に装備された専用アタッチメント「フライングアタッカー」で空中に浮かんだ。

『と、飛んだ!?!』

『おいおい!?!つーかあんな反則だろ!?!』

スネークの反論もむなしく、サイガはフライングアタッカーから光子バルカンの雨をリュウガ達に浴びせた。

『ぐああああつつつつ!?!?!?!』

『きゃああああつつつつ!?!?!?!』

三人はサイガの空中からの乱射攻撃を諸に受け、地に伏せてしまった。

『これで始末しまシヨウ…。』

【EXCEED・CHARGE!】

サイガはギアを開き、「ENTER」のボタンを押した。サイガは右腕にフォトンエネルギーを集中させ、空中からの急降下パンチをする必殺技「スカイインパクト」で止めを刺そうとした。その時…

『これでFinis…。』させるかつ!?!』グギヤアアアツツツツ  
!?!?!』

上空から専用マシン「マシンデライター」に乗ったデライトが、サイガを轢き飛ばした。そして、そのまま激しく着地した。

『皆!?!遅れてすまない!?!大丈夫か!?!』

『な…何とかな…。』

『つーか無茶すんなよな…。』

『助かりました…。』

リュウガ達はディライトの姿を見て身体を支えながら立ち上がり、無事だと言った。

『き…貴様アアツツ！！よくも私に恥をつ…！！』

サイガは轢かれた事に激しく憤りながらも立ち上がった。

『あれが…王…。』

ディライトは身体を光らせ力を溜めているアークOの姿を見て、このままでは覚醒するのは時間の問題だと分析した。

『完全に復活する前に倒すぞ…！！』

【FINAL - SHADOW - RIDE : FA・FA・FA・FA・FA  
IZ!】

ディライトは完全覚醒しようとするアークOを倒すべく、自身の影をファイズ・ブラスタースフォームにFSRさせた。

【FINAL - ATTACK - RIDE : FA・FA・FA・FA・FA  
IZ!】

デイルイトとSファイズBFはライトブッカーとファイズブラスターを構え、必殺技「フォトンバスター」を射出しようとするが…

「テ、テルオ君!？」

なんとテルオがアークOの前に立ち塞がったのだ。

「くそっ…!!これじゃ攻撃でき…うわあっっ!!…!」

デイルイトは躊躇った隙をつかれ、女生徒が変化したロボスターオルフェノクの不意打ちを受けた。

「王の邪魔はさせない…!」

「Good jobデース!!あとどれくらいでAwakeしますか?」

「あと一人分のオルフェノクを喰らえば王は復活します。」

アークOの復活にあと一体のオルフェノクを文字通り「生け贄」が必要だと言ったロボスターO。それを聞いたサイガは…

「I see…ならば…!」

フライングアタッカーの操縦桿を引き抜いた「トンファーエッジモード」でロボスターに攻撃した。

「うあっ!!な、何をするんですか!?会ちよ…!!!」

ロボスターOは突然サイガから攻撃を受けて困惑したが、アークO

の面前迄倒され光線で貫かれその身が青白く燃えた時、一瞬で理解した…。

自身が「生け贄」である事を…

『そんな！！何故ですか！？会長！！』

『喜びなサイ…。Youの犠牲により、Kingを蘇る…！』

『そんな…そんな！！私は！！会長…の事…ガッ…！』

ロブスターの最期はサイガの裏切りを受け、王の「餌」となり喰われる無惨な最期だった…。

『お前…仲間を犠牲にして何とも思わないのか！？』

『おお…ついに…ついにKingが！Kingが！Kingが…！』

デイルイトの非難にも耳を貸さずに、サイガは更に輝くアークOを見て狂った様に叫んでいた。黒いオーラを纏いながら…。

『…ウウウウウツツツ…！…！』

するとアークOの身体が徐々に点滅する様に光りだし、その身体は変化しつつある。同時にテルオの肉体が崩れ始めてきた。そして…

『ウオオオオツツツ…！！…！！』

『…！！…！！…！！…！！…！！』

華方テルオ「だった」存在は崩壊し、アーク〇は違う「何か」に変化…いや、進化した。

『フフフ…ようやく復活出来ましたね。』

見た目とは裏腹に少年の様な声で話すその「存在」は、身体がオーガで頭がサイガのそれと酷似した姿をしていた。これこそ「王を越えし王」…帝王「カイザーオルフェノク」である。

『あれが…オルフェノクの帝王…。』

『何て威圧感なんだ…。』

デイルライト達はカイザー〇の禍々しいオーラに戦慄していた。

『フハハハ…！！目覚メタ！！我らの帝王がついに復活したノダ！』

サイガは帝王の誕生に歓喜しながら、彼の下へと近づいた。

『帝王よ…。新たなお姿でのご復活おめでとございます。』

『薔薇ノ宮キョウジ…。貴方のこれまでの働きには感謝しています。此方へ。』

『…！…では…！…！』

カイザー〇は右手を前にかざし、サイガにエネルギーを与えた。サイガは元のローズ〇の姿に戻り、トゲの付いた鳶が鎧の様に全身を覆ったローズオルフェノク激情態へと変貌した。

『フハハハ…！！力が溢レル…。私は不死の存在とナッタ！！』

ローズは不死となった自身に完全に酔いしれていた。そして自身の鳶で細剣を作り出し、デイトライト達に襲いかかった。

とある森

ユウジは自分が何故王を倒そうとするのかを話した。ある日、王が現われ両親と幼馴染みの木下チエと共に殺害され、自身も王の手によりオルフェノクにされたのだ。ナオヤもギターリスト志望だったのだが、王によって腕を負傷され二度とギターが弾けなくなつた上に殺害、更にオルフェノクにされ、ユカも恋人の菊川ケイタロウと共に殺され、自身もオルフェノクにされたのだと言う。

「その復讐としてなの？」

「いいや…。僕は僕自身も許せないんだ！こんな化物としてのうとうと生き延びている自分が！」

ユウジは自身がオルフェノクである事を許せないでいた。

「だから、王を倒した後は…死んでも…！！」

「……………！！」

王を倒した後に死のうと考えるユウジに黒深子は平手打ちをした。

「死ぬなんて…簡単に言わないで!!」

「……。」

「死ぬ為だけに生きるなんて…私は絶対に許さない!!」

「…!!君に何が解るんだ!!」

「解るよ!!私も…そうだったから…。」

黒深子はこれ迄自分の身に起きた事を話した。自身も死を望んでいた事、闇影との出会いで変わった事を…。

「私は自分が何の為に生き返ったのか見つける旅をしているの…。  
相馬君にだってある筈よ。」

「僕が…何の為に生き返ったのか…。僕は…僕は…。」

### 流星学園

『『ぐわああっ!!』』

カイザーOとローズOの圧倒的な強さに倒されるディライト達。ナオヤとユカ、リュウガは気絶し、ディライトも変身解除される程追い込まれた。

「くっ…。何て強さなんだ…!!」



闇影は肩を押さえながら膝を付いて彼等の強さに恐怖していた。

『残るは貴方だけです。』

カイザーは右腕を剣状に変化させ、闇影に近づき振り上げようとした。

「させないわ!!」

『グアッ!!』

黒深子が乗ったホースO（ケンタウロス態）の飛び蹴りがカイザーOに炸裂した。

「先生!!大丈夫!？」

「黒深子…。ああ、何とかね。それより…。」

闇影は立ち上がりながらホースOの方に視線を向けた。

『…まだ答えが見つからないけど…今まででは駄目だと言っ事は解りました!』

「そっか…。」

『おや?君はあの時の…また死にに来たのですか?』

『何故僕達の大切な人達を殺し、僕達をオルフェノクにした!!』

ホース〇は声を荒げてカイザー〇に尋ねた。すると…

『誰でも良かったんですよ。』

『何！？』

『私は人間を確実にオルフェノクにする能力を持っています。しかし、三回使うと一時的に睡眠状態に陥ってしまう…：：～』

『人が「絶望」する姿を見たいんですよ！！大切な物を全て失い、自身は異形の存在として生き、悩み！！苦しむ様を！！』

カイザー〇は両腕を広げ高らかに叫んだ。人を絶望の淵まで落とし、苦しめる事を楽しんでいるのだ。

『それだけの為に…：：：：：：：：：：：：：：～』  
『両親を！！チエを！！ウオオオオオツツツ！！！！！！』

ホース〇は強く咆哮し、全身に鎧の様な鱗を纏った「激情態」へと変貌しカイザーに襲いかかった。

『無駄デスヨ！！はあっ！！』

『グアッ！！』

ローズ〇が掌から光弾を放ち、ホース〇を返り討ちにされ、その衝撃でユウジの姿に戻ってしまった。

『このまま死ぬのは嫌でしょう？私の力で不死になりませんか？そ

「うする事で死の運命から逃れられるんですから。」

倒れたユウジを見下す様にカイザーは彼に不死の力を得る事を勧めた。

「…人は、遅かれ早かれ何れ死ぬ。それはライダーも…オルフェノクも同じだ。だからこそ皆精一杯生きようとしているんだ！」

『!?!』

「限りある時間の中で限らない夢や想いを抱いて生きるからこそ、命はとても尊い物なんだ！」

「限りがあるからこそ…命は尊い…。」

「相馬君。君はどう生きたいんだ？」

闇影はユウジにどう生きたいのかを尋ねた。彼の答えは…

「僕は…オルフェノクとして…人間として生きる…！」

ユウジは立ち上がり強く宣言した。その答えに闇影は微笑んだ。そして手元の三枚のカードが輝きを取り戻した。

『貴方…一体何者なんですか!?!』

「お節介教師な仮面ライダーだ!!宜しく!!」

闇影はデイライトドライバーを、ユウジはオーガベルトを装着そしてギアのボタンを操作した。

【000】STANDING・BY…】

「変身…!!」

【KAMEN・RIDE…DELIGHT!】

【COMPLETE!】

闇影はデイルイトへ、ユウジはオーガへと変身した。

『さて、輝く道へ導きますか…!!』

『ならば此方は死の道へ導きましょう…!!』

デイルイトはライトブッカーを、オーガはオーガストランザーを構えてカイザーOとローズOに斬りかかった。

『はあっ!せいつ!そりゃっ…!!』

『くっ!!あの瀕死の身体の何処にそんな力が…グアアッ…!!』

『帝王…!!おのれ、貴様ラ…ウアアッ…!!』

カイザーOとローズOは二人の斬撃を防いでいたが、予想以上の底力に押されダメージを受けてしまった。

『おのれえ…こうなったら…!!』

カイザーOは全身から触手の様な物を校舎迄伸ばし生徒達を喰らっ

てエネルギーを供給しようとした。

『頂きますよ!! 貴方達の命を…何!?!』

突然触手が上空に浮くサイガの光子バルカンによって全て灰となった。

『先生!! こっちは任せて!!』

サイガの正体はなんと黒深子だった。

『黒深子!! いつの間に!?!』

『今校舎にいる人達はコウイチ達が安全な場所に誘導しているわ!!』

『く、くっそおおおつつつ!!!!』

『グツジョブ、黒深子! さて、こっちも…』

サイガにサムズアップしたディライトは新しいカードを装填した。

【FINAL・FORM・RIDE…O・O・O・ORGAN!】

『力を抜いて。』

『えっ? うわああっ!!』

ディライトがオーガの背中に手を当てた瞬間、オーガは自身の武器「オーガストランザー」を模した巨大な大剣「ストランザーオーガ」に

変形した。

『でえりやあつつー!!』

『ガアツ!!』

デイルイトの一振りでカイザーOとローズOは強いダメージを受けた。

『ウオオオオツツツ!!!!』

カイザーOとローズOは片手に全エネルギーを込めた巨大光線をデイルイトに放ち、デイルイトもストランザーオーガを正面に向け切っ先から巨大な光の刃のレーザーを放った。

『これで決めるぞ!!』

【FINAL - ATTACK - RIDE : O・O・O・ORGAN!】

『撃ち斬れえつつつ!!!!』

『ギヤアアアアツツツ!!!!』

切っ先のレーザーは更に大きく伸び、横一文字に斬り裂くFAR「デイルイトバニツシュ」がカイザーOとローズOを斬り裂き、「の文字を残し青白く燃え灰化した。

「何だよ。俺達に話って。」

「僕は、オルフェノクの崩壊を防ぐという目標…夢が見つかったんだ。君達にそれを手伝って欲しいんだ!!…駄目かな？」

二人は暫く沈黙をしていたが…

「当たり前だ…んなモン幾らでも手伝ってやるよ!!」

「部長命令だしね」

「二人共…ありがとう…!!」

三人が楽しく話しているのを嬉しそうに見守る闇影達。彼はその場からひっそり去っていく。

「夢を見つけた少年少女達…若いつて良いわね」

影魅璃はコウジ達三人が楽しく研究している絵が描かれたキャンパスを嬉しそうに眺めていた。

「彼等なら実現出来るさ。オルフェノクの運命を変える事が！」

「Yes!!」

「Yes?」

黒深子が英語で頷いたのを聞き、首を傾げる闇影とコウイチ。

「黒深子ちゃん…まさかサイガに変身したせいで…!!」

「あの生徒会長みたくなつたのか!?何かの病気なのか!?!」

「No!Don't touch!」

闇影と黒深子は部屋中でおいかけつこの如く走り出した。その時…

「また絵が変わつたわ!」

新たなキャンパスには無数の薔薇の花弁が散る部屋に空席の玉座と、その傍らに剣が飾られた絵が描かれていた。

「闇の…キバ…。」次回、仮面ライダーディライト!

ここは、人間とファンガイアが共存する世界…だが、

「最近、今の王家に不満を持つ者達のテロが後を絶たない…。」

世界の「浄化」を主張するテロリスト達。

「首謀者は王家内部の者!?!」

民や王家内に起きる不信感、そして…

『ありがたく思え。絶滅タイムだ。』

果たして、テロリスト達の正体は?真の目的は?



次回、「裏楽章・憂うる闇のキバの王」

全ての闇を、光へ導け！

第6導 限りある命、限らない想い（後書き）

ユウジ「やっと終わったか…。僕達の話。」

ナオヤ「つーか白石すげえ活躍したよな。」

ユカ「そうね。相馬君を説得するし、サイガに変身して学園の皆を守った。」

ナオヤ「俺とコウイチをボコにするくらい強えし。」

ユウジ・ユカ「それは二人が悪い。」

ナオヤ「何でだよ！つーか鶴見！！煌の影分身使って風呂入った様に見せかけるなんて卑怯じゃねーかよ！！」

ユカ「どっちが卑怯よ！！この覗き魔！！（正拳突き）」

ナオヤ「ぐはっ！！ま…まだ諦めてねえから…。（ダウン）」

ユウジ「やれやれ…さて、次は『ダークキバの世界』です！一部のキバのキャラも登場致しますので…皆さん、」

ユウジ・ユカ「楽しみにして下さい！！それでは！！」

## 第7導 裏楽章・憂うる闇のキバの王（前書き）

闇影「皆様、お久しぶりです！ついにダークキバ編が始まりました！」

黒深子「今回は作者がガチで普段使わない頭を悩ませながら書いていったらしいわよ？」

コウイチ「結構書き直したりしてたし、この投稿にも自信がないって嘆いてたなあ…。」

闇影「そんな訳で皆様！もしつまらなかったり、これはおかしい！と思った所がありましたら遠慮なく言って下さい！それではダークキバ編前半スタート。合言葉は…。」

三人「絶滅タイムだ…。では、どうぞ！」

## 第7導 裏楽章・憂づる闇のキバの王

バイオリン工房・輝<sup>かがやき</sup>

「ぜ…ぜんぜい…。何…その液体…。」

「凄え臭いだぞ…。」

黒深子とコウイチは鼻をつまみ顔をしかめながら、濡り潰した「何か」を悪臭がする謎の液体に混ぜている闇影に尋ねた。

「ああ。この魚の骨はバイオリンのニスの材料になるんだ。だからこうやって混ぜてるんだ。」

「だがらっで…ううっ…。」

「もう少しで終わるか…。」

突然、インターホンが鳴り、影魅璃はすぐさま玄関まで駆けつけた。

「はい。」

ドアを開けると、白いジャケットに白手を着けた長髪の男が立っていた。

「あのお…ここって喫茶店ですか？」

「いいえ、ここはバイオリン工房です。」

「ああ、バイオリン。あれは素晴らしいですね。」

どうやらこの男はここを喫茶店と勘違いしているようだ。そして影魅璃の訂正の言葉を聞いても話が噛み合わない返答をした。

「コーヒーでしたら、ウチで飲んでいきませんか？工房の見学も自由ですよ。」

「おお、それはありがたい。ではお邪魔します。」

影魅璃の言葉を受け男はここでコーヒーを飲む事にした。そしてコーヒーが出来る迄工房をせわしなく見学した。

「ほお。これは素晴らしい工房ですね。」

「ありがとうございます。」

工房を称賛する男に闇影は感謝の言葉で返した。

「こう素晴らしい物ばかり見ていると胸が熱くなって『脱ぎ』たくなりますね…。」

そう言うと男の顔にステンドグラスの模様が浮かび、そのまま蜘蛛をイメージしたスパイダーファンガイアへと変化した。

『チューリツヒヒヒ…。』

「…!!ファンガイア…!!」

「あつ！おい、コウイチ！！」

『ウグツ…！！』

闇影が制止する前にコウイチはスパイダーFを殴り倒した。すると…

『な、何するんだびっくり！！いきなり殴るなんて酷いじゃないか！！』

「へ？」

スパイダーFの怒りの訴えにコウイチは間抜けな声で反応する。

『この店はファンガイアを差別するのか！！「親衛隊」に訴えてやる！！』

あまりの理不尽な対応にスパイダーFは怒りながら工房を出ていき、影魅璃が持ってきたコーヒーを「いらない！」と告げ外へ出た。

「ちよつと！あのまま出ていったら大変よ！」

「そうだな、急ごう！」

闇影達が外へ出た時、スパイダーFが中年の女性に近づこうとしていた。

「あの人危ないわ！先生、Let's 変身！！」

黒深子は闇影に変身を促すが、スパイダーは中年の女性に向かって走り出し…

『おばちゃん！！！あの人ファンガイアだからっていきなり殴って来るんだああ！！！！』

なんとスパイダーFはその女性に泣きついていったのだ。すると…

「あんだあああつつつつ！！！！！」

「ぐぎやあああつつつつ！！！！！」

その女性もとい近所のおばちゃんが此方まで幕を持って全速力で駆けつけ、コウイチをぶっ叩き三時間程説教を喰らわせた。「ファンガイアを差別するな！」「あんだどういいう教育受けたんだ！」等々…。戻ってきた時には回覧板を持ちながら頭をクラクラさせていた。

「コウイチ…大丈夫か？」

「だ…大丈夫な訳…ねえだろ…。」

「その回覧板には何が載ってるの？」

コウイチはふらつきながらも黒深子に回覧板を渡した。

「えっと…『ファンガイアとのコーラス会の募集』に『王城キャツスルドランの見学ツアー』…って、ええっ!？」

回覧板の内容に驚く黒深子。それを横で見っていた闇影は顎に指を添えて結論を出した。

「…粗方解ったよ。この世界は人とファンガイアが共存する世界だ。

「だからさっきの人がファンガイアを殴った事であんなに怒っていたのね。」

「ああ。此処ではそれが当たり前なんだな…。良い世界だ。」

闇影はこの人と異形が共存する世界を嬉しく思い、感動していた。

「後はこの世界のライダー『闇のキバ』を見つけるだけなんだけどなあ…。」

三人は闇のキバことダークキバが何処にいるのかを考えていた時、二人組の男が現れた。

「…人間だ…。」

「ああ…人間だな…。」

「?どうかしまし…!!」

黒深子が尋ねた時、男達の顔にステンドグラスの模様が浮かび、ファンガイアへと変化した。だが、何故か顔にミイラのようなマスクを着けていた。

『人間は…餌だ!ヘヤアアアアツツツ!!!!』

突然ファンガイア達は吸命牙を浮かばせ、闇影達のライフエナジーを奪おうとした。



「うわっ！！おい！！人間とファンガイアの共存はどうしたんだ！！」

間一髪の所を回避しながら、闇影は共存について問いかけた。しかし……

『共存…愚かだな……。』

ファンガイア達はそれを無視し、無表情のまま攻撃を続けた。

「くっ…戦るしかないのか…変身！」

【KAMEN - RIDE…DELIGHT!】

闇影は悔やみながらデイルイトへと変身した。

『新しい力でいくか！』

【SHADOW - RIDE…ORGA!】

【ATTACK - RIDE…ORGA - STRANSER!】

デイルイトは自身の影をオーガへとシャドウライドさせ、専用武器「オーガストランザー」を召喚し互いに持たせた。

『はっ！せいっ！そりゃっ！…！』

『グガアッ！…！』

デイルイトとSオーガは一瞬の間を見せずにファンガイア達を斬り

つけ、そのまま後退させた。

『止めだ…!!』

【FINAL - ATTACK - RIDE : O・O・O・O・O RGA!】

『斬り裂けええつつ!!』

『『ゲギヤアアアツツ!!!!』』

デイルイトとSオーガの剣の切っ先から光の刃が伸び、そのままフアンガイア達を「オーガストラッシュ」で斬り裂き、彼等は硝子の様に碎け散った。その瞬間…

『な、何だ!?!』

突然複数の兵士がデイルイト達を囲みだした。そして一人のリーダーらしき女性が顔を出しこう言った…。

「全員動くな!!私は「王牙親衛隊」副隊長のユリだ。貴様等をフアンガイア殺害の容疑で身柄を拘束する!!城まで来て貰うぞ。」

『『『えええええつつつつ!!!!!!』』』

世界の光導者、デイルイト!9つの影の世界を巡り、その瞳は、何を照らす? キャッスルドラン・謁見の間

「だから誤解だつて言ってるじゃないですか!！」

「あのファンガイア達から襲つて来たんですよ!！」

黒深子とコウイチは自分達は潔白だと強く訴えている。

「ええい黙れ!!当事者同士の証言等信用出来ん!！」

が、ユリは加害者同士の証言は信用出来ないと聞く耳を持たなかった。

「おいおいユリ。話くらい聞いてやれよ。『奴等』の居場所が分かるかもしれねえんだぜ?」

「はっ!王の御前で申し訳ありません!」

茶髪でミュージシャン風の服を来た男の軽い口調の命令を聞き、ユリは左足を前にして膝まずいた。

「さて、自己紹介すつかな。俺の名はオトヤ、この国の王様だ。堅く苦しくせず楽にしようや。」

この世界のファンガイアの王・オトヤという男はとても王とは思えない軽い口調で闇影達に自己紹介した。

「ありがとうございます。実は……」

闇影はオトヤ達にこれ迄の経緯を全て話した。

「ふーん。黒いオーラが人を怪人にする、ねえ……。もしかしたら」

今起きてる事件』と関係してるかもしれないな。」

「事件とは？」

「最近一部の人やファンガイア達がテロを起こしてるんだ。デモ、略奪、暴動果ては…自爆。」

「「「！！！！！！」」」

「今の行政、いや掟に不満を感じているテロリスト達が後を絶たねえんだ。人とファンガイアの共存するって掟にな。」

どうやら今の掟に異を唱える者達によるテロ事件が後を絶たないようだ。そしてその事件の影響で民からの王家の信用に亀裂が生じ始めている事態なのだ。

「そんな事が…！！」

「一つ質問、お前等を襲ったファンガイア達の様子はどんなだった？」

「無表情な感じで、何故か顔にミイラのようなマスクをしていました。」

「無表情…顔にミイラのマスク…。」

オトヤは口元に手を覆い、怪訝な目をして何やら考え事をし…

「…お前達の言葉が本当なのか確かめる為にテロ撲滅に協力して貰う。」

「王よ！なりません！こんな素性の分からぬ者達を…」

「お前達、俺の部屋に來い。案内する。」

オトヤは闇影達の証言を確かめる為、テロ行動撲滅の協力を要請した。ユリはそれに反対だが「王の命令」ならばと渋々従った。

## 王室

「私はマヤ。この国の王妃でございます。この度は貴方方を巻き込んでしまいました大変申し訳ありません。」

「いえ。此方こそ何の事情も知らずにとんだ迷惑をかけてしまい申し訳ない限りです。」

腰まで届いた長い黒髪に黒い服を着たファンガイアの王妃・マヤは闇影達を巻き込んだしまった事を謝罪し、闇影も自身の行動が原因だと謝り返した。

「（それにしても、綺麗だな、マヤさん…特にあの胸が…痛でっ！）」

「（ああ、本当に…がっ！）」

闇影とコウイチはマヤのその美しい容姿に見とれていた。（コウイチは胸中心）その時、二人の足元に激痛が走った。それは…

「（何見とれてんのよっ！馬鹿っ！！）」

黒深子が怒りの表情で二人の足を踏んでいたからだった。

「オトヤさん、その仮面のファンガイアについて何かご存知でしょうか？」

「！！」

「さつきその話を聞いた時、何か難しい顔をしてたんで何か知ってるんじゃないかな、と思っただけ。」

「…やれやれ、お前さん案外鋭いねえ…。いいだろう、話してやる。」

オトヤは自分の考えを見通した闇影に感嘆し、話す事にした。

「今から数百年前に俺達ファンガイア族より性質の悪い種族がいた。それは…」

「レジエンドルガ…我等ファンガイア以上の力を持っており多種族を洗脳する事が可能な種族。しかし、嘗ての戦争で奴等は先代の王によって封印された。」

オトヤの言葉に続いて話を進めたのは、白髪のパーマに片眼鏡をかけた黒いコートを着た細身の男だった。

「ビショップ…。」

「おっと、失礼。私は王の参謀を勤めるビショップと申します。実

は王にお話したい事がございます。」

ビショップはオトヤに話がある為此処に着た様だ。彼の慇懃無礼な態度に少し顔を顰めながらオトヤは話を聞く体勢を取った。

「此処最近起きてるテロについてですが、あまりに奴等が王家がよく立ち入る場所で起きているので、若しかしたら此方の情報が漏洩しているやもしれないのです。」

「テロの首謀者は王家内部の者…って事か?!」

「あくまで可能性の話です。が、自分以外の者をあまり信用なさらぬよう用心に越した事はありません。」

貴方はこの国を支える王…努々それをお忘れなきようお願い致します。」

そう言うとビショップは一礼をし、王室を後にした。

「…。」

「何よ！感じ悪い!」

「彼は彼なりに王を、この国を思っている故にあのような事を仰っているだけなのです。今はご勘弁を。」

黒深子はビショップの言動に不快感を抱くが、マヤはそれを庇護した。

「そのレジエンドルガが関係しているかもしれないんだ…。マスキのファンガイア達のテロを防がないと!」

「今日会ったばかりのお前達にこんな事を頼んで本当にすまないな…後で何人か兵をよこしておく。」

「はい！では行ってきます！」

闇影達はすぐさま王室を後にした。その時…

「頼んだぞ…ううっ…！！」

オトヤは突然目頭を押さえてふらつき出た。

「オトヤ！大丈夫ですよ！？」

「だ…大丈夫だって…ちょっとこけそうになっただけ…。」

「何処が大丈夫なものですか！貴方…最近全然休んでないでしょう？」

「んな事ないって…うっ！」

「オトヤ…！」

全く休息を取っていないという言葉を否定する前にオトヤは倒れそうになったが、マヤがそれを支えた。

「ほら、やっぱり疲れてる。少し働き過ぎではありませんの？」

「大丈夫だって…それに、俺には王として…一日でも早くテロを止めないといけねえし…何より、俺には夢が…！！」



マヤは、あくまで王としての責務を果たすと言つオトヤを抱き締め  
た。

「貴方は王である前に、私の大切な夫です。少しだけ休みましょ  
う…ね?」

「マヤ…。」

「オトヤ…。」

マヤは抱き締めたままオトヤの耳元でそう囁き、二人は唇を重ね合  
った。

#### 闇影SIDE

「なかなか見つからないなあ…。」

「ホントね…手がかりゼロだわ。」

闇影達は親衛隊の兵士団と外でミイラの仮面のファンガイアの情報  
を探していた。しかし、黒深子が口を尖らす様に有力な情報も見  
つからないでいた。

「二人共、弱音を吐かない!必ず見つかる筈だ…。絶対に!」

「ここまで根性のある人間は珍しいな…。我が兵にもこれ程骨のあ

る者がいればな。」

「ルークさん…。」

闇影を称賛した長い黒髪の巨漢の男はルーク、「王牙親衛隊」の隊長である。彼は元々闇影達にユリ程敵意を抱いておらず極めて友好的だった。その後、二人は話が弾み意気投合し始めた。

「ん！そこにいるのは誰だ！？」

何かの気配に気付いた突然ルークは物陰に怒号を飛ばし、兵士達は武器を構えた。すると、一人の男性が現れた。

「俺？三条。なんてな。只のファンガイアさ。」

「ならば貴様に聞きたい事がある。ミイラの仮面をしたファンガイアについてだ。」

ルークはこの三条という男にミイラの仮面のファンガイア達の情報を持っているかどうか聞き出した。

「さてな…。それは力づくで聞いてみな！」

三条は縞馬をモチーフにしたゼブラファンガイアに変化した。それと同時に複数のファンガイア達が現れ闇影達に襲い掛かった。

『『『へヤアアアアツツツ！！！！』』』

「くっ…そうきたか…！皆の者！行くぞ…！」

『うおおおおおつつつつ！！！！』

ルークは敵の攻撃を腕で搦んでは投げ、搦んで投げと全く物ともせず屠っていき、殴りかかってきた者も蹴り飛ばしていき、兵達も次々と敵を薙ぎ倒していった。

「す、凄い……。これが親衛隊の強さ……！」

闇影達はルーク達親衛隊の戦いぶりに呆ける様に見ていた。

「何だ？この程度で王家に齒向かう等笑わせる。」

『うるせえっ！ー！』

ゼブラフは剣を装備しルークに斬りかかった。しかし、それはいとも簡単に振り払われた。その反動で彼の服から幾つもの菓子为零れ、ファンガイアが知らずに踏んづけてしまい粉々になってしまった。すると……

「貴様……よくも俺のお菓子を……！！」

ルークはゼブラフにドスの低い声で怒りを露にした。

『はあ？お前菓子なんて持ち歩いてんのか？案外ガキだな。』

その言葉を聞きルークの怒りは頂点に達し、顔にステンドグラスの模様を浮かばせ……

「許さん……！！俺は貴様等に罰を与える……！！」

彼本来の姿、百獣の王・ライオンをモチーフとした「ライオンファンガイア」へと変化した。

『ウオオオオオツツツツ！！！！許さん！許さん！許さあああつつつつん！！！！』

『グギヤアアアアツツツツ！！！！』

ライオンFは棍棒を振り回し次々とファンガイア達を薙ぎ倒していった。

「……（たががお菓子でそこまで怒るかあ？！！）」「」「」

食べ物への恨みは怖いとは言いが、彼処まで怒り狂う必要があるのかと思う闇影達であった。ライオンFは倒れたファンガイアの腹に足を乗っけていた。

『まだまだ…こんなものでは終わらないっ！！』

『ちっ！いい気になんなよ！！』

ゼブラFはこれ以上のライオンFの暴走を許すまじと再び剣で斬りかかろうとした。

「ルークさんが危ない！変身！」

【KAMEN - RIDER DELIGHT!】

闇影は走りながらディライトへと変身し、それと同時にカードを装填した。

【FINAL・ATTACK・RIDE…DE・DE・DE・DE  
LIGHT!】

『はああああつつつつ!?!?!』

『何っ!?グギャアアアアツツツ!?!?!』

巨大な十枚のカードが現れ、ジャンプしたディライトがそれを通して飛び蹴りをするFAR「ディメンジョンレック」がゼブラFに炸裂した。

「闇影、助かったぞ。ありがとう。」

『いえいえ。何のそのこれしき…!』

自分を救ってくれたディライトに礼を言うルーク。ディライトがそれを手を振って謙遜していたその時…

『…へへへ…結構…やるじゃねえ…か。あんた等にならアイツ等を倒せるかもな…。』

ディライトのFARを受けても尚立ち上がるゼブラFは何やら意味深な発言をした。

『「アイツ等」?どついう事だ!?!お前達は仮面のファンガイアとは無関係なのか!?!』

『半分は…な…。教えてやるよ…。俺達はな…』

## 王室

「…落ち着きましたか？」

「ああ…お前のお陰でな。しかし、何回も『する』事ないだろ。／／」

「だって…貴方も後から乗気になってきましたから…つい…／／／」  
二人があの後何をしていたかは解る者には解り、解らぬ者には解らぬ…という事にしておこう。しかし、オトヤの顔色が先程より良くなっていた。

「申し上げます！！」

突然、兵士が慌てて王室に入ってきた為、二人はそそくさと距離を取った。兵士は少し頭を捻っていたがオトヤはそれより前に用事を聞きだした。

「急に何だ！！何が起きた！！」

「し、城の前に、例のテロらしき軍勢が現れました！！」

「…！俺も行こう！マヤ、お前は此処にいる。いいな。」

「オトヤ、お待ちなさい！貴方はまだ休まないと…！！」

マヤの制止を聞かずにオトヤは此処の警備を誰かに任す様、兵士に命令しながら王室を飛び出した。

## 城前

「貴様等！！此処を何処だと思っている！！」

「ああ知っていると…脆弱な人間と共存する腑抜けた王がいる城だろうか？」

ユリが警告するも、テロ軍のリーダー格の男は人との共存するオトヤを腑抜けと言い捨て挑発した。

「貴様っ！！王を愚弄するか！！」

「こりやまたえらい人数のお客様だな…用件は何よ？」

「王よ、お下がりください！あの程度の敵、王の手を煩わせるまでもありません！！」

ユリはオトヤに下がる様促すが、彼は手を出し「任せる」の合図をして敵の話を聞く体勢をとった。

「知れた事、元来ファンガイアは人間共を喰らって生きる種族…然るに貴様等は食糧である人間と共存をし、ファンガイアの誇りに泥を塗った！故に我等は今の腐った政治や墮落した王家を滅ぼし、世界を浄化し、新たな世界を再建するのだ！！」

『おおおおおおおつつつ！！！！！！』

男が「世界の浄化」を宣言すると、テロの軍勢が大きな雄叫びをあげた。

「…その為に、何の関係の無い民衆を巻き込んだのか…。」

オトヤは俯きながらドスのきいた低い声で呟いた。

「我等の築く理想世界にとっては…小さき犠牲だ！！」

「許さねえ…貴様は絶対に許さねえ！！来い！キバット！！」

『漸く出番か。待ちわびたぞ。』

男の冷徹な言葉にオトヤは怒り、全身が赤く鋭い黄色の目をした蝙蝠「キバットバット？世」を呼び出した。そして…

『有り難く思え。絶滅タイムだ。ガブリッ！！』

オトヤはキバットを掴み、自分の手の甲を噛み付かせた。すると、オトヤの顔にステンドグラスの模様が浮かび腰に黒いベルトが巻き付いた。キバットを前に突き出し…

「変身！」

逆さにしたキバットをベルトに装着した瞬間、オトヤは全身がダークレッドカラーの鎧、蝙蝠の形をした装甲の真中に装飾された三つの魔皇石、同じく蝙蝠を模した緑の複眼が特徴の「真のキバ」エン



ペラーフォームに酷似した闇のキバ「仮面ライダーダークキバ」へと変身を遂げた。

『掟に背いた貴様等への判決は…死だ!』

「死ぬのは…貴様だ!!全軍かかれっ!!」

テロ軍は一斉にミイラの仮面を着けたファンガイアへと変化し、ダークキバに襲い掛かった。

『オオオオオオオツツツ!!!』

『あの程度の雑魚にはこれで十分だ…ふっ!!』

対してダークキバは足元に巨大な黒いキバの紋章を展開し襲い掛かってきた敵達の足元迄動き出し背後から捕らえると、強力な電流が発生した。

『ギヤアアアアアツツツ!!!!!!』

魔法陣の電流をまともに受けたファンガイア達は一瞬でガラス体となり、碎け散った。

『ば、馬鹿なっ…全滅だと…!!?』

リーダー格の男の正体、アリジゴクをイメージした「アントライオンファンガイア」はダークキバの強大な力を目の当たりにし呆然としていた。

『あとはお前だけだ…。ふっ!!』

『何！？うわっ！！は、離せ！！離せ！！』

ダークキバは再び魔法陣を展開しアントライオンFを捕らえると、黒い笛「フェッスル」を取り出しキバットに吹かせた。

『ウェイクアップ・1』

『はあああああ…はああっ！！』

『グアアアアアツツツ！！！！』

パイプオルガンの様なメロディが流れると同時に周囲が闇に包まれた。そして、ダークキバは空中へジャンプし、エネルギーを込めた右拳でパンチする第一の必殺技「ダークネスヘルクラッシュ」をアントライオンFに叩き込み大爆発させた。

「王よ、見事です！これで世界に平和が戻ります！」

『ああ、そうだ…な、何だっ！！』

ユリがダークキバに駆け寄りテロ根絶を喜んでいたその時、城内で爆発音が聞こえた。それと同時に黒い影がそこから去っていった。

「まだ仲間がいたのか！追え！！」

ユリは兵士にあの人影を追う様に怒号を飛ばした。そして、ダークキバはある人物の安否を心配した。

『城内で爆発…はっ！！マヤッ！！』

ダークキバはマヤの身を案じて颯爽と城内の王室へと向かった。しかし、王室は大きく荒らされておりマヤの姿はなかった。先程の人影が彼女を拐ったのだ。

「マヤッ…!!くそっ!!俺がここにいたと言ったばかりに…!!」  
オトヤは自分のせいでマヤが拐われたのだと思い込み、壁に拳を叩き付けた。

#### 闇影SIDE

「…早く急がないと…!!」

闇影達はキャツスルドラン城へ向かいながら、ゼブラフの言葉を思い出していた。

#### 数分前

『俺達はな…最初の内は略奪と破壊行動だけやらかしてたんだ…。だが、「アイツ」が現れたせいで、一部の奴等はレジエンドルガだけの世界を作る為に王家や全ての人間、ファンガイアを殺すためにテロ行動を過激化させやがったんだ…!!』

「！！…なら今までの爆破事件や大量のライフエネルギー吸引は…」

『ああ…全部レジエンドルガ側についた俺達の元同胞だ…。だが俺等は腐ってもファンガイア。その事だけは誇りに思ってる…！！それで残った俺等だけでやってみたんだが…この様だ。』

「…最後に聞きたい…。『アイツ』とは誰なんだ？」

『そいつは…ガアツツ！！』

「！！お、おい！！しっかりしろ！！誰が首謀者なんだ！？」

先程のダメージが大きく、ゼブラFの身体に罅が入った。そして、最後の力を振り絞った…

『お…王家の…』

全て言い切る前にゼブラFはガラスの様に砕け散った。

「ビショップさんの言う通り、王家内部の人間がテロの…レジエンドルガのリーダー…だとしたら…オトヤさん達が危ない！！直ぐに城へ戻ろう！！」

「くそっ…！！無事でいてくれよ…！！」

闇影はマシンディライターの速度を上げて城へと向かった。

とある場所

「くっ…。手に傷を負ったか…。だが王妃は我が手中にある…！これでする…レジエンドルガ達の王・アークが…！！フッフ…。」

傷を負った手を押さえながら不気味に笑っていたのは、城からマヤを拐った人物だった。レジエンドルガの王・アークの復活にマヤが必要な理由は…？次回、仮面ライダーディライト！

マヤを浚われてしまい、王としての自信を失いかけるオトヤ。

「大切な奴を守れなくて…何が王だ…！」

そして迫りつつあるレジエンドルガの王・アークの復活の刻…

「心で感じたままに動く…。それが悩みが一番の特効薬だ。」

思い悩むオトヤが出した答えは…？そしてテロの首謀者は誰なのか！？

次回、「フィーリング？心の音楽に耳を傾ける！」

全ての闇を、光へ導け！

第7導 裏楽章・憂づる闇のキバの王（後書き）

黒深子「マヤさんが浚われてしまったわ！」

闇影「なんとしてでも助けないと！」

コウイチ「でも誰が何処へ連れ去ったんだよ!？」

闇影「いやそれ此処で言ったらマズイだろ。今は無事である事を祈るっ。」

コウイチ「そうだな…。」

黒深子「話変わるんだけど…オトヤさんとマヤさん、一体何やったのよ!?!?!」

闇影「あ…ああ、それは…言うのやっぱ止めよ!!!（退場）」

黒深子「ちよつと…何よ!何やったのか知ってるんでしょ?先生!」

コウイチ「黒深子ちゃん。俺が教えるぜ!実はな…ゴニョゴニョ…（耳打ちする）」

黒深子「な!な!な!ぬぁんですってええええつつつ!?!?!  
!!!（顔を盤若にして退場）」

コウイチ「何か悲鳴が聞こえるんだが…（ガクガクブルブル）じ、  
次回の後半迄お楽しみに!」

第8導 フィーリング 心の音楽に耳を傾ける！（前書き）

オトヤ「ダークキバ編後半、更新完了だぜ！」

マヤ「今回はその…ちょっと…Hなシーンがごぞいますので…皆様、心して読んで下さいませ…／／／」

ルーク「あの作者…」

ユリ「後で死刑だな。」

キバット？世『何はともあれ、読書タイムだ。』

全員「では、どござー！」

## 第8導　フイーリング　心の音楽に耳を傾ける！

キャツスルドラン城内・謁見の間

「何ですって！！？マヤさんが拐われた！！？」

城に戻ってきた闇影達はテロ集団：否、レジエンドルガ側に付いたファンガイア達の襲撃があった事や、マヤが彼等に拐われた事を耳にし驚いた。

「我々が：王がレジエンドルガ軍を倒された直後に仲間が城内に侵入し：王妃様を拐っていったんだ：。」

ユリは苦虫を噛み潰した様な顔をしながらそう頷いた。

「そちらの方では何か情報を掴んだのですか？」

ビショップは片眼鏡に人差し指を当てながら、闇影達にレジエンドルガについての情報を手にしたのかを尋ねた。それを聞いた彼等はその場で起きた事を全て話した。

「何だと！？王家内部の者がこの一連の事件の首謀者だと！？馬鹿な！！！」

その話を聞いたユリは信じられないと言わんばかりに驚愕し、一部の臣下や兵士達も動揺しだした。今迄自分達を苦しめていたテロ事件の首謀者が自身達身内の誰かだと知れば、騒ぎ出すのも無理はない。



「王妃様を拐った輩は腕に傷を負っているとお聞きしました。王よ、この中の誰かが首謀者やもしれません。また潜りこんで何か企んでいる事を考え、城内にいる全ての者の腕を確認いたしましょう!…王?」

ルークは城内の人間の腕を確認するという案をオトヤに申し立てた。しかし、彼は玉座に座ったまま呆然としていた。

「ねえオトヤ。しょうらい、おうさまになったらどうするの?」

「うーん、そうだなあ…にんげんもふあんがいあもみんながなくなれるせかいをつくりたいな!それと…//」

「?それとなあに?」

「マ、マヤをおよめさんに…あーうるさい!なんでもいいだろ!!!//」

「ああ!まってよ!タカトのゆめは?」

「ぼくのゆめはおじいさまのようなびしょっぴか、おいしゃさんですぬ。」

「へえ。かなうといいね。」

「あ…あと…//」

「おーい！なにやってんだ！おいてくぞ！マヤ！タカト！」

「王よ！如何いたしましたか！？」

「はっ！！あ…ああ、すまねえ…。腕の確認だったよな…構わねえ…ぞ…。」

ルークの怒号にオトヤは我に返り彼の案を許可した瞬間、視界がぼやけ出し、意識も朦朧としその場倒れた。

「！！オトヤさん…？オトヤさんっ！！！」

世界の光導者、デイルイト！9つの影の世界を巡り、その瞳は、何を照らす？「オトヤくん。どうしてにんげんとふあんがいあがな  
かよくなれるせかいをつくりたいのですか？」

「なんだよ？なんかへんか？」

眼鏡をかけた少年・タカトはオトヤが何故人間とファンガイアが共存する世界を作りたいのかを尋ねた。

「だってにんげんってぼくたちふあんがいあのことをきらっているんですよ？なのに、どうして？」

タカトは人間がファンガイアを忌み嫌っている事から、オトヤの語る理想について疑問を抱いていた。

「まあ、なんつーか…おれ、おうさまになったあとのことってあんまかんがえてなかったんだよな。」

「えっ？じゃあなんであんなこといったの？」

マヤの問いかけにオトヤはこう答えた。

「むかし、ばいおりんがうまくひけなくてなげやりになっていえとびだしたとき、ばいおりんもったへんなおっさんとあつたんだ。んで、そのおっさんは」

「へえ…。それでそういうことえがでたのね。」

「そつからおれは、なやんだときはメイドたちのスカートめくりをするときめたんだ！」

「なんですって…そんなことしてたの…。」

「げっ！やべっ！にげる…！」

「まちなさあゝい！！おしおきです…！」

二人が立ち去った後にタカトは一人考え込んでいた。

「…なんでそんなりゆうだけであんなこといえるの？ぼくには…わからない…！」

そう口にしていた時、周囲が黒い闇に包まれていった

「う…ん…。」

「気が付きましたか？良かった…。」

「闇影…。此処は？」

目覚めたオトヤは、此処は何処かを尋ねながら起き上がろうとしたが、闇影に制止された。

「まだ寝てて下さい。此処は医務室です。急に倒れて皆心配してしまいましたよ？」

「そうか…迷惑かけたな…。」

「マヤさんは俺達が助けます。だからゆっくり休んでください。」「くそっ…!!」「!!」

「あいつ等の侵入を許したうえに、マヤも拐われた…。国も…大切な奴も守れなくて…何が王だっ…!!くそっ…!!くそっ…!!」

オトヤは布団に何度も拳を叩きつけて、己の無力さに憤っていた。その悔しさが闇影の心にも伝わる程…

「オトヤさん…。」

「えっ！？誰も腕に傷がなかった!？」

「うん…ルークさんとユリさんと一緒に、城の中にいた人達の腕を見たんだけどそれらしい傷を負った人はいなかったわ。」

闇影は、黒深子とコウイチから城内全ての人間の腕に傷が無い事を聞き愕然とした。

「じゃあ、一体誰がマヤさんを拐ったんだ？」

「うん…先ず王室に言ってみるか。何かの手掛かりがあるかもしれないし。」

「犯行現場に証拠あり…だな！」

こうして三人は誘拐の手掛かりを探す為王室に向かった。だが…

「うん、なかなか見つからないな…。」

「ああ…。それにしても酷い荒らされ様だな、これ。こん中から探すのかよ…。」

目当ての物が見つからず、災害が起きた後の如く荒らされた王室を見て嘆く始末。

「ん？ねえ先生。これ…。」

黒深子は一枚の写真を拾い、闇影に見せた。

「？この写真は？」

「落ちてたから拾ってみただけど、あんまり関係無いかも。」

黒深子が拾った写真には三人の子供が映っていた。元気一杯な茶髪の少年、長い黒髪の優しそうな少女そして、眼鏡をかけたおとなしめな白髪の少年が…。

「この二人は子供の頃のオトヤさんとマヤさんだな。後の子は…ん？」

「どうしたんだ？闇影。」

「いや、この白い髪の子…何処か見覚えがあるんだよな。何処かなあ…？」

闇影は写真の白髪の少年に見覚えがあるようだ。それが誰かを考えていた時…

「大変だっ！！オトヤ様がいなくなっただぞ！！」

「！！何だっつてっ！！？」

なんとオトヤが城から姿を消し、周りの人間が慌てて彼を探しているようだ。

「オトヤさんがいなくなっただって本当ですか！？」

それを聞いた闇影は兵士を捕まえ、それが本当なのか尋ねた。

「ああ。メイドが医務室に食事を持ってきた時にはもぬけの殻だったんだ。ベットのシーツを紐代わりにして窓から出られたようなんだ。」

「何で城から出たのかしら…?」

「…責任を感じていたのかもしれないな。レジエンドルガに城を攻められた上、マヤさん迄拐われた事で自分がすっかりしてなかったから…だと自分を責めていたからな…。くそっ！真近で聞いていながら…」

闇影はオトヤが城を出た原因を、顔を少し俯かせながら語った。彼の苦悩を聞いていたにも関わらず、脱走を許してしまった自分を責めながら…。

「先生…。」

「とにかく！今はオトヤさんを探そうぜ！」

「でも、探すって言うても何処に?」

「うっ…！それは…」

確かに何の手掛かりも無いのに探すのは無謀という物だ。そんな中、闇影は先程の写真を見て何か考えていた。

とある場所

「うっ…ん…。此処は…?!何、これ…!?!」

漸く目を覚ましたマヤは此処が何処なのか辺りを見回し時、腕に違和感を感じた。それもその筈、彼女の両腕は鎖付きの鉄の様なバンドがはめられているのだから…。これを見た彼女は自分が何者かによつて監禁されたのだと理解した。

「漸くお目覚めですか。王妃様。」

「あ…貴方は…誰なのですか!? 何の目的でこんな真似を!?!」

マヤの目の前に、悪魔の様な仮面を被つた黒いフードの人物が現れた。一瞬驚いたが、彼女は強気な発言で何が目的なのかを尋ねた。

「囚われているのに随分と勇ましいですね…いいでしょう、お答え致します。我々レジエンドルガの王・<sup>ロード</sup>アークの復活には貴女の力が必要なのです。貴女特有の…他者に自身のライフエナジーを供給する能力が…!」

「!!! 何故それを…!?!」

マヤは自分が拐われた理由を聞き驚愕したと同時に疑問に思った。確かに自分はライフエナジーを他人に与える事が可能なファンガイアだ。だがそれを知っているのは王家のみ。如何にレジエンドルガの知能が優れているとは言え、あまりにも熟知し過ぎている。王家の者でない限り…

「…!!! まさか…貴方は…!?!」

マヤは一つの、最も考えたくない答えを口にしようとした。しかし…

「お喋りは…其処までだつ!?!」



「きゃあっ！！」

突然フードの人物は豹変した様に彼女を平手打ちにした。あまりの強さに血が出る程口が切れてしまった。

早く…復活させろ…！我ヲ…コレ以上待タセルナ…！！

フードの人物は自分とは違う「何者か」の意思によって操られている様だ。だが、今のマヤにはそれを知る由も無かった。

「くっ…！失礼。では、早々に復活の準備を始めましょうか…。」

フードの人物は片手で頭を押さえながら先程の口調に戻り、復活の準備に取りかかるとした。

#### キャツスルドラン・謁見の間

「一体、王は何処へ行かれたのか…。」

「場所の見当が全くつかないな…。」

ユリとルークは、オトヤの居場所の心当たりが解らなくずっと悩んでいた。

「場所の見当なら解りましたよ。」

「煌…それは本当なのか！？何処だっ！？」

闇影達は一人の老兵士を連れて、オトヤの居場所が解つたと言つた。それを聞いたユリは声を荒らげながら彼に掴みかかり尋ねた。しかし、闇影はそれに怯まず懐から写真を取り出した。

「この写真に写ってる三人の子供…オトヤさん達の後ろの黒い建物…ここがその居場所であり、同時にマヤさんが囚われている場所でもあるんです！」

「根拠は何だ！？何故そう言い切れる？」

「根拠は、この人が知っています。」

闇影は老兵士に今の理由を話す様に促した。

「ああ。そこはオトヤ様達が昔、よく遊び場に使っていた場所じゃ。こっそりと忍び込んで秘密基地にしていたらしく、俺等はそれを見つけては何度も説教したものじゃのう。」

老兵士は懐かしげに写真に写った居場所について語つた。

「そしてその城の名は…魔界城。嘗てレジエンドルガの王族達が住んでいた城であつたが、彼奴等が滅んだ今、只の廃墟と化しているがのう。」

「！！！！」

老兵士の話聞いたユリとルークは驚愕していた。もしそれが事実ならばオトヤとマヤは今危険な目に遭っているのかもしれない。そう予想した彼等は…

「全兵士！直ぐに魔界城へと向かうぞ！お前には案内して貰うぞ。」  
当然魔界城へと出撃しようとした。その時…

「ふふ…あーっはははは…！！」

今迄ずっと黙っていたビショップが突然笑い出した。

「何が可笑しい！？ビショップ！」

「いやはや…愛しい者の為に城を飛び出し救いに行く…此処まで愚かな王だとは思わなかったよ。」

「何っ！？」

「もっとも、そのお陰で王家内部に攻め入る事が出来ただけだな…。」

豹変したビショップの言動に眉をひそめる一同。しかし、その原因は直ぐに解決される。

「な…何だ！？ビショップの身体が…！？」

ビショップの身体に頭から爪先迄無数の横線の様な模様が浮かび出し、それらは長く白い包帯の様になり、新たに身体の形を作り始め、ミイラの姿をした異形「マミーレジェンドルガ」へと変化した。

『ククク…』

「ミイラの仮面に、腕の傷：貴様が…！！王達をどうしたっ！？」

『ああ、我等が王復活の為に必要なんでね…預かせて貰ってるよ。』

『

「ふざけるなっ！！」

ユリは剣を抜きマミールに斬りかかった。しかし、マミールは身体を包帯に変えて攻撃を回避し再び元の姿に戻った。

『所詮人間の力などこの程度…今より本当の絶望を与えてやるっ…。』

『

マミールは右腕を上へ上げ、そこから禍々しいエネルギーを放出しこの場にいる兵士達に命中させた。すると…

「があああああっつつっ！！！！！！」

「ぐぐぐぐぐ…！！！！」

そのエネルギーを浴びた兵士達は、顔にミイラの仮面が現れて苦悶の悲鳴を上げ出し、暫く経つと静かになりゾンビの様な唸り声を上げながら剣を抜き、無事だった味方の兵士に斬りかかってきた。

『ウウウウウ…ガアアアアツツ…！！！！』

「ぐぐぐぐ…！！！！」

「くくく…！！！！よせっ！！！！止めろっ！！！！」

『アツハハハ！！どうだ？変わり果てた仲間達の姿は！？』

「そうやって今迄同胞を操ってきたのか……！！」

ルークは、今すぐにでも目の前の外道を殴り飛ばしたい感情を抑えながらマミーに尋ねた。

『ああ、そうだと。この呪いは俺が死なない限り解ける事はない……そして、我等が王が復活すればこいつ等は完全なレジエンドルガと化し二度と元には戻れなくなるのだ……！！』

「……ならば」

「貴様を倒せばいいだけの話だっ……！！」

ユリは再び剣を構え、ルークはライオンファンガイアに変化した。

「くそっ……！オトヤさん達を見つけないといけないし、ここの人達を放っておく事も出来ない……。どうすりゃいいんだ！？」

「……どっちも見捨てる事が出来ないなら、第三の選択だ。」

「へっ！？どついう事？先生。」

「時間が無いから手っ取り早く説明する。つまり」

「くっ…！離し…なさい…！！／／／」

『あんなま暴れると綺麗な肌がもつと見えちゃいますぜ。王妃様』

ベッドに寝かされたまま腕を鎖で拘束されたマヤは、顔を幾度も殴られ、衣服も破られ顔を赤くしながら抗っていた。こうなった理由は、復活に一向に協力しようとしないう彼女に暴行を加えたがそれでも首を縦に振らない為業を煮やしたフードの人物は、レジエンドルガ化したファンガイア達に口を割らせようと考え、このような事態となった。

「貴女が協力しようとしないうからです。さあ、早くしないと彼等に穢されてしまいますよ。」

『へへへ…ファンガイアつっても所詮は女か…。』

『王妃様の生まれたお姿を拝見できるなんて…光栄ですな。』

「貴方達！目を覚ましなさい！ファンガイア族の誇りはどうしたのですか！？この者達の軍門に下ってこんな不埒な真似を…！ひゃっ！…！」

『んなやらしい身体で変な声出しといて何が「誇り」だよ！この淫乱王妃がよっ…！…！』

『これは新しい時代を築く為の王政…申し訳無いが協力する迄貴女には少々苦痛を味わって頂きますよ。』

そう言うと、二人の男はマヤにじりじり近づいていった。捕らえた

獲物を食べようとする獣の様に…

「い、嫌…来ないで…。誰か…誰か助けて…誰か助けてっ！！オトヤーーーーッッッ！！！！」

『マヤに触れるな。このゲス共が！』

『『グアッ！！』』

そこへキバット？世が現れ、男達に攻撃し、それに怯んだ彼等はその場から逃げ出した。そして…

「マヤッ！！大丈夫かっ！？」

「オトヤ！！オトヤ！！」

「もう大丈夫だ、マヤ。」

ファンガイア達の王であり、彼女の夫でもあるオトヤが現れた。マヤは彼に抱きつき涙した。それをオトヤは彼女に上着を着させて頭を優しく撫でた。

「これはこれは…わざわざ死にに参ったとは…。」

「…何でだ…何でこんな事をやらかしたんだっ！ビショップ、いや…タカト！！」

「ふふ…」

フードを脱ぎ捨てたその正体は、二人が見知った人物だった。

「やはり貴方だったのですね…タカト。」

フードの正体はビショップであり、オトヤとマヤの幼馴染みであるタカトだった。

「何故僕だと解ったのですか？」

「ガキの頃、兵士のじいさんが此処が昔レジェンドルガの城だった聞いた事を思い出したのがきっかけだ。此処を知っているのはレジェンドルガを封印した先代の王…俺の親父か、此処でよく遊んだ俺達三人しかいねえ…。」

ビショップ…タカトの問いかけにオトヤはそう答えた。

「何故ですの！？何故貴方がこんな事を！？この国を良くする為誰よりも頑張っていた貴方が、何故…？」

「…今の世界を壊し、新しい世界を創る為ですよ。」

タカトの冷たい視線を見てマヤはゾクツとした。あの大人しく優しい彼がこんな目をするなんて…

「家畜である人間と共存？笑わせる。そんな世界等絶対認めない！両親を殺した家畜共と馴れ合う世界等、破壊してくれろ！！」

「…！！何…だと…！？お前の親が人間に殺されたって…そんな話初めて聞いたぞ！」

タカトが今回の事件を引き起こしたのは、両親を人間に殺害された



事が理由の様だ。それを初めて聞いたオトヤとマヤは驚愕した。

「自分達とは違う存在だから…化物だから…それだけの理由で両親を殺した人間を僕は許さない！そしてそんな家畜共と馴れ合おうとするファンガイア達も！全て葬りレジエンドルガだけの新たな世界を創造する！！その為には…！！」

全ての人間とファンガイアを対して大きく呪詛の如く罵倒したタカトは、自身の姿を変化させた。それは自身の髪の色と同じ白い蝙蝠の骸骨に似た顔、悪魔を思わせる肉体を特徴とした「スカルバットレジエンドルガ」へと…

『貴女の命が必要なんです…。マヤ。』

「タカト…その姿は…！！」

「チツ…！！あの頭でつかちがつ…！！マヤ！下がってる…！こいつは…俺が止める…！！」

マヤを再び下がらせたオトヤは、顔にステンドグラスの模様を浮かばせ、赤い蝙蝠と鬼が合わさった姿「バットファンガイア」に変化した。

『いいんですか？闇のキバの鎧を使わなくて…？』

『へっ！お前みたいなガリ勉君に使うのは勿体ねえんでな…こいつで充分だっ…！！』

バットFはスカルバットLの挑発に乗る事はなかった。本来の姿の方が闇のキバより攻撃力が高いからである。しかし本当の理由は…

『（あれは魔皇力をかなり消耗しちまうリスクがあるからな…あれ相手に短期戦は無理がある。だったら…！）』

闇のキバの鎧は強大な魔皇力を持っている反面、その消耗力は並の者だと命を失う程の代物だ。オトヤでさえ使用しても、体力の大半を奪われてしまうのだ。

『ならば…貴方を殺してからマヤを頂きましょう！』

『俺の女は…奪わせねえぜっ！！』

二体の蝙蝠の異形は互いに駆け出し、攻撃を仕掛けた。バットFはパンチを幾度も繰り出そうとするが、スカルバットFはそれを全て軽々とかわしつつ、後方へと離れていった。

『どうした！？逃げてばっかじゃ俺は倒せねえぞ！！』

『逃げたのではありません…。こうする為ですよ！！』

『何っ！？ぐあああっっっ！！』

スカルバットFは羽の内側から無数の赤い骨の様な針を飛ばした。真正面に進んでいるバットFは諸に受けてしまい、そのままオトヤの姿に戻ってしまった。

「くっ…あの攻撃だけでここまでダメージが大きいのは…予想外だぜ…。」

オトヤは、地に伏せたまま動こうとしない…いや、ダメージが大きい

く動けないのだ。スカルバットは止めを刺す為、そのままゆつくりと彼に近づいた。

『残念ですね…。もし協力して下されば、幼馴染として命だけは助けようとしたのに…。レジエンドルガと化せば、もう王という重い「悩み」から解放されるのですよ？そう…。悩みという心から…。』

『そして、楽しいという心も感じなくなってしまっただな。』

『…!!誰だっ…!!』

「お…お前は…!!」

### キャッスルドラム

「く…ここまで…強いとは…!!」

ユリ達はレジエンドルガ化した兵士を何とか退きマミールに攻撃を仕掛けようとしたが、やはりその力の差は圧倒的であり地に伏せる結果となった。

「私には…幼い頃に騎士だった両親を先の戦争で亡くした時、王が…オトヤ様が救って下さった御恩がある…。あの方はファンガイアでありながら、人間と手を取り合っていく世界を築こうとしている。私も…その夢のお手伝いをしたいと願い…血反吐を吐く思いで親衛隊にまで上り詰めた…!それを思えば…これ

しきの攻撃でやられない…やられて…たまるかあああつつつつ!

！  
」

『終わりだ…人間っ！！』

ユリがここまでオトヤに忠誠を誓うのは、ファンガイアでありながら人間である自分を捨ててくれた恩があったからだった。マミーは瀕死寸前の彼女に止めを刺そうとした。しかし…

『何っ！！貴様は…！？』

マミーは自分を阻む存在を見て驚愕した。何故なら、黄金の鎧に、真紅のマントそして王の証である剣「ザンバットソード」を構えるキバ・エンペラーフォームがこの場にいたからだったからだ。

「オ…オトヤ…様…？いや、違う…。」

『それは闇影の影が実体化したキバですよ。大丈夫ですか？ユリさん。』

『本物の先生は魔界城へオトヤさん達を助けに行きましたよ。』

「その声…赤竜と…白石か？」

ユリの疑問に答えたのはリュウガとスワンオルフェノクだった。そう、あれはディライトの影がFSRしたキバEFである。

『ええ。これが先生の第三の選択です！』

数十分前

「俺はこの人と魔界城へ行く。だが、お前達はここで兵士達をくい止めてくれ。」

「そんなの無理よ！先生でないとなあ化物は倒せないよ！」

「解ってる！だが、俺の能力を忘れてないか？」

「は？どついう事だよ？」

「百聞は一見にしかず。まあ見てな。変身！」

【KAMEN・RIDE…DELIGHT!】

『そして…ここはキバでしょ？』

【FINAL・SHADOW・RIDE…KI・KI・KI・KI  
VA!】

『ここを護ってくれ!』

「そつか！その手があったか！」

『そついう事。だから…お前達を信じて此処を任せる!』

「分かったわ！先生！」

「此処は俺達に任せな！」

「よし、行くぞ！」

『と、いう訳なんです。』

闇影の立てた「第三の選択」はデイライトのFSRで援軍を作り出しそれを切り離し、此処の危機を救わせ自分はその間に魔界城へ行くという、何ともシンプルな作戦だった。

『おのれ…そんなまやかしのキバ等、葬ってくれるわあっつ！！』

『…！！』

『ガアアアツツツツ！！！！わ、我等の…時代が…』

キバEFのザンバットソードの一振りにより、「マミール」はあっさり  
と斬られて爆死した。

『早っ！まあいつか。後は先生だけだわ…。』

## 魔界城

『そうして俺は此処まで来たって事です。』

「第三の選択…か…成程、俺はそんな考え方をした事がなかったな。

「  
『いいえ。これ俺があの場で思いついた答えなんです。』

「思いつき…だとっ!？」

なんと、あの作戦は即興で思いついた物だったらしい。それを聞いたオトヤは愕然とした。

『別に悩む必要はありませんよ。いえ…悩んだっていいじゃないですか。だって、それが答えを出す為の特攻薬になるんだから!心で感じた事をそのままやればいい。』

「!!その言葉…何処かで…。」

『さつきから御託を並べて…貴様、何者ですか?』

『お節介教師な仮面ライダーだ!!宜しく!!!』

「悩む必要は…無い。俺は…俺の思ったままの行動でこの世界を築いていく!!仲間と一緒に!!キバット!!!」

『一皮剥けたな…オトヤ。絶滅タイムだ。ガブリッ!!!』

「変身!!」

吹っ切れたオトヤは立ち上がり、キバットに掌を噛ませてダークキバへと変身した。

『さて、輝く道へ導きますか!!!』

デイライトとダークキバはそのままスカルバットLへ突撃した。しかし、先程バットFを苦しめた羽から赤い骨の針を飛ばしてきた。

『そんな攻撃は…こいつで防ぐぜ!』

ダークキバはマントを大きく翻し針を防いだ。そしてその隙にデイライトがライトブッカーでスカルバットLを切り裂いた。

『馬鹿なっ!!ぐあっ!!!』

そのまま押し切られたスカルバットLは後方へ倒された。だが、直ぐに立ち上がり羽を広げ天井を突き破り飛翔した。

『ハハハ…!!此処まで攻撃は届くまい!!さあ、これはどうします?』

『それは…これでいく!!』

【FINAL - FORM - RIDER : DA・DA・DA・DARK  
- KIVA!】

『力を抜いてください。』

『おおっ!これは!?!』

背中に手を当てられたダークキバは、鎧が巨大なキバット?世の形をしたファンガイアの王の証であるザンバットソードを模した巨大な剣「ダークキバソード」へとFRRRした。



『何ですか…その力は…!?!?』

【FINAL - ATTACK - RIDE…DA・DA・DA・DA  
RK - KIVA!】

『はあああ…!』

『絶滅タイムだ。』

『はあああああつつつ!!!!!』

デイルイトがダークキバソードを天に掲げると刀身が紅く染まり、そのままスカルバットLに向かって振り上ると、そこから赤い衝撃波を出すFAR「デイルイトブラッディ」を放った。

『ぐあああつつつ!!!!!』

そして元の姿に戻ったダークキバとデイルイトは、すかさず其々の必殺技を発動した。

【FINAL - ATTACK - RIDE…DE・DE・DE・DE  
LIGHT!】

『ウェイクアップ・2』

『はあああああ…はあああああつつつ!!!!!…!!!!!』

『グアアアアアツツツ!!!!!』

デイルイトの「デイメンションレグ」とダークキバの「キングス

バーストエンド」の強力な飛び蹴りを受けたスカルバットはそのまま、陸地へ倒れていった。

「タカト…。」

「…僕は…レジェンドルガの王の復活なんて…どうでも…良かったんだ…。」

タカトは、仰向けになり声を絶え絶えになりながら自分の本心を話し出した。

「僕は…ずっとあの二人の事を…妬んでいたんだ…真っ直ぐに自分の夢を信じて歩む彼等が…羨ましかったんだ。そして…」

間を空けてマヤの方に目をやりながら話を続けるタカト。

「オトヤ君と一緒にになったマヤちゃんの関係にも…嫉妬していた…。それ等の僕の弱い心を黒いオーラが…アークが支配して皆を傷つけてしまった…本当に…ごめんなさい…!!」

タカトは涙ながらにオトヤとマヤに謝罪した。

「俺、昔悩んでいた時にあるおっさんからアドバイス貰ったって言ったよな。その時の言葉が…」

「『心で感じままに動け。それが悩みの一番の特効薬になる。』ってな。」

「ああ…そうだったんですね…。僕も心で感じたまま生きて…」  
それを聞き安堵したタカトの身体に罅が広がり、やがてガラスの様に砕け散った…。

皆と一緒に仲良く出来る世界を…創りたかった…です…。

「…馬鹿野郎っ…!!」

「三人共、とても穏やかな表情をしてるわね…。」

影魅璃はオトヤとマヤ、そしてタカトが笑顔で笑っている絵をそれと同じ表情で見っていた。

「心でそう感じるからそういう感想が出るんだね…やっぱり心って大事よね！先…生？」

黒深子は闇影に話を振ろうとしたが、何故か悲しい表情で俯いていた。

「（また黒いオーラか…。その影響でレジエンドルガ達が復活した。俺が現れたせいなのか？）」

「先生!!」

「わっ!!な、何だよ黒深子。脅かすなよ…。」

「先生が返事しないからでしょ!?!どうしたの?」

「ん？ああ…ちょっと…ね。」

闇影は黒いオーラについて悩んでいる事を何とか隠そうとした。が…

「先生のせいじゃないよ。先生は今まで世界を救ってきたんだから！」

どうやらバレていたらしい…。

「だから先生も自分が思ったままにやっていこ？」

「黒深子…ああ！そうだな！」

闇影は黒深子の言葉を聞いて元気を取り戻した。その時…

「絵が次の世界の物に!？」

コウイチの言う通り、キャンパスに次の世界を現わす絵が被さった。それは黒い柱の様な物を中心に、黒い螻蛄の様な戦士と黒いカミキリ虫の異形が対峙した絵だった。

「カリスの世界…だな。」次回、仮面ライダーディライト！

一万年前に封印されしアンデッドが再び解放され、人々を襲っていた。そこに現れたのは…

「待たんかい！待たんかい！見つけたで…アンデッド！」

カリスに変身する、たい焼き屋の青年だった。そして…

「変身!!」

カリスとは違う赤と緑のライダーが存在した。彼等は敵か？味方か？

「俺は…人間や！」

青年に起こる謎の異変…彼の身に何が…？

次回、「カリスマなたい焼きはいかが？」

全ての闇を、光へ導け！

第8導　フリーリング　心の音楽に耳を傾ける！（後書き）

オトヤ「やっと世界の三分の一か。」

マヤ「本当に…遅すぎですわね。」

虎居合瑠「面目ありません…（顔面ボコボコ）」

マヤ「そう言えばオトヤ、貴方の夢って何ですか？」

オトヤ「ふっふっふっ…よくぞ聞いてくれた。それはアイドルユニット・FNG14（ファンングフォーティーン）の結成だあああつつつつ…!!!」

虎・マヤ「はい？」

オトヤ「十四人の可愛い女の子達で編成されたグループだ。今の所八人集まっている。残りは六人！女性読者の諸君！このユニットに入って…この世界に活力を与えて…グボツ!!!」

マヤ「オ・ト・ヤ　二人だけでお話しませんか？大丈夫ですわよ。ちよつと痛いけど直ぐ気持ち良くなつて今みたいな計画を忘れさせてあげますから…。（謎の個室へ向かい二人共に退場）」

ルーク「はあ…。それより作者、何かデザートは無いのか？」

虎居合瑠「次の『カリスの世界』にたい焼き屋が出てきますけど…。」

┌

ルーク「本当か！？ならば案内しろ！」

虎居合瑠「ちよつと待て！！痛だだだっ！！腕引つ張んなあっ！！  
（ルークに拐われ一緒に退場）」

ユリ「結局残ったのは私だけか…。そんな訳で読者の皆、次回は『カリスの世界』だ！では…また何処かでな！」

第9導 カリスマなたい焼きはいかが？（前書き）

虎居合瑠「ついにカリスマ編突入！さて皆様、たこ焼きとたい焼き。どちらがお好きですか？」

黒深子「突然何言ってるの？頭やられた？」

コウイチ「元々だろ？」

虎居合瑠「黙らっしゃい！お前今回出番無し。」

コウイチ「はっ！？何で！？？」

虎居合瑠「読み出したら分かる。」

コウイチ「コイツ…ホントムカつく…！」

闇影「え、長い前書きは置いて第四の世界、カリスマ編スタートです！では、どうぞ！」



## 第9導 カリスマなたい焼きはいかが？

フラツシュ薬局

「うん…腹が痛え…。」

「大丈夫？コウイチ君。」

「全く…皆で食べようと思ったたい焼きを一人で全部食べるから罰が当たったのよ。」

「ち…違っ…それ俺じゃない…期限切れの牛乳を飲んじまったからだ…。」

ここ「カリスの世界」でコウイチは、腹痛を起こし腹を抑え寝ながら苦しんでいた。

「それよりコウイチの腹痛を直さないと。俺が処方した腹痛用の薬を飲め。」

「闇影…お前って奴は…っつて、えっ!？」

白い服を着た「薬剤師」の闇影の言葉に一瞬感動したコウイチだが、「処方した薬を飲め」という言葉を聞いて顔を青ざめた。

「安心しろ。蝉の脱け殻に乾いた百足、鼠の目玉その他漢方薬諸々を搗り潰した物だ!」

満面の笑みを浮かべた闇影が持っているのは、今上げた物を全て搗り潰して粉にした物に乗せた紙だった。

「安心出来るかつ!! って、お、おいっ!! ちよつと待てよっ!!? んなモン本気で飲まず気がかつ!! く、口に無理矢理流し込!! む!! ゲエヤアアアアアツツツ!!!!」

薬を無理矢理口に流し込まれたコウイチは、この世の物とは思えない物を見た様な悲鳴を上げ、泡を吹かせてバタンと死んだ様に倒れた。

「これでよし!」

「ええっ!?! これで良い訳無いでしょ!?! ちよつと!! 先生!!?!」

闇影の薬のおかげ(?)で落ち着いたコウイチを置いて、闇影は黒深子と共に、新しいたい焼きを買いに出た。

「んふふ!! ご馳走様!!」

それを影から見ていたのは、たい焼きを食べた犯人だった。どうやら女性らしい!!。

「さて!! たい焼き屋もだけど、カリスは何処にいるんだろうな?」

「(!! 先生と二人でいるのは久しぶりね。なんか!! デートみたい!! / / / ) ねえ先せ!!」

「うわあああつつつつ！！ば…化物だああつつ！！」

『グウウツツ…！！』

黒深子が闇影に話掛けようとした時、バックルをした赤い百足の異形「センチピードアンデッド」が人々を襲い、人々がそれから逃げる光景を見た。

「あれは…アンデッド！」

アンデッドとは、一万年前に行われた「バトルファイト」という自らが世界の支配者になるべく、戦い合う異形である。その名の通りいかなる方法でも死なず、倒すには「ラウズカード」というカードに封印するしか無いのだが…

「俺はその方式を無視して倒す事が出来る！変し…「待たんかい！待たんかい！」って、あらっ！」

デイライトに変身しようとする闇影だが、突然アンデッドに向かって走る青年の叫びに驚いてコケた。

「見つけたで、アンデッド…人様の平和を台無しにする奴は、お天道さんが許しても、この切矢（きりや）レイが許さへんでっ！」

黒い髪を一本結いにした頭にバンダナをし、腰にエプロンを着けた青年・レイはセンチピードUを挑発した。そして、腰に赤いハート型のバックル「カリスラウザー」が現れると、片手で蠅螂の絵が描かれたランプの様なカード、ハートA「チェンジマンティス」を読み込ませた。

「変身！」

【CHANGE】

電子音が鳴った瞬間、レイの身体が揺めき、黒い蠅螂をイメージしたハート型の複眼のライダー「仮面ライダーカリス」へと変身した。

「あれが…カリス…！」

『行つくてええつつ…！』

世界の光導者、デイルイト！9つの影の世界を巡り、その瞳は、何を照らす？『そりやそりやそりやあああつつ…！』

『グ…グガアアツツ…！』

カリスは自身の武器「醒弓カリスアロー」でセンチピードUを素早く攻撃をした。

『グウウウ…ガアツ…！』

だが負けじと、センチピードUは猛毒を持った爪でカリスに反撃を仕掛けようとしたが…

【BIO】

カリスは、ラウザーをセットしたカリスアローにカードを通しハート7「プラントバイオ」を発動させるとアローから無数の蔦が表れ

センチピードUを拘束し、此方に引き寄せると…

『ほんでもって…こいつやっ！』

【CHOP】

ハート3「ヘッドチョップ」を発動させ、片手で手刀を作り引き寄せたセンチピードUに叩きつけた。

『何でや…ねんっ！！』

『グアアアツツ！！』

何故かツツコミの台詞を言ったカリスの手刀でそのまま吹き飛んでいった。そして、止めを刺すべく二枚のカードをラウズした。

『これで終いやっ！！』

【DRILL・TORNADO】

【SPINNING・ATTACK！】

『おりゃあああああつつつつ！！…！！』

『ガアアアアツツツツ！！…！！』

ハート5「シエルドリル」とハート6「ホークトルネード」のコンボにより、カリスは風を纏った全身回転蹴り「スピニングアタック」をセンチピードUに喰らわせた。すると、アンデッドバツクルが開き出した。

『カテゴリー10か…面ろいな!』

カリスが何も描かれていないラウズカード「プロパーブランク」をセンチピードUのバツクルに投げつけると、緑の光を放ちながらそれに吸い込まれていき、円を描く様にカリスの手元に戻った。これがアンデッドを「倒す」唯一の手段「封印」である…。

『ふう…これにて一件落着やつ!さてと…』

### 【SPIRIT】

アンデッドを封印し終えたカリスはハート2「ヒューマンスピリット」を発動させレイの姿に戻った。

「(？あれって…) 貴方がこの世界のライダー、カリスなんですね。」

「んん？何やお前。らいだあ？一体何のこ…」「ゴラアアアアツツツ!!! キリイイイイツツツ!!!」とばあああつつつつ  
「!!!!!!」

闇影の突然の問い掛けに首を傾げるレイだが、その直後に彼をキリと呼ぶ女性によって首を思い切り蹴られ吹っ飛んだ。

「アンタ、またお客さん放ったらかして…何油売つとるんやつ!!」

「何すんや!アマネ!俺はさつき迄人助けを…痛でででつつ…耳引つ張んな!!」

「人助けすんのなら、今待たせとるお客さんにさっさとたい焼き作らんかいつつ!!」

「貴方達…たい焼き屋さんなんですネ! 丁度良かった。」

「「へ?」」

たい焼き屋・ふじはら

「いやゝすまんすまん! まさかアンタ等たい焼き買いに行く途中やったん…へブツ!!」

「お客さんに対してんな態度あるかつ!!」

闇影達に砕けた口調で謝るレイを殴った、跳ねた黒髪に髪止めをした女性は藤原（ふじはら）アマネ。この店の一人娘だった。

「一人娘…? ご両親は?」

「うん…おかんはウチが生まれて直ぐに亡くなって、昔はおとんとやっとなんやけど…四年前に亡くなってな…。」

「あつ…ごめんなさい…!!」

家族の死を思い出させ、表情を暗くさせてしまった黒深子はアマネに謝った。

「あつ、気にせんでええよ! 今はコイツと何とかやってるから

大丈夫や！」

しかし、アマネは直ぐに表情を明るくしながら「気にするな」と手を降り黒深子を安心させた。

「レイさんはどうして此処でお世話に？」

「キリでええよ。俺がこの店で世話になったんは…ん？この感じ…！」

闇影の質問に答えようとするレイは何かを察知すると、突然飛び出していった。

「あつ、コラ！また何処行くんや！？」

「俺が様子を見てくるから此処で待ってて下さい。黒深子、頼む！」

「分かったわ！」

『グウウウウ…！…！』

『ジャアアア…！…！』

レイが察知した場所には二体のカテゴリーク、金色のカブト虫をイメージしたスピードの「コーカスビートルアンデッド」と同じく金色のクワガタ虫をイメージしたダイヤの「ギラファアンデッド」がいた。



「二体共カテゴリーKかいな！」

「被害が出る前にケリをつけましょう！」

「おうよ！行く…」「待てっ！！」「ってあらっ！？」

レイはカリスに変身しようとしたが、現れた二人の若者の叫びによりズッコケた。

「カテゴリーKが二体…いけるか？ハルカ。」

「うっせーな…たりめーだろが！シン！」

同じ黒い半袖のジャケットを着た緑のシャツに茶髪に緑のメッシュを入れた男性と、赤いシャツに黒髪ショートヘアの赤いメッシュを入れた男勝りな口調の女性は互いに言い争いながら、真ん中に「A」のマークをしたバックルにカードを入れ腰に当てベルトが巻き付くと、真ん中のスイッチを展開させた。

「「変身！！」」

【OPEN・UP！】

バックルから現れた緑のゲートをシンという男が、赤のそれをハルカという女性が潜るとダイヤの形をした複眼に、胸に「A」のマークが付いたアーマーが特徴の戦士、緑の槍使い「仮面ライダーランス」と赤の弓使い「仮面ライダーラルク」が現れた。

「あの人もライダーなのか…。」

「……。」

『せいっ！せいっ！せやあっ！！』

『グアツ！ギャツ！ガアツ！！』

ランスは槍状の専用武器「醒杖ランスラウザー」でコーカサスビートルUを素早く突いていった。

『ガアアアツツ！！』

『ぐあっ！……この野郎っ……！！』

【BLIZZARD】

『グウ……ガ……ガ……。』

反撃を受けて頭に来たランスはクラブ6「ポーラーブリザード」でランスラウザーから吹雪を出し、コーカサスビートルUを凍らせ、止めに一枚のカード「マイティインパクト」をラウズした。

【MIGHTY】

『はあああ……はあっ！！』

『グギヤアアアツツ！！』

ランスラウザーを突き刺すとそこから衝撃波を放つ必殺技「インパクトスタンプ」によりコーカサスビートルUは倒されバックルが開かれた。

『そらよっ！』

ランスがプロパーブランクのカードを投げ付けると、コーカサスビートルUはそれに封印された。

『くっ…全然効いてねえ…このおっ！！くたばれっ！！』

【BALLET】

一方、ラルクはギラファUと交戦するが、その攻撃が全く効かず苦戦していた。業を煮やしたラルクはダイヤ2「アルマジロバレット」をボウガン状の専用武器「醒銃ラルクラウザー」にラウズし、連射攻撃を放った。しかし…

『ジャアアア…』

『今迄効かなかったのはバリアを張ってたからかよ…うわあっつ！！』

それはギラファUが作り出したバリアにより防がれ、ラルクは攻撃を受け吹き飛ばされてしまった。

「あの人危ない！変身！」

【KAMEN - RIDER DELIGHT!】

傍観していた闇影はディライトに変身し、ラルクの下へと駆け出した。

「あれが…ライダー…。」

『てやああっっ！…！』

『グアツ！…！』

デイルライトは駆けつけたままジャンプをし飛び蹴りでギラファUを吹き飛ばした。

『女性に危害を加えるのは関心しないな。キングにはキングで行くか！』

【SHADOW - RIDE : DARK - KIVA!】

デイルライトは自身の影をダークキバにシャドウライドさせ、もう一枚カードをドライバーに装填した。

『更に…ガルル、解放だ！』

【ATTACK - RIDE : GARULU - SAVER!】

デイルライトドライバーから青い狼の彫刻に金色の刃が付いた武器「ガルルセイバー」が実体化し、Sダークキバの手元に装備された。

『行くぞっ！…！せいっ！はあっ！そらっ！…！』

『グッ！…！グガアアツツ！…！』

デイルライトとSダークキバはライトブッカーとガルルセイバーでギラファUに斬りかかるが、またもバリアを張り防ぎ二振りの剣で二

人に反撃した。

『ぐあっ!!!…痛たたた…成程、一筋縄ではいかないな。なら、力で一気に叩く!ドツガ、解放だ!』

【ATTACK - RIDE… DOGGA - HUMMER!】

今度は紫と黒のフランケンシュタインの形をした「ドツガハンマー」を実体化し、Sダークキバと共に装備した。

【FINAL - ATTACK - RIDE… DA・DA・DA・DA  
RK - KIVA!】

『ドツガバイト!』

ドツガハンマーの拳が開くと、掌にある単眼「トゥルーアイ」の光がギラファUの身体を固めた。

『これでバリアは張れないだろ!はあああ…止めだあっ!』

『グガアアアツツ!』

必殺技「ドツガ・サンダースラップ」により二つのハンマーを叩き付けられたギラファUは爆発と共に倒された。

『ふう…こんなところか。』

『アンデッドを…倒した…?』

『お前…何なんだよ…何モンなんだよ!何でアンデッドを倒せるん

だよっ!?!」

不死のアンデッドが突然現れた謎のライダーによって倒され、ランスはデイルライトに駆け寄り喧嘩腰で掴み掛った。

『何でと言われても…こういう仕様なんだとしか言えないよ。』

『なっ…ふざけんな!?!』

当然そんな理由で納得がいかず、ランスの怒りは更に爆発した。

『…一先ずコイツを連れてくか。院長なら何か解るかもしんねえし。』

『…チツ!?!』

ラルクの提案を聞き、ランスは渋々とデイルライトを離した。

『良いですよ。俺も貴方達の話を知りたいし。ねえ、キリさん?』

「いや…俺ええわ。アンデッドもいなくなったし、店に戻んねえとアイツにどやされるしな。」

レイは何故か難しい表情をし、店に戻ると言った。

『(…???)どうしたんだろう?)そうですか、分かりました。』

この病院の看護師見習いであるランスの変身者・緑川（みどりかわ）シンとラルクの変身者・赤麻（あかま）ハルカに連れられた闇影は、黒いオールバックに眼鏡をかけた院長の坂黄（さかき）ジュンイチと面会した。

「初めまして。院長の坂黄です。この度はウチの部下がとんだ無礼を働いてしまって誠に申し訳ない。」

「いえ、いいんですよ。頭を上げて下さい。」

頭を下げたジュンイチに、闇影は上げる様言った。それを見ていたシンとハルカは顔を顰めていた。

「成程、その為に旅を…しかし、その心配は無用です。」

「何故ですか？」

「我々には頼れる戦士がいます。それが彼等です。彼等のお陰で人々は平和に過ごせているのですから。」

ジュンイチの言葉を聞き、二人は闇影を見下す様な態度で勝ち誇った顔をした。

「それは解ります…でも、それ以上の脅威が現れた時を想定すると…やはり俺も…」

「おい、てめえ…院長の言葉聞いたか？」

「アンタは「必要ねえ」って言ってるんだよ。とつとと帰んな！」  
シンとハルカは不遜な態度で闇影に突っ掛かっていったが、ジュン  
イチが手を上げてそれを制止した。そして肩を竦めた彼は席から立  
ち上がった。

「ついてきたまえ。本当は一般の者に見せるべきではないのだが、  
特別に案内しよう…このBOARDのもう一つの姿を…。」

## 地下研究室

ジュンイチが案内した場所は、辺りに実験器具や機械が設置された  
薄暗い部屋だった。そこには封印されたアンデッドのカードが置か  
れたデスクもあった。よく見るとカードの怪物が蠢いている。

「アンデッドは不死の力を持つ未知の存在…未だその全ては解明さ  
れていない。故に私は独自でこの施設を建設し、日夜研究を行って  
いるのだよ。」

「凄い…独自で此処までの施設を作ったなんて…。」

ジュンイチの行動力に、闇影は大きく驚嘆した。

「私には更に大きな夢があつてね。アンデッドの不死の謎が解明さ  
れれば、多くの不治の病に苦しむ人々を救う事が出来る。誰もが元  
気でいられる世界を築きたい…。それが私の夢だ。」



「いい夢ツスね！俺、その夢実現するのに何でも手伝います！」

「オレもです！…どうだ、これでも力不足だと思うか？旅のライダ  
ーさん。」

「…出直してきます。」

ハルカは不遜な態度で闇影にそう吐き捨てた。ジュンイチのカリスマ性、夢への具体的な行動力を知り闇影はそのまま研究所を後にした。

「こらハルカ、そんな事を言うんじゃない。彼も彼なりにこの世界を思ってくれているのだから。それより君達にまた一仕事を頼みたいのだが…」

ジュンイチは一枚の写真を二人に見せ、仕事を依頼した。

たい焼き屋・ふじはら

「へい！たい焼き三つお待たせ！」

「ありがとうございます！」

「またのご来店を！…はあ…。」

店に戻ったレイは仕事をこなすが、闇影と別れた時から表情がずっとそのままだった。

「キリ、お疲れさん…ってどしたんや？そんな顔をして。」

「お…おう！何でもねえよ！」

アマネはレイの表情がおかしく心配をするが、レイは何でもないと誤魔化した。

「嘘や…アンタウチに何か言いたい事があるんちゃうん？」

「…！！！」

「やっぱそうなんや…何や？仕事がキツイんか？」

「そんなんやない…。」

「アマネさん、今洗濯が終わっ…」

「じゃあ何なんや！？言いたい事があるならハッキリ言い！ウチはな、隠し事をする奴が一番嫌いなんや！ウチが気に食わんのならこっから出てきつ…！！！」

アマネはレイの言い淀んだ態度に苛立ち、大きく出て行けと怒鳴った。

「…！！ああ、言われんでもこんなとこ、こっちから出てくわ…！！！」

これに頭にきたレイはブチ切れて店を飛び出して行った。

「アマネさん！どうしたんですか？」

「…見苦しいとこ見せたな…アンタは知らんでええ。」

「でも…キリさんが「知らんでええって言っとなるやろっ!!」「!!」

「…ごめん…ちょっと頭冷やして来る…。」

「アマネさん…。」

闇影はジュンイチの夢に何か違和感を感じていた。確かに彼の理想は素晴らしい物だ。だが、もし平和を望むアンデッドがいれば？やはり封印するのだろうか？それはアンデッドの存在を認めない事になる。それで理想と言ってしまったていいのかと、まるでそれに心当たりがある様な思考をしていた。

「（もし良いアンデッドがいたらそれも封印してしまうのか？俺はそれを『一体だけ』知っている…。）ん？あれって、キリさん？」

「くそっつ!!俺のアホッツ!!何でや…何で…。」

闇影は、小石を蹴飛ばしながら腹を立てているレイを見かけ、彼に近づいていった。何故彼は苛立っているのか？

「何で言えへんのや…俺が…俺がアイツの親父さんを…!!」

「アマネさんのお父さんをどうしたんですか？キリさん。」

「闇影…。」

「悩みがあるなら俺に話して下さい。少しは楽になりますよ?」

「いや…こればっかは言われへん…!俺は…!!誰やつ!!」

闇影の「お節介」を拒否するレイ。その時、何者かが彼に攻撃を仕掛けてきた。

『見つけたぜ…カリス…いや、「ジョーカー」!』

『お前はいるだけで危険な存在なんだよ…大人しく封印されなっ!』

「ジョーカーやない…俺は…人間やつ!!」

それは、ランスとラルクだった。ジュンイチが彼等に依頼したのは「ジョーカーの封印」だった。

だが、レイをジョーカーだと言い構わず彼に攻撃し続けた。

「くっ…このままやられるか!変身!」

【CHANGE】

「粗方解らないけど、止めないと!変身!」

【KAMEN - RIDE…DELIGHT!】

レイと闇影はカリスとディライトに変身し、カリスはカリスアローにカードをラウズし、ディライトもカードを装填した。

【TORNADO】

【ATTACK-RIDE…LASER!】

カリスの「ホークトルネード」とデイライトの「デイライトレーザー」で反撃をした。が…

【SMOG】

【REMOTE】

ランスはクラブ9「スキッドスモッグ」とクラブ10「ティピアリモート」のカードをラウズし、周囲に黒い煙を出した。

『何やつ！？周りが暗くて見えへん…!』

『落ち着いて下さい！煙が止んできました。…!!これは!!』

煙の止んだ先には、ランスとラルクの前に二体のアンデッドが倒れていた。

『甘かったな…俺はこの「スモッグ」と「リモート」を使って煙幕の中でこいつ等を解放して俺等の盾になってもらったんだよ!』

倒れたアンデッドは再びカードへ封印され、ランスの手元に戻っていった。

『何て事を…そんな事をして心が痛まないのかっ!?!』

いくらアンデッドとはいえ、平気で盾代わりにするランスの行動に

デイライトは憤怒した。

『別に。どーせ死なねえんだから盾にしたって問題ねえだろ？その化物と同じよう…』』

『それとも何か？アンデッドにも生きる権利があるって言いたいのか？笑わせるね！』

今の二人の発言にデイライトの怒りを爆発した。

『許さない…お前達の腐った根性、叩き直してやるっ！…！』

『はっ！…やれるモンならやって…うわっ！…！』

互いに武器を構えた瞬間、突然爆発が起きた。その爆風から全身が黒く、獰猛な三つの顔の狼の異形が現れた。

『な…何だっ！あれは？』

『あれは…ケルベロス…！』

『グガアアアツツ…！』

ケルベロスはそのままカリスに突撃しようとした。

『コイツ…ヤバイ奴やでっ！…！』

【DRILL・TORNADO】

【SPINNING・ATTACK！】

『喰らい…やがれええつつ…!!』

カリスは「スピニングアタック」で一気にケルベロスに倒そうとした。だが…

『グガアツ…!!』

『な…何やとっ…!!は…離せっ…!!』

ケルベロスはカリスの足を掴み、そのまま地面に叩き付け掌を前に彼に向けると、カリスの身体から数枚のカードがケルベロスの身体に吸収されていった。

『これはまさか…アンデッドを吸収する能力…?』

ケルベロスの能力、それはアンデッドを自らの身体に吸収する能力である。無論それが封印されたラウズカードも例外ではない。

『キリさん！大丈夫ですか！？キリさ…え?』

叩き付けられたダメージが大きいのか、カリスは変身解除し、レイの姿へと戻った。すると、彼の身体に異変が…

「は…離れ…ろ…闇…影…うぐっ…うっ…うっ…ウガアアアアツツツツ…!!…!!」

『キリさん…!!』

レイは突然苦しみ出し、その姿は揺らめき全身が黒く、緑のバイザ

「に、胸部にある緑の核が特徴のカミキリ虫の様な異形「ジョーカー」へと変貌した。」

『やはり、キリさんはアンデッドだったんだ…まさかとは思ってたけど…。』

デイトライトはレイがアンデッドである事に薄々気付いていた様だ。

『ガアアアツツ！！』

『うわっ！！完全に正気を失っている…。』

ジョーカーの攻撃を回避したデイトライト。その時、黒深子からの携帯が鳴り出した。

『どうした！黒深子！？』

『先生！！キリさんがお店を飛び出しちゃったんだけど、見てない？』

『いるにはいるけど…今会えそうにないよ。後でかけ直す！』

『えっ！？どういう事、先せ…！』

携帯を切ったデイトライトは今の状況をどうするか考えている。ジョーカーとケルベロス、そしてランスにラルク、この戦いをどうやって止めるのか？

『グガアアアツツツ！！！！！！』



考えている間にジョーカーはディライトの方へ駆け出し、攻撃を仕掛けようとした。

『くっ…どうすればいいんだ…！どうすれば…！…』

一方、ディライトの危機を空から見下す様に見ている紅蓮。

「ディライト…貴様は自ら生み出した世界の異変により滅ぼされるのだ…！」

表情が見えない赤いフードの中で紅蓮は冷たく笑っていた…。次回、仮面ライダーディライト！

…。カードを奪われ、ジョーカーの破壊衝動を抑えられなくなったレイ…。

「俺は…もうアマネに会う事は出来ない…。」

そんな中、BOARD側にも不穏な空気が…

「そ…そんな…な…何で…？」

そして、闇影を知る謎の男女…。

「随分丸くなったモンだな…。」

「み・か・げ・君」

各々に起こる様々な謎…その真実は！？

次回、「カリスジョーカー」

全ての闇を、光へ導け！

第9導 カリスマなたい焼きはいかが？（後書き）

虎居合瑠「ふう…終わった…ってうわっ！！」

リュウガ「ふざけんな、作者！何だ俺のあの扱いは！？」

虎居合瑠「うるせえ！！面白いからだよっ！つかてめっ、俺に逆ら  
っていいと思ってるのか！？」

リュウガ「お前を倒して俺の出番を増やして貰っ…でやっ！！（退  
場）」

虎居合瑠「上等じゃ！！ゴラァッ！！（退場）」

闇影「あゝあ、行っちゃった…。」

黒深子「それより先生、後書きに書いてる先生を知る男女って？」

闇影「それは未だ言えないよ。次になったら解…る？って黒深子？」

黒深子「何それ…？私以外に誰か女でもいるの…？（目が灰色に濁  
る）」

闇影「ちよっちよっちよっ！！ちよっと待てっ！！男女って言うて  
るじゃん！女だけなんて言うてな…」

黒深子「ふふ…先生がそんな女に目移りしない様に色々『指導』が  
必要かも…ね。（何かを闇影の腹に当てる）」

闇影「ぐあああっつー!!（気絶）」

黒深子「ふふ…さて、『勉強』の時間だよ、先生…。（闇影と共に退場）」

影魅璃「あらあら。誰もいないわね…では皆さん、次回で10話目です。これも一重に皆さんの叱咤激励があつての事…ありがとうございます。ざいます。それでは、次回迄ごきげんよう」

第10導 カリスジョーカー（前書き）

レイ「カリス編後半更新やつ！」

虎居合瑠「そして、デイトライト10話突破やつ！」

アマネ「そんなどおでもええから早よ始め。」

虎居合瑠「どおでも…ええ…orz」

レイ「へいへい…。たい焼き食つなら』ふじはら』をよろしゅう頼みます！」

アマネ「ほいじゃあ…」

虎居合瑠「どうぞ…！（直ぐ復活）」

## 第10導 カリスジョーカー

ケルベロスにラウズカードを奪われジョーカーに変貌したレイは、デイルイトに襲いかかってきた。この事態にデイルイトは、彼を気絶させようと攻撃を仕掛けた。

『くっ…一度気絶させるしかないか…キラさん、ちょっと痛いですよ！』

【ATTACK・RIDE…LASER!】

止むを得ずデイルイトは「デイルイトレーザー」でジョーカーを狙撃した。

『ガアッ!…!』

しかし、ジョーカーはそれを全く物ともせずそのままデイルイトへ近づき攻撃を仕掛けた。

『そんなっ!?!効いていな…ぐあああっつ!…!』

ジョーカーの攻撃を受けたデイルイトは背後へ吹き飛んだ。

『くっ…なんつー強さだ!!攻撃が全く効かねえ…!!…!』

『攻撃だけじゃなく、防御も高過ぎるぜ…!』

一方、ランスとラルクはケルベロスと交戦していたが、ケルベロスの強大な強さに翻弄されていた。

『グオオオツツ!!』

『!!…こいつスピードも半端ねえぞ…うわあっ!!…』

猛スピードでランスに襲いかかり、その鋭利な爪で引き裂き、彼を地に伏せさせた。

『シン!!…』

そして、倒れたランスを掴み上げ先程のカリスの様にカードを奪おうとした。その時…

『ふっ…!!…』

『『グガアアアアアツツツ!!…!!…!!…』』

突然、ジョーカーとケルベロスが何者かの襲撃を受けた。彼等の背後にいるのは…

『な…何故だ…何故此处にいる筈の無い怪人がいるんだ…!!?』

デイトライトが驚くのも無理は無い…。何故なら本来「キバの世界」または「ダークキバの世界」にいる筈のマーマン族の生き残りの緑の海魔「バッシャー」がいるからだ…。

『僕、参上』





「一体何だったんだ…？つと、それよりキリさんを連れ出さないと…！黒深子の家まで行くか…。」

闇影は、今は気絶したレイを担ぎ白石家へと移動した。

「つたく…世話の焼ける奴だな…。」

それを背後から見ていた謎の青年は、闇影に悪態をついていた…。

## フラッシュ薬局

あれから黒深子に連絡し直した闇影は、事情を聞き自分も話すから此方に一度帰る様黒深子に告げ、レイを布団に寝かせに現在に至る…。

「そうなんだ…キリさんが…アンデッド…ジョーカーなんだ。」

「ああ…それにしても俺と別れた後にそんな事があったなんて…。」

二人は双方の事情を交換し合った。レイのジョーカー化、アマネとの大喧嘩。どちらも深刻な問題だった。

「う…う…こ…此処は…何処や…？」

レイは目を覚まし起き上がろうとした。だが、闇影によって抑えられた。

「まだ寝てないと駄目ですよ！此処は黒深子の家です。」

「闇影…そっか…あの後ジョーカーになって暴れだして…ホントにすまん！！」

「それより…何故、ジョーカーである貴方があの店でお世話になってたんですか？」

「ちよつと、先生！」

「…見てしもうた以上、隠し事は出来んな…四年前、俺達アンデッドはある日突然封印から解放されたんや。原因は黒いオーラの様なモン…やったかな？」

「…！！黒い…オーラ…！！」

闇影はアンデッド達が解放された原因がまたもあの黒いオーラである事を知り、愕然としていた。レイの話は未だ続く…。

「解放されたアンデッドは、もう一度世界の支配権を巡って『第二のバトルファイト』を始め出したんや…俺もそれに参加していた。」

「でも、それがどうして今の姿に？」

「それは、この『スピリット』のカードの効力の為や。そのカードの影響で俺はジョーカーでありながら、人間の心を持つ事が出来た。」

レイは「スピリット」のカードを片手に、自分が今の姿でいる原因を語った。ジョーカーは封印されたアンデッドのカードを用いる事

でその姿に変化する事が可能である。そしてハート2「ヒューマンスピリット」の影響により人の心を持てたのである。

「やがて体力が衰弱して倒れた所を、ある人が救ってくれたんや。」

「それが…アマネさんのお父さん…。」

「ああ…親父さんは、こんな得体の知れん俺を何も言わずに面倒見してくれた…俺はその恩を報いるべく親父さんのやつとった今の店を手伝うようになったんや。同時に破壊衝動を抑えるべくハートカテゴリーのアンデッドを封印する為に戦った。やけど…。」

「破壊衝動が、また目覚めてしまったんですね…。」

「それをずっとアマネに今日まで言えずにいた…それを言った後、俺は…あいつ等に封印されるつもりや…。」

「でも…何もそこまでしなくて「それにや!!」「」

「もしジョーカーである俺が生き残れば、世界のリセットを意味する…!!どの道生きてとったらアカンのや…俺は…!!」「」

レイはアマネに全てを打ち明けてから、封印される事を宣言した。自分がバトルファイトに生き残ってしまうと世界がリセットされる事を危惧して…。拳を握り顔を俯かせながら悲しげにそう語っていた。

「そうするのはアマネさんに話をしてからでも遅くはない筈です…。それに、未だそうなるとは限らないですよ。」

「いや、解るんや！今度ジョーカーになれば、俺は完全に意識を失くす…！そうなたらお前達やアマネを傷つけてしまう…。だから…俺はもうアマネに会う事は出来ない…！！」

「その時は俺が倒します…！何せ…灰燼者ですから…。」

「先生…。」

もしレイが今度ジョーカーになり意識を失くした時、闇影は自分が倒すと自嘲気味に言い出した。自らを灰燼者と呼びながら…

「闇影……解った。一度戻ってアイツに話すわ！」

「キリさん…。俺達も一緒に行きます！」

「ええ！行きましょう、キリさん！」

「おう！ほな、戻るか！」

## アマネSIDE

店を出たアマネは、俯き歩きながら先程の事を考えていた。自分のあの言い方に反省はしていたが、それ以上に何かを考えていた。

「（キリの奴、最近何かおかしい…おとんが死んだからたまに店出してくし、何よりおとんの話を出したら表情をさつきみたく暗くしとったし、どっか変や…。もしかしたら、おとんが死んだん何

か関係が…?)」

アマネは、父を亡くしてからレイの行動がおかしい事にずっと疑問に感じていた。そして、その疑問に何かを悟り始めた。その時…

「…!!んんっ!!んーっ!!んーっ!!んーっ!!んーっ!!」

突然背後から何者かがアマネを襲い、彼女を捕獲した。

「(キ…リ…。)」

シンSIDE

「ちっ…!暫く休んでろ…か…。」

あれからシンはケルベロスの襲撃の傷をBOARDで治療したが、ジュンイチから当分は戦わず暫くは休む様言われ帰宅中である。しかし、その決定に不満の様だ。

「こんな傷大した事ねえつての…。俺は…未だ戦える!っ痛うう…。」

と、腕を振り強がっていたが、傷が再び痛みだした。その時…

『グウウウ…。』

「…ケルベロス!!」

突如ケルベロスがシンの前に現れた。今の彼は傷を負っていて戦うのは危険だ。しかし、シンは笑いながらランスバツクルを装着した。「へっ…丁度いいじゃねえか！お前を封印すれば院長も認めてくれる！変身！」

【OPEN・UP!】

シンはランスに変身し、ランスラウザーを構えた。

『俺は…ガキの頃に両親を亡くしずっと荒れた人生を送っていた…そんな俺をあの人…院長は救ってくれた。そして、俺に生きる意味を教えてくれた…。見ず知らずな俺にここまでしてくれたあの人の為なら死ぬる…!!うおおおっっ!!』

『フンツ!!グオオオツツ!!』

『うあああっっ!!』

構えたランスラウザーを回しながらケルベロスに突撃したが、片手で受け止められそのまま強烈なキックを喰らい吹き飛ばされた。

『くっ…なら、「リモート」で…!!』

ランスは、「リモート」のカードでアンデッドを解放し戦力にしようとしたが…

『ムンツ…!!』

『何っ…！こ…れ…は…。』

ケルベロスが掌を前に掲げると、スペード10「スカラベタイム」の効果の様にランスの動きが止まった。その隙に彼が持っているクラブスーツのカードを全て吸収し、強烈なパンチでランスを吹き飛ばし、その衝撃でランスの変身は解除されてしまった。

『ガアッ！』

「ぐあああつつっ！！な…何で「タイム」の力を…！？」

『それは、私が彼にそのカードの力を付加させたからだよ…シン。』

シンの疑問に答えたのは、ランスとラルクと同じダイヤの単眼、胸の「A」マークのアーマーが特徴の黄色い戦士「仮面ライダーグレイブ」だった。ゆっくりとシンに近づきながら…。

「てめえ…何で俺を知って…まさか、お前…グハアッ…！」

グレイブは、自分の正体に気付き始めたシンを気絶させた。

『余計な詮索は禁物だよ…。ん？』

「変身！」

【OPEN・UPP！】

ハルカはバイクに搭乗しながらラルクに変身し、そのままジャンプしてグレイブに突撃しようとした。しかしそれを横に回避され、バイクを着地した。

『お前…シンに何を…!?!』

『おやおや…随分と乱暴な行動に出る女性だね…。』

『うるせえっ!!お前等をぶっ倒してやるっ!!』

【GEMINI】

ラルクはラルクラウザーにダイヤ9「ゼブラジェミニ」をラウズし自分の分身を作り出した。そして分身をケルベロスに戦わせ、ラルク自身はグレイブと交戦した。

『うらっ!はっ!でやっ!』

ラルクはグレイブから距離を取って銃撃した。しかし、グレイブはそれを軽々とかわした。そして、剣状の専用武器「醒剣グレイブラウザー」にカードをラウズした。

【MAGNET】

『えっ!?!武器が…!!』

『女性に武器は似合わない…。』

スピード8「バッファローマグネット」を発動し、彼女が持っていたラルクラウザーをグレイブの手元に吸い寄せた。

『ざけんなっ!オレはずっと女であるせいでいろいろ差別を受けてきた…だが、あの人はそんなオレ…あたしを差別せず今の環境を与



えてくれた…「差別の無い世界を一緒に作ろう」って言うてくれた。それを報いる為なら…あたしは女も！命も！あの人に…院長に捧げてやる…！」

ラルクもシン同様、ジュンイチに自分の人生を救われていた。だからこそ、彼等はジュンイチを強く信頼していた。それを聞くとグレイブはベルトを外し、変身を解除した。

『え…？そ…そんな…な…何で…？』

「なら、今からする事に協力してくれるかな…？ハルカ。」

なんと、グレイブの正体はジュンイチだった。つまり先のケルベロス襲撃は彼の仕業だったのだ。それを知ったラルクは今迄信じてきた者に裏切られてしまい…

『う…うあああああ…あつ…あつ…！！！！！！』

半狂乱したままジュンイチに殴りかかったが、簡単に受け止められてしまいそのまま腹に拳を叩きつけた。ラルクは変身を解除されつつ、ジュンイチの足元にしゃがみこんだ。変身解除と同時に、分身も消え去った。

「うぐ…！何でだ…不治の病に苦しんでる人を救い、誰もが元気でいられる世界を創るんじゃないかなかったのかよ…！！」

「ああ、勿論だとも。『私が支配者になった』世界でね。」

ジュンイチは明るい笑みを浮かべたまま自分の真の目的を語った。

「それには君達の力が必要なんだ。『君達が集めたラウズカード』が、そして…君達の細胞もね!」

【THUNDER】

『うあああああつつつつ!!!!!!』

ジュンイチはグレイブライターにスピード6「ディアーサント」をラウズし、その電撃でハルカを気絶させた。

「ついに揃った…。ライダーとアンデッドの融合素材が…!!」

たい焼き屋・ふじはら

「はあ…着いちまったぜ…って、ん?何やこれ?」

店に戻ったレイ達は玄関先で一通の手紙を見つけた。それを読んでみるとレイの顔色が変わった。何故なら…

『ジョーカーよ。藤原アマネの身柄は預かった。返して欲しくば残りのラウズカードを持参し、BOARD地下研究所に来るべし。  
坂黄ジュンイチ』

その手紙は、アマネが誘拐された事を示す脅迫状だからだ。

「坂黄さんが…アマネさんを…!!?じゃあ、さっきの襲撃はあの人が!?!」

「野郎…アマネを巻き込みやがって…！！直ぐにBOARDに力手紙を握り潰しながらレイは、裏社会の人物の様な物騒な事を言いながら店を飛び出した。」

手紙を握り潰しながらレイは、裏社会の人物の様な物騒な事を言いながら店を飛び出した。

「ちょ、ちょっとキリさん！？あゝあ、行っちゃった。行先解るのかしら？」

「とにかく急いでBOARDに行ってくる！黒深子は家に戻ってる！」

「気を付けてね…先生。」

闇影はレイの後を追うべく、マシンディライターに搭乗しようとするが…

「ねえ、此処今お店やってないの？」

「ああ、お客様すいません。只今店の者が材料の買い出し中で…」

客らしき銀色の短髪に赤いジャケットの中に大きな胸の谷間が目立つ黒いスリットの入った服を着た、赤いショートパンツに赤いガーターベルトを着け、黒いブーツを履いた妖艶な雰囲気的女性が、店は営業していないのかを尋ねてきた。闇影は適当な理由を言っただけで帰った。

「ええ〜！私まだ満足できな〜い…って、あら…」

「申し訳ありま…って、え？」

「お〜い！！どしたんだ？」

「此処の店今人いなくてやってないんだって。それより…」

「何だよ…って、お前かよ…。」

「お前等…何で…？」

今度は黒髪の長い黒髪のウェーブを後ろに括った、水色のジャケットに白シャツに、黒い半ズボンを履いた大柄で屈強な男性が現れた。どうやらこの二人は闇影を知っている様だ。

「随分と丸くなったもんだな…。」

「み・か・げ・君」

「くっ…！！」

顔を笑いながらそう言った二人の言葉に強い衝撃を受け、頭をグラつとする闇影。気付いた時には彼等の姿は消えていた。

「先生、大丈夫！？今の人達…先生の知り合い？」

「…今はキリさんを追うのが先決だ。行ってくる！」

闇影は話を逸らし、レイの後を追いBOARDへ向かった。

BOARD・地下研究所

「この装置は人間の細胞データを電気に変換する事が出来る。これで…」

ジュンイチはシンとハルカの身体に奇妙なケーブルを装着し、それと繋がっている機械のスイッチを作動した。

「がああああつつつつ！！！！！」

「うああああつつつつ！！！！！」

作動した瞬間、ケーブルから強い電流が流れ出し二人は大きな悲鳴を上げた。そして、その電流は隣の機械へと移動しその真下の台にあるグレイブバツクルに流れていった。電流が流れ終わり、手袋をした手でグレイブバツクルを掴み、そこから一枚の黒い絵柄のカードを取り出し恍惚な表情で見つめていた。

「これがケルベロスにアンデッドの細胞データ、そして人間の細胞データを凝縮した究極のアンデッド…。これがあれば、新たな世界を創り出す事が出来る…！！！」

「それは俺を封印してから語れや。おらあっ！！！」

レイは研究所のドアをぶち破り、中に侵入した。

「ようこそ。切矢レイ君…いや、ジョーカー…。」

「アマネは何処や？大人しく返せば半殺しにまけたる。」

「安心したまえ、彼女は院長室で眠っている。私の目的は、君だからな。」

そう言うとジュンイチとレイは、互いにベルトを召喚し…

「変身！！」

【CHANGE】

【OPEN - UP!】

レイはカリスに、ジュンイチはグレイブに変身すると二人は高速移動の如く天井を突き破り、外の廃工場付近へ移動した。

『おりゃおりゃおりゃあぁっ！！』

『くっ…！なかなかやるな…だが…！』

カリスの怒涛の攻撃に、グレイブはわずかに押されていた。しかし…

『何時からかな…？彼女を騙してきたのは。』

『…！…！…！…！？』

グレイブは突然カリスに、何時アマネを騙したのかと揺さぶりかけた。するとカリスの攻撃が緩み出しその隙を付いた。

【SLASH】

『はあっ！』

『ぐああっ！！』

スピード2「リザードスラッシュ」でカリスを切り裂き背後へ追いやるグレイブ。

『何…出鱈目こいてんねん…！！俺がアイツを騙したやとお！？』

『そうではないのか？彼女の父親を殺し、のうのうとその娘と一緒に暮らしてきた。一切事実を語らずに。』

『…まれ…。』

『今の平和な一時が崩れてしまうのを恐れて、真実を話さずに生きて来た君に平和の為に生きる私を非難出来るのだろうか？』

『黙れえええつつつつ！！！！…グッ…グ…ガ…。』

グレイブの挑発に乗せられたカリスはレイの姿に戻り、怒りでジョーカーの破壊衝動が目覚めだし、姿が揺らめきながらその場でもがき出した。それを見たグレイブは何故か変身を解除した。

「最後にいい物を見せてやろう。アンデッドと人間の細胞を凝縮した新たなケルベロス…」

【OPEN - UPP-】

ジユニイチは黒い背景のカテゴリA「チェンジケルベロス」のカードをグレイブバツクルに入れてスイッチを作動すると、頭部に黒い黄色の眼をした狼のヘルムと右が緑の、左が赤い眼をした黒い狼のアーマーが装着し、右腕に巨大な爪を装備した異常なグレイブ「グレイブケルベロス」へと変貌した。

「ケルベロスの力を極限まで引き出せるライダーアンデッドの力を…はああ…!!」

Gケルベロスは力を貯め出すと、周囲に強力な黒いオーラが湧き出した。

「くっ…何や…あのけつたいな姿は…それに…この真つ黒なモンはなんや…？めっちゃ苦しい…。」

Gケルベロスの発する黒いオーラに押されそうになるレイ。そこに…

「…!!」

「何っ？ぐああっつ!!」

工場付近の廃車の車体から黒龍の戦士・リュウガが飛び出し、ドラグセイバーでGケルベロスを切り裂き、これによりオーラが止みだした。

「ありがとな！せやけど誰や？アンタ。」

レイの疑問に一切返事しないリュウガ。そこへ、マシンディライターに乗ったディライトが現れた。



『ふつ…やつと間に合ったか…。』

「闇影！つて事はこの黒い奴は…。」

『俺の影ですよ。』

そう、このリュウガはディライトがシャドウライドで作った物だった。あらかじめリュウガを召喚し先にミラーワールドに潜らせ、レイの危機を救ったのだ。

「影でライダー作れるって…お前、一体…」

『あれがシン達が言っていたディライト…興味深いな。』

『話は後です！ここはこの援軍で行きますか！』

【FINAL - SHADOW - RIDER… B・B・B・BLADE  
！】

Sリュウガの姿は、全てのスピードスーツのアンデッドと融合した金色の騎士「仮面ライダーブレイド」の最終形態「キングフォーム」へとFSRした。

【FINAL - ATTACK - RIDER… B・B・B・BLADE  
！】

『これで…決まれえええつつつ！！！！』

ディライトとSブレイドKFの前に、黒と金色の五枚の巨大なスピードのラウズカードのビジョンが現われ、二人はライトブッカーと

専用武器「重剣キンググラウザー」を構えて必殺技「ロイヤルストリートフラッシュ」を繰り出した。が…

『ふっ…リフレクト…。』

『何っ！跳ね返されて…うわあああつつっ！…！』

Gケルベロスが両手を前に広げるとハート8「モスリフレクト」を発動し、そこから光の燐粉が盾の様に広がり、それが衝撃波を跳ね返し逆にデイルイトとSブレイドKFに大ダメージを与え、デイルイトを変身解除に追い込んだ。

「闇影！…今のは…『リフレクト』！？何でラウズさんと発動したんや！？」

『このGケルベロスは、ラウズしなくても吸収したアンデッドの力を発動が可能なのだよ…。もっとも、一体につき一回だけけどね。』

「なんやと…ぐっ…！！？ぐあああつつっ！！！！」

Gケルベロスの能力に愕然としていたレイは再び苦しみ出し、ジョーカーになりかけるが、それでも未だ必死に抗っていた。

『愚かな事だ…。あの娘を騙してまで人間になりたいとは…化物の考える事は理解しがたい。』

Gケルベロスは自分の姿を柵に上げ、ジョーカーへ戻るのを抗うレイを嘲笑った。

「…化物はどっちだ…彼は…自分の為だけに人間になるとして  
んじゃない！」

レイへの侮辱の言葉に憤り、闇影はふらつきながらも立ち上がった。

『ほう…未だ立ち上がるかね。では何の為に？』

「彼は…恩を返す為…大切な人の為…その人と生きる為に人間にな  
ろうと必死に戦っているんだ！」

「大切な…人…。」

闇影の言葉を聞く内に、レイのジョーカーへの変化が止まっていた。

「そして、新しい未来を築く為に戦い続ける為だ！！」

『君は…一体何者だね！？』

「お節介教師な仮面ライダーだ！！宜しく！！」

「ははっ！なかなかおもしろい事言うな、闇影！ほな、いっちょやる  
か！」

レイは嬉しそうな表情をしながら、闇影の隣に駆け寄りカリスラウ  
ザーを出現させ、闇影もデイライトドライバーを装着した。

「「変身！！」」

【KAMEN - RIDER... DELIGHT!!】

【CHANGE】

闇影はデイルイトへ、レイはカリスへと変身した。

「さて、輝く道へと導きますか！」

『ほざくなっ！！マツハ！』

Gケルベロスはスピード9「ジャガーマツハ」で高速移動し、その巨大な爪でデイルイトとカリスを引き裂こうとした。

『甘い…そのスピードが命取りになる！はあっ！！』

『何っ…！？ガアアアツツ！！』

デイルイトはライトブッカー・スピアモードでGケルベロスの腹を突き刺し大ダメージを与えた。高速移動の弱点…それは、そのスピード故に防御面がやや脆く、小さな攻撃でも受ければ大きなダメージを被るリスクがあるのだ。

『クツ…！ガ…ギ…！！』

『さて、これを使うか！』

【FINAL - FORM - RIDER…CU・CU・CU・CULL  
IS！】

『キリさん、力を抜いてください。』

『はっ…』

デイルイトがカリスの背中に手を当てると、なんとカリスはジョーカーの姿へと変化した。この結果にジョーカー（？）は…

『てめえっ！！何やらかしてくれとんのじゃゴラアアツッ！！ジョーカーにしてどうすんねん！？』

当然、デイルイトに荒々しい口調で食って掛かるジョーカー（？）。しかし、デイルイトは逆に落ち着いた口調で…

『破壊衝動は起きないでしょ？それに、よく見てください。』

『何言つて…って、あれ？俺ジョーカーやのに意識持つとる。それに…』

確かに外見はジョーカーであるが、バイザーや胸の核等、緑色だった部分が全て赤い物だ。これがカリスのFFR形態「カリスジョーカー」の特徴である。

『これは、貴方を救う為の力です！』

『何やそうやったんか…怒鳴って悪かったな。なら、最終ラウンド開始や！』

『何処までも私を虚仮にしゃガツテ…キエロ！！ジョーガアアアツッ！！』

Gケルベロスは急に狂った様な口調になり、爪で黒い衝撃波を飛ばした。

『野郎、ついにトチ狂ったか…！けど、コイツで防ぐ！リフレクト  
！』

Cジョーカーは両手から光の燐粉を広げ、その攻撃を跳ね返した。  
Cジョーカーは全ハートカテゴリーの力をGケルベロスのようにラウ  
ズ無しで発動する事が可能である。

『バガナアアア！！グアアアツツ！！』

『止めだつ！！』

【FINAL - ATTACK - RIDE…CU・CU・CU・CU  
L I S !】

『おつ…！行つたれ！！闇影！！』

Cジョーカーの掌に赤いエネルギーの塊が生まれ、それをライトブ  
ツカー・ソードモードの切先にぶつけた。

『はああああ…行つけえええつつつ…！！！！』

『ヤメロオオオ！！！！グアアアアツツツ！！！！』

それは大きな光の刃となりGケルベロスを切り裂き大爆発が起きた。  
これがカリスのF A R「デイトリッパー」である。

「……………」

「許せとは言わへん！気の済むまで殴ってくれ！」

アマネにこれまでの事を全て話したレイは、土下座したまま彼女に自分を殴る様言った。しかし…

「顔上げえ…ふんっ！！」

「ぐあっ！！」

アマネはレイの頬にパンチを減り込むぐらいに殴った。そして…

「今のでチャラや…。」

「何？そんな程度でええんか！？俺は親父さんを…」

「何ウダウダ言うтонねん！今は隠し事をした罰や！おとんは『事故』で死んだんや！」

「え…？」

「せやからあんたはこれからもここで働いてくれたらええんや！…二度も言わすな。」

「アマネ…おおきに！」

「…は、早よ帰って仕込みの準備や！帰るで、キリ！／／／」

「ああ！」

アマネは照れながら店へと向かったが、その顔はとても嬉しそうだ

った。闇影はそれを微笑ましく見守っていた。

「二人共、とてもいい顔をしてるわね。」

影魅璃は、レイとアマネが並んで笑顔で調理する絵が描かれたキャンバスを嬉しそうに見ていた。

「ええ。本当ですね。あつ、キリさん達からお礼という事でたい焼きを貰ったんです。みんなで食べましょう!」

闇影は持っていた二つの袋をテーブルに置くと、腹痛が回復したコウイチも含んだ全員そこに集まり、たい焼きを頬張った。

「うーん。チョコ味が甘くて美味ひい」

「俺は定番の餡子味がいいけどな。」

「抹茶も美味えな…この二つ目の袋は何味だろなあ…。」

抹茶味を堪能したコウイチは、二つ目の袋に入ってるたい焼きを一口齧った。すると顔が龍騎の様に真っ赤になり出し…

「んがあああああつつつつつ!!!辛れえええつつつつつ!!!」

口から火を吐きながら、部屋中を走り回った。コウイチが食べたのは、レイ試作のハバネロに山葵ソースを練り混ぜた激辛たい焼きだった。よく見ると袋には「試作品」と明記してあった。



「最後までそれなのね…って、また絵が…!!」

黒深子が呆れていたその時、キャンバスに次の世界が描かれていた。それは、無数の桜吹雪が舞う古い建物が並んでおり、絵の真ん中には大きな太鼓と撥が描かれていた。

「歌舞鬼の世界…か…。」次回、仮面ライダーディライト!

闇影の前に現れた謎の男女…

「久しぶりね、闇影君。」

「この世界の宝は、俺様達が戴くから邪魔すんなよな。」

彼等の目的は、この世界の宝である…。

「貴方の悩みは、俺が解決します!」

「人間等…誰も信じれるか!」

子供達を世話する人間嫌いな歌舞鬼。彼に対して何時も以上の「お節介」になる闇影。

「「変身!!」」

そして、謎の男女は宝を手に入れる為、新たなライダーへと変身した。

彼等は敵か？味方か？そして、闇影の真意は？

次回、「歌舞鬼と盗賊と子供達」

全ての闇を、光へ導け！

第10導 カリスジョーカー（後書き）

レイ「ふう…やっと終わったあ…。」

アマネ「まだ後始末が残ってます。はい仕事仕事！」

レイ「へーい…。」

アマネ「そういえば、あんた闇影はんに何上げたんや。」

レイ「よくぞ聞いてくれた！あれは俺が作った試作の特製たい焼きや！中身はハバネロと山葵ソースと餡を混ぜたモンや…ってどしたんや？アマネ。」

アマネ「なんちゆうモン作っとんのじゃあああつつつつ…！！！！」

（強烈跳び蹴り）

レイ「ぐぎやああああつつつつ…！！！！」

虎居合瑠「やれやれ…って、うおっ…！」

コウイチ「虎居合瑠うう…何で後半もこの扱いなんじゃああ…。あれから『リュウガの出番入れる』って言っただろぅがあああ…！」

虎居合瑠「確かに言ったけど、誰もお前の出番を増やすなんて一言も言って…って、ぐっ！な、何だこれは！？（胸にカードを刺された）」

コウイチ「ふふふ…そいつはキリさんがくれた『ラウズシールカー」

ド』。こいつはあらゆる物を封印できる特殊なカードだ。暫く封印されとけやー!」

虎居合瑠「ぎゃああああっっっ!?!?!?!(カードに封印)」

レイ「こつこつ事かいな…ほいじゃ読者の皆さん、次は『歌舞鬼の世界』やで!」

アマネ「新キャラも登場するのでそれも含めて楽しみにしてな!ほな、さいなら!」

虎居合瑠「さいならちやうわあああっっっ!?!?!?!誰かあ!リモートプリーズ!?!?!」

第11導 歌舞鬼と盗賊と子供達（前書き）

虎居合瑠「読者の皆様！大変長らくお…」

？「はあゝい、読者の皆！お・待・た・せ」

？「今回歌舞鬼編から俺様達が本格登場すつから楽しみにしときな  
！」

虎居合瑠「そ、それでは…」

？・？「歌舞鬼編スタート！では、どうぞ…！」

虎居合瑠「チッキシヨオオツツ！！！！（涙）」



「おはよう。麗しのお嬢さん 俺様の朝のキスはいるかな？」

黒深子も目を覚ましたが、そこに謎の男が立っており、訳の分からない台詞をほざいていた。そして…

「おはよ…って、嫌あああつつつつ！！！！誰よアンタアアアア  
ツツツツ！！！！！」

「フゴガアアアツツ！！！」

当然こんな状況を従事出来る程、世の年頃の女の子は優しくなく、黒深子は悲鳴を上げながら男に御馴染の正拳突きをお見舞いして壁が減り込むぐらいに吹っ飛ばした。

「は、早く先生に伝えないと…うっぎゃあああああつつつつ  
！！！！！」って、先生！？

闇影の悲鳴を聞いた黒深子は、急ぎ足で彼の部屋に駆け込んだ。

「先生！！どうし…た…の…。」

「あつ…黒深子…ちっ、違う！！違うんだっ！！！」

黒深子が見た光景は、脱ぎ散らかされた女性用の衣服に、上下の下着、そして、闇影の隣に生まれたばかりの姿をしている妖艶な女性がベッドにいる。これを見て考えられる答えは一つしかない…。

『ぬあくにが違うのよ！！この…ド変態教師があああつつつつ！！！！！！／／／』

「あんぎゃあああああつつつつ！！！！！」

闇影は必死に弁解するも、黒深子は顔を真つ赤にしながらスワンオルフェノクに変化して制裁を加えた。これにより闇影は本日二度目の悲鳴を上げることになった…。

世界の光導者、デイライト！9つの影の世界を巡り、その瞳は、何を照らす？ 甘味処・かがやき

「ホントにごめんなさい、先生！！」

「いや、いいんだ黒深子。あの状況じゃああなるのは無理ないからね。それより…何でお前等が此処に居るんだよ！！」

黒深子は手を合わせて、先程の行動をひたすら謝った。闇影は顔中にマミーレジェンドルガの如く、包帯を包みながらそれを許した。そして、謎の男女に何故此処に居るのかを尋ねた。

「あら、久しぶりに会ってそれはないんじゃない？闇影君。私達はこないだのたい焼きのお礼をしに来たのよ。」

「じゃあ、あの時の犯人って…貴女なの！？」

「ええ。私、彩盗巡（さいとう めぐる）。よろしくね黒深子ちゃん」

「そして、俺様は戴問周（だいもん しゅう）さ スープをどうぞ。」



「謎の女性・巡が自己紹介した直後に、周という男は、スープの入った皿や料理をテーブルに配膳した。どうやらこれがその「お礼」らしい。」

「あら、これ美味しいわ。全部周君が作ったの？」

「YES、マドモアゼル…。食後のデザートはいかがですか？」

周は料理が得意であるが、影魅璃のような美しい女性には優しく…

「おい、お前！人参残ってるだろ！残さず食べえ！！」

「俺は人参嫌いなんですよ！！」

人参を残したコウイチに注意する等、男性には厳しいという典型的なフェニミストである。

「それで、その礼を返しに来ただけなのか？」

「私達は、この世界のお宝を貰いに来たの。」

巡は、食事を食べながらこの世界の宝を手に入れるのが目的だと話した。

「この世界の宝？」

「そ。でも、もうひとつは…んふふ」

「えっ…ちょ、ちょっと！何してるんですか！！／／／」

巡は闇影に近づき、彼のシャツの胸元の隙間を指でなぞりながら耳元でこも囁いた…。

「貴方の様子を見ておきたかったの。嘗て『死神』と呼ばれていた貴方がどうしてるのかを…ね。」

「…！！」

闇影はそれを聞いて全身を硬直させ、目は見開き、額から汗を垂らし出し、気づけば二人の姿が其処になかった。

「あの人達、また消えたわ…。つて、先生、大丈夫？」

「…ん？あ、ああ…大丈夫さ。心配しないで。さあ、外に出よう！」

黒深子の言葉に意識が戻った闇影は、リビングを出て玄関へと向かった。しかし、表情はずっと浮かないままだった。

「先生…。」

「あいつ…ホントに大丈夫なのか？」

森の中

「この世界のライダーは一体何処に居るんだろう？なあ…闇影。」

「…。」

お前、何なんだよ！俺に構うんじゃないよ！

まあまあ、気にすんなよ。お前の悩みは俺が解決してやるって！

コウイチは闇影に歌舞鬼の居場所の話を振ったが、返事が返ってこないので大声で話し掛けてみた。

「おいつ！闇影！！」

「！！な、何だよコウイチ。びっくりするじゃないか！！」

「お前が返事しないからだよ！どうしたんだ？さつきから。」

「そうか…すまない。」

「ねえ、先生。さつきの巡さんって人に何を言われたの？」

黒深子は、闇影の異変の原因は先程巡に言われた事が原因ではないかを尋ねた。

「それは…」

「きゃああああっつつつつ！！！！！！！！！！」

「「「!!!?」」」

突然、何者かの悲鳴が森中に響いた。闇影達は辺りを見回してみると、三人の幼い子供達が二体の異形に襲われている光景が見えた。

「あれって…!?!」

「ああ、魔化魍だな！ここは俺が行く!!」

そう言うと闇影は、彼等の下へと駆け寄った。魔化魍は、音撃でしか倒せない異形である為、普通のライダーでは倒せない。しかし、デイトライトである闇影ならその方式を無視して倒す事が可能であるのだ。

『コケケケ…!』

『クコココ…!』

「はあ…はあ…ど、どうしよう…。アイツ等…はあ…未だ…追って…くるよ…。はあ…はあ…」

「…。」

三人の内の一人の前髪が揃った長い黒髪の少女は、走り過ぎた為息絶え絶えとしていた。もう一人の同じく前髪が揃っているが此方はポブカットヘアな寡黙な少女も同様だった。それに構わず魔化魍達はじりじりと彼等に近づく…。

「ちつくしよおっ!!逃げ切れねえなら…!!」

「な、何するの！？キョウスケ！」

キョウスケと呼ばれた額にゴーグルを着けた跳ね返った茶髪の活発な少年は、地面に落ちてる太目の木の棒を拾い構えて、魔化魍と戦う様だった。

「こいつ等は俺がなんとかする…！カスミとヒナカは先に逃げる！」

「無茶だよ…！！キョウスケじゃ勝てないよ！！」

「うるせえ！やってみねえと分かんねえだろ…！！初めに言っとくぜ…俺はとーても、強い…！！」

「気持ちは分かるけど、無茶は駄目だよ。ふっ！」

『コガツ！？』

闇影は遠くから魔化魍に石を投げつけて、注意を自分に向けさせた。

「後は任せて…。変身！」

【KAMEN・RIDE…DELIGHT!】

『子供を襲う奴にはお仕置きが必要だな…行くぞ…！』

闇影はディライトに変身し、魔化魍に「お仕置き」宣言した。

「誰だ…？アイツ。」

『はあっ！ぜいっ！それっ！やあっ！』

『コカツ！コケツ！コオツ！』

デイルイトはライトブッカーで魔化魍を斬りつけていき、正面蹴りを喰らわせた。しかし、もう一体の魔化魍が後ろから攻撃した。

『ケケイツー！』

『ぐああっ！！くっ…そつちが二体なら、こつちも二体だっ！！』

【SHADOW - RIDE…CULLIS!】

デイルイトはカードを装填し、自身の影をカリスへとシャドウライドさせた。

『特別に…これだっ！』

【FORM - SHADOW - RIDE…CULLIS! JACK!】

デイルイトが「特別」なカードを使用すると、スカリスは複眼の色がメタルレッドになり、両肩には金色の三本の爪の様な物が生え、胸に金色の狼の絵が刻まれたアンデッドクレストが浮かんだ戦士「仮面ライダーカリス ジャックフォーム」にフォームチェンジした…。

『ク…クカアアアツッ！』

『コ…コカアアアツッ！！』

魔化魍はその姿に少し怯んだが、それでも尚彼等に襲いかかった。

『これで…終わりだ!』

【FINAL・ATTACK・RIDE…CU・CU・CU・CU  
LLIS!】

『はあああ…喰らえええっつ!』

『グガアアアアツツツ!!!』

デイルイトとスカリスJFは右腕に強力な風を纏いながら素早くダツシュし、手刀を叩きつける「J・スピニングウェーブ」を魔化魍達に叩きつけると大爆発した。

「ふう…大丈夫?」

変身を解除した闇影は、子供達に怪我はないのかを尋ね心配をした。

「は…はい。ありがとうございます。」

「魔化魍を倒すなんて…おっさん、何者だよ。」

「お、おっさんって…俺は煌闇影、旅人さ。君達は?」

「私はカスミです。彼はキョウスケ。で、この子はヒナカ、私の妹です。」

「…。」

長い髪の少女・カスミは自分達の名前を闇影に紹介した。しかし、彼女とは正反対のボブカットの少女・ヒナカは口を閉ざしながらこくと会釈した。

「あれ、どうしたの？」

「ヒナカは口が利けないんだよ。目の前で両親が魔化魍に殺されたところを見てからずっとな…。」

「！…ご、ごめん！！俺知らなくて…！！」

「…。」

なんとヒナカは、両親が目の前で魔化魍に殺されたショックから声を失ってしまったのだ。それを知った闇影は、彼女に頭を下げた。するとヒナカは首を横に振った。おそらく「気にしないで」と言う返事なのだろう…。

「私達、この森で山菜を採りに行ってたんですが、途中であの魔化魍達に襲われて…。」

「そうだったのか…よし、俺が君達の家まで送ってあげるよ！」

「えっ！！でもなんか悪いですよ。」

「気にしないで。それにさっきみたいな事が起きるかもしれないし。」

「

「先生…！！大丈夫!？」



こうして闇影の何時もの「お節介」がまた始まった。その後、黒深子とコウイチと一緒に子供達の自宅迄歩いた…。

### 孤児院・かぶきの庵

「ここが…君達の家…？」

闇影達が着いた場所は、木造の大きめな建物で出来た家と言うよりキャンプのロッジに近い物だった。

「はい！送って下さってありがとうございます！どうぞ入って下さい。お茶をご馳走しますから。」

「なんか悪いなあ…じゃあ、お邪魔します。」

中に入ると、カスミ達と同じ位の年齢の子供達が沢山いた。遊んでいる子もいれば、何かの作業をしている子もいた。

「うわあ…子供がいっぱいいるわね…。」

「カスミちゃん、ここって一体…？」

「ここは…親を事故で亡くしたり、魔化魍に殺されたりした子を引き取る場所なんです…。」

「」「」「！」「」「」

「さつきも言いましたが、私もヒナカもキョウスケもその一人なんです。そんな子達をカブキさんが皆引き取っているんです。」

「カブキさん？」

「カブキさんはな、俺等の面倒を見たりしてくれてるんだ。とつても強くて、こないだなんて大きな猪を仕留めてたんだ！そんなだけ強い理由はな…。」

「おい、キョウスケ…あまり余計な事を喋るな。」

キョウスケの背後から、肩迄伸びた黒いボサボサの頭に、鋭い目をした、獵師の様な服装を着た無精髭の男性が現れた。

「カブキさん、お帰り！」

「カスミ、キョウスケ。こいつ等は？」

「あつ…すみません。なんか勝手にお邪魔しちゃって。」

「この人達は私達が魔化魍に襲われているのを助けてくれたの。だからそのお礼をしたくて…。」

「余所者は帰れ…二度とこの家の敷居を跨ぐな…。」

「え…出て行行って、どういうこ…!？」

カブキは、闇影達にこの家から出る様言うと、持っていた獵銃を突き付けた。

「もう一度言う…死にたくなければここから出て行け…今すぐに！」

「ちょっとカブキさん！いくらなんでもそれは…！…！」

「分かりました。勝手に上がって申し訳ありません。黒深子、コウイチ、帰るぞ。」

「えっ…！？ってちょっと先生！？待ってよ。」

「おい、闇影！おゝいつてば！？」

闇影は一切反論せず、カブキに一礼してこの家を出て行った。黒深子とコウイチも追う様に出た。

「銃はやり過ぎじゃねえか…？」

「カブキさん…まだ『あの事』を…？」

「…晩飯の準備をするぞ…。」

キヨウスケとカスミの言葉を無視し、カブキは夕食の準備をする為部屋を出た。

森の中

「あゝびっくりした！！いきなり出て行けって言いながら銃を突き付けてくるなんて…。」

「先生、これからどうするの？」

「…！！悪いけど、先に帰ってて。俺用事思い出したから。」

「えっ？忘れ物？だったら一緒に行くわ。」

「いや、いいんだ。俺一人でいい。」

「ふう…分かったわ。後でね。」

「じゃ、黒深子ちゃん。森は危険だから俺から離れないで。」

「コウイチが一番危険な気がするんだけど。」

「ぐはっ！！そんなあ…って待ってよ黒深子ちゃん！！」

黒深子の辛辣な言葉に打ちひしがれるコウイチだが、気付くと黒深子は先に進んでいた。闇影は二人がいなくなつたのを見計うと…

「隠れてないで出て来たらどうなんだ！巡！周！」

そう叫ぶと、木の影から饅頭を頬張りながらその袋を持った巡と火の付いた煙草を啜えた周が現れた。

「ああむ…ふふ…気付かれちゃった」

「相変わらず鋭いのなんの…。」

「あの家で妙な視線を感じてな…。目的は何だ？」

「今朝も言ったじゃない…。」この世界のお宝を貰う』って。」

「邪魔すんなとも言ったがな…俺様達が狙っているのは、野郎の持つ『黒の変身音叉』。ありや戦国時代に作られた物で、今じゃ超レアな宝な…んごっ…！」

周は煙草を吸いながら、自分達の目的を聞いても無いのに闇影にベラベラと話した為、巡から顔面にパンチを喰らった。

「余計な事迄喋らないで。」

「…ごめんよ、巡ちゃん。」

「じゃあ、やっぱり彼がこの世界のライダー…？」

「当り 戦国時代のお宝なんて…手に入れて当然じゃない。」

「この世界のお宝は俺様達が戴く。だからよ、邪魔はすんな。」

「もし邪魔するようだったら…闇影君を殺す…。」

巡と周は、闇影に邪魔立てしない様釘を刺した。巡に至っては殺すとドスの利いた声で恫喝していた。

「なら俺は…それを止めるまでだ。子供達を守る為に必要な力は、絶対に奪わせない…！」

「けっ！ホントすっかり優等生だな…昔『死神』と恐れられたてめえが…よっ…！」

「くっ…！…！」

周は闇影の「優等生な言葉」が気に入らず、彼に回し蹴りを繰り返した。しかし、闇影はそれを腕で受け止めた。

「おまけにそれがばれる事にビビってるみてえだな。さっきあいつ等を先に帰したのがその証拠だぜ。やっぱお前変わっちまってるよ。」

「…。」

「と・に・か・く！仕事の邪魔はしないでね闇影君。じゃね。」

「あばよ、死神さんよ。」

「待てっ！くっ、また消えたか…。」

巡と周は、またも闇影の前から姿を消した。彼の嘗ての名前を言いながら…。

「…だったら、俺のすべき事は…。」

そう言つと闇影は、ある事を思い付き出した…。

甘味処・かがやき

「先生…絶対何か悩んでいた。そんな気がする。」

「あの二人が何か知ってるかもな…。」

「そういえば闇影さんが初めてここに来た時に、何か独り言を呟いてるのを聞いた事あるわ。」

「えっ、そうなのお母さん？どんな事！？」

影魅璃は、闇影がこの家に来た時に独り言を言っていたのを聞いていた様だ。黒深子はその話を母に聞き出した。

「何だったかしら…『俺のせいだ…。俺があの人を殺したんだ。』  
つて…。」

「殺したつて…先生が！？そんな…。」

黒深子はそれを聞いて愕然とした。あの優しい闇影が人を殺したという信じられない話に耳を疑った。その時…

「えっ？な、何っ!？」

突然謎のオーロラが表われ、黒深子を時が止まった様な空間へと移動させた。そこに赤いフードの女性・紅蓮がいた…。

「突然ですまないな…白石黒深子。私の名は紅蓮、影の監視者だ。」

「紅蓮…？そう…貴女がコウイチや相馬君に先生が灰燼者だなんて吹き込んだのね！？」

黒深子は、紅蓮がコウイチや相馬ユウジ／仮面ライダーオーガを噓けて闇影を襲わせた事を知り、彼女に憤慨した。

「私は事実を言った迄だ…。奴の存在は世界の調和を乱し、やがて全てを焼き尽くす…！！悪い事は言わない…あの男から離れろ。」

「違う…違うわっ！！先生は灰燼者なんかじゃない！！これまでずっと世界を…私達を救って来た！！」

黒深子は、闇影が灰燼者ではないと紅蓮に強く反論した。オルフェノクになり人を殺めてしまった自分や鏡の中でしか生きられなかったコウイチ、そして数々の世界を「光」へ導き救って来た彼が世界を焼き尽くす筈がないと…

「…今は話しても無駄の様だな…今日の所は引き下がろう。だが、奴が灰燼者であり『死神』である事は絶対の真実。それを忘れるな…。」

「待って！！貴女は先生を知っているの！？『死神』って何の事なの！？」

そう言うと紅蓮はオーロラに包まれ消えていった。同時に黒深子もオーロラにより元の場所へと帰っていった。

「待ってっ！！…って、あれ、何時の間に…？」

「黒深子ちゃん！！どうしたんだ？急に寝たと思ったたら大声出して



「凄い汗かいてるけど、嫌な夢でも見たの？」

「（え？寝た？今の…夢だった？）ううん、大丈夫。ちょっとシャワー浴びてくる。」

黒深子はリビングから出て行き、風呂場へと向かった。

「（先生が『死神』…もしかして、巡さんが言った事と関係があるのかも…。）」

### 孤児院・かぶきの庵

夕食後、カブキは子供達が風呂に入っている間竈にくべる為の薪を取りに行こうとした時、闇影が現れた。

「またお前か…。今度は何の様だ？」

「夜分遅くに申し訳ありません。今、貴方の持つ『黒い音叉』が狙われています。ですから、暫くの間貴方を守るうと決めました！」

「…は？」

なんと闇影は、巡と周に音叉が盗まれるのを防ぐ為、カブキを守るに決意したのだ。あまりの唐突な話にカブキは呆れていた。

「勿論、ここの手伝いもしますよ！あわよくば、貴方の悩みも解決…」「ふざけるなっ！！」

「さつきから何を訳の分からない事を言ってるんだ！？今日会ったばかりのお前に俺の何が分かる！？音叉が盗まれる等、一体何の話だ！？」

カブキは怒りを露にして闇影を怒鳴った。確かに、初対面の人間がいきなり自分を守る等、悩みを聞く等言うのは怪しいと感じるのは当然だ。だが彼の場合、それとは別の理由がある…

「俺は他人等誰も信用しない…誰も信じられるか！！」

「カブキさん…何故そこまで…何か理由があるんですか？」

「まだ言うのか！！いい加減に…！！」

「おいしそうなにんげんがいるね。」

「ああ、それもふたり。あのいえにもたくさんいるよ。」

「！！！！」

闇影とカブキの前に、女の声をした男と男の声をした女の奇妙な二人が現れた。彼等は童子と姫…魔化魍の教育係に当る人物である。

「おまえたち！！出番だ！！」

「コカカカ…！！」

姫が叫ぶと、その背後から無数の魔化魍が数十体程現れた。人を喰える為、涎を垂らしている者が沢山いた…。

『いいか？いえにいるやつらはさらうだけだからな。くっついていいのはあのふたりだけだ！』

童子は、何故か家の中の子供達は喰わずに拐う様に命令した。それを聞いた魔化魍達はやや不満そうだった…。

「子供達には手を出させんぞ！！魔化魍共！！歌舞鬼…。」

カブキは懐から黒い変身音叉を取り出し、長靴に軽く叩き音を出すと、それを額に近づけた。すると、彼の額に鬼の紋章が浮かび、全身を桜吹雪が包んだ。そして…

『むづううん…はあっ…！』

頭部の右が緑、左が赤色の伸びた角、黒いスーツに金色の肩当てが特徴のこの世界のライダー「仮面ライダー歌舞鬼」へと変身した…。

「やっぱり、貴方が…」

『ここは俺が片付ける…お前はさっさとここから消えろ…！』

「逃げるなんてとんでもない…変身…」

【KAMEN・RIDE…DELIGHT!】

歌舞鬼をあくまで守るといふ闇影も、デイライトに変身した。

『絶対に貴方を守ります！何があっても…！』

ここは俺に任せとけ！お前は、俺が守ってやるから。

『ふん…！勝手にしろ。だあつ！ふつ！ぜやあああつつ…！』

『ギャアアアアツツ…！』

歌舞鬼は、黒い音叉を「鳴刀・音叉剣」に変化させ、魔化魍を次々と斬り裂いていき、背後からの敵も回し蹴りで蹴散らしていき、時には拳で殴る等、その怒涛の勢いは、正に「鬼」そのものだった…。

『凄い…今までのライダー達も強かったけど、カブキさんは格段に強い…はあつ…！』

『グモオオオツツ…！』

デイトライトは敵を斬りながら、鬼神の如く戦う歌舞鬼の戦いぶりを見て、息を飲んだ。

『でも、何故だろう…？彼から憎しみ…いや、悲しみの気しか感じ取れない…。』

『くたばれっ！消えろっ！化物があつ…！』

『グガアアアツツ…！』

デイルイトの言葉通り、歌舞鬼からは「守る」為の闘気より、「殺す」為の邪気が感じられる。その証拠に、魔化魍の顔面に音叉剣を突き刺したり、両腕を斬り裂いてから鬼火で焼き払う等、戦い方がどんだんえげつない物へと変貌していった…。その時…

「随分と賑やかねえ…あむ…お姉さんも混ざっていいかしら？」

「おっ！こりや凄えな…。」

『巡、周！！何で此処に！？』

そこに、おにぎりを頬張った巡と周が颯爽と現れた。その目的は当然…

「決まってるじゃない…私達の目的は…」

「お宝あるのみ！！」

改めて自分達の目的を言うと、巡は赤とピンクが基調の短刀を、周は水色と藍色が基調のハンドボウガンを手元に持ち、二人は一枚のカードを取り出した…。そして、巡はそれを短刀の刃と鍔の間にカードをスラッシュし、周もボウガンの横側にカードをスラッシュした。

『お前達…まさかそれは…！！』

【【KAMEN・RIDE…】】

「「変身！！」」

【DISHIRF!】

【DISTEAL!】

巡が短刀を縦に振ると、全身に赤いスーツが包まれ、振った場所からピンク色のライドプレートが左肩以外に突き刺さり、右が黄色、左が黒の複眼の戦士「仮面ライダーディシーフ」に変身し…

周が真上にトリガーを引くと、全身に水色のスーツが包まれ、そこから藍色のライドプレートが突き刺さり、右が黒、左が紫の複眼の戦士「仮面ライダーディステイル」に変身した。

『ディシーフに、ディステイルだと…!?そうか、それで…』

『まあ見・て…てっ…!』

ディシーフはクロックアップの様に高速移動すると、ディシーフドライバーで魔化魍達を切り裂いていった。

『グギヤアアアツツ…!』

『俺様に射抜けねえモンは…無い…!…うりやりやりやああっつ…!』

ディステイルは軽口を叩きながらディステイルドライバーを連射して、光の矢で魔化魍達を射抜いていた。

『グアアアツツ…!』

『なんだこいつら…!!?おにじゃないのに…。』

『鬼じゃないわよ。』

『俺様達は、盗賊だ!!!』

【KAIZIN - RIDE… GARULU! SWALLOW TAIL  
L - FANGIRE!】

デイスティールは二枚のカードを読み込ませてボウガンを撃つと、青い狼の姿をしたウルフェン族の生き残りの「ガルル」とアゲハチヨウをイメージしたファンガイア「スワローテイルファンガイア」が現れた。

『行つてきな。』

『グオオオオツツ!!!』

『ヘヤアアアツツ!!!』

『グギヤアアアツツ!!!』

デイスティールの号令を聞き、ガルルは鋭い爪で敵を引き裂いていき、スワローテイルFは掌から光弾を放ち、魔化魍達を殲滅していた、

『これが…あいつ等の力…。』

『さてと、そろそろ…』

『ケリを付けるか!』

【FINAL - ATTACK - RIDE...DI・DI・DI・DI  
SHIRF!】

【FINAL - ATTACK - RIDE...DI・DI・DI・DI  
STEAL!】

『これでお終い はあっ!!』

『光のシャワーを浴びてみな...おらあっ!!』

『ギヤアアアアツツ!!!!』

デイシーフがカードを読み込ませると、彼女の正面に十枚の巨大なカードが並び出し、それをドライバーで振り上げると、大きな衝撃波の斬撃が敵を殲滅するFAR「デイメンジョンスライサー」を発動した。

デイスティールがドライバーを宙に向けると、その周囲に無数のカードで出来た円が現われ、ガルルとスワローテイルFはそれに吸収された。それにめがけて矢を射つと、上空から無数の光の矢が雨の様に降り注ぎ敵を一掃するFAR「デイメンジョンスコール」が発動した。この二つの強力なFARにより、魔化魍達はほとんど消滅した。

『グ...ガ...ガ...』

『しぶてえ奴がいるな...こいつは「貰つとく」か!』



【STEAL・RIDE…MA・MA・MA・MAKAMOU!】

『グウツ…!?グツ…グギヤアアツツ!!!!!!』

『魔化魍が…カードになっていく!?』

デイスティールは僅かに生き残っていた魔化魍にボウガンを撃つと、魔化魍は光に包まれカードとなり彼の手元に吸い寄せられた。この「ステイルライド」のカードはライダーや怪人をライドカードにして「奪う」能力を持っているのだ。

『ここはいちどひいたほうがいいな。』

『「あのかた」にはなさないと。』

童子と姫は戦況が悪いと判断し、その場から消えていった。

『あら、逃げちゃったわね…まいつか、じゃあ、お仕事と行きますかっ!』

【KAMEN・RIDE…ZERONNOS!】

デイスティールがカードを読み込ませると、緑の牛の電仮面に胸の金のレールが特徴の戦士「仮面ライダーゼロノス アルタイルフォーム」の姿にカメンライドした。

『最初に言っておくわ!私がかーなり、強いわ!』

『貴様等も敵か!?ならば…殺す!』

DゼロノスAFと歌舞鬼はドライバーと音叉剣で斬り結び合い、互角の戦いを繰りひろげていた。しかし、背後から別の攻撃を喰らってしまった。

『ぐああっ!!』

『俺様も忘れんなよ。うらあああっっ!!』

背後からディステイルの射撃攻撃が襲ってきた。正面にDゼロノスAF、背後にディステイル、どう見ても歌舞鬼の分が悪く攻撃を避けながら戦う彼のスタミナが所除に切れていき…

『くっ…しまった!』

『やったわ!これは頂き…』

その隙を付かれ音叉剣を弾かれてしまい、それを回収しようとしたDゼロノスAFだが…

『させるかっ!!』

【ATTACK-RIDE…LASER!】

『きゃああっっ!!!?!』

ディライトは、そうはさせじとディライトレーザーでDゼロノスAFの行動を阻止した。その衝撃でDゼロノスAFは元のディシーフの姿に戻った。

『お前…何で…?!』

『邪魔しないでって言ったでしょ！？闇影君！』

『こつちも奪わせないと言ったはずだ。カブキさんは…俺が守る…  
ぐあぁっ！…！』

歌舞鬼を守ると言い張るディライトは、背後からディステイルの射撃を受けた。

『よくも巡ちゃんに当てやがったな…許さねえ…てめえを殺してから奪ってやる…！』

【ATTACK - RIDE…SPARK!】

『ぐあっ…！か、身体が…痺れて…動かない…！…！』

ディステイルは水色の電撃「ディステイルスパーク」をディライトに撃つと、彼の身体に電流がほど走身動きを取れなくした。

『これで避けられねえだろ。最後に…』

【FINAL - ATTACK - RIDE…】

ディシーフを攻撃されて怒りを露にしたディステイルは、ディライトを本気で抹殺すべく自身のFARを発動しようとした。

『くたばりやがれっ…！』

『くっ…！…！』

いかにデイトライトでも、FARをまともに喰らえば確実に死んでしまふ…。彼の運命やいかに！？次回、仮面ライダーデイトライト！

「貴方は、昔の俺に似ているんです。誰も人を信じられなかった俺に…。」

「俺は、大切な家族を…人間に見殺しにされたんだ！！」

カブキを嘗ての自分と同じだと言う闇影。そして、カブキの過去が明らかになる…。

「お前は『死神』だ。貴様は世界に在ってはならない存在だ！」

「悪いけど、彼に死なれるのは困るのよね。」

「こいつを倒すのは俺様達だからな。」

そして、『死神』とは何なのか？

「俺は…大切な人を失った悲しみを…もう誰にも味わって欲しくないんだ！！」

悲しみを増やさない為に戦う闇影。そして、カブキの心に変化が…？

次回、「悲しみの無い明日の為に」

全ての闇を、光へ導け！

## 第11導 歌舞鬼と盗賊と子供達（後書き）

巡「と言うわけで、私が仮面ライダーデイシーフこと彩盗巡と、」

周「仮面ライダーデイスティールこと戴問周だ。」

巡・周「宜しくね（な！）」

虎居合瑠「くそっ…俺の唯一の活躍の場面まで奪いやがって…」

闇影「そんな事より、虎居合瑠。あの冒頭のシーンは何だ！？何で巡が…そ、その…／／／」

虎居合瑠「全裸で君のベッドで寝ていたのかか？あれは読者サービ  
スって奴…ってあれ？二人共どしたんだ？ん？ひ、ひいいいっつ！  
！」

黒深子「そんなくだらない理由であんなシーン作ったのか…（般  
若顔で迫る）」

コウイチ「何〜で闇影だけあんないい思いしてんだよ…（ドラグセ  
イバーを携えて）」

虎居合瑠「ま、待てっ！！お、お、お、落ち着けっ！！話せば分か  
るっ！！だから、それ以上、くっ、来るな…来るなあああっつ！  
！！ギイヤアアアアアアッ！！！！（二人にリンチされ強制  
退場）」

巡「あらあら…じゃあ、皆。次回の後編までお楽しみに」

周「俺様達の詳細についてはまた今度に。じゃあな！！」

第12導 悲しみの無い明日の為に (前書き)

カブキ「読者の皆、四ヶ月ぶりの更新になって済まない。馬鹿作者が新しい携帯を買い復活したようだ。」

カスミ「前使ってた携帯のメールに続き書いてあってそれ写すのに時間が掛かってたみたいよ。」

キヨウスケ「とーても時間の無駄だったな。」

ヒナカ「∴。(コクンと頷く)」

虎居合瑠「お前等勝手な事ばかり言ってるじゃねえええつつつ！！！！仕事の合間にこれ書くのにどれだけ苦労したのか知らん癖につ！！!(、o、)(」

一同(作者以外)「∴」

ヒナカ「∴。(同じく頷く)」

虎居合瑠「ちつくしよおおおおつつつ！！！！!(∴)∴(」

カブキ「何はともあれ、歌舞鬼編の後編開始だ。」

カスミ・キヨウスケ「∴では、どうぞ！！!(」

## 第12導 悲しみの無い明日の為に

デイシーフを攻撃された事に激怒したディステイルは、自身のFARでデイライトを抹殺しようとするが…

『ふっ！！』

『何っ！？ぐあっ！！』

歌舞鬼は、動物の絵が刻まれたディスク「アニマルディスク」をディステイルの手元に投げつけてドライバーを叩き落し、彼を変身解除させた。

『カブキさん！』

『勘違いするな。俺は敵の攻撃を阻止しただけだ…。更に…喰らえっ！』

歌舞鬼は、緑色の炎を灯した翡翠色の撥「音撃棒・烈翠」を取り出しデイシーフと周に向けて太鼓を叩く様に振ると、無数の炎が彼等を襲った。

「熱っちちちっ…！！どうすんだ、巡ちゃん！？」

『ここは一旦引き上げるしかないわね…次こそ必ずその音叉を戴くから。じゃあね』

【ATTACK・RIDE…SMOKE！】



『うわっ！煙幕か！？』

デイシーフは「スモーク」のカードを使い煙幕を作り出し、それが止んだ時には二人は姿を眩ましていた。

「ふう…何とか退いたか…カブキさん、さっきは助けて下さってありがとうございます！」

「何度も言わせるな。俺は敵の攻撃を防いだけで、お前を助けた覚えはない。」

「なら最初から音撃棒で攻撃すれば良かったのに、態々アニマルデイスクを投げつけてから攻撃したんですか？」

「あ、あれは…カブキさ〜ん！！！！」

カブキは闇影を助けた覚えは無いと否定するが、彼から尤もな反論を受け言い淀んでいた。丁度その時、庵からカスミ、キョウスケ、ヒナカの三人が出て来た。

「大丈夫ですか！？どこか怪我はしてませんか！？」

「馬鹿鹿。んな訳ねえだろ。カブキさんはとーても強えんだからよー！！」

「ああ、とても強かったよ！それにさっきなんか俺を「少し顔を貸せ。」えっ？ちよっ、ちよっと！！」

闇影は三人に自分がカブキに助けられた事を話そうとした時、彼に少し離れた場所迄引っ張られた。

「さつき起きた事は絶対あいつ等に言つな。」

「え？何ですか？」

「い・い・か・ら絶対に言つな！今日一日ここで泊まらせてやるから！」

カブキは小声で、先程の行動を一日泊まらせる事を条件に闇影を必死に口止めしだした。

「は、はい…。」

あまりの勢いに闇影はついに承し、それに安心したカブキは彼と共に子供達の下へと戻った。

「…昼間の礼としてこいつを一日だけ泊める事にした。」

「ええっ！？あのカブキさんが人を泊めるっっ！？」

カブキは「昼間に子供達を助けた礼」として闇影を泊める事を子供達に話した。すると、自分達以外の人間が嫌いなカブキからこんな言葉を聞いた彼等は、大層驚いていた…。

森の中

『なんてやつらだ。おにでもないのにこどもたちをたおすとは…』

『1111はいちど「あのかた」に…』

『妾（わらわ）に会わずとも話は耳に入っているぞえ。』

『『！あ…あ…』』

童子と姫はデイルイト達の事を「ある人物」に報告しようとした時、何処からか「その人物」の声が聞こえ、それを聞いた二人は何故か怯えていた。

『何者かは知らぬが、中々興味深い人物じゃのう。…彼奴等のせいで妾の今宵の食料を確保出来なんだ…という話かえ？』

デイルイト達の話に興味を持っていた「人物」は、彼等のせいで子供達を拐えなかった二人に憤りを感じ、そして…

『『ひっ…！た、たすけ…ぐあああああ…！…！』』

童子と姫は森の奥から現れた黒い何かに捕われ、引き摺り込まれていき断末魔の如く叫び闇の中へと消えていった…。

『使えぬ奴等じゃ…こうなれば妾が直接行くしかあるまいな…』

世界の光導者、デイルイト！9つの影の世界を巡り、その瞳は、何を照らす？ お兄ちゃん！助けてっ！

こ、これはどういう事だ…？また「あの」光景が…！？ア、アス

ミツ!?

お兄ちゃんっ!!…カムイお兄ちゃん!!助けてっ!!

ま、待てっ!!アスミツ!!

お兄ちゃあああんっ!!!!

アスミイイイツツツ!!!!

「はっ!?!また…あの夢か…また俺は…くそっ!!!」

目覚めたカブキは、夢の中での自分に苛立ち、拳を叩き付けた。どうやら、何度も同じ夢を見ている様だ…。

「…とりあえず朝食の準備をするか…。」

少し落ち着きを取り戻したカブキは、朝食の準備をするべく台所へと向かった。すると…

「あつ、カブキさん!御早うございます!」

そこに、三角巾を被りエプロンを着けた闇影が朝食の準備をしていたのでカブキは思わずズッコケた。

「なっ、何でお前が準備をしているんだっ!?!」

「何でって…一晩泊めて下さったお礼をするのは当然じゃないです

か。」

「だからって…」

「御早う…。うわぁ…凄いいい匂いがする。」

「凄っげえ旨そうなあ…これ全部闇影兄ちゃんが作ったのか？」

起きてきたカスミとキヨウスケは闇影の作った大量の料理を見て賞賛した。

「うん！沢山食べてね。他の皆も起きてくるからそろそろ座ってさ、カブキさんも。」

「はぁ…こいつを泊ませたのは間違いだったな…。」

カブキは闇影を泊めた事を後悔し、額に手をあてながら食卓に着いた。

「綺麗にするのは掃除 御歳暮品はソーセイジ…っ！」

その後も闇影は、楽しそうに家事をしたり、子供達の遊び相手になつたりしており、今も訳の分からない歌を歌いながら幕で掃除をしていた。

「さって！一通り終わったし、皆のおやつに団子でも作るっかな！」

この世界での闇影の役割は和菓子職人の様であり、それを活かして子供達のおやつを作ろうと考えた時、カブキが現れた。

「煌…。」

「あつ、カブキさん。どうかしましたか？」

「何故、お前は俺を守ろうとする？」

「何故って、それは…」

「あの二人が音叉を狙っているから…だけでは無いのだろうか？」

カブキは、闇影が何故昨日今日会ったばかりの自分を守ろうとするのか、巡と周が音叉を狙っているだけでは無いと思い、その真意を尋ね出した。

「…貴方は、昔の俺とよく似ているんです。誰も信じられなかった自分と…。」

「何？」

「だけど、ある人にこう言われたんです。『人を信じられないのなら、人を信じられる自分を信じてみる。』…と。」

「人を信じられる自分を…信じる…。」

「今の自分があるのはその人のお陰なんです。だから、俺にしてくれた事をやればカブキさんも変わるんじゃないか、と思ったんです。」

なんと、闇影も嘗ては他人を信じられない人間だったのだ。今迄の行動も、「ある人」の言葉により自分が変わった為、自分にしてくれた事をカブキにしてみようと考えての行動の様だ。するとカブキは、口を開き…

「…俺は、いや俺達は…人間に見殺しにされたんだ。」

「…えっ!?!」

「…」

一方、カスミ達は闇影へのお礼の為に川原で綺麗な石を探したり、花を摘んだりしていた。どうやらカブキが闇影を助けた事を皆薄々気付いている様だ。

「ヒナカ、それとても綺麗ね。闇影さん、喜ぶよ。」

「…」

「（闇影さんが来てから、よく笑う様になったわね…本当に良かった。）」

ヒナカは、カスミに摘み集めた花を綺麗と言われ頷きながら笑みを浮かべた。闇影が来てから今迄以上に明るくなった妹を見て、カスミも嬉しそうに笑みを浮かべていた。その時…

「…!?!」

突然、黒く太い何かヒナカを捕らえ、そのまま彼女を引き摺る様に連れ去っていった。

「ヒナカ！ヒナカアアツツ！！」

「カスミ！ヒナカ！どうしたんだっ！？」

「キヨウスケ…ヒナカが…ヒナカが…ぐすつ…。」

「泣くなよ！急いでカブキさん達に知らせようぜ！」

「俺の家族は代々、魔化魍から人を守る為に戦う鬼の子孫なんだ。」

「鬼の…子孫…。」

「当時の俺も、人を守る事を誇りに思いながら戦い、旅をし続けていた。だが…」

「だが？」

「ある村から、大型の魔化魍の討伐の依頼を受けて、そこに赴いた。流石に大型相手には俺達だけじゃ手が足りないから村の連中にも多少の協力を頼み了承してくれた。ところが…。」

カブキは少し顔を険しくし、血が出る程拳を握りながら話を続けた。彼がそれほど強い憎悪を抱くその事実とは…



「奴等は最初から村を捨てるつもりで俺達にその魔化魍を押し付けてさつさと逃げやがった…!!あの連中は、俺達を身代わりにする為に依頼をしただけに過ぎなかったんだ!!」

「…!!そんな…!!」

「結局俺達だけで戦ったが、力の差は歴然…俺以外皆喰い殺されたよ…。父も、母も、俺の妹も…!!」

カブキが人間不信になった理由 それは、守ろうとした人間達により文字通り「生け贄」にされてしまい、それにより魔化魍に家族を殺された事が原因であった。

「辛うじて生き残った俺は、それ以来他人を守る事を止め、魔化魍に親を殺された子供達を救う為だけに戦う事にした…。」

「御自分と同じ境遇の子供達を放っておけなかったからなんですな

…。」

「…。」

そして、自分の様に家族を失った子供達を救うべく「かぶきの庵」を築いたと言う…。話が終わった後、二人は暫く沈黙していた。その時…

「カブキさん!!」

カスミとキヨウスケが血相を変えながら、闇影とカブキの下へ走ってきた。

「二人共、どうしたんだい？」

「ヒナカが…拐われたんだ!!」

「!!…何だとっ!？」

「太くて黒い何かヒナカに巻き付いて、遠くへ連れ去っていったの…。」

「（太く、黒い何か…まさか…!!）…ヒナカが最後にいた場所迄案内しろ。」

「えっ?何で…?」

「いいから早くしろ!何処に連れ去られたのかが分かるかもしれないんだ!!」

「う、うん…。」

カブキは、ヒナカが最後にいた場所迄案内する様子供達に言った。

花畑

「此処からどの方角に連れ去られていったか分かるか？」

「えっと…多分あっちの方だけど…。」

カスミは、ヒナカがあの黒い何かに連れ去られた方角をカブキに聞かれ、その方向に指を差した。

「（やはり『奴』か…！）解った…後は俺に任せてお前達は家に戻つてろ。」

それを見たカブキは、子供達に俺に戻る様促し心当たりがあるのか、カスミが指を差した場所迄行こうとした。

「待つて下さい！俺も行きます！」

当然、闇影もカブキについて行こうとしたが…

「お前、さっきの話を聞いてなかったのか！？俺は…」

「貴方こそ忘れたんですか！？俺が貴方を守るって…！」

「なっ…！」

「それに、もし相手が複数だった事を考えたら、一人でも戦える人間がいた方がいいでしょう？」

カブキは闇影が来るのに無論反対だが、それでも尚、「自分を守る」と言う彼の言葉に少々たじろいだ。

「カブキさん。闇影さんを信じてあげて！」

「カスミ…。」

「俺からもお願いだ！この人もとーても強いから、一緒に戦えば

どんな魔化魍なんか目じゃないぜ！」

「キョウスケ…。」

カスミとキョウスケも、闇影を連れて行く様に頼んだ。二人が闇影を強く信頼しているのを見て、彼の「自分を信じられる自分を信じてみる」という先程の言葉が頭を過った。そして…

「…足手まといになるなよ…。さっさとついて来い！」

「カブキさん…はいっ！」

森の中

「ヒナカ…無事でいろよ…！！誰だっ！？」

突然、何者かがカブキの足元に光の矢を放った。その正体は…

「はい、ストップ。」

「大人しく音叉を渡せばそれでよし。渡さないと…今度は威嚇じゃ済まないわよ。あむ…。」

煙草をくわえながらドライバーを構える周と、団子を食べながら片手に同じくドライバーを構えた巡だった。

「巡…周！」

「そこを退け…貴様等に構っている暇は無い！」

「知るかよ。俺様達の仕事に関係無え事だ。」

「子供の命が懸かっていると知ってもか？お前達の仕事はその子の命より大事か？」

「「！！！」」

子供の命と聞くと、二人は少し眉をひそめた。と言っても宝を手に入れる為なら手段を選ばない彼等に何を言っても聞かないだろう。そう思考していた時、あの灰色のオーロラが現れた。そして…

「なっ、これは…うわあっ！！！」

「煌！！！」

それは闇影を包み込み、彼の姿をこの場から消し去った。おそらく「オーガの世界」の時の様に、別空間へ移動したのだろう。

「くっ…二対一か…！！！」

闇影が消えた事で此方の分が悪くなったカブキは、巡達と戦う覚悟を決めようとしたが…

「これは…あの人の仕業だな。」

「ここは一旦仕事は中断ね。私達も行くわよ！せいっ！！！」

何故か二人は、音叉を奪う「仕事」を中断すると言い出し、巡がデイスリーフドライバーで空を斬る様に振り上げると、そこに大きな次元の切れ目が生まれた。二人がそこに飛び込む様に入ると同時に、切れ目も消えていった。

「あいつ等も消えた…!! 一体どういう…煌の行方も気になるが、今はヒナカが先だ…!!」

今起きた事が気にはなるが、ヒナカを救うのが先決だと決めたカブキは、再び走り出した。

「ここは…ミラーワールド!?」

闇影が移動した空間は、全ての建物が反転した空間だった。この事から、コウイチのいた「リュウガの世界」にある「ミラーワールド」と推測したが…

「少し違うな…。此処はそれに似ただけの異空間に過ぎない。」

「…!! 粗方解ったよ…これもお前の仕業なんだな…紅蓮…!!」

闇影が叫ぶように、自分をこの空間に移動させたのは、彼を「死神」と罵る赤いフードの女性 紅蓮だった。

「デイトライト…貴様は全ての世界に在ってはならない存在…此処で葬ってくれる…!! 出でよ! オーディイイン…!!」

紅蓮が叫びながら両手を広げると、灰色のオーロラから黄金色の鳳

鳳をイメージしたその神々しい姿は、正に「神」と呼ぶに相応しいライダー。「仮面ライダーオーディン」だった…。

『…。』

「残念だけど、此処で死ぬ訳にはいかないっ！変身！」

【KAMEN - RIDE... DELIGHT!】

『はあああっっ…!!』

闇影はディライトに変身するや否や、ライトブッカーでオーディンに斬り掛かったが…

『…。』

【SWORD - VENT】

オーディンは錫杖型のバイザー「鳳凰召錫ゴールドバイザー」にカードを読み込ませると、二振りの黄金の剣「ゴールドセイバー」を召喚し、×の字にして斬撃を防ぎ…

『くっ…！防がれ…ぐああっ…!!』

ゴールドセイバーを広げてディライトの腕を浮かせて、その隙をついで攻撃した。

【ADVENT】

更にオーディンは、黄金色の鳳凰をイメージした自身の契約モンス

ター「ゴールドフェニックス」を召喚し、デイライトを襲わせた。

『ぐあああつつー!!』

Gフェニックスの強力な攻撃を受けたデイライトは、あまりのダメージの大きさに変身を解除させられた。

「何か焦っている様だが、それで勝てる程オーデインは甘くない！」

「くっ…！早く…カブキさんの所へ行かないといけないのに…此処で…終わるのか…？」

確かに紅蓮の言う通り、闇影はカブキの手助けをしたいが為にどこが焦りを感じており、それが彼の手を鈍らせていた。その時…

「終わらせないわよ。」

突然空間に切れ目が生まれ、そこから巡と周が現れた。

「お前達…！どうやって…いや、何で此処に!？」

「貴様等も来たか…デイシーフ、デイスティール。」

「紅蓮さん。貴女には悪いけど、彼を未だ死なせる訳にはいかないのよね。」

「こいつを倒すのは、俺様達だから…な！」

「「変身…!」「」



【KAMEN - RIDE... DISHIRF!】

【KAMEN - RIDE... DISTEAL!】

巡と周は、闇影を死なせないと言いながらディシーフとディステイルに変身した。

『相手がオーディンなら、これよね』

【KAMEN - RIDE... KNIGHT!】

『行つてきな。』

【KAIZIN - RIDE... CRAB - ORPHNOCH!】

『ハアアア...。』

ディシーフは紺色の蝙蝠の騎士をイメージしたライダー「仮面ライダーナイト」にカメンライドし、ディステイルは蟹の特性を持った左腕が機械鋏のオルフェノク「クラブオルフェノク」を召喚した。

【ATTACK - RIDE... SWORD - VENT!】

『はあああつっ!...!』

Dナイトは契約モンスター「ダークウイング」の尾を模した剣「ウイングランサー」でオーディンに斬り掛かっていった。初めの内は、彼が優位に立っていたが...

『フツ!...!』

『!?!?』

クラブOは、左腕の機械鋏をワイヤーの様に伸ばしオーディンを捕らえ、そこから電流を流した。更に…

『相手は巡ちゃんだけじゃねえんだぜ!!』

【ATTACK - RIDE : LASER!】

ディステイルは水色のレーザー「ディステイルレーザー」でオーディンを狙撃した。前からDナイト、後ろからディステイル、流石に彼の分が悪くなってきたが…

『…!!』

『ええっ!!嘘でしょっ!!?そんなの…きゃああああっ!!』

『グアアアツツ!!』

それに構わず力づくでクラブOの鋏から抜け出し、そのままの勢いで二本のゴールドセイバーを真横に振り上げて衝撃波を放ち、クラブOを破壊し、Dナイトをディシーフの姿へと戻した。

『巡ちゃん!!大丈夫っ!?!』

『…流石は神のライダーと呼ばれるだけあって手強いわね…。』

『向こうが神なら、こっちは帝王でいくか!!』

【KAMEN - RIDE : ORGA!】

ディステイルがドライバーにカードをスラッシュして放つと、黒き地の帝王・オーガが現れた。そして、そのままオーガストランザーでオーディンに斬り掛かっていった。

『はっ！ふっ！せいっ！！』

『…！！』

オーガストランザーとゴールドセイバーで斬り結び、ほぼ互角の戦いを繰り広げるオーガとオーディン…そして…

『はあっ！！』

『…！！』

オーガは僅かな隙を付き、オーガストランザーをオーディンに突き刺し大ダメージを与えたが…

『…！！』

『ぐあああっっ！！』

それすら物ともしないオーディンはオーガストランザーを抜き捨て、丸腰になったオーガにゴールドセイバーで斬り付けた。

「もはやオーガに勝ち目は無い。無駄な足掻き…でもねえぜ。』  
！?」

【FINAL・FORM・RIDE…O・O・O・ORGAN!】

『じつとすりゃ直ぐ終わる。』

『うっ!?!』

ディステイルはドライバーでオーガを射ち抜き、オーガをストランザーオーガにFFRさせた。

『そんだけダメージ受けりゃ、いくら神様でもひとたまりもねえだろ。』

「貴様…まさかその為にわざと…!?!」

そう、ディステイルは最初からオーガをFFRさせるべく、彼(?)を罠にしダメージを負わせてから武器に変形させて止めを刺す為に召喚したのだ。

「ちいっ…オーディン!!」

【FINAL・VENT】

紅蓮が指示すると、オーディンはファイナルベントのカードでGFエニックスを召喚し必殺技「エターナルカオス」を発動しようとしたが…

『遅いぜ…!!』

【FINAL・ATTACK・RIDE…O・O・O・ORGAN!】

『おおおお…撃ち斬れええつつつ…!!!』

デイスティールはストランザーオーガから放つ水色の光の刃のFA  
R「デイスティールバニツシュ」でGフェニックスごとオーディン  
を斬り裂き「」のマークを残し爆発させたが…

『…。』

爆炎が止むと、なんとオーディンは胸を押さえながら辛うじて生き  
残っていた。

『しぶといな…その力、戴くぜ!』

【STEAL・RIDE…R・R・R・RIDER!】

『!…!』

しかし、デイスティールのスティールライドにより、オーディンは  
呆気なくカードに変換、回収されてしまった…。

「まさか、ライダーまでカードに変換出来るなんて…!!!」

「くっ…デিশーフ!デイスティール!貴様等がどついう了見でデ  
イライトを助けたのか知らぬが、そいつは全てを焼き尽くす『死神』  
…!それだけは忘れるな!!!」

そう言うと紅蓮は、険しい顔をしながら灰色のオーロラの中へと消  
えていき、それに伴い闇影達もオーロラに包まれて元の場所へと戻  
った…。

「戻ってこれたわね…。」

「とりあえず礼は言っておく…。」

闇影はカブキの元へ再び行こうとしたが、周が前を遮った。

「ちょっと待ちな。これで『はい、おしまい』で済むと思ってんのか？」

「何？」

「てめえを救ってやった報酬として、あの音叉を奪って俺様達に渡しな。」

「まあ、命の報酬としては安い物だと思うけどな。」

「…それが目的か。呆れて物が言えないな。」

闇影は、巡と周が自分を助けた理由を聞き怒りを通り越して呆れていた。

「俺は、自分の命を懸けてでも守りたい『宝』を救う手助けをしに行く。それを邪魔するなら…お前達でも容赦しない。」

闇影は目で鋭く睨みながら恫喝し、踵を返してカブキの元へ走っていった。

「命を懸けてでも守りたい宝…か…。」

森の大広場

「此処か…いい加減に姿を現わしたらどうなんだ!!黒蛇(くろち)!!」

『ホホ…相も変わらず思い上がった物言いじゃのう…。』

大きな地震と共に森を荒らしながら、上半身が蛇の様な顔付きをした女性の身体で下半身が無数の太長く黒い大蛇がうよめいた巨大な魔化魍「黒蛇」が現わした。一匹の大蛇がヒナカを巻き付けながら…

「…!!」

「ヒナカ!!黒蛇、貴様…!!」

『最近魔化魍が次々倒される話を聞きこの小娘を拐い誘き寄せて見れば、うぬらだとはな…。』

「何故俺を狙わずヒナカを拐った!？」

『この方が妾にとって都合が良いから…じゃのう。』

「ふざけるなっ!!貴様は此処で倒す!!家族の敵…今こそ取らせてもらっ!!」

この黒蛇こそ、カブキの家族を皆殺しにした張本人の様だ。それと

同時にヒナカを拐った事に強い怒りを抱いたカブキは、歌舞鬼に変身し直ぐ様音叉剣で斬り掛かっていった。

『おおおつつ！！』

『たった一人で妾に勝てると思うてか…笑止！！』

『シヤアアアツツ！！』

『ぐあああつつ！！』

だが下半身の一匹の大蛇が勢いよく突撃し、向かって来た歌舞鬼を木が数本へし折れる程撥ね飛ばした。

「！！」

ヒナカは、そんな彼を見て声を出そうと口をパクパクさせていたがなかなか喋れず歯痒く思っていた。

『くつ…黒蛇…黒蛇！クロチイイツツ！！』

直ぐ様立ち上がった歌舞鬼は、憎悪と怒りをこめて咆哮しながら身体から黒いオーラを生み出し、再び黒蛇に向かっていった。それが彼女に吸収されている事に気付かないまま…。

『往生際が悪いのう…ハアツ！！』

『ぐつ…ぐがあああつつ！！』

数体の大蛇の吐く炎をまともに喰らい、もう数体が先程の様に突撃



された歌舞鬼は変身を解除されてしまい、その勢いで音叉が飛んで  
いってしまった。

「くっ…くそっ…!!」

「もう終わりかえ？ならばさっさと喰『わせるかあっ!!』グガア  
ッ!!」

カブキを喰らおうとした黒蛇は、デイライトの乗るマシンデイライ  
ターに撥ねられ大きく身を仰け反った。

『カブキさん！大丈夫ですかっ!?!』

「煌…。あ…。ああ…。」

『貴様が童子と姫の言っていたデイライトとやらか？少しは骨があ  
ると良いのう…。』

『ここで一気にケリを付けるっ!!』

【FINAL - SHADOW - RIDER: HI・HI・HI・HI  
BIKII!】

デイライトは、自身の影をディスクアニマル達が融合した朱色の鎧  
が特徴の戦士「仮面ライダー響鬼」の最終形態「装甲響鬼」にFS  
Rさせた。

「あれは…伝説の鬼『響鬼』…!!煌…お前は一体…!?!」

何してんだよっ！？俺から離れろっ！！

安心しろ…お前の「闇」は…俺が止めてやるっ！！

『（さん…。）俺は…』

【FINAL - ATTACK - RIDE : HI・HI・HI・HI  
BIKI!】

『俺はもう…大切な人を失う悲しみを…誰にも味わって欲しく無いんだああっ！！』

デイライトとSA響鬼は、ライトブッカーと装甲声刃の刃に黒と赤の炎を宿し敵を斬り裂くFAR「鬼神覚醒」を黒蛇に喰らわせた。しかし…

『ホホ…今何かしたのかえ？ハアアツツ！！』

『何っ！？そんな…ぐああああっ！！！！！！』

「煌！！」

二人分のFARを受けながらも全くダメージを負っていない黒蛇は、大蛇達の吐く炎でデイライトとSA響鬼を焼き尽くし変身を解除させた。

「くっ…何て強さだ…！！」

「あらあら…派手にやられちゃってるわねえ…。」

「いい様だぜ。」

「お前達…!!それは…!!」

突撃現れた巡と周は、目当ての音叉をくるくる回しながら地を這っていた闇影を嘲笑った。

「まっ、ブツが手に入ったし別にいいけどな」

「貴様等…。」

「怒らないの。あまり怒ると相手の思う壺よ。」

「どつという事だ…?」

「怒る…憎しみ…!!そうか!奴は怒り…負の感情に比例して力を増していく魔化魍なんだ!だから黒蛇はカブキさんに負の感情を強める為にヒナカちゃんを拐ったんだ。」

黒蛇の能力 それは、負の感情を吸収する事によりその力を増長させるのだ。ヒナカを拐ったのも、カブキの憎しみを強める為であった。

『人は負に囚われ易い愚かな存在…保身の為に村や他人を犠牲にする者、それにより憎悪を抱いたまま生きる者…そんな奴等など消えて当然よのづ。』

「負の感情を持つ事を愚かな事だとは…俺は思わない。」

『何じゃと?』

「確かに人は、大なり小なり他人に対して憎しみを抱いている…だが、人を思いやり、守りたいという思いがそれを打ち消してくれる!」

「思いやり、守りたいという思いが…憎しみを打ち消す…。」

「だから人と人は手を取り合って生きていける!悲しみのない明日の為に!」

『うぬら…一体何者じゃ!?』

「お節介教師な仮面ライダーだ!!宜しく!!変身!」

【KAMEN - RIDE…DELIGHT!】

『さて、輝く道へと導きますか!』

闇影はデイルイトに変身し、何時もの台詞を言いながらカードをドライバーに装填した。

【ATTACK - RIDE…LASER - BLADE!】

『はあっ!…!』

『ギヤアアアッ!…!』

デイルイトはライトブッカーから放つ「デイルイトレーザーブレード」で一体の大蛇を斬り裂いた。その時…

「…キさん…って…。」

「？」

「カブキさ〜んっっ！！闇影さ〜んっっ！！皆、頑張ってええっっ！！！」

「！！ヒナカ…お前、声が…！！！」

何とヒナカは声を取り戻し、大声でカブキ達を応援した。彼女もまた、闇影の「導き」の言葉に勇気付けられたのだ。

「あらあら、子供の期待に応えるのが大人の務めよね…周！」

「特に女の子の声援は力がみなぎるぜ…あいよ巡ちゃん！」

巡と周は、少し笑いながら音叉をカブキに投げ渡し自分達の変身ツールを構えた。

「俺は…ずっと弱かった自分を憎んでいただけだった…そのせいでヒナカをあんな目に逢わせてしまった…だが…！」

「「変身…！！」」

「あの子達の、そして自分の明日の為に…俺は戦う！！歌舞鬼…！」

【KAMEN - RIDER…DISHIRE!】

【KAMEN - RIDE... DISTEAL!】

巡と周はデイシーフとデイスティールに、そしてカブキは音叉で歌舞鬼に変身し、デイライトの応戦に向かった。

『お前達、どういっつもりだ!? 急に音叉を手放すなんて!』

『勘違いすんなよ。俺様達は子供を利用する奴が嫌いなだけだからな!』

『それに、未だ見てないからよ。自分の命を懸けてでも守りたいお宝を、ね』

デイライトの疑問に二人戦いながら、子供を利用する輩が嫌い、命を懸けてでも守りたい宝を見たいという理由で音叉を返したのだと言う。

『くっ... おのれええっつ!! 凶に乗るなよ! 人間がああっつ!!』

デイライト達の攻撃に業を煮やした黒蛇は、大蛇同士をまとめ上げ、龍に近い一匹の大蛇に変化させ、その口から巨大な黒い光弾を放った。それによりヒナカは解放され、地面へと落ちていった。

「きゃあああっつ!!」

『まずいつ!! ヒナカアツ!!』

【ATTACK - RIDE... BARRIER - FORCE!】

光弾により辺り一帯が吹き飛び、クレーターの様な物が出来た。しかし、爆風が止むとドーム状の透明なバリアに囲まれたディライト達が出た。

『残念だったな。俺様達は生きてるぜ。』

『なっ、何故じゃああっ!?』

『それは、このカードのお陰よ。』

ディシーフは、カードを見せ付けながら「バリアフォース」により光弾から身を守ったのだと説明した。

『力を出し切ったお前に、勝ち目は無い!』

【FINAL - FORM - RIDE : KA・KA・KA・KA・KABU  
KII!】

『カブキさん、力を抜いて下さい。』

『何…おわっ!?!』

ディライトが歌舞鬼の背中に手を当てると、歌舞鬼は黒と黄色の鴉の様な模様が刻まれた巨大なアニマルディスクを模した「カブキアニマルディスク」にFFRした。

『行っけええっつ!!!』

『ウガアアアツツ!!!』

デイライトはKアニマルディスクをfrisビーの様に振り投げて黒蛇の腹に直撃させた。Kアニマルディスクは回転したまま宙を浮いていた。

『これで…最後だっ!!!』

【FINAL - ATTACK - RIDE : KA・KA・KA・KA  
BUKI!】

Kアニマルディスクは、巨大なディスクアニマル「消炭鴉」を模した「カブキケシズミガラス」に変形すると、翼を広げて大きく鳴き出した。

『キイイイツツツ!!!』

『グウツ…頭が…割…れ…ガアアアアツツツ!!!』

黒蛇は、Kケシズミガラスの放つ清めの超音波のFAR「デイライトハウリング」により大爆発した。

「ヒナカ、お前の声のお陰で黒蛇を倒す事が出来た。」

カブキは、ヒナカの応援により怨敵・黒蛇を倒す事が出来た事に感謝するが、彼女は首を横に振った。

「ううん。私が声を取り戻せたのは闇影さんのお陰なの。だから…」

「そうだったな…俺やヒナカの心を救ってくれてありがとう、煌。」



一方、巡と周は黒蛇が倒された場所で何かを探していた。

「お前達、何やってるんだ？」

「あつたぜ巡ちゃん！！アニマルディスク！！」

二人は、三枚のアニマルディスクを見つけて嬉しそうにしていた。

「三枚揃っているからそれなりの価値はあるわね。これが命を懸けてでも手に入りたい『お宝』なのね闇影君。ありがとう。」

「違う！俺が言ってるのは…！！」

闇影は、自分と彼等の命を懸ける価値がある『宝』の見解の違いを指摘しようとしたが…

「また何処かで会いましょ、闇影君。」

「あばよ。」

二人は、次元の切れ目を作り出しその中へと消えて行った…。

「本当の家族みたいで素敵な絵だわ…。」

「そうですね！ヒナカちゃんも声を取り戻せて本当に良かった。」

影魅璃と闇影は、キャンバスに描かれたカブキとヒナカが手を繋ぎ夕日に向かって歩いていく絵を嬉しそうに見ていた。

奴が灰燼者であり「死神」である事は絶対の真実。それを忘れるな…。

「（先生が「死神」なんて…そんな事絶対に有り得ない…！！）」

「ん？どうしたんだ黒深子。」

黒深子は、紅蓮の言っていた言葉を思い返していた時、闇影に声を掛けられた。

「え？うつん、何でもない。それよりも…とりゃあああつっ…！」

「ぐがああつっ…！！？」

突然、黒深子は闇影のこめかみに向かって回し蹴りを喰らわせた。

「ちよっ、黒深子ちゃん！？」

「連絡しないで外泊した罰です！反省して…！」

「う…うめんなさい…。」

それとは余所に、次の世界を表わすキャンバスに、黒鬼と複数の人物が国会議事堂に向かおうとする絵に変わった。

「ネガ電王の世界…青い…縞縞…。」

闇影は、黒深子の下着の色と共に次の世界の名前を言い、そのまま倒れた…。次回、仮面ライダーディライト！

「あれが…ネガ電王…。」

「痛つつ…。」

『お前、中々やるじゃねえか…ちよつと面貸せ！』

突然、ディライトに襲い掛かるネガ電王。その目的は…？

「姉さんの記憶を取り戻したい…でも…！！」

イメージに奪われた姉の悲しい記憶を取り戻す事に悩むネガ電王。  
そんな中…

「マスターパス、頂戴」

『俺、参上！！』

マスターパスを巡り三色の電王が交わり、戦い始める…そして、奪われた記憶の行方は…？

次回、「苦悩するネガ電王」

全ての闇を、光へ導け！

第12導 悲しみの無い明日の為に (後書き)

カブキ「やっと中間か…。」

ヒナカ「アホ作者が遅過ぎなだけだよ。」

キョウスケ「お、おいカスミ。ヒナカってあんなキャラだったか？  
(小声)「」

カスミ「うん…あの子は元々、言いたい事はずけずけ言う性格だからねえ…。(小声)(^ー^;)」

カブキ「しかし、煌の過去と言うのがかなり気になるな…。あいつに一体何があつたんだ…?」

ヒナカ「その辺は何れ判るみたいだね。あつ、そつだ闇影さん！私の声を取り戻してくれて本当にありがとうございます！」

キョウスケ「サンキューな！次は『ネガ電王の世界』だぜ！」

カスミ「旅もいよいよ終盤だね。」

カブキ「ああ、今回は白石がとんでもない事になる様だが、その辺は自分で確めるんだな。」

ヒナカ「それでは皆様！また何処かで会いましょうー！」

## デイシーフ&ディスタイル人物紹介（前書き）

虎居合瑠「読者の皆様！いつもこんな駄文を読んで下さって誠にありがとうございます！m（　　）m」

巡「今回は私達の人物紹介よ　お姉さんの事、皆に全（　）部知って欲しい・か・ら」

周「俺様の事を知り、全ての女性作者が俺様のファンになり…」

虎居合瑠「それでは皆様！この二人の詳細を皆様の『地球の本棚』の1ページにお納め下さい！どうぞ…！」

周「って、オイコリアアツッ！！！！」

## ディシーフ&ディスタイル人物紹介

彩盗 巡（さいとう めぐる） / 仮面ライダーディシーフ

23歳。闇影の過去を知る人物であり、銀髪のショートヘアに巨乳が特徴で、スリットの入った胸元が目立つ黒い服に赤いジャケットを着込み、下に赤のガーターベルトを付けた妖艶な雰囲気を持った女性。冷静沈着で宝の為なら何でも利用する打算的な性格だが、大食家で常人の5倍は食べないと気が済まなく、就寝時は基本全裸だという変わった一面もある。宝以外の事には興味はそれ程無いが、弱者に非道な行為をする者は許さない一面もある事からさほど悪い人間では無い。周以外の男性には基本的に「君」付け、女性（年下）には「ちゃん」付けして呼ぶ。

仮面ライダーディシーフ

巡がディシーフドライバーで変身するライダー。特徴は頭部がディケイド、身体がディエンドだが、赤いスーツに桃色のライドプレートが左肩以外に刺さり、複眼は右が黄色、左が黒である。クロックアップに匹敵する俊敏な動きで敵を翻弄していき、ディケイドの様にサブライダーにカメンライドする事が可能である。（外見の違いはバツクルのみ）

ディシーフドライバー

刃が赤と桃色を基調としたサバイバルナイフ型の変身ツール。刃の模様はディエンドドライバーに酷似している。刀身と鍔の間にある切れ目にカードをラウザーの様にスラッシュし振り上げる事で変身可能。武器としても使用出来、次元の切れ目を作り出し異空間へ移動する事も可能である。戴問 周（だいもん しゅう） / 仮面ライダー

## ーデイスティール

23歳。巡同様闇影の過去を知る人物であり、ウェーブの黒髪を後側だけ括り、白いシャツの上に水色の半袖ジャケットを着込み、黒い半ズボンが特徴のクールな雰囲気を持った男性。ヘビースモーカーでもあり、よく煙草をくわえている。巡と同じく宝の為なら手段を選ばずやや荒っぽい性格で男性には厳しいが、無類の美女好き（子供も対象内）で軟派なフェミニストであり、女性に危害を加える者は誰であろうと許さない。（子供が危害に遭うのも同様）料理が得意であり、その腕は闇影以上である。（自称）巡に好意を抱いているが基本的に無視されている。一人称は「俺様」。

## 仮面ライダーデイスティール

周がデイスティールドライバーで変身するライダー。外見はディシーフと同じだが、こちらは水色のスーツに藍色のライドプレートが右肩以外に刺さり、複眼は右が黒、左が紫である。ディシーフ同様に動きが俊敏であり、クウガペガサフォーム並の鋭い感覚で敵を確実に狙撃していくのが戦法である。最大の特徴は、ディエンドの様にライダーや怪人を召喚し援護攻撃をさせる事とそれらをカードに変換する「スティールライド」を使用する事である。

## デイスティールドライバー

水色と藍色が基調のハンドボウガン型の変身ツール。外見はペガサスポウガンとギャレンラウザーを複合させた物。横にある切れ目にスラッシュトリガーを引く事で変身可能。また、射撃武器としても使用出来る。

## スティールライドカード

背面が青色のライドカード。ライダーや怪人をカードに変換する事



が出来る。元々は、世界の秩序を乱すライダーや怪人を封印する為の物であり、文字通り存在を「奪う」カード。ライダーの場合は、力のみをカードに変換する事が可能である。但し、怪人の力を抜き取る事は不可。

## ディシーフ&ディステイル人物紹介（後書き）

虎居合瑠「如何でしたか？では今度は彼等の名前の由来を彼等自身に語って貰います！ほれ。」

巡「私の名前の由来は、世界の『彩』る宝を『盗』み『巡』る美女よ」

周「俺様は『問』答無用で全ての世界の宝を『戴』き『周』る紳士だぜ！って何かカブトのキャラの名前みたいな感じだな。」

虎居合瑠「まあな。巡は簡単に思い付いたけど、お前はかなり難儀したな。」

周「マジかよ。」

虎居合瑠「マジだよ。」

巡「それより、私の詳細がなんかちょっとHな要素が多くない？」

虎居合瑠「何を言つとる！！それがいいんじゃないか！！読者様（主に男性の方）もきつとこういうのを望んでいる筈だつ！！」

周「俺様は多いに大賛…虎居合瑠「はいはい。」成…って被せんなコラアツ！！」

巡「まっ、私の人気上がるなら別にいいけどね。それより皆、闇影君は今あんなだけ昔は…」

虎居合瑠「ストップ！勝手にネタバレしないっ！！」

巡「あら残念。じゃあこれ見てる方や作者様の世界に行ってお宝でも奪いに行こうかしら」

虎居合瑠「へ？」

周「その世界の女の子達を『お持ち帰り』してえしな…あばよ！」

【ATTACK・RIDE∴WORLD・WARP!】

虎居合瑠「オイイイイッツツツ！！！！てめえ等他の読者作者様達に迷惑掛けようとしてんじゃねえええつつつ！！！！これ読んでる皆様！もし二人を見掛けても色仕掛けに乗って宝をあげたり、変な男について行ったりしないで下さい！！後者に至っては半殺しにして結構です！（^| ^）（冗談）それでは！！」

第13導 苦悩するネガ電王（前書き）

トライR「俺、更新!!」

黒深子「何アホな事してんの？」

闇影「リアルが忙しいせいで頭をやられたのかなあ？」

コウイチ「しかも、またスランプに陥ってた様だしな。」

トライR「やかましいわっ!!トライトニング!!（電撃を喰らわす）」

コウイチ「ギャベビバボオオツツ!!（電撃を喰らい死亡）」

闇影「皆さん、このネガ電王では皆さんの知らないフォームが三つ登場しますので楽しみながらお読み下さい!!」

黒深子「では、どうぞ!!」

### 第13導 苦悩するネガ電王

喫茶店・導きの光玄関前

「此処がネガ電王の世界か…。」

「そうね…で先生、その格好は？」

黒深子が指摘する様に、闇影の服装が薄青いワイシャツの上にベージュのエプロンを着けた物に変わっていた。

「微かに珈琲の香りがするから、喫茶店のマスターか何かか？」

「まあ、こういうのも良いかもね…ん？」

「どうしたんだ？」

闇影がエプロンのポケットに手を突っ込んでみると、中から一枚のカードの様な物が出てきた。

「これは…ライダーチケット！」

「何でそれが先生のポケットに？」

「ネガ電王だからかな？うゝむ…。」

三人がライダーチケットをずっと見つめながら考え込んでいたその時…

「きゃああああっ！！！」

「たっ、助けてくれええっつ！！！」

『ケケケ…！！』

「あれは…イマジン！？」

ハロウインの南瓜の様な頭に黒タイツの姿をした複数のイマジン「パンプキンイマジン」が人々を襲っていた。そして…

「助け…うぐっ！？」

運悪く逃げ遅れた男性の背中を扉の様に開いたパンプキンIは、そこに手を入れて光の球の様な物を取り戻した。するとその男性はそのまま意識を失い倒れた。

「！！あいつ等…！！！」

「え…？何だ今の違和感…。ん？」

闇影が何らかの違和感を感じていた時、一台の紫色のバイクに乗った何者かが闇影達とパンプキンI達の間を割って入って来た。そして、ヘルメットを取りバイクから降りようとした青年は、何故か足を躓かせて顔から地面にコケた。

「…（ええっ！？何でっ！？）」「…」

「痛たたた…。」

(おいっ！何でも無い所でコケるんだよ！?)

「うっ、うめん…。」

黒髪のショートヘアに紫色の眼をした中性的な顔立ちの青年は、鼻を押さえながら自分を注意する謎の声に謝った。

(ちっ、まあいい…さっさとやるぞ！)

「うん！行くよ、ネガタロス！」

声の主・ネガタロスに促された青年は、四つのボタンが付いた銀色のベルト「デンオウベルト」を腰に巻き付け、ボタンを押したトーンの低い警告音が鳴り出すと黒いパス「ライダーパス」をセタッチした。

「変身！」

【NEGA・FORM!】

すると青年の身体が黒の素体スーツに包まれると同時に、半透明の黒鬼のような物が入り込み、禍々しい模様が付いた紫色のオーラアーマーが装着され、最後に紫色の桃の形をした電仮面が顔のレールにスライドし二つに割れた戦士「仮面ライダーネガ電王 ネガフォーム」へと変身した。

「あれが…この世界のライダー、ネガ電王…！」

『強さは…別格だ。行くぜっ！…!』

別人の様に口調が変わったネガ電王NFは、専用の武器「デンガツシャー」の刃先をイマジン達に突き付けて挑発し、そのまま突撃した…。

世界の光導者、デイライト！9つの影の世界を巡り、その瞳は何を照らす？『ふっ！はっ！せいっ！！』

『ガアツ！ギイツ！グアツ！！』

ネガ電王NFは、デンガツシャー・ソードモードで隙の無い素早い攻撃でパンプキンI達を次々と斬り倒していくが…

『ケケケ…。』

『ちっ！キリが無えな…！』

パンプキンIは、戦闘力こそ低く通常のイマジンより弱く倒し易いが、如何に弱いとはいえ数があまりにも多過ぎる為、ネガ電王NFも次第に苦戦し始めていた。

「加勢に行つて来る…！変身！」

【KAMEN・RIDE…DELIGHT！】

ネガ電王NFの戦況が不利だと感じた闇影はデイライトに変身し、彼の下へと走り出し…



『とりゃあああつつ！！』

『ウガツ！？』

その勢いのまま、跳び上がってパンプキンI に強力なキックをお見舞いした。

(あの人…何でボク達を…?)

『はいつ！せいっ！そらっ！！』

『ギャッ！ギッ！グエツ！！』

そしてライトブッカーでパンプキンIを次々と斬り裂いていき、数が少なくなったのを見計らうとカードをドライバーに装填した。

【FINAL - ATTACK - RIDE : DE・DE・DE・DE  
LIGHT!】

『これで…最後だっ！！』

『グギャアアアアツツツ！！！』

デイトライトは自身のFAR「デイメンジョンプロミネンス」の巨大な光弾でパンプキンI達を一掃した。

『ふう…何とか終わったか…。』

「闇影！危ないっ！！」

『え…？つわあつ！？』

突然ネガ電王NFが、デンガツシャーでディライトに斬り掛かってきたが、コウイチの呼び掛けに気付きライトブッカーで防いだ。

(ちよつとネガタロス！何やってんの！？)

『お前、中々やるじゃねえか…ちよつと面貸せつ！！』

『粗方解らないけど、随分な挨拶だねえつ！！』

『ぐがつ！？』

ディライトは剣を斬り結びんでいる内に、ネガ電王NFの腹を蹴り飛ばした。

『チイツ…！やってくれるじゃねえか…。』

(ネガ男…あたしもやるわ！)

立ち上がったネガ電王NFの頭に、女性の声が聞こえ自分も戦うと言い出した。

『その呼び方はやめろ！！後余計な事すんな！！』

(別に変わらなくてもいいわよ…でもその代わり…)

(えっ…？ペルシア、何する気！？)

(他の身体を使って戦うわ！！)

声の主・ペルシアは別の人物に憑依して戦うと言いながら、何処からか茶色の光の珠となり現れ憑依した。その人物に選ばれたのは…

『ゴメンね…ちょっと身体借りるわよ』

(ええっ！？ちよっ、ちよっと！！何この格好っっ！！？／／／)

『「ええっ！！？黒深子！！？／黒深子ちゃん！！？」』

なんと黒深子の身体だった。すると、髪の一部が茶色のツインテールに茶色の瞳、頭には猫耳バンドを着けたメイド服に猫足ブーツと所謂アキバ系の姿に変わっていた。

『んじゃ、行くわよ…変身！』

【CLAW - FORM!】

P 黒深子がベルトの茶色のボタンを押しパスをセタツチすると、身体が黒い素体スーツに包まれ、肩に爪が付いた茶色のロッドフォームの様なオーラアーマーと、手の甲に茶色の鉤爪、そして三本の茶色の爪を象った電仮面が装着された「クローフォーム」に変身した。

『あなた、あたしに引っ搔かれてみない？』

『生憎そんな趣味は無いよ…。黒深子、ちょっと我慢してくれ！』

【SHADOW - RIDE…KABUKI!】

ネガ電王CFの決め台詞を一蹴したディライトは、黒深子に我慢す

る様告げながら自身の影を歌舞鬼にシャドウライドさせた。

『何あれ！？影がカラフルな鬼に変わった！？』

『向こうは任せるよ！』

【ATTACK・RIDE…MEITOU・ONSAKEN!】

更に黒い刀「鳴刀・音叉剣」をS歌舞鬼に装備させると、ネガ電王NFに斬り掛かっていった。しかしそれはデンガツシャーで防がれて剣同士が斬り結ぶ形となった。

『くっ…こいつ、影の癖に…!!』

『影なんか到手こずってんじゃないわよ！ネガ男!…って!!』

ネガ電王CFは手の甲に付いた大きめの鉤爪「ペルクロー」で、デライトのライトブツカーの斬撃を防いだ。

『黒深子の身体を返してくれないかなあ…!!』

『女に容赦無く攻撃してくるなんて…マナーの悪い男よねえっ!!』

ネガ電王CFはデライトの攻撃を弾き距離を取ると、ペルクローで反撃に乗り出した。

『少し手荒に行くよ…!!』

【ATTACK・RIDE…LASER!】

デイライトはライトブッカーをソードからガンモードに変形し、デイライトレーザーで迎撃しようとしたが…

『当たらないわよつと！』

ネガ電王CFは、猫の如く素早く動いて攻撃を回避しながらデイライトへと近付き鉤爪で攻撃を仕掛けようとした。

『くつ…だが、近付いたのは命取りだね…はあつ…！』

だがデイライトはすかさずライトブッカーをスパアモードに変形させ、ネガ電王CFを突き刺して回し蹴りで後方に吹き飛ばした。

『きゃあああつ…！』

『……………！』

『ぐつ！？野郎…ん？どうした雌猫。偉そうに出て来た割には随分と苦戦してるじゃねえか。』

『うつさい！！こうなったら必殺技で一気にケリを…！！』

S歌舞鬼に苦戦しているのを棚に上げ嘲笑するネガ電王NFの言葉で頭に来たネガ電王CFは、必殺技を発動すべくパスを取り出そうとしたが…

（ゴラアアツツ！！あんた達いい加減にしないかあつ…！！）

『『げつ…！！』』

突然、ネガ電王達の頭に女性の怒鳴り声が響くと上空からレールが敷かれ、それと共に紫色の電車「ネガライナー」が現れた。

ネガライナー・乗客室

「本当にごめんなさいっ!!」

「いや…いいんだよ。」

ネガ電王の変身者・反田（はんだ）リヨウタロウは、闇影達に深々と謝った。闇影は彼が悪いんじゃないと然程気にはしていなかった。

「あんた達、ウチのモンが迷惑かけちまって本当に悪かったね。」

このネガライナーのオーナーである、禍々しい刺青が彫られた大きな胸が目立つ程大きく開いたシャツと黒ズボンに、橙と紫のメッシュを入れたウェーブの髪をした活発な女性・トキナも闇影達に謝罪した。

「まさか、ただ運動したかっただけであんな事を…。」

『ふんっ…!!』

『メンゴ、メンゴ』

拳骨を貫い頭にタンコブを付けた黒鬼のイメージ・ネガタロスはそのぼを向いて不貞腐れており、白茶色の猫にブーツを履いた女性イ

マジン・ペルシアは誠意のこもって無い謝罪をした。事情を聞いた闇影はそんな二人を見て呆れていた。

『二人共、馬鹿な事をしてリヨウタロウ様に迷惑をかけるんじゃないじゃない！』

テーブルに座って折り紙を弄くりながら二人を注意したのは、右が白く、左が黒い体色をした山羊の女性イマジン・カプラである。

『何よ、この良い子ぶりの山羊！喋り方マジム力つくんですけど？』

『貴方達みたいな野蛮な輩の非難なんて、負け犬の遠吠えにしか聞こえせんわ。』

『なっ…何ですって〜!!』

『おい…馬鹿でかい声を出すな雌猫。頭に響く!』

『あんたが五月蠅いのよ!ネガ男!!』

『何だとおっ!?このっ…!!』

『いい加減にしろやっ!!』

『ウガッ!』

『ギャッ!』

『ハウッ!』

トキナは、性懲りも無く言い争いをする三人のイメージに拳骨をお見舞いして黙らせた。

「（トキナさん、強っ！！）」

闇影とコウイチは、そんな彼女の強さに戦慄していた。

「暫く黙ってな！…ん？」

乗客室のドアが開くと、紺色の燕と忍者を合わせた様な女性イメージが怪我の手当てが済んだ黒深子と共に現れた。

「大丈夫か？黒深子。」

「うん…ツバキさんが手当てしてくれたから平気よ。」

『拙者共のせいでお主に怪我を負わせてしまつて…申し訳無い！！』  
ツバキはやや固めな口調で、自分達の行動により黒深子に怪我を負わせた事をリョウタロウ同様、深々と謝罪した。

「いや、もういいんだつて。」

「ところで、あのイメージ達は何故契約しないまま『過去の扉』を？」

闇影は、先程の違和感についてトキナに尋ねた。イメージは過去の時間を得る為に人間と契約をし、その人間の過去へ跳び時間を改変するのだが、その手法が違う事に違和感を感じていたのだ。



「あんた随分と詳しいわね…。あれは人の記憶を『喰らった』のさ。」

「記憶を…喰う!？」

「ああ。記憶つてのは時間、そして時間は存在を繋ぐ大切な物なんだ。それをイマジンが喰らう事で『時間』を、『過去』を手にする事が出来、それを失くした人間は…何れ消滅する…！」

「…!?!?!」

トキナは何処からか珈琲を取り出し啜りながら冷静な口調で恐ろしい事実を話し、それを聞いた闇影達は言葉を失っていた。

「そんな…何か手は無いんですか!？」

「喰らった奴を倒せば記憶が戻るけど、そいつ等のボスを叩いた方が効率がいいわ。あの南瓜達は分身に過ぎないからね…。」

「あれ全部が分身かよ…。」

「でも、どうやって?」

『それについては心配無用。我々は全員、イマジンを探知する事が出来る。』

「なら、俺達に憑いて手分けして捜せばいいんですね!」

「はあ…それしか無いわね…。」

イマジン達が探知能力を持っていると聞いた闇影は、自分達に憑かせてイマジンの親玉を捜す事を提案した。黒深子は先程の事があつた為、複雑な顔をしたが渋々了承した。

「……………」

「どうしたんだい？リョウタロウ君。」

「…少し、いいですか？」

喫茶店・星のカーテン

闇影とリョウタロウはベルの付いたドアを開き店に入ると、長い黒髪に紫の瞳をしたにこやかな女性がカウンターにいた。

「あら、いらつしゃいリョウタロウ君。そちらの人はお友達？」

「あ…はい。」

「初めまして。煌闇影と言います。」

「此方こそ初めまして。反田アイリです。」

「…!!えっ…?」

「ちょっと待ってて下さいね。今珈琲を煎れますから。」

闇影はカウンターの席に座りながら、小声リヨウタロウに話しかけた。

「リヨウタロウ君、あの人つてもしかして…?」

「はい…ボクの姉です。でも、今は…」

「イメージに記憶を喰われたんだね…。」

そう、リヨウタロウの姉・アイリもイメージにより記憶を喰われていたのだ。弟に他人行儀な呼び方なのが何よりの証拠だ。

「でも大丈夫。イメージを倒せば解決するさ。」

「ええ…それはそうなんですけど…そうになると姉さんは…自分で死ぬかもしれないんです…。」

「!?!?それってどういう…!?!?」

闇影はリヨウタロウの「アイリが自分で死ぬ」という言葉に強く反応し彼に問いたただそうとした時…

「お待たせしました。はい、珈琲が二つ。」

「あつ!い、いただきま…!!熱つつつ!!」

アイリが珈琲を差し出したので、リヨウタロウは慌ててカップを取り口にしようとしたが、何故かカップの取っ手が壊れてしまい顔面に中身をぶちまけてしまった。

「いや嘘おっ！？大丈夫かい！？リヨウタロウ君！」

黒深子<sup>ツバキ</sup>&コウイチSIDE

『うむ…この付近にはいない様だな…ってコウイチ殿！真面目に  
捜す気があるのか！？先程からお主の視線が此方にいつてる気がする  
のだが。』

「ん？あ、ああっ！勿論ちゃんと捜しているさ！それに視線がいつ  
てるのは気のせいだって！」

コウイチは、慌てて黒深子に弁解をした。しかし、髪の一部が紺  
色のポニーテールに紺色の瞳、鎖帷子が付いた生地がかなり薄い忍  
装束の姿をしており、少しでも風が吹けば下着が見えてしまう程露  
出度が高く、視線がそっちに行くのも無理は無い。

「（風よ！吹け吹けっ！！そして純白の光景を俺に！！）」

（コウイチ…後で殺すっ！！）

コウイチは心の中で意味不明な祈りを念じており、それを悟った黒  
深子は心の中で強い殺意を抱いていた。そこに複数の男性達が彼等  
の前に現われた。

「フへへ…お嬢ちゃん、凄えエロい格好してんなあ…。」

「誘ってんのかねえ…俺等が遊んでやるっか？」

(うわっ…やっぱりこういう連中が沸いてきたわね…ウザッ!！)

男達の上から下まで舐め回す様ないやらしい視線に、黒深子は強い不快感を感じていた。その時…

(ツバキ…ちょっと変わりなさい!！)

『カプラ! 一体どうし…うわっ!?!』

カプラが突然黒深子の身体からツバキを追い出し憑依すると、白と黒が混ざった山羊の角の様な巻き髪に、右が白の左が黒色の瞳に灰色のロングスカートドレスの姿に変わった。

『貴方達! 私(わたくし)にそんな無礼な口を利いて只で済むと思いません!?!』

「お、おいつ!カプラ!」

黒深子は男性達の下劣な言動に余程不快に感じたのか、凜とした態度で彼等に訴えかけ、コウイチがそれを宥めようとしたその時…

「やっと見つけたよ…ネガ電王!！」

突然男性達の身体から大量の砂が零れ落ちると倒れ出し、砂はパンブキンI達の姿に変わった。恐らくカプラはこれに気付いて表に出たのだろう。

『ケケケ…!!』

『行きますわよ…！変身！』

【SHIELD - FORM！】

C黒深子はデンオウベルトを巻き付け灰色のボタンを押しパスをセタッチすると、灰色のアクスフォームのオーラアーマーが装着され、右が白、左が黒色の山羊の角を象った電仮面が装着された「シルドフォーム」に変身した。

『楯突く者には、痛みでお返ししますわ！！』

ネガ電王SFは自身の電仮面に似た山羊を象った盾「カプリールド」を構え、パンプキンI 達を押し付ける様に攻撃した。

『グガアツ！？』

「俺もやるぜ！変身！」

コウイチもVバックルを出現させカードデッキを装着し、リュウガに変身した。

『久しぶりに行くぜっ！！』

【SWORD - VENT】

『だあっ！せいっ！おりゃあっ！！』

『ガギヤアツ！！』

リュウガは久々の活躍に張り切り、ソードベントカードをドラグバ  
イザーにベントインしてドラグセイバーを召喚し、パンプキンI達  
を次々と斬り裂いていった。

『やつ！はいつ！それっ！！』

ネガ電王SFも盾で舞う様に攻撃をし、背後からの攻撃も腕を後ろ  
にして防ぐ等して敵を倒していくのだが…

『だあ〜っ！！いくら斬っても斬ってもキリがねえっ！！』

リュウガが苛立つように、パンプキンI達の数が一向に減らないで  
いた。

『ですが、敵を倒しても全く減らないのは少しおかしいですわね…  
ん？』

ネガ電王SFは、倒したイメージンの一体の身体から砂の様な物が溢  
れているのを見かけた。するとそれは、パンプキンIの形を作り上  
げた。

『曲者っ！！姿を現わしなさいっ！！』

ネガ電王SFはデンガッシャー・ガンモードで、砂が溢れている個  
体を射撃した。しかし、それは立ち上がり回避した。

『…気付かれた以上、姿を隠すのは無意味の様だな。』

突然喋り出したパンプキンI(?)は、頭の南瓜が割れ黒タイツを  
破れると、大きな角が生えた白い馬と南瓜が合わさった王子の様な

姿をしたイメージン「ユニコーンイメージン」へと変化した。

『こいつが…親玉か…!!!』

『死んだ分身の中に隠れていたなんて…!!!』

『分身達が人間共の記憶を喰ってくれたお陰で、余は過去に頼らずとも実体を得る事が出来た!!!』

『何だとっ…!!』

『自分は手を汚さず、分身達が奪った人々の記憶だけを得る…浅ましい輩めっ!!!』

リュウガとネガ電王SFは、ユニコーンIの強欲さを非難しながら各々武器を構えた。

『ふっ…余に勝てるかな?』

『勝ってやるさ…行くぜっ!!!』

『参りますわっ!!!』

## 闇影&リョウタロウSIDE

あれから店を出た闇影とリョウタロウは、歩きながら先程の話を続きをした。



「姉さんには婚約者がいたんですが、四年程前に事故で亡くなったんです…。」

「そんな事があったのか…。」

「手首に包帯が巻いてあったでしょう？あれは手首を切った後なんです…。」

「…！！まさか、アイリさんは自殺しよう…！？」

リヨウタロウは無言で頷いた。それを見た闇影は、彼が記憶を取り戻す事に消極的だった理由を理解した。アイリの記憶が戻れば恋人を亡くした記憶も戻る。そうなればまた何をしでかすか解らない…。

「『自分で死ぬかもしれない』というのはそういう事だったのか…。」

「ボクは…姉さんの記憶を取り戻したい！！でも…戻った後の事を思うと…。」

「リヨウタロウ君…。」

イメージを倒さなければアイリは消えてしまう…かと言って倒せれば記憶が戻りまた自殺するかもしれない…。そんなジレンマを抱えたりヨウタロウは涙を流していた。その時…

「はあ…い、闇影君」

「巡…。」

パンが入った袋を片手に持った巡と、周が現われた。巡の軽すぎる口調に闇影は少し苛立った顔をした。

「おっ！そのカワイ子ちゃんは誰だ？いいのかねえ…黒深子ちゃんがいるのに。」

「お前もいたのか、周。後、この子は男の子だぞ。」

「ええっ！！？お、男おっ！！？」

周はリョウタロウが男だと聞き、orzの体勢で落ち込んだ。中性的な顔立ちに華奢な体つきから少女だと思いついていた為相当ショックだったようだ。

「そんな事より何の用だ？また宝か？」

「決まってるじゃない…。神の路線に行けるパスをネガ電王が持つてるって聞いてね。だ・か・ら…マスターパス、頂戴。」

『ざけんなっ！！てめえらにやるモンなんか無えよっ！！！』

「きゃっ！？」

巡達の横暴な物言いに頭に來たネガタロスは、リョウタロウに憑依し黒いドレッドヘアに赤いサングラスをかけた不良の様な姿となり、巡に近付き突き飛ばした。

「おい、てめえ…巡ちゃんを突き飛ばして生きて帰れると思うなよ！？」

「まっ、おいそれとは手に入らないわね…。」

巡を突き飛ばされた事に頭に來た周は、直ぐ様立ち上がりドライバ  
ーを構え、巡も起き上がり身体を払い、ドライバ―を構えた。

「変身!」

【KAMEN - RIDE... DISHIRF!】

【KAMEN - RIDE... DISTEAL!】

パスを力づくで奪うべく巡はディシーフに、周はディスティールに  
変身した。闇影もそんな二人に肩を竦めながらドライバ―を装着し  
た。

「全く、この大事な時に…変身!」

【KAMEN - RIDE... DELIGHT!】

『お前等…まとめてぶっ潰してやる…変身!』

【NEGA - FORM!】

闇影はディライトに、Nリョウタロウはデンオウベルトを巻き付け  
ボタンを押しパスをセタッチしてネガ電王NFに変身した。

『強さは…別格だ!』

『此処は電王バトルと行きましょ 特別カードよ!変身!』

【KAMEN・RIDE…NEW・DEN・O!】

デイスリーフが「特別なカード」をドライバーにスラッシュすると、赤い三角錐の電仮面、銀のオーラアーマーが装着された青いスーツが特徴の「仮面ライダーNEW電王 ストライクフォーム」カメンライドした。

『行つてきな。』

【KAIZIN・RIDE…MOMOTAROS!】

デイスティールはカイジンライドで、赤鬼と桃が合わさったイマジン「モモタロス」を召喚した。胡座を搔いてスプーンを持った間抜けな状態で…。

『ん？ああっ！？何処だ此処はっ！？俺プリン食おうとしてたのにっ！…！』

何故か自我を持ったモモタロスは、プリンを食べる寸前で呼び出された事を地団駄を踏みながら怒り散らしていた。

『んな馬鹿な事言つてねえでさっさと行け、馬鹿モモ。』

『ああ！？んだとてめえ…俺の大事な一時を邪魔しやがっ…』後でプリン作つてやつから。『よっしゃ行くぜっ！…！』

『（やつぱ馬鹿だコイツ…。）』

プリンに釣られた馬鹿モモモといモモタロスは、デイスティールに

馬鹿扱いされている事を知らずディライト達を倒そうと前に出ようとしたが…

『待ちな。ほれっ！』

『ああ？つて、これは…！！』

ディステイルは、モモタロスにライダーパスとデンオウベルトを投げ渡した。

『大事に使えよ。そいつは別の世界で手に入れた貴重な宝なんだからな。』

『へっ！こいつがあつての俺だからな…変身！』

【SWORD - FORM!】

モモタロスが巻き付けたデンオウベルト赤いボタンを押し軽快なメロディを鳴らし、パスをセタッチすると、赤と銀のオーラアーマーを装着した赤い桃が割れた電仮面が特徴のネガ電王と同じ姿をした「仮面ライダー電王 ソードフォーム」に変身した。

『俺、参上！！』

電王SFはお馴染みの決め台詞を叫び、左手と右足を前に、右手と左足を後ろに突き出し歌舞伎の様なポーズを取った。

『「また」現われたか…俺の「計画」を潰してくれた馬鹿が…。』

『うるせえよ猿真似野郎！いいか？俺に前振りは無え。俺は最初か

ら最後までクライマックスなんだからなあっ！行くぜ行くぜ行くぜ  
ええっつ！！』

ネガ電王NFの言葉は気になるが、電王SFは構わずデンガツシャ  
ー・ソードモードで斬り掛かっていった。だが、ネガ電王NFは同  
じ武器でそれを防いだ。

『ふっ…少しはやる様だな…。』

『その減らず口、今すぐ黙らせてやるぜっ！！オラアッ！！』

電王SFは斬り結びを止め、ヤクザキックでネガ電王NFを蹴り飛  
ばした。だが、ネガ電王NFはデンガツシャーをガンモードに切り  
替え射撃した。

『ぐああっ！！…』

『はっ！せいっ！せやっ！！…』

『やっ！えいつ！せえいつ！！…』

一方、デイルイトとDNEW電王もライトブッカーとデイスーフド  
ライダーで斬り結びをし戦っていた。そして、互いに一旦距離を取  
る。

『お前達に構っている暇は無いだ！！退いてくれっ！！…巡！！…』

『マスターパスを渡すなら、止めてあげる』

【ATTACK-RIDE…MOMOTACHI…】

D N E W 電王はカードをスラッシュし、柄がモモタロスの顔をした大きな太刀「モモタチ」を召喚、装備変更し再びディライトに斬りか掛かっていった。

『せええいつつ！！』

『くっ…！！』

『邪魔だつての！！行けっ！ブラッカー！！』

### 【ADVENT】

『グオオオオオン！！』

『ギイヤアアアツツツ！！！！』

『やあつ！せいつ！えいつ！！』

『グガアツ！！』

一方、リュウガはアドベントカードで契約モンスター「ドラグブラツカー」を召喚し、吐き出した黒い炎で無数のパンプキンIを焼き尽くし、ネガ電王SFも盾で攻防していくが、幾ら倒しても中々減らずにいた。臆て二人の体力も尽きかけて来た。

『くそっ…はあ…はあ…どうすれば…はあ…いいんだ！？…はあ…』

『

(御主は休め、カプラ！後は拙者がやる！)

『なら…はあ…御言葉に甘えますわ…はあ…。』

【FEATHER・FORM!】

ネガ電王SFが紺色のボタンを押しパスをセタッチすると、カプラが黒深子の身体から離れ代わりにツバキが入り込み、紺色の燕の羽根を象った電仮面と紺色のウイングフォームに似たオーラアーマーが特徴の「フェザーフォーム」にフォームチェンジした。

『貴様等に不幸を届けてやる…拒否は許さん!!』

【FULL・CHARGE!】

『秘技！斬双燕舞（ザンソウエンブ）!!』

『ゲギヤアアアアツツツ!!!!』

ネガ電王FFはブーメランモードに切り替えたデンガツシャーと、燕の羽根の形をしたブーメラン「ツバメラン」を構え直ぐ様パスをセタッチしフルチャージした。すると、紺色のフリーエネルギーが籠った二振りの武器をブーメランの様に投げつける必殺技「斬双燕舞」でパンプキンI達を爆発音と共に一気に殲滅した。

『す…っ…。』

『残るは貴様だけだ!!覚悟しろっ!!』



驚嘆の言葉を溢させる實力を見せたネガ電王FFは、デンガツシャ  
ーとツバメランを構えてユニコーンIに突き付けた。しかし…

『ふはは！！覚悟だと！？余がただ分身共を襲わせただけだと思う  
か！？上を見てみる。』

何故か高笑いをするユニコーンI。彼は自分の真上に指を差し空を  
見る様、ネガ電王FFとリュウガに言った。

『何の事…なつ、何だあれはっ！！？』

『何だよ…これ…！！』

二人が上を見ると、空に巨大なエネルギーの塊が集結していた。ユ  
ニコーンIはこの為に、パンプキンI達を囿にしたのだ。

『このエネルギー波で、この世界の全てを消滅させる！！』

『はあっ！？正気かてめえっ！？んな事したらお前もただじゃ済ま  
ねえぞっ！？』

『ふん…余が何の考えも無く世界を消すと思うか？愚かな…。』

ユニコーンIの目的は、この世界を消滅させる事だった。だがリュ  
ウガの言う様に自身も消滅してしまう…にも関わらず何故か笑って  
いる。その理由は…

『…！まさか貴様、主と同じ…！？』

『ふはは！！左様！！余は特異点…故に世界が消えようとも余は生

き延びる事が可能なのだ!!」

何とユニコーンIは特異点の力を持ったイメージンであり、世界が消えても彼の記憶…人々から喰らい、奪った記憶を支点に再生するのだ。

「この後は、余だけによる、余の為の世界を築くのだ!!」

「そんな事…!!」

「させるかああっ!!」

ネガ電王FFとリュウガは、腕を伸ばし始めたユニコーンIの行動を阻止すべく走り出したが…

「時既に遅し…消えろっ!!」

ユニコーンIが腕を振り降ろした瞬間、エネルギー波は下界に急落下した。その激しいエネルギーの影響で世界が歪み、崩壊し始めた…。

「なっ、何だこの歪みはっ!? 黒深子達は無事なのか…うわあっ!

『!』

場の空間が歪み始め、デイトライトが黒深子達の安否に気がいった瞬間、DNEW電王の攻撃をまともに受けてしまった。

「戦いの最中に気を逸らさないでちょうだい…止めよ…!!」

【FINAL・ATTACK・RIDE…N・N・N・NEW・D  
EN・O!】

『必殺、私の必殺技！デイスーパージョン！…なんてねっ』

DNEW電王はFARを発動すると、赤いフリーエネルギーを籠めたモモタチでダッシュ斬りをする必殺技「ソードエクストリーム」をデイルイトに喰らわせた。

『ぐあああああつつつつ…!!!!』

『ああああつ！！？あの女…俺の台詞パクリやがってええ…!!』

【FINAL・ATTACK・RIDE…DI・DI・DI・DI  
STEAL!】

『へっ…？つて！まつ、待てええつつ…！俺まだプリン貰って無えのにいいいいつつつ…!!!!』

電王SFが文句を言っていると、デイスティールが発動したデイメソジョンスコールの空中のカードの円に訴えも空しく、吸い込まれていった。

『これにくたばりやがれっ…!!』

『その前にくたばるのはお前だ。』

【FULL・CHARGE!】

ネガ電王NFもパスをセタツチし、デンガツシャーの切っ先にフリーエネルギーをフルチャージし敵を斬る必殺技「ネガエクストリームスラッシュ」でディステールに斬り掛かっていった。

『うおおおおおつつつつ!!!』

その時、この世界が真っ白い光に包まれ街も、人々も、全て跡形も無く消滅した…。

「この世界は完全に焼き尽くされた…ディライトが現われたせいで…。」

紅蓮はこの世界が消滅したのはディライトのせいだと、上空で浮きながら見下ろす様に呟いていた…。次回、仮面ライダーディライト!

ユニコーンイマジンにより「ネガ電王の世界」は消滅してしまった…かに見えたが…

『完全に世界を消し去るには、この世界の「超異点」の過去に行かねば…!!』

完全に世界を消すべく「超異点」の散策を始めた…一方、リョウタロウは未だアイリの記憶を取り戻す事を躊躇っていた…。

「ボクは…どうすればいいんだ…!!」

「良い記憶も嫌な記憶もその人の『現在(いま)』を表わす大事な物だ…。」

『おいっ！何だこれはっ！？』

『行くぞ！これからが、本当のクライマックスだっ！！』

デイルイトの言うクライマックスとは…！？そして、リョウタロウの決断は…！？

次回、『ネガわない記憶を取り戻せ！』

全ての闇を、光へ導け！

### 第13導 苦悩するネガ電王（後書き）

黒深子「さくくしゃあああ…私をあんな目に遭わせてどういうつもりいい…？（般若の顔で細剣を突き付ける）」

トライR「まつ！待て！！あれはお前さんの（多分いる筈）ファンの方々へのサービス&これを読んでくれた方の想像力を養う為であつて、決してやらしい気持ちは…」

黒深子「じゃあ、その大量の今回の私が載ってるエロ本的な物は何！？（中は18禁のページあり 本人の許可無し）」

トライR「それは日頃からお世話になつてる方々へ贈る…想像力で作つた写真集です」

スワンO「んな想像力捨てちまえええつつつ！！！！（細剣でメッタ刺しにする）」

トライR「グギヤアアアアツツツ！！！！」

闇影「うわっ…凄い事になつてるな…皆さん、ネガ電王の新フォームは如何でしたか？」

コウイチ「ネガタロス以外皆、女イマジンなんだな。ていうか、この作品女性キャラの比率が多くねえか？」

闇影「確かにディケイド本編よりは多い気がする…。」

コウイチ「まつ！可愛い女の子やお姉様達が増えるのは問題ナシだ

けどな!!」

闇影「全くお前は… 『ネガ電王の世界』は一体どうなるのか？次回もお楽しみに!!」

スワンO『これで…くたばれえええつつつつ!!! (制裁ボムのスイッチ発動)』

トライR「ちよっ!？何でお前がスイッチ持ってんの!？爆破する前に写真集を各作者様の世界に配送!!皆様は今回、どの黒深子がタイプでしたか？こっそり教え… (ドガン!!!!) 言い切る前に爆死)」

第14導 ネガわなない記憶を取り戻せ！（前書き）

リヨウタロウ「み、皆さん、お待たせしました！！ネ、ネガ電王後半…です…。／／／」

ネガタロス『少しグダグダな所もあるかもしれないねえが、適当に読め。それよりそこのお前、俺のネガタロス軍団（作りたて）に入ら…』

ペルシア『読んでくれない人は、あたしに引つ搔かれてみる？』

カブラ『それとも、痛みを受け取りますか？』

ツバキ『拒否は許さ…！！』

トキナ「読者様に何ちゆう事言ってるんだあああつつつつ！！！！！！（全員に制裁）」

トキナ以外「『『『ギイヤアアアツツツ！！！！！！』』』」

トキナ「悪かったね読者の皆、お詫びに珈琲奢るから飲みながら読んでってね（胸の谷間から珈琲を取り出し差し出す）。んじゃ、後半スタート！！」

リヨウタロウ「ボク…何もしてないのに…（気絶）」



## 第14導 ネガわらない記憶を取り戻せ！

ネガライナー・乗客室

「…ん、こ…此処は…ネガライナー…？」

闇影が目を覚ますと、いつの間にかネガライナーの乗客室の席に乗っかっており、テーブルには珈琲に入ったカップが置いてあった。

「気が付いたかい？闇影。」

「トキナさん…！！黒深子達は！？」

「安心しな。別の車両でぐっすり寝ているよ。」

「そうですか…。」

闇影は黒深子達の無事を聞き安心すると、出された珈琲のカップを取り戻す口にしながらトキナからこれ迄の経緯を聞いた。ユニコーンイマジンが分身のパンプキンイマジン達に人々の時間を奪わせ、特異点の力で生き残り、一度世界を消滅させ自分だけの世界を創造しようと企んでいた事を…。

「そんな事が…でも何で無事だったんだろう…。特異点のリョウタロウ君も巻き添えになったのに…。」

「それは恐らく『超異点』の能力だね。」

「『超異点』…?」

闇影は「超異点」という聞き慣れない単語に首を傾げていた。トキナはゆっくりと乗車内を往復しながら胸の谷間から何故か珈琲の入ったカップを取り出し、口にしながら説明し出した。

「『特異点』は、あらゆる時間の干渉を受け付けない存在…これは知ってるよな?んで、『超異点』ってのが…」

トキナの言葉に頷く闇影。そして彼女は一旦間を置き珈琲を飲み干し、谷間にカップを入れそこから新しい珈琲を取り出しながら話を続けた。

「時間を…世界を『固定』する存在…。」

「……!?!?それってどういう事ですか?」

「特異点とは違い、超異点はその存在…記憶が現存するだけでどんな時間の歪みも『本来の時間や存在を戻す』能力さ。但し、その人間の存在を消す事は可能だけどな。例えば、超異点の過去に行つてその人間を消す等してね。」

「超異点の記憶をそのイメージが取り込んでいたのが不幸中の幸いだったんだな…。!!だとしたら…!?!?」

「奴さんは、間違い無くその超異点を突き止めようとするだろうね。」

トキナは、闇影の悪い予想を頷き口にした。

「早く何とかしないと…!!」

それを聞いた闇影は、イマジンの企みを阻止するべく動き出そうとしたその時…

『リヨウタロウの奴、何処行きやがったんだ!?!』

「何だい、騒がしいわね。」

「リヨウタロウ君がどうかしたのか?」

『あの子がいないのよ。全車両を見たけど何処にもいなかったの。』

『意識も締め出されていて、感知する事が出来ませんわ。』

『主は一体何処に…?』

乗客室に現れたネガタロス達の行動を闇影が尋ねると、どうやらリヨウタロウが姿をくらましたようだ。

「…あそこかもね。」

「えっ?」

「あんた達はイマジン達の散策をお願い。リヨウタロウはあたしが探すわ。」

『知ってんなら教えろよ!!ババ…ブツ!!』

「誰がババじゃコラアツ!!乗車拒否にされなくなかったらさっ

さと行けっ!!」

リョウタロウの居場所に心当たりがあるトキナは闇影達にイマジ  
ン散策の指示を出した。ネガタロスは悪口を言いながら居場所を聞き  
出そうとしたが正拳突きを喰らい地に沈んだ。

「わ、分かりました!!皆、早く行こう!!」

彼女の怒号と行動に驚いた闇影はペルシア、カプラ、ツバキと共に  
乗客室を後にした。

### ネガライナー・操縦室

「…。」

リョウタロウは、ずっと専用マシン「デンバード」が搭載したコッ  
クピットを見つめながら「ある事」を考えていた。

「(…もし、ユウトさんが亡くなる前の時間に行けたら姉さんが悲  
しまなくて済むかもしれない…。だけど…)」

なんと、アイリの婚約者・葉月(はづき)ユウトが事故で命を落と  
す前の時間に行き彼の死を防ごうと考えていたのだ。だがそれは、  
時の運行を護る者として決して許されない行為だ…。

「やっぱ此処にいたか…。」

「！！オーナー……！！」

「あんたまさか、『過去に行ければ……』とか考えてんじゃないだろ  
うね？」

「……！！」

トキナの鋭い指摘に、リヨウタロウは凶星を差され目を見開き即座  
に伏せ、怯えた様に驚いた。

「そ……それは……。」

「いいかい、『過去の時間での自分勝手な行動は御法度だ。』と何  
度も言い聞かせたわよな？それ以上は言わなくても分かるだろ？」

「は……はい……。」

トキナは厳しい表情でリヨウタロウを諫め、そのまま踵を返し操縦  
室を後にした。

「ボクは……どうすればいいんだ……！？」

リヨウタロウはその場で膝を付き、下を向きながら悩み出した。

『チイツ……超異点の存在を計算に入れるのを忘れていたとは……！！』

一方ユニコーンイマジンは、先程のトキナが話していた超異点の存  
在を失念していた事に舌打ちをしながら悔やんでいた。

『完全に世界を消すには、超異点の過去に行き、その人間を始末せねばな……！！行けっ！！分身共！！』

『ケケケ……！！』

案の定、ユニコーンIは超異点の存在を抹殺すべく身体から無数のパンプキンIを生み出した。

『超異点の存在をしらみ潰しに捜し出せっ！！その間余は喰らった記憶を辿り、その人間を確定する。』

『ケエエツツ……！！』

本体の命に従い、パンプキンI達は人々を襲いに動き出した。

(……！！ねえデイルイト！イメージが動いたわ……！！)

ペルシアは、イメージを探知した事をマシンデイルイターに乗った闇影の頭に話しかけた。

「そっか！場所は？」

(私達が教えた通りに進んで下さいませ！)

都内中心

『ケケエエツツ！！！！！』

「う、うわあああつつ！！！！！！」

「きゃあああつつ！！！！！！」

パンプキンI達は人々を襲い、蹂躪し捕らえた人間の過去の扉を開き超異点の存在を探っていた。そこへ…

「止めるおおつつ！！！！！！変身！」

【KAMEN・RIDE…DELIGHT!】

闇影はマシンデイルイターに乗った状態でデイルイトドライバーを装着し器用な手付きでカードを装填しデイルイトに変身し、マシンから飛び降りた状態からパンプキンIにキックを喰らわせた。

『グガツ！！？』

『うじゃうじゃいるな…此処は援軍を呼ぶぞ！！』

【FINAL・SHADOW・RIDE…DE・DE・DE・DE  
N・O!】

デイルイトは自身の影を、時の大型列車「キングライナー」をイメージした赤と白のオーラアーマーが特徴の電車の中の電神王「仮面ライダー電王 ライナーフォーム」にFSRさせた。

(あれは…電王!?)

(でも、あたし等のは違うみたいね…。)

【ATTACK・RIDE…DENKAMEN・SWORD!】

デイルイトはS電王LFに四つの電仮面が付いた大型の剣「デンカメンソード」を装備させ、二手に分かれてパンプキンI達と戦った。

『はあっ!やあっ!せいっ!!!』

『グギヤアツ!!!』

【RYU・GUN!】

『…!!』

『ギイヤアツ!!!』

デイルイトはライトブツカーで敵を次々と斬り裂いていき、S電王LFはデンカメンソードのターンテーブルをガンフォームの電仮面を上にしたリウガンモードに切り替えて、軽快なステップを取りながら切っ先から紫色の光弾をパンプキンIに連射し、そして…

『数は粗方減った!止めと行くか!!!』

【FINAL・ATTACK・RIDE…DE・DE・DE・DE・DE  
N・O!】



デイライトが電王のFARを発動すると、彼の横側に黒の、S電王LFの横側に金色のレールが敷かれ、背後からデンライナーのオーラが超スピードで現れた。二人は武器を持った状態でその上に乗り、電車の如く滑走し…

『はああああ…電車斬りっ!!』

( )(ええええつつ!!!!?センス無くいつ/悪過ぎますわっ/無さ過ぎだっ!!!!)( )

『グギャアアアアツツツ!!!!』

オーラを纏ったまま横一文字に斬り裂きパンプキン工達は大爆発した。必殺技は「フルスロットルブレイク」…のだが、デイライトが何故か「電車斬り」と呼んだ為、三人のイマジン達からセンスが無いと批評された。

「ふう…これで終わった…。」

(闇影!直ぐにリョウタロウの所へ行け!その南瓜達は単なる罠だっ!!!)

「何ですって!?!場所はっ!?!」

変身を解除した闇影は、トキナから先程のイマジン達は罠だと聞き、リョウタロウの場所を聞き出した。

「…。」

一方、リョウタロウは無言のままとぼとぼと街を歩き、姉のいる「星のカーテン」へと向かっていた。

「…もう一度姉さんの様子を見に行こう。」

記憶を取り戻さない限りこんな事をしても無意味なのは分かっているが、ついそこに足を運ぶリョウタロウ。すると…

「あら、リョウタロウ君。こんにちは！」

「ね…ア、アイリさん！こ、こんにちは…！」

買い物袋を持ったアイリが現れ、何時ものにかやかな笑顔で挨拶をしてきたので、リョウタロウもぎこちない笑顔で挨拶を返した。彼女が姉だと言う事は伏せて…。

「あ、あのっ…！…！」

「んー、何かしら？」

「ボ、ボクは…貴女の…！…！」

リョウタロウは、自分が弟である事をアイリに告げようとしたその時…

『見つけたぞ…この世界の超異点、反田アイリ…！…！』

「」「…！」「」

突如ユニコーンEが二人の前に現れ、アイリをこの世界の超異点だと告げた。

『記憶を辿って見れば、よもやネガ電王の姉が超異点だとは…灯台もと暗しとはよく言った物だな!』

「姉さんが…超異点…!?!」

「姉…さん…!?!リョウタロウ君、この人何言ってるの?」

「そ、それは…。」

アイリはユニコーンEの寝耳に水な言葉に困惑しており、リョウタロウもそれに答えるかどうか迷っていた。しかし、それとは裏腹にユニコーンEが近付き出した。

『さて…貴様の過去の時間に跳ばせて貰うぞっ!?!』

「や、止めるおっ!!アイリ…姉さん!!早く逃げてっ!!」

だがそうはさせじとリョウタロウはユニコーンEを押さえ、アイリを姉だと呼び逃げる様叫んだ。

「う…うん…!?!」

アイリは少し戸惑ってはいたが、リョウタロウの言葉に従い、逃げる為走り出した。

『くっ…!離せ!無礼者!?!』

「うわぁっ!!」

だがその華奢な身体ではイマジンはおろか普通の人間を長い間押さえる事は出来ず、リヨウタロウは引き剥がし投げ飛ばされてしまった。

「はぁ…はぁ…はっ!!」

『逃がさぬぞ…超異点よ!!』

「い…いや…止め…!!はっっ…うん…。」

アイリは逃げようとしたが、ユニコーンIは馬の如く素早く彼女の正面に回り込むと、すかさずアイリの身体に腕を突っ込みかき回し、過去の扉を開きその中へと飛び込んだ。そしてアイリは目から輝きを失い、呆然とした。

「姉さん!しっかりして!!姉さんっ!!」

「リヨウタロウ君!!」

「闇影さん…姉さんがっ…!!」

「落ち着いて。えーと、チケットは…。」

リヨウタロウはただただアイリの身体を揺すり動揺していた。そこへマシンドライターに乗った闇影が現れ、リヨウタロウに落ち着く様宥めてライダーチケットをアイリに翳した。すると、チケットにユニコーンIの絵と「2007年1月28日」の日付が記された。

「11の日は…!!」

「早く行こう!!」

2007年1月28日・天文台付近

「ユウト…ユウトが…!!」

そこではアイリは、天文台の頂上の柵にもたれ掛かりそれが突然壊れた為落下死した婚約者を白い布で包んだ担架を見て目の輝きを失い呆然としていた。

「可哀想にな…。」

「あんな美人を残しちゃうなんて…。」

「うっ…!!?」

周りの人間がそんな彼女を哀れんでいた時、アイリの身体から大量の砂が零れ落ちそれはユニコーンIの姿となり実体化した。

「う…うわああっつ!!何だっ!?!」

「化物だああっつ!!」

『着いたは良いが…小煩い人間共が邪魔だな…はあっ!!』

ユニコーンIはアイリを始末する前に、周囲の人間が邪魔だと判断し掌から光弾を建物や人々に放ち、破壊活動を行った。そこへ、ネガライナーが走り出し中から闇影とリョウタロウが現れた。

「酷い…!!」

「…。」

荒れ果てた天文台や傷付いた人々を見て、闇影は悲しみと怒りを感じていた。だがリョウタロウは未だ浮かない顔をしていた。

『あの超異点さえ消せば、余は新たな世界の支配者となれる…!!』

「そんな事させるかつ！変身！」

【KAMEN - RIDE… DELIGHT!】

「…変身！」

【NEGA - FORM!】

闇影はデイルイトに、リョウタロウはネガ電王NFに変身しユニコーンIと戦おうと前に出た。

『痛つう…強さは…別格だ!』

『さて、輝く道へと導かせるけど…リョウタロウ君、大丈夫かい?』

(は…は…。)

『世界を導くのは…余だっ！！』

ユニコーンEは、剣を取り出し二人に斬り掛かっていった。だが、デイルイトはライトブッカー・ソードモードを、ネガ電王NFはデングツシャー・ソードモードを構えて斬り結んだ。

『ふんっ！はっ！ぜやっ！！』

『くっ…！！数ではこっちが上なのによ…！！』

『弱気になるなっ！！必ず隙は見つかる！！』

ネガ電王NFの言う通り、数の上では此方が有利なものにも関わらずユニコーンEの方が強く押され気味になり嘆いていたが、デイルイトはそんな彼に集中する様諫めた。

『貴様等に余は倒せんよ…倒せばネガ電王の姉が失意にかられ、自ら死を選ぶのだからなあっ！！』

(……………っっ！！)

『知った事か。お前は俺の目の前で平伏す事になってるんだからなあっ…！！』

ユニコーンEはアイリが死を選ぶかもしれない事をデイルイト達に告げ揺さぶりがけたが、ネガ電王NFはそれを一蹴し再び斬り掛かるうとした。しかし…

(待って…！！ネガタロス！！)

『なっ…！？リヨウ…タロウ…何の…真似だっ！？』

『リヨウタロウ君…！！』

ネガ電王NFはデンガツシャーを上にした状態で、そのまま硬直した様に動かなくなった。リヨウタロウが特異点の力でネガタロスを抑えたからだ。

『はははっ！！これはいい的となったな！！はあっ！！』

『ガアッ！！』

ユニコーンIはネガ電王NFが動かないのを良い事に、光弾を放った。そして、ユニコーンIは、自身の身体から無数のパンプキンIを生み出した。

『ケケケ…！！』

『またか…！こっとなったら…！！』

【SHADOW - RIDER…DARK - KIVA！】

【ATTACK - RIDER…GARULU - SAVER！】

事実上戦力が一人と化したデイトライトは、自身の影をガルルセイバーを装備させたSダークキバにシャドウライドさせ、パンプキンIと戦う戦力を増やした。

『……………！！』



『ギャアツ!!』

Sダークキバは次々と敵を斬って行き、ディライトも同じ様に倒し、パンプキンI達を全滅させた。

『中々やるな…だが…はあっ!!』

『ぐあああっつ!!』

ユニコーンIは、掌から光弾を放ちディライトとSダークキバにダメージを与えた。

『く…くそっ…!!』

『おい!リョウタロウ!!何時までそうしてるつもりだっ!?!』

(分かってるよ!!自分が何を仕出かしているのか!!でもボクは、姉さんが悲しむ顔を…もう見たく無いんだ…!!)

リョウタロウは、心の中で涙ながらに叫んでいた。彼が躊躇う理由、それはアイリが悲しむ顔を二度と見たく無かったからである。

『戦う意思を無くし、腑抜けたネガ電王等取るに足らん!もう一発…喰らうがいいっ!!』

『くっ…!!ヤバいぜ!!避けきれ無えっ!!』

ユニコーンIは、未だ動こうとしないネガ電王NFに再度光弾を放った。既に回避する事が出来ない距離迄光弾が近付いてきた。そこへ…

『……………!!』

『ぐあああつつ!!』

『デイルイト!!』 / (闇影さん!!)

突然、Sダークキバがネガ電王NFの前に立ちはだかり光弾を受けて消滅した。影がダメージを受けた事で、デイルイトもそのダメージを受け、身体から煙を出し胸を押さえて苦しんでいた。

『うつ…くつ…!!しっかりするんだリョウタロウ君!!確かに、君のお姉さんの悪い記憶を取り戻す事が嫌なのは分かる!!俺だつて…忘れたい記憶を持つてるから…!!』

(えっ…!!)

『だけど…何時までもそれを怖がってばかりはられない!!良い記憶も、嫌な記憶もその人の「現在(いま)」を表わす、一つでも失くしてはいけない大事な物だから!!』

(……………)

『例え傷付くとしても、それを恐れていたらその未来(さき)を手にする事は出来ない!!だからこそ、君は今自分に出来る事をする時なんだっ!!』

(ボクが今、出来る事…!!)

リョウタロウは、デイルイトの言葉を聞き自分が何をすべきなのか

を考え出した。

『リヨウタロウ…お前は俺や雌猫、山羊女、燕忍者とこう契約したよな？「自分に来る事…時の運行を守る手助けをして欲しい」ってな。あの時のお前の目、悪くなかったぜ。』

(ネガタロス…。)

『だからお前は、自分が決めた事をやれば良いんだ…。仮にもこの「究極の悪」である俺を従えたんだからな！もう少し自身を持ってっ！…』

(うん…さっきはごめん。それと…ありがとう…！)

『ふ、ふんっ！俺以外の悪党は、計画の邪魔になるからお前を利用してただけなんだからなっ！！／／／』

(はは…分かってるよ。)

ネガタロスは不器用ながらもリヨウタロウを励まし礼を言われたが、ユニコーンEが自分の「計画」の邪魔になると言って照れ隠しをした。

『先程から余を無視しておって…貴様、何様のつもりだっ！？』

『何様でも無いさ…お節介教師な仮面ライダーだ！！宜しく…！』

『ほざけっ！！こうなれば貴様を一気に潰してやるっ！！ングッ！！グオオオオツツツ！！！！…』

ユニコーンEはディライト達を潰すべく、何故か自分で自分の胸を剣で突き刺し全身に黒いオーラを纏い姿を変化させた…。

『な、何だっ…!? 黒いオーラがどんどん大きくなっていく!?』

『グオオオオオオオン…!!』

『自分で暴走しやがったか!! だが、何だあの姿は!?!』

黒いオーラが止むと、イメージを暴走した姿「ギガンデス」が現出された。上半身が三本角の黒牛「ヘル」、背中に「ヘブロン」の白い翼、そして下半身が「ハデス」の金色の龍の腹部と三体のギガンデスが複合した「ギガンデスキメラ」として…。

『あんなの今迄見た事なかったぞ!? だが、此処はネガライナーで…!!』

ネガ電王NFはギガンデスを倒す為、ネガライナーを呼び出したが…

『ガアアアアツツツ…!!』

『なっ…!!』

(ネガライナーがっ!!)

だが、そうはさせじとギガンデスは口から黒い炎弾を放ち、ネガライナーを使用不能にさせた。

『くそっ!! ネガライナーをやられちゃったらあいつは倒せねえぞ』

っ！！』

『なら君が「なれば」良いじゃないか。こいつでね。』

【FINAL・FORM・RIDE…NE・NE・NE・NEGA  
・DEN・O!】

『二人共、力を抜いて。』

『ンガッ！？』 / (うわあっ！？)

デイライトがネガ電王NFの背中に手を当てると、ネガ電王NFは途端にネガライナーその物に変形した。これがネガ電王のFFR「ネガデンオウライナー」である。そしてデイライトは何処から現れたマシンデイライターに乗って走り出しそのままNライナーのコックピットに乗り込んだ。

『おいデイライト！何だこれは！？』

『あれに勝つにはネガライナーしかないだろ？行くぞっ！！今からが本当のクライマックスだっ！！』

『答えになるかああっ！！』

(諦めよ…ネガタロス。)

ネガタロスの叫びを無視し、Nライナーはレールを螺旋状に敷いて走りつつ、正面のバルカン砲でギガンデスクに連射した。

『グギヤアアアーン！！ガアッ！！』

だがギガンデスKも口から黒い炎弾を吐きながら、翼から無数の尖った羽根を撃ち出した。

『おっと！当たらせないよっ…と！！』

デイルイトが方向を切り替える事で、Nライナーは今の攻撃を上手く回避する事が出来た。

『リヨウタロウ君！！止めいくけど…もう大丈夫だね？』

(はいっ！！)

【FINAL - ATTACK - RIDE : NE・NE・NE・NE  
GA - DEN - O!】

『これで…終わりだあっ！！』

『グギャアアアアツツツ！！！！』

デイルイトがカードを装填すると、Nライナーは正面のバルカン砲、全車両から黒鬼、猫、山羊、燕の形をしたミサイルを放つFAR「デイルイトトレイン」でギガンデスKを大爆発させた。

希望ヶ丘病院

「姉…さん…。」

現在の時間に戻ったりヨウタロウは、恐る恐るアイリの病室に入り  
姉の名前を呼んだ。

「リヨウちゃん…。」

「（…良かった。）」

イマジンを倒した事により、記憶が戻り呼び方も元に戻りリヨウタ  
ロウは内心をした。

「あ…あの、姉さ「私ね…できたみたいなの。」ああ、そうなん…  
って、え？まさか…！！」

アイリは頷きながら起き上がり腹を摩り出した。何と彼女は、妊娠  
していたのだ。

「それでね、お医者様にこの手首の事で怒られたの。『これから母  
親になる人が命を粗末にするな！』って。」

「……。」

「だから私、ユウトの為に、この子の未来の為に頑張る事を…っ  
て、リヨウちゃん？」

「良かった…た…良かった…うっ、ううっ…！！」

リヨウタロウはその場でしゃがみ込み、嬉しさと安心感で涙を流し  
ていた。

「あらあら、泣き虫な叔父さんね…。」

「素敵な家族の絵だわ…。」

リョウタロウとアイリ、そして茶髪の青年・ユウトと少女と一緒に星空を見ている絵を見て、影魅璃は感激し、闇影は目頭を押させていた。

「本当…ですね…。」

「それにしても、まさかアイリさんに赤ちゃんができてたなんてね…。」

「その子の未来の為にリョウタロウ君は頑張っていくだろうね。自分の出来る事をして…。」

「だなっ！俺も自分に出来る事を生かしていいモン手に入ったしな…！」

「ん？コウイチ、何持って…って！！何これっ！？」

黒深子はコウイチの持っている物を取り上げ、怒りを露にした。それは、ペルシア達が憑依した自分のセクシーポーズを取った写真だったのだ。どうやら彼女が眠ってる隙に憑依し、無断撮影した様だ。

「やべっ！！逃げろっ！！」

「待ちなさ〜いっ！！」



黒深子は怒りの表情のまま、コウイチを追い回した。

「全く…二人共暴れな…!!」

闇影が二人に注意しようとした時、次の世界を表すキャンバスに、無数の隕石が東京都内に墜落した光景と複数の昆虫が飛び交った絵が描かれた。

「ダークカブトの世界か…。」

「くそっ!!結局お宝は手に入らず終いかよっ!!」

「まあまあ、次の世界で挽回すれば良いじゃな…!?!?」

今回、全く出番が無く宝も入手出来ずに苛立つ周を、次の世界で挽回すれば良いと冷静に切り替える巡は、何者かの視線を感じ背後を向き出した。

「どうしたんだ、巡ちゃん?」

「ううん。何でも無いわ。(さっきの視線は一体…?)」

「ウククク…。」

巡が感付いた謎の視線の人物は、不気味に笑いながら灰色のオーロ

ラを潜り、この世界から姿を消していった…。次回、仮面ライダー  
ディライト！

「 NEO - ZECT 行動隊長 煌闇影 ” …か」

NEO - ZECT の行動隊長とザビーの資格者、そして…

「 ええええええつつつ！！！！？ふっ、夫婦うううつつつ  
！！！！？」

黒深子の『夫』という三つの役割を持った闇影…。

「 弟が行方不明になってから、私の周囲に何時もダークカブトが現  
れるんです…。 」

弟が行方不明な女性のピンチには、いつも「黒い影」…ダークカブ  
トが現れる…。そして…

「 貴方は…私が抹殺します！！ 」

ディライトを抹殺べく、サソードに変身する謎の少女…彼女は一体  
…！？

次回、『漆黒の暗殺者・ダークカブト』

全ての闇を、光へ導け！

## 第14導 ネガわらない記憶を取り戻せ！（後書き）

ペルシア「お姉ちゃんの記憶が戻って良かったわね！リヨウタロウ  
！！」

リヨウタロウ「うん…グス…本当に…良かった…た…うわぁぁんっ！  
！（未だ泣いてる）」

ネガタロス「ちっ！！何時までも泣いてんじゃ…グゴツ！！」

カブラ「今日ぐらい良いじゃありませんか。アイリ様はリヨウタロウ様の唯一の肉親、その方の記憶が戻って嬉し泣きするのは当然じやありませんか。」

ツバキ「右に同じ…ましてアイリ殿には赤子ができている…。その子や彼女のこれからの未来を守る為に我々も日々精進せねば！！では、拙者は鍛錬に行つて参る…失礼！！（消えて退場）」

トキナ「まああたしは時の運行に支障がなければ問題無いけど…。そんじゃ皆さん、次の行先は『ダークカブトの世界』だよ！」

ネガタロス「あの馬鹿（作者）が書きたがつてた世界か…ある人間のお陰でそのライダーが好きになったとか…。」

トキナ「そうみたいだね。ほら、向こうでトライアが某天文研究所親子ばり（母親が帰る予定の話参照）に喜んで…あつ、黒深子が制裁ボム使つて爆破した。」

ネガタロス「それはどうでもいいが…どうだ読者、俺の活躍を見て

悪の組織に入る…ガッ！！（正拳突きを喰らい気絶）

トキナ「しつこいよ…それじゃ皆、また何処かだな。」

第15導 漆黒の暗殺者・ダークカブト（前書き）

トライR「え〜ドックシーヤの皆様！！ダブト編のスタートですっ  
！！」

闇影「ある方の作品がきっかけでこのダークライダーが好きになっ  
たから何時もより長くなってしまったそうです。」

黒深子「グダグダな面が多々ありますので、気に入らなかつたらじ  
ゃんじゃん苦情をどうぞ。」

コウイチ「んじゃ、どうぞっ！！」

## 第15導 漆黒の暗殺者・ダークカブト

白石家

「 NEO - ZECT ネオセクト 行動隊長 煌闇影 ” ……これがこの世界での役目か。でも家に変化が無いなあ…。」

と、自分の名刺を読みながら考え込む闇影。何時もなら世界が移動する度に白石家は何かしら変化するのだが、今回は闇影の服装が紺色のスーツの姿以外特に変化が無い…と思いきや…

「せ〜んせ 早くご飯食べよ」

「って！！うわあっ！？／／／な、何で抱きつくんだっ！？黒深子！！／／／」

突然、フリルの付いた可愛いエプロンを着けた黒深子が闇影に抱きついて来た。闇影は顔を赤くしながら彼女に尋ねた。すると黒深子は信じられない事を言った…。

「何でって…良いじゃない。私達『夫婦』なんだから」

「ああ、そっか、そうだ…ね…って…」

何と闇影と自分が夫婦だと、満面の笑みを浮かべてそう言った。闇影は一瞬納得したが、直ぐに我に返り沈黙し、そして…

「ええええええええつつつつ！！！？ふっ、夫婦うううつつつつ

「！！！！？」

大声で絶叫すると、家中が震度8の地震が起きたが如く揺れまくった。そりゃそうだ、突然身近にいた女の子が「妻です。」だなんて唐突過ぎた話を聞いて冷静でいられる筈が無い。

「（何で！？何時！？何処で！？どうやって！？いやいやいやいや落ち着け煌闇影！！教師たる者、生徒とこんな関係になるのは断じて有つてはならない！！だが…だが…！！）」

冷や汗を垂らし頭を抱え、テンパりながらあれこれ考え込む闇影。いつの間にかテーブルに座らされているとも気付かずに…。

「は〜い先生。朝御飯たつくさん作ったよ どうかなあ？私料理するの初めてだから自信無いけど、先生に喜んで貰う様頑張ったんだから！」

「ん？あ、ああ！！そうなんだ！！どれ、どんな料…理…なん…！！」

ふと我に返った闇影は黒深子の作った朝食に目をやると、怪訝げな顔をした。何故ならテーブルの上にある料理が全て真っ黒い物体にしか見えないのだ。皿を取ってみると、何故か「助けてえ…助けてえ…。」という呻き声が聞こえて来たので慌ててテーブルに置き戻した。

「（お、おい闇影…お前、何か黒深子ちゃんを怒らせる様な事でもしたのかよ！？）」

「（こっちが聞きたいよ…急に夫婦だとか言い出すし、料理は得休

が知れないし…。」

「どうしたの先生？早く食・べ・て」

闇影とコウイチは、黒深子の豹変振りにただただ恐れ、困惑していた。しかし、それ以上に恐ろしいのは彼女の料理だった。食すか否かと迷っていたその時…

「あつ！！いたいた！！何してんスカ隊長！！ワームが現れましたよ！！」

「えっ！？ちょ、ちょっと！引つ張らないで！！」

そこへ突然、黒い軍服を着たツンと尖った茶髪の青年が闇影の手を掴み、その場から颯爽と彼を連れ去っていった。

「何だったんだ？闇影連れていかれたし…。」

「もうう！！ご飯も食べてくれない上に『言ってきます』のキスもしないなんて…っ！！」

「キ、キスッ！？／＼／黒深子ちゃん、ホントどうし…！！」

「私がどうしたって？コウイチ。」

「そうだよっ！！もう一人の黒深子ちゃんも何か言っ…っ…って、え？」

何時もとは違い過ぎる黒深子の豹変した態度に疑問を持つコウイチは、背後から声がしたので振り返って見ると…



「ええええつつ！？く、黒深子ちゃんが二人いるっ！？」

そこには黒深子が「もう一人」いたので、コウイチは目を見開き驚いた…。

世界の光導者、デイライト！9つの影の世界を巡り、その瞳は、何を照す？ とある港近くの廃工場

『ブブブ…！！』

『ギギギ…！！』

そこでは蠅の特性を持ったワーム「ミユスカワーム」と複数の緑色の成虫前のワーム「サナギ体」複数と、NEO-ZECT所属の黒蟻に似たスーツを着た複数の「ゼクトルーパー」が交戦していた。

『全弾！てええつつ！！』

『グギイイツツ！！』

『き、効かな…ぐああつつ！！』

一人の戦闘員の号令でゼクトルーパー達はマシンガンの様な銃器でミユスカW達に攻撃した。しかし、それらは全く効かず逆にワーム側の迎撃で隊員が数人死傷してしまった。そこへNEO-ZECT側に一台の車が止まり、闇影と先程の青年・部隊副隊長の壬銅（み

どう) テツキが降りてきた。

「あれがこの世界の怪人、ワームか…。」

「被害が酷いツス…俺達でやっちゃいましょう!! お前等下がってるツス!!」

『隊長と副隊長が戦うそうだ…皆、下がれ!!』

テツキはゼクトルーパー達に下がる様命令し、闇影と共に前線に出た。無論何の手も無く戦う訳では無い。

「来いツス!!」

テツキが右腕を上を翳すと、空中から銅色のケンタウルスオオカブト型の昆虫コア「カブティックゼクター」が飛来し彼の手元に収まった。

「ゼクターか…。よし、俺も…って、おわっ!?!」

闇影も変身すべくデイトライトドライバーを取り出そうとしたが、突然謎の物体が彼の目の前に飛んで来たので驚きとつさに掴んだ。

「これって…ザビーゼクター!?!」

闇影が掴んだ物、それはNEO-ZECT行動部隊長の証である蜂型の昆虫コア「ザビーゼクター」であり、よく見ると左手首にブレスレット型アイテム「ライダーブレス」が装着されていた。

「行くツスよ…隊長!変身!」

【HENSHIN!】

【CHANGE - BEETLE!】

「何か粗方解らないけど、行くぞっ!!変身!」

【HENSHIN!】

二人がライダーブレスにゼクターをセットすると、テツキはケンタウルスオオカブトを模した銅色のライダー「仮面ライダーケタロス」に、闇影は銀色と黄色のアーマーを纏った戦士「仮面ライダーザビ―マスクドフォーム」に変身した。

「あれ?壬銅君のはちょっと違うんだね。」

ザビーの言う様に「ダークカブトの世界」を初めとするカブト系統の世界のライダーは皆、第一形態に特殊金属「ヒビイロノカネ」で構成されたアーマーが装着されるのだが、ケタロスの様に最初から「ライダーフォーム」に変身すると言う例外もある。

「なら俺も…キャストオフ!」

【CAST - OFF!】

「グガアアツッ!!?」

ザビーMFがゼクターを操作すると、アーマーが展開され全てミュスカW達めがけて弾け飛び…

【CHANGE - WASP!】

複眼が怪しく光り、黄色と黒を基調とした凶暴な雀蜂に似た顔付きが特徴の「ライダーフォーム」へとフォームチェンジした。

『ふう…身軽になったし…戦闘開始!!』

『どゆりゃ!せいっ!せいっ!!』

『グギイイツ!!』

ザビーとケタロスは走り出し、ミスカW達と交戦を開始した。ケタロスは専用武器「ゼクトクナイガン」をクナイモードにして、サナギ体達を素早く斬り裂いていった。

『武器が一つか…。良い機会だし此処は素の力でいきますか!!!ほいつ!ふっ!ふっ!だああっ!!』

『グツ!ガツ!ギヤアアアツツ!!』

一方ザビーは、ケタロスとは違い武器がゼクターに装着されたザビーニードルしか無く、これを機に肉弾戦で戦う事に決め、ミスカWやサナギ体達を目にも止まらぬパンチを連打し、囲まれても逆立ちして両足を大きく伸ばし、蹴り回るといふ荒々しい戦法を取った。

『グツ…!!グガガ…』

『逃げてても無駄さ!!』

『ギヤアツツ!!』

サナギ体一体がザビーに恐れをなして逃げようとしたが、そうはさせじとザビーニードルから放つ針状の攻撃を受け爆死した。

『す……凄いッスね、隊長。』

『止めだっ……！行くよ壬銅君！クロツクアップ！』

【CLOCK - UP!】

『了解ッス……！クロツクアップ！』

【CLOCK - UP!】

ザビーとケタロスは、ゼクターを作動しクロツクアップを発動し時間流の空間に突入した。すると、ミユスカW達の動きや援護射撃の弾丸の動きも全てゆっくりに見え、二人は高速移動しワーム達に近付いた。そして……

【RIDER - BEAT!】

『はあああ……アバランチスラッシュ……！』

【RIDER - STING!】

『ライダー……ステイング……！』

『グギヤアアアアツツツ……！！！！』

ケタロスは「ライダービート」のタキオン粒子で強化した右腕のゼ

クトクナイガン・クナイモードで弧を描く様に斬る「アバランチス  
ラッシュ」でサナギ体達を斬り裂き、ザビーはクロックアップの速  
度を上乘せしつつ、ザビーニードルでミュスカWの脳天を「ライダ  
ーステイング」で貫き、ワーム達を爆破させた。

「ふう…これにて一件落着コンプリート…ってね!!」

変身を解いた闇影は、某世界の赤い刑事と侍の台詞をごちゃ混ぜに  
した台詞を言い任務完了を宣言した。その時、彼の携帯が鳴り出し  
た。

「はい、もしもし。」

『闇影!直ぐに家に戻って来てくれ!なんか黒深子ちゃんが二人い  
るんだ!!』

「???黒深子が二人…!!ワームかもしれない…分かった!直ぐに  
戻る!」

「ワームがいるなら、俺も行くツス!!」

コウイチからの電話を切った闇影は、直ちに白石家に向かった。テ  
ツキもワームを倒すべく一緒に同行した。

## 白石家

「先生、私が本物よっ!!」

「偽者の言う事なんか聞いちゃ駄目だよ先生っ!!」

「うーん…どっちが本物なんだ？」

「難しいツスね…。」

どちらかが黒深子に擬態したワームなのは分かっているが、「自分が本物、向こうが偽者」だと言う二人に闇影達は困惑していた。

「此処は俺に任せろ…。スリーサイズはいくつ…!!」

「んなもん答えるかああっ!!」

「っ…ゲボガハアツ!!」

「(二人分の正拳突き…死んだなあれ…)」

馬鹿な質問をし出したコウイチは、二人の黒深子から正拳突きを喰らい、死んだ様に地に沈んだ。

「能力まで同じだと本当に…ん？待てよ…。だったら…!!いや、ホント凄かったよねえ黒深子。」

「…??」

何かを思い付いた闇影は急に話し出し、二人の黒深子は何の事だかと首を傾げていた。

「『激しくして欲しいの。』とか『普通じゃ嫌。』とか言って来る

からびつくりしちゃったよ。」

「な！な！な！／＼／＼何言い出すのよ先生！！／＼私そんな事言  
つてないわよ！！／＼／＼」

「そうよ！！昨日の夜、私先生を部屋になんか招いてない…から  
…！！」

「何で昨日の夜の事だと分かったのかな？俺は『凄かったね』とし  
か言っていないのに。」

「くっ…くそっ！！」

ワームは擬態した人間の技術や記憶をもコピーする事が可能である。  
それを逆手にわざと本人の知らない事を話し出し、その反応で正体  
を割り出す…。これが闇影の作戦である。そして、その策に嵌まっ  
た黒深子（？）はサナギ体へと変化し、コウイチを踏みつけて壁を  
突き破り逃走した。

「待てっ！逃がすかっ！！」

「私に化けて先生を誘惑するなんて…絶対息の根を止めてよねっ！  
！先生！！」

「怖っ！ま、待てっ！！」

闇影とテツキは壊れた壁を通ってサナギ体を追い掛け、走り出した。  
同じくコウイチを踏みつけながら…。

「壁から出ちゃ駄目でしょ！行儀悪い！！」



「…誰も俺の心配しないのね…ガクッ。」

影魅璃は、サナギ体や踏みつけられたコウイチには触れず、闇影達が壁を出た事に怒っていた。それに突っ込み気絶するコウイチ…。

「待てええつつ…!!」

『し、しつこい…。こうなったら…グオオオ!!』

執拗に追って来る闇影達に業を煮やしたサナギ体は「脱皮」をし、白蟻を模した「フォルミカルビュスWム」に変化し、クロツクアップで再び逃走しようとしたが、二人の男女がいるのを見かけ…

『あいつ等捕まえて人質にでもすつか!! シャアアアツツ!!』

「まずい!! おゝいその人達!! 早く逃げて下さいっ!!」

急遽フォルミカルビュスWは、彼等を人質に捕らえようとクロツクアップを使い近付き出した。が…

「逃げる? その必要はありませんよ。」

銀色がかった白い短髪に眼鏡をかけた知的な雰囲気を持つ男性は、飛来した銀色のカブティックゼクターを掴み、そして…

「変身!」

【HENSHIN!】

【CHANGE - BEETLE!】

左手首のライダーブレスにゼクターをセットすると、男性はヘラクレスオオカブトを模した銀色のライダー「仮面ライダーヘラクス」に変身した。

「あの人もライダーなのか…!」

【RIDER - BEAT!】

『楽にさせますよ…はあっ!』

『グギャアアアツツ!』

ヘラクスは直ぐ様ライダービートで強化した腕でゼクトクナイガン・アックスモードを縦一文字に振り上げ、敵を切り裂く「アバランチョップ」でフォルミカルビュスWを撃破した。

「凄い…たった一撃で…「きゃあっ!?!」」

『ギギギ…!』

「またかつ!!変し…!」

闇影は、素早くワームを倒したヘラクスを見て息を呑み驚いていた時、一緒にいた女性に別のサナギ体が近付いて来た。闇影は今度こそディライトに変身しようとした瞬間…

【CLOCK・UP!】

『…!』

『ギヤアアツツ!』

「…えっ!？」

【CLOCK・OVER!】

「黒い何か」が音も出さず、目にも見えぬ速度でサナギ体に近付くと、一瞬で爆破させた。その正体は…

「黒い…カブト…!」

胸に赤いラインが入った漆黒のボディーマー、妖しく光る黄色の複眼が特徴の黒いカブトムシをイメージした戦士、この世界の守護者「仮面ライダーダークカブト」だった…。

『現れたなダークカブト!!そのライダーシステムは我々ネオゼクトの所有物だ。返して貰おうか!!』

『…。』

【CLOCK・UP!】

ヘラクスは、ダークカブトにライダーシステム「ダークカブトゼクト」を手を差し出しながら返還する様要求した。ネオゼクトの名を出した事から、ヘラクスもネオゼクトの一員の様だ。しかしダークカブトは一言も喋らず、クロックアップを使いこの場から去って

行った。

『くっ…！逃げられましたか…。』

「貴方は…一体…？」

「どうでしたか隊長…って、そっ、総帥！！」

「へ？」

闇影に追い付いたテツキは、ヘラクスを見ると驚いた表情で「総帥」と呼び姿勢を整え敬礼をした。

黒角（くずみ）家

ヘラクスの変身者であり、NEO-ZECTの総帥・銀城（ぎんじょう）（ヒデナリと一緒にいた彼の婚約者、長い黒髪をポニーテール状に丸めた女性・黒角ヒヨリの自宅に招かれた闇影達。

「またダークカブトを逃してしまいましたか…！」

「落ち着いてヒデナリさん。お茶でもどうぞ。皆さんもどうぞ。」

ダークカブトに逃げられ憤慨するヒデナリに、ヒヨリは茶を差し出し、落ち着く様宿めた。

「あのダークカブトは、一体何者なんですか？」

「…五年前、NEO-ZECT…当時のZECTとはあるワームの軍勢と戦っていました。私と壬銅、そして…」

「私の弟、ソウタもZECTの隊員だったんです…。」

「『だった』?」

ヒヨリは、棚にある自分とヒデナリの間にいる青年・ソウタを写した写真立てに悲しげな表情で目をやって答えた。

「彼は若くして他よりずば抜けた実力を持った隊員であり、懸命にワームと戦っていました。しかし、僅かな隙を付かれワーム達に拐われてしまい行方が分からなくなり結果、我々とワーム側は共に敗北…同時に彼の持つダークカプトゼクター迄奪っていった…。」

ヒデナリが躍起になってダークカプトを捕まえたい理由、それは、ソウタの持つダークカプトの力をワームが悪用しているやもしれないからであり、何より…

「奴等からソウタ君を奪い返くべく、そしてワームの驚異から人々を守る為に、私はゼクトをネオゼクトに再建しました。私の弱さ故に起きた過ちを自分でケリを付ける!!それがゼクトを創設した私の責任、私なりに出来るヒヨリへの償いです…!!」

自分が弱い故に起きた事態を自身で解決すると言うヒデナリは、それがネオゼクトを創設した自身の責務、そしてヒヨリへの償いだと強く言った。

「余りお気になさらないで下さいヒデナリさん。貴方は貴方で弟の

事を想ってくれているのは解っていますから。それにね、もしかしたらソウタは生きてるかもしれないの。」

「どういう事ツスカ？」

「弟が行方不明になってから、私がワームに襲われそうな時には何時もそのダークカブトが現れるんです…。だからあれは弟なんじゃないかって…。」

ヒヨリがこれ迄何度もワームに襲われそうになった時に何時もダークカブトが現れる為、彼女はそのダークカブトこそ、行方不明になったソウタなのだと推測した。

「でもそれなら、何で戻って来ないんスカ？」

「それは…。」

「うーむ…。」

「弟さんが戻らない理由か…。何なんだろう？」

闇影が歩きながらソウタが戻らない理由を考えていたその時、コノハムシを模したワーム「フォリアタスワーム」が現れた。

『ブブブ…!!』

「ワームか…！三度目の正直…行くよ！変身！」

【KAMEN・RIDE…DELIGHT!】

闇影は、ワームに会った回数を「三度目の正直」と言いながら同じく三回目にして漸くデイルイトに変身した。

『ブブブ…!』

『何っ!?! つむじ風が変わった…って、ぐあぁっ!』

フォリアタスWは強いつむじ風に変化し、クロックアップを用いてデイルイトに突撃し、近くの廃工場内迄吹き飛ばした。

『痛たた…こっちはクロックアップを使えないのに…こっとなったら…!』

クロックアップが使えないと嘆くデイルイトは、立ち上がりライトブッカー・ソードモードを構えたままで動きを止めた。フォリアタスWは再びつむじ風と化し、クロックアップでデイルイトに近付いたが…

『(クロックアップが使えないなら、目を閉じて感覚を研ぎ澄ませるんだ…。後ろから5m…4、3、2、1…)…そこだっ!』

『ブギヤアアアツッ!』

目を閉じて感覚を研ぎ澄ませたデイルイトの居合い斬りの如く一振りにより、フォリアタスWは爆死した。

『ふう…こんなもんだ…うわぁっ!?!』

デイルイトが敵を倒した直後に、何者かの銃撃が襲い掛かった。それは、十数人のゼクトルーパーを率いたヘラク스와ケタロス達 NEO-ZECT だった。

『煌君：いやデイルイト！！まさか君が世界を焼き尽くす灰塵者：死神だったなんて残念です…！！』

『…。（俺はそうは思えないツスが、かと言って NEO-ZECT を裏切る真似は出来ないツス…！！）』

『此処でもか…紅蓮の仕業だな…。』

ヘラクス達が襲撃した理由は、デイルイトが灰塵者であり死神だと言う事を紅蓮から聞いた為である。だが、ケタロスはデイルイトが灰塵者だとは思ってないが、NEO-ZECT を裏切りたくないという心の中で葛藤していた。

『さて、戦力を更に増やしましょうか…来なさい！！蠍姫！！』

『はい…！！』

ヘラクスの命令を聞き現れたのは、ツインテール状にした腰まで届く長い紫色の髪に、髪と同じ色のワンピース型の服を着た寡黙な表情をした14、5歳程の少女だった。

『女の…子…？』

『本当は隠し玉としたかったんですが、相手が死神ならばそうは言ってもらえませんのでね…。行きなさい。』



「はい…。おいで…サソードゼクター…！」

蠍姫と呼ばれた少女は、紫色の剣「サソードヤイバー」を取り出すと何処からか紫色の蠍型のコア「サソードゼクター」が地を這いながら彼女の手元に飛び上がり、そして…

「変身…！」

【HENSHIN!】

蠍姫はサソードヤイバーにゼクターをセットすると、銀色と紫色のアーマーを纏った戦士「仮面ライダーサソード マスクドフォーム」に変身し、更に…

「キャストオフ…！」

【CAST-OFF!】

「おわっ!? わっ! わあっ!?!」

【CHANGE-SCORPION!】

サソードMFはキャストオフをしアーマーをデイルイトに向かって弾き飛ばすと、鋭い緑の複眼に、紫色の蠍を模したライダーフォームに変わった。因みにデイルイトは、弾き飛んだアーマーを全て回避した。

「デイルイト、貴方は…私が抹殺します！」

「…っと! サソード迄来ちゃったか…。此処は新しい力で行きます

か！』

【SHADOW・RIDE…NEGA・DEN・O!】

サソードの登場で分が悪いと感じたデイライトは、自身の影をネガ電王・ネガフォームにシャドウライドさせた。

『更に…これだ！』

【ATTACK・RIDE…TSUYOSA HA BEKKAK  
UDA!】

『強さは…別格だっ…!』

デイライトはネガタロスの決め台詞を言いながら、Sネガ電王NFと共にライトブッカーとデンガツシャー・ソードモードを突き出しサソード達を挑発した。

『ふざけないで下さい…!はあっ…!』

サソードは今のふざけた台詞が気に食わず、サソードヤイバーでデイライトに斬り掛かったが、彼の前に出たSネガ電王NFのデンガツシャーで防がれた。

『はっ!やっ!えいっ!せいっ…!』

サソードは隙の無い素早い斬撃でSネガ電王NFと剣で斬り結ぶが、臆てその速度にSネガ電王NFは徐々に押されそうになって来た。

『このままではやられる…!!防御力アップだ!』

【ATTACK-RIDE…ITAMIDE OKAESHI  
SHIMASUWA!】

『い、痛みでお返しします…わ。／／／』

デイルイトはSネガ電王NFをシールドフォームにフォームチェンジさせ、仮面の中で顔を赤くしながらカプラの決め台詞を言った。  
…結構恥ずかしい様だ。

【ATTACK-RIDE…CAPRIRLD!】

デイルイトは、カプリールドを装備させたSネガ電王SFをサソドの正面に立たせて、連撃を防いだ。

『コロコロと…!やあああっつ!…!』

姿の変化に苛立つサソドは、剣を目にも止まらぬ速度で乱れ突きをした。一点の狂いも無い突きをまともに受ければどんな強固な盾も破壊出来る…。その言葉通り、カプリールドの中心に罅が入り砕けてしまった。

『まずい…!だったら…!』

『いい加減にして下やろ…!…!』

【CLOCK-UP!】

『でござやあああっつ!…!』

盾が砕かれた焦りに対応が遅れたディライトは次のカードを使おうとしたが、堪忍袋の緒が切れたサソードのクロックアップの突撃により、Sネガ電王SFと共に奥の方迄吹っ飛ばされた。

『総員！サソードに続きなさい！！』

『はっ！！』

ヘラクスはサソードの支援に回る様、ケタロスとゼクトルーパー達に命令した。そこに…

「ダークカブトゼクターを奪う為に闇影君を着けてたら、何か凄い事に…モグモグ…なってるわね。」

「ザビーになるわ、サソードの美少女ちゃんに襲われるわ…微妙に羨ましいいっ！！」

おでんをくわえた巡と、煙草を吸いながら闇影を羨む周が現れた。今回の彼等の目的は、ダークカブトゼクターの様だ。

『何ですか貴方達？ディライトの仲間ですか？』

「はっ！冗談！俺様達はその言葉が嫌えなんだよ！変身！」

【KAMEN - RIDE…DISTEAL!】

「折角だから、次いでに貴方達のゼクターも頂こうかしら…。変身！」

【KAMEN - RIDE…DISHIRF!】

仲間という言葉を嫌う周と巡は、ヘラクスのゼクターを「ついで」に奪うべくディステイルとディシーフに変身した。

『虫軍団には虫軍団と行くか!』

【KAMEN - RIDE... CULLIS!】

【KAIZIN - RIDE... DARK - ROACHES!】

ディステイルは黒い蠅螂のライダー・カリスと、黒いゴキブリに似た異形「ダークローチ」三体を召喚した。

『ゲゲエエツツ!』

『な、何だ!? こいつもワームか!?!』

ゼクトルーパー達はダークR達をワームだと思い込みながら、交戦し始めた。

【ATTACK - RIDE... SLASH!】

『せえええいつつ!』

ディシーフは、赤いエネルギーを纏ったドライバーを振るった「ディシーフスラッシュ」でヘラク스에 攻撃を仕掛け…

『くっ…!! 我々とは違うライダーシステムか!? 何て強さだ…!』

『ほいやっ!!』

カリスもカリスアローでケタロスに斬り掛かるが、二人共ゼクトクナイガン・アックスモードでその攻撃を防いだ。

『わつと…!この蠶螂も相当強いッス…!!』

ヘラクスとケタロスは、ディシーフやカリス、そしてダークRと言う、自分達とは違うライダーシステムや、ワームとは違う異形の存在に戸惑いを隠し切れなかった。そして…

『一気にやっか…。』

【FINAL - ATTACK - RIDE : DI・DI・DI・DI STEAL!】

『喰らいなっ…!!』

『ぜつ、全員退避…うっ、うわあああああつつつつ!!!!』

ディステイルはFARを発動し、無数のカードの円を正面に作り、ダークRとケタロスと交戦中のカリスを吸収し、ディメンジョンスコイルを水色の極太のレーザーにしてゼクトルーパー達に発射し大きく吹き飛ばした。

『貴様…!!』

『安心しな、一応加減はした。』

『遊びは此処迄にして、闇影君のどこに行きましょ。』

『あ、遊びだとおっ!?!』

『あんた等がいると宝盗んのに邪魔だからな…。ま、良い準備運動が出来たって事で。じゃあな。』

『ごきげんよう』

【ATTACK - RIDE… WARP!】

デイシーフとデイスティールは、「ワープ」のカードを使い、この場から姿を消した。彼等がネオゼクトと戦ったのは、ダークカブトゼクターを奪うのに邪魔だと言うだけの理由だった。そして二人が消え去ったのを見てヘラクスとケタロスは変身を解除した。

「あいつ等…ムカつくツス!!」

「放っておきなさい…デイルイトは蠍姫に任せて、我々は『例の計画』を進める為に一度本部に戻りますよ。」

二人の態度に激怒するテツキとは対称に、ヒデナリは冷静な態度で何かの計画を進める為、ネオゼクトに帰還する様言った。

「例のつて…『あの計画』の事ツスか?」

「その通りです。さあ、早く戻りましょう…。」

「!!!りよ、了解ツス…。(何だったんスカ…)」

テツキは、「計画」という単語を聞いた時のヒデナリが一瞬見せた

表情に寒気が走った。

「（総帥が…笑ってた…。）」

冷たい笑みを浮かべた彼の表情に…。

## 地下倉庫

『あっ…くっ…!!』

『はぁ…はぁ…もう、諦めなさい…はぁ…!!』

一方デイトは、サソードの高速攻撃を受け過ぎ体力を消耗していた。だが、彼は無意味に受けている訳では無い。

『（あの子の使うクロックアップ、普通の何かと微妙に違う気がする…。まるで「二人分」の速度だ…。）』

幾度もサソードのクロックアップを見極めた彼は、「二人分」の速度だと推測した。現に彼女もスタミナが切れかかっている。反撃するなら今しか無い…。

『生憎、俺の辞書に「諦める」って言葉は無いんでね…。』

『ならそれは不良品って事ですね。クロックアップを使えない貴方に勝ち目は…』



『はは…こりゃ一本取られたね。確かに俺は「クロックアップ」は使えないよ…でもね。』

体制を整えたデイルイトは、一枚のカードを取り出した。確かにクロックアップは使えないが、それに対応出来る手段が無い訳では無い。

『あまり使いたく無いけど、こいつで行くしかない!!』

【ATTACK - RIDE… SONIC!】

『うっ…!!』

デイルイトがカードを装填した瞬間、辺りを照す程全身がライトオレンジに光り輝き、サソードはあまりの眩しさに腕で視界を覆った。すると…

『…!!クロックアップ!』

【CLOCK - UP!】

突然デイルイトが光を纏いながら超スピードでダッシュしてサソードに向かって来た。それに感付いた彼女はとっさにクロックアップを使い横に回避した。

『これは…!!?』

『この「ソニック」は、俺の全体力をスピード力に転換させる力を持つてるんだ。反面、走る度に体力が削られるけど…これで対等に渡り合える!!』

『…何故そんな簡単に能力の種を明かしたんですか…？』

サソードはソニックの能力を全て明かしたデイライトに疑問を持った。ソニックは全体力をスピードに変える力、即ちそれが切れればデイライトの敗北を意味する…にも拘らず、それを敵である自分に話した事が理解出来なかった。

『何でかなあ…君が手の内を晒して戦ってるのに、俺だけ隠すのはずるいなあ…』と思ったからかな？』

『そんな理由…だけで…？』

『後戦つてて思っただけど…君の心に迷いを感じたよ。』

『…!!』

『何だか君の戦いは、何処か無理に戦ってる様な気がしてならないんだけど…もし良かったら俺に…』私が使用したのは「クロックデュアル」です…。』って、え？』

サソードはデイライトの言葉を遮り、自身が先程使用していたクロックアップを「クロックデュアル」だと言い出した。

『貴方を見ていると、隠す気にならなくなった…それだけです。』

『そっか…んじゃ、続き行くよ!!』

『変な人ですね…。行きます…!!クロックデュアル!!』

【CLOCK - UP!】

デイルイトとサソードは、ソニックとクロックデュアルを用いながら超スピードの戦いを繰り広げた。時にぶつかり剣を斬り結び、時に離れてまた斬り合うという高速の戦いを何処か楽しげに行なっていた。二人の超速度の突進で辺りの壁が崩壊していった。

『見切りました…!!』

【RIDER - SLASH!】

『ライダー…スラッ…あっ…!!』

デイルイトの僅かな隙を見切ったサソードは、サソードヤイバーにタキオン粒子を凝縮した斬撃「ライダースラッシュ」を放とうとしたが、長時間のクロックデュアルの多用により足元がぐらつき倒れてしまい、その弾みで変身が解けてしまった。

「あ…足が…!!」

『大丈夫…!!危ないっ…!!』

蠍姫は今の転倒で足を捻ってしまいその場から動けないでいた。その時運が悪く、崩壊した壁の瓦礫が彼女の頭上に落下し出した。

「あっ…くっ…!!ソニックの影響で身体が…!!畜生…!!」

闇影もソニックの影響で体力が無くなり、変身が解け動けないでいる。このままみすみす彼女を死なせてしまうのか…と悔しげな顔をしていたその時…

『クロックデュアル!』

【CLOCK - UP!】

黒い影ことダークカブトが、なんとサソードと同じクロックデュアルを使い瓦礫が落下する直前に蠍姫を救い出した。

「あの子と同じ、クロックデュアルを…!?!」

「う…うう…はっ!!退きなさいダークカブト…!!家族の仇!!」

「何だつて!?!」

蠍姫はダークカブトから離れ、再びサソードライバーを構え彼を「家族の仇」だと言った。その時…

『ウグウウツツ!?!?ガガツ…!!ウツ…ガアアアアツツツ!

!?!?!』

「!?!?!?」

ダークカブトは突然苦しみ出し、その身に「ある異変」が起きた。それは、上半身が「カリスの世界」にいた「コーカサスビートルアソデッド」の様な強固な漆黒の鎧に似た姿に、四つの妖しく光る黄色の複眼、背中や肩に鋭い棘が特徴のワーム「ビートルワーム・ジークフリード」へと変貌した。

「ワーム…!?!」

「グツ…グガアア…。」

【CLOCK - UP!】

しかし、直ぐに元のダークカブトに戻り、クロックアップを使いこの場から消え去って行った。

「へえ…ワームねえ…。」

「尚更ゲットしねえとな…。」

デイシーフとディスティールは物陰でそう呟きながら、その後を追って行った。

「一体…どういう事なんだ…？」

ダークカブトの正体がワームである知り、困惑する闇影。果たして行方不明のソウタなのか？クロックデュアルとは？そして、彼を「家族の仇」だと言う蠍姫の真意は…！？謎が謎を呼び深まってく…。次回、仮面ライダーディライト！

「この計画と、この新システムがあれば、我々は世界を護れます…！！」

NEO-ZECTが進める計画とは？そして、新システムの正体とは？

「私は…普通の人とは違うんです…！！」

自分は普通の存在では無いと言う蠍姫。彼女の正体は…！？

「どんな姿になったって、互いを想う心が…絆があればそんな物関係無いっ！！」

闇に隠れし全ての謎が、今明らかになる…！！

次回、『絶対不変の絆』

全ての闇を、光へ導け！

第15導 漆黒の暗殺者・ダークカブト（後書き）

デイルイト『トライRウウウウツツツッ！！！！何だこれっ！？最初から最後まで無茶苦茶じゃないかっ！！』

【ATTACK・RIDE…LASER！】

トライR「わったった！！待てっ！！レーザー使っな！！」

デイルイト『使いたくもなるわああっ！！今直ぐ書き直せっ！！さもなくば…！！』（超サ 人2つぼくあちこちスパークしてる）

黒深子「…嫌なの？」

デイルイト『えっ？』

黒深子「ワームが擬態してたとしても…役割だけでも…私が奥さんじゃ…嫌なの…？私、それでも凄く…嬉しくかったのに…。」（顔を俯いてる）

闇影「（変身解除）ちよっ、ちよっと待って黒深子！！俺は話がかなり酷すぎるだけで、君と夫婦が嫌…なんて事は…一言も…／／／うっ！？」

黒深子「じゃあ、今から次の更新迄私と一緒にいよ？料理の事や…先生の事も全一部『勉強』したいし…ね？（目を灰色に濁らせる）」

闇影「いやいやいやちよっと待って！！これ何てヤンデレ！？料理ってもしかして…嫌あああっっっ！！！！はっ、離してっ！！」

だっ、誰かつ！！助けてっ！！コウイ…！！」

コウイチ「…。（口に黒い何かを突っ込んだまま死んでいる）」

闇影「…：チは何か死んでるし…！！？あつ！その読者様っ！！貴方ならこの状況をどうしますか！？イツツテルm…」

黒深子「はい、さようなら…。」（部屋に監禁）」

巡「見る人によつては今回の役割は『んだんだ、お似合いだべ。』  
つて人と『ふざけんこのリア充！！さつさと襲つてやる事ヤツち  
まえよ！！』つて人がいるかも、殆どが後者かもね。」

周「そうだぜっ！！しかもザビーゼクターまであいつに寄越しやが  
つて…！！」

トライR「何も単にダブトが好き過ぎるっただけじゃ無えぞ。闇影  
にザビゼクを与えた訳は…」

二人「訳は？」

トライR「…クロックブースター！！（逃走）」

周「あつコラ待てっ！！」

巡「放つときなさい。あの先崖になってるから、ほら、落ちてった  
次回も楽しみにしててね」

周「あばよっ！！」



## 第16導 絶対不変の絆（前書き）

ヒヨリ「皆さん、地震の被害により怪我や体調は大丈夫でしょうか？  
ダークカプト編後半が更新されました！」

テツキ「今回は、まゝた作者がスランプに陥ってた上に、文もまた  
無駄に長くなっちゃいましたけど付き合っっちゃって下さいッス!!」

蠍姫「それでは後半を読んで行って下さい…。」

ダークカプト「……。」  
「では、どうぞ!!」のフリップを持つ  
未だ正体を明かさない為」

## 第16導 絶対不変の絆

闇影と蠍姫にワームだと知られ、クロックアップで逃走するダークカブト。そこへ突然、ディスティールの放つ光の矢が彼を襲った。

「!!!」

「逃がさねえぜ、ワームさんよ。」

上手く回避し、背後から逃走しようとしたが…

「残念 そのゼクターを私達に渡して貰えないかしら?…優しく言ってる間に、ね?」

デイシーフに阻まれ、挟み込まれてしまった。そして彼女はダークカブトゼクターを渡す様、最終通告をしながら自分に手を差し出した。

「…!!!」

「そう…それが返事なのね…だったら力づくで奪うわ!」

【KAMEN - RIDE…GARREN!】

ダークカブトが専用武器「カブトクナイガン・クナイモード」を構え出したのを見て、デイシーフは力づくで奪うべくドライバーにカードをスラッシュすると、胸にダイヤのマークが刻まれた赤い鍬形を模したライダー「仮面ライダーギャレン」にカメンライドし…

『ここはコイツ等で行くか!』

【KAIZIN - RIDE : MOLECH - IMAGIN ! RAB  
BIT - ORPHNOCH !】

ディステイルは、鎌の様な短剣を持った緑の蜥蜴をイメージした  
イマジン「モレクイマジン」と兎の特性を持ったオルフェノク「ラ  
ビットオルフェノク」を召喚した。

『ふんっ…!ハアッ…!』

モレクイは突然武器を投げ捨て、何故かジャンプをし出し倉庫内の  
壁を蹴っては飛び、蹴っては跳びと、まるで飛蝗の様なトリッキー  
な動きをした後ダークカブトに跳び蹴りをかました。

『…!』

【CLOCK - UP !】

だが、そんな単調な攻撃がダークカブトに当たる筈も無く、クロッ  
クデュアルで簡単に避けられてしまった。すると…

『どうせ俺なんて…飛蝗の様に跳べやしなただの蜥蜴さ…。』

『お、落ち込まないでくれよ!兄貴!』

『いや、お前等兄弟じゃ無えだろっ!?!』

モレクイは回避された事にいじけ出し、ラビットOがそんな彼を何  
故か「兄貴」と呼び慰める…と言う奇妙な事が起き、ディステイ

ルはツッコミを入れた。

『あんだ達何やってんのよ!?!』

『フツ…!』

【CLOCK - UP!】

『…って、きやつ!?!?』

Dギャレンもそんな三人に注意しながら、クロックデュアルでタックルをするダークカブトから回避した。すると…

『おい…今俺を笑つただろ…?!?』

『いや、笑って無えけ…行くぞ…弟よ。』 『いいぜ…兄貴!!!』  
…っておい、コラ待てええつつ!!?!?!?』

モレクIは、先程のダークカブトの小さな掛け声が自分を嘲笑った物だと勝手に勘違いをして怒りを募らせ、ラビットOを何故か「弟」と呼び彼と共にダークカブトの方へと向かった。

『…たく…どうする巡ちゃん?』

『あの子達の動きに合わせてこっちが援護するしか無いわね…。』

『さいですか…。』

Dギャレンとディステイルの嘆きを尻目に、モレクIは先程同様ダークカブトの周囲を飛蝗の様に素早く跳び回り、ラビットOも兎

の如く彼の頭上を残像が生まれる程連続ジャンプをした。如何にダークカブトと言えど、相手の姿を捕らえなければ手の打ちようが無い…。

『良い感じね。だったら…』

【ATTACK・RIDE…SCOPE!ROCK!】

攻撃のチャンスを見つけたDギャレンは、「バットスコップ」で命中率を強化し、相手を石化する「トータスロック」のカードをスラッシュしたデイスリーフドライバーをダークカブト目掛けて狙いを定めた。

『ガッチガチに固めてア・ゲル そこっ!!』

Dギャレンは味方の二体に当たらない様照準すると、ドライバーの切っ先から赤い刃状のエネルギー弾をダークカブトに放った。が…

『…!!』

『なっ!何っ!?!ガアアツツ!!』

『あっ、兄貴!!』

刃が当たる寸前にダークカブトは跳び回っているモレクエの足を瞬時に掴み、地上に下ろし彼を盾にして攻撃を防いだ。その結果、モレクエは石化してしまいカブトクナイガンで一瞬に斬り刻まれ、消滅した。

『クロックデュアル!』

【CLOCK・UP!】

「し…しまつ…ギヤアアツツ!!」

モレクIを失い呆然としていたラビットOも、クロックデュアルの速度に乗せた斬撃によりあっさり爆死した。

「オイイイイツツツ!!?!?お前等マジで何しに来たんだよ?!?全然役に立って…あぎゃあああつっ!!?!?」

「全くね…って、きゃあああつっ!!?!?」

デイスティールが二人の呆気ない敗北にブチ切れながらツッコみ、Dギャレンが呆れていると、ダークカブトのクロックデュアルのタックルが彼等を倉庫の天井がぶち破れる程、空の彼方へと吹っ飛ばした。

「私達の活躍はポドポドダアツ!!」

Dギャレンは吹っ飛ばされる間際に何やら妙な事を言っていたが、気にしてはならない…。

世界の光導者、デイライト!9つの影の世界を巡り、その瞳は、何を照らす?「痛つ…!!ソニックのダメージはそう簡単に引かないか…。」

一方闇影は、肩を押さえながら白石家に帰宅していた。あれから小

休止をして普通に歩ける程度迄回復をしたのだが、完全にソニックのダメージが完治した訳では無い…。

「そう言えば…あの子大丈夫かな…?」

闇影は、先程自分と戦った少女・蠍姫の事を気にし始めた。

「とりあえず応急手当はしておいたけど…大丈夫かい?」

「大丈夫…です…。」

闇影は応急手当として、持ち歩いてる冷却スプレーを蠍姫の捻った足首にかけ、そこに破いた自分の服の切れ端をくくり付けた。

「ネオゼクトとは連絡が付かないし、一度家に来てちゃんと手当てをするよ。さあ。」

ネオゼクトと連絡が付かぬ以上、闇影は蠍姫の手当ての為に彼女を一旦白石家に連れて行くべく手を差し伸べたが…

「放っておいて下さい…。自分で戻れま…痛っ!」

手を取らず自力でネオゼクトに戻ると言い、立ち上がるうとする蠍姫。だが無理に立ち上がった為、足の捻挫が痛み出した。

「ほら!無理をするから…。」

「構わないで下さい…!!私は、普通の人とは違うから、この程度

の怪我なんて…!!」

「…えっ？」

「…!!いえ…何でもありません…。」

蠍姫の「普通の人とは違う」という発言を聞き啞然とする闇影。その反応を見た彼女は何でも無いと言い、話を中断させた。

「…今日の所は見逃します。次に会った時こそ、必ず貴方を抹殺します…!!」

そう言うと蠍姫は足を引き摺る様に歩き、この場から去って行った…。

「『普通の人とは違う』って…どういう事なんだろ…って、おっととととと…!!」

闇影は足元を躓き、倒れそうになり両手をバタバタさせて地面にコケそうになった…が、間一髪の所何者かが彼の手を掴み、支えた。

「あ、ありがとうございます…って…!!」

「大丈夫ですか？闇影さん。」

「ヒヨリさん…!!」

倒れそうになった闇影の手を掴んだのは、買い物途中のヒヨリだっ



た。

## 白石家

帰宅した闇影は、これ迄起きた事を黒深子達に話した。ネオゼクトの内情、ヒヨリの事、蠍姫の事、そして、ダークカブトのワーム化についてを…

「そんな事があつたんだ…。」

「粗方解つたぜっ！そのダークカブトの正体はヒヨリさんの弟に擬態したワーム！！そうだよな！？」

コウイチは急に立ち上がり、闇影の口癖をパクりながらダークカブトの正体はワームが擬態したソウタだと言いつつ切った。確かにそう推測するのが普通である。「普通」ならば…。

「そうかな？もしあのダークカブトがワームだったら、俺はどうに殺されていただろう？けど、そうはせず苦しみながらワームになっただけでそのまま逃げて行った…。」

「うーん…何でかしら？」

「（苦しみながらワーム化…もしかしたら、闇の牢獄が原因か…？それとも…。）」

ダークカブトのワーム化が嘗て黒深子をオルフェノクに変えた、自

身の強まった負の感情によりその身を怪人にする現象、闇の牢獄が原因なのかと推測しながら、それとは別の原因があるのかを考える闇影。

「ワームが…あの子に…？なら…」

「大丈夫よヒヨリさん。まだ弟さんが亡くなっただって決まって無いわ。もう少し信じて見ましよう？ね？」

今の話を聞き、ダークカブトの正体がソウタに擬態したワームならば既に弟は殺されてしまったのでは、と考え暗い表情をしたヒヨリを、影魅璃が微笑みながら肩を添えて励ました。

「ええ…分かってます。」

ネオゼクト本部

「きゃあっつ！！？」

「全く…デイルイトを倒せないばかりか、ダークカブトも捕まえ損ねるとは…！！」

「もっ、申し訳あります…うぐうっつ！！？」

この施設の最下層にある、薄暗く狭い個室で蠍姫はヒデナリからデイルイトの抹殺に失敗した事の責として付き倒され、腹に足を思い切り踏まれる。彼女の頬は何度も殴られり、ひっぱたかれて赤くな

っていった。

「おまけに手当をされて、勝手に見逃す……！使えませぬえっ……！」「お仕置き」ですね……！」「

「……！おっ、お願いですっ……！それだけは……！それだけは……いい、嫌あああつつつつ……！……！」「

蠍姫はヒデナリの「何か」に怯え、彼の足元にすがりそれをしない様懇願した。しかし、「それ」をやられた彼女は泣き叫びんでいた……。

「いいですか？今度無様な失態を犯せば、永遠に『そのまま』でいて貰いますからね。はい……約束ですよ。」「

『報告します！「例の計画」は最終段階に移ります！それと、「例の物」も……。」「

「そうですね……。それではあのダークカブトに『お仕事』を作ってあげましょうか……。」「

ゼクトルーパーの報告を聞き、ヒデナリは不気味な笑みを浮かべてダークカブトに「仕事を作る」と奇妙な事を言い、本部を後にした。

「（ソウちゃん……。どうして帰って来ないの？これ以上……私を一人にしないで……！……！）」「

あれから白石家を後にしたヒヨリは、ソウタが帰って来ない事に悲しんでいた。普段は気丈に振る舞っているが内心、寂しく感じていたのだ。

「ヒヨリ。」

「ヒデナリさん…。お仕事の方は大丈夫なんですか？」

「それより聞いて下さい。ソウタ君の行方が分かりそうなんです！」

「!!!本当…なんですか!?!」

「ええ。ここじゃ何だから本部でお話します。着いて来て下さい。」

ヒヨリの前に現れたヒデナリは、ソウタの行方が分かるかもしれないと言い彼女をネオゼクト本部へと連れ出した。

ネオゼクト本部

「ねえ、ヒデナリさん。ソウタは…何処にいるんですか？」

「直に会えますよ。それには…」

ヒヨリの答えにヒデナリは立ち止まり、指を鳴らした。すると…

「きゃあっっ!?!?!?」

「貴女の存在が必要なんですよ…!!」

何処からか数人のゼクトルーパー達が現れ、ヒヨリを拘束した。突如の事にヒヨリは動揺し出した。

「遂に完成しましたか…!!」

本部の研究室らしき場所で、中くらいの鉄塔の様な装置が建てられており…

「ヒデナリさん!! 離してっ!!」

そこにヒヨリが両腕を鉄具で拘束されており、ヒデナリに離す様叫んでいた。

「総帥!! これは一体どういう事ッスかっ!!? ヒヨリさんをこんな目に遭わせて!!」

「さて壬銅、君に『例の計画』について詳しくお話ししましょう。これはワームの全細胞、全神経を活性化させてワームを意のままに操る『活性装置』、そして…」

ヒデナリは、テツキの質問に答えず謎の装置「活性装置」について説明しながら懐から緑色の石を取り出した。

「何スカ…それ？」

「ワームの細胞で構成された『ワームストーン』。これを人間の身体に埋め込む事でワームの細胞が侵食し、その身はワームと化す…。これを持っていけばワームに襲われません。』とえば、どうなりますか？」

テツキは「計画」の内容を聞き理解すると同時に、身を凍らせた。ワームストーンを一般人に配り身に着けさせる事でワーム化させ、その活性装置を作動すれば、ワーム化した人間は全てネオゼクトの意のままになる…。

「そして、今からダークカブトを誘き寄せる為に『前から捕縛していた』ワームに彼女を襲わせるんです。本来の目的が達成出来る上に装置の実験が出来る…。まさに一石二鳥じゃないですか！！」

人命を躊躇無く危険に晒し、ましてやそれを「実験」だと高らかに言うヒデナリにテツキは怒りを感じた。

「な、何考えてるんすか総帥！！これが『人々からワームを守る』計画だなんて間違ってるツス！！こんな、人の心を踏みにじるやり方を…婚約者を平気で実験台にするなんてまる…で…！！！」

激昂したテツキはヒデナリを捲し立てていると、途中で言葉を詰まらせた。目の前で信じがたい事が起きたからである。

「まるで何ですか？まるで…」

「あ…ああ…！！！」

『まるでワームみたいなやり方じゃないか、と言いたかったのかアツ！？人間。』

ヒデナリがビートルWに酷似した、体が銀色で腕が六本あるヘラクレスオオカブトの特質を持ったワーム「ヘラクルヴァワーム」に変貌した為に…。

「ヒ、ヒデナリさんがワームに…!?」

「じゃ、じゃあ総帥は…!?くっ…!!総員!戦闘準備を…!?」

『ギギギ…!!』

『ギヤアアアアツツツ…!!』

テツキが戦闘準備の命令をしようとした時、一部のゼクトルーパー達がサナギ体に変化し、その隙を付かれた普通の隊員達は殺害されてしまった。

「そ…そんな…!!」

『やれ。』

『ギギイイツ…!!』

「がっ…!!ぎっ…!!うぐっ…!!かはっ…!!」

「止めて…!!お願い止めてっ…!!」

ヘラクルヴァWの冷たい一声で、サナギ体達はテツキに殴る蹴る等の暴行を加えた。ヒヨリの悲痛な制止の声に耳を貸さずに…。

「始末したら適当に放り棄てなさい。他の者はこの活性装置の実験の準備をしなさい。」

ヘラクルヴァWは再びヒデナリに擬態し、テツキの処遇と実験準備の命令を下した。

「（ヒデナリさん…！！）」

白石家

「はい、どちら様…！！みつ、壬銅君…！！」

インターホンの音が聞こえ、闇影が玄関迄来てドアを開けると全身が傷だらけで頭から血を流し衰弱したテツキが倒れていた。どうやら力を振り絞って此処まで来たのだろう。

「う…う…う…た、隊…長…！！」

「どうしたの先生、大声出し…って、壬銅さん！？」

「ひでえ怪我だ…！！」

「コウイチ！壬銅君をソファーに寝かせるのを手伝え！黒深子、影魅璃さん！救急箱とお水を！」

黒深子達に的確な指示を出した闇影は、コウイチと共にテツキをリビングのソファー迄肩を担いで移動した。



「総帥が…ワーム…活性…装置…ヒヨリ…さんが…危ない…!!」

「えっ!?! なっ、何て!?!」

テツキは、息絶え絶えに先程の出来事を喋るとそのまま気を失った。コウイチはよく理解出来ないでいるが、闇影は…

「粗方解ったよ。総帥がワームで、ヒヨリさんを囮にしてダークカブトを捕まえようとしてるって事を!」

「嘘おおっつ!?!?!」

今の言葉だけで何時もの台詞を言いながら完全に理解した。これにはコウイチも驚かざるを得なかった。

「(なら、ダークカブトは…)コウイチ、後は頼んだぞ!!」

「えっ?お、おいっ!?! 待てよ闇影!!」

テツキをコウイチに預けた闇影は、家を出てマシンディライターに乗り込み、単身でネオゼクト本部へと向かった。

ネオゼクト本部

「遂にこの時が来ました…。活性装置、作動!」

ヒデナリの合図で活性装置は作動し、それは緑色のエネルギーが放たれた。すると…

『ハアアツツ…！…！』

「ひっ…！…ワ、ワーム…！…！」

弁髪の色をした毒針に、全身が銀色の蠍を模した姿が特徴のワーム「スコルピオワーム」が現れ、ヒヨリに近付く。

「ふふ…さあダークカブト…！早く来ないとこいつが殺されてしまいますよ…！…」

ヒデナリの挑発に答える様に、何処からか扉を強く叩く音が聞こえ出した。そして…

『…！…！』

扉がぶち破れると予想通り、ダークカブトが現れスコルピオWの前に阻んだ。しかし…

『ウツ…グツ…グウウツツ…！…！』

突然苦しみ出し、またも上半身のみがビートルワームに変化した。この活性装置の影響で身体が上手く動かせない様だ。しかし、ビートルWはそれに抗った為身体中に緑色の電流が流れ、その姿は揺らめき徐々に人の形へと変化していく。その正体は…

「あっ…く…くっ…！…！」

「…！…ソ、ソウタツ…！…」

ビートルWの正体を見て目を見開き、愕然とするヒヨリ。それもその筈、ビートルW…ダークカブトの正体は、ウェーブがかつた短い黒髪に、黒いTシャツの上に薄手の白シャツを羽織った少年は、彼女の弟・ソウタなのだから…。

「でも…何で？貴方は今年で21になる筈なのに、どうして五年前と姿が変わって無いの!？」

「…。」

「くく…あーっはははっっ!!実験は成功です!!この活性装置とこの新システムがあれば、我々は世界を支配出来る…!!」

ヒデナリは、活性装置の性能を見て狂った様に高笑いをしながらデスクの上にある銀色のアタッシュケースの「中身」に目をやり…

「そしてようやく捕まえましたよ…『もう一人の実験体』があっっ!!」

「…うがああああっっっ!!!??」

ソウタに近付き、彼を実験体と言い腹を強く踏みつけた。

「ソウタ!!」

「さて…何故こいつが五年前と姿が変わって無いかを教えてやろう…。それは…」

「それは、彼の身体にワームストーンを埋め込みワーム化した為、

肉体の体内時間が停止したから…だろ？」

「…！」

ヒヨリの先程の疑問をヒデナリが答える前に闇影がゆっくりと現れ、代わりに全てを話した。ワームストーンを埋め込まれた人間は、その影響で肉体の成長が停止してしまい、永遠に歳を取らなくなるのだ。

「闇影さん…！」

「ふん…王銅から聞いたのですね。」

「…それもあるけどね。」

闇影が更に近付こうとした時、ヒデナリがスコルピオWに顎を彼に向けて動かし、襲う様命令を下した。が…

『ハアアツツ…グツ……！』

「…！」

何故か動こうとせず、緑色の電流を全身に流しながらその場でもがき、そのまま倒れるとその姿が揺らめき出し…

「はあ…はあ……！」

「…！君は…！？…そうか…これが『普通の人とは違う』理由なんだ…。」

スコルピオWの正体は、何とあの蠍姫だったのだ。闇影は愕然としながら、彼女のあの時の言葉の意味を理解した。

「チツ…やはり全く使えませんね。」

「貴様…こんな子供をワームにするなんて…!!」

まだ十代の少女である蠍姫をワームに改造した上に、「使えない」と道具の様に吐き捨てるヒデナリに憤る闇影。しかし…

「違いますね。こいつは銀城がゼクトを立ち上げた時からいた実験体だ…。」

「?どういう…事だ?」

彼女をワームに改造したのは、自分では無くゼクトの仕業だと言うヒデナリ。闇影は眉をひそめながらそれについて尋ねた。

「五年前…我々ワームはゼクトと戦い、銀城はその前線に立って私と戦った…。そして私は奴の記憶を読み取り、その女に擬態して油断した隙を付き、殺してやった…。」

「貴様…!!」

「そして奴に成りすましネオゼクトを再建した私は、一人のゼクトルーパーから銀城も知らない、秘密裏に行なっている『ある実験』の存在を知った。その実験とは…くく…。」

ヒデナリは此処まで話すと、発作の様に笑いを堪えながらその実験について話し出した。

「人間とワームが融合した存在、『ネオタイプ』の研究だよ！！それには私の心を大きく刺激させられた！！そしてそれにより強靱な肉体と化した奴等はライダーシステムのクロックアップとワームの本来のそれを合わせた、クロックデュアルを生み出した！！」

ヒデナリは目を大きく見開き、高らかに叫ぶ様に言った。人間とワームの融合体『ネオタイプ』…これがゼクトが秘密裏に行われていた実験の正体であり、クロックデュアルはそのネオタイプが変身したライダーシステムのクロックアップとワームのそれを同時発動する物である。

「そして…そいつはワームに変えた人間を支配する為に、ヒデナリさんと同じ方法で油断させて捕まえた僕にワームストーンを埋め込んだんだ…！！」

「はははっ！！その通り！！だがお前は逃げ出してそのワームの力を逆に使いこなす為…そしてワームに取り込まれて暴走しない為に姿をくりました…！！」

「…えっ!?!?」

ソウタがヒヨリの下に戻らなかつた理由とは、ネオタイプの力を制御する事と、その力によりワーム化して姉や周囲の人間を傷付けない様にする為である。

「なら…私の両親を殺したって話は…！！」

「嘘に決まっているだろう…！！その実験のサンプルはお前なんだからなあっ！！記憶を消去した事も聞き、お前にダークカプトを捕

らえさせようとしたのだ！『両親を殺したのはダークカブトだ』と  
吹き込んでなあ…ギハハハハッ！』

「…！！」

顔を歪ませて下卑た笑いをするヒデナリから真相を聞いた蠍姫は、  
シヨックを受けて顔を俯いた。腕をワナワナと震わし、殺意の籠っ  
た目をして右腕のみをワーム化させて…

「…うあああつつつつ！！！！」

半狂乱したが如く叫びながら、ヒデナリに向かいその腕を振るって  
殺そうとした。

「無駄だっ！！ふっ！！」

「きゃああああっ！！」

だがヒデナリが掌を前に突き出すと、そこから緑色の音波エネルギー  
が放たれそれを受けた蠍姫は再び地に伏せられた。

「甘いですねえ…私は活性装置程では無いが、一体迄ならワームの  
動きをコントロールする事が出来るんですよ！」

「貴方は…絶対許しません…！！」

「大人しく我々ワームの言う通りに生きれば良いものを…人間でな  
くなったお前達なんて誰も受け入れないんだよっ！！」

「違う！！人間でなくなっただから誰も受け入れられないなんて事は

…絶対じゃない!!」

「何い？」

「例えどんな姿に変わり果てたって、互いを想う心が…相手を想い合う絆があれば、そんな物は関係無い!!俺と黒深子の様にな…。」

「相手を…想い合う絆…。」

「姿を隠して自分の運命と戦い、影で家族を守ってきた彼の絆の力は誰よりも強い!!私利私欲の為に人の心を利用するお前より強いんだ!!」

「黙れっ!!黙れ黙れ黙れええっ!!そんな戯言…貴様等を葬り人類をネオタイプ化させれば…!!」

闇影の言葉に激怒したヒデナリは、デスクを思い切り蹴飛ばし、かけていた眼鏡を叩き付けて激昂し彼を葬った後計画を実行すると息巻くが…。

「どうかな？俺は全てを焼き尽くす灰塵者であり死神だ…。例えお前がどんな世界を築こうともそれを焼き尽くし、光へ導く!!」

「貴様あっ!!一体何者だっ!？」

「お節介教師な仮面ライダーだ!!宜しく!!」

「僕も…戦います!!来るんだ!」

ソウタは自分も戦うと言いながら、闇影の隣に近付き飛翔するダ―



クカブトゼクターを右手に掴み…

「「変身！」「」

【KAMEN・RIDE…DELIGHT!】

【HENSHIN!】

闇影はデイルイトに、ソウタはライダーベルトにゼクターをセットしヒビイロノカネの鎧を纏ったダークカブト・マスクドフォームに変身し…

『キャストオフ!』

【CAST・OFF!】

【CHANGE・BEETLE!】

ゼクターを操作しキャストオフをすると、アーマーが展開、弾け飛びライダーフォームへと変化した。

『さて、輝く道へと導きますか!』

『ほざくなああっ!!やれっ!』

『ギギイイツッ!』

ヒデナリはヘラクルヴァWと化し、複数のサナギ体が現れデイルイトとダークカブトに襲いかかった。だが…

『はっ！ふっ！せいっ！！』

『やあっ！えいつ！ぜええいつ！！』

『グギヤアアアツツ！！』

デイライトはライトブッカー・ソードモードで、ダークカブトは片腕をワーム化してカブトクナイガン・クナイモードでサナギ体達を素早く斬り裂き、あっという間に爆発させた。

『おのれええつつ！！』

『クロツクデュアル！』

【CLOCK・UP！】

『何！？グアアアツツ！！』

ヘラクルヴァWはクロツクアップを使いデイライト達に襲いかかるが、ダークカブトのクロツクデュアルの速度に敵う筈が無く斬り付けられた。

『くそっ…！！』

分が悪いと感じたヘラクルヴァWは、再びクロツクアップを使い天井を突き破り、飛んで逃げ出した。

『逃がすか…！！』

【FINAL・FORM・RIDE…DA・DA・DA・DARK

- KABUTO! ]

『力を抜いて。』

『え?』

デイルイトはダークカブトの背中に手をやると、彼の仮面を模したダークカブトゼクターに変形しデイルイトの右足に装着された。これがFFR『ゼクターダークジャッキ』である。

『ライダー…ジャンプ!!ふっ!!』

デイルイトがジャンプをし出すと、クロックアップの速度でヘラクルヴァWが空けた天井の穴に向かって急上昇した。このFFRを装備するとクロックアップが使用可能になるのだ。

『くそっ…!!この私が追い込まれるとは…!!』

『待てっ!!』

羽根を拡げ浮遊するヘラクルヴァWが嘆いていると、デイルイトが穴から現れ、Zジャッキはダークカブトの姿へと戻った。

『おのれええっ!!私は全ての人間共をネオタイプに変え、この世界を支配する!!それを邪魔する者は全て消し去ってくれるっ!!』

『お前の支配する世界なんて…』

『僕達は…認めない!!』

【FINAL - ATTACK - RIDER : DA・DA・DA・DA  
RK - KABUTO!】

【ONE - TWO - THREE! RIDER - KICK!】

デイルイトがFARを発動すると、ダークカブトはゼクターのボタンをテンポ良く押してゼクターホーンを操作した後、再びZジャッキに変形しデイルイトの足に装備された。

『ライダージャンプ!!』

デイルイトはライダージャンプで空中迄勢い良く飛び、バック宙をした後に右足を振り上げて…

『はあああ…せいやああっつ!!』

踵落としの様に足を思い切り降り下ろすと、Zジャッキは分離してクロックアップの速度でヘラクルヴァWに向かって急降下し…

『クロックデュアル!!そして、ライダー…キック!!』

『そ、そんな馬鹿なっ!!!?グアアアアアツツツ!!!!』

速度を落とさずダークカブトの姿に戻り、クロックデュアルを使用してその速度を上乗せしたままライダーキックをするFAR「デイルイトドロップ」をヘラクルヴァWに喰らわせて爆破させた。



「（何処で働いてるんですかっ！？しかも口調変わり過ぎ！）」  
吹っ飛ばしたソウタに跨がり、彼の顔面にクロックアップ並の速度で往復ビンタをしながら、とんでもない家庭の事情を訴えるヒヨリ。そして、気が済んだのか一方的な制裁は止めるとソウタを抱きしめ…

「もう…誰も私を…一人にしないで…うう…ううっ…！！」

「ごめんなさい…姉さん…。ただいま。」

「グスッ…お帰り…ソウちゃん。」

「良かった…。」

「ヒヨリさん、弟さんと再会出来て良かったわね…。」

「ええ。遠くに離れたり、ワームになっても、互いを想い合う絆があればあの二人は絶対に離れませんからね。」

影魅璃と闇影は、キャンバスに描かれたソウタとヒヨリが抱きしめ合う絵を見て二人の絆の強さに感動していた。

「やあやあ闇影君。景気はどうかかな？」

そこへ水色のラインが入った銀色のアタッシユケースを持ちながら、満面の笑みを浮かべた包帯を巻いた周が現れた。

「何だよ、何時も以上に気色悪い顔をして。巡はどうした？」

闇影は、そんな彼を見て気色悪いとキツイ言葉を投げ付けた。しかし周は一切怒らなかつた。その理由とは…

「巡ちゃんには傷の具合が俺より悪いから休んでんだよ。それよりこれ見て見な。ジャーソン!!」

周がケースを開けると、中には水色の蜻蛉型のコア「ドレイクゼクター」が入っていた。彼が上機嫌な理由は一目瞭然だ。あの後、ネオゼクト本部から盗み出したのだろう。

「はぁ…お前また敵を倒した後に盗んで来たのか。」

「そうゆうこつた。じゃあな!」

周の抜け目の無さに手を当てる暇もなく、彼はそのままリビングから出て行った。すると…

「おつ!君は…ほうほう…なるへそ。早く行つといで。じゃあね。」

玄関先で周は誰かと話しており、早く行くよう勧め白石家を後にした。その人物はリビングに入ってきて来た…。

「君は…!?!」

「……………」

その人物とは、何とソウタと同じくネオタイプにされた蠍姫だった。彼女の用事とは…?

「私には…貴方の言う絆がどんな物なのかよく解らないんです…。」  
蠍姫は、闇影の言っていた「絆」が何なのかを知る為に此処へ来たのだった。すると闇影は微笑みながらこう言った。

「絆って言うのは、仲間に家族や友達、恋人を互いに想い、支え合う物なんだよ。」

まるで父親が子供の質問に答える様に優しく話す闇影。すると蠍姫は少し考えて口を開いた。

「貴方と居れば、絆がどんな物か解るかもしれませんが…。だから…私を貴方達の旅に連れて行って下さい！お願いします…！」

蠍姫は自分の絆が何なのかを知る為に、何と闇影達の旅について行きたいと言い出した。

「勿論さ！！俺達と一緒に君の『絆』を見つけよう…！」

「はい…！！ありがとございます…。」

無論闇影は、この申し出を了承した。それを聞いた蠍姫は笑顔で感謝した。

「蠍姫じゃ何か固いから、名前を決めないとね。ええと、サソードでクロックデュアルを使うから…ツルギ…諸刃（もろば）ツルギって言うのはどうかな？」

闇影は、蠍姫の名前を諸刃ツルギと名付けた。確かに剣使いのサソードらしく、またクロックデュアルも体力を大きく消耗する、諸刃



の剣な為、彼女に相応しい名前である。

「ではその名前で…。」

「宜しくな！ツルギちゃん。」

「宜しくね。」

「はい、宜しくお願いします…。」

こうして、蠍姫改め諸刃ツルギが闇影達の仲間に加わった。そこへ…

「痛たたた！！？つて、えっ！？ザビーゼクター！？何？自分もついて来るって！？痛い痛い！！分かった、分かったから！！！」

何処から飛んできたザビーゼクターも闇影について行きたい様だった。しつこく頭をつつくザビーゼクターに闇影は彼（？）の同行も許可した。

「それじゃあ…新しい仲間が二人出来た記念に今日はご馳走にしよう！！！」

「私も手d…」「勘弁して下さい！！」「」

「何でよっ！？？」

黒深子が料理を手伝つと聞き、闇影とコウイチは土下座をしてそれをしない様懇願した。それに突っ込む彼女を見てツルギは小さく笑った。その時…

「絵が…変わりました…。」

次の世界を表わすキャンバスに、上側は神、中段には無数の天使、そして下側には人々が長蛇の如く歩く絵が描かれた。

「アナザーアギトの世界…。」

『ウクク…実験データと「このシステム」は頂いて行きますよ…。』

一方、荒れ果てたネオゼクト本部で一人のゼクトルーパーがヒデナリの持つていた「あの」アタッシュケースを持ち出しながら不気味に笑っていた。どうやら彼こそがツルギをネオタイプにした張本人である。

『では、これを「あの世界」に持って行きますか…。ウクク…!!』

ゼクトルーパーはヘルメットを脱ぎ捨てて、灰色のオーロラを潜り別の世界へと消えて行った。

あのケースの中身が後の驚異になる事は、まだ知る由も無い…。次回も、仮面ライダーディライト！

「は…い太陽ランチ四人前出来たよっ!!」

レストランのコック長となった闇影。そこで黒いコートを羽織った男と一人の少女に出会った…。

「アンノウンか…釣りは取っとけ!!」

そして、相次ぐアンノウンの不可能犯罪を防ぐ為、試作段階の「G4システム」が動き出した。

『アンノウンを倒せるなら、この程度…!!』

『ブフフ…見つけたヨン。もう一人のアギト…!!』

『私はこの力で二度と戦わないと誓った…弟の為にも…!!』

『あああつつ!!FSRのカードを忘れたああつつ!!』

アンノウンからひたすら逃げようとするアナザーアギト…その真意とは…?

次回、『アナザーアギトに宜しく!』

全ての闇を、光へ導け!諸刃(もろば)ツルギ/仮面ライダーサード/スコルピオワーム

「ダークカブトの世界」の出身で、「蠍姫」と呼ばれるネオゼクト秘蔵の暗殺者である美少女。年齢は14歳(推奨)。紫色の長い髪をツインテール状にした紫色のワンピース型の服が特徴で、口調は基本敬語だが、あまり感情は出さず物静かで大人しく感情の起伏が高い性格である。

その正体は、謎の人物により人間をワームに変える「ワームストーン」を埋め込まれた、人間とワームの融合体「ネオタイプ」であり、記憶も消された為過去は存在せず、名前も素性も本来の年齢も不明。

また、当初の「蠍姫」と言う名前もスコルピオワームが元となった  
為に付けられた仮の名前である。

闇影の言う「絆」がどんな物なのかを知る為に彼から新しい名前を  
貰い、彼等の旅に同行した。

名前の由来は、「両刃」の剣+神代「剣」。

## 第16導 絶対不変の絆（後書き）

ソウタ「遂に世界は此処を含めて七つ目になったんだね…。」

テツキ「残りはアナザーアギトとクウガだったよな？んで最後のクウガはあま…ふぎやつつや!？」

ヒヨリ「あら壬銅さん。ネタバレなんてしちゃ駄目ですよ。こんな腐れた作者の腐れた内容なんて生ゴミ以下の存在だから（満面の笑み）」

テツキ「（怖ええええつつつ!!!!もうキャラがああ某ツッコミ眼鏡のお姉さんを彷彿させられるツス!!）」

トライR「（怖い女はヒヨリだけじゃ無いぜ？あっちもほら…）」

黒深子「やっと私の手料理を食べてくれたんだね。嬉しい!!（目はぐるぐるに黒く濁っている）」

闇影「うん…そうだね黒深子…。（首には幾つものおびただしい傷目は黒く濁り口には『あの』料理を含んでいる）」

テツキ「（隊長オオオツツツ!!!!?一体黒深子さんに何されたんツスか!!?やつぱり女つて怖えええつつつ!!!!）」

ツルギ「皆さん…私は仮面ライダーサソードこと諸刃ツルギです。これから闇影さん達の旅について行き、自分の絆を探しに行きます

ので宜しくお願いします。」

ヒヨリ「はい、よく出来ました。皆さん、次回は『アナザーアギトの世界』です。最後の『クウガの世界』共々楽しみにしていて下さい。飽きたら適当にポイしちゃって構いません。それでは次回のお楽しみに。」

トライR「うおおおおつつつつ!!!!!お、俺の出番があああ  
つつつつ!!!!!p)、 、 q) (血の涙を流す) 」

## 第17導 アナザーアギトに宜しく！（前書き）

闇影「皆さん！一周年突破にコメントをくださって本当にありがとうございます！」

黒深子「このアホ作者が此処まで来れたのは一重に皆さんの感想のお陰です！」

コウイチ「サンキューな！！皆！！」

ツルギ「それでは、八番目の世界『アナザーアギトの世界』編の開始です…。」

巡「どんなお宝があるのか楽しみね」

周「俺様達の出番はあるんだろうな…？んじゃ、そろそろ始まるぜ…。」

全員『どござ…！！！！！！！！』

## 第17導 アナザーアギトに宜しく！

レストラン・サンライト

「二番テーブルに太陽ランチ四人分！！六番にティラミスパフェ三つ！！」

「は〜いつ！！」

客からのオーダーを聞き、真っ白な料理服に黒エプロンにコック帽を被った「コック長」の闇影と、同じ服装で黒いバンダナを巻いたコウイチは大きく返事をしながら今のオーダーより前の料理を作っていた。特に闇影は手際良く調理し、皿の目玉焼きが乗ったハンバーグにオレンジ色の鶏ガラソースをかけて定番ランチ「太陽ランチ」を完成させた。その見た目は名前通り、太陽の様なランチだった。

「は〜い！！一番テーブル、太陽ランチ四人前出来たよっ！！」

完成した料理をカウンターに置いた闇影は、直ぐ様次のオーダーの調理に入った。その後も業務をこなしていき、午前中は無事終了した。

「ふう…何とか終わったね。皆お疲れ様！」

「しかし闇影、お前凄えよな！四人分のランチをほんの五、六分で作っちゃうなんてよ。」



「そついうお前だつて、デザートを作るのが得意だなんて初めて知つたぞ。」

「ホントよね。特にティラミスパフェが絶賛だつたわよ。」

昼休みの昼食中、コウイチは闇影の手際の良さを賞賛するが、闇影もコウイチがデザート料理が得意な事を知り賞賛した。影魅璃の言葉通り、午前中のデザートもバニラアイスとチョコアイスの間にティラミスが挟まったパフェ「ティラミスパフェ」のオーダーが多かつたのだ。

「へっ、まあな！何れは『お菓子の城』を作つてみるつもりだぜっ！！ほれ、これが設計図。」

コウイチは何れ「お菓子の城」たる物を作りたいと豪語しながら、何処からか大きな城の形をしたお菓子の絵が描かれた設計図を取り出し、自慢気に見せた。

「こりゃ凄いな…実現したら是非試食させて貰つよ！」

「ねえ…何で皿洗いしかさせてくれなかつたの？」

「（ギクツ！）」「」

皿洗いしかさせて貰えなかつた為、不機嫌になっている黒深子の声を聞き、身体を硬直させる二人。理由は勿論、前回の「ダークカブトの世界」で彼女の料理があまりに壊滅的だつた事を知つた為、それ以後闇影は、黒深子に絶対料理をさせない様にするよと決めたから…なんて事は口が裂けても言えない。

「あ、い、いや…それは…ん？ツ、ツルギちゃん、どうしたの？」  
この話題からどうにか話を逸らそうとする闇影は、たまたま自分の方をずっとしげしげと見つめているツルギに話し掛けた。

「あ、あの…闇影さんがいつも持つてるカードが気になって…少し見せて貰えませんか？」

「うん、良いよ。はい。」

ツルギは、闇影がデイトライトとして戦う際に使うカードが気になり見せて欲しいと言い出した。それを聞き闇影は、ライトブッカーから九枚全てのFSRのカードを取り出し彼女に渡した。

「ありがとうございます…。」

カードを手渡されたツルギは余程興味があったのか、一枚ずつ食い入る様真剣に眺め一言も喋らなくなった。

「珍しいカードが好きなのかな…って夢中に眺めちゃってるね。」

「ちよつと先生！話逸らさないでよっ！…！」

ツルギの方へ話を逸らされた黒深子は、怒って闇影に抗議し出した。  
その時…

「きゃああああ…！！！！！」

「な、何だっ！？お客様！どうかしましたか！？」

突然店内で悲鳴が聞こえ、直ぐ様駆け付けける闇影達。(ツルギは除く)しかし、店内に特に変わった事は起きていなかった。何かと思っていたら店の外で謎の異形二体が人々を襲っていた。

「アンノウンか…釣りはいらん！取っておけっ！！」

「えっ！？ちょ、ちょっと！お客様！！何だ急に…ってええっ！！  
？こっ、こんなにつ！？」

すると突然、黒いコートを羽織い赤いサングラスをかけたオールバツクの長身の男性と小学二年生程の身長をした赤いボブカットの少女がテーブルに勘定を置いて店を出た。闇影はその男が置いた分厚い札束を見て驚いた。

「百万はあるんじゃないか…？って、そんな場合じゃない！！早く助けないと！！」

闇影はあまりにも大き過ぎる「勘定」を見て呆けていたがそれは後回しにして、アンノウンに襲われる人々を救うべく店を飛び出した。

世界の光導者、デイルイト！9つの影の世界を巡り、その瞳は、何を照らす？「た…助けて…！！」

『ヒトハ…ヒトノママデイイ…！！』

「うわぁあっっ！？」

赤く鋭い海星を模したアンノウン「スターフィッシュユロード」二体

がこの言葉を念仏の様に呟きながら、一人の男性に向けて口から水を吐き出しじりじりと近付く。彼等アンノウンは、人々が「アギトの力」を持つのを恐れその力を持った人間を抹殺する事を目的に動いているのだ。

「ひいつ…!？」

スターフィッシュURが腕を降り下ろし、その力を持つてるらしき男性を始末しようとしたその時…

「その人達から離れろっ!! 変身!!」

【KAMEN - RIDE... DELIGHT!】

「とりゃあああっっ!!」

「グガアッ!？」

闇影は腰にデイライトドライバーを装着し、カードを装填するとデイライトに変身し、勢いをつけた跳び蹴りをスターフィッシュURにお見舞いした。

「早く逃げて下さい!!...行くぞっ!! はっ! ふっ! やっ! せいっ!!」

襲われていた人々が逃げるのを見届けたデイライトは、スターフィッシュUR達に素早い連続パンチと回し蹴りを喰らわせる。

「グッ…!! ナラバ…!!」

反撃をするべくスターフィッシュUR達は、その身体を凶器の様に鋭い巨大な海星の姿に変化し急回転しながらデイルイトに斬り掛かった。

『ぐあっ！！くっ…そっちがスピードならこっちもスピードだ！』

【SHADOW - RIDE…DARK - KABUTO！】

デイルイトは自身の影をダークカブト・ライダーフォームにシャドウライドさせて、もう一枚カードを装填した。

【ATTACK - RIDE…CLOCK - UP！】

クロックアップを使い、再び回転して襲い掛かるスターフィッシュR達の正面に高速移動で近づくデイルイトとSダークカブト。そしてデイルイトはすかさずFARのカードを装填し…

【FINAL - ATTACK - RIDE…DA・DA・DA・DA  
RK - KABUTO！】

『はあああ…ライダーキックッ！！』

『グギヤアアアッ！！？』

デイルイトとSダークカブトは、タキオン粒子のエネルギーを凝縮しスパークさせた右足で勢い良く回し蹴りをする「ライダーキック」をスターフィッシュURに叩き込み、爆破させた。

「ふう…さっきの人何処に行ったんだ？」

「危なくなってもう遠くへ逃げたんじゃないの？」

「かもしれないな…仕方ない、店に戻ろう。」

変身を解いた闇影は辺りを見渡し先程のコートの男性を探すが、その人物は見当たらなかった。やむを得ず店に戻ろうとしたその時…

「おっ、おい闇影！！あれっ！！！」

「うっ…うっ…！！！」

「さっき逃げた人！？大丈夫ですかっ！？」

コウイチに呼び止められた闇影が背後に目をやると、先程のスターフィッシュRから水を喰らった男性が呻き苦しんでいるのを見かけ、慌てて駆け付けて身体に触れようとしたが…

「触るなっ！！！」

「…えっ…！？」

突然、先程のコートの男性が怒号を飛ばしながら少女と共に此方に近付き、苦しむ男性の近くにしゃがみ込んだ。

「はいはい！！いまからちえんちえいがこのひとりなおすんらからじゃましらいでー！！！」

少女は舌っ足らずな言葉で闇影達にコートの男性の邪魔をするなど、ジャンプしながら注意した。

「あ…ああ、ごめんよ…ってこの人お医者さん？」

「ちようなのよ！」

「マナ、ちよつと静かにしろ。治療に集中出来ん。」

「はいなのさ！」

闇影の質問に大きな声で答えるマナと呼ばれた少女は、男性に静かにするよう注意され敬礼のポーズを取って返事をした。

「この液体はアギトの力を持った者のみを猛毒に冒す特殊な毒液だ…。」

「え…？アギトって事は、貴方が…！！！」

アギトの名前を出した男性の言葉を聞き、闇影は彼がアギトと関係があるのかを尋ねようとしたが、男はそれを無視し右の掌を毒で苦しむ男性の額に近付けた。すると、掌にアギトの紋章が緑色に輝き男性の額から黒い煙の様な物が現れ、掌に吸収されていった。

「うう…ん？か、身体が楽になった！！！」

毒で苦しんでいた男性は、身体が楽になって喜びながら立ち上がった。だがここでコートの医師は…

「そうか、なら治療代に百万を払って貰おうか。」

「「「「ひゃつ、百万！？」「」「」」

「命が助かったんだからそれくらい安いもんだろ？」

何とコートの男性は、男に今の治療代として百万を払えと言い出した。あまりの法外な治療代に闇影達も大きく叫んだ。

「何だよ！？そんな大金払える訳無えだろっ！？」

確かに治療代が百万なんて大金を一般人が容易く払える訳が無い…。男がコートの男性に怒鳴り出していると、横から闇影が割り込み…

「百万だったらありますよ！はい。」

「おっおい、闇影！！」

先程この男性が店に置いていった「勘定」の百万を、少し顔をしかめながら治療代として手渡した。

「まあ…誰から貰ってもいいんだがな。」

「チツ、ぼったくってんじゃ無えよ！！ヤブがっ！！」

治療代を貰い納得した医師に男性は暴力的な言葉でなじり、激怒しながらその場を去って行った。

「お前さんも変わってるよな。他人の治療費を肩代わりするなんて…。」

「それより貴方のさっきの力、アギトと何か関係が…」

「私の名は森野（もりの）カオル。通りすがりのただの医者だ。そ



してこっちは…」

「じょちゅの地羽（ちば）マナらのさ！」

闇影の質問には答えず自分達の名を紹介する医師・カオルと助手のマナ。彼等は世界各地で病気で苦しむ人々の治療をする旅をしているのだと言う。

「そんなんですか…マナちゃんも頑張ってるんだね。」

「あつたりまえなのら！わたしはちえんちえいのおくちゃんから  
「！」

「ははは…奥さんだなんて可愛い事言うね。」

「しちゅれいね！こーみえてもわたしはにじゅうごなんらから！」

マナがカオルの奥さんだとは信じない闇影の言葉に、彼女はぶんすか怒りながら年齢が25だと言うが…

「」「ぶっ…ぶはははっ！！」「」「

「マ、マナちゃん、う、嘘付いちゃ駄目だよ。」

「そ、そうそう。でもこういう所が可愛いわね。」

「じゅっ、十年経ってから、い、言いなよ…ぶ…ぶはははっ！！」

信じるどころか嘘だと決め付け、大笑いする三人にマナは目に涙を浮かばせ…

「うつ…うつ…うつわあああんちえんちえええつつつつ！  
！…！」

周囲の建物に響く程大きく泣き叫び、カオルの足下に引つ付いた。  
無論あまりの煩さにカオルは耳を塞いでいる。

「あ…ああ、ごめんごめん！！言い過ぎたよ。それでカオル先生、  
さっきどうして此処から離れたんですか？」

「お前さんには関係無い…。面倒事に首を突っ込みたくなかっただ  
けだし、たまたま人が倒れていたから医者として治療してやった…  
これで満足か？解つたら私達を…！！マナ、逃げるぞ…！！」

「ヒック…はいらのさ…。」

「あつ！待って下さい！！まだ聞きたい事が…！！」

何かを感じたカオルは、闇影の制止に耳を貸さず漸く泣き止んだマ  
ナと共にこの場から颯爽と去って行った。すると、頭部に巻き貝を  
被り肩にも同じ貝が付いたアンノウン「シエルロード」三体が此方  
に現れた。

『シエアアア…！！』

「何でアンノウンが近付き出したら逃げるんだよ…。」

「話は後だ！今はこいつ等を倒す事に専念しろコウイチ！！」

カオル達が逃げた事に嘆くコウイチに目の前の敵を倒すのが先だと

櫛を飛ばす闇影。二人は、互いの変身ツールを取り出し変身しようとしたその時…

『グガアツツ!?!』

「な、何だっ!?!」

「あれは…G3-X!?!」

青と白を基調とした専用バイク「ガードチェイサー」に乗った、青と銀を基調のアーマーに、頭部に二本のアンテナが特徴の「仮面ライダーG3-X」が此方に近付きながらシエルR達を銃撃した。

『一般人の方は下がって下さい!!アンノウンは、我々警視庁が討伐致します!?!』

ガードチェイサーから降りたG3-Xは、一般人である闇影達にこの場から離れる様言うと、バイクからガトリング銃型武器「GX-05 ケルベロス」を取り出し構え、シエルR達に向けて正確に一体のみを連射した。

『グツ…グギヤアアアツツ!?!』

「凄い…正確に一体だけ撃って倒すなんて…!!」

一点狙いの攻撃に一体のシエルRは、頭から青い天使の輪の様な物を浮かばせて爆破した。闇影は、そんなG3-Xの正確な射撃能力に感嘆の声を上げた。

『オノレエ…ヒト風情ガツ!?!』

同胞を倒され怒りを募らせるシエルR達は、頭部と肩から槍の形をした貝をG3-Xに向けて乱射した。

『グツ…グアアアツツ!!』

貝を無数に喰らったG3-Xは仰け反りそうになるが、何とか体勢を立て直し…

『くっ…!!何のその…これしきっ!!』

ケルベロスに、先程威嚇射撃に使った銃「GM-01 スコーピオン」を連結させて、ロケットランチャー型武器「GXランチャー」を完成させた。

『全弾…持っつけてええっつ!!』

『グギヤアアツツ!!』

GXランチャーのトリガーを引き、無数のミサイルをガトリング砲の様に放つ「ケルベロスファイヤー」によりシエルR達は爆破した。

『グウツ…!!ア、アギト以上二厄介ナ奴ダ…!一度退クカ!!』

だが内一体は辛うじて生き延び、G3-Xをアギトと同じく厄介な存在だと声を漏らしながら撤退していった。

『くそっ!!一体逃げられたか…!!』

『緋山(ひやま)君!!またGXランチャーを使用許可も無いのに

勝手に使ったわね!! あれは強力なアンノウンが出た時にしか使うなど、何回言わせる気!?!」

『お、大澤(おおさわ)さん!! すつ、すみません!!』

G3-Xの無線から大澤と言う女性の怒鳴り声が聞こえると、緋山と言う男性は身を縮こませて謝った。GXランチャーは許可が出ない限り使用が許されないのだが、大沢の言葉から、彼はこれ迄何度もその許可を得ずに無断使用している様だ…。

『…もういいわ。さっさと戻って来なさい!』

『りよ、了解!! では、皆さん! これにて失礼致します!!』

帰還命令を聞き無線を切ったG3-Xは、闇影達に敬礼してからガード Cheney に跨がると、そのまま警視庁へと向かって行った。

「何か…えらく怒られてたみたいだな…。」

「確かにね…。つと、そんな事より俺、カオル先生の所に行って来る! まだ何も聞いてないからね。店は任せたぞコウイチ!!」

「…つておい、闇影!!」

「ちょ、ちょっと先生!! 場所解るの…つて…。はあ…また何時もの病気が始まった…。」

カオルから話を聞く為、単身で彼の元へと走り出す闇影。コウイチと黒深子は、彼の何時もの『病気(おせっかい)』が始まったと、呆れ顔で呆然としていた…。

警視庁・モニター室

「全く…！アンノウンを倒したのは良いけど、命令を無視した戦いは止めなさい！！」

「す…すみません…。」

あれから帰還した茶髪のスポーツ狩りをした警官服の男性、G3・Xの装着者・緋山マコトは、髪をくくりした警官服の女性上官・大澤スミコから先程の命令無視について説教を喰らっていた。

「はあ…この二ヶ月で貴方の命令無視した戦い方には目に余るわ…。何でこんな真似を？」

一通り怒鳴り終えたスミコは、溜め息交じりにマコトの命令無視した戦いの理由を落ち着いた表情で尋ねた。

「…俺、子供の時に家族をアンノウンに殺されたんです…。」

「え…？」

「その時俺は、何も出来なくてあいつ等の良いようにされたのがとても悔しかったんです…！！それから俺、アンノウンを倒す事を決めて警察官になったんです。だから…！！」

「貴方の気持ちは解らなくは無いわ…。でもね、私達警察は組織で

戦ってるの！私情で戦われると迷惑なの！！」

マコトのこれ迄の命令無視の理由、それは幼少の時に家族をアンノウンの不可能犯罪により皆殺しにされた事から、全てのアンノウンを討伐するべくこの警視庁の門を叩いたのだと言う。度重なる命令無視した戦い方も、その信念を貫き過ぎた為による物だったのだ。

しかし、警察と言う「組織」で戦う以上、彼の行動が罷り通る事は無い。そう厳しく言ったスミコは…

「…一ヶ月間、貴方の出撃は控えさせて貰うわ。暫く頭を冷やしなさい。」

「りよ…了解しました…。」

マコトにアンノウン討伐の出撃を一ヶ月停止、つまり事実上の謹慎命令を下した。

「一ヶ月出撃停止…か…。はあ…っ痛てっ！！」

「おい後輩！なにに辛気臭い面してんだ？」

「な、南条（なんじょう）さん…。」

出撃停止命令を下され、通路の椅子に座り落ち込んでいるマコトの頭をはたいしたのは、眼鏡をかけ身長がやや低い壮年の男性、彼の先輩である南条トオル。彼もまたG3-Xの装着者であるが、身体能力がマコトにやや劣る為、補欠要員とされている。

「聞いたぜ。お前また命令無視した戦いやらかして遂に出撃停止になっただってなあ。ほれコーヒー。」

「あ、ありがとうございます…。」

嫌味な台詞を吐きながらも、持ってた二本の缶コーヒーの内一本をマコトに手渡した。

「ったく…！何時も馬鹿面しながら『この町の平和は、俺が守るんだあっ！』とか馬鹿でかい声出しながら運動場を何周も走る程騒がしい馬鹿なお前はどうしたんだ？」

「実は……」

マコトに何度も「馬鹿」と言いまくりながらも相談に乗ろうとしているトオル。先程の事情や行動からトオルはマコトの能力を妬み嫌っている様に見えるが、内心彼の事を誰よりも気に掛けているのだ。マコトは自分の胸の内を彼に話そうとしたが…

『緊急警報！緊急警報！アンノウンが発生！！G3-Xの装着者は直ちに戦闘準備をして下さい！繰り返します…！！』

「…アンノウン…！！」

突然、アンノウンの発生による緊急警報のサイレンが鳴り響いた。それを耳にしたマコトは直ぐ様G3-Xの装着準備をしようとするが…

「お…と待て！お前ホント馬鹿だな！？さっき言われた事もう忘れてるな。俺が行くからお前はコーヒー飲んで待機しとけ！良い



な？」

マコトの首根っこを引つ捕まえたトオルは、自分が出ると言いながらその場を走り去って行く。一歩進む度に指を指しながら待機しろと念を押しながら…。

「…俺は…。」

一方シエルRの襲撃から逃げたカオルは、橋に肘をつきながらその下にある川原をずっと見ていた。まるで何か考え事をしているかの様に…。

「ねえちえんちえい、もしかちて『あのじけん』についてかんがえてんの？ちえんちえいのおとうとさんの…。」

「マナ！その話はするなと言った筈だっ！！！」

「ひっ！！ごめんなちやい…。」

「…すまない…。」

マナがカオルの弟の話を口にし出すと、彼の怒鳴り声に怯み泣きそうな顔で謝った。しかし少し閥が悪いのか、カオルは呟く様に謝ると再び川原の方に顔を向けた。

「あっ！いたいた！カオル先生っ！！！」

「ん？…あっ！ちゃっきのコックしゃん！！！」

そこへ、お節介モードな闇影が此方に向かって走って来た。カオルはそれを見て少し鬱陶しいそつに肩を竦めた。

「何だ？まだ何か私に用か？」

「まだ貴方に聞きたい事があるんです。どうしてアギトの力で治療が出来るのか、どうしてアンノウンが来ると戦わずに逃げるのか、それに…」

「悪いがその話なら話すつもりは毛頭無い。これが最後だ…二度と私に関わるな。行くぞ、マナ。」

しつこくアギトの力について尋ねてくる闇影に、カオルは話すつもりは無いとコートを翻しながらマナと共にこの場から去ろうとしたその時…

「ちえ、ちえ、ちえ、ちえんちえい！！かわからんかがあがつてくゆよ！？」

「ちっ…！！『奴』か…！？」

マナが指を指した方を見ると、川原から大きな水の塊が浮かび上がり闇影達の前に飛んで着地し、スライムのように形を変えて行く…。

「アッチョンプリケ〜ッ！！みじゅがしゅらいめみたくぐによつとなつてゆ〜っつ！！」

『ブフフ…見つけたヨン。もう一人のアギト…！！』

水の塊は青い螺旋状の杖を持った、頭部に王冠の様な角に細長い腕、水瓶の様な胴体をし、内部にある一つの赤い目玉が特徴のアンノウォーターロード・アクエリアス」が現れた。

### 警視庁・モニター室

『アンノウンが発生しました！！繰り返します。アンノウンが発生しました！！…』

「何ですって！？新しいアンノウンがつ！？南条君！！聞こえる今別の現場でアンノウンが発生したわ！今から言う場所に至急向かって！！」

一方警視庁では、トオルに向かわせた現場とは別の、現在闇影達が遭遇したウォーターRの発生を知ったスミコは、至急トオルにその現場に向かうよう要請した。

「アンノウンがつ…！！」

「待ちなさい緋山君！！貴方には襲撃停止を命令した筈よ！それに、G3・Xは一つしか無いのよ！？」

それを知ったマコトは直ぐ様そこへ向かおうとしたが、スミコに出撃停止した筈だと呼び止められた。仮に出撃出来たとしても、G3・Xのシステムは一つしかないと言う。

「まだ『あれ』があります！！…『G4システム』が…！！？」

「だつ、駄目よ！！あのシステムはまだ試作段階でどんなリスクがあるのか解らないのよ！？」

それを聞いたマコトは、G3-Xとは別のシステム「G4システム」を使用すると言い出した。しかし、そのシステムはまだ試作段階でありリスクも不明な為、スミコはそれを断固反対した。

「どんなリスクを被うとも、アンノウンと戦えるなら……！！」

「待ちなさい！！緋山君！！」

それでも構わんと言わんばかりにマコトは、スミコの制止に耳を貸さずに現場へと向かって行った。

「やはり貴様が現れたか……！！」

『久しいネエ……あれから二年は経つんじゃないのカイ？……我輩が以前の弟、本物のアギトを殺してからネ……』

「……何だつて！？カオル先生の弟さんもアギトで、あいつが殺したっ！？」

『ブフフ……それからだったかネエ……？どんな方法か知らないけどお前がアギトの力を目覚めたノハ。尤も、本物ではなく紛い物の力だけドネ。』

なんと、ウォーターRは二年前にカオルの弟・森野テツヤ/仮面ラ

イダーアギトを殺害したアンノウンであったのだ。その時に、カオルもアギトの力に目覚めた様だ。但し、テツヤと同じアギトでは無くアナザーアギトの力を得て現在に至ると言う…。

『アギトである以上、お前を野放しにはしないヨ…現レヨ！！水面に眠りし同胞達ヨ！！』

『グギヨギヨ…！！』

『ヒトハ…ヒトノママデイイ…！！』

『同胞ノ仇…！！』

ウォーターRが杖を構えると、彼の体内から赤い真蛸を模した「オクトパスロード」と、白い烏賊を模した「スクイッドロード」、そして、先程のシエルRが現れた。

「海の幸でいっぱいか…コックらしくまとめて調理してやる！！変身！」

【KAMEN - RIDE…DELIGHT!】

闇影は、自分の役割であるコックらしくアンノウン達を調理すると言いながらデイライトに変身した。

『こつちも援軍を作るか…！！』

【SHADOW - RIDE…CULLIS!】

デイライトは援軍を作るべく、自身の影をカリスにシャドウライド

させた。

『はあああつつ!! やっ! はあっ! せいっ!!』

『グッ…グギョオオツツ!!』

デイルライトはライトブッカー・ソードモードでオクトパスRを素早く斬り付けて行く。しかし、オクトパスRは口から威力のある墨を吐き出した。

『おわつと!! 蛸は調理する時、墨を吐いてくるからね…。先ずは大人しくさせる!!』

【ATTACK - RIDE : SPARK!】

『グギョオツ!!』

デイルライトはオクトパスRを「スパーク」を纏った剣で斬り付けて痺れさせ…

『続いて微塵切り!! せいっ!! やややあつつ!!』

『グッ…! ギョギョオオツツ!?!』

ライトブッカーでオクトパスRの八本の腕を目にも止まらぬ速度で切断していき…

『仕上げは火力で焼いていく!!』

【FINAL - ATTACK - RIDE : DE・DE・DE・DE

【LIGHT!】

『蛸の姿焼…一丁上がりいっ!』

『グギョギョオオツツ!』

止めにデイメンジョンプロミネンスを放ち、オクトパスRを焼き尽くし、デイライトの「調理」は完成した。

『……!』

『クツ…アギトデハ無イガ、コレモヒトヲ越エシカ…抹殺スルツ!』

一方、Sカリスと交戦中のスクイッドRはSカリス、正確にはデイライトの力もアギトと同じ「人を超えた力」と見なし、彼(?)を抹殺する事に決め、十本の腕を鋭い槍の様に伸ばして串刺しにしようとするが…

【ATTACK - RIDE…BIO!】

『ナツ、何ツ!!グウツ!?!』

カリスアローから、デイライトが発動した「プラントバイオ」による無数の鳶が飛び出し、スクイッドRを捕縛し此方に勢い良く上空に引き上げたSカリスは…

【FINAL - ATTACK - RIDE…CU・CU・CU・CU  
LLIS!】

『……!!』

『グアアアツツ!!』

逆立ちをしながら竜巻を纏ったスピニングアタックの回転蹴りで、スクイッドRを撃破した。

「しゅ…しゅっ…いつ!!しゅっいよあのコックしゃん!!」

『ブフフ…中々やるようだネエ…。けど我輩の力はこんなモンじゃ無イヨ!現れレヨ!!』

アンノウンを二体倒したデイライトの実力を目の当たりにしても余裕の態度を取るウォーターRは、不気味に笑いながら再び体内から無数の水棲生物のアンノウンを呼び出した。

『そっ…そんな…!!』

『ブフフ…どうすルン?もう一人のアギト。その力で戦わないの力ネエ?』

「私は二度とこの力で戦わないと誓った…。弟の…テツヤの為に…!!ん?」

無数のアンノウンの出現で窮地に追い込まれたデイライト。カオルはそれでも頑なに戦わないと言い張る。するとそこに、一台のヘリが耳をつんざく程のプロペラ音と激しい突風を巻き起こしながら現れ、ヘリからワイヤーの様な物が垂れると「何か」がそれを伝って降りてきた…。





『ハア…ハア…ハア…ウグツ…！！へへ…これがG4システム…何て素晴らしい力なんだ！！これで全てのアンノウンを倒せる！消せる！コロセルツ…！！』

G4の圧倒的な性能に酔いしれる装着者<sup>マコト</sup>は、その力に徐々に飲み込まれつつあり口調も物騒な物に変わっていく。G4システムはG3-Xとは違い、装着者の意思とは無関係に動作する…つまり、装着者をパーツとして起動するスーツなのだ。当然、長時間装着し続ければ装着者を死に至らしめてしまう。これがG4システムのリスクである…。

「そんな危険なお宝は…」

「俺様達が戴くに相応しいぜ！！」

『あ、あいつ等…！！いつの間に！？』

「「変身…！！」」

【KAMEN - RIDER…DISHIRF!】

【KAMEN - RIDER…DISTEAL!】

デイルイトが気付かぬ内に現れた巡と周は、G4システムを奪うべくデিশーフとディステイルに変身した。

『作られたライダー同士で行くか！』

【KAMEN - RIDER…ALTERNATIVE!】

『…………。』

デイスティールは「人に作られたライダー」で対抗するのか、黒い蟋蟀に似た擬似ライダー「オルタナティブ」を召喚した。

『なら私は…………』

デিশーフモライダーカード【KAMEN - RIDE IXA】のカードをスラッシュしようとしたが…

どういう…事…？何で…何でこんな事に…！？

何て顔をしてるんだ？困った　だ…なあ…。

『…………。』

何故かスラッシュせず、腕が震えていた。そして、ライダーカードをホルダーに戻した。

『巡ちゃん？どうしたんだ？』

『え？うつん、何でも無いわ！行くわよ！！』

デイスティールは心配するが、直ぐに何時もの表情を取り戻したデিশーフはドライバーを構えてG4に向かって行った。

【SWORD・VENT】

『…!』

『グウツ!?!?』

オルタナティブは右腕の召喚機「スラツシュバイザー」にソードベントカードをスラツシュし、契約モンスター「サイコログ」の両足を模した剣「スラツシュダガー」を装備し、G4と斬り結びを行った。

『私も忘れないでね はあっ!』

『俺様もな。』

『ガアツ!?!?グアツ!』

デイシーフはその背後からドライバーでG4に斬りかかり、ディスプレイも遠距離から光の矢を放った。だがそれでもG4は止まらない。

『ブフフ…ホントにヒトと言うのは愚かだネエ…。』

『何だか粗方解らないけど、先ずはあのアンノウンを何とかしないとね。』

デイライトは、この事態を落ち着かせる為先ずはウォーターRを倒すべく、アギトのFSRカードを取り出そうとしたが…

『あれ？なっ無い！？あつ！！』

うん、良いよ。はい。

『あああつっ！！FSRのカードを忘れたああつっ！！』

ツルギにFSRのカードを全て渡してしまった事を思い出したデイトライトは、大絶叫しながらカードを忘れた事に嘆き出した。

『（どうするんだよこれ…。）』

『ブフフ…そのまま同士討ちになった方が楽かモネ。バイバイ』

ウォーターはそう言うと、身体を液体化しながら撤退して行った。G4の暴走、アナザーアギトの逃走の理由、そして、何故デイトライトはイクサにならなかったのか…各々の思いが複雑に絡み合う…。次回、仮面ライダーデイトライト！

暴走の止まらないG4にG3-Xは…

『おい後輩！俺が分かんねえのか！？おい！緋山！！』

そして状況は更に悪化していき…

『ブフフ…これがアンノウンとG4とやらが融合した我輩の新たな

姿…」

そんな中力オルは…

「私は…弟の命を奪ったアギトの力をこれ以上使いたくない…!!」

「人は、強大な力に飲み込まれる程弱い…だけど、それを乗り越えられる強さも持っている!!」

その力を乗り越え、もう一人のアギトは目覚める…!!

「変身!」

次回、『乗り越える!その力!』

全ての闇を、光へ導け!

第17導 アナザーアギトに宜しく！（後書き）

全員『うゝそつき うゝそつき』

トライR「ちよっ！！」

コウイチ「何だよこれ！！肝心のアナザーアギトが出てねえじゃねえか！！タイトル詐欺もいいところだぜっ！！」

巡「ホントね…一年経ってまともになったと思いきや、此処まで執筆レベルが落ちたなんてね…。」

トライR「だつてしゃーねーじゃねえか…此処でカオルはまだ変身させたくなかったし、何より今回は文が長くなっちゃって…。」

周「自業自得だろがっ！！」

闇影「特に最後の俺のシーン、無茶苦茶間抜けじゃないか！！」

ツルギ「ごめんなさい闇影さん…私のせいで…。」

闇影「あつ、いや…ツルギちゃんのせいじゃないよ。」

黒深子「そつだよ。悪いのは全部あのアホのせいなんだから。」

トライR「ぐぞ…」（涙目）当たり前だけど、次回は必ずアナザーアギトを登場しますので後半迄のお楽しみで！！ではm（」

—）E「

第18導 乗り越える！その力！（前書き）

カオル「皆、アナザーアギト編後半が更新されたぞ。」

マナ「このおはなちでちえんちえいがだ〜いかちゅやくすゆから、  
ようちえつくらのさ〜」

カオル「閲覧料は五百万…と言いたい所だが、今回は無料にしてやる。さ、始まるぞ。」

マナ「では、ど〜じょ…！」





ッ！！！！！！！」

『ガアアツツ！！！！』

再び獣の様に叫びながら、肩に掛けてある多目的巡航4連ミサイルランチャー「ギガント」で四基の小型ミサイルを発射して、真正面に特攻してくるオルタナティブに放ち大爆発を起こした。

『あちゃ〜…やっぱり擬似じゃ相手にならなかったな…。』

『でもあの威力は凄いわね…んふ、益々欲しくなってきたわ』

デイシーフとディステイルはG4の聞きしに勝る脅威的な戦闘力を目の当たりにし、一層そのシステムを手に入れる意欲を高め、体制を整えているその時…

『ん…？あれは…。』

そこへウォーターロード・アクエリアスの出現とG4システムの暴走を聞いたG3-Xが、ガードチェイサーに搭乗して此方に走って来た。

『あらあら、お巡りさんがきちちゃったわね。此処は一先ず退こうかしら』

『あばよ。』

【ATTACK・RIDE…WARP！】

G3-Xを「お巡りさん」呼ばわりするデイシーフ達は、ワープの

カードを使いその場から姿を消した。

『…まったく世話の焼ける後輩だな…おい後輩、さっさと帰…!!』

『ガアアツ!!』

ガードチェイサーから降りたG3-XはG4に近付き帰る様促そうと手を伸ばしたが、GK-06四式改で突き刺そうとした。G3-Xがそれを避けるとG4は…

『ウウツツ……ウガアアアアツツツ!!!』

『あっ!おいコラ待て!!』

突然武器を落とし尚も呻きながら頭を抱え、その場から逃げる様に去って行き、G3-Xはガードチェイサーに乗ってを追いかけた。行った。

『何がどうなってるんだ…?…ってカオル先生が居ない!?!』

騒ぎが一時的に収まった事に安堵するデイルイトだが、カオルがいつの間にか姿を消していた。恐らく今の騒ぎに乗じて逃走したのだろっ…。と、思いきや…

『ううっ……ううっ……!!』

『マナちゃん!?!』

そこにはなんと、立ったまま一人で泣いているマナの姿があったのだった…。

世界の光導者、デイライト！9つの影の世界を巡り、その瞳は、何を照らす？ レストラン・サンライト

「はい、太陽ランチとティラミスパフェをどうぞ」

「ハグググ…！！…ングツ…！！…うええん…ハグググ…！！…ングツ…！！…うええん…ぢえんぢえ…。」

「食べるか泣くかどっちかにしなよ…。」

「まあまあ…。あの後一体何があったのかな？」

マナは太陽ランチを勢い良くかつ込む様に食べては泣き、ティラミスパフェを食べては泣き…を繰り返す。それに突っ込むコウイチを宥めた闇影は、あの後どうしたのかを彼女に尋ねた。

「ヒック…じちゅは…」

「マナ、奴の気は今煌に向いている…。だから今の内に逃げる。だがお前は煌の所へ一度残れ。お前との旅は此処までだ。」

「…え？」

デイライトがウォーターロード・アクエリアスと戦っている最中に



「ううっ……うわあああっっっんっ！……！！」

「ま、前も聞いたけど凄い泣き声だ……。」

事情を話終えたマナは、今の話を思い出し再び大声で泣き出した。あまりの煩さに耳を塞ぐ闇影達。そこへレストランのドアが開き、頭の天辺が禿げた口元に白い髭を生やした男性が入店して来た。

「あ、いらっしやませ！」

「いやいや、ワシは客じゃないんです。ここに地羽マナって子はいますかな？」

「ええ、いますよ。」

「マナちゃん、迎えに来たよ。」

「うえええんっ……！！ん、あ、マスター……。」

「えっ、じゃあさっきの話でマナちゃんの事を頼んだ人って、この人？」

来店して来た老人を見て泣き止んだマナ。この老人は、カオルとマナ行き付けの喫茶店「フルヴォン」の店主（マスター）であり、彼等とは親密な関係で結ばれている。マナの面倒を見て貰える程の……。

「さっマナちゃん、今日からはわしが君の面倒を見るか……いや……」

「やだやだやだやだ！！じえつつつたい！！いやあああつつつ  
つ！！！！！！」

「あつ！マナちゃん！！」

マスターが手を差し出そうとすると、マナはカオルと離れるのが嫌  
な為、大声で駄々をこねながらジタバタした後、そのまま店を飛び  
出して行った。

「はあ…無理も無いか…二年間も一緒にいたカオル君から突然離れ  
る様言われたらな…。」

「カオルさんも冷てえよなあ…急に離れるだなんてよお…。」

マナが出て行った事に無理も無いと額に手を当てるマスターを見て、  
カオルの態度が冷たいとぼやくコウイチ。それを聞いたマスターは…

「カオル君がマナちゃんを突き離れたのは、アンノウンからの襲撃  
に巻き込みたくないだけじゃないんだよ…。」

「え…？」

「もしかして…二年前に弟さんが亡くなった事に関係が…！？」

「うむ…本当はカオル君自身が話した方が良いんじゃないか…場合が場  
合じゃし事情を話すよ。」

二年前のカオルの弟・テツヤ／仮面ライダーアギトの死についてを  
語り出す…。

二年前

『ブフフ…見つけたヨン、アギト…。』

「なっ、何なんだコイツは…!?!」

当時、周囲から「天才」と呼ばれる程の技術を持つ外科医であったカオルとテツヤが病院の研修に向かう最中に、ウオーターRがアギトの力を持つテツヤを抹殺するべく襲撃に現れた。

「アンノウンか…兄さんは下がってて!!」

狙いが自分だと知りカオルに離れる様促したテツヤは、腰に中心が目の様な形をしたベルト「オルタリング」を出現させ…

「変身!」

オルタリングの両サイドのボタンを押したテツヤの身体は輝き、二本のクロスホーンが特徴に、金色の龍をイメージした戦士「仮面ライダーアギト グランドフォーム」に変身した。

「テ…テツヤ…その姿は…!?!」

『後で話すよ…。行くぞ!!はああああっ!!』

初めて見る、自分のもう一つの姿に驚くカオルにアギトGFは事情



を後で説明すると言い、ウォーターRに向かって走り出した。そして、パンチやキックを素早く繰り出すが…

『ブフフ…無駄無駄 我輩の身体は液体に変化する事が出来るからネ 』

ウォーターRの、自身の身体を液体に変える能力によりアギトGFの攻撃は水を切ったかの様に全く効いていなかった。更に…

『あゝ言い忘れてたケド…液体なら何でも変えれルヨ。普通の水でも海水でも…』

『何っ…!!グッ…!?身体が…!!』

『毒液にモネッ!!』

『グワアッ!!』

毒液の身体に変化したウォーターRに触れたアギトGFは、それにより身体を蝕み体力が消耗していき苦しみ出し、そこに更にウォーターRの振るった杖から放つ青い光弾によりアギトGFを壁まで吹き飛ばした。

「テツヤッ!!」

『グッ…!!』

『ブフフ…止め…ギイエエツッ!!?』

ウォーターRがアギトGFに止めを刺そうとした時、カオルが護身用

のスタンガンスイッチを入れた状態で放り投げてアギトGFを守った。

『…兄さん…!!』

『やってくれたネエ…我輩達神の使いを邪魔した罪は重イヨ…!?!』

アギト抹殺の邪魔をされた事に頭に來たウォーターRは、アンノウンの禁忌「アギトの力を持たない人間の抹殺」をしようと標的をカオルに変更して杖から青い光弾を放った。

「喰らいナヨ!!」

「あ…ああ…!!」

『兄さあああつつん!!ウアアアアアツツツ!!!!』

「……ん、い…生き…てる…。っ痛…!!左目が見えん…!!そ  
うだ!!テツヤ、テツヤはど…!!」

意識を取り戻したが左目の視力を失ってしまったカオル。直ぐ様アギトGFを探そうとしたが、目の前の光景を見て絶句した…。何故なら…

「……。」

「テ…テツヤ…テツヤ!!」

カオルを庇うようにボロボロの身体で仁王立ちをしたテツヤの姿がそこにあつたからだ……。力が抜けたテツヤは後ろ向きに倒れ出したが、カオルがそれを支えた。

「テツヤ！ しっかりしろ！！ テツヤ！！」

「う、ううっ……。！！ にい……。さん……。もしかして今左目……。見えない……。でしょ……。？」

「何故それを……。！？ つてそんな事は……。！！」

「ずっと前から……。兄さんの左目が見えなくなる夢を見て……。もしかしたら予知夢……。なのかもね……。……。兄さんはこれから……。沢山の人の……。命を救つて……。いくんだから……。目が見えないと……。駄目だよ……。だから……。僕が死んだら……。僕の左目を使いなよ……。ゲホッ……。！！」

テツヤは息絶え絶えに予知夢で見たカオルの左目の失明について話すと、自分の死後に自分の左目を移植する様言つた。カオルの医者生命を経たせない為に……。

「分かつた……。分かつたからもう喋るな！！ 私が直ぐに治してやるから……。テツヤ……。？ テツヤ！！ ウオオオオオツツツ！！！！」

テツヤは息絶えてこの世を去って行き、カオルは弟を救えなかった無力さに大きく泣き叫んだ……。

「それから目を移植したカオル君の周りで異変が起きたのが原因で周囲の人間から気味悪がられて、彼は病院を追いやられ、医者免許

も剥奪されたんだ……。恐らくその異変が……」

「アギトの力か…粗方解りました。そうと解れば……!!」

カオルの過去を聞いた闇影は、彼の持つアナザーアギトの力は移植したテツヤ、即ちアギトの左目が原因であり、アンノウンから遠ざかりマナをマスターに預けたのも、彼女を弟と同じ運命を辿らせない為だと理解した。

すると闇影は立ち上がり、今の話をマナとカオルを探そうと店を出ようとしたが…

「待って下さい闇影さん…これ、お返しします…。返すのを忘れてごめんなさい…。」

ツルギは預かったままのFSRのカードを謝りながら闇影に返却した。

「ありがとうツルギちゃん！行って来る!!」

「……。」

一方カオルは…

「（そうだ…これでいいんだ…これで…もうテツヤの時の様な思いは御免だ…。今の私は…疫病神だから…。」）

闇影の思っていた通り、自分のせいでマナをテツヤと同じ運命に遭わせないが為に彼女から離れたのだった。自らを「疫病神」だと思

い込みながら宛もなく歩いてきた。すると…

「ちえんちえい！！！」

「なっ！！マナ！！！」

そこへ、別れた筈のマナが泣きながら自分に向かって走り、袖にしがみついて来た。

「どうして戻って来たんだ！！お前みたいな足手まといは…！！」「うちよちかないで！！！」

カオルの「マナが足手まとい」と言う言葉を彼女は嘘だと遮った。

「ちえんちえいはマナをおとつとしゃんとおなじようにちなせくないからあんなことをいったんでしょ！？」

「…！！何のはな…！！！」

「マナだつておとなのれでいよ！！ちえんちえいのきもちくやいじゅつといたんらからわかるのさ…！！！」

「だがそれでもお前が私に付いてくる理由には…！！！」

マナは、カオルが自分を突き離れた真意に気付いていたのだった。だがカオルの言う様に、二年間ずっと一緒にいたから自分の気持ちが解る理由になつても、自分に義理堅くついてくる理由にはならない。そう言い出そうとする…

「…マナもちえんちえいとおなじあぎとのちからをもつててまわり

からきらわれておちこんでるところをちえんちえいがたしゆけてくれた…ちえんちえいはマナのいっちょうのおんじんらから、そのおんがえちをしたいのさ…!!」

「…!!…何だとっ…!!」

何とマナもまたアギトの力を持つ者だったのだ。彼女がカオルをここまで慕っている理由、それはその力を持つが故に周囲から疎遠されて孤独にうちひしがれていた所を彼が救ってくれた為である。

「そういう事だったのか…。」

カオルは今のマナの話を初めて知った様でありただただ驚いていたその時…。

『ガアアアアアツツ…!!…!!』

「…!!…!!…!!」

『おい後輩…!!止める…!!止めるって…!!』

『グアアアツツ…!!…!!』

『うわあああつつ…!!…!!』

丁度カオル達がいる近くの廃工場で、暴走したG4がギガントを使い周囲に攻撃をしていた。G3-Xは彼に羽交い締めをして暴走を止めるで呼び掛けるが、その声は届かずG4に力づくで振りほどかれてしまう。

『おい馬鹿後輩…お前、何時までそんなガラクタに振り回されてんだよ…お前の馬鹿が付くほどの信念はんなガラクタなんかに負ける程弱かったのかよ…。んな馬鹿なお前を心配する俺が分かんねえのかよ!!…!!…!! 緋山!!』』

『グ…グ…グ…!!ナン…ジヨウ…サン…!!』

G3-Xは倒れても尚、G4(マコト)に呼び掛ける。今まで「後輩」と呼んでいた彼を「緋山」と苗字で呼んだのもこれが初めてである。するとG4の意識も徐々に正気に戻りつつあった。

「何なんだあれは…!!?」

「アツチヨンプリケ〜!!ろ、ろ、ろ、ろぼつとがなんかあばれてるううつつ!?!」

カオルとマナは、そんな二体のロボットライダーのやり取りを目を奪われていた時、『最悪』な事が起きてしまった…。

『ブフフ…聞〜いちゃつタヨ まさかその子供もアギトだったな  
んテネ これは一大事だヨネエ恐いヨネエ…。』

「『!!…!!』」

そこにウォーターRが現れ、今の話を聞きマナもアギトの力を持っている事を知られてしまった。「一大事」だとか「恐い」とかわざとらしい言葉を出しながら、スライムのように身体を歪ませG4へと近付いて行く…。そして…

『グガアアアツツ!!?!?』

「緋山！！」

「貴様！！何をっ！？」

ゲル状になったウォーターRはG4のボディ全体を包む様に覆い出した。その異様な行動に何のつもりだと尋ねる力オ儿。

『前に言った筈ダヨ…我輩は全身を液体に変える力を持っているッテ…。液体には色々あるんだヨ…。』

「！！『液体』金属…！！」

『ブフフ…！！その通り！！』

「液体」金属に変化したウォーターRは、G4のボディを溶かし液体金属に変えてそれを自身の身体に取り込んでいき、装着者のマコトを追い出した。するとウォーターRは、G4の形をした銀色の液体状の身体に、内部中心にある赤い単眼が特徴のG4システムとアンノウンが融合した特異体「ジーフォーアクア」へと変貌した。

『ブフフ…！！これがアンノウンとG4とやらが融合した我輩の新たな姿…元氣百倍！！力も百倍！！この力で愚かなヒト共を皆殺しにしてやるヨ！！ブフフ…！！』

ジーフォーAはG4システムを取り込んだ影響なのか、アンノウンの禁忌とされた「アギト以外の人間の抹殺」を平然と口にしながら、身体から銀色の身体をした無数のアンノウンを生み出していく。

『ヒトハ…ヒトノママデイイ…！！』



『グルルル…!!』

『ジャアアツツ!!』

「ちえんちえい…。」

「くっ…このままでは…!!」

無数のアンノウンを目の前に危機を感じているカオルとそれに怯え彼にしがみつくな。そこへ…

【ATTACK - RIDE…LASER!】

『ギャアアツツ!!』

『何ダネ!?!』

突如黄色いレーザーが放たれアンノウン達を狙撃した。その人物は  
勿論…

『カオル先生! マナちゃん! 大丈夫ですか!?!』

「煌!! / こっくしゃん!!」

マシンデイルライターに乗ったままライトブッカー・ガンモードを構えたデイルライトだった。

『前は失敗したけど、今度こそアギトを援軍に出す!!』

【FINAL - SHADOW - RIDE : A・A・A・AGITO  
!】

マシンデイルライターから降りたデイルライトは前回のミスを反省しながら、自身の影を太陽の如く熱き赤と、太陽の如く輝く白のボディをした光輝への目覚め、仮面ライダーアギトの最終形態「シャイニングフォーム」にFSRさせた。

「あれはテツヤの……!!煌……お前は一体……!?!」

SアギトSFを目の当たりにしたカオルは、自身の影をテツヤと同じアギトに変化させたデイルライトの能力に感嘆の声を上げていた。

『一気に料理してやる……!』

【FINAL - ATTACK - RIDE : A・A・A・AGITO  
!】

『はああああ……シャイニングクラッシュ……!』

『グギヤアアアアツツツ……!……!』

デイルライトとSアギトSFはライトブッカー・ソードモードとシャイニングカリバーを大きく振るい、黒と白の斬撃波「シャイニングクラッシュ」を放ちアンノウンの軍勢を言葉通り「料理」した。

『ブフフ……中々やるネエ……。ならこちらもお返ししないとネエ……!  
!シエルギガント!全弾発射……!』

『うわああっつ……!……!』

ジーフォーAは右腕をギガントの形に変化させて、無数の銀色の槍  
貝を模したミサイル「シエルギガント」をデイルイトとSアギトS  
Fに放ち爆発を起こしてSアギトSFを破壊し、デイルイトを变身  
解除させた。

「くっ…!!これが…G4システムとアンノウンの能力を合わせた  
力か…!!」

闇影はジーフォーAのG4システムの破壊力とアンノウンの神に近  
い力と言う、全く異なる力同士が合わさった脅威的な力に戦慄して  
いた。

「ちえんちえい!!このままじゃこっくしゃんがあぶない!!あぎ  
とのちからでたしゆけてあげて!!」

「私は…テツヤの命を奪ったアギトの力をこれ以上使いたくない…  
!!ましてや戦う為に…!!」

闇影の危機にマナはカオルにアギトの力で助ける様に頼むが、彼は  
テツヤの命を奪い切欠となったアギトの力を使う事を躊躇っていた。

『ブフフ…ホントヒトつてのは愚かだネエ…。我輩は前から思うん  
だけど、そもそも世界にとって必要無いのはヒトそのものじゃない  
のカイ?』

「なにかつてなこといつてんのよアンタ!!」

ジーフォーAは右腕を元に戻しながら、人間の存在そのものを全否  
定し始めた。それを聞いたマナは、飛び跳ねながら怒り出した。

「だ〜ってそうじゃなイカ…。アギトの力といい、このG4システムとやらといい、あまりに分不相応な力を弱いヒト共が持てば世界が危なくなると思わないカネ？」

「しよつ…！しよれは…！！」

ジーフォーAの言う様に、確かにアギトの力やG4システム等の人知を超えた強大な力は、一步間違えれば世界に悪影響を及ぼしかねない代物だ。現にマコトも不完全とは言え、G4システムのリスクにより自我を破壊寸前にまで追い込まれていたのだから…。

「そんなヒト共が世界を動かしているなんて…笑い話にもならないヨ…。だからこそヒト共は全て根絶やしにして、より良い世界を我輩達アンノウンが築いてあげルヨ！！」

「だからって…人を皆殺しにする権利なんて誰にも無い…！！」

「何だツテ？」

「お前の言う通り、人は強大な力に飲み込まれる程弱い…。だけど、それを乗り越えられる強さも持っている！！」

「ブフフ…ただの綺麗事ダヨ…。」

立ち上がる闇影の言葉をジーフォーAは綺麗事だと言い一蹴する。しかし…闇影は言葉を続ける。

「綺麗事だとしても！異なる力を持つてしまったとしても！人は自分の気持ち次第でそんな運命も変える事を…乗り越える事が出来る

んだっ！！」

「……………」

カオルは無言のまま何を思ったのか、腰に特殊ベルト「アंकポイント」を出現させながら闇影の隣に近付く。同時にライトブッカーから三枚のカードが闇影の手元に飛び出した。

『お前…何者ダネ…？』

「お節介教師な仮面ライダーだ！！宜しく！！変身！」

【KAMEN - RIDER…DELIGHT!】

闇影は何時もの決め台詞を言うと、デイライトドライバーでデイライトに変身した。そして…

「乗り越えて見せる…！！自分の運命を…！！変身！」

カオルが両腕を下にクロスさせると、アंकポイントから光を放ち彼の身体をマフラーを巻いた黒に近い緑色の飛蝗に、常時展開したV字のクロスホーンに赤い複眼と凄まじき形相をした、ライダーと言うより怪人に近い姿をしたこの世界の守護者「アナザーアギト」へと変身させた。

「さて、アンノウンに代わって輝く道へと導きますか！」

『あまり調子に乗るナヨ…！！現れよ、我が同胞達よ…！！』

『グルルル…！！』

『ゲゲゲ…!!』

デイルイトの言葉に勘に触ったジーフォーAは、再び体内から銀色のオクトパスロードとスクイッドロードを生み出し彼等を襲わせた。

『もう一度調理するまでさ!はいっ!やあっ!せいっ!…!』

『ゲガアツツ!!』

『たあっ!せやっ!むんっ!…!』

『ゲガアツツ!!』

デイルイトはライトブッカーで素早くオクトパスRを斬り付けていき、アナザーアギトも目にも止まらぬ速度でパンチとキックをスクイッドRに繰り出した。

『むうううん…!!はあっ!…!』

『『ゲガアアアアツツツ!!…!!』』

二体のアンノウンを背後に追いやると、アナザーアギトは腕をクロスさせながら足元に緑色のアギトの紋章を輝かせると口のクラッシュヤーを開き鋭い歯牙を露出させるとジャンプし、飛び蹴りをする「アサルトキック」でアンノウン達を撃破した。

『おのれ…!!シエルギガント!!』

『『うわああっつ!…!』』

これに怒りを感じたジーフォーAは、シェルギガントをデイライトとアナザーアギトに放ち出した。

『もう一人のアギトもそのオレンジもヒト共も…全て始末してヤル!!』

『そうはいかん…皆が死ぬと治療が出来なくなり私が儲からなくなるから…。』

『ははは…まあ理由は兎も角、人を見下すお前に人が力を乗り越える所を見せてやる!!』

【FINAL - FORM - RIDE : A・A・A・ANOTHER  
- AGITO!】

『カオル先生、力を抜いて下さいよ。ほっ!!』

『何…だあぁっっ!!?』

デイライトがアナザーアギトの背中に手を当てると、アナザーアギトは自身の専用バイク「ダークホッパー」をライダー状にした「アナザーアギトホッパー」へとFFRした。

「アッチヨンプリケ〜!!ちえ、ちえ、ちえ、ちえんちえいがへんけいしちやってゆ〜っっっ!!」

『よっ…と!!行きますよ!!』

デイライトがAホッパーに乗ると、それは突然動き出し低空を滑走

させながらライトブッカー・ガンモードでジーフォーAに連射した。

『グワワワ！！何のつもりか知らないけど…そんな攻撃じゃ我輩は倒せないヨ！！シエルギガント！！』

ジーフォーAは三度シエルギガントを使い、デイルイトとAホッパーを破壊しようとするが…

『よっ！ほっ！はいっ！！』

まるでスケートボードの様に軽快な動きを取り、シエルギガントのミサイルを全て回避した。そして…

『止めと行きますか！！』

【FINAL - ATTACK - RIDE : A・A・A・ANOTHER - AGITO!】

『これで…終わりだあああつつつつ！！！！』

『ギエエエエツツツ！！！！』

デイルイトがFARを発動させると、Aホッパーは一度地に着陸させると飛蝗の様に上空を垂直に飛び上がり、そこからジーフォーAに向けて正面に緑色のアギトの紋章を浮かばせ、周囲に緑色の風を纏いながら超スピードで一直線に滑走し、デイルイトのライトブッカー・ソードモードで一閃するFAR「デイルイトゲイル」でジーフォーAの赤い単眼を斬り裂き大爆破させた…。が…

『あれ？…って！！うわっ！わっ！わっ！わっ！！わあああああつ



つつつ！！！ぎゃべつ！！」

その直後にAホッパーが急にストップしアナザーアギトの姿に戻ってしまった為、デイライトはそのまま勢い良く投げ出され、廃工場近くの電柱に顔面を激突してしまった。

『痛つつ〜！！も…戻るなら戻って言って下さいよおっ！！』

『す、すまん…。』

「えっ…ちえんちえい…いま…なんて…？」

「だから言った通り、アギトの力を持っているなら、お前は今までみたく私と一緒にいて来いと言ったんだ。…嫌か？」

「ううん…！！やったあああつつつ！！！！ちえんちえいといつちよにいられゆ！！」

「良かったねマナちゃん！…それで、これからも旅を？」

「ああ。まだ私達のようにアギトの力を持っている人達がいるからな…その人達が苦しんでいたら助けようと思って…な。だがその前にあの青年を治療してからだがな。」

カオルは、G4システムの影響で意識を失ったマコトの治療を終えてから自分達と同じ力を持ち苦しむ人々を救う為の旅をするようだ。

「そうですか…。貴方達ならば必ず救えますよ！！力を乗り越えた貴

方達なら!!!」

「ふ…お前さんも自分の使命とやらを全うして行けよ。そろそろ行くぞ、マナ!」

「あゝらまんちゅ〜」

「あらあら…今回も宝は手に入らず終いか…。」

「自分の運命を乗り越える…か…。」

G4システムが不意になつてしまい今回も傍観のみだった巡と周は、二人の様子を陰から見ていた。すると周は、「運命を乗り越える」と言う言葉を呟き…

やめて…やめてよ…!!      !!

あんだなんか      !!

「……。」

「周?」

「…ん? いんや、何でもねえ。さして! さつさと次の世界の宝を目

指そつぜー!!」

何かを思い出していた周は、巡の言葉にハツとなり次の世界の宝を目指すと言ってその場を後にした…。

「マナちゃん、カオル先生と一緒に旅が出来て良かったね。」

影魅璃は、満面の笑みを浮かべて走るマナとそれを後ろから小さな笑みを浮かべたカオルが旅をする絵が描かれたキャンバスを見て感激していた。

「ええ。苦難を乗り越えたからこそ絆が強まったんでしょ…。さつ、晩御飯にしましょう!今日は魚介類のバーベキューだよ!!」

「うおほつ!!旨ええつっ!!」

「んん〜 ホント美味しい!!どう、ツルギちゃん?」

「はい…美味しいです…。」

「いや〜良かった!『無料』で手に入った食材だから食費が節約出来て良かった良かった!!」

「「「!!!!?」「」」

闇影の食材が『無料』だと言う言葉を聞き、身を凍らせる三人。

「おい闇影…もしかしてこの食材…!!」

「ん？ああ、丁度戦いが終わった後に何体か蛸や烏賊があったからそれを拾って…」

「「「ぶーーーーっつっつ！！！！」「」」

コウイチの質問に闇影はついべらべらと真相を語り、それを聞いた三人は口に含んだ具を吹き出した。(因みに影魅璃は平然と食べている)そして顔を険しくし…

「闇影エエツツ！！」

「先生エエツツ！！」

「闇影さん…やっぱり貴方を抹殺します！！」

「ちょ、ちょっと待ってよ。三人共顔が怖い…ってうわあああつっ！！」

「とんでもない事」をやらかした闇影は黒深子・コウイチ・ツルギに追い回されていく。すると、次の世界を表すキャンバスには山の背景の真ん中に全身真っ黒の鍬形の戦士が立っている絵が描かれた。しかし、その戦士は点滅するかの様に消えたり現れたりしていた。

「最後は…クウガの世界か…ぎゃべっ！！？」

闇影は次の、最後の世界を確認した直後に、コウイチ達からの制裁を受けて地に沈んでいった…。次回、仮面ライダーディライト！

遂に訪れた最後の影の世界、「クウガの世界」…。そこで闇影達が出会ったクウガは…

「ミ…ミホ…!!?」

コウイチのいた「リュウガの世界」で命を散らしたミホと瓜二つだった…。

「オレに構うな…。」

「デイルイトから身を引け…!!さもなければお前も死ぬぞ…!!」

「いい加減にして!!先生は死神じゃないって言ってるでしょ!!あんまり先生を悪く言つと…殺すわよ…!!?」

「どういう事だ…!!グロンギ同士が殺し合ってる…!!」

グロンギ同士が殺し合う謎のゲゲル…その目的とは…?

「この世界はもう手遅れなの…だからそうなる前に貴女のクウガの力を頂くわ!!」

『ド派手に超ダイナミック!!どんな世界だろうが、こっからは全部俺の時間だぜっ!!』

巡達の言う「手遅れ」とは…?

「デイルイトめ…!!この世界のクウガを焼き尽くしてしまうとは…!!」

そして、紅蓮の言葉の意味とは…？

次回、『崩壊せし黒きクウガ』

全ての闇を、光へ導け！

第18導 乗り越える！その力！（後書き）

カオル「とうとう次で最後の世界になるんだな…。」

マナ「ちやいごはたしか『くうがのちえかい』らんだよね？」

ああ、そうだ。

カオル「普通はクウガをトップバッターにするんだがお前の場合は逆なんだな。」

そう言うなよ…それにこの世界で俺はもしかしたらやって良いようにやってはならん事を書くから悩んだ末に最後に回したんだ。

マナ「ふうん。ところでちゆぎでほかのさくしゃしゃんのきゃらくたーをだしゆらしいけど、いいの？かってにかいて。」

大分前に許可貰ってるから大丈夫だ。尤も、覚えててくれるか微妙だけだな…。

カオル「なら書かない方が良くないんじゃないか？」

ほっとけ！名前は出さないけどとあるお方！！次の話でそちらのキャラクターを出しますので是非暇潰しに読んでいって下さいませ！！

マナ「じゅっじゅっしい…。」

うるせえええっつ（T|T）ともかくにも次回が最後のダーククライダーの世界なので皆様、何卒宜しくお願い致します！！

## 第19導 崩壊せし黒きクウガ（前書き）

最初に言っておく！今回は次回予告をしない！！

闇影「え？何で？」

諸事情によりだ。

黒深子「大した事情じゃ無い癖に…。」

コウイチ「ホントにな…。さて読者の皆さん！いよいよダーククライダー編最後の『クウガの世界』が始まるぜ！！」

ツルギ「あと、このお話でトマトさんの『仮面ライダーデイケイド Return』からあるキャラクターが登場致します…。トマトさん、もしこれに何か御指摘がありましたら遠慮無く説教してあげてください。」

??「こんな駄文を読む程読者は暇じゃないぞ…。」

お、お前は…！？オホン！では、どうぞ…！！



## 第19導 崩壊せし黒きクウガ

お休処・煌星（きらめきぼし）

「何でこの絵のクウガが消えたり現れたりしてるんだろ…?」

闇影は真剣な顔付きで、この「アメイジングクウガの世界」を表わすキャンバスの絵の黒いクウガが点滅するかの如く、現れたり消えたりすると言う奇妙な現象を見て考え込んでいる。

「その格好で考え込んでもあまり説得力が無いよ先生。」

「…ん?そうか?」

「「ああ。／はい。」」

黒深子のツツコミに反応する闇影に、コウイチとツルギも同時に頷く。何故なら闇影が白い登山用の帽子に緑茶色の登山用ジャケットに茶色の登山靴、そして背負ってある大きなリュックサックと「登山家」の格好をしているからだだった。

「まあそれは兎も角、登山がてらにクウガを探すよ。」

「お前って奴は…。」

と、格好をさらっと流し登山しながらクウガを探すと言う闇影の呑気な言葉に頭を頂垂れ呆れるコウイチ。そこに一人の女性客が入って来た。

「はい、いらっしやい。」

「これ売ってくれ。」

「はいどうぞ。ありがとうございます…あら、貴女は…?」

商品を渡し客の顔を見た影魅璃は、その客に見覚えがあるかの様な反応をした。それを裏迄聞こえた闇影達が様子を伺い、店の表に現れた。

「どうしたんですか?影魅璃さ…えっ…!?!?」

「お母さん、何かあった…の…!?!?」

「う…嘘だろ…!?!?あんたは…!?!?」

闇影・黒深子・コウイチの三人がその女性客を見ると、信じられないと言わんばかりに驚いた表情をした。それもその筈、その客が…

「「ミホさん?!?!?!?」」

「「ミホ…!?!?!?」」

白いキャップ帽を被った茶髪のポニーテールに鋭いツリ目が特徴の、コウイチのいた「リュウガの世界」でこの世を去った羽鳥ミホ/仮面ライダーファムに瓜二つだからである…。

「…ん?」

「…誰ですか？」

世界の光導者、デイルイト！9つの影の世界を巡り、その瞳は、何を照らす？「誰かと間違ってるねえか？オレの名前は才牙（さいが）ソラ。ミホじゃねえよ。」

「え…ミホじゃない…？あつ！良く見たら前髪に黒いメッシュがある…！！」

ミホと瓜二つの登山家・ソラの名前を聞きコウイチは、ミホには無かった前髪の黒いメッシュや言葉遣いで、他人の空似だと言う事に気付く。

「違ってるって解ったか？そろそろ店出たいんだけどなオレ。じゃあな。」

他人の空似だと理解されたと分かったソラは時間を少し取られた為か、顔を少ししかめながら買った商品をリュックの中に入れて店を後にした。

「……………」

「ちょっと違う部分があったけど、それ以外は全部ミホさんだったよね…？」

「うん…顔だけじゃなく声まで一緒だったわね…。」

「あの…そのミホさんってコウイチさんのお知り合いですか？」

闇影と黒深子がソラの外見について話していると、ツルギがミホの事について尋ねて来た。

「ああそっか、ツルギちゃんは知らないんだったね。ミホさんって人はね…」

闇影は、事情を知らないツルギにミホの事を話した。

彼女はコウイチと同じ「リュウガの世界」の住人であり、行方不明になった当時仮面ライダー龍騎だったコウイチを捜す為「ライダーロワイアル」に参加し仮面ライダーファムとなった。その最中に闇影達に出会い、コウイチとも再会出来たのだが、龍騎の肉体を乗っ取ったスフィアミラージユにより若くしてその生涯を閉ざされてしまった事を…。

「そんな事があつたんですか…。」

「ミホさんは私と先生にとっても忘れられない人だったからね…。」

「コウイチを除けば最初に会ったライダーだったからね…。」

闇影と黒深子の言う様に、ミホはコウイチ…リュウガを除けば二人が「最初に出会ったライダー」である為、彼等にとっても印象に残る人物であり、それ故ソラはミホを強く思い出させる存在であるのだ。すると…

「……っ!」

「コウイチ、何処行くんだ?」

「俺、ちよつと行つて来る!!」

「えっ!?!ちよつと待て!コウイチ!!」

暫く呆然と立っていたコウイチは闇影の制止を余所に、突然駆け出して店を後にした。おそらくあのソラという女性を追いかけに出たのだろう。

「やっぱり、さっきの人が気になってたのよね…。」

「ああ…。」

「よつ、そこのお姉さん リュック重たいでしょ?俺が持つてやるよ。」

「結構だ。それにオレは今まで何度も山登りしてるから平気だ。」

「んな冷たい事言つなつて。俺等も君と同じ登山家の仲間じゃないか? んで一緒に頂上に着いたら『絶頂に登る』気分…」

二人の若い登山家の男達が、登山中のソラに馴れ馴れしい口調や態度で接する、所謂軟派をしてきた。そして男の一人がソラの肩に手をやり、下まで滑る様に身体をなぞり尻を撫でながら下心を丸出しにしている…

「…ふんっ!!」

「イギヤアアツツ!!!!?」

当然不快感を感じたソラは、その男の股間に力一杯怒りの蹴りを入れた。大声を上げて倒れた男は、激痛が走る「急所」を押さえながら情けない表情で悶絶していた。

「こ、このアマ…！！優しくしてりゃ付け上がりやがっ…！！」

もう一人の男は、その行動に激昂してソラを無理矢理襲おうとしたが…

「せいっ！！」

彼女は突然、近くの太い大木に拳を叩き込むと大木は叩き込まれた部分からポツキリ折れ、ドスンと大きな音を立てて倒れた。

「て…ヒイツツ!？」

「オレをどんな気分にするんだって？」

「すっ！！すみませんっしたああっ！！」

目以外満面の笑みを浮かべるソラに、男達は彼女の超人的な強さに戦き土下座をしながら蛙の様に跳び跳ねて謝罪しつつ逃げて行った。

「ったく…！あんな奴等も登山家だと思つと情けな…「おっいつ！  
！」つてまた…！！」

今の男達に憤っていた時、コウイチが後ろから自分を追つて走つて来た。しかし、今最悪のタイミングである事を彼は知らなかった…。

「…しつこいんだっ…よおっ…！」

「グイギヤアアアアツツツツ！！！！？」

先程の男達が戻って来たのだと思い、ソラはさつき以上の怒りを籠めてコウイチの「急所」に蹴りを入れた。当然そんな事を知る由も無い彼は、その激痛に悶絶し倒れる運命に遭ったのだった…。

「す、すまない…。てつきりさつきの奴等かと思っついで…」

「つつ、使い物にならなくなったらどうするんですか〜！！（この、思い込んだら直ぐ行動に移す所まで似てるとはなあ…。）」

勘違いで股間を蹴られ涙目で「急所」を擦るコウイチに謝罪するソラ。コウイチは、この猪突猛進な性格までミホに似ていると心中呟いていた。

「んで、オレに何か用か？言っとくが万引きなんてしてねえからな。」

「ああいや、そんなんじゃなくて…！！ちよつとあんたが俺の知り合いに似てるから…：：：気になるっ？か何っ？か…：：：ね…。／／／」

ソラに何の用事かを尋ねられたコウイチは、頭を掻きながらミホに似ていて気になる、と少し照れながら言い淀んでいた。しかし…

「悪いが軟派だったらお断りだ。じゃあな。」

「あつ！！待ってくれ！！」

コウイチの言葉が軟派だと思ったソラは、素っ気ない態度でその場を離れた。それに手を伸ばし待つように呼び止めるコウイチに…

「…後一つだけ…二度とオレなんかに構うな…。」

「…えっ…？それってどういう…っておゝい！！待ってくれって…！！」

ソラの「自分なんかに構うな」という忠告に「？」のマークを浮かべるコウイチは、そのまま無言で去って行く彼女を再び追って行った。

一方闇影達は、クウガの情報収集の為麓街に向かうべく山を降りていた。

「コウイチの事も気になるけど、俺達の目的はクウガに会う事だ。まずは麓まで降りてみよう。」

「ねえ…良いの先生？コウイチの事放っておいて。」

「ん？ああ、良いんじゃないか？あいつがそうしたいならあいつの思う様に動いたら良いさ。」

「そんな無責任な…。」



黒深子はコウイチの行動について闇影に尋ねるが、本人の自由に動けばいいと言う。ツルギの指摘する様に些か無責任な発言をしているが…

「…あいつはずっと気にしてるのかもしれないな…ミホさんを守れなかった事を…。だからあのソラさんって人を見て、居ても立ってもいられなかったんだろうね…。」

「「……。」」

闇影は、コウイチがソラの事を気にかけていたのは単にミホに似ているだけでは無く、スフィアミラージュから彼女を守りきれなかった事を悔いていた為だと、哀しげな表情で語った。それを聞き目を伏せる黒深子とツルギ。その時…

『オオオツツ！！』『』

『『ゲエアアアツツ！！』『』

「「「！！！！？」」「」」

黒い全身にボロボロの布を巻いた唸り声を上げる異形の四人は、自身の爪や持っている武器で互いに争っていた。

「先生！あれって確か、グロンギ…だよな？」

「うん…グロンギに間違い無いんだけど…」

黒深子が指摘する様に、あの四人…否、四体の異形はこの世界の怪人「グロンギ」なのだが、闇影は何故か眉をひそめていた。

「どういう事だ…！？グロンギ同士が殺し合ってる…！！まさかこれが『ゲゲル』のルールなのか…？」

ゲゲル、それはグロンギ達が自分の階級を上げる為に「定めた期間内に設定した数の人間を殺害する」と言う、一種の殺人ゲームである。しかし、彼等は何故か味方同士で殺し合っている為、闇影はそれを疑問に感じていた。

『ガギツサパバギロボザ？（あいつ等は何者だ？）』

『ゲゲルゾリサセダ…ボゾザベダ！！（ゲゲルを見られた…殺さねば…！）』

グロンギ達は闇影達の存在に気付き、自分達のゲゲルを見られてしまい口封じに始末するべく彼等に襲い掛かってきた。

「俺達が危ないかもしれない…。変身！」

【KAMEN - RIDE… DELIGHT!】

闇影はグロンギ達の言葉が自分達を襲う物だと悟り、デイライトに変身した。

「私も行きます…！変身！」

【HENSHIN!】

ツルギも戦うべく、何処からかサソードゼクターを呼び出しサソードバイバーにセットしサソード・マスクドフォームに変身した。

『黒深子は安全な所に!!! ツルギちゃん、半分は任せるよ!』

『分かりました!』

『さて、新しい力を使ってみますか!』

【SHADOW - RIDE : ANOTHER - AGITO!】

デイライトは黒深子に安全な場所に行く様に、ツルギには二体のグロンギを任す様に指示すると自身の影をアナザーアギトにシャドウライドさせた。

『バギ!? コセザクウガバ!? (何!? それはクウガか!?)』

『またガギゴギ言って…。行くぞ!!! ふっ! たあっ! はいっ!!!』

『グオツ!?!』

Sアナザーアギトをクウガだと思い込むグロンギ達を尻目に、デイライトは彼(?)と共に強力なパンチとキックを繰り出した。

『やっ! はっ! せいっ!?!』

『グウツ…!!』

『チヨグギギボスバ!!! (調子に乗るな!!!)』

一方サソードMFは、サソードヤイバーでグロンギ達を斬り付けて背後まで追いやった。しかしそれに怒ったグロンギの一体が持つて

いる武器で彼女を攻撃しようと突撃したが…

『キャストオフ！』

【CAST - OFF!】

『『グアアアツツ！！』』

【CHANGE - SCORPION!】

サソードゼクターを操作してキャストオフをし、弾き飛ばしたアーマーを直撃させてライダーフォームとなった。

『クロックデュアル！』

【CLOCK - UP!】

サソードはクロックデュアルを発動し、超スピードでグロンギ達に近付き、そして…

『ライダースラッシュ…！！はあっ…！！』

【RIDER - SLASH!】

『『グアアアアツツツツ！！！！』』

その速度のままダッシュしながらライダースラッシュを発動しグロンギ二体を一気に斬り裂いた。サソードがクロックアップ空間から出た直後、グロンギ達は斜めに斬れて黒い煙を上げ、爆発した。

『俺も止めと行きますか!』

【FINAL - ATTACK - RIDE : A・A・A・ANOTHER - AGITO!】

『はあああ…はあっつ!』

『『グガアアアアアツツツ!!!』』

デイトも止めを刺すべくFARを発動し、Sアナザーアギトと共に緑と黒のアギトの紋章を足元に出してジャンプをし「アサルトリック」を叩き付け、残りの二体を爆発させた。

「ふう…何とか終わりましたね…。」

「うん…でも何で Grongi 達は、味方同士で殺し合ってたんだろう…?」

戦いが終わり変身を解除した二人。しかし闇影は、未だに先程の Grongi 達のゲゲルの内容について腑に落ちないでいた。

「ともかく、早くクウガの情報を集めに行こ…!! えっ!？」

黒深子が闇影とツルギの下へ近付こうとした時、灰色のオーロラが彼女を包み込み別の空間へと移動させた。

「また此処…? って事は…!!」

黒深子はこの全ての時間が止まった空間に連れられた事がある為、誰が此処に移動させたか見当が付いていた。その人物とは…

「白石黒深子…もう一度だけ言う、デイルイトから身を引け…!!  
さもなければお前も死ぬぞ…!!」

「紅蓮さん…どういう事なの!? どうして先生の邪魔ばかりするの!?」

予想通り紅蓮の仕業だった。そして再度闇影から離れる様言い出した。しかし黒深子は、逆に何故何度も闇影の邪魔をするのかを尋ねた。

「お前も見ただろう? この世界のグロンギが殺し合っている光景を。本来はこの様な事は決して有り得ない…。それだけじゃない、今までの本来起こり得ない現象がデイルイトが辿った世界で起きていた。これらは全て奴が現れたせいなんだ。だから…::して…?」

紅蓮は先程の異質なゲゲルの原因や、今までの世界で起きた変わった現象が闇影が現れたせいだと淡々と語る。再三彼から手を引く様言う紅蓮の言葉に黒深子は…

「いい加減にして!! だからって何で全部先生のせいなの!? 仮にそれが本当だとしても先生はそれを全部救って来た!! これ以上先生を死神だとか灰塵者とか悪く言うとは…!!」

激昂し、今まで闇影はそれらの世界の異常を全て救って来たのだと声を荒げて訴え、目を灰色にし顔にオルフェノクの紋章を浮かばせ…

『…殺すわよ…!?!』

スワンオルフェノクに変化し、細剣を紅蓮の首に突き付けて「殺す」と恫喝した。

「…ならば勝手に信じるがいい…死んで後悔する時まで…な…。」

『まっ、待ちなさいよっ!!』

尚も氷の様に冷たい表情の紅蓮は、スワン〇の説得を諦め出現した灰色のオーロラを潜りその場から消えて行った。そしてスワン〇もそれに包み込まれていった。

「…こ…!!深子…!!…黒深子!!」

「はっ!?せ、先生…ツルギちゃん…。」

黒深子が気が付くと、自分の肩を必死に揺さぶる闇影とツルギの姿が眼前にあった。いつの間にかあの空間から脱出していたのだ。

「大丈夫ですか?」

「はあ…。急に意識が飛んだ様に寝ちゃったからびっくりしたよ…。」

「(えっ…?私また眠って…!?)う、ううん!?大丈夫。ごめんなさい、びっくりさせて。さっ、早く麓まで降りよ?。」

二人に心配をかけた事を謝った黒深子は、今の事は話さず麓に降り

るべく先頭を歩いた。

「（先生は死神でも、灰塵者でもない…！！私、先生の事信じる…！！）」

一方コウイチは、ソラをしつこく追っていたのだが途中で見失ってしまい軽く迷子になってしまっていた。

「くそっ…見失っちゃったなあ…。ん？あれは…？」

「……」

コウイチが見た物、それは近くに滝がある川原で水浴びをしているソラだった。しかも一糸纏わぬ姿で…。

「（うおおおっつっつ！！！？まさかのラッキータイム発動！！！凄え良い身体してんなあ…／／／）」

と、物陰からソラの山登りで鍛えられたスタイルの良い肢体をエロい目でこそそ見るコウイチ。しかし、そんな愚か者に今天罰が下る…。

「ん？うわあああっつ！！雀蜂だっ！！って…うわっわっわ…！！ああああああっつっつ！！！！」

コウイチの眼前に一匹のザビー…ではなく雀蜂が飛び交いそれに驚き仰け反ると、土に突起した石につまづきそのまま倒れて川原まで転がっていった。



「痛つつ…ん？これは…？…！！」

倒れたコウイチは何故か女性物の下着を握っており、それと同時に背後からただならぬ殺気を感じ、恐る恐る振り向くと…

「何をしているのかな？」

一糸纏わぬ姿で満面の笑みを浮かべながら仁王立ちをしたソラがいた。片手に大岩を持った状態で…。この事態にコウイチは…

「あつ、いや！これはその…洗濯サービスです」

「んなサービスなんて……いるかあああつつつ！！！！」

「ま！待てっ！！話せば分かつ…！！グワギヤアアアアツツツ！！！！！！」

当然そんな言い訳が通じる筈も無く、持っていた大岩を不屈き者（コウイチ）に容赦無く降り降ろした。さらばコウイチよ、南無…。

「生きとるわっ！！」

「全くしつこい奴だな…お前。」

「ずびばせん…。」

惜しくも生きていたコウイチは事情を説明するも、覗きの罰として

夕飯のカレーを作らされ顔に包帯を巻きミイラのような状態でそれを一緒に食べ現在に至る。

「んん？このカレー美味しいじゃねえか！」

「そつか！そりゃ光栄。」

ソラはコウイチの作ったカレーが美味しいと正直に褒め、コウイチもそれが嬉しく笑顔で返した。

「なあ…昼間言ってたあれ、『オレになんか構うな』ってどういう意味だ？」

「ん？そりゃ、お前の様な変態に近付くなって意味で…」

「いやそうじゃなくて、何で『オレなんか』って言ったんだよ？」

コウイチは、ソラの「自分なんかに構うな」と言う、何処か彼女自身を自虐的に扱った言葉が気になり尋ねた。するとソラは、少し間を置いて口を開いた…。

「もし…もし自分が他人と違う存在だったら…お前はどつする…？」

「…えっ…？」

急に悲しげな表情で語り掛けるソラの言葉に、コウイチは目を見開いた。

「いや…何でもない！！忘れてくれ。それより、お前の話を聞かせてくれ。お前の旅の話や、そのミホって人の話を…。」

「お、おう…いいぜ。」

今の話を忘れる様言ったソラは、コウイチにこれまでの旅の話や、ミホの話をするよう頼んだ。コウイチはそれに応え笑顔で語り出した。それを聞き、笑みを浮かべるソラ。そんな他愛無い楽しい会話は延々と夜まで続いた…。

コウイチ…お前は…生きる…！自分の夢を…本当に叶えたい夢の為に生きるんだ！

私の為…に戦っていたんだな…ありがとう…。

ミ…ミホオオオツツツツ…！！！！

「…はっ！！夢か…。何で今更あの夢を…。」

コウイチは「あの日」の夢から目を覚まし、寝汗を拭い溜め息をついた。「ミホを守れなかったあの日」の夢を…。

「…って、もう朝になったのかよ…。ってあれ？ソラは…？」

今の時間が朝だと気付いたコウイチは、辺りを見渡すとソラが近くに建てていた筈のテントと彼女の姿がそこに無かった。

「…！！しまった！！どうりでやけに大人しかった訳だ！！」

ソラの行動にしてやられたコウイチは、慌てて彼女を探しに走り出した。

「ふう… ちょっと気が引けるが何とかあいつから撒いたぜ…。」

コウイチから身を離す事に成功したソラは、急ぎ足で山を降りようとした。若干罪悪感を感じるが…。

「…オレみたいな奴に彼処まで構う奴はあいつが初めてだったな…。」

少し苦笑いをし、旅の話をした時のコウイチの笑顔を思い出し口が少し綻んでいたその時…

「…!! 誰だっ!!！」

「あら、気付かれちゃったわね。」

「そう恐い顔をしなさんなって。美人が台無しだぜ?」

「ソラ…!! やっと見つけ…巡さんに戴問さん!? 何であんた等が此処に?」

何らかの気配を感じたソラが険しい顔付きで叫ぶと、木の陰から巡と周が現れた。そこへコウイチも追い付いた。

「あら、コウイチ君もいたのね。それはそうと…単刀直入に言うわ。」

貴女の力を私達に差し出して。…クウガの力を。」

「…!!ソラが…クウガ…!!?」

巡達の目的、それはソラの持つクウガの力である。彼女をクウガだと言う巡の言葉にコウイチは驚きを隠せないでいた…。

「心配しなさんな。このカードで力を抜き取るだけで命までは取らねえよ。」

「何処で嗅ぎ付けた知らねえけど、『はいそうですか』と言って渡す程…人間出来ちゃいねえんだよっ!!!」

ステイルライドのカードをちらつかせて軽口を叩く周に激昂したソラは、腰を中心に黒い「霊石アマダム」が埋め込まれた特殊ベルト「アークル」を出現させ、変身ポーズを取り…

「変身!」

アークルの両サイドに手を当てると、ソラは両足両手首に金色の装飾品「マイティアンクレット」が装備された黒い鎧とスーツに包まれた、鍬形のような金色の角をした黒い複眼の戦士「仮面ライダークウガ アメイジングマイティ」に変身した。

「本当に…クウガだったのか…!!!」

「やれやれ…女性相手に力づくつてのは気が引けるんだけどな…。」

「この世界はもう手遅れなの…だからそうなる前に貴女のクウガの力を頂くわ!!!」

「手遅れ…?」

「変身!」

【KAMEN - RIDE... DISHIRF!】

【KAMEN - RIDE... DISTEAL!】

巡の「この世界が手遅れ」と言う言葉が気になるコウイチを余所に、二人はデイスリーフとデイスティールに変身した。

『ここは鍬形バトルと行きましょ』

【KAMEN - RIDE... GATTACK!】

デイスリーフはアクウガに対抗する為か、赤い複眼をした青い鍬形の戦士、戦いの神こと「仮面ライダーガタック ライダーフォーム」にカメンライドし…

『スペシャルカードだぜ!』

【KAIZIN - RIDE... GIGATROSS!】

デイスティールは「スペシャルカード」と称して、ややスリムな赤い鍬形の姿と髑髏を可愛くした様な顔付きの、赤のクウガ「マイティフォーム」をイメージしたイマジン「ギガタロス」を召喚した。

『あぁんっ!? 何処だよ此処!? 何で俺こんな所にいんだよっ!?』

『（この光景どっかで見た事あるんですけど！？）』

突然見知らぬ世界に呼び出されたギガタロスは、苛つきながら地団駄を踏んでいた。デイスティールはこの光景を見て、嘗て「ネガ電王の世界」で呼び出したイマジン・モモタロスの姿がダブって見えた。

『はあ…いいからさっさと行けアゴタロス。』

『誰がアゴタロスだっ！！俺様の名前はギ！タ！ロ！ス！！わざとらしく間違えんじゃねえっ！！大体何気安く指図して…』後でクッキーやるから。』相手はアイツか！！』

『（こいつあの馬鹿（モモタロス）と同類確定だな…。）』

明らかにわざとらしい間違えた呼び方をされデイスティールに掴み掛かるアゴタロス、もといギガタロスだが、彼の言葉に釣られあっさりAクウガの方へと向かった。それを見たデイスティールはモモタロスと同レベルだと確信した。

『忘れモンだ。ほらっ！！』

『…っど！！コレコレ！！コレが無えと始まんねえからな！！行くぜ…大！変！身！！』

【G I G A - F O R M !】

ギガタロスは受け取ったデンオウベルトを巻き付け四つのボタンを上から順に押し四つの警告音が混じったメロディを流し、ライダーパスをセタツチすると、両肩がロッド、胴体がアックス、背後にガ

ンのアーマーが装着した、電仮面がソードからガンのそれが上から押し潰した様な物の両サイドに赤い鋸形の様な角を生やした奇妙なフォーム「仮面ライダー電王 ギガフォーム」へと大変身を遂げた。

『ド派手に超ダイナミック！！どんな世界だろうと、こっからは全部俺の時間だぜえっ！！』

ギガフォームと化した電王（以下ギガ電王）は、ソードフォームの「俺、参上！」に似たポーズを取りながら決め台詞を叫んだ。

『長い御託は良い…全部ぶっ飛ばしてやるっ！！』

『へっ！今にんな大口叩けなくしてやるぜっ！！行くぜええっつ！！』

『血の気が多い子ね…。こっちも行くわよ！』

『ふっ！おっと！当たんねえよ、んな単調な攻撃…おらっ！！』

ギガ電王はデンガツシャー・ソードモードを、Dガタツクはディシードライバーを構えてアクウガに向かって行った。ギガ電王はデンガツシャーをがむしゃらに振りまくるが、アクウガはそれを上手にかわしパンチやキックを繰り返した。

『グオオツ！？』

『中々やるわね…でも素手じゃあ敵しいんじゃない？せええいつ！！』

『うめめあっつ…！！』



ギガ電王を背後まで吹っ飛ばしたが、Dガタツクにドライバーで斬り付けられからキックを受けて同じく背後まで吹っ飛ばされるAクウガ。

『くそっ…!! 確かに素手はキツイよな…だったら…超変身!』

武器を持つ敵に素手では不利だと感じたAクウガは、地面にある木の棒を掴み身体から黒いエネルギーをスパークさせ、それを青い棒の武器「ライジングドラゴンロッド」に変化させ、青い複眼の「アメイジングドラゴン」へとフォームチェンジした。

『これなら…どうだああっ!!』

『クソがあ…倍返しだああっ!!』

ギガ電王は吹っ飛ばされた事に腹を立て、デンガツシャーをロッドモードに組み換えてグルグル振り回しながらAクウガの下まで走り出した。

『オラオラオラオラアアツツ!!』

『勢いは良いが…スピードなら…!! ふっ! やっ! はっ! せいや!』

『ガッ! ギッ! ゲッ! ゲッ! ゴオツツ!?!』

『きゃあああっつ!!』

だがスピードに長けるADクウガは、ギガ電王の腹にロッドを連続

で打ち突け、Dガタツクもろともそれを横に勢い良く振り回し、吹き飛ばした。

『くっ…！スピードならこっちも負けてないわよ！』

【ATTACK・RIDE…CLOCK・UP！】

『うあああっつ…！』

Dガタツクはカードを使い、クロックアップの連続ダッシュ攻撃でADクウガを翻弄した。

『だったら超感覚で行くぜっ！超変身！』

ADクウガはクロックアップの対抗手段に、Rドラゴンロッドを緑のボウガン「ライジングペガサスポウガン」に変化させ、緑の複眼の「アメイジングペガサス」に超変身し、感覚を研ぎ澄ました。

『…見えた…！そこだあっ…！』

『きゃあああっつ…！』

『巡ちゃん…！』

APクウガは超感覚でDガタツクの居場所を特定し、ボウガンの一撃を見舞った。

『ペガサスは時間が短いからさっさと変わる！超変身！』

アメイジングペガサスは四フォーム中一番変身時間が短い為、AP

クウガは即座にRペガサスボウガンを紫の大剣「ライジングタイタンソード」に変化させ紫の複眼の「アメイジングタイタン」に超変身した。

『コロコロ変わりやがって…だあああっつ…!!』

Aクウガの連続フォームチェンジに苛立つギガ電王はデンガツシャ―をアックスモードに変形させて走り出し、ATクウガのRタイタンソードと斬り結んだ。

『くっ…!!』

『…お前、何の為に戦ってた…?』

『…何っ!?!』

ギガ電王はATクウガに何故戦っているのかを尋ね出した。突然の敵からの質問に驚くATクウガ。

『俺の「知ってる馬鹿」に「誰かの笑顔の為に戦う」って言う奴がいてよお…そいつはその為だけに馬鹿みたいに真っ直ぐな奴なんだよ…。』

『それがオレに何の関係が…!!』

ギガ電王は「自身の知り合い」の話語り出すが、ATクウガは斬り結びを止めて距離を取った。だが彼の話はまだ続く。

『お前を見てつと何っ…か、どっかただ敵をぶっ倒す為だけに戦ってるみてえに見えんだよ…。んな戦いの理由を持たねえ奴が物騒な

力持ってんのが危なっかしいんだよ!!」

ギガ電王の言いたい事、それはATクウガが明確な理由を持たず、ただ自分にとっての敵が憎いから戦っている様に見えるとの事である。

「それが何だっ!!お前なんかオレの何が分かんたよっ!!?こうなったらこれで一気に片付けてやるっ!!はああああっつっつっ!!」

しかしATクウガは、ギガ電王の言葉を腕をはらって一蹴し元のアメイジングマイティに戻り、凄まじいエネルギーをほど走らせながら右腕を斜めに構えた。周囲に黒いオーラを発生させながら…。

「まさかあれは、「究極の闇」に…!!?マズイわ!!早くケリを付けないと…!!」

Aクウガの行動、それは今の力の十倍、いや本来の力にあたる「究極の闇」の異名を持った形態（フォーム）「アルティメットフォーム」に変化しようとしている。それに気付いたDガタツクは不都合なのか、そうはさせじと彼女に向かって走り出した。が…

「変身!」

【SWORD - VENT】

コウイチはリュウガに変身し、直ぐ様ドラグバイザーにカードをベントインしドラグセイバーを召喚し、Aクウガの前に立ち、Dガタツクのドライバーの攻撃を防いだ。

『邪魔しないでコウイチ君！早く彼女を止めないと危険だわ！！』

『どうかな…俺からしたらろくに事情を説明せず力を寄越せと云って襲ってくるあんた等の方が危険なだけだな…！！』

【ATTACK・RIDE…LASER！】

『うわああっつ…！！』

『巡ちゃんの…いや、俺様達の邪魔をしてんじゃねえよ！！ギガタロス！』

Dガタツクの邪魔をされた事に腹が立ったデイスティールは、デイスティールレーザーをリユウガに放った。そしてギガ電王に彼をも倒す様指示をした。

『俺に命令してんじゃねえよ！！言われなくてもさっさとド派手に決めるトコなんだからよおっ…！！』

【FULL・CHARGE！】

【FULL・CHARGE！】

【FULL・CHARGE！】

ギガ電王は一度で良いものを、ベルトにパスを三回セタツチしフルチャージをした。これがド派手を好む彼のやり方である。そして、フリーエネルギーを籠めたデンガツシャーを持ったままハイジャンプし、一刀両断をする「ダイナミックチョップ」を繰り出そうとした。

『超必殺！！ド派手チヨオツツプツ！！』

『止めるおおっつー！！』

と、必殺技の名前にまで「ド派手」を付けアルティメットフォームになるうとするAクウガに攻撃を仕掛けるギガ電王。しかしこの時誰も予想がつかない事態が起きた…。『！！なっ！！何だっ！？アマダムに罅が…！？』

アークルの中心にあるアマダムが、突然罅が入り出した。そして…

『『『『！！！！！！？』』』』

『う、嘘だろっ…！？アークルが壊れるなんて…！？』

リュウガの言う様に、アマダムが割れてアークルにも罅が入り完全に砕ける様に壊れてしまったのだ…。そしてそのまま変身が解除された。

「だっ…駄目…！！こ、こ、こ…壊れちまつたらオレは…オレは…！！」

『！！危ない！！ソラッ！！』

リュウガが叫ぶと、ギガ電王がソラの真上から攻撃を仕掛けて来るが、もう回避不可能な所まで接近してきた上に、動揺している為声が届いていなかった。絶体絶命の時、彼女に異変が…！！「ウオアアアアツツツ！！！！！！」



お休み処・煌星

「あら？クウガさんの絵が消えちゃった…？」

この世界を表すキャンバスの絵のAクウガは、影魅璃の言う様に消えて無くなってしまった。

「おのれデイルイトめ…！！この世界のクウガを焼き尽くしてしま  
うとは…！！」

上空から彼等を見下ろす紅蓮は歯軋りをして闇影を睨み付け罵倒し  
た。

Dガタツクの言う「ハーフグロンギ」とは！？そして壊れてしまっ  
たクウガの力は！？果たして闇影達は、この世界の危機をどう光へ  
導くのか！？



## 第19導 崩壊せし黒きクウガ（後書き）

闇影「おい作者！…どういう事だよこれ！？何で救う筈のクウガの  
アークルを破壊したんだよ！？」

ZZZZ…。

【KAMEN - RIDE… DELIGHT!】

【FINAL - ATTACK - RIDE… DE・DE・DE・DE・  
LIGHT!】

デイルイト『寝て誤魔化すなあああつつつ！…！！（ディメン  
ジョンプロミネンスを放つ）』

ギイヤアアアツツツ！！！！（作者消滅）

黒深子「一体どうなってしまうの…！？」

コウイチ「ソラ…。」

??「何だコウイチ！そんな面をするんじゃない！！」

コウイチ「！！ミ、ミホ…！！？」

ミホ「馬鹿作者が今回限り復活させたそうだ。読者の皆、久しぶり  
…一部の奴は始めまして。仮面ライダーファムこと羽鳥ミホだ。そ  
んな事よりコウイチ、私に似た奴があんな目に遭っててお前はそ  
のまま落ち込んでいるつもりか？」

コウイチ「んな訳あるかつ！！ソラの闇は…俺が光へ導いてやる！！」

ミホ「そつだ、その意気だ！！お前の活躍は…遠くからずつと見守っているからな…頑張れよ、コウイチ。」

コウイチ「ミ、ミホ…！！（目から涙を流す）」

ミホ「あつそつだ、忘れていた…フンツ！！（ヘッドロックをかける）」

コウイチ「グオアアアアアツツツ！！！！な！なんどえヘッドロックをおおおつつつ！！！！？」

ミホ「ソラの水浴びを覗いたからだっ！！その罰を私も与えてやろうと思つてな。」

コウイチ「グオアアアアアツツツ！！！！（死亡）」

黒深子「やつぱりコウイチはコウイチなのね…。」

ツルギ「あれがミホさんですか…。凄い人ですね…。」

デイルイト「まあ…あれがあの人々の何時ものやり取りみたいだからね…。あつ！それはそうとトマトさん！この度は其方のギガタロス君の登場許可を下さつて誠にありがとうございました！！もし何か不都合な点や「これはおかしい」つて所がありましたら仰つて下さい。ではでは…！！」



第20導 塗り変わる伝説の戦士・リクガ！そして、旅の終焉…（前書き）

闇影「ちよつと待て作者！！これは一体どういう事だ！？」

……………。（orzの体制で悶絶している）

黒深子「良いの、こんな事して！？」

コウイチ「一気に嫌われ者確定だな…。」

ツルギ「最低です…ウジ虫…。」

えゝ皆様、ダークライダー最終編なのにとんでもない事を致しまして誠に！申し訳ありません！！m（――）（――）m

「何の事？」って方はご覧になって下さい…。多分その頃には私に対する評価がかなり変わると思います…。どうぞ。



突然頭を抱えたGソラは、大声を上げながら苦しみ出す。そしてそのまま、山奥まで逃げる様に走り出しこの場から去って行った。

『待つてくれ！！ソラ…！！』

『はあ…最悪の展開になっちまったなあ…。』

「最悪の展開？一体どういう事だ？」

『ハーフグロンギは文字通り、人間とグロンギの混血児…彼等は強靱な肉体能力を持っていて普通のグロンギより強い存在…。だけどグロンギの血が暴走し易くて、自分以外の存在を殺すまで暴れて、手が付けられなくなるの…。』

『それがあんた等の目的と何の関係が…？』

Dガタツクはハーフグロンギの詳細を語るが、リュウガはそれが彼等の目的とどう関係あるのかを尋ねた。すると彼女は間を空けて…

『先ず言っておくと…全てのライダーのいる世界に共通点が一つ、その世界のライダーが全て居なくなるとそれは消滅してしまう…。』

「「「『！！！！？』「「「

『無論この世界でただ一人のライダーであるクウガが消滅しちまえば、ここは消える…。』

「なっ、何言ってるんだ！？そんな事ある筈が無い！！もしそうなら俺達は当に死んでしまっじゃないか！！現に今…！！」

『そ。今はまだライダーである私達がいるから崩壊は免れている…。』

Dガタツクとデイスティールの話聞き、闇影達は「信じられない」と言わんばかりに動揺し、愕然としている。彼等の話はまだ続く。

『だが逆に言えばライダーが、ライダーの力が消滅しなければ世界は滅ばない事になる…。ところが今の彼女がハーフグロンギの力が暴走寸前である事を知り、このままではそれによってクウガの力を破壊しちまうかもしれない…。そこで俺様達は、クウガを破壊せずに力だけを抜き取ってこの世界を「ライダーのいない世界」にする事にした…。』

彼等の目的、それはクウガを消さずに「力」のみを存在させて「ライダーのいない世界」にして崩壊を防ぐ事だった。

『でもあの子はそれに応じない上に、貴方が邪魔をしたせいでクウガの力は破壊してしまった…。こうなった以上、最後の手段を取るしか無いわ…。』

リウガの介入のせいでそれが全て水泡と化した事を彼に指を差して訴えるDガタツク。そして彼等は「最後の手段」を取る事にした。それは…

『…あの子を含めたこの世界全てのグロンギを抹殺する…。』

「「「「「！！！！！！！！」」」」」

『あの子にゃ罪は無いけど、世界が無くなっちゃうよかマシ…』  
『げんな…。』…って、は？』

何と、ハーフグロンギであるソラをも含めたこの世界のグロンギを抹殺する事だと言う。それを聞いたリュウガは静かに怒り…

『ふざけんなよっ！！ソラが何したってんだよっ！？世界救う為にあいつを殺すだど！？んな事死んでも納得出来つかよっ！！』

「落ち着けコウイチ！！周に当たっても仕方無いだろ！！」

当然そんな事に納得出来ないリュウガは、ディステイルの胸ぐらを掴んで激昂する。そんな彼の手を力づくで引き剥がし落ち着く様宥める闇影。

『ならどうするってんだ？このまま世界が消えちまっても良いのかよ！？ああっ！？』

『くっ…！！ブロッカー！！』

『おっ…やる気か？だったらためえから片付けてやるか…。』

「止める二人共！！今争ってる場合じゃ…！！」

## 【ADVENT】

『グオオオツッン！！』

リュウガはアドベントカードをベントインすると、上空からドラグブロッカーが現れた。闇影は、リュウガとディステイルに争うのを止める様注意するが…



『ソラを探してくる…!!はあっ!!行ってくれブラッカー!!』

『グオオオ…!!』

しかしリュウガはデイスティールとは戦わず、ドラグブラッカーに飛び乗りソラを探す為上空を後にした…。

「おい、待てっ!!待つんだコウイチ!!」

『ちっ…!!勝手にしろ…!!』

『私達は私達でやらせて貰うわよ…』

【ATTACK・RIDE…WARP!】

Dガタックとデイスティールも、ワープのカードを使いその場から消えて行った…。

「コウイチ…。」

世界の光導者、デイライト!9つの影の世界を巡り、その瞳は、何を照らす?』(ソラ…。『

上空を舞うドラグブラッカーの背中の上に立つリュウガは、ソラの身を案じながら彼女があの時言った意味深な言葉を思い返している…。

もし…もし自分が他人と違う存在だったら…お前はどつする…？

『くそっ…！！んなの決まってるじゃねえか…！！』

『グオオオツツン！！』

その言葉にどう答えるかを分かり切っているリュウガは、更に速度を上げて進んで行った…。

「まさかソラさんがハーフグロンギだったなんて…。」

「だからコウイチさんに構うなと言ってたんですね…。私もネオテイブだからあの人の気持ちが少し分かるかもしれません…。」

「ツルギちゃん…。」

一先ず家に帰ろうとする闇影達。黒深子とツルギはその道中、ソラがハーフグロンギである事について話している。ツルギは自分も人間とワームの融合した存在・ネオタイプである為、ソラの気持ちが少し分かると言う…。

「兎に角、今はソラさんを何とか救う方法を考えないと…。手掛かりはハーフグロンギって情報だけ。どうすれば…。」

闇影はソラをどうにか救う方法を模索するが、手掛かりは彼女がハ

「フグロンギである事しか無く情報が不足している。そう嘆いていた時…」

「…て…い…。」

「「!?!?」」

「…ついて…来い…。」

突然ツルギの瞳が光を失ったかのように、何かを呟きながら何処かへゆらりと歩き出した。

「えっ!?! ツ、ツルギちゃん、どうしたの!?!」

「解らない…後を追ってみよう!?!」

ツルギの突然の異変に困惑する闇影と黒深子は、原因が解らないまま彼女の後を追いかけた。

## 謎の洞窟

「……………」

「ツルギちゃん!?! 一体どうしたの急に…って、先生…?」

「待って!?!…君、ツルギちゃんじゃないね…? 一体誰なんだ?」

見知らぬ洞窟に辿り着き棒の様に立っているツルギ(?)を見かけた黒深子は彼女に近付こうとするが、闇影が腕を横に伸ばしてそれを遮った。そして、怪訝な顔をして彼女に何者なのかを尋ねた。

「突然すまないな…。ほんの少しだけこの娘の身体を借りるぞ…。」

「なっ、何!?! ツルギちゃんの身体が光った!?!?」

するとツルギ(?)の身体が全身を包み込む様に淡く光り出し、それが止むと赤いドレスを着た腰まで届く長い黒髪、鋭い目付きに、黒い口紅を塗った唇が特徴の女性に変化した…。

「我はン・クアマ・ゼラ…この世界の究極の闇『だった』存在であり、クウガ…オ牙ソラの母だ…。」

「…!?!?」

謎の女性・クアマの正体は、嘗てのグロンギ達の王「究極の闇」であり、何とソラの母親であると言う。それを聞いた闇影と黒深子は愕然とした表情をした。

「貴女が…ソラさんのお母さん…!?!?」

「…我はグロンギ達の女王でありながら、先のクウガである男に惹かれ、そして結ばれ一人の幼子を儲けた…。」

「何だつて!?!彼女の父親もクウガ!?!それって一体…!?!?」

「…話は十数年前に遡る…。当時クウガである男と我は、リントと

グロンギの間に子供を儲けた大罪によりグロンギ達により命を狙われる事になった…。」

闇影の言葉に頷くクアマは、十数年前に何が起きたのかをゆっくりと話し出した…。

### 十数年前

『はあっ！せいっ！やあっ！だりゃあっっ！！！』

『グアアツ！！』

『消え去れ…はあっ！！』

『『ウガアアアツツ！！』』

炎の様に赤い鎧と複眼に、金色の鋸形の角をした戦士「仮面ライダーークウガ マイティフォーム」と悪魔の様な黒い角を生やし、外見もそれに近い姿をした赤い異形と、本来の姿をしたクアマ・グロンギ態は「人間とグロンギとの間に子供を産む」と言う大罪を犯した為、無数のグロンギ達に襲われており、それ達と戦っていた。

『本当に…キリが無い…！！』

『弱音を吐くな！ジヨウ！そんな事ではソラを守れんぞっ！！』

『頑張つて、父さん！！』

あまりの数の多さに嘆くクウガMFの変身者・才牙ジヨウに激を飛ばすクアマの言葉と、彼女の魔力による球体のバリアに包まれた幼いソラの声援を聞いた彼は…

『ああごめんなソラ…お父さん頑張るからな！！はあっ！！せえいっ！！』

弱音を吐いた事をソラに向かって手を合わせて謝った後、サムズアップをしてグロンギ達に回し蹴りをした。

『ゴボセ…クウガギグサギシロソクユグキヨブンジャリレ…ゴソジデジャス…！！（おのれ…クウガに裏切り者の究極の闇め…殺してやる…！！）ズオオオツツ…！！』

『何だっ！？グロンギ達が一つになっていく…！？』

一体のグロンギが腕をクロスさせて力を溜め出すと、瀕死状態の者や現在生き残っている味方のグロンギ達が黒いオーラの様なエネルギーとなり、その一体の身体に取り込まれていく…。聴てそのグロンギは全身が黒くなった悪魔の様な異形の姿「シャドウ・イーヴィル」と化した…。

『何だこれは…！？グロンギにこんな能力は無かった筈だ…！！』

グロンギの頂点に立つクアマですら、その存在を知らず未知の存在であるSイーヴィルの禍々しさに息を飲んでた。その時…

「アツグ…！？グッ！グッグウウツ…！！グアアアアツツツ！！！！！！」

『ソラ!!?』

突然ソラが頭を抱えて苦しみ出し、身体から先程のグロンギの様に黒いオーラを放ってバリアを破壊し、茶色の髪が黒く染まり、悪魔の様な角を生やした異形の姿へと変貌した。更に…

『グオオオオツツツ……ハアツ!!』

『ウグアアアツツ!!』

背中から悪魔の様な翼を生やし、空中まで翔んだGソラは、両腕の剣の様に鋭い爪でSイーヴィルを素早く斬り裂いた。そして…

『スウウウウ…ハアアアツツ!!』

『グイギヤアアアアツツツ!!!!』

大きく息を吸い込むと、口から黒いレーザー砲の様な物を放ち、Sイーヴィルを一気に消滅させた。

『何て力だ…。』

『グウ…ギツ!?!』

『…!まずいつ…!我等の方に目を向けてきたぞっ!?!』

『ジイヤアアアツツ!!』

『くっ…!!超変…!!』

クウガMFの眩きに反応したGソラは、視点を彼等に向けて超スピードで襲い掛かって来た。それに対してクウガMFは、防御力を上げる為にタイタンフォームに超変身しようとしたが…

『はっ…早い…!!』

『ジャアアアツツ!!』

予想以上のスピードで懐に近付かれた為超変身が間に合わず、Gソラの爪がクウガMFの腹を貫かれようとした…が…

『ウグウツ…!?!』

『クアマ!!「瞬間転移」を使ったのか…。』

何故か彼とクアマのいた場所が入れ替わり、彼女はGソラの爪により腹を貫かれていた…。

あの瞬間、クアマは自身の能力の一つ「瞬間転移」と言う自分と相手の場所を入れ替える能力を使い、クウガMFの代わりに刺されたのだ…。

『カ…カア…サン…!!』

『やっと…意識が戻ったんだな…じゃじゃ馬娘…め…ゴホッ!ゴホッ…!!』

『クアマ!!くそっ…俺は…家族一つも守れないのかよっ!!』

Gソラの意識が戻りつつあるのを確認し安心したクアマは、致命傷



を受けた為口から黒い血を吐き出した。クウガMFは、家族を守れなかった自身の不甲斐無さに地面に拳を叩き付ける。

『クアマ…俺のクウガの力を抜き取って…この子に渡してくれないか…？』

『…！おい…どういう…つもりだ？』

『元々クウガとグロンギは似た存在だって、前に言ってたよな…？だから、このアークルの封印エネルギーを利用すればグロンギの力を上手く抑える事が出来るかもしれない…。』

クウガMFの提案、それは自身のクウガの力を抜き取りソラに与える事で、彼女の中にあるグロンギの血を制御する事が可能なかもしれないと、二人に近付きながら語る。

『馬鹿を言うなっ！！お前…それが何を意味するのか解って言っているのか！？』

『解ってるさ…アークルはもう俺の身体の一部、心臓の様な物になっっている…だからそれを抜いたら俺は…死ぬ…。けど…』

そう…。クウガの力を抜き取る事は、変身者であるジョウの死を意味する…。しかし、彼の顔に迷いが一切無かった。

『二人が命懸けで頑張っているのに、俺も命を懸けないでどうするんだっ！！このまま何もせず二人が苦しんでいるのをみすみす放っておく程人間出来ていないんだよっ！！』

クウガMFは既に覚悟を決めていた…。クウガとして、そして父親

として身を削り我が子を救う覚悟を…。

『馬鹿…者がっ…！！我が全魔力を用いて、彼の者の力をこの娘…我が最愛の夫の間に生まれし我が最愛の娘…ソラに与えよ！！』

彼の強固な覚悟を見たクアマは、目から大量の涙の大粒を流しながら全魔力を籠めて魔術詠唱を唱えた。心から叫ぶ様に…。

転！魔！讓！移！

「……………」

「…その後、我はそこで息絶えて肉体を失い、魂だけの存在のままソラを見届ける様になった…。」

話を聞き終えた闇影と黒深子は、悲しげな表情をしたまま言葉を失っている。

「だが…クウガの力も今や失ってしまったか…。こうなっては…『あれ』を止める者はもういない…『究極の闇』を越えし新たな闇…『禁断の闇』を止める者が…。」

「禁断の闇…！？それって一体…！？」

闇影は聞き慣れない言葉を聞き、眉をひそめ、クアマに尋ねた。しかし、彼女がそれに答える事は既に不可能だった。何故なら…

「クアマさんの身体が…光り出した!？」

「も…もう現世での実体化に限界(リミット)が来たか…!!最後に…頼む…!!ソラを…我が娘を救ってくれっ…!!」

ツルギに憑依、現世に実体化する時間に限界が来た事により、クアマの身体が光り始めた。そして、ソラを救う様に闇影達に頼むとクアマの姿は光と共に消え去っていき、ツルギはそのまま倒れ出した。

「ツルギちゃん!!」

「大丈夫だ。気を失ってるだけだよ。」

「そう…。でもどうするの?これから。」

「…黒深子。ツルギちゃんを任せていいかな?先ずコウイチを探して来る。」

倒れたツルギを抱えた闇影は、コウイチを探す為黒深子に彼女を任せていいかを尋ねた。

「それは良いけど…場所判るの?」

「あいつとは随分一緒に居たから…粗方解るさ。行ってくる!!」

と、相も変わらず根拠の無い台詞を言いながら闇影は洞窟を後にして走り出した。が、その直前、足元に何かが光ったのでそれを拾った。

「ん？これは…？」

『何処だ…何処に居るんだソラ…！！』

一方リュウガは、未だソラを探すべくドラグブラッカーに乗って散策しているが、一向に見付からないでいた。

『コウイチ、少し落ち着けて。』

『んだよ闇影！？邪魔すんな……って、エエエツツ！？なっ！何で空を…！？』

突然横からいない筈のデイトライトが、某メガヒット漫画の戦闘馬鹿な主人公の如く空を舞い、横から肩を叩いてきたので心臓が飛び出す程びっくりしたが…

『…って、何だ…カリスの力を使ってただけか…。』

『一度降りろ。ソラさんの事について話がある…。』

彼の横に同じく空を舞うカリスを見て、リュウガは二人のそれが「ドラゴンフライフロート」の力を使った物だと知り、胸を撫で下ろして安心した。

『はあっ！やあっ！せえいつ…！』

『オラオラオラアツ!!』

『『グギヤアアアツツ!!』』

一方デイシーフとディステイルは、この世界のグロンギ達を全て倒すべく無数のそれと戦っており、その数は今や十数人まで減っていた。

『残り少なくなってきたし、そろそろ仕上げと行きましょ』

『だな。』

【FINAL - ATTACK - RIDE...DI・DI・DI・DI  
SHIRF!】

【FINAL - ATTACK - RIDE...DI・DI・DI・DI  
STEAL!】

『はあああ...せいっ!!』

『光のシャワーを...受けてみな!!』

『『グギヤアアアアツツツ!!』』

デイシーフとディステイルは、ディメンジョンスライサーの赤い斬撃とディメンジョンスコールの水色のレーザーの雨で十数体のグロンギ達を一気に殲滅させた。

『ふう...宝以外の事で動くななんて...私達もヤキが回ったわね...。』

『同感。まつ、それも悪くは無いけどな…っつて、何だあれは…!?!』

『黒い煙が…一つに集まっている…?!』

戦闘を終えた二人が愚痴を溢していると、グロンギを倒した場所から黒い煙が天に上り一つに集まっていると言う奇妙な現象が起きていた。そしてそれは、雲の様に何処かへ流れて行った…。

『何だか…嫌な予感がするわね…。』

『同感…。行ってみるしかねえよな、これ…。』

「……と言う事があったんだ…。」

「マジかよ……!!!!」

一方、クアマが先程聞いた話を闇影から聞いたコウイチは、愕然とした表情をした。そして…

「……っ!!!!」

「おい待て!どうするつもりだ!?!」

「決まってるだろ!!もう一度ソラを探すんだよ!!!!」

「だから落ち着けて。」

「落ち着いていられるかよっ!!!!俺は…!!!!っつて、これは…?!」

再度ソラを探そうとするコウイチに落ち着く様宥め、引き止めた闇影は、先程洞窟で拾った物を彼に手渡した。

「もしかしたら、それがソラさんを止める切欠になるかもしれない……。」

「闇影：お前：。」

「行って来い！！そして今度こそ守るんだ！！お前にとって大切な人を！！」

「へっ！サンキューなっ！！」

闇影からの励ましを聞いたコウイチは、サムズアップをして彼に感謝し再び走って行った。

「頑張れよ：コウイチ。！！ん？この気は何なんだ：！？」

闇影は突然何らかの気を感じ、怪訝な表情をした。先程ディシーフトとディステイルが見たあの黒い煙の集合体が関連しているやもしれない……。

『ウウツ……！！ガツ……ガアツ……！！』

一方Gソラは、木にもたれて頭を抱えながら歩いていた。どうにかグロンギの血の暴走を抑え自我を取り戻そうと抗っているのだ。そこへ……

「此処にいたか…ソラ。」

『グウウツツ…!!』

「事情は粗方聞いたよ…あなたの両親がクウガと究極の闇だつて事をな…。」

コウイチが現れ、彼女の過去をクアマから聞いた事を話した瞬間…!!

『オオオツツ!!』

突然Gソラはコウイチに襲い掛かり、自身の爪を彼に振り上げた。しかし…

「ガアアツ…!!くつ…!!」

『……!?!』

コウイチは何故か避けようせず、彼女の爪で肩を斬られた。にも関わらず彼はその痛みを耐えて肩から血を流しながら、振り上げたGソラの腕に手を掴み…

「…あなたはそんな両親を誇りに思っている筈だ…!!だけど自分の血が両親を死なせてしまった事からそれが憎くて…恐ろしくなつたから人から遠ざかった…違うか!?!」

『グツ…グツ…グウツ…!!』



「でもそれを怖がる必要なんか無い！！あなたは…あなたの両親が自分の命を懸けて救う程、愛されていたんだ…！！そんな両親の血は恐ろしくなんか無い…誇れる血だっ…！！」

『ウググ…グウツ！？』

コウイチは必死な呼び掛けてはいるが、Gソラは未だ自我が戻らないでいた。すると、ポケットから先程闇影から託された物を取り出し彼女に見せた。

『…イヤ…リング…。…！！』

彼女が見た物、それは悪魔の角の形をした黒いイヤリングだった。それを見たGソラは、幼い頃の過去を思い出した…。

母さん…そのイヤリング綺麗だね。

ん？ああ…これは父さんがプレゼントしてくれた黒曜石で出来たイヤリングなんだ。気に入ったのか…？

うん…！

なら、お前が大人になった時に授ける約束をしよう…。構わんな？

うん…！約束だぜっ…！！

『ううっ…ううっ…！！父…さん、母さん…！！』

Gソラは、幼き日の事を、両親の事を思い出し、目から涙を流し出した。すると…

「身体が…元に戻っていく…！！」

コウイチの言う様に、Gソラはグロンギの者から次第に人間の姿へと戻って行った。そして、コウイチから母のイヤリングを受け取り、握り締めた。

「母さん…。」

「良かったな！！これで元に戻っ…！！なっ！！何だっ！？」

ソラが人間の姿に戻りコウイチが喜ぼうとした時、あの黒い煙の塊が宙に浮いておりそれは柱状の強烈なエネルギーと化し下界に衝突した。

「何なんだよ…あれは…！？人の形に変わっていく…！！」

ソラが呆然と呟いていると、柱状のエネルギーは次第に大柄な人の様な形となつていき光が止み出すと、金色の月の輪熊の様な姿をした、黒く鋭い爪、胸に悪魔の角に似た模様が特徴のグロンギの王「究極の闇」を越えし「禁断の闇」のグロンギ「ヴェトア・ゼツ」が姿を現した…。

『ジョグジャブレザセダ…（漸く目覚めた…）我が名はヴェトア・ゼツ…！！「禁断の闇」を持ちし者…！！』

目覚めたヴェトアはグロンギ語で話すが、途中から人間の言葉に変わり、自身を「禁断の闇」だと名乗った。

「禁断の闇だと…！？究極の闇じゃねえのか！？それに『ン』の称号はどうしたんだっ！？」

ソラは矢継ぎ早にヴェトアに尋ねた。そもそも彼女の指摘する様にグロンギの頂点「究極の闇」を表す「ン」の称号が無い事が疑問だった。

『答えてやろう…我々グロンギは究極の闇を超えた力を欲した…その為には「グロンギ同士が殺し合い、最後に生き残った者が禁断の闇を得る」と言う特殊なゲゲルを行わなくてはならない…。しかし、それにより力を得た者は「同胞殺しの罪」の怨みを背負い、グロンギの名を剥奪される事となる…。』

「…闇影達が見たゲゲルがそれか…！！」

『しかし、この世界の「純血のグロンギ」は何者かにより全て滅んだ筈なのだが…何故か我は目覚めた…。』

ヴェトアの言う様に、この世界の「ソラを除いたグロンギ達」はデイスーフとデイスティールにより全て滅ばされ、禁断の闇を得る者は居ない筈なのだが…

『まあ良い…。残っているその「混ざり者」やリントを始末してやるか…。はああっ！！』

「「うわああっ！！？/きゃあああっ！！？」」

ヴェトアは掌から強力な衝撃波を放ち、コウイチとソラを吹き飛ばした。

「くそっ…！！俺は肩に怪我を負ってるし、ソラはグロンギ化して体力を消耗している上に変身も出来ない…。それでも、やるしか無いか…！！」

ソラはクウガに変身出来ず体力を消耗しており、自身も彼女から受けた傷が深く戦うことがままならないでいるコウイチ。しかし、彼はそれでも何とか戦おうと傷の痛みに耐えて構えようとしたが…

【ATTACK - RIDE…RECOVER!】

「…！！体力が…！！」

「肩の傷が治った…！？…？…って事は…！！？」

『無理はするなよ…コウイチ、ソラさん…！！』

「闇影！」

その場に現れたデイルイトとスカリスは、彼等の傷や体力を「キヤメルリカバー」で回復させた。

『そうか、貴様が灰塵者デイルイト…！！我が目覚めた理由はやはり貴様の存在が原因か…。』

『話は粗方解った。でもこれで一気に決めるよ…！！究極の闇でね…！！』

【FINAL - SHADOW - RIDE... KU・KU・KU・KU  
UGA!】

デライトは、Sカリスを金色のラインが入った黒いアーマーと金色の鍬形の角に赤い複眼が特徴の、アメイジングマイティの真の力にあたる究極の闇、クウガの最終形態「アルティメットフォーム」にFSRさせた。

「蠅螂がクウガに...!? あいつは一体...!?」

「ほう...影をクウガに変えられるのか...。」

「二人共、危ないから下がってて...!」

【FINAL - ATTACK - RIDE... KU・KU・KU・KU  
UGA!】

「アルティメット...キイツクツ...!」

コウイチとソラに離れる様指示したデライトは、SクウガUFと共に超自然発火能力で黒と赤の炎を纏った足で放つライダーキック「アルティメットキック」をヴェトアに繰り出そうとした。が...

「だが最早究極の闇なぞ...時代錯誤の古き力だ...!ずあああ...  
...!」

「なっ、何っ...!?ぐあああ...!」

「闇影...!」

SクウガUFの力 究極の闇を時代錯誤だと罵倒するヴェトアは、片腕を振り払い黒い衝撃波を放ちSクウガUFを消滅させ、ディライトを変身解除させた。

「くっ…！！究極の闇のクウガを一瞬で消し去るなんて…！！」

『絶望したか…？ならば更なる絶望の闇へと落としてやろう…はあ  
ああああ……！！』

「何だ…！？あいつの身体から黒い何かがあちこちに飛んでいつて  
る…！？」

ソラが指摘する様に、ヴェトアの身体から無数の黒いオーラが周囲に拡散していった。すると…

『グオオオ……！！』

『ジイエエエ……！！』

「どういう事だ…！！グロンギ達がこんなに現れるなんて…！！まさか…！？」

闇影達の周りから、亥や虫を模した黒いグロンギが無数に現れ囲み出した。それを見たソラはヴェトアの能力に気付き始めた。

『フハハ…！！生きとし生ける全ての生物をグロンギに変える力…  
それこそが禁断の闇の力よ！！』

「人間だけじゃなく…虫や動物まで…！！」

『更にだ…この力によりグロンギとなり魂を支配されし者は…来世でもグロンギと化すのだ…未来永劫な…フハハハ!!』

「貴様…!!」

生きとし生ける全ての命や魂を弄び、高笑いをするヴェトアを見て憤る闇影。

『最早誰も我を止める事は出来ぬ!!クウガの力も無く、仲間も家族も居ぬ哀れな混ざり者よ…私の配下にならぬか?』

「何だとっ…!!?」

『混ざり者の貴様には良い話だとは思わないか?人間でもグロンギでもない孤独な貴様には…!!』

「…さつきから何寝言ほざいてんだ…熊野郎…!!」

『何いつ…!!?』

「こいつは…ソラは一人なんかじゃない!!こいつはずっと家族と一緒に居るんだっ!!」

『戯言を…何処にそんな者がいると言うのだ!!』

「ここさ…!!ソラの両親はこいつの心の中でずっと生きている…!!ソラが生きている限り、ずっとな…!!」

コウイチは胸に拳を当てて、ソラは一人では無いのだと強くヴェトアに向かって主張した。すると、ソラの背後にクウガMFとクアマ

が半透明の状態で見えた。娘に微笑みながら…。

「父さん…母さん…!!」

「それに、俺も居る!!どんなに一人になろうとも、両親を誇りに思い、仲間の事を思っていればそいつは決して一人なんかじゃない!!お前みたく、自分以外の命を弄んでる野郎には一生分かんねえさっ!!」

「おいつ!!それは俺が言う台詞!!」

「そつだ…オレはずっと一人だと思っていた…でも違う…!!オレの心の中には父さんと母さんがいる!コウイチもいる!オレは一人なんかじゃ無い…見えない絆ですつと繋がっているんだっ!!」

闇影の嘆きはスルーされ、ソラはコウイチの言葉を聞き、完全に吹っ切れ彼と共に闇影の下に近付いた。すると、彼女に異変が…「なっ!何だこれは…!?!」

「黒い…アークル…!?!」

何と、ソラの腰に上の部分が二本の小さな角が出ているのと、黒い色以外アークルに似たベルト「ランドル」が装着され、中心には赤色の霊石アマダムに似た「霊石チダム」が埋め込まれていた…。

「もしかして…これがオレの…!?!」

「そつだ…!!これがあんた自身の本当の力だ…!!」

『貴様…一体何者だっ!?!』



ヴェトアの問いを聞いたコウイチは、リュウガのカードデッキを前に突き出し「あの台詞」を叫んだ……！！

「へっ…お節介カメラマンな仮面ライダーだっ！！脳味噌に刻んどきなっ！！変身！」

「だからそれ俺の台詞……！」

闇影の抗議をまたしてもスルーした上に彼の決め台詞を叫んだコウイチは、カードデッキをVバックルに装着すると、彼の身体に幾つもの人影がオーバーラップし黒き龍騎士　リュウガに変身した。

「いい加減にしるよな…変身！」

【KAMEN - RIDE… DELIGHT!】

コウイチに何時もの決め台詞を言われた闇影は、そんな彼に苛つきながらデイルイトドライバーにカードを装填し、デイルイトに変身した。

「父さん…母さん…見ててくれよ！！これがオレの…変…身……！」

ソラは、斜めにした右腕と左腕を即座にベルトの両サイドに移した。すると彼女の身体にダークレッドの色をしたクウガに似た鎧に、同じ色の複眼に、鍬形の角の部分が黒い牛の角の様な物が特徴の、陸の戦士「仮面ライダーリクガ　ベヒモフォーム」へと変身した…。

『何だその力は…！？クウガ以外の戦士なぞ知らぬぞっ！？』

『そうか…それがクウガの…!!』

見た事の無い、クウガ以外の戦士の登場に狼狽するヴェトアに対し、デイライトは冷静に理解をした…。彼女のそれがクウガの影の世界の力だと、それこそがこの世界ですべき事だと…。

『さて、輝く道へと…導いてやつか!!』

『…って!!はあ…もういい…。』

その隙にリュウガはまたまたデイライトの決め台詞を叫び、それを聞いた彼は抗議をしようと拳を握ったが、諦めたのか溜め息をついて頭を頂垂れて脱力した。

『ほざけっ!!全て葬ってくれっ!!やれえっ!!』

『『『ギツシヤアアアツッ!!』』』

ヴェトアの命を聞いたグロンギの軍勢は、デイライト・リュウガ・リクガBFに襲い掛かっていく。

『派手に逝こっぜっ!!はあっ!ぜいっ!えいっ!だりゃああっ!!』

『『グアアツ!!』』

『字間違ってるって!!…っ!ツツ込んでる場合じゃねえなこれ…!!んなら俺は…!!』

【STRIKE - VENT】

『派手に燃やすぜっ…!!おらああっ!!』

『グガアアアッッ!!』

リクガBFは某赤き海賊の戦士の口癖を言い、 Grongi達をパンチやキック等の格闘技で撃退していく。リュウガは彼女のとんでもない一字違いをツッコミながらバイザーにストライクベントカードを通し、ドラグクローファイヤーの黒炎で Grongi達を焼き尽くした。

『ジイエエアアッッ!!』

『つと!!そつちが武器で来るならこつちも武器だっ!!遥変身(ようへんしん)!!』

武器を振るう Grongiに對抗すべく、リクガBFは落ちてある木の棒を拾い「遥変身」と叫ぶと、ダークレッドの部分が全てダークブルーに変わり、角が蛇の様な形をした「ナーガフォーム」にフォームチェンジし、先端にダークブルーの蛇が巻き付いた杖「ナーガシヤフト」を携えている。

『はあああ…それぞれそれぞれいっ!!アーンど噛み付けいっ!!』

『グイギヤアアッッ!!』

リクガNFは、ナーガシヤフトをドラゴンロッドの様に回転させながら Grongiを連打していき、距離が取れると先端の蛇の部分が Grongiを襲い、噛み付くと爆破した。どうやらあの蛇は生命を持っている様だ。

『面白れえ…今度は何だろな…。遥変身!』

リクガNFは新たな武器の性能を楽しみながら今度はダークグリーン  
の鎧に、三つのドリルの様な角をした「ユニコーンフォーム」遥  
変身し、ユニコーンの顔を模した銃「ユニコーントリガー」を手に  
した。

『撃つちまってくれっ!!だだだだ…っ!!』

『グガガガアアツツ!!』

リクガUFは、ユニコーントリガーから緑色の角の形をしたエネルギー  
弾をグロンギ達に連射しまくった。

『オイイイツツ!?何かこつちにも飛ん…デデデエエツツ!!!?』

『あぶあぶあぶ危ないっ…テテテエエツツ!!!?』

…一部、デイルイトとリュウガも巻き込みながら…。

『おつとやべっ!!んならパワーで一気に…遥変身!』

デイルイトとリュウガを巻き込んだ事に気付き反省(?)したリク  
ガUFは、力で一気に決めるべくダークパープルの重厚なタイタン  
を丸っぽくした鎧に、ベヒモスのそれが逆さになった角が特徴の「  
ギガースフォーム」に遥変身し、両腕にタイタンの胴体とドツガハ  
ンマーを複合させた様な巨大な籠手「ギガースガントレット」を装  
備していた。

『おうりゃっ!でいつ!はあっ!!!』

『ゴツフッ!!』

『止め!行つくぜええ……おおおつりゃあああつつ!!』

『『ガアガアアツツ!!』』

リクガGFは何体かの Grongi を殴り飛ばすと、ギガースガントレットに封印エネルギーを籠め、ハンマーの様にそれを一気に地面に叩き込んで生じた地震を起こす必殺技「クエイクギガス」で Grongi 達を爆破させた。

『凄い…これがリクガの力か…!!』

『暴れまくりでやべえけどな…』

デイルイトとリュウガは、リクガの圧倒的な強さに息を飲んでいたので、その一方で彼女の暴れぶりをツッコミながら…。

『おのれええ…ずえあああつつ!!』

『『『うわあああつつつ!!!!!!』』』

怒り心頭のヴェトアは、腕を払い黒い衝撃波を起こしデイルイト達を吹き飛ばした。その衝撃でリクガGFは元のベヒモスフォームに戻ってしまった。

『まだあいつがいたんだつたな…!』

『しかも Grongi 達はまだ一向に減らねえ…どうすりゃいい…!!』

『安心しろ…まだ手はある…!』

【FINAL - FORM - RIDER: RII・RII・RII・RIKU  
GA!】

『力を抜いて下さい!』

『はっ?何…はっ…ああんっ!!//』

ディライトに背中を押されたリクガBFは、艶かしい声を出しながらゴウラムに似た黒い角をした赤い牛の形をしたマシン「リクガタウラム」にFFRした。そしてディライトはRタウラムに乗り疾走し、グロンギ達に激突していく。

『それぞれそれえっつ!!』

『『ゲアアアツツ!!』』

『馬鹿な…我は禁断の闇を得、グロンギをも超越した存在…!!それが、名も知らぬ戦士如きに負ける事等…有り得ない…有り得ないんだあっつ!!』

ヴェトアはRタウラムにより倒されていくグロンギ達を見て、激しく狼狽しディライト達に負けじとそのまま彼等に向かって突撃して行った。

『お前の敗因は、心から信じられる仲間が居ない…俺達にはそれがある…。その違いだけ…!!』

【FINAL - ATTACK - RIDE・RI・RI・RI・RI  
KUGA!】

「これで…終わりだあ…っ…!!」

「ウガアアアツツツ…!!…!!わ…我に…仲間なぞ…ふ…よ…!!」

デライトがFARを発動すると、Rタウラムの角がヴェトアの身体に幾度も往復して激突し、最後に赤いエネルギーを纏った直撃を放つFAR「デライトマタドル」でヴェトアを爆発させた。

「ふう…遂に終わったな…。」

と、デライトが一息つき始めたその直後…「な…何だっ!? 黒いオーラがまだ消えていない…!!」

ヴェトアが破壊された場所に黒いオーラがまだ残っており、それは纏て巨大な悪魔の様な姿をした異形 シヤドウ・イーヴィルへと変貌した。更に…

「うおのれえ…っ…っ…っ…っ…っ…っ…!! こいつで始末してやる  
うう…っ…!!」

その横から灰色のオーロラが現れ、そこから紅蓮が顔を歪ませてデライトを始末すると激昂してまた姿を消して行った。

「オオオオオツツツ…!!…!!」

『『『うわあああ…っ…っ…!!…!!…!!…!!』』』

突然Sイーヴィルは爪をデイルイト達に振り上げた。しかし彼等は無事回避したが、それにより地面が大きく抉れた。

『あれは…俺が黒深子の世界に飛ばされる前に見た影の悪魔…!!』

『オレのグロンギの血を暴走させる切欠になった奴か…!!』

『でもどうすんだよっ!? あんなの俺達だけじゃ勝ち目がねえぜ!』  
『?』

『せめて…せめてあと二人は必要かも…!!』

と、デイルイト達が戦力の不足に嘆いていたその時…

【KAMEN - RIDER... FAMIL!】

【FORM - RIDER... DEN - O! AX!】

突然デイルイト達の前に、金の形と斧を複合した電仮面に、黄色と黒のオーラアーマーにデンガツシャー・アックスモードを携え腕を組んだライダー「仮面ライダー電王 アックスフォーム」と白鳥をイメージした白いマントに薙刀型武器・ウイングスラツシャーを携えた、嘗てミホが変身していたライダー「仮面ライダーファミ」が現れた。

『俺の強さにお前が泣いた! 涙はこれで拭いとぎっ!』

『いや拭かねえよ。それより…』



『……………!!』

電王AFが撒き散らす金色の懐紙吹雪と決め台詞をスルーしたりユウガは、ファムを見て呆然としていた。しかしファムは電王AFの様に喋る事は無かった。何故なら…

『巡…周…!!これはお前達か!?!』

当然それは、木の上に立っているデイシーフとデイスタイルの作業であった。何故自分達に力を貸したのかを尋ねるデイライト。

『勘違いすんなよ…俺様達はてめえ等を撃ち殺してその際にお宝を奪おうとして、照準を間違えただけなんだからな。』

『うふふ…素直じゃないのね ホントは最初から様子を見て、あの子達が心配だからライダーを超越したのにな』

『ほっ、ほつとけ!!ノノきよ、今日はもう帰る!!行くぞ巡ちやん!!』

『はいはい…。まさか新しいライダーの力を目覚めさせるなんてね…うふふ 楽しみが一つ増えちゃった じゃあね』

『何しに来たんだ…?あいつ等…。』

照れ隠しをしてデイスタイルは去って行き、デイシーフもリクガの力を目覚めさせたデイライト達に興味を持ったと言い、去って行った。理由はどうであれ、今の戦力補充は有難い…。

『何でもいいぜ…さっさとこの悪魔をぶっ倒そうぜ!!』

リユウガが金色の翼が描かれたカードを手にすると、左腕のドラグバイザーが黒い炎と共に黒い龍の頭部を模した拳銃型のバイザー「ブラックドラグバイザーツヴァイ」に変化し、龍の口をした銃口にそのカード「SURVIVE 黒炎（こくえん）」をセットすると

…

【SURVIVE!!】

『おおおおあああああつつつつつ!!』

するとリユウガは黒い炎に包まれ、黒い龍の顔を模したアーマーとあちこちに金色の装飾品が装備された「生還者」の名を持つ最終形態「リユウガサバイブ」へと進化を遂げた…。

『オレも行くぜ!!はあああああつつつつつ!!!!!!』

リクガBFも構えを取ると、全身に金色のエネルギーを纏い五本の黒い雷に似た角、アルティメットクウガのそれに似た黒いラインが入った金色の鎧、ダークレッドの複眼が特徴の「正しき禁断の闇」の力を持ちし最終形態「フォビドゥンフォーム」へと進化を遂げた…。

『凄い…!!これがコウイチ、ソラさんの本当の力…!!』

デイルイトは、リユウガSとリクガFF…二人のダークライダーの最終形態の強い威圧感に息を飲んだ。

『行こうぜ闇影…この世界を光へ導こう!!』

『…ああっ!!』

リュウガSの落ち着いた呼び掛けに、デイルイトは力強く頷きライトブツカーを手にし、五人の仮面の戦士達は、Sイーヴィルに向かっていった。

【SWORD - VENT!!】

『はああああっつつつ!!!!』』

『グイギヤアアツツ!!』

『そろそろそろそろっ…ドスコイヤあっ!!』

『……!!』

『ゴアアツツ!!』

デイルイトとリュウガSは、ライトブツカー・ソードモードとドラグセイバーを強化した武器「ドラグブレード」でSイーヴィルを斬り付け、電王AFもデンガツシャー・アックスモードで斬り付けて、両手で連続突っ張りをし、ファムもウィングスラツシャーで素早く攻撃をした。

『オーラオラオラオラオラオラアアツツ!!』

『グガガガガガアアツツ!!』

リクガFFもアルティメットクウガと同じ、超自然発火能力により発生した金色の炎を拳に宿し、Sイーヴィルに連続ラツシュをかけ



状に変形した黒い炎を纏ったドラグブラッカーが進化した黒いドラグランザー「ブラックドラグランザー」に乗り込み突撃するファイナルベント「ドラゴンファイヤーストーム」を発動させ、ファムの斬撃と共にSイーヴィルを大爆発させた。

『ダイナミックチョップ…半生…!』

『お前がメんのかよっ…!』

電王AFがメると同時に、召喚ライダーである為彼とファムは役目を終えて消滅した。

よくやったな…コウイチ…。

『…!…ミホ…?』

その直後、リュウガSはミホの言葉が聞こえた気がした…。本人の魂なのか、ただの幻聴なのか…それは誰にも解らなかった…。

「これから…どうするんだ？」

「そうだな…あの力でまた新しいグロンギが現れちまったから…そういう等から人を守る旅に出るよ。…人の笑顔を守る旅に…な。じゃあな！」

コウイチに今後の事を尋ねられたソラは、ヴェトアの力により生まれたグロンギの脅威から人を守る旅に出る決意した。この「リクガの世界」で「人の笑顔を守る」と言う新たな目的を抱き彼女は進も

うとしたが…

「あっそうだ…。コウイチ…」

急遽足を止めてコウイチに近付いたソラは…

「ん、どうした？何か忘れも…！！んんっ！！？／／／」

コウイチの唇に自分の唇を合わせ、彼にキスをした…。そしてゆっくり口を離し…

「お前のお陰でオレ…あたしの生きる目的が出来た…。本当に…ありがとう…。」

「…………。／／／」

ソラが人生の目標が出来たのはコウイチのお陰だと、一人称を「オレ」から「あたし」と呼び彼に感謝し、今度こそ旅立った…。

「あらあら若いわね〜二人共　って…あれ？」

影魅璃は、先程の二人の様子とそれを見守る黒髪の男性とクアマが描かれたキャンバスを見てからかう様に笑った。しかし、何時もなら闇影の同意の言葉が聞こえる筈のだが、それが無かった。何故なら…

「…………。」

「……／＼／」

闇影は窓際で椅子に座ってむくれた顔をしており、コウイチは先程のキスの刺激が強く、帰ってからずっと呆然としていた…。

「先生、いい加減機嫌を直してよ…。良いじゃない今回くらい…ほら、カードだつて全部集まったんだから。」

「ああ…解ってるよ…。」

闇影は今回、殆どの出番をコウイチにかつさらわれたせいで機嫌を悪くしていた。しかし黒深子は、机に並べていた九枚のダークライダーのシャドウライドカードを手に取り機嫌を直すよう説得した。

「これで9つの影の世界は全て巡り終えたのですね…。闇影さん、何か変わった事は？」

「う〜んどうだろう…。俺も彼から言われた事をやった後どうなるのか解らないんだよ…。」

ツルギに質問された闇影自身、それを成し得た後どうするのかを彼野上良太郎から聞いておらず解らないでいた。その時、突然時間が全て凍った様に止まり、闇影以外全ての者も止まった。

「なっ！何なんだこれは…！？」

突然の異変に闇影は、驚き疑問を感じる事しか出来ずにいた。すると…

「ウククク…おめでとう闇影…。遂に9つの影の力を全てを集めた

んだね…。」

何処からか若い青年らしき声が聞こえ、闇影に賞賛の言葉を与えた。しかし闇影は…

「貴様…！！俺に何の用だ！！貴様からの労いの言葉等へドが出る…！！」

何故か青年の労いの言葉を、普段とは違う言葉遣いで否定した。いや、それ以前に青年の声を聞く事自体耳障りらしい…。その証拠に歯軋りをし殺意に満ちた目をしている。

「何って…お祝いのメッセージを送りに来たただだよ…嘗て『緋眼（ひがん）の死神』だった君に…ね…。」

「……………！！」

青年は闇影の事を「緋眼の死神」と口にする、闇影は両目を血の様に赤く光らせて天井を睨んだ。

「ふーん…目は『当時』のままなんだね…。ま、今日の所は引き下がるよ。精々今の仲間達を『あの時』みたく死なせない様頑張るんだね。ウククク…！！」

そう言うと青年の声はもう聞こえなくなり、それと同時に全ての時間が再び動き出した。

「…って闇影さん…！！私、何かお気に障る事を仰いましたか!？」

「え…? ああ〜! …! ごめんごめん! …! まだコウイチに出番を取られ



た事を気にしててね！でももう大丈夫さ！あ、はははは…！！」

先程の怒りの表情のままだった闇影は、それに驚くツルギの反応を見て即座に謝り、何とかはぐらかした。

「（あいつは…『奴』だけは死んでも許さない…！！何が目的か知らないが、黒深子達を絶対死なせない…！！『あの人』の二の舞は…もう沢山だ…！！）」

と、闇影は心の中で先程の青年を憎み、黒深子達を死なせないと強く誓った。

闇影の言う「あの人」とは？青年の正体は何者なのか？そして「緋眼の死神」とは何なのか…？

9つの影の世界を巡り終え、彼の瞳は、何を照らす…？次回、仮面ライダーディライト！

何故闇影は、ディライトの力を得たのか…？それは、今から七年前に遡る…。

「俺の眼に映った者は…全て、焼き尽くす…！！」

嘗て「緋眼の死神」だと謳われた闇影は、「とある組織」の命により世界を焼き尽くそうとしたが…

「お節介な鬼のおじさんさ…。青年。」

自らを「鬼」と呼ぶ謎の旅人と出会った闇影…。

「おーやおや？それで全力かい？青年。」

「何なんだ…この男…!？」

旅人の「とある強さ」に圧される闇影…そして…

「貴様に…何が解る…!! 家族を…世界を失った奴の気持ちがああ  
つつ…!」

今、デイルイト誕生の刻が明らかになる…!!

次回、『デイルイト・ビギンズライト〜眩き出会い〜』

全ての闇を、光へ導け!

第20導 塗り変わる伝説の戦士・リクガ！そして、旅の終焉…（後書き）

皆様！石を投げないで下さい！！お気持ちは解ります！！

闇影「なんて事してくれたんだ！？よりによってクウガのダークライダーを勝手に作るなんて！！」

黒深子「いくら実在しないからってこれは無いでしょ！！」

ヒイツツ！！読者の皆様、勝手にクウガのダークライダーを作ってしまい誠に申し訳ありません！！

闇影「もういい…やってしまった物は仕方無い。リクガ…名前通り陸に生きる幻獣をモチーフにしたんだな…。」

ああ…一部微妙な奴もあるけど考えるのは結構苦労はした。

黒深子「基本はクウガのそれと似通っているのね。」

ツルギ「まあ、赤点ギリギリが妥当ですね…。ところでコウイチさんは？」

コウイチ「……／／／（まだボケエっとしてる）」

闇影「おい！いい加減我に返れ！！コウイチ！！」

コウイチ「うわっわっ！！？って、あれ？もう終わり？」

黒深子「ええ…やっとこの作者と顔を合わさなくて済むのよ。」

おい待て…誰が最終回だって言った？

四人『え？』

巡「まだダークライダー編が終わっただけ…次回からは新世界編に突入！…って台本に書いてあるわよ。」

周「そうそう。俺様達の過去や他の作者さんとのコラボ…って予定らしいぜ？」

オイイイツツ！！！？何勝手に説明してんだよ！？

コウイチ「どつちでも良いだろ…。今回は闇影の過去編…と言いたいけど、まずはダークライダー編のキャラ紹介が先らしいから、本編は暫くお預けです…！」

ツルギ「緋眼の死神…謎の男性…確かに気になりますね…。」

黒深子「先生に何があったの…？でもどんな過去でも私は先生の事、信じてるから…！」

闇影「多分俺のイメージがダウンするかもね…。てな訳で読者の皆さん…！」  
『仮面ライダーディライト・世界の光導者』は第一部は一先ず終了です…！こんな馬鹿作者が書いた駄文なんかを応援して下さい…！  
本当にありがとうございます…！第二部開始の日にもまたお会いしましょう…！」

なら全員で「あの台詞」を言うぞ…！いつせいの…！！

全員『全ての闇を、光へ導け……………！応援ありがとうございま  
すっ……………！』

## 8人のダークライダー人物紹介（前書き）

ユウジ「読者の皆さん。この度はダークライダー編を全て御覧になつて頂き本当にありがとうございます！」

オトヤ「今回は、俺達ダークライダーの紹介をさせて貰うぜ。」

レイ「後付けっばいやつもあるけど、まあ見たってくれ！」

カブキ「これが俺達の詳細だ…。始まるぞ。」

## 8人のダークライダー人物紹介

相馬（そうま） ユウジノ仮面ライダーオーガノホースオルフェノク  
「オーガの世界」の主人公。17歳。流星学園二年生救事部部长。  
茶色の丸っぽい髪型が特徴で温厚な性格の少年だが、後述の事になると性格が激変する。同じ部員の蛇塚ナオヤと鶴見ユカとは同じクラス（黒深子も同じクラス）であり、部活の際彼等と行動を共にする。

アーク（カイザー）オルフェノクにより、両親と幼馴染みの木下（きのした）チエと共に殺害されたが、一人で生き残る絶望を与える為に、使徒再生によりホースオルフェノクとして蘇生された。（ナオヤとユカともこの事件を切欠に知り合った。）これにより彼は、アークのみならずオルフェノクと化した自身を強く憎んだ。

名前の由来はホースオルフェノク「馬」+木場「勇治」から。

FFRノストランザーオーガ

オーガのFFR形態。外見は自身の専用武器「オーガストランザー」を巨大化した物である。刀身から金色の刃型のフォトンエネルギーを放ち、敵を斬り裂いていく。本編では語らなかったが、このFFRは大剣ではなく、基本はビーム砲型のブラスターモードである。無論ソードモードに切り替える事も可能。

FARノデライトバニッシュ

ストランザーオーガのFAR。ソードモードの刀身から光の刃状のエネルギーを噴出させ、敵を切り裂く。また、ブラスターモードに切り替えて巨大なレーザーを放出する事も可能である。

オトヤノ仮面ライダーダークキバノバットファンガイア

「ダークキバの世界」の主人公。27歳。ファンガイア達の王であり、王妃マヤの夫。特徴はパーマがかつた茶髪にキバ本編過去編のキングと同じミュージシャンの様な服装であり、気さくな性格でやや女好きだが、妻のマヤを心から愛している。王としてのカリスマ性も持つており民からの信頼も高い。人間とファンガイアとの共存に成功したが、一部の民（主にファンガイア）がそれに不満を持つ事や、王としての重責をかけられている事から「自分が何とかしなければ」と、一人で全てを抱え込んでしまう繊細な一面を持つ。名前の由来は紅「音也」から。

#### FFR/ダークキバソード

ダークキバのFFR形態。外見はファンガイアの王の証であり、その者にしか扱えない魔剣「ザンバットソード」を巨大化した物だが、柄の部分がキバットバット？世になっているのが特徴。

#### FAR/デイトライトブラッディ

ダークキバソードのFAR。刀身が赤く染まり、振り上げる事で赤い刃の衝撃波を放つ。また、この時キバットバット？世は決め台詞『絶滅タイムだ！』と叫ぶ。切矢（きりや）レイ/仮面ライダーカリス/ジョーカー

「カリスの世界」の主人公。25歳（外見年齢）。藤原父娘が経営する「たい焼き屋・ふじはら」で住み込みのアルバイトをしており、一本結いにした長い黒髪が特徴で、藤原父娘の影響なのか関西弁で話し、困ってる人をほっとけない義理人情の厚い性格の持ち主。愛称は「キリ」。

その正体は、一万年前に封印された筈だが、四年前に黒いオーラの影響により解放されたアンデッド「ジョーカー」であり、その姿もハート2「ヒューマンスピリット」の力で人間の姿になった物である。満身創痍であった所をアマネの父親に救われ、それ以降彼の世話になっておりその恩に報いるべく働く事を決意した。しかし、ジ



ヨーカーの破壊衝動にかられ彼を殺害してしまい、その罪を償うべく全てのアンデッドを封印し終えれば自分も封印されようと考えていた。

名前の由来は、ジョーカー（「切」「札」）キリ切+レイ札、「矢」「カ  
リスアロー」から。

#### ジャックフォーム

カリスがカリスラウザーに「ハート」「ウルフフュージョン」をラウズする事でフォームチェンジ可能。複眼の色がメタルレッドに変わり、両肩には狼の爪の様な物が装着され、胸に金色の狼の絵が刻まれたアンデッドクレストが特徴である。俊敏さに長けており、そのスピードを生かし敵を倒す戦術が得意である。

必殺技は、スピニングウエーブに「狼の俊敏さ」を加え、**超スピー**  
ドで敵に接近しそれを上乗せした風を纏った手刀を叩き突ける「ジャック」  
スピニングウエーブ」。

#### FFR/カリスジョーカー

カリスのFFR形態。外見はジョーカーそのものだが、緑色の部分が赤くなったものである。ハートカテゴリーの力を一枚一回のみ、ラウズせずに発動する事が可能（しかし、元がライダーなのでカリスの状態の時の様にカードを使用する事が可能な為、実質二回同じ力を使う事が出来、カリスアローも使用可能）。本編では語らなかつたが、このFFRの影響によりジョーカーの破壊衝動は完全に制御された（**デイルイト**曰く、「彼を救う為の力」）。

#### FAR/デイルイトリッパー

カリスジョーカーのFAR。掌に籠めた赤いアンデッドエネルギーをライトブッカー・ソードモードの刀身に移し、デイルイトが敵を斬り裂く必殺技。

## カブキ/仮面ライダー歌舞鬼

「歌舞鬼の世界」の主人公。35歳。孤児院「かぶきの庵」の院長。本名は神逆（かみさか）カムイ。肩まで伸びたボサついた黒髪に鋭い目に無精髭が特徴で近寄りたいたい雰囲気を持つが、面倒見が良く子供好きだという意外な一面も持っている。しかし、後述の理由より子供以外に対しては排他的である。

嘗ては両親と妹のアスミと共に、魔化魍から人々を守る為に旅をしていたが、ある村から黒蛇の襲撃から守る依頼を受けたのだが、実際は、最初から村を捨てるつもりであり彼等に依頼したのも逃げる時間稼ぎとして利用したに過ぎなく、結果的にカブキ以外の家族は殺害されてしまった。後に、彼等を見捨てた村人達は黒蛇に殺害され、カブキの家族の犠牲は無意味となってしまった。

その事件以降、人々を守る事を放棄し自身と同じ境遇の子供達を救い、守る為にのみ生きる事を決めた。

## FFR/カブキアニマルディスク

歌舞鬼のFFR形態。外見は巨大な黒と黄色の模様が特徴のアニマルディスク。他にも巨大な消炭鴉を模した「カブキケシズミガラス」に変型する事も可能。本編では語らなかつたが、デイルイトがぶら下がって飛翔し、空中から攻撃するという方法も可能である。

## FAR/デイルイトハウリング

カブキアニマルディスク（ケシズミガラス）のFAR。アニマルディスクモードからケシズミガラスモードに変型し、翼を広げて清めの超音波を放つ。因みにこの超音波は人間には綺麗な音色に聞こえるが、魔化魍にとっては不快な音波にしか聞こえない。

## 反田（はんだ）リョウタロウ/仮面ライダーネガ電王

「ネガ電王の世界」の主人公。16歳。黒髪のショートヘアに紫色の瞳と、中性的な顔立ちをした青年。大人しい性格で運も悪く、その外見からよく女と間違われるのを気にしているが、一度やると決めた事は最後までやり通す強い意志を持っている。

姉のアイリがユニコーンイマジンに記憶を奪われ、事故で亡くした婚約者・葉月（はづき）ユウトの記憶を失くした事で、前述の性格故その記憶を取り戻す事に苦悩している。名前の由来はネガ「反」転＋野上「良太郎」から。

## クローフォーム

猫型イマジン・ペルシアが憑依しデンオウベルトの茶色のボタンを押しパスをセタッチする事で変身。特徴は三本の茶色の爪を模した電仮面と、両肩に三本の茶色の爪が装着された茶色のロッドフォームのオーラアーマーである。手の甲の専用武器「ペルクロー」で敵を切り裂く前衛タイプだが、猫の様に柔軟な動きも持ち回避力は高い。

必殺技はペルクローにフリーエネルギーをフルチャージし、クロスさせた腕を振り上げ爪型の斬撃を飛ばす「スクラッチクロス」。

変身時の決め台詞は「あんだ、あたしに引っ搔かれてみる？」。

## シールドフォーム

山羊型イマジン・カプラが憑依しベルトの灰色のボタンを押しパスをセタッチする事で変身。特徴は右が白、左が黒の山羊の角を模した電仮面と灰色のアックスフォームのオーラアーマーである。

自身の電仮面を模した盾「カプールド」で敵を押し退けるといいう奇妙な攻撃を得意とさる。無論通常の盾の様に攻撃を防御出来、自身も防御力が高い。

必殺技はカプールドで防いだダメージをフリーエネルギーに変換し一気に放出する「リバースペイン」。

変身時の台詞は「楯突く者には、痛みでお返ししますわ！」。

フェザーフォーム

燕型イマジン・ツバキが憑依しベルトの紺色のボタンを押しパスをセタツチする事で変身。特徴は紺色の燕の羽根を模した電仮面と紺色のウイングフォームのオーラアーマーである。

燕の羽根の形をしたブーメラン「ツバメラン」とデンガツシャー・ブーメランモードを手裏剣の様に投げ付ける攻撃が得意で、忍者の如く動きが素早く、白兵戦向きのフォームである。無論飛行能力も備えている。

必殺技はフリーエネルギーをフルチャージしたツバメランとデンガツシャー・ブーメランモードを手裏剣の様に投げ付けて敵を斬り裂く「斬双燕舞（ザンソウエンブ）」。主に複数の敵を倒すのに使われる。

決め台詞は「貴様に不幸を届けてやる！拒否は許さん！」。

FFR/ネガデンオウライナー

ネガ電王のFFR形態。外見は時の列車「デンライナー」の赤い部分に紫色の「ネガライナー」そのもの。性能はネガライナーと全く変わらず、内部のコックピットをマシンデイルイターで操縦可能。先頭車両からバルカン砲を放ち、火器も搭載されている。

FAR/デイルイトトレイン

ネガデンオウライナーのFAR。上記で語ったバルカン砲に加え、車体から黒鬼、猫、山羊、燕の形をしたミサイルを一斉射撃をする。

黒角（くずみ）ソウタ/仮面ライダーダークカブト/ビートルワーム・ジークフリード

「ダークカブトの世界」の主人公。NEO-ZECT（前・ZEC

T) 隊員。21歳。(外見年齢は16歳) 黒のウェーブがかった短髪。の青年。通常隊員の中で最も頑張り屋であり、姉思いな性格の持ち主。しかし、五年前のワームとの戦いで姉・ヒヨリに擬態したヘラクルヴァワームの姿を見て動揺し、その隙を付かれ彼女の婚約者でありZECT総帥である銀城(ぎんじょう)ヒデナリ/仮面ライダーヘラクス(彼に擬態したヘラクルヴァワーム)によりワームストーンを埋め込まれ、ネオタイプと化してしまいその影響で永遠に歳を取らなくなってしまう。

それ以降、ZECTから逃走しヒヨリからワーム化による暴走の危機を避ける為に彼女の下へは戻らず、陰ながら見守っている。尚、ネオタイプ化した事によりクロックデュアルが使用可能になった。名前の由来は黒角「黒」いカブト虫の「角」+天道「総」司から。

ビートルワーム・ジークフリード

ワームストーンを埋め込まれたソウタのワーム態。「カリスの世界」の黒いコーカサスビートルアンデッドと「キバの世界」のビートルファンガイアを複合した黒い身体に、四つの黄色い複眼、鋭い棘の様な触手が真っ直ぐ生えた背中が特徴のワーム。

防御力が高く、肉体を鋼鉄に硬化させてクロックアップ(デュアル)を使った突進攻撃が得意である。また、カブト虫である為飛翔も可能。

FFR/ゼクターダークジャッキ

ダークカブトのFFR形態。外見は黒いゼクターカブトだが、羽の部分がダークカブトの仮面であり、右足に装備可能。このFFRを装備している間、クロックアップが使用可能となる。

FAR/ディライトドロップ

ゼクターダークジャッキのFAR。ゼクターのスロットルボタンを押ししたダークカブトが再びFFRして足に装備し、クロックアップ

状態でライダージャンプをした装備者は踵落としの様にそれを降り下ろし、元に戻ったダークカブト自身もクロックアップ（デュアル）を使用し、その速度をも上乘せしたライダーキックを叩き込む。

森野（もりの）カオル／アナザーアギト

「アナザーアギトの世界」の主人公。38歳。黒いコートを羽織った黒髪のオールバックに赤いサングラスをかけた無免許医者。揉め事に巻き込まれるのが嫌いでやや拝金主義な面もあり、法外な治療費を請求する為他人から煙たがれているが、後述の理由により得たアギトの力を利用し、同じアギトの力を持つ患者を救う優しさもある。

元々は普通の人間だったが、二年前にウォーターロード・アクエリアスが弟・テツヤ／仮面ライダーアギトを抹殺するべく襲撃した際に、彼が自分を庇って死んだ後自身も左目を失明し、彼の左目を移植した時にアナザーアギトの力を得てしまう。この力を持つが故に周囲の人間から疎まれ、医師免許も剥奪され、その後はウォーターロードから逃げる為転々と旅を続け、テツヤの命を奪う切欠となったアギトの力で戦う事を拒否している。  
名前の由来は「木」野「薫」+「林」。

FFR／アナザーアギトホッパー

アナザーアギトのFFR形態。外見は専用バイク「ダークホッパー」をスライダー状にした物。要はアギトトルネイダーのアナザーアギト版。

低空飛行が可能であり、スケートボードの要領でトリッキーに動き敵を翻弄する戦術を取る。

FAR／デイトライトゲイル

アナザーアギトホッパーのFAR。飛蝗の様に勢い良く垂直に飛び

上がり、敵に斜めに向かって緑色の風を纏い、アギトの紋章を浮かばせながら急降下して搭乗したデイライトがライトブッカーで斬り裂く。

才牙（さいが）ソラ/仮面ライダーリクガ

/仮面ライダーアメイジングクウガ

「リクガの世界（アメイジングクウガの世界）」の主人公兼ヒロイン。25歳（推定）。容姿は「リュウガの世界」の羽鳥ミホ/仮面ライダーファムと瓜二つだが、前髪に黒いメツシュが入っており一人称は「オレ」と、言葉遣いも男性っぽい。性格は排他的で他人と関わるのを嫌い、特に自分を軟派してくる男性には容赦無く「急所」に蹴りを入れるが、後述の理由で他人を巻き込むのを嫌う繊細な面もあり、裸体もあまり隠そうとしない女性らしくぬ行動を取る大胆な面もある。

また登山家である為、体力も鍛えられておりスタイルも良く、その力は大木を蹴りで倒したり、片手で大岩を持つ程の怪力の持ち主である。

実は、先代の仮面ライダークウガである父親の才牙ジョウと母親である究極の闇であるン・クアマ・ゼラとの間に生まれたハーフグロングであり、驚異的な体力もグロングの血による物である。前述の性格も、自分がこの力を暴走し周囲に被害を与えないようにする為であり、アメイジングクウガの力もクアマの転移魔術によりジョウから譲り受けた物である。

「ひよんな事」からそれは失われてしまったが、後にリクガの力を覚醒させグロングの血も暴走しなくなった。

名前の由来はクウガ「空牙」「空<sup>ソラ</sup>」「牙<sup>が</sup>」。

仮面ライダーリクガ

赤い霊石アマダム「霊石チダム」が埋め込まれた黒いアークル「ランドル」により変身する仮面ライダー。外見はクウガに酷似してい

るが、角の部分が鋏形では無く、黒い牛の角の様な物である。漢字表記は「陸牙」。

あまりにも強大な力を秘めており通常の人間やグロンギには扱えないが、ソラの様なハーフグロンギと言う特殊な力を持った物にしか変身出来ない代物であり、その強さはアメイジングクウガと同等。

また、クウガの様にフォームチェンジが可能であり、その際「遥変身（ようへんしん）！」と叫ぶ。

「クウガの世界」にはダークライダーがいない為、本作オリジナルのダークライダーである。

ベヒモスフォーム（黒き紅のリクガ）

リクガの基本形態。複眼とアーマーの色は、ダークキバと同じダークレッド。クウガマイテイのと同じく全基本フォーム中、力のバランスが均等であり格闘戦に長けている。

必殺技は右足に封印エネルギーを籠め、ダークレッドの炎を纏ったライダーキック「ベヒモスレッグ」。

ナーガフォーム（黒き蒼のリクガ）

複眼とアーマーの色はダークブルーで、角の部分が黒い蛇の様な形をしている。

ドラゴンクウガ同様、スピードタイプのフォームであり、武器は先端に青い蛇が巻き付いた杖「ナーガシャフト」。尚、この武器の蛇はリクガの意思により生物の様に動かす事が可能で、相手に噛み付かせて猛毒を与える能力を持ち、グロンギが喰らうと即死する。

必殺技は、封印エネルギーを籠めたナーガシャフトを地面に突き刺した所から無数の毒を持った青い蛇のエネルギー体を相手の身体に打ち込み死に至らせる「ストリームナーガ」。



ユニコーンフォーム（黒き翠のリクガ）  
複眼とアーマーの色はダークグリーンで、角は三本の黒いドリルのような形をしている。

ペガサスクウガ同様、超感覚を用いて敵を射抜く戦術だが、ペガサスクウガと違い変身の制限時間が無い。武器は緑色のユニコーンの形をした銃「ユニコーントリガー」。緑色の角の形をした銃弾を放つ。

必殺技は、封印エネルギーを籠めたユニコーントリガーから緑色のユニコーンの形をしたエネルギー弾を放つ「バーストユニコーン」。

ギガースフォーム（黒き紫のリクガ）

複眼とアーマーの色はダークパープルで、角は小さいベヒモスのそれを逆さにした物であり、アーマーはタイタンのそれを丸っぽくした物。

タイタンクウガ同様、パワーが優れているフォームであり並の攻撃では決して仰け反らない。武器は手の甲がタイタンの胴体で、手部分がドツガハンマーのそれに似た籠手「ギガースガントレット」。必殺技は、封印エネルギーを籠めたギガースガントレットで地面を叩き付けて地震を起こし敵を爆発させる「クエイクギガス」。

FFR/リクガタウラム

リクガのFFR形態。外見はクウガの特殊マシン「マシンゴウラム」を角が黒い赤い牛の様な物にした物である。

闘牛の如く、獰猛な動作で敵に突進し倒していく。

FAR/デイトライトマタドール

リクガタウラムのFAR。黒い角で敵に超スピードで往復して激突していき、止めに全身を赤くして突進する。

## 8人のダークライダー人物紹介（後書き）

リョウタロウ「い、如何でしたか…？って、うわああっつ！いや  
っぱり面白くなかったんだ！！」

ソウタ「落ち着きなよ…。それは君じゃなくて作者の責任なんだか  
ら。」

カオル「『早く本編を始めろ！』って人もいるが、私達の事を知ら  
ない人の為の配慮や、あわよくばコラボしたい方の参考の為わざわざ  
ざ紹介すると言つらしいぞ。全く、浅ましいやり方だな…。」

ソラ「てな訳だ。これで本編…と思いきや、今度はサブキャラクタ  
ー達の人物紹介もするらしい…。本編は何時になるか分かんねえが  
皆、勘弁してやってくれ！じゃあな。」

登場人物紹介（ダークライダーの世界編）（前書き）

ミホ「今回は私達のキャラ及び設定用語、キャストを紹介するぞ！」

ナオヤ「つーか作者の野郎…進める気あんのかよ、んな事しててよお…。」

ユリ「全くだな。」

ユカ「でも私達の事も知って貰おうって意味で書いたみたいだよ？」

マヤ「まあ…でしたらこの紹介はとても大事な事ではありませんか。」

アマネ「せやな。ウチ等の事を忘れられた何か悔しいしな。」

ヒナカ「いやいや…本心は万が一、いや京が一コラボして貰うる時に参考する為だけの汚い大人の事情かもしれないアル。」

カスミ「誰それっ!?!と、兎に角皆様御覧になって下さい!?!」

## 登場人物紹介（ダークライダーの世界編）

リュウガの世界

羽鳥（はつとり）ミホ / 仮面ライダーファム

「リュウガの世界」のヒロイン。23歳。職業はカメラマン。白い帽子を被った茶髪のポニーテールと鋭いツリ目が特徴であり、性格は思い込んだら直ぐ行動と、猪突猛進なキャラで口調も男勝りだが、中々良い景色の写真を撮れずに悩む一面がある。

ライダーロワイヤルに参加した理由は、前回のバトルで行方不明になった赤竜コウイチ / 仮面ライダー龍騎（後のリュウガ）を探す事であり、ロワイヤルにもウィツシユスファイアにも興味は無い。

名前の由来はブランウイング（白「鳥」と「羽」 + 霧島「美穂」から。

オーガの世界

蛇塚（へびづか）ナオヤ / スネークオルフェノク

流星学園二年生救事部。17歳。金髪のツンツン頭が特徴の不良で、性格も偽悪的で面倒臭がり屋だが、陰湿な人間を毛嫌いしており、いじめに遭った黒深子を助ける等根は優しい。口癖は「っーか」。ギターリスト志望だったが、アーク（カイザー）オルフェノクに殺害されオルフェノクに使徒再生させられた上、その際に指に致命的な怪我を負い、二度とギターを弾けなくなってしまっ過去を持つ。

名前の由来はスネークオルフェノク「蛇」 + 海堂「直也」から。

鶴見（つるみ）ユカ / クレイソルフェノク

流星学園二年生救事部。17歳。黒髪のおさげに縁の無い眼鏡と地

味な外見と裏腹に誰とも親しく話しかける活発な性格だが、思った事ははつきりと言うやや毒舌家な少女である。オーガ散策の為、学園に潜入捜査した黒深子と親しくなり、彼女を「クミちゃん」と呼ぶ。

アーク（カイザー）オルフェノクに恋人の菊川（きくかわ）ケイタロウと共に殺害され、自身はオルフェノクに使徒再生させられた過去を持つ。

名前の由来はクレインオルフェノク「鶴」+長田「結花」から。

## ダークキバの世界

マヤ

「ダークキバの世界」のヒロイン。27歳。ファンガイア達の王妃であり、オトヤの妻。彼やビショップのタカトとは幼馴染みの間柄である。黒いロングスカートを着た腰まで届く黒い長髪と巨乳が特徴で、落ち着いた性格の持ち主だが芯も強く、オトヤを幼馴染みとして、王として、夫として愛し支えている。どんな相手でも丁寧語で話す。ファンガイア態は不明だが、キバ本編のクイーンと同じくパールシエルファンガイア（オレンジ）。

また、自身のライフェナジーを他人に分け与えると言う他のファンガイアには無い特異的な能力の持ち主である。

名前の由来は紅「真夜」から。

ユリ

「王牙親衛隊」の副隊長を務める人間の女戦士。22歳。オールバック状に茶髪をポニーテールっぽくまとめ、ツリ目が特徴である。

性格は生真面目で、オトヤに強い忠誠心と僅かな恋心を抱いており、彼に敵対する者は人間でも許さない。武器は、刀身が鞭になる特殊な剣。

元は騎士の名家の令嬢であったが、幼少の頃両親をレジエンドルガとの紛争で亡くした所をオトヤや先代の王である彼の父親に救われ、人間とファンガイアの共存を夢見る彼の理想に惹かれ親衛隊に入隊、副隊長に登り詰めた。

名前の由来は麻生「ゆり」から。

カリスの世界

藤原（ふじはら）アマネ

「カリスの世界」のヒロイン。20歳。たい焼き屋・「ふじはら」の店主。髪止めを付けた跳ね返った黒髪のショートヘアに、関西弁を話すのが特徴である。性格はかなりお転婆で口より先に手が出るタイプだが、行き倒れていたレイを父親同様面倒を見る優しい面もある。

母親は彼女が生まれた際に亡くなり、父親もジョーカーの破壊衝動にかられたレイにより殺害される。

名前の由来は栗原「天音」から。

緑川（みどりかわ）シン / 仮面ライダーランス

総合病院「BOARD」の見習い看護師。21歳。短い茶髪に緑色のメッシュを入れた青年。後述の理由から院長の坂黄（さかき）ジユンイチ / 仮面ライダーグレイブを慕っておりそれ以外の者には辛辣な態度を取る嫌味な性格。

両親を早くに亡くし荒んでいた所をジユンイチに救われ、誰もが元気でいられる世界を目指す彼の理想に惹かれた。

名前の由来はランスのカラー＝「緑」+ 禍木「慎」から。

赤麻（あかま）ハルカ / 仮面ライダーラルク

シンと同じくBOARDの見習い看護師。21歳。黒髪のショート

ヘアに赤いメツシユを入れた女性。一人称は「オレ」と男っぽい口調で話す。

女である事から色々損をし、様々な職を転々としている所をジユンイチに救われ、シン同様彼を慕い他人に対して素っ気ない態度を取る。

名前の由来はラルクのカラー＝「赤」＋「デイエンドの世界」の三輪「春香」から。

## 歌舞鬼の世界

### カスミ

「かぶきの庵」に住む少女。12歳。ヒナカとは双子の姉。前髪が切り揃った黒い長髪に、家事全般を手伝う等しっかりとした性格だがやや泣き虫な面がある。

両親を魔化魍に殺害された所をカブキに拾われて以降、彼を父親の様に慕っている。名前の由来は立花「香須実」から。

### ヒナカ

カスミとは双子の妹。12歳。姉と同じく前髪が切り揃っておりポブカットの髪型をしている。本来はよく喋り言いたい事ははっきりと言つ明るい性格だが目の前で両親を魔化魍に殺害された所を見たショックで言葉を失ってしまったている。姉と同じくカブキを慕っている。

名前の由来は立花「日菜佳」から。

### キョウスケ

「かぶきの庵」に住む少年。13歳。跳ね返った茶髪にゴーグルを着けた活発な性格。

カスミやヒナカとよく行動を共にし、彼女達と同じくカブキを慕っ



ている。口癖は「とーても〜」。  
名前の由来は桐矢「京介」から。ネガ電王の世界

反田（はんだ）アイリ

「ネガ電王の世界」のヒロイン。22歳。リヨウタロウの姉で、天文学者・葉月（はづき）ユウトの婚約者。喫茶店「星のカーテン」を営んでいる。特徴は長い黒髪に紫色の瞳でおっとりとした性格。リヨウタロウを「リヨウちゃん」と呼ぶ。この世界唯一の超異点である。

ユニコーンイマジンにより記憶を喰われ、リヨウタロウや事故死したユウトの事を忘れてしまう。その為、リヨウタロウの事も常連客の少年だと認識してしまっている。  
名前の由来は野上「愛理」から。

トキナ

ネガライナーのオーナー。年齢不詳。右に橙、左に紫色のメッシュを入れたウェーブの髪に、ネガ電王・ネガフォームの電仮面と同じ禍々しい刺青を彫った巨乳に、胸元が空いたシャツに黒いズボンが特徴の女性。口調や性格ががさつで、騒ぎを起こすネガタロス達に制裁を加える程身体能力は通常の人間のそれより高い。また、胸の谷間から珈琲を取り出したり、逆に空のカップをそれに入れるとまた同じ珈琲を取り出す等奇怪な技を持つ。

得体の知らない人物を受け入れる等度量は大きいが、その一方で時の運行についてはかなり厳しくこれを犯す者は決して許さない。

リヨウタロウと契約したイマジン（ネガタロス以外）

このイマジン達は、元はネガタロスと同じく時の狭間の中にいたはぐれイマジンであったが、リヨウタロウの「時の運行を守りたい」と言う願いを聞き入れ契約をした。

その為実体を持っているのだが、契約者であるリヨウタロウ以外の

人間にも憑依する事が可能である。  
尚、ネガタロス以外皆女性イメージンである。

#### ペルシア

2011年の現在に現れた未来人のエネルギー体が「長靴を履いた猫」の猫をイメージしたイメージン。茶色のブーツを履いた女性っぽい括れと茶色の爪を持っている白茶色の猫の姿をしている。

自由奔放な性格でギャルっぽい口調で話す。ネガタロスの事を「ネガ男（お）」と呼び、逆に彼からは「雌猫」と呼ばれる。趣味は爪磨ぎ、ネイルアート。武器は茶色の鉤爪「ペルクロー」。ネガ電王にクローフォームの力を与える。

名前の由来は「ペルシャ」猫から。

#### カプラ

2011年の現在に現れた未来人のエネルギー体が「黒山羊と白山羊」の山羊をイメージしたイメージン。右が白、左が黒色のカール状の角をした全身が灰色の女性っぽい括れを持った山羊の姿をしている。

お嬢様口調でやや高飛車な性格だが、リョウタロウには「様」付けで呼ぶ等彼には下手。ネガタロスからは「山羊女」と呼ばれる。趣味は折り紙遊びで好物は紙。武器は右が白、左が黒色の角をした灰色の山羊を象った盾「カプリード」。この盾は防御は勿論、ダメージを吸収し、灰色のエネルギー弾を放つ事も可能。ネガ電王にシールドフォームの力を与える。

名前の由来は山羊「カプリコーン」を女性っぽい名前にした物。因みに彼女のイメージンの元となる「白山羊と黒山羊」は童話では無く童謡なのは、作者曰く「他に良い童話が思い付かなかった。」との事。

#### ツバキ

2011年の現在に現れた未来人のエネルギー体が「幸せの王子」の燕をイメージしたイマジン。忍者服の様な身体をした女性っぽい括れを持った紺色の燕の姿をしている。

性格は極めて真面目でやや古風な話し方をし、四人のイマジンの中でリョウタロウに強い忠誠心を持ち彼を「主」と呼び、ネガタロスからは「燕忍者」と呼ばれる。趣味は情報収集に鍛錬。武器は紺色の燕の羽根を象ったブーメラン「ツバメラン」。ネガ電王にフェザーフォームの力を与える。

名前の由来は「燕」を女性っぽい名前にした物。

## ダークカブトの世界

黒角（くずみ）ヒヨリ

「ダークカブトの世界」のヒロイン。26歳。ソウタの姉でNEO-ZECT総帥・銀城（ぎんじょう）ヒデナリ/仮面ライダーヘラクスの婚約者。長い黒髪をポニーテール状にした清楚な雰囲気を持ち芯の強い気丈な性格で、ソウタを「ソウちゃん」と呼ぶ程弟想いだが、一度怒らせると凶暴な性格に変貌する一面も持っている。

普段はパートの仕事をしているのだが、ソウタが失踪してから少ない生活費を工面するべく、夜はキャバクラ「シルバースピリット」で働いている。

名前の由来は日下部「ひより」から。

壬銅（みどう）テツキ/仮面ライダーケタロス

NEO-ZECT行動部隊副隊長であり、闇影の部下。21歳。茶髪のツンツン頭をし、語尾に「ッス」と付ける等後輩気質でワームから人々を救う事に燃える正義感の強い性格。闇影を「隊長」と呼ぶ。

五年前から入隊しており自分にケタロスの資格を与え、部隊副隊長

に任命してくれたヒデナリの期待に応え彼を慕うが、NEO-ZE  
CTが闇影を敵と認定した事を知り、建前と本心の間で迷い悩む面  
がある。

名前の由来はケタロスのカラー「銅」+大和「鉄騎」から。アナ  
ザーアギトの世界

地羽（ちば）マナ

「アナザーアギトの世界」のヒロイン。25歳。カオルの助手で妻  
（自称）。舌つ足らずな口調に赤いショートヘアで、身長は小学二  
年生並。これは彼女にとって大きなコンプレックスであり、実年齢  
を言っても信じて貰えず、子供扱いされて相当悔しい思いをしてい  
る。

実は彼女もアギトの力を持っており（但し変身不可）、それにより  
周囲から疎外され孤独に悲しんでいる所をカオルに救われ、彼を「  
しえんしえい」と呼び恩人として、恋人として慕っている。

名前の由来は「風」谷真魚の（「風」の対義語「地」）+「真魚」  
から。

緋山（ひやま）マコト/仮面ライダーG3-X/仮面ライダーG4  
警視庁未確認生命体対策部隊所属の警察官。23歳。スポーツ狩り  
の茶髪をした体育系の男性。正義感が強く、アンノウンから人々を  
守る為に日々努力している。しかし、その正義感が強過ぎたが故に  
承認許可無くGXランチャーを使用したり、実験段階のG4システ  
ムを無断で装備する等の命令違反を度々犯している。

その理由は家族をアンノウンに殺害された過去を持っており、それ  
以降一体でも多くのアンノウンを倒す事を誓った為であり、警視庁  
に入ったのもそれが目的である。

名前の由来は氷川誠の（「氷」と「川」の対義語「火（緋）」と  
「山」）+「誠」から。

南条（なんじょう）トオル／仮面ライダーG3-X（補欠）

警視庁未確認生命体対策部隊所属の警察官。36歳。七三分けの髪型に眼鏡をかけた壮年の男性。性格はやや嫌味で捻くれており、マコトを「後輩」か「馬鹿」と呼んでいる。

元はG3-Xの装置志望者のだが、身体能力がマコトより劣る為補欠要員として扱われた。前述の性格も相俟ってマコトを恨んでいると思いきや、内心彼の事を心配する先輩らしき一面を持っている。名前の由来は北条透の（「北」の対義語「南」）+「透」から。

大澤（おおさわ）スミコ

警視庁未確認生命体対策部隊の主任であり、G3-XやG4システムの開発責任者。29歳。ユリの様にオールバック状に巻いた黒髪が特徴。規律正しい性格でありそれを守らない人間を嫌っており、マコトの度重なる命令違反に頭を悩ませている。

名前の由来は小沢澄子の（「小」の対義語「大」）+「澄子」から。

森野（もりの）テツヤ／仮面ライダーアギト

カオルの弟。享年30歳。二年前に自身を抹殺しようとしたウオーターロード・アクエリアスと交戦中、カオルが彼を守るべくウオーターロードを妨害しそれによりその矛先をカオルに変更しその攻撃から彼を庇い致命傷を負い、予知夢によりカオルがこの事件により左目を失明する事を知り、死に際に自分の左目を移植する様頼み死亡した。

名前の由来は津上翔一の本名・沢木「哲也」から。

リクガの世界（アメイジングクウガの世界）

才牙（さいが）ジヨウウ／仮面ライダークウガ（先代）

クアマの夫であり、ソラの父親。享年29歳。十数年前に「究極の闇」であるクアマと結婚、ソラを儲ける。しかし、それはグロンギの間では禁忌でありそれによりグロンギ達から命を狙われる様になる。その際にグロンギの血が暴走したソラを止める為、自身のクウガの力をクアマの能力により抜き取り彼女に移し死亡。それほど、クアマやソラの事を心から愛していた。

名前の由来はオリジナルクウガの「中の人の名前」から。

ソ・クアマ・ゼラ

ジヨウの妻であり、ソラの母親。享年28歳（人間の外見年齢）。人間体は赤いドレスを着た腰まで届く長い黒髪に、ツリ目で黒い口紅を塗った妖艶な雰囲気を持った女性。グロンギ態は黒い角と赤い悪魔の様な姿をしている。この世界における「究極の闇」であるが、元々グロンギ達の中で珍しく戦いを嫌う性格をしており、ジヨウの優しさに触れたのを相俟って彼に惹かれ結婚、ソラを出産する。

転移能力を保有しており、これにより暴走したソラにジヨウから抜き取ったクウガの力を彼女に移した。しかし、その際彼女はジヨウを庇ってソラの攻撃を受けて致命傷を負い、最終転移術「転魔譲移（てんまじょうい）」を使用した直後に死亡。その後は魂としてソラを見守っている。時間は限られているが他人の身体に憑依し現世に実体化をする事が可能。ジヨウと同じくソラを愛していた。

名前の由来は「悪魔」のアナグラムから。設定用語

#### ・闇の牢獄

心の中にある負の感情が一定以上に高まると、「もう一つの自分」を名乗る黒い影が現れ、怪人になるかならないかの選択肢を説いて来る現象。それに応じるとそのライダーの世界に準じた怪人の力を得、拒否すると死んでしまう。（例：クウガの世界だとグロンギに、555の世界だとオルフェノクになる。）

但し、一度命を落としてこの現象に遭った者は自動的にオルフェノ

クと化す。(黒深子がその例)

・ライダーロワイアル

「リユウガの世界」で三年に一度行われるライダーバトル。十三人のライダーが互いに戦い合い、最後に勝ち残った者はどんな願いでも叶える水晶「ウィツシユスファイア」の獲得権を得る。

・ワームストーン

見た目は緑色の石。これを埋め込まれた生物は全身の細胞をワームのそれに変わり、最後には完全なワームと化してしまう。

・ネオタイプ

上記のワームストーンにより細胞はワームと化しているが、意識は元の人格である人間。所謂、人間とワームの融合体。しかし、それには強靱な精神力を持たねば忽ち意識は完全にワームの物となってしまう。長時間ワーム状態にいる場合でも同じ。

無論通常のワームの様にクロックアップも使用出来るが、人間の状態でそれが使える。また身体の一部のみをワーム化する事も可。

・クロックデュアル

上記の者がマスクドライバーシステムで変身したライダーのみが使えるクロックアップの亜種。ライダーシステムのクロックアップとワームのそれを同時発動する事により発動。速度はその2乗。しかし、長時間多様するとその反動により体力を大幅に消耗するデメリットがある。

・禁断の闇

グロンギ達の頂点である「究極の闇」を超えた力。これになる為には「同族同士で最後の一人になるまで殺し合う」と言う異質なゲゲルを行わなければならない。その資格を得た者は強大な力が手に入

るが、「同族殺し」の罪を背負い、その代償として頭の文字を失いグロンギではなくなる。生物をグロンギ化させる黒いオーラを放つ能力を持つ。これによりグロンギと化した生物は、死んで生き返っても永久にグロンギにしか生まれ変われなくなる。但し、リクガに倒されればそれは無効となる。 脳内キャスト一覧

煌闇影…草尾毅

白石黒深子…名塚佳織

赤竜コウイチ…吉野裕行

諸刃ツルギ…桑島法子

彩盗巡…伊藤静

戴問周…平田広明

羽鳥ミホノ才牙ソラ…進藤尚美

相馬ユウジ…下野紘

鶴見ユカ…田村ゆかり

蛇塚ナオヤ…うえだゆうじ

薔薇ノ宮キョウジ…高杉J a y 一 郎

オトヤ…松風雅也

マヤ…篠原恵美



キバツトバツト二世…杉田智和  
ユリ…住友優子  
ルーク…高原知秀  
タカト…辻谷耕史

切矢レイ…遠近孝一  
藤原アマネ…高木礼子  
緑川シン…鈴木千尋  
赤麻ハルカ…木内レイコ  
坂黄ジュンイチ…池田秀一

カブキ…浜田賢二  
カスミノヒナカ…釘宮理恵  
キョウスケ…竹内順子  
アスミ…かかずゆみ

反田リョウタロウ…木村亜希子  
反田アイリ…川澄綾子  
ネガタロス…緑川光  
ペルシア…柚木涼香  
カプラ…根谷美智子  
ツバキ…今井由香  
トキナ…平松晶子

黒角ソウタ…保志総一朗  
黒角ヒヨリ…雪野五月

壬銅テツキ…山口勝平  
銀城ヒデナリ…千葉進歩

森野カオル…大塚明夫  
地羽マナ…水谷優子  
緋山マコト…関智一  
大澤スミコ…小山茉美  
南条トオル…八嶋智人  
マスター…富田耕生  
森野テツヤ…陶山章央

才牙ジヨウ…高橋広樹  
ン・クアマ・ゼラ…緒方恵美

カイザールフェノク…真柴摩利  
黒蛇…勝生真砂子  
ユニコーンイマジン…小杉十郎太  
ウォーターロード・アクエリアス…茶風林  
ヴェトア・ゼツ…黒田崇矢

謎の青年…鳥海浩輔

野上良太郎…佐藤健

白石影魅璃…井上喜久子

紅蓮…皆川純子

登場人物紹介（ダークライダーの世界編）（後書き）

アイリ「全部読んで下さってお疲れ様です。珈琲をどうぞ」

トキナ「あたしからもあるよ。ほれっ！（谷間から珈琲を取り出す）

」

ペルシア「無駄に長かったわね。」

カプラ「全くですね。この長つたらしい苦痛は作者にお返ししますわ！」

ツバキ「キャストも何だか微妙であるな…。」

テツキ「まあ、作者の技量ならあの程度ツスよね。」

ヒヨリ「皆さん如何でしたか？私を気に入ったのでしたらお店の方まで来やがれ（満面の笑みで）」

マナ「マナがあんなオチビとおなじこえらなんて！だんここうぎしゆるー！！」

ジヨウ「まあまあ…これで一通りダークライダー編の詳細は全部説明したかな？次回からは今度こそ本編開始らしい…是非見てやってくれ！」

クアマ「ふっ、最期は我が…。次回は闇影とやらの過去が明らかになる…奴が死神と呼ばれた理由、謎の鬼との出会いが奴をどう変えたのか…次回を楽しみにしている。さらばだ…。」

## 第21導 デイライト・ピギンズライト〜眩き出会い〜（前書き）

闇影「読者の皆さん、お待たせしました！！本日より『仮面ライダー・デイライト - 世界の光導者 -』第二部がスタートします！！」

黒深子「今回は先生の過去の話です。先生の過去かあ…とても気になるわ。」

コウイチ「あいつがどういう経緯でデイライトになったのが漸く分かるんだな…。」

ツルギ「ウジ虫（作者）曰く、見たら一部の方は頭バカーン！！になるかもしれない…って言ってました…。」

巡「まあ、ならない方がおかしいって言うのは間違いじゃないわね。」

周「それは実際見て見ねえと分かんねえよ…まっ、適当に読んでやってくれ。」

ツルギ、ウジ虫と書いて作者と読まないでくれ…（T-T）オッホーン！それではデイライト第二部開幕です！！

全員『どうぞ御覧下さいっ！…！…！…！…！…！』

## 第21導 デイライト・ピギンズライト〜眩き出会い〜

これまでの仮面ライダーデイライトは…

地球が、世界が闇に染まっている…。

デイライト。貴方には9つの影の世界を救う旅に出てもらいます。貴方にしか出来ないんです。『闇を操る光の戦士』である貴方にしか…。

野上良太郎が語る、全世界で人間が異形の姿に変わる恐ろしい現象…。

世界が闇に支配されるなら…俺が光へ導いてやる！

それを救う為に9つの影の世界を旅する決意をした煌闇影こと、仮面ライダーデイライト…。

これは、私にしか出来ない事を探す旅なの…。

言っただろ？大切な人を守る旅に出るって。

私を…貴方達の旅に連れて行って下さい！

その旅の道中に新たな仲間を加え、数々の世界を光へ導いていった。そして…

久しぶりね、闇影君。

この世界の宝は、俺様達が戴くから邪魔すんなよな。

彼の過去を知る彩盗巡と戴問周こと、デイシーフとディスタイル  
…。

彼等の介入等紆余曲折もあり、遂に9つの影の世界を全て光へ導いた…。

ウククク…おめでとう闇影。いや、「緋眼の死神」…。

デイルイト…貴様は全ての世界に在ってはならない存在…。

デイルイトとは一体何者なのか？全てを焼き尽くす灰塵者なのか？  
それとも…？

お節介教師な仮面ライダーだ！！宜しく！！ 白石家

「…で、ここでこの公式を使うと…っとなるんだ。」

「うん…うん…！！出来た！！」

あれから9つの影の世界の旅が終わって数日経つが、未だに何の変  
化も無く暇を持て余している闇影は今、黒深子に勉強の師事をして  
いる。但し、彼女が解いている問題は大学レベルの物だった。

元々黒深子は成績が優秀である為通常の高校の問題は全て解く事が  
出来、「それなら大学の勉強でもしないか」と言う闇影の提案に賛  
成し現在に至る。そして、彼から話を聞く黒深子はそれをゆっく

り解いていき問題を全て終わらせた。

「どれどれ、うん…うむ…全部正解だよ！凄いじゃないか黒深子！  
！今日教えたばかりの問題が全部出来てるよ。」

「先生の教え方が上手かったただだよ。／／／／」

問題の採点を終えた闇影は、それが全問正解だった為黒深子の飲み込みの速さを賞賛した。彼女は彼の教え方が上手いだけだと謙遜するが闇影は首を横に小さく振り…

「俺はあくまで基礎を教えただけさ。それを上手く応用出来たのは君の実力だよ。」

「先生…。／／／」

と、にこやかに彼女自身の実力だと言う。

「お〜い、イチャついてるとこに水を差して悪いんだが俺等が居んのを忘れんなよ。」

「……。／／／」

「なっ！／／／何言ってるんだコウイチ！？別にイチャついてなんか…！！／／／」

そこにコウイチの声が耳に入り、そちらに視界を移した闇影は顔を赤くして否定し、ツルギも何故か顔を赤くしている。…ここで黒深子が少しムツとしたのは秘密の話。



「まっ、良いけどよ。にしても黒深子ちゃん、ホント凄えよな。俺なんか聞いてもさっぱり分かんねえし。」

「本当ですね。私も勉強を習いたいです…。」

「なら今度見てあげるよ。…コウイチはどうする?」

ツルギの言葉を聞き今度彼女の勉強を見る事を約束した闇影。コウイチにも参加をするかを少し意地悪な笑みで尋ねたが「いや、いい。」と断られた。

「先生つてホント何でも出来るんだねえ…戦いも強いし料理も上手いし頭も良いし、何よりとても優しい!ねえ、先生は誰から勉強を習ったの?」

知性も高く、腕も器用で容姿も優れておりライダーとしても強い闇影を、正に「完璧超人」だと賞賛する黒深子。そんな完璧超人に誰からそれ程の実力を教え込まれたのかを尋ねた。

「…俺の両親が学者だったからその下で育っただけだよ。…もういないけどね。」

「「「!?!?!?」「」」

闇影は黒深子の質問に少し悲しい表情をして語った。彼の両親は当に亡くなっていたのだった。

「「「っ、っめんなさい!嫌な事思い出させちゃって!」」

「いや、大丈夫だよ。」

自分の軽はずみな質問のせいで闇影に両親の死を思い出させてしまった事を深く詫びる黒深子。しかし彼は首を横に振り大丈夫だと言う。

「なつ、なら質問を変えてよお！お前、何処でデイトの力を手に入れたんだ？」

重い空気が流れそうになり、何とか話題を切り換えようとするコウイチは別の質問をし、闇影が何処でデイトの力を得たのかを尋ねた。

「…この力は『ある人』が封印を施した事で生まれた物なんだ…。」

「えっ？」

「…悪い。あまり具合が良くないから少し昼寝でもしてくる…。」

デイトドライバーを取り出してそう呟く様に話す闇影は、またも浮かない表情をして質問には完全に答えず、昼寝をしようとって部屋を後にした。

「…もしかしてこれも余計な事だった？」

「…みたいですね…。」

「でも先生ってあまり自分の事を話したりしないわね…。」

またしても重い空気になり、気まずい表情をするコウイチ。それを少し呆れた目で見るツルギ。黒深子は自分の過去を話そうとしない

闇影を心配している。「封印を施して生まれた」ディライトの力とは何なのか、それを頭の中で考えていると…

「話せない程へビーな過去だからよ。」

「やっぱりまだ話してなかったんだな…。」

「「「!!!?」「」」

三人が驚き振り向くと、居ない筈の巡と周の姿がそこにあった。テーブルに座り上に赤い何かを乗せたプリンを食べながら…。

「巡さん、戴問さん。いつの間に!?!?って言うか人の家のプリンを食べないで下さい!」

「まあ、それは気にしないで 彼が話さないのなら私達が話してあげるわ。闇影君の過去を…。」

「気にします!?!?って、えっ!?!?」

「まっ、野郎の口から言うのが普通なんだが…何れは知らねえとヤバイ事態になった時の事も考えねえとな。」

「先生の…過去…。」

と、何やら意味深な言葉を口にしながらも巡と周は、黒深子達に闇影の過去についてを語り出す…。

## 闇影の部屋

「…俺は…人から思われる程立派な人間じゃない…。だって、『七年前のあの時』の俺は…。」

ベッドでうつ伏せになった闇影も、自身の過去について思い返し始めた。七年前の過去を…。

世界の光導者、デイライト！9つの影の世界を巡り終え、その瞳は、何を照らす？ 七年前

『ギヤアアアツツ！！』

『なっ、何なんだこいつ！？ たった一人で…ウツ、ウギヤアアアツツ！！』

『……………』

とある世界 空が暗く、荒れ果てた荒野で、一体の怪人は同胞を倒した「何者」かを見て愕然としており、直ぐ様その者からの攻撃を受けて爆死した。

『…これでこの世界の怪人は全て死んだか…。』

腰の紫色のカメラ型のバックルに、全身が闇を思わせる紫のスーツに刺さった、闇を思わせる黒いプレート、そして憎悪の炎を思わせ

る禍々しい赤き複眼が特徴の「世界の灰塵者」の称号を持ちし戦士「仮面ライダーディシエイド」は先程倒した怪人の死骸を、氷の様に冷たく見下した。

周囲には彼が抹殺した怪人達の惨たらしい首、腕、足、目玉や肉片があちこちに飛散し、その下は赤く濁った血で染まっていた…。そして、先程倒した怪人でこの世界の怪人は全て死滅した様だ。

「おお、あんたがこいつ等を全部退治してくれたのか…。ありがとうございます。あの連中には儂を初め、ここの者達は家族を奴等に殺され残った儂等もどうしたらいいのか困っていた時にあんたがそ奴等を退治してくれた。これは…神の救いだ。」

そこに岩陰に隠れていた一人の傷付いた老人の男性が現れ、彼だけではなく十数人の女子供や老人も顔を出した。どうやら彼等は、先程ディシエイドが倒した怪人達により家族を殺され、大切な物も良い様に蹂躪されていた為、それ等を倒したディシエイドを「神の救い」だと崇めた。

『……………』

ディシエイドは無言でその老人に近付いた。これを見た者は、心身共に傷付いた老人に「もう大丈夫ですよ。」と救いの手を差し伸べる物だと思うだろう。が…『何勘違いしてるんだ?』

「あぐつ!!?!? なつ! 何故…!!?!?」

それは見事に裏切られ、ディシエイドは紫色の四角いカードホルダー型の剣「シエイドブッカー・ソードモード」で老人の心臓を突き刺した。老人は突然の裏切りに戸惑う暇も無く倒れ、絶命した。

『俺の目的はこの世界を焼き尽くす事…。あの屑共がこの世界を人間を殆ど殺したのを見計らい始末し…』

デিশェイドの目的、それはこの世界その物を焼き尽くす事であり、怪人達が人口の殆どを抹殺し数少なくなつた所で倒す…。そこまで淡々と語りながらシェイドブツカーの刃に手を滑らせると…

『残つた人間は全て俺が始末する…。悪く思うなよ。』

「ヒッ！！ヒイイツッ…た、助け…ギャッ！！」

「あんたは人間じゃない…人の皮を被つた悪魔だ！！ギャアッ！！」

「この子だけは…この子だけは助け…キャアアアッ！！」

「ママーッ！！」

再び構えて、生き残つた人々を躊躇い無く斬り殺し、時にはガンモードで撃ち殺していった。命を乞う叫び声、デিশェイドを悪魔だと言つ罵倒する言葉、親を殺され悲しみ泣き叫ぶ幼子…そんな彼等の血飛沫や飛散する肉片を見ても、恐怖の叫びを聞いても尚、デিশェイドは一切無言だった。

『安心しろ…痛みを感じる間も無く消してやる…。』

【ATTACK - RIDE TIME!】

そう言つとデিশェイドは、ドライバーに「仮面ライダーブレイド」のアタックライド「スカラベタイム」を発動し自分以外の全ての時間を停止させ、逃げ惑う人々の動きを止めた。更に…

『全て…焼き尽くす…!!』

【FINAL - ATTACK - RIDER: ZO・ZO・ZO・ZO  
LDA!】

何と「仮面ライダーゾルダ」のFARを発動した。すると、彼の頭上から緑色のミノタウロスと二足歩行ロボットを合わせた契約モンスター「マグナギガ」が舞い降りた。そしてマグナギガの背中にシールドブッカー・ガンモードをセットし引き金（トリガー）を引くと…。

『エンドオブワールド…』

ゾルダのFAR「エンドオブワールド」が発動され、マグナギガの全身から無数のミサイルやレーザーが放たれ、当然タイムの力で身動きが取れない人々は虐殺される運命に終わった…。

『これで「任務完了」だな…』

全てが燃え盛り、後は焼き尽くされるだけの世界をディシエイドが後にしようとした時…

「ねえ…ぱばとままは、どこ？えほんをよんでほしいのに…」

そこにまだ生き残っていた小さな一人の少女が両親が何処にいるのかを彼に尋ねた。その両親を殺した張本人だと気付かずに…。ディシエイドは彼女に近付き…

『安心しろ…直ぐ会わせてやる。』

そう言った瞬間、少女の意識はそこで途切れた…。何故なら、彼女の脳天に銃撃により貫かれたからである…。すると、灰色のオーロラが現れ、デイシエイドがそれを潜った瞬間、この世界は完全に消滅した…。

とある基地

「任務は完了した…。」

「ご苦労、デイシエイド。いや、煌闇影君。「緋眼の死神」…。」

真っ黒な長い階段の下でポケットに手をつ突っ込む黒いフード付きのローブを着込み、両目を赤く輝かせた金色の長い髪をポニーテール状にし、右耳に金色の太陽の形をしたピアスをした青年。仮面ライダー・デイシエイドこと煌闇影は、冷たい表情で階段の上にいる謎の人物に任務完了の報告をした。

「……………」

これまでの君の仕事ぶりには目に余るよ。三年前にこの『ダークショッカー』に入り、その僅か一年後に君は幹部にまで登り詰めた…。それからは私の指示通りに仕事をこなしていきとても助かるよ。

「下らん話はい…。それより忘れてはいないな？俺の望みを…。」



勿論だとも。君が「とある目的」の為にここの技術研究施設の技術長になり施設を好きに使う事を…その見返りに私が指示した世界を破壊する…という事をね。

闇影がこの「ダークシヨッカー」に所属し幹部になった理由、それは「ある目的」の為にここの研究施設を使用する事であり、条件として指示された世界を破壊する事である。

「そろそろいいか？俺はまた研究に入りたいんだがな。」

構わんよ。もう下がって良い。ああ、それと一つだけ。今日から君に部下を二人つく事になるから宜しく頼む。

闇影が研究の為此の場から立ち去ろうと踵を返した時、階段の上にいる謎の人物から自分の下に部下が付くという話を聞くが、まるで興味は無くその場を後にした。

## 研究室

「こいつにはこの細胞が適合するな…。ならこれで…」

広い空間の周囲に、怪人や人間が入ったガラス張りの培養カプセルが無数にあり、闇影はその中心の手術室にある様な台の上に寝かせてある実験体らしき「者」に、何かしらの措置を施している。

「闇影様、貴方に用事があるとの事で…」

「ちっ…!!」

そこに一人の研究員が現れ、闇影に用事がある者が尋ねて来た様だった。恐らく先程言っていた自分の部下の事だろう。そう思った闇影は舌打ちをしながらその部下に会いに行った。

「お目にかかれて光栄です。私、彩盗巡と申します。」

「戴問周…。んだよ、カワイコちゃんだと思ったら野郎かよ…。」

銀髪のショートヘアにボディラインがくっきり見える黒タイトスの大人びた少女・巡とウエーブの黒髪の後ろ髪の一部をくくった同じ黒タイトスの少年・周が挨拶に来たが、闇影は…

「ふん、貴様達に頼める仕事等無い。用が済んだらさっさと消えろ。」

と冷淡な態度で応対し、研究室を出る様吐き捨てた。

「随分冷血な上司様で。うっひゃ……凄えなこれ…お！一番奥に美少女の裸ハツケ〜ン!!」

「何…!?!」

「ど〜ね。もうちょい下の方から覗いて…うおっ!?!」

闇影の言葉を見無視した二人は研究室の周囲を見て回った。そこで周

は、一番奥にある中に長い髪をした全裸の少女が入った培養カプセルを見つげよく見る為にカプセルに触れようとした時…

「そいつに触るな、ゴミが…!!」

シェイドブッカー・ガンモードの銃撃が周の頬をかすった。背後から撃った闇影は殺意の籠った表情で睨んでいた。

「…の野郎…いい気になってんじゃね…ガボツ!？」

当然それに頭に来た周は、闇影をぶん殴ろうとズカズカ近付こうとしたが、巡が周の頭に思い切り拳骨を喰らわせた。

「申し訳ありません…。彼の無礼はこれでお許し願えますか？」

そして闇影に、周の行動を許す様詫び跪いた。

「ちっ、さっさと消えろ…目障りだ。」

「ありがとうございます。行くわよ、周。失礼致しました。」

「ケツ…!!」

それを聞いた巡は、苛ついてる周と共に研究室を後にした。

「くそ、あの野郎…俺様の顔に傷を付けやがって…!!巡ちゃんも何であんな野郎なんか頭に下げたんだよ!!」

かすった頬に手をやり闇影の尊大な態度に憤る周は、巡に何故彼に頭を下げたのかを尋ねた。すると巡は胸元から黒い小型の機械を取り出し小さく笑う…。

「ふふ、良いのよこれで あの子の身体に盗聴器を忍ばせておいたわ。これで何処に『アレ』があるか分かる筈…。」

「いつの間に…。」

巡が闇影に近付いた、いや、二人がそもそもこのダーククシヨツカーに潜り込んだのは「ある物」を手に入る為だったのだ。それには幹部である闇影に近付き、盗聴器を付けて彼の言葉からそれが何処にあるのかを知る必要があった。

「さて、様子は…」

巡が盗聴器に耳を当てると…

## 研究室

「すまない。大丈夫か？あんな奴に触られるなんて嫌なんだよな？俺があいつ等を此処に入れたのが間違ってたんだ。本当に、すまない…。」

闇影は先程の少女が入ったカプセルに手をやり、周の行動について何度も謝っている。先程までの冷たい表情とは違って変わり呪詛の如く少女に謝り続けていた。

「もう少しだけ待っていてくれ … 必ずお前を … から…。くくくく…。」

闇影はカプセルに手に当てる力を増して、左耳に銀色の月のピアスを付けた少女に語りかける。赤い目をドロツと濁らせて、口を三日月の様に妖しい笑みを浮かべて笑っていた…。

「……………！！！」

その時、設置してあるパソコンからアラームが鳴り出し、それに目をやる闇影。

「ちつ、また任務か…。少し待っていてくれるか？直ぐ戻ってくるかな。」

パソコンからの内容、それは新しい任務を知らせる物だった。舌打ちした闇影はカプセルの少女に任務に出る事を告げて、研究室を後にした。

「今の話…本気で言ってるのかしら？」

「だとしたら相当イカれてるぜ…あいつ。」

盗聴器で今の話を聞いた巡と周は、闇影の目的を知り愕然としていた。

## とある世界の荒野

「…この世界も大分人が減っているようだ…。まあ俺にはそんな事はどうでもいい…早く片付けるか…。」

灰色のオーロラから現れた闇影は、この世界の人間が減っている事を「どうでもいい」と一蹴する。いや、それだけではない…自分自身の目的以外の全て無関心であった。そう思いながら歩いていると…

「ん？あれは…。」

『グガガガ！！人間の「肉」ってのはいつ喰っても美味えな…。』

『ああ…ホントだな兄貴。ギギギギ…！！』

そこには、通常のそれより身長が一回り大きく体格の良い二体の魔化魍、「兄貴」と呼ばれた金色の身体に黒い角を生やした「金角」と同じ身体に角を生やしているが、此方は体色が銀色で眼が一つだけである「銀角」は、人間の頭を鷲掴みにしてそれを思い切り楯っていた。その傍らに数十体の死骸が転がっている事から、この世界の人々は奴等によってほぼ殺害された様である…。

「おい、そのデカブツ二匹。最後の晚餐は済んだか？」

そこへ颯爽と近付いた闇影は、金角と銀角に喧嘩を売る様な口調で話し掛けた。無論、餌だと思っている人間如きにそんな口を叩かれて只で済ます程、この魔化魍は甘くない。

『ああ？何だその人間（エサ）…。』

『俺様達最強の魔化魍である「金銀角兄弟」にんな口利くつてこたあ、自殺志願者か？』

「違うな…俺は貴様等を始末しに現れたんだ…。この世界の人間を全て始末してくれた貴様等をな…！」

闇影は、目を赤く光らせて無表情な顔のまま紫色のカメラ型のアイテム「デイシエイドライバー」を腰に当てるとそこからベルトが伸びて巻き付いた。そして…

「変身…。」

【KAMEN・RIDE…DISHADE!】

紫色のライダーが描かれたカードをドライバーに装填すると、闇影はデイシエイドに変身した。

『俺の眼に映つた者は…全て、焼き尽くす…!!』

『ほざいてんじゃねえ!!人間風情…!!』

デイシエイドの挑発らしき台詞に頭に来た金角はその巨大な右腕をハンマーの様に降り降ろし彼を叩き潰した…

『がっ…!?ギイヤアアアツツツ…!!』

『あ、兄貴!?!』

…筈がそれより前にデイシエイドは、シエイドブッカー・ソードモ

ードで一瞬で彼の右腕を撥ね飛ばした。あまりの激痛に斬られた部分から血を流しながら悲鳴をあげる金角。

『……………!!』

『アツギヤアアツツ!!?ガツ!!グウツ!!ゲエアアツツ!!』

『このクソ人間……!!只で済むと思っ……!!』

ディシエイドは無言のまま、シエイドブッカーで金角を幾度も斬り付けて圧倒していく。銀角は、背後から両腕を降り降りしディシエイドを叩き殺そうとしたが……

『……………ツ!!』

『イギヤアアツツ!!?うつ、腕がああっつ!!?』

僅かに背後を向き、銀角の両腕を一瞬で斬り落とした。そして再び金角の方に目をやり……

『鬼にはこいつで止めを刺すか……。』

【FINAL - ATTACK - RIDE……DE・DE・DE・DE  
N・O!】

『エクストリームスラッシュ……ふっ!!』

『ギィヤアアアツツ!!……!!』



デিশェイドは、金角の外見が「鬼」に見えると言いながら「仮面ライダー電王」のFARを発動し、ソードフォームの必殺技「エクストリームスラッシュ」を使い、刀身に赤いフリーエネルギーを籠めたシェイドブッカーを振り上げて金角に斬り付けて爆発させた。

『あつ、兄貴！！ヒツ…ヒイイイツツツ！！！！たつ、助けてく…！！』

「最強の魔化魍」だと自負していた自分達が目の前の、それも餌だと見下していた筈の人間によってあつさり兄・金角を倒された事に恐怖した銀角は、デিশェイドから逃げ出そうとしたが…

【ATTACK - RIDE…CLOCK - UP！】

『尻尾を巻いて逃げるのが「最強の魔化魍」だとはな…化物の命乞い程見苦しい物は無い…。』

『れっ！？ヒツ…！？ヒギヤアアツツ！！！？』

デিশェイドは「カブトの世界」のライダー達が共通して持つ超加速システム「クロックアップ」を使い、銀角の横に瞬時に現れ顔面を殴打した。

『た、頼む！！も、もう人を喰つたりはしねえから、い、命だけは見逃してく…！！』

倒れた銀角は、デিশェイドに命を助ける様懇願、命乞いをした。しかし…

『…れあつ…！？』

『言った筈だ…俺のこの眼に映った奴は必ず焼き尽くすと…。』

【ATTACK - RIDE…ONIBI!】

シェイドブッカー・ソードモードで首を撥ね飛ばし、分かれた身体と頭に彼等魔化魍を討伐する戦鬼「仮面ライダー響鬼」の「鬼火」を発動し、掌から紫色の炎を放って消炭にした…。

彼の眼に映った者は、絶対の死を約束される…。それがシェイド（闇影）が「緋眼の死神」だと謳われるが所以だった…。

「命乞いしてる奴を躊躇い無く殺すなんて…容赦無いねえ…青年。」

『!?!?』

そこへシェイドの無慈悲なやり方を飄々とした口調で指摘する、銀色がかった柔らかく尖った白髪に左目に掛かった黒い眼帯、下は黒ズボンの、銀色の着流しの上に茶色のジャケットを着込んだ三十台前半の男性が現れた。

「まつ、仏さんがとんでもない人喰いだった事を踏まえればどっちもどっちなんだけどねえ…。」

『誰だ貴様は…?』

「成程…お前が『あいつ』の言ってたシェイドか。」

『何故、俺の名を知っている…?!?』

謎の男は、頭をポリポリ掻きながら彼がディシエイドだと口にした。ディシエイドは彼が自分の名を知っている事に驚きながら睨み付ける。

「凄まじい邪気と殺気を感じるねえ…ここは少し『稽古』をつけてやるか…。」

ディシエイドの尋常でない邪気と殺気を感じ取った男は、彼に「稽古」をつけると言いながら懐から全身が銀色の音叉を取り出した。

『それは…音角!!まさか貴様…!?!』

「そう言やあ、自己紹介がまだだったな。俺の名はマバユキ、お節介な鬼のおじさんさ…青年。」

謎の男・マバユキは、尚も飄々とした口調で自己紹介をし音角を指で弾いてそれを額に近付けると、そこに鬼の紋章を浮かべて全身が銀色の炎に包まれ…

『眩鬼(まばゆき)…推参!!……つてね。』

腕を振り払うと炎は止み、マバユキは外見は装甲響鬼に酷似しているが、体色が銀色で、のっぺりした複眼は黒では無く、空の様に澄んだ青が特徴の戦鬼「仮面ライダー眩鬼」へと変化した…。

『眩鬼…だと…!?!』

『さて、眩い道へと導きますか!?!』

『その前に貴様を死に導くまでだ…!!』

『おっ！ふっ！よっ…と…!!』

デイシエイドはシエイドブッカー・ソードモードで眩鬼に斬り掛かって行く。しかし、最小限の動きだけでそれをかわされた。

『この…ちょこまかと…!!』

攻撃を回避され苛つくデイシエイドはガンモードに切り替えて眩鬼に連射するが…

『あらよつと…!!』

身体をバレエ選手のように、後ろに大きく反らして銃撃を全て回避した。

『勢いだけで斬れる程戦いは甘くないよ。』

『黙れ!!ならばこいつで…!!』

【FINAL・KAIZIN・RIDE…O・O・O・ORPHN  
OCH!】

デイシエイドがドライバーにカードを装填すると、仮面に何らかの紋章を浮かせてその身を死から蘇りし灰色の不死王「アークオルフェノク」にFKRした。

『あらら…怪物になるとはね…。』

『減らず口はそこまでだ…!!』

DアークOは、未だに軽い口調を叩く眩鬼に向けて掌から青白いレーザーを放ち、彼の身体を硬化させようとするが…

『ならこつちも「変身」しちゃおうか…変化、凍鬼!』

両手で印を結んでそう叫び、全身が吹雪に包まれると眩鬼の姿は、白熊を模した戦鬼「仮面ライダー凍鬼」の姿に変化した。但し、何故か全身が銀色である。そして、身体から冷気を放つとレーザーは逆に凍結、粉碎してしまう。

『何!? 貴様! 何故他の鬼の姿になり力を使える…!?!』

『凍鬼だけじゃないぜ…変化、羽撃鬼!』

DアークOは、眩鬼に何故他の音撃戦士に変身する能力を持つのかを尋ねた。しかし、M凍鬼はそれに答えず再び印を結び、今度は鷹をイメージした戦鬼「仮面ライダー羽撃鬼」に変化した。またしても全身が銀色である。

『トビマストビマス!!! ってね これなら攻撃は届かない。さて、どうする?』

M羽撃鬼は変化した直後に翼を広げて空を飛び、DアークOにどう対処するのかを学校の授業の様に問い掛ける。

『…ふざけるなっ!!』

【KAIZIN - RIDER GOLD PHOENIX!】

当然それに神経を逆撫でしたDアークOが再びカードを装填すると、「仮面ライダーオーディン」の契約モンスターである黄金の鳳凰「ゴルトフェニックス」にカインライドし、同じく空を飛びM羽撃鬼に襲い掛かった。

『グイアアアツツ!!』

『…せいっ!!』

DGフェニックスとM羽撃鬼は、空中で互いに交差するかの様に激突してはまた近付いては激突する…を繰り返している。

『チイイツ…!!』

このままでは埒があかないと判断したDGフェニックスは降下してディシエイドに戻り、M羽撃鬼も地上に降下して眩鬼に戻った。

『どっした青年。もう終わりか?』

『…っ!! 舐めるなっ!!』

【FINAL・KAIZIN・RIDE…I・I・I・I M A G I N…】

徐々に冷静さを失うディシエイドは、全身が砂に包まれると死神からイメージされた灰色のイメージン「デスイメージン」にFKRした。

『こいつになつたからには…貴様を確実に殺す!! ウオオオツツ!!』

どうやらディシエイドがこのイメージにFKRするのは、本気でその相手を抹殺すると決めた時のみの様である…。DデスIは灰色の大鎌を实体化させ、それを振り回しながら眩鬼に向かって行く。が…

『うおつとー！』

『何だっ！？』

何と眩鬼は、降り降ろされた大鎌を片手で受け止めた。

『おーやおや？それで全力かい？青年。』

『何なんだ…この男…！？』

その状態で尚も飄々とした口調で話す眩鬼。DデスIは、彼の未知なる力に戸惑いを感じていた。すると…

『なあ青年、そんな風に力を振り回して人を殺して虚しく無いか？』

『……………！』

『お前が何の目的でこの力で沢山の人間を殺し、世界を焼き尽くしたのかは知らない。だがそんな事してもお前の望みは叶わない…。』

突然眩鬼は、DデスIに彼自身の行動が虚しく無いのかを尋ねる。しかも何故か彼が人間を大量に虐殺し、世界を焼き尽くした事実を知っているかの様な口振りだった。

『何で知ってるのか？？って顔してるな？顔見えないけど。お前の攻撃からは虚しさとか何かに固執している気持ちが凄く伝わるんだよな。俺は結構そう言うのには敏感なんでね。』

何と眩鬼は、デイシエイド…闇影の心情を彼からの攻撃を通して知ったのだと言う。これまでデイシエイドの攻撃を避け防戦一辺だったのは、彼の心を知る為だった。

『もし悩んでいるのなら、俺が…』が…る…』ん？』

『貴様に…貴様なんかは何が解る…！！家族を…世界を何もかも全て失った奴の気持ちがああっっ！！』

『何っ…！！ぐあっ！？』

眩鬼からの言葉を聞き、激昂するDデスI。何と彼は、自身の世界を失った過去を持っていた。そして彼を蹴飛ばし距離を取りデイシエイドの姿に戻る。

『うああああっっっ！！！！！！』

【FINAL - ATTACK - RIDE…DI・DI・DI・DI SHADE!】

完全に感情的になったデイシエイドは、自身のFARを発動した。しかし…

『なっ！！何だこれはっ！！！？』

ドライバーから凄まじい電撃エネルギーを纏った黒いオーラが湧き



上がり、それは周囲一体を覆い出した。

「何だありゃ…!？」

「あれが彼の力なのね…。尤も、完全に制御出来てないけどね。」

デイシエイドと眩鬼のいる岩場から遠く離れた場所で傍観する巡と周。デイシエイドの強大な力を目にして息を呑む周だが、巡はまだ制御しきれしていない物だと冷静に語る。

『止すんだ青年!この力を早く止めるんだっ!!』

『黙れええっっ!!俺は…俺はっ…!!』

眩鬼はデイシエイドにFARの力を止めるよう強く呼び掛けるが、それに耳を貸さないデイシエイド。その時、彼の足下に亀裂が入り…

『!!…っっ、っわああああっっっ!!…!!』

『青年!!』

足場が自分自身の力により瓦解し、デイシエイドはそのまま真つ逆さまに落下して行く…。

デイシエイドとは?謎の人物・マバユキとは何者なのか?ダークシヨッカーとは?そして、闇影の「ある目的」とは何なのか?

闇（闇影）と光<sup>マバユキ</sup>が出会う時、何が起きるのか：今、その真実が明らかになる…。次回、仮面ライダーディライト！

「俺がお前の先生になってやる。」

「何なんだお前…俺に構うな…！」

自分が闇影の教師になると言い出すマバユキ…。

「人を信じられないなら、人を信じられる自分を信じてみな。」

「教えてやる…俺の目的を…。」

マバユキのお節介に徐々に心を開いていく闇影。彼が語る「目的」とは…？

『離れる！！俺の闇は全部を壊してしまうんだっ！！』

『安心しな。お前の闇は…俺が光へ導いてやる…！』

暴走するディシエイドの闇…その時マバユキは…！！？

次回、『DISHADE TO DELIGHT』闇から光へ…』

全ての闇を、光へ導け！

第21導 デイライト・ピギンズライト〜眩き出会い〜（後書き）

皆様、如何でしたか？闇影の過去編。

黒深子・コウイチ・ツルギ「……………」

コウイチ「んだよこれ…マジであれが闇影なのか？」

ツルギ「あんな冷たい表情で罪も無い人達を殺すなんて…!!」

黒深子「……………」

やっぱりこの三人はこの反応だよな…。デイシエイドの外見は紫色のデイケイド激情態をイメージした物です。更に他のライダーの力をカメンライドせず使えたり、ラスボスにもカイジンライドすると言うチートなライダーです!!

マバユキ「あんまりチート過ぎると身を滅ぼしちゃうんだけどねえ…。やあどうも皆、初めまして。俺の名はマバユキ。青年の活躍をずっと見守り続けてくれてありがとう!!」

あつ！こら！勝手に出てくるな!!

マバユキ「まあまあ気にしない気にしない。俺の能力は響鬼版デイケイドって所かな？後ね…」

ストオオツップ!!それはまだ話すなあつ!!はい、この眩鬼ことマバユキが闇影の今後に関わる重要なキーパーソンなんです!!能力は言わずもがな、「響鬼の世界」の鬼に変身する事が出来る、正

に響鬼版ディケイドなライダーです。

因みにイメーჯキャストは、左目を隠したり飄々とした物腰に、和の戦士と言う繋がりから「NARUTO」シリーズの人気屈指のキャラクター、はたけカカシ役の井上和彦さんです！

バスト 闇影「ふん…俺を見て幻滅したり益々気に入った、なんてコメント等どうでもいい事だ…。次回も見たくば勝手に見る。」

全つ然違えなホント…こやつのは態度は私が代わりに謝罪致します！

！申し訳ありませんm(´`´)m

次回も宜しくお願いします！！

第22導 DISHADE TO DELIGHT 闇から光へ (前書き)

一ヶ月と約二週間ぶりにや~~~~と更新出来ました!!

<sup>バスト</sup>闇影「今回は無駄に長くなっただけ、疲れる様ならば無理に見なくても良い…。」

マバユキ「そう言っちなよ青年。読んでくれないとお前の良さを誰にも解って貰えないぞ?」

<sup>バスト</sup>闇影「ふん、知った事か…。」

マバユキ「兎にも角にも青年の過去編後半、見てやってくれ。どぞぞ!」

第22導 DISHADE TO DELIGHT 闇から光へ

ん…此…処は…?! 何故だ!? 何故またこの光景がつ…!?

闇影が見た物、それは全てが炎に包まれた世界でありその周囲には無数の人間が息絶えていた。そして、彼が足下に目をやると…

!!…そんな…おい! しっかりしろ!! おい! おい! おい!!  
!!

自分と同じ年齢に近い少女が横たわっており、闇影は彼女を支え目を覚ますよう何度も呼び掛けた。しかし少女はそれには応えないいや、応えられないと言つのが正しい。それもその筈、彼女は既に死んでいるのだから…。

うつ…うつ…うつ…うつ…うああああああつ…!!!!

そう悟つた闇影は顔を黒い空に向けると、血の涙を流しながら悲しみと怒りを籠めて咆哮した…。

「はっ…! ? くっ…はあ…はあ…またあの夢か…。」

意識を戻し、全身に大量の汗を流しながら勢い良く起き上がる闇影。どうやら先程の夢の内容は「彼が嘗ていた世界」が焼き尽くされる物の様だ…。

「おっ、気が付いたか青年。」

「……！！何故貴様が此処に……ぐっ！！」

テントの出入口からマバユキが覗き込む様に現れ、意識が戻った闇影の身を案じる。よく見ると、上の服だけ脱がされ包帯が巻かれていた。闇影は立ち上がるつもりだったが、身体の全身が痛み出す。

「おいおい、まだ本調子じゃないんだから動かない方がいいぞ。」

「黙れ……！貴様の世話になるくらいなら……今死んだ方が……うつ……！！」

マバユキの世話を受けた事に死以上の屈辱を感じている闇影は、尚も立ち上がるつもりが再び身体に激痛が走り、体力が衰弱しているのも相俟ってその場で倒れたしまう。

「やれやれ……こりゃ困った死神君だねえ……。」

マバユキは、そんな闇影を見て頭を掻きながら呆れていた……。

世界の光導者・デイライト！9つの影の世界を巡り終え、その瞳は、何を照らす？「闇影君、何処にいるのかしら？」

「この惨状じゃ生きてんのも怪しいよな……。」

一方巡と周は、デイシエイドがFARを発動し崩壊した場所で闇影を探していた。荒れ果てた瓦礫の惨状を見る限り、彼が生きているのが怪しいと呟く周。

「このまま死なれると私達の目的が果たせなくなるわ…何としてでも見つけないと…!!」

「だな。」

どうやら二人が闇影を探しているのは彼の身を案じる為ではなく、自分達の目的の為であった。

「……。(こんな所で油を売っている暇は無い。早く任務を達成させて組織に戻り『あの研究』を続けないと…)」

場所は換わり、あれから目を覚ました闇影は早く「この世界を焼き尽くす」と言う任務を遂行し、ダークシヨッカーに戻り「ある研究」に取り掛からねば、と考えている。この世界の人間は全て始末…をした金銀角兄弟は始末した。後は…

「気が付いたか青年、あんま無茶すんなよ。ほれ、飯が出来たぞ。」

そう考えている最中、片手に食事を持ったマバユキがテントに入ってきた。

「(この男を始末すれば…!!)」

「ちゃんと食わないと体力が回復しないからな、ほい。」

目の前のこいつを始末すれば…と考える闇影の思惑を知らないマバユキは彼に食事を食べる様勧めるが…



「……っ!!」

闇影は差し出された食事の入った容器を勢い良く手で払って引っくり返した。

「……!!」

流石のマバユキもここまでされれば激怒、またはそれを通り越して呆れる見捨てるだろう、そうなれば殺し易い…と闇影は考えるが…

「あゝらら、好みに合わなかったのかなあ？」

「……。」

そう言いながらマバユキは、文句一つ言わずに引っくり返った食事を片付け出した。闇影は、んな彼に少し目をやるが、直ぐに逸らした。

それから数日経ち、闇影の体力も完全に回復をした。初めは食事を口にはしなかった闇影だが、マバユキを殺すにしても、世界を焼き尽くすにしても、当面は体力回復に専念すべくだと考え已む無く食し、手当ても素直に受けた事により回復が早まったのだ。

「おおっ、やっと治って良かった良かった!」

「ふん…本来ならば貴様も始末するつもりだったが、治療費として今回だけは見逃してやる。精々俺と目を合わさない事だな。」

と、闇影は自分を治療したマバユキを「治療費」として見逃すと言いながらこの場を去ろうと踵を返した。が…

「ちよ〜と待った青年!!」

突然マバユキは大声で闇影を呼び止めた。それを聞いた彼は足を止めて…

「何だ…まだ何か用か？」

振り返り不機嫌な表情で顔をしかめ、何の用なのかを尋ねた。

「お前、このまま組織に戻ってどうするつもりだ？また人殺しの仕事でもするつもりか？」

「……。」

「前も言ったけど、そんな事をしてもお前の願いは叶わない…。だからいつその事、組織なんて辞めてしまったらどうだ？」

「何…!?!」

「それでもし悩みがあるなら、俺がお前の先生になって相談に乗ってやる。」

マバユキは、このまま闇影がダークシヨッカーに戻る事を良しとせず「自分が彼の悩みを解決する」と言い、闇影に組織から抜ける様勧めた。

「ふざけるな…そんな事は俺の勝手だ。貴様に指図される謂れは無い…。」

「そのままの状態であつておくのは俺の性に合わないんだよなあ…。」  
当然闇影がそれを聞き入れる筈が無かつた。しかし、マバユキもそれを放つておけないと飄々としながらも一步も引かなかつた。

「……っ！！」

「うおっ！！？」

そんなマバユキの言葉に苛立つた闇影は、シェイドブッカー・ガンモードで彼の顔をかする程度に射撃した。

「お前…何なんだよ…これ以上俺に構うなっ！！」

「何つて言われても…こういう性分なんだから仕方がない、としか言えないしなあ…。」

銃を向けられても尚、落ち着いた口調で今のお節介な言葉を「性分」と語るマバユキ。しかし、それはかえつて闇影の神経を逆撫でる。そして…

「…っ！！だつたら今ここで俺と戦え！！お前が勝つたら生徒にでも何でもなつてやる！だが、負けたらお前の命を貰う！！！」

何と闇影はこの場でマバユキと戦う様言い出し、自分が負ければ彼の生徒になると言い、勝てば彼の命を貰うと言つ何とも無茶苦茶な約束を提示した。

「良いよ。それでお前が満足するならな。但し、条件がある。」

マバユキもそれを了承し、戦う事を決めた。しかし、何やら条件がある様だ。その条件とは…

「お前はどんな能力を使っても良いが、俺は变身せず生身のままで戦う。」

「何…!?!」

マバユキの条件とは、何と自分は「变身せず生身で戦う」とハンデを付ける事だと言う。あまりにも自身で不利な状態で戦いを臨む彼の考えに理解が出来ず眉をひそめる闇影。

「俺はお前を倒すのではなく、お前を説得する為に戦う。さ、早く变身しな。」

「舐めた口を…後悔するなよ…!! 变身…!!」

【KAMEN・RIDE…DISHADE!】

生身で自分に挑むと言うマバユキに感に障った闇影は腰にドライバを装着、カードを装填するとデイシエイドに变身した。

「んじゃ、授業開始!」

『ふざけるなっ!! おおおっつ…!!』

マバユキは懐から本を取り出し、読みながら空いた手でデイシエイドに来る様に挑発した。そんな態度が気に食わないデイシエイドはシェイドブツカーをソードモードに切り替えてマバユキに斬り掛か

った。

「その時サエコはキリヒコに『服を脱いで尻を出しなさい!』と命令し!』…っと!』」

『何っ!?!』

しかし、マバユキは動じる様子も見せず涼しい顔で本を朗読しながら指二本で刃先を受け止めた。

『くっ…!!はっ!ぜいつ!しえああっつ!』

デিশェイドは何度もシェイドブッカーで斬り掛かるが、同じ方法で攻撃を全て指二本だけで受け止められる。

『くそっ…!!』

「「キリヒコは無言のままに言われるがままに衣服を全て脱ぎ、自分の尻を突き出した!。」ん、どうした青年?」

『…ならこいつでどうだ!』

【ATTACK・RIDE!CLOCK・UP!】

デিশェイドは苛立ちながらカードを装填し、クロックアップを使いマバユキに突撃し出した。如何に回避が優れているとはいえ、生身の人間にクロックアップを回避する術など無い筈、そう思いながらマバユキに高速のタックルを見舞った!かに見えたが…

『なっ!?!奴の身体が消え!はっ!?!』

それはまるで蜃気楼の存在だったかの様にマバユキの身体をすり抜けると、彼は消滅した。その時、デイシエイドは背後から何らかの気配を感じた為直ぐ様振り向いた。すると…

「サエコは薔薇の棘が付いた鞭を勢い良く伸ばし、キリヒコの尻に…」って、うわっ…！えげつないねえ…。ってあれ？俺何時の間に青年の後ろにいたんだ？本読んで気付かなかったなあ…。」

何事もなかったかの様に本を朗読するが、内容が「えげつなく」なつたと声を漏らしながら読んでいた本を懐にしまふマバユキの姿がそこにあつた。そんな彼は、何時の間にかデイシエイドの背後にいた事におどけた様子で驚く。

「（いや違う…奴は俺がクロックアップで突撃する直前に音を立って走つたんだ。それも残像が生まれる程の超速度で…！！一体何故なんだ…！？）」

そう。マバユキはあの瞬間、デイシエイドのクロックアップを正面から「音を立てずに」走り出したのだった。それも本人以外には「止まって見える」残像を生み出す程の超スピードを用いて…。

「今のは『鬼走術（きそうじゆつ）・幻足（まぼろあし）』って技さ。」

『……………！！』

マバユキはデイシエイドの思ってる事を知っていたかの様に今回の避技を「鬼走術」だと明かした。

『鬼走術だと…！？そんな技聞いた事無いぞ…！！』

「クロックアップかあ…。これは『一回見た』だけで出来るかどうか分からんけど…粗方コツは掴めたぞ！」

『…？？お前、何を…！？』

マバユキの「クロックアップのコツが掴めた」という発言にデイシエイドが疑問を抱きながら眉をひそめていると、突然マバユキの姿が消えて無くなった。

『また奴が…消えて…！？』

「…油断大敵火がボーボー…つてな！！」

『馬鹿…なっ！？人間がクロックアップの速度で…ぐあああああ  
っっ…！！』

デイシエイドが戸惑っている隙にマバユキは彼の懐に近付き、掌底を放ち彼を岩壁まで吹き飛ばした。

『ぐっ…！！このっ…！！』

デイシエイドは叩き付けられた痛みと衝撃に耐えながらもシエイドブッカーをガンモードに変え、マバユキに反撃しようとするが…

『なっ…！？』

「はい没収。」

その直前にマバユキが再びディシエイドの眼前に近付き、彼の手から素早くシエイドブツカーを取り上げて銃口を向け…

「バーン！！」

『……っ！！』

「…何てね。お前の負けだよ青年。」

「バーン！！」と掛け声を出して撃つ真似をするが本当に撃たず、シエイドブツカーを投げ捨てた。思わず目を逸らしたディシエイドは…

『…何故殺さない？俺を仕留めるチャンスがあっただろう…』

「今から生徒になる奴死なせたら意味が無いっしょ？」

今の攻撃で確実に始末出来たのにも関わらず、何故自分を撃たなかつたのかをマバユキに尋ねる。理由は勿論、ディシエイドを生徒にする為だと言うマバユキ。

『寝言を言つな…誰がお前なんかの弟子になるか…！！』

「おいおい、俺は『組織を辞める』とは言ったけど、『生徒になれ』なんて一言も言っていないぞ？それはお前が言い出した事じゃないのか？勝手に約束して勝手に負けた上に自分で約束を破るって、格好悪くないか？」

『なっ！くっ…！！／／／』



デイシエイドは、自分が勝手に口にした約束をマバユキに指摘され反論が出来ず、仮面の中で顔を真っ赤にし、口を濁らせながら暫く考え…

『…良いだろう…だが勘違いするな！俺はあくまで死神としてお前を始末する為に居るだけだからな！！／／／』

「それでも良いよ。宜しくな！青年」

結果、デイシエイドは約束通りマバユキの生徒になる事になった。しかし本人曰く、あくまで「緋眼の死神」である自分が見た者を必ず殺すと言う法則に従っての事だと顔を赤めながら天の邪鬼な口調で断言する。

#### ダークシヨッカー本部・首領の間

「…はい…。デイシエイド、煌様の散策が僕の任務でなんですか？首領。」

うむ。彼に任務を与えてからここ数日間、何の連絡が無いのが気になってな。済まないが、連れて帰ってくれないかね？

黒い階段の上にある玉座に座っている「首領」と呼ばれた者は、その遙か下で跪いている二十代の青年に未だ連絡が着かない闇影の散策を命じ、青年はその任務について再度確認をしている。

「仰せのままに。」

処遇については君に任せよう。場合によっては…

首領に闇影の処遇についてを一任された青年は、その続きを聞くまでも無く悟り、妖しく笑い…

「…全てはダークショックカーの為に…。」

そう言いながら闇影を散策する為、目の前に突然現れた灰色のオーラを潜り、彼の居る世界に移動しこの場から消えた…。

「はあっ！ぜいっ！ぜりゃあっつ！！」

「おっと…！そうやって振り回すだけじゃ俺は倒せないよっ…と！」

不本意ながらマバユキの生徒となった闇影は、竹刀を持って彼に向けて攻撃を仕掛けています。しかしマバユキはそれを紙一重の所で全て避けている。

何故竹刀を使用しているのか、それはマバユキの「授業の間は武器では無く竹刀を使え」と言う指示を受けたからである。無論闇影は納得しなかったが、「これで俺から一本取れない奴が武器で殺せる訳が無い」と言われた為渋々従ったのだ。そのせいか闇影はずっと殺気立った顔をしている…。

「はあ…はあ…。くそっ…！！何故当たらないんだ…！！はあ…はあ。」

もうかれこれ三時間以上この授業を続けている為、闇影は汗だくになりながら息を切らして何故自分の攻撃が当たらないのか分からないでいた。

「はあ…確かに青年の攻撃は普通より高いけど、まだ粗削りな部分が多いな。ちゃんと相手の動きを見極めてから攻撃しないと。」

「黙れ…！はあ…はあ…。」

「それにこういう敵が現れた場合でもそれだと隙を付かれやすいぞ。こういう…」

マバユキは闇影の攻撃の方法を指摘しつつ、彼の前から姿を消し…

「クロックアップ…だったっけ？こういう素早い動きをする敵が現れた場合でも…ね？」

「何っ…！？また…うああああっ…！！」

…たかの様に素早く動いて闇影の背後に立ちって回し蹴りを見舞い、彼の身体を吹っ飛ばした。

「続けて行くぞ？」

「うくっ…！また消えた…いや、そう見える速度で走り回っているのか…。どうすればあの『クロックアップ擬（もど）き』を破れるんだ…！？」

マバユキが再び消えたかの様に素早く走り回っているのを見た闇影は、立ち上がりながら竹刀を構えるが、「クロックアップ擬き」の

打開策が見つからないでいた。

どうした青年？まさかこれでギブアップなんて言うんじゃないだろうな？これが実戦だったら死んでるぞ？

「…っ！！黙れ！！誰が降参等するか！！お前の姿を捉えて必ずその能天気な脳味噌を叩き潰し…！！」

何処からか聞こえたマバユキの言葉に声を荒げて反論する闇影。しかしその時、彼は自分で言った言葉に何かを気付き始めた。

「（そう言えば、俺は奴の動きを充分に見て攻撃しているのだろうか…？いや違う、俺は奴の姿だけ見えていて、奴の動きを正確に見極めようとしていなかった…。）」

竹刀を構えつつ思考を巡らせる闇影は、マバユキの言葉を思い返している。

「（見えない動きを捉えるには…見るのではなく、感じる事…！！）」

彼の言っていた言葉の真意を悟り、目を閉じて感覚を研ぎ澄ます闇影。目に頼るのではなく、心の「眼」で相手の動きを感じ取る事でマバユキのクロックアップ擬きを破るつもりである…。

「（感じる…奴の僅かな息遣い、足音…それが徐々に大きくなってきたのは、俺に近付いて来ている証拠。背後からだな…。）」

研ぎ澄ませた感覚からマバユキの動きを読み始め、徐々にその存在を掴みつつある闇影。それによりマバユキは背後から近付いている

のだと気付くが、竹刀は振らず構えたままだ…。

「（未だだ…。奴が完全に近付いてから攻撃しなければ…！！…よし、後ろから…5m…4、3、2、1…！！）そこだっ！！！」

完全に自分の範囲に踏み込んだと確信した闇影は、目を見開き構えた竹刀を勢い良く背後に振り上げ、遂にマバユキに攻撃を当てる事が出来た…！「惜しかったねえ…俺にもう一つの足技があったのを忘れてたね。」

「！！しまっ…！！！」

「せええええいつつ！！！」

「うあああああっつ！！！」

…かに見えたが、それは足技・幻足を使って生み出したマバユキの幻影であった。そして本物は瞬時に闇影の正面に近付き、彼の襟を掴んで身体ごと背負い投げで投げ飛ばした。

「うっ…！！く…くそっ…！！！」

「でもま、目に頼らず感覚を研ぎ澄ますやり方を身に付いたから合格だ。今日はこの辺にしよう。」

「くそ…！」

「はいはい青年。何時までも腐ってないで飯でも食べよう。ほれ、

俺の特製カレーだ。」

先程の授業でマバユキから一本を取れずに不貞腐れている闇影は、カレーが乗った取り皿を受け取った。

「ちつ…っておい、何故カレーに麻婆豆腐が混ざっている？」

闇影は渡されたカレーに挽き肉や豆腐に七味と、麻婆豆腐の具が混ざっているのを見て眉をひそめてマバユキに尋ねた。

「こいつは俺が独自で開発した、カレーライスに麻婆豆腐を組み合わせた新しいカレー…その名は、『マーボーカレー』だ！」

「何が独自開発だ。ただ単にカレーに麻婆豆腐を混ぜただけだろ…。」

「そう言わずに一回食べてみな。美味いぞ。」

「どうせ大した味じゃ…!!」

あまりにそのまま過ぎるアイデアカレーに不評の声を漏らす闇影は、マバユキの言われるがままにマーボーカレーを口にした。すると彼は一瞬だけ目を大きく見開いた。

「…どうだ？」

「ふん…ま、悪くは無いな…。」

素っ気ない感想の言葉を返す闇影だが、内心その意外な絶妙な味に顔を少し綻ばせていた。

「それは良かった…。ほら、まだおかわりはあるからな。それ食い終わったらデザートに『ラー油プリン』があるからな。」

「何だその意味不明なデザートは！？どうせなら甘いのか辛いのかはつきりした物を出せ！！」

闇影はまたしても意味不明な食べ物の存在を知り、普段の冷淡な感情を捨てて全力でマバユキに突っ込んだ。そんなこんなで闇影の授業の第一日が過ぎて行った…。

その後の数日間、闇影はマバユキから様々な授業と言う名の「修業」の手解きを受けた。効果的な防御法、効率的な回避法、怪人の特性把握の学問等その他諸々…。そして、それを受けている内に闇影の感情も徐々に変わりつつあり、当初の任務「この世界の排除」も彼の口癖で言うと「どうでも良く」なっただけ…。

「ふう…今日も終わったか…っておい、前から気になっているんだが、お前が何時も読んでいるその本は何なんだ？」

今日もまた授業を終え一息付いた闇影は、マバユキに彼が何時も読んでいる小説について尋ねた。

「これか？これは『ドキドキユートピア』って言うシリーズだ。」

「何なんだその訳の分からない小説は…って待て、シリーズって事は他にもあるのか！？」

「ああ。初代の『W<sup>ダブル</sup>』を初め、『ACCCEL』に『EXTREME』、初代過去編の『SKULL<sup>スカル</sup>』とあるんだ。で、今俺が読んでるのは『ATON』さ。何れも18禁だから青年は読めないけど何？そ

「言うつ年頃か？」

「誰が読むかつ！！そんな有害書籍！！／／／」

マバユキの愛読書「ドキドキユートピア」シリーズはどうかやら18禁物の官能小説らしく、その話を持ち出した闇影に「興味があるのか？」と冷やかすマバユキだが、彼は顔を赤くして全力で否定した。

「ふん！！そう言えばお前、何故生身でクロックアップ擬きを使う事が出来るんだ？」

ここで話題を変えた闇影は、何故マバユキが変身もせずにクロックアップ擬きを使えたのかを尋ねた。

本来クロックアップは、「カブトの世界」全てのライダー、若しくはその世界の怪人である、人間を殺害しその者に擬態し成り代わる昆虫型生命体「ワーム」、そして…全てのライダーの力を使える、自身が変身するディシエイドのみの筈なのだが…

「ん、あれか？あれは…何と言うか…青年がやってるのを見て、見よう見まねでやったんだよなあ…。」

「…は？」

「だから、一回見たから出来る様になった…と言う事だつて。」

マバユキからの質問の返事を聞いた闇影は、思わず間の抜けた声を出した。クロックアップを見様見真似で使用したなんて答えが返ってくればそうなるのも無理は無い…。同じ質問をされたと思ったマバユキは、再度同じ答えを口にする…



「ふざけるな！！そんな理由で納得が出来るかつ！！全然答えにな  
って無いだろうが！！」

「まあまあ…明日青年にもこの技を生身で使える方法を教えてやる  
から。」

当然闇影はそれに激怒して、答えにならない答えを口にしたマバユ  
キを捲し立てるが、この技を教えると言いながら落ち着く様宥めら  
れる。

「…そういやさつきから俺が答えてばっかだよな。今度は青年に聞  
きたい事があるんだよなあ…。何故ダークシヨツカーとか言う組織  
に入ったのかを…ね？」

マバユキは、闇影が何故ダークシヨツカーに与したのかを顔付きを  
真剣な物にして尋ねた。それを聞いた闇影は、少々顔を俯かせて考  
え出し「はあ…。」と小さく溜め息を出して口を開いた…。

「良いだろう。教えてやる…俺の目的を…。」

闇影は、考えた末に自分がダークシヨツカーに入った理由を話す事  
にした。

「今から三年前…俺の住んでいた世界に突然灰色のオーロラの様  
な物が発生して、そこから見た事の無い怪人達の軍勢が現れて人間を  
全て殺したんだ…！！」

何と闇影は、嘗て自分のいた世界を灰色のオーロラから現れた怪人  
の軍勢に蹂躪されていたのだった。

「だが連中は何故か俺だけは殺そうとしなかった。そのお陰で生き延びたんだがな…。」

そして、生き延びたのは怪人達がどういう訳か自分のみを殺さなかった為だと、腕を震わせ、拳から血が出る程握り絞めながら言う。

「それはまるで地獄…いやそれ以上の光景だった…。街や建物全ては炎に包まれ、人々は断末魔の叫びを上げ、道は全て人々の死骸で埋め尽くされていた…。それを目にした俺は、絶望感と孤独感に苛まれていたよ…。もう自分には何も残されていない…。そう思っていた時だった…。」

煌闇影君。君の願いを叶える術を授けよう…。もし君にその気があるのなら、我が組織…ダークショッカーに入らないかね？その技術力を用いれば君の望みが叶うやもしれぬ…。ここで一人で死ぬる時まで生きるか、死する思いで望みを手にするか、二つに一つ。さあ…どうする？

良いだろう…何のつもりか知らぬが、俺の　　が　　なら悪魔とでも手を結んでやる…。

ふむ…良い目だ。気に入った。では行こうか。闇で全てを司る為に…！！

「そうしてダークショッカーに入った俺は、血の滲む努力を惜しまず日々研鑽し、一年足らずで幹部にまで登り詰め、技術長にもなり、

そして…!!」

「ディシエイドの力を貰ったって訳だね…。」

「俺は…俺の目的の為なら、手段は問わない…。世界を消し、人間を殺す事で叶うのならば迷わず実行する…。無論お前の命でそうなるのならば俺は…お前を殺す…!」

全てを話し終えた闇影は、マバユキに指を指し例え彼の命で自分の目的が達成出来るのならば、その命を迷わず奪うと宣言した。

「ふう…お前の目的や言いたい事は粗方解った。だがな、これはもう何度も言っただけど覚える…そんな事をしてもお前の願いは叶わない。」

「何だと…?」

「仮にそんな方法で叶ったとしても、きつとお前の心は救われない…。それで救われると思っっているのはお前だけ、ただの自己満足に過ぎない…。」

闇影の目的を粗方理解したマバユキは、汚れた手段で叶った願いに何の意味を持たない、彼の自己満足だと、やや厳しく諭した。

「…っ!!お前に何が解るっ!?!当たり前にあった物を突然全て失くした奴の気持ちか解るのか!?!それが再び手に入るかもしれない、僅かな望みを抱いて何が悪いっ!?!何だったら、お前の目の前でお前の大切な人間を一人残らず殺してやるっか…?」

それを聞いた闇影は激怒し、マバユキに掴み掛かり激昂した。彼に

とって今のマバユキの言葉は、失う事の悲しさを知らない人間の台詞だと思い、彼の大切な人間を目の前で殺すと恫喝した。

「……………」

「そうすれば解る筈だ…今言った綺麗事がどれだけズレているかな…。」

暫く黙っていたマバユキは、闇影の怒号を聞き終えたと口を開いた…。

「…そうして貰って結構。それでお前の気持ち解るのならばね…でも、それは出来ない…。もう…皆死んじゃった。」

「……………つ！！」

「俺の両親は、俺が生まれて間もない時に魔化魍に殺されたんだ…。んで、俺を拾って鬼の修業を叩き込んでくれた師匠も、同じ教えを受けてた戦友も…皆、死んだんだ…。」

何とマバユキも、魔化魍により両親や自分を拾い、鬼の修業を師事してくれた恩師や、同じ志を共にした戦友を全て奪われた過去を持つていたのだ。

「そんな時は流石に思ったさ…『何故自分の大切な人を奪われなきゃいけないんだ』、『何故自分だけおめおめ行き永らえたんだ』…と、そう腐っていた時期があつたさ…。」

「……………」

「けど、それじゃ駄目だと言う事に気付いた。自分だけ不幸だと思っても、自分を閉ざしていちゃ駄目だ…。変わらなければならぬ…。そう思い、自分に何が出来るのかを必死に考え、それ目指して必死に生きる決意をしたよ。『心を闇に閉ざした奴を救う』って目標を立ててな。」

「……。」

しかし彼はその過去に甘えず、自分に出来る事を考え抜き「心を闇に閉ざした人間を救う」為に必死に生きる事を決意したと言う。気付くと闇影は、いつの間にかマバユキの胸ぐらから手を離していた。

「ま、こんな愚痴を聞いてどうこうしろとは言わない。もしそれでも綺麗事だと思つのならこの言葉を覚えときな。『人を信じられぬのなら、人を信じられる自分を信じてみる。』」

「人を信じられる自分を…信じる?」

「それをするかどうかは青年次第だけどね。話はお終い!さっ、寝るぞ。」

話を終らせたマバユキは、テントから出した寝袋に入り、そのまま眠りに付いた。

「…俺は…。」

「ん…んああ…よく寝たよく寝た。って青年、もう起きてたのか。」  
寝惚け眼で気だるそうに起き上がったマバユキは、自分より先に起きて竹刀を持って修練していたであろう闇影の姿を見た。

「…俺は、あなたの言い分を認めるつもりは無い…だから、一つだけ別の目的を果たそうと決めた…。」

闇影はそう言うと、持っていた竹刀をゆっくりとマバユキの方へ向けて…

「『あなたの上に立つ』事だ…。」

「そうか…良い目標が出来たな。んなら、今日も打ち込みの授業から行きますか?!」

「マバユキの上に立つ」のが目的…そう宣言する闇影。それを聞いたマバユキは、嬉しそうな顔をして本日の授業開始の声を上げた。

「行くぞっ!!はあああっつ…!!」

闇影はマバユキに向かって勢い良く走り出し、竹刀を振り回した。

「はあっ!ふっ!せいっ!」

「うおっ!とっ!とっ!?!ま、前以上に攻撃にキレが入って来たね

え…!!」

闇影の攻撃に何らかの変化を見出だすマバユキは、それに少々驚きつつも何とか回避した。

「動きも無駄無く、効果的に力を入れた攻撃が出来てる…やるじゃないか青年。なら…これはどうするかな!？」

「消えた…? いや、クロックアップ擬きだな。」

マバユキは闇影の成長ぶりを誉めると、不敵な笑みを浮かべて姿を消した…。そう、闇影の言う様にクロックアップ擬きを使ったのだ。

さあ…どうする? 青年。

「解りきつた事を…。」

マバユキの声を聞いた闇影は、「聞くまでも無い」と呟き感覚を研ぎ澄ます為に目を閉じる。

「今日こそは…今日こそは必ず奴の技を破ってやる。背後から5m…4、3、2、1…!!」

ふっ…背後から来ると思ってるな。けど、俺は…

無音で闇影に近づくマバユキは、彼がまた、以前の様に背後から来ると予想しているのだと悟り、前回と同じく幻足で幻影を作り油断させようと考えるが…

「…そこだっ！！」

甘いよ…青ね…！！？

すると闇影は一瞬だけ揺らめいたかの様に姿を消した。しかし、次の瞬間…！！

「なっ！！？ぐあああっつ！！？」

マバユキの身体に巨大な刃の様な風圧が直撃し、彼を大きく吹き飛ばした。…かに見えたが…

「何っ！！？これも幻影…だと！？」

「その通り」

「なっ！！？上からっ…があっ！！うああああっつ！！」

それもマバユキの幻影であり、本物は上空から現れそのまま落下運動の力を利用し、僅かな隙を見せた闇影の肩に強力な手刀を浴びせ、止めに掌底を放ち逆に彼を吹き飛ばした。

「うぐうっ…！！」

「ちょっと追いつれたかなあ…。青年の奴、『足を数十回一瞬で蹴り上げて走る』鬼走術・銀靴（ぎんぐつ）…クロックアップ擬きの応用で幻影を作り出すとはね…。」

「くそっ…！！後一步の所で…！！」



「あいつ、あつという間に目標を達成するかもしれないな…。」

岩場に叩き込まれて悔しがる闇影を余所に、マバユキは彼の成長の早さを見て「自分より上に立つ」という目的を達成出来るのも時間の問題だと、嬉しそうに呟く。

「凄いいじゃないか青年。たった一回見ただけで銀靴をマスターしまうんだからな！」

「ふん…あんな物、種が割れば造作も無い事だ。」

昼食時、マバユキはクロックアップ擬き 銀靴のコツを一度見ただけ完全に修得した闇影の呑み込みの早さを賞賛した。しかし、当の本人にとってそれは造作でも無い事の様だった。

「それにしても青年。お前、変わったな。」

「????？」

「俺が初めてお前を見た時は物つ凄いい無愛想で暗い顔をしてたけど、今はかなり明るくなってるぞ。」

「大きなお世話だ…。」

そんな何でもない会話をしながら昼食のマーボーカレーを口に運ぶ闇影とマバユキ。

「そつだ。青年に良い物を見せてやろう。俺の家族の写真をな。」

「家族は死んだんじゃないのか？」

「俺を産みの親はな。見せたいのは『今の俺の家族』だ。」

「お前…結婚していたのか!？」

「俺くらいの歳になれば所帯を持ってても可笑しくないだろう?後、子供もいるんだぜ。」

何とマバユキは既婚者であり、その家族の写真を見せようと懐を探り銀色のロケットペンダントを取り出した。

「子供もいるのか。ふん、さぞ能天気でもない性格をしてるだろうな。」

「そう言うなって、きつと青年も気に入って一緒にカレーでも食わないか？」

ロケットペンダントを開けようとしたマバユキは突然、姿の見えない何者かの気配を感じ取り能天気に声を掛け出した。すると灰色のオーロラが現れ…

「ウクク…普段は能天気な性格だけどやはり鬼なんですねぇ…。」

中から女性の様に艶があり分け目のある長い黒髪に、女性の様な瞳毛をした緑色の瞳をした目に縁の無い眼鏡をかけた黒のスーツジャケットの下に首元をはだけた白いワイシャツを着た端正な顔立ちの若い男性が不気味に笑いながら現れた。

「…何故なんだ…？」

「青年…？」

謎のスーツジャケットの青年の顔を見た闇影は、額から汗を流し戸惑った表情をしている。「緋眼の死神」と恐れられた彼がこれほど動揺したのは初めてなのかもしれない…。

「何故貴様がここに居るんだ！？貴様は…『あの時』…！！」

「ちょっと静かにしてもらえないかな？」

「………っっ！！」

闇影が青年の事について話し出そうした時、彼は右の人差し指から黒いレーザーの様な物を闇影の額に放った。撃たれた闇影は、そのまま背後へ倒れ出した。

「青年！！大丈夫か青年！！」

「う…う…うん…。」

マバユキは、倒れた闇影に必死で呼び掛けた。直ぐに目を覚ます事から、どうやらダメージは全く受けていない様だ。

「…青年に何をしたんだ…？」

「ウクク…ご心配なく。ちょっとした『引き継ぎ』をしただけですよ。」

先程の行動を「引き継ぎ」だと言う青年は、人差し指から黒いレーザーを再び出すと、それを掌で数枚のカードに形を変えて懐にしまった。

「さて…煌闇影いや、仮面ライダーディシエイド。与えられた任務を完全に遂行していない上にダークシヨッカーの素性をその鬼に話した…。任務不履行及び停滞、情報漏洩。総合して君を『反逆者』としてみなす!!」

「何だと…!?!」

「そして反逆者…裏切り者には…!!」

青年は闇影を「反逆者」だと宣告し、右手の中指と親指でパチンと音を鳴らすと…

『グオオオオオツツツ!!!!』

『ヘエヤアアツツツ…!!!!』

『ヒャーヒャツヒャツ…!!!!』

灰色のオーロラが現出し、そこから「9つの仮面ライダーの世界」全ての怪人の軍勢が現れた。闇影を反逆者と認定し、且つ無数の怪人の軍勢、この二つの要素から考えられる答えは一つしかない…。

「『死』あるのみ…。」

そう、闇影を始末する事であつた…。

「…チイツ!!」

このままむざむざ殺される程甘くない闇影は、デイシエイドライバ  
ーを取り出そうとするが…

「待ちな青年。お前はさっき授業受けたばかりで体力はまだ完全に  
戻ってないだろ？ここは俺が行く…。」

マバユキがそれを制止し、体力が完全に回復していない闇影を戦わ  
せず代わりに自分が戦うと言い彼の前に立ち怪人の軍勢の方を歩き  
出す。

「何を言ってる！？いくらあんたが俺より強くてもあの軍勢相手じ  
ゃ話が違う…!!俺が行かないと…!!」

敵は9つの世界全ての怪人が無数、対してこちらはたったの二人。  
そんな多勢に無勢な戦いは無茶だと呼び止める闇影。それを聞いた  
マバユキは立ち止まり…

「はっはっはっ!!」

「何が可笑しい!？」

「いやゝすまん。青年が初めて俺を心配する様な事を言うからつい  
嬉しくてね…。」

闇影が自分の身を心配する言葉を口にした為、マバユキは「嬉し笑  
い」をし出した。

「ばつ、馬鹿っ！！／＼お前は俺が必ず殺す予定だから今死なれるのが困るだけだからだよ！！／＼勘違いするなっ！！／＼」  
と、顔を赤めて自分が彼を倒す為だと言い心配していないと否定する。

「死なれると困る」と言ってる時点で心配しているとは気付かず…。

「ははは！！分かった分かった。ま、ここは俺に任せとけ！お前は、俺が守ってやるからな。…眩鬼。」

「闇影を守る」と言い切ったマバユキは真剣な顔付きをしながら音角を鳴らし、額に近付けると眩鬼に変身した。

『さてと、全員眩い道へと導きますか！！』

『何消えただ…トバアアツツ！！？』

決め台詞を言った眩鬼は「姿を消した様に素早く走る」銀靴を使うと、十数体の怪人が突然爆発し出し、その直後に眩鬼は姿を見せる。

『…この野郎！！一気に攻める！！』

『『『ウオオオオオツツツ！！！！』』』

一体の怪人の言葉を皮切りに、数十体の怪人達が一斉に眩鬼に襲い掛かる。

『あらら。あれが全部女の子だったらしいのになあ…。』







何と眩鬼は、今の一瞬で五往復して敵を斬ったと言う。目にも止まらぬ速度で通り過ぎた為、闇影も数回往復した事にはかなり驚いていた。

「さて…数も減ってきたし、止めに大技と行きますか！はあああ…！！！」

今の攻撃で十数体程度に減った怪人達に大技で止めを指すと宣言した眩鬼は、装甲声刃・銀世界の刃の部分で左腰に向ける様に構えを取り仮面の中で目を閉じながら静かに気合いを込め出した。

「何だあ？あいつあんなポーっつと遠くで構えてやがる！この隙に殺つちまおうぜっ！！！」

「『ウオオオオオツツツ！！！！』」

怪人達はこの場から一切動かない眩鬼を見て、この隙に彼の命を奪う為一斉に襲い掛かった。それが命取りだとは気付かず…。何故なら、装甲声刃・銀世界の刀身が白銀色に淡く光り出し、一体の怪人が眩鬼から僅かに離れた場所に足を踏み入れた瞬間、眩鬼の目が鋭く開眼されると…

「……………！！！」

眩鬼の姿が突然消えたと思いきや、一瞬で怪人達の背後に現れた。すると眩鬼は…

「光（未来）を奪おうとしたお前達の未来は…闇（死）だ…！！！」



『…知ってるよ。』

「????？」

『こいつがどうしようの無い悪ガキだつて事は知ってたさ。確かにこいつが今までして来た事は決して許される物じゃない…。でもな、それでも一つの光（生きる目標）目指して生きれば、そんな闇（過去）なんて関係無い。』

「ふつ…その程度で人はそう簡単に変わりませんよ。」

『変わる自分を信じなければ、永遠に変わらない！！光を信じる自分を信じなければ、決して闇から抜け出せやしない！！人は、自分を信じる事で変わるんだ！！』

「…お前…。」

『それに…こいつはもう変わったんだ。新しい目標を見つけたんだからな。』

闇影の存在を全否定する青年の言葉に対し眩鬼は、人は自分を信じる事で変わる事が出来ると断言し、新しい目標を見つけた闇影は変わったと優しく話す。

「…やれやれ…折角彼をここまで『墮としてやった』と言うのにな…。」

「墮として…やった…？どういう…事だ…！？」

すると青年は、「闇影を墮とした」と意味深な言葉を口にした。そ

して、衝撃の真実を語り出す…。

「君の世界を壊したのは…僕だよ。」

「『なつ…!!?』」

「君が『その世界』では素晴らしい知識の持ち主だと言う事を知り、ダークシヨツカーはそれを欲した。しかし、拐って連れ出しても協力はしないだろう…。だから逆に『向こうから協力する』様に仕向ける為に怪人達を襲わせたのさ!!」

「…何…だと…!?!?」

「更にその頃、ダークシヨツカーでは『強大な闇を持った者』にしか使えないディシエイドライバーの適合者も探していた…!!そして君は!!その適合者だったんだよ!!ウクク…嬉しいねえ!!ここまでこちらの都合の良い様に話が上手く転がるなんてねえっつ!!」

『お前…!!』

「…さん…。」

『つて青年?』

闇影のいた世界を破壊したのは自分だと明かす青年。全ては彼の知識を手中に収めるべく仕組まれた物だった…。そんなダークシヨツカーの非道なやり方に怒りを募らせる眩鬼だが、闇影は顔を俯き…

「許さん…許さん許さん許さんっ！！！！絶対にっ！！許さないっ！！変身！！！」

【KAMEN - RIDE… DISHADE!】

顔を上げると血が出る程歯を食いしばり、激しい殺意の籠った目を血の如く赤く光らせながらドライバーを装着し、デイスエイドに変身した。

『ウアアアアアアアツツツ！！！！ユルサンユルサンユルサン！！！！ダークシヨツカアアアツツツ！！！！』

デイスエイドは、全身から黒いオーラのような物を沸き出しながら顔を上に向けて咆哮した。自分の持つ知識… たったそれだけの為に世界を奪われてしまった彼の怒りや悲しみは尋常では無かった…。

『青年！！落ち着っ…うわっ！！』

眩鬼はデイスエイドに落ち着く様宥めるが、彼の放つ黒いオーラが鋭い鎌鼬の様に一陣の風となり、眩鬼を近付けさせない様になっている。更にS響鬼、S斬鬼、S威吹鬼の三体もその風に斬り刻まれ消滅した。

『ウアアアアアアアツツツ！！！！』

デイスエイドは絶えず青年に向けて咆哮している。そして、シエイドブツカー・ソードモードを構え彼斬り掛かるうとした時…

『ウグウツ！！？グツ…グツ…グアアアアアアアツツツ！！！！』

！』

『な、何だっ！？青年の周りの黒い風が…！！』

突然デイシエイドが苦しみ出すと、彼を取り巻く黒い風が大きくなり周囲の地面を抉り出していき、それは時間を増す毎に大きくなつていく…。

「ウクク…暴走する者には…むんっ！！」

青年が右手を前に翳すと、地面に落ちたシエイドブッカーが浮かび出しそこから9つのカインライドカードのみが飛び出し…

「過ぎた力ですからねえ…これは。」

それを自分の手元に収め、懐に閉まった。

『お前…青年に何をした！？』

「何をした？ウクク…僕は何もしてない、彼が勝手に暴走しているだけですよ。さて、任務も完了しましたしそろそろ引き上げますか…。」

青年は自分の任務を完了させたと言い、灰色のオーロラを出現させダークシヨッカーに戻ろうとした。

『待て！！』

「そいつの闇は何もかも全てを壊す…そんな彼に光を求める権利なんて無いんですよ。彼にそう伝えて貰えませんか？尤も、どちらも



『離れ…るん…だ…!!』

その叫びを聞いたデイシエイドは意識を取り戻した。しかし彼は、眩鬼に自分から離れる様言い出す。

『もう離れない…お前は俺の大事な生徒だ…!!何があっても…』  
『離れるよ…!!』

『離れるよ!!離れてくれ!!俺の闇は全部を壊してしまうんだっ  
!!もうあんたまで…失いたくないんだよっ!!』

デイシエイドは泣きそうな声で眩鬼から離れる様叫んだ。もう自分の目の前から何も無くなって欲しく無いから…。

『安心しな。お前の闇は…俺が光へ導いてやる!!』

『……!!』

『…最後の…仕事をやるぜ…。』

「ん…くっ…あ、あいつは何処に…?!…!!か、髪が…!?!」

意識を取り戻した闇影はマバユキを探すべく周囲を見回すが、自分の髪の色が金から黒に変わっている事に気付く。

「一体何が…っっ!!」



自分の起きた異変に疑問を抱いている時、目の前で全身が傷だらけのマバユキが倒れているのを見かけた闇影は、急いで彼の元へと駆け出した。

「おいっ！！しっかりしろ！！一体何があつたんだ！？」

「…青…年…おお…どうやら…『封印』は…成功した…みたい…だな…。」

「封印…？何の事だ…？」

「全生命力を用いて…相手の「闇」を完全封印する…鬼封術（きふうじゅつ）…闇冥縛封（あんめいばくふう）…この術で…青年の中の強い闇を…封印…したんだ…。」

マバユキの「封印」と言う言葉に反応する闇影。彼は、自らの命を代償に相手の「闇」を完全封印する「鬼封術・闇冥縛封」を使い闇影の強い心の闇を封じたと言う…。

「だが…お前が…強い憎しみを抱くと…強烈な苦痛を味わう事になる…から…要注意…な…。」

「馬鹿野郎…！！何でこんな勝手な事をしたんだ！！あんたは俺が必ず殺すって…言っただろうが…！！！」

しかし闇影は、マバユキの行動に憤っていた。「自分が彼を殺す」約束をしていた為に怒っていると言うが…

「いいや違う…俺は世界を失くしてから誰も信じられず孤独だった

…だからあなたの「お節介」を拒み続けていた…。でも本当はそれが嬉しかった…！何時しかそれに憧れた俺は…あなたになりたい…あんたを超えたくなくなつたんだ…！！」

それは嘘…本当は死神と謳われ孤独だった闇影は、マバユキのそんなお節介で人の事を真剣に想う所に惹かれ、何時かは自分もマバユキの様になりたい、彼を越えたい…それが真の「新しい目標」だと涙ながらに答える闇影。

「ははは…そう言ってくれて…嬉しいねえ…。俺を越えたいなら…お前みたいに悩んでた奴を助けてやれ…！！そうすりゃ…何時かは越えられるかも…な…うぐっ…！！」

「おいっ…！死ぬな…！俺はまだあなたから学ぶ事が沢山あるんだ…！！」

息絶え絶えになるマバユキに必死に呼び掛ける闇影。やっと自分の本当の気持ちに気付いたのに…彼から未だ未だ学ぶ事が沢山あるのに…。

「俺の教えられる事は…全部教えた…大丈夫…青年は…俺の自慢の生徒だ…自信を持って…誰が何と言おうと…俺はずっと…青年の味方だ…！！」

「何でだよ…何で俺にここまでしてくれるんだよ！？」

「決まって…るだろ…？俺は…お前を…本当の息子みたいに思ってる…からだ…よ…。頑張れよ…闇…影…。」

そう言い切ったマバユキは、そのまま眠った様に息を引き取った…。

最期に闇影を「本当の息子」の様だと言い遺して…。

「…ん…キさん…マバユキサあああんっっ！！！！うあああああああああっっっ！！！！」

闇影は目から涙を流し、叫ぶ様に号泣した…。自分のせいでまた大切な人を失ってしまった…。自分が信じられる人間がやっと現れたのに…。そう悲しみに暮れていたその時…

「……………！！何だ…これは…」

近くに落ちていたデイシエイドライバーにある「異変」が起きていた。それは、ドライバーの色が紫から金に近い黄色い物となり、周囲の怪人の紋章もライダーのそれに变化していた…。

「デイシエイドライバーが变化した…！！これもマバユキサンの力なのか…！？」

闇影は、デイシエイドライバーの変化がマバユキの使った鬼封術に関係しているのかと推測しながらドライバーを握り締めると…

「感じるぞ…あの人の魂を…マバユキさんは生きている…！！ずっと俺を見守ってくれてるんだ…！！見てくれよマバユキさん、あなたの意志を受け継いで俺の様に闇に囚われた人達を、光へ導く！！」

マバユキの意志を受け継ぎ、自分の様に「闇」に苦しむ者を「光」へ導いて行くと、強く決意した。

ダークシヨッカー・本部

『くそっ…！！反逆者は何処だ！？』

『俺は向こうを探す！！お前はあっちを探せ！！』

基地本部では「何者」かが「ある物」を盗み出し、その者が内部で騒動を起こし隠れている為、二人の戦闘員らしき人物は基地内を隈無く探し二手に別れた。戦闘員がいなくなると天井のダストから二人の人間が降りて来た…。

「ふう…何とかお目当ての物は手に入ったわね」

「ああ。しかし、結局手掛かりが見つかんねえから一回基地に戻って研究室漁ってみたらあっさり見つかったなあ…。」

その人物とは、言わずもがな巡と周だった。あれから結局闇影に仕掛けた盗聴器から大した情報を得れず、已む無く一度組織に戻り闇影の研究室を漁り目当ての物を手に入れたのだが、戦闘員に見つかり騒ぎとなり現在に至る…。

「何にしても私達の目的は達成した。後は…」

「ああ…。」

目的を達成した二人は無言で目をやりながら手に入れた目当ての物  
赤いサバイバルナイフの様な物と水色のハンドボウガンの様な物  
を取り出し…

【ATTACK・RIDE…WARP!】

「アタックライド ワープ」のカードをスラッシュすると、二人はその場から姿を消した…。

あの子／野郎の様子を監視しないと…ね／な…。

「闇影を監視する」と言う、次の目的の為に…。

『グオオオオツツツツ！！！！』

『へエヤアアアツツツツ！！！！』

「裏切り者には死あるのみ…解りやすいな…。」

闇影の前には無数の怪人の軍勢が立ちはだかっている。理由は勿論、裏切り者の制裁である…。しかし闇影は、それを恐れるどころか、逆に落ち着いた表情をしながら着ていた漆黒のローブを脱ぎ捨て、ナイフで長い髪を切ってマバユキが着ていた茶色のジャケットを着込んだ。

『貴様！！こんな所で断髪して何のつもりだ！？』

「そつだな…心機一転…かな？」

『ふざけるな！！貴様は一体何様のつもりだ！？』

断髪をして心機一転を言うと、前までの彼とは考えられない闇影の能天気な言葉にキレル怪人は何様だと尋ねた。

「何様だつて…ふつ、俺は…！！」

尋ねられた闇影は小さく笑いながら黄色のデイシイドライバーを腰に装着し、オレンジ色のデイシイドが描かれたライダーカードを怪人達に見せ付け「あの台詞」を言った…。

「お節介教師な仮面ライダーだ！！宜しく！！変身！」

【KAMEN - RIDE… DELIGHT!】

カードをドライバーに装填すると、闇影は白いスーツに黄色のライドプレートが刺さった青い複眼にライトオレンジのボディが特徴の戦士「仮面ライダーデイライト」に変身した…。

『さて、輝く道へと…導きますか！！』

『ほざくなっ！！かかれえっ！！』

『『『ウオオオオオツツツ！！！！！！』』』

一体の怪人の言葉を皮切りに、デイライトに襲い掛かる怪人達。しかしデイライトは、尚も落ち着いた様子で黄色のシエイドブッカー「ライトブッカー」をソードモードにして構え始めた…。

『マバユキさん…あなたが教えてくれた事は決して忘れないからな…!!…うおおおおおつつつつつつ!!…!!』

デイルイトはただ一人、怪人の軍勢に向かって走り出した…。緋眼の死神は、光を導く者「光導者」となり、全ての人々の「闇」を「光」へ導く為に戦い続けて行く。

「うん…んん…はあ…何時の間にか寝てたのか…。」

何時の間にか眠っていた闇影は、寝惚け眼で腕を伸ばし屈折をした。

「思い出しちゃったな…あの時の事を…。」

ベッドから起き上がった闇影がシャツの胸元をはだけると、胸には「響鬼の世界」や「歌舞鬼の世界」の黒いマークが真ん中にあり、その周囲には円状のまじないらしき物が印されていた。おそらくこれが、マバユキの施した闇冥縛封の封印陣なのだろう…。

「…風呂にでも入るか…。ん、何だこれ？」

風呂に入る為闇影が部屋を出ようとした時、足下に落ちていた何かを気付き、拾い上げた。

「太陽の形をした金色のピアス…何でこんな物持ってるんだ俺？まいつか、一応持つところ。」

闇影は拾ったピアスをジャケットの懷に閉まい込み部屋を後にした。

そのピアスが自分の物だとは何故か気付かずに…。

## 脱衣場

「ふう…っっておとつと…！ジャケットから何か落ちちゃったな…。  
マバユキさんのロケットペンダントかあ…。」

ジャケットを脱ぐと、中からロケットペンダントが転がってしまいそれを拾い上げまじまじと見る闇影。しかしそれを何故か開けなかった。いや、開ける事が出来ないのだ。その理由は、ロケットペンダントが殆ど焦げてしまい変型した為開ける事が出来なくなってしまうっているからだ…。

「一体どんな人達何だろう…？マバユキさんの家族の人って。」

中にあるマバユキの家族の顔が気になっている闇影は、開かないペンダントをジャケットに閉まい込み、衣服を全て脱ぎ脱衣籠に収めて風呂場のドアをガラリと開けると…

「…っ…っ…っ…あ…闇影さん。」

「え！え！え！影魅璃さんっ！！？／／／すっすっ、すみませんでした！！見てませんか！！／／／で…出直しますっ！！／／／」

そこには何時もの茶色の巻き髪が濡れて全て豊満な胸を覆い隠しており首にペンダントらしき物をくくっている以外、一糸纏わぬ肢体に付いた泡をシャワーで洗い流す影魅璃の姿がそこにあった。それ



を諸に見てしまった闇影は顔を真っ赤にし、鼻からは赤い液体を垂らしながら平謝りして立ち去ろうとしたが…

「逃げなくていいんですよ。何時も黒深子がお世話になってるんですから、お背中くらい流させて下さい。」

娘が世話になっっている礼に背中を流すと言っ影魅璃に手を捕まれ、浴場に引き込まれてしまい…

い、いや…ホント結構ですからっ…!!／／／ってちよつと!!！背中流すだけなのにご掴んでるんですかっ!!！／／／

うふふ…闇影さんってここも立派なんですね…。

え…って何でそれをここに…ってくあぁっっ…!!！／／／おっ…お願いですからやめて…!!！／／／うえっ!!！あ、あまり動かさないで…アッー!!!!！！

んふ…やっぱり若いですねえ…。

「はぁぁぁぁ…／／／」

風呂場から上がり全身を真っ赤にした闇影は、首にタオルを巻いた状態でゾンビの様に上半身を思いきり下を向きながらとぼとぼリビングに向かって歩いていった。影魅璃に何をされたのかは聞かない方が身の為だと言っておこっ。

## リビング

「……」

「……以上が闇影君の過去よ。」

一方、巡達から話を聞き終えた黒深子・コウイチ・ツルギは呆然としていた。

「んまあ、それで俺様達はお宝を探しつつ野郎の監視もしてたつて訳だ。今は大丈夫でも何れ何かの拍子でまた暴走しかねえから……」

「勝手に決めるな……!!」

「……!!」

そこへ闇影がリビングに入って来た。少し険しい顔をしながら……。

「せつ、先生……!!わ、私達は……!!」

「人の過去を勝手に黒深子達にべらべら喋りやがって……!!」

理由は勿論、二人が自分の過去を勝手に黒深子達に話した為である。今の闇影の表情を見て、黒深子は慌てた出すが……

「確かに俺は罪も無い人達を殺して来た……。それは決して許されな

い事だ……。だがな、ある人……マバユキさんと会ってそれが間違いだと言う事に気付いた。だからこそ俺は、自分の犯した罪を背負いつつ沢山の人達の『闇』を『光』へ導き救う事をしていく。それが、俺に課せられた償い、使命だと思っている……。」

「先生……。」

しかし闇影は、自分の犯した罪からは逃げず人々の「闇」を「光」へ導き救う事を心に誓ったのだと改めて打ち明けた。今まで自分が殺めてきた人達への罪滅ぼしの為に……。

「まあ尤も、こんな事で償いになるのかは解らないけどな……って、あ……っつ！！」

テーブルに目をやった闇影は突然大声を上げ絶叫した。その理由とは……

「お前等！！俺の『モモタロス印のラー油プリン』を二個も勝手に食べたなっ……！！！」

「……何！？その意味不明なデザートは！？！」

『モモタロス印のラー油プリン』なる物を巡と周に食べられたと言う、何ともしようもない理由だった。当初は自分も黒深子とコウイチの様につつこんでいたにも関わらず、何時の間にかそれが好物になっていたのだった。

「あら、中々美味しかったわよこれ。」

「てめえに今まで邪魔された分はこれでキャラにしといてやるよ。」

「何がチャラだ…釣りがくるわこれ!!」

「さて、用は済んだしもう帰るわね」

「闇影の楽しみを盗めたし結果オーライだな。じゃあな。」

【ATTACK - RIDE…WARP!】

そう言っつて二人は、ワープでその場から姿を消した…。

「くそ〜!!風呂では散々な目に遭っし、プリンは食われるし…  
最悪だっ!!」

確かに、自分の過去を勝手にバラされるわ、風呂上がりのデザート  
を食われるわ、拳句の果てに風呂では影魅璃に何かされるわと、今  
日起きた様々な不幸を嘆く闇影。

「ねえ先生…その組織で何をして…たの…?巡さんからは目的につ  
いて何も言っつてなかったから…」

黒深子は闇影に何の目的でダークシヨッカーに入ったのかを恐る恐  
る尋ねた。実は巡達から彼の目的については何も聞いてなかったの  
だと言う。しかし…

「えっ?目的?何っつてそれは…!!ん?キャンバスに絵が…!!」

闇影が口を開こうとした瞬間、世界を表すキャンバスに絵が描かれ  
た。それは、幾多の人々が幸せそうに暮らす街の中央に四体のライ  
ダーがそれを護る様に構えている、と言う奇妙な光景だった…。

「この世界は…一体何なんだ…!?!」

これまでとは違う世界に眉をひそめる闇影。これから嘗て無い世界が彼等を待ち受けている事を未だ知らない…。次回、仮面ライダー  
デイルイト!

「乾…巧…?」

「煌…お前はもう戦うなんて面倒くせえ事しないでいいんだよ。」

闇影の前に突然現れた青年の不可解な言葉。更に…

「皆久しぶり!!元気にしてた!?!」

「ソラ…いや、ミホ…!?!?何でお前が…!?!」

「ここは『有現夢の世界』…人の内在する夢や願っている幸福を現実に変える世界…。」

黒深子とコウイチに訪れる突然の日常や幸福…。そして…

「お前が『アレ』を持つ資格があんのか、試させて貰うぜ…変身!

闇影の前に立ちはだかるブレイド、響鬼、カブト、そしてファイズ…彼等の目的とは?そして「アレ」とは…?

次回、「訪れた日常 有現夢の守護者達」

全ての闇を、光へ導け！

第22導 DISHADE TO DELIGHT〜闇から光へ〜（後書き）

闇影「マバユキさん…。」

闇影…。

マバユキ「何をしけた顔をしてるんだ？青年。」

闇影「なっ！！マバユ…」（トライRを一瞥して）おほん！！何故あんたがここにいる！？死んだんじゃないかったのか！？」

「中」ではね。けど「ここ」では無敵なんだよね〜。

闇影「訳の分からない事を言うな！！」

マバユキ「にしても青年〜お前も中々やるねえ…あんな美人に『マッサージ』して貰ってね」

闇影「なっ！なっ！なっ！！／／見てたのか！？／／／」

マバユキ「ああ。穴が開く程な。」

闇影「貴様あああつつつつ！！！！（殴り掛かるが…）」

マバユキ「おっと！！（銀靴を使い回避し…）」

ぐぼおっ！！？（作者が喰らってしまっ）

マバユキ「青年を始末するべく現れたあいつは一体何者なのか…？」

そして青年に何をしたのか？あいつの正体は次の「有現夢の世界」  
で分かるかもな。これからも青年の事を宜しく頼むな、有望な若き  
読者達。さて、青年に見つかる前にさっさと帰るか…。じゃあな！  
！ノシ（ヒビキさんの敬礼をして去っていく）」



## ディシエイド&眩鬼人物紹介(前書き)

闇影<sup>バスト</sup>「今回は過去の、ディシエイドの詳細を教えてやる…。有り難く思うんだな。」

マバユキ「まゝたそんな態度に逆戻りしちゃって…青年だけじゃなく俺の詳細も教えちゃうから、これを機に俺や青年の事をよく覚えていってくれ。」

闇影<sup>バスト</sup>「ふん、まあ別にそれが何だって物だが、暇潰しに見ていけ…。」

マバユキ「そいじゃ、どぞぞー!」

## デイスエイド&眩鬼人物紹介

煌 闇影/仮面ライダーデイスエイド

16歳。ダークシヨツカーの幹部であり、技術研究責任者でもある。金色の長髪をポニーテール状に纏め、右耳に金色の太陽のピアスを付けており、鋭い目つきをした赤い瞳にフード付きの黒いローブが特徴。(服のイメージはゴカイジャーで小津魁が着ていた物)身体能力は高く、知識も一度見た物を完全に記憶してしまう程高い。性格は冷酷無慈悲であり自分の目的以外の事には素っ気無く、「光る赤い目に見入られた者は絶対の死を約束される」事から「緋眼(ひがん)の死神」と謳われる。しかし、自分が一度決めた事を実行する実直な面があり、自分をよく思ってくれている人間にはややツンデレな態度で接する。

三年前に自分の知識を欲したダークシヨツカーが彼の世界を「彼のみを生かして残りを始末、消滅させ絶望に暮れている所を救う」と言う手段で組織に引き入れられた。

マバユキとの出会いで価値観が変わりつつあった為に謎の青年の「何らかの攻撃」を受け、「反逆者」と見なされる。

後に彼から真相を聞き激しい怒りと憎悪の感情を引き出しデイスエイドの力を暴走させてしまうが、マバユキの命を懸けた「鬼封術・闇冥縛封」により闇の力を封じ込まれ、髪の色が黒く、性格も素直な物に変わりマバユキの意志を継ぎ人々の「闇」を「光」へ導く旅に出た。また、その際過去と決別する為に断髪した。尚、本編では明かさなかったが他人を呼ぶ時は全てフルネームである。

仮面ライダーデイスエイド

七年前の闇影がデイスエイドライバーで変身する仮面ライダー。別

名「世界の灰塵者」、「死神」。

外見はディケイド激情態と酷似しているが、紫を基調とした黒いライドプレートと黒いスーツ、複眼は赤。

戦闘能力はディライトのそれを遙かに上回り、全てのライダーの力を使う事が出来る。(但しカメンライドやシャドウライドは使用不可。)

また、「9つの平成ライダーの世界」のラスボスに変身出来る「フイナルカイジンライドカード」も所有している。

マバユキの闇冥縛封によりディライトに変化し、その力は九割激変する。

このライダーの変身者が負の感情を一定以上まで増大すると…

F A R

色が紫である以外はディライトのそれとほぼ同じである。また、他のライダーの必殺技をもディシエイドの状態で使用可能。

ディシエイドドライバー

闇影がディシエイドに変身する為のツール。外見はディケイドドライバーに酷似しているが色は紫で、周囲にはライダークレストではなく、グロンギからファンガイアまでのカイジnkレストが印されている。

尚、このドライバーは「強大な心の闇を持った者」にしか適合しない。

マバユキ/仮面ライダー 眩鬼

年齢は30代前半。本名や世界は不詳。

特徴は柔らかく尖った銀色がかつた白髪、左目には黒い眼帯を付けており、銀色の着流しの上に茶色のジャケットを羽織り、下は黒いズボン。

常に飄々として掴み所が無く非常に温和でお節介焼きな性格。闇影の事を「青年」と呼ぶ。得意料理はマーボーカレー、愛読書は「ド

キドキユートピア」シリーズ。全ての音撃戦士の中でずば抜けた身体能力を持つている為、生身でもディシエイドと渡り合える程。また、瞬間記憶能力にも優れており、一度見た技を完全に自分の物にする事が可能。家族に妻と子供が一人いるらしい。幼少の頃に両親を魔化魍に殺され、その時に彼を拾い音撃戦士に育て上げた師匠や自分と同じその師匠の教え子である友人も全て失ってしまった過去があり、上記の性格も相俟って闇影にしつこく構う。

自身の闇の力を暴走させたディシエイドを救うべく鬼封術・闇冥縛封を使用し、自らの命を犠牲に闇影を救い「闇」に囚われた全ての人々を「光」へ導けと言い遺して息を引き取った。

この事件を切欠に闇影は現在の性格に変わり、彼の着ていたジャケット（イメージは響鬼本編二つ目のEDにヒビキが着ていた物）と家族の写真入りのロケットペンダント（但し、封印時に焼け焦げて変形している為開封不可）を形見とした。

イメージキャスト：井上和彦

仮面ライダー 眩鬼

マバユキが変身音叉・音角で変身するライダー。外見は装甲響鬼と酷似しているが、全体の色は銀色であり複眼は青。全ての音撃を極めし者にしか変身出来ない最強の音撃戦士。

他の音撃戦士に印を結んで「変化、〜！」の掛け声でディケイドのカメンライドの様に変身する事が可能。但し、配色は全て眩鬼の物である。（身体が銀色で複眼は青）

更に自身の影も印を結んで「影変化（えいへんげ）、〜！」の掛け声でディライトのシャドウライドの様に音撃戦士に変化させる事も可能。こちらは色はそのまま。尚、本編では明かされなかったが上記の通り全ての音撃を使える為、他の音撃戦士に変身しなくてもその鬼の技を使う事が出来る。

専用アイテム・武器

変身音叉・音角

外見は響鬼のそれだが、全体の配色が銀色。

装甲声刃・銀世界（ぎんせかい）

外見は同じく響鬼のそれと酷似しているが、全体の配色が全て銀色。尚、この武器はあまり使う事は無く、大型の魔化魍や怪人の軍勢等、強敵や複数の相手にしか一切使用しない。

技

鬼走術（きそうじゆつ）・幻足（まぼろあし）

足音を立てずに幻影が生まれる程の超速度で走る回避技。

鬼走術・銀靴（ぎんぐつ）

一瞬の内に足を数十回蹴り上げてクロックアップ級の超速度で走る技。（要はONE PIECEの六式の一つ「剃」と同じ原理）

本編でマバユキがディシエイドのクロックアップを見様見真似で編み出した技である。闇影曰く、「クロックアップ擬き」。

鬼封術（きふうじゆつ）・闇冥縛封（あんめいばくふう）

自身の生命力と引き替えに、対象の「闇」の力を封印する技。

これは本来、強力な巨大魔化魍を自らの命を籠めた清めの音により、それを延々と対象の魂に響かせて封印する物である。

この封印を受けた対象の身体には、真ん中に響鬼の世界のマークがある円状のまじないが印される。また、その者が負の感情を一定以上に高めるとまじないが光り出し、苦痛を与える。（イメージはNARUTOの九尾の封印式と封邪法印をあわせた物）

## 必殺技

鬼神覚醒・瞬間（しゅんせん）

通常のそれとは違い、目を閉じて集中しながら居合いの構えを取り  
装甲声刃・銀世界の刀身を銀色の光をした「清めの光」を輝かせ、  
銀靴を使いつつ敵を一瞬の内に斬り付け背後を通り過ぎて武器を地  
面に刺した瞬間、敵の身体に無数の銀色の斬撃を刻み爆発させる。

それ以外に、他の音撃戦士の必殺技も使用可能。但し、技の色の配  
色は全ての眩鬼の物になる。（例：響鬼の「音撃打・火炎連打の型」  
の炎の色は銀になる）

## デイシエイド&眩鬼人物紹介(後書き)

マバユキ「俺のイメージはオリジナルの響鬼の旦那と『NARUTO』の力カシを合わせた感じだな。技もそれっぽい奴もあるし。」

<sup>バスト</sup>闇影「マジレッドに似た服装か…。意外と悪くは無いな…。」

マバユキ「まあこれで青年の知らない所を皆に知って貰えるから良いかもね。やっぱりツンデレなんだね〜青年」

<sup>バスト</sup>闇影「だっ、誰がツンデレだっ!!!ノノノ下らん事…を…!!!?」  
頭を抑えだし…。」

闇影「あまり知られたくない過去だけどね…。」

マバユキ「ちよいと作者の青年。これどついう事?青年の人格が変わっちゃってるけど。」

特に意味は無い!!!強いて言えばギャップを楽しんで貰う為…かな?

マバユキ「ふ〜ん。ま、これからは青年は人々の『闇』を『光』へ導いて行く旅を続けて行くんだな。頑張れよ、闇影。(退場)」

闇影「ああ…これからも沢山の人達を『闇』から救っていきさ!!!だから読者の皆さん、どうかこれからも応援宜しくお願いします!!!」

次回からは今までとは違う新しい世界を旅して行きますので、お暇がありましたら是非見てやって下さいませ!!!m) (m

第23導 訪れた日常 有現夢の守護者達（前書き）

闇影「皆さん、只今よりデイライトの真の第二章が始まります!!」

巡「前の過去編が第二章スタートだなんて言っでごめんなさいね」

周「今回からはこの小説はエロ要素が増えるらしいから思春期の野郎共、刮目して見ろよ!!」

闇影「それでは、仮面ライダーデイライト真の第二章…開幕です!!」

三人『どうぞ!!』



## 第23導 訪れた日常 有現夢の守護者達

白石家

「この世界は何なのかしら…?」

「全然見当が付かねえな…。」

黒深子とコウイチは、目の前にある今回の世界が描かれたキャンバスを前にここが何の世界なのかを首を傾げて考えている。

「本当ですね…闇影さんはどう思いますか?」

ツルギもまた二人と同じ意見であり、闇影からも意見を聞く為話を振った。

「さあ、俺もよく解らないよ。だから取り敢えず外に出て見よう。そうすれば解るかもしれないしね。」

「相変わらず呑気な答えだな…。ま、お前の能天気は今に始まった事じゃ無えからな。」

「ふふ、そうね。こうしていても仕方ないし先生の言う通り外に出て見ましょ。」

「そうですね…では、行きましょ。」

ライダーの世界に詳しい闇影ですら解らない様だが、「一度外に出

て見る」と提案し出した。コウイチは彼の呑気な提案に頭を頂垂れるが、この能天気な答えは何時もの事だと呆れながらも笑みを浮かべてその提案に賛同する。残りの二人も闇影の意見に賛同し、四人は外へ出る事にした。

「うーん…これと言って特に変わった事は無いね。」

「そうよね…殆どの人が普通に暮らしてるしね。」

外の様子を一通り見たものの、これと言った異変は全く起きていない。寧ろ平和そのものと言って良い程、人々が生活をしているくらいだ。

「こつも平和だと俺等って必要なくね？」

「でも、それだと私達が何故この世界に来たのか説明が付かないですよ…？」

あまりの平和な光景にコウイチは自分達が居る意味は無いと言い出す。しかしツルギの言う様に、それなら何故彼等がこの世界に訪れる事になったのか説明が付かない…。

「何だろうな…もう戦う必要は無いつて事かなあ…？」

「ああ、その通りだぜ。」

「「「!?!?!?!?」「「「「

「戦わなくていいのかもしれない」と闇影が呟いた瞬間、何処からか何者かがその通りだと答える声が聞こえ、四人が一斉に背後を向くと…

「お前等の旅はもう終わったんだよ。これからは自分の好きな事をすりゃあいい。」

青いジーンパンに、ベージュのワイシャツ型の上着の下に白いシャツを着た首の後ろまで届いた少し長めの茶髪をした無愛想な青年が一切の気配を感じずに立っていた。

「君は…?」

「面倒くせえが名乗ってやる。乾巧だ…。」

「乾…巧…?」

闇影に名前を聞かれた青年、巧はまたも無愛想かつ面倒くさそうな態度で名を名乗った。

「まあそんな事はどうでもいい。煌…お前はもう戦うなんて面倒くせえ事しないでいいんだよ。」

「ちょっと待ってくれ!さっきから旅は終わっただの、戦わなくて良いだの話がよく見えないんだけど。もしそうなら、どうして俺達はこの世界に来たんだ?」

闇影は、先程巧の言った言葉の数々について矢継ぎ早に尋ねた。自

分の旅は9つの影の世界を光へ導くだけで本当に終わりなのか…？  
その疑問がずっと頭から離れないでいた。すると巧は…

「はあ…あんまいっぺんに聞くんじゃねえよ、面倒くせえなあ…。  
簡単に言つとな…」

またまた面倒くさそうに頭をポリポリ搔いて顔をしかめながらも、  
簡潔に闇影の質問に答えるべく彼の真横まで近付き立ち止まると…

「ここがお前の旅の終点…お前の居るべき世界…。」

「えっ…？それってどういう…!!」

そう呟いた巧の言葉に反応した闇影は彼の方を振り向いたが、何時  
の間にか巧は姿を消していた…。

「い、居ない…。」

「何だったのかしら？今の人…。」

「俺の…居るべき世界…？」

世界の光導者、デイルイト！9つの影の世界を巡り終え、その瞳  
は、何を照らす？「はあ…歩いてても歩いてても何も起きねえ…いい加  
減歩くのにうんざりしてきたぜ…。」

「少し…疲れました…。」

巧が消えてからも暫く街中を歩く闇影達だが、未だに何の異変も起きないでいる為コウイチは不満を溢し、ツルギも長時間歩き続けて疲れ始めてきている。

「そうだね…これ以上歩いても仕方ないし、何処かお店で食べようか？」

「賛成。私、もうお腹すいた〜。」

「じゃあ、そこのお店で…!!！」

歩き続けて疲れ出した闇影達は、何処かで昼食を摂るべく近くの店に向かおうとした時…

「『!!!!』」

「紅蓮…!!！」

目の前に突然紅蓮が現れた為、警戒体制を取る四人。だが…

「デイトライトよ…この世界で貴様には素晴らしい幸福がもたらされる…。精々楽しむがいい…。」

普段の様な憎悪の籠った静かな口調ではなく、やや穏やかな口調で且つ不敵な笑みを浮かべながら闇影に祝福の言葉を送った。

「は？何言って…!!あれ？消えた…。」



「貴方、煌闇影さんですよ？写真撮らせて貰えませんか？」

「握手して貰って良いですか！？あたしファンなんです！！」

突然複数の女子高生達が闇影の前に立ち塞がり、写真撮影や握手を求めて来た。

「はっ？えっ？ファン？何言って…」

突然の出来事に頭を混乱させる闇影だが…

「おい、あれって煌闇影だろ？アイドル教師で有名な。」

「スゲ〜！！本物だよ！！」

「テレビで見るよりカッコいいよね！！」

「ウソ！マジで！？」

「一緒に居る子誰？彼女か何か？」

すると、暫く何の音沙汰も無かった周囲の人々が闇影を囲み出して彼を「アイドル教師」だと口々に言い賞賛し出した。中には写メー  
ルやカメラで闇影を写す者も。

「闇影さん…これって一体…！？」

「どうなってるんだ…！？」

突然の「人気者」への急上昇にただただ困惑する闇影…。

「先生達は何処に行ったんだろう…？携帯も繋がらないし。」

一方、闇影達とはぐれた黒深子は彼等を探すべく街中を彷徨っていた。携帯で連絡しようも、中々繋がらず徒歩に暮れていると…

「黒深子…！！」

「ん？あれって…？」

ボーイッシュな印象をした跳ね返った緑の短髪にオレンジのシャツにジーパンを履いた少女が手を振りながら此方へ近付いて来た。よく見ると一人だけではなく三人の少女達だった。

「黒深子、久しぶり！！暫く連絡が無かったけど大丈夫？新しい学校で何かあったの？」

「全く…それならそうと私達に相談してくれば良い物を。」

「ホントだよ、も。」

黒いショートヘアにニット帽を被った青いジャケットに黒いシャツとジーパンを履いた少女は連絡をしなかった黒深子にぼやき、栗色のツインテールにピンクのワンピースを着た小学生くらいの身長をした童顔の少女はそんな黒深子に顔をふくらせる。

「瞳…鞞華に早苗！？ホント久しぶり…！！皆元気にしてた!？」



三人の少女達を見て黒深子は、瞳と呼んだ少女の手を握り喜び出した。

緑色の短髪の少女は火室瞳（ひむろ　ひとみ）、黒髪のショートヘアの少女は刀道鞆華（とうどう　さやか）、栗色のツインテールの少女は甲田早苗（こうだ　さなえ）。彼女達は黒深子の中学生時代の同級生であり、今でも連絡し合う親友でもあった。しかし…

「（あれ？という事はここって…もしかして私の世界！？）」

本来ならここには居ない筈の自分の知り合いが居るという事は、この世界は自分の元居た世界なのでは？と推測する黒深子。

「どしたの黒深子？」

「顔色が悪いけど大丈夫？」

早苗と瞳はそんな黒深子の様子を見て心配し出すが…

「…あっ！ううん、何でもない。」

「なら良いけどな。」

ハッと我に返った黒深子は、何でもないと行って首を振った。

「そ、それより皆こそ三人で集まってどうしたの？」

「ううん、何か久しぶりに黒深子達に会いたくなってあたしが連絡したの。」

「最近皆で集まって遊んでないから今日遊ぼうってメールがあったんでな。」

「で、黒深子だけ中々連絡が取れなかったからあたし達三人だけで遊びに行こうってなったんだけどそこで偶然貴女を見つけたって訳。

」

どうやら早苗が発信源であり、「久々に皆で遊びに行こう」と、瞳と鞘華に連絡したのだが、黒深子だけ連絡が付かない為已む無く三人だけで遊びに行こうとした時に偶然黒深子を見つけて現在に至ると言っ…。

「そうだったの…ゴメンなさい。」

「いいのよ。それよりこうして黒深子に会えて嬉しいよ!!」

「ああ。」

「そうそう!さ、今日は思いっきり遊ぼうね!」

「皆。」

闇影達と長い旅をしていた為、親友からの連絡に気付かないでいた黒深子は二人に謝るが、彼女達がそれを笑顔で許したのを見て涙を浮かべる。

「ほらほら泣かない!行こ行こ」

「う、うん!」

泣き止む様元気付けながら黒深子の背中を押す早苗。その時…

「…！！（あれ？私、何か大事な事があつた気が…！！）」

黒深子の頭の中から「大事な何か」が失われ、その違和感により立ち止まる彼女。

「どしたの黒深子？早く行こ？」

「（…ま、いつか。）ええ、行きましょ」

しかし黒深子はそれを気にはせず、早苗達と共に街中を歩き出す…。

「闇影達は何処行つたんだ？さつきから何度も携帯で連絡してんのにとつちも繋がんねえし…。」

一方、コウイチも闇影達に再三連絡をしているのだが黒深子同様、彼等からの返事は一切返つて来ないでいた。

「チツ…もういいや。俺だけでも先に食つて…！！な、何でだ…！？」

連絡が付かずに少し苛つくコウイチは自分だけ先に昼食を摂ろうとした時、偶々目に行った近くのビルを見て目を見開いた。

「オレサマORESAMAジャーナル…俺の会社…！！」

そのビルは、コウイチとミホがカメラマンとして勤めている編集社「ORESAMAジャーナル」であった。

「つー事は、ここってリュウガの世界！？何時の間にか里帰りしてたんだ…！！」

勤めている会社が目の前にあった為、自分は「リュウガの世界」に里帰りしたのだと思い込むコウイチ。その時、ビルから一人の女性が現れ…

「おっと、すいま…なっ、な!？」

通路を塞いでいた事に気付き直ぐ様避けながら謝るコウイチだが、その女性の顔を見てまたも目を見開き驚いた。

「あっ！探したぞコウイチ、こんな所に居たのか!！」

「ソラ…!!いや違う…ミホ!!？」

何故ならその女性は既にこの世に存在する筈の無い、羽鳥ミホ／仮面ライダーファムが居たからである…。

「（どういう事だ…!?ミホは確か死んだ筈じゃ無いのか!?ならこれは夢…いや、俺は寝た覚えは無いし…。…もしかして今まで俺は『起きてる夢』を見ているのか…!?だったら…!!!）」

今自分は夢の中に居るのかと自問自答を繰り返すコウイチは、これは夢か現実なのかを確認する為…

「ひゃっ!?!?／／／」

自分の頬をつねるのではなく、ミホの胸を強く揉み出した…。

「うむ…この手触りは本物だから確かに夢じゃないな…。」

触った感触が本物であるようでこれは夢では無いと確信するコウイチ。しかし…

「…／＼気は済んだか？なら早く来い。編集長が呼んでるぞ。」

「えっ…！？あ、ああ…。」

胸を揉まれるというセクハラ行為を受けたにも関わらず、ミホは激怒せず普通の態度でありコウイチに会社に入る様促した。

「変だな…何時もなら俺の手首の骨を折って掴んで投げ飛ばす筈なんだけどなあ…？」

普段のミホならばここで制裁を喰らわせる筈のだが、それが一切こなかった事に疑問を抱きながらビルに入るコウイチ。というか分かってるなら自重しろと言ってやりたい。

ORESAMAジャーナル・編集部

「な、なあミホ。俺が編集長に呼ばれる用事って…やっぱりクビ？」

「さあな。私は呼んで来てくれと言われたただだからな。」

コウイチは編集長が自分を呼んだ用件とは解雇を言い渡されるのでは？と考え段々不安な表情になる。

三年前、スフィアマミラージュに肉体を奪われ、魂が虚像の存在となりずっとミラーワールドにいたのだ。当然、会社もその分無断欠勤しているのだからそれが理由でクビだと宣告されてもおかしくない…。

「おお、赤竜！やっと来たか！！」

そこへその当人である、白髪のおールバックに茶色のスーツを着た中年の男性、編集長の小久保（こくぼ）ダイスケが二人の前に走って現れた。

「へ、編集長！！あ、あの…！三年も勝手に休んでてすみませんでした！！」

編集長室にいる筈のダイスケが突然自分の前に現れた事に驚くコウイチは、即座に会社を「休んで」いた事を謝り出すが…

「そんな事より赤竜！おめでとう！！君の撮った写真が景（ビュー）ティフル賞に入賞したぞ！！」

「はい！！入賞してしまってホントに…！！って、へ？入賞？」

「凄じじゃないかコウイチ！！景ティフル賞と言ったら私達カメラマンが目指している世界的栄誉賞だぞ！？それに入賞したなんて…！！」

ダイスケからの景ティフル賞入賞の言葉を聞き啞然とするコウイチ。

その賞の入賞は、全国のカメラマン達にとっては大きな夢であり、自分の撮影した写真が世界的に美しくなければ取れない程難しい入賞である。それを取れる事はノーベル賞を獲得するに等しい物なのだ。それを聞いたコウイチは…

「マ…マジかよ…いよっしやあああっつ！…！！！」

先程の不安な表情から一転して顔を明るくして頭が天井にぶち当たりそうな程飛び上がった大喜びし、着地と同時にミホに抱き着いた。

「お、おめでとうコウイチ…／＼でもちよつと離れてくれないか。恥ずかしいから…／＼」

「お、おお！！すまね！！（つてあれ？何時もならここで『調子に乗るな！！』と言って腰掴んで窓から突き落とす筈なんだけどなあ…？）」

ミホに抱き着くのを止めたコウイチは、またも制裁を加えない彼女の態度に疑問を抱いた。二度目だが自重しろと言いたい。

「あ…あの…赤竜さん…にゅ…にゅ…にゅ…にゅ…／＼」

「ん？」

コウイチの背後からおどした口調で下を向きながら話し掛ける黒髪のおさげにグルグル眼鏡に紺色のスーツと地味な印象の女性、凰神（おうみ）ユイが彼の入賞を祝う言葉を送ろうとしているが、極度の恥ずかしがり屋で人見知りが激しい為中々それが言えないでいる。

「おお、ユイちゃんか。どしたんだ？」

「にゅ…にゅ…乳輪おめでとつございます…！／／／」

「へっ…？」

「あっ…！／／ごっごめんなさい…！間違えました…！／／／」

あまりに緊張し過ぎて入賞を乳輪と大声で言い間違えてしまったユイは、顔を真っ赤にしてコウイチにペコペコ平謝りした。

「」「ぷっ…あっはははは…！…！」「」

「ごめんなさい…！間違えてごめんなさい…！／／／」

「あはは…いや、良いんだよププ…あ、あり…ありが…と…ははは…！」

「うう…／／…！」

三人に大笑いされて真っ赤な顔をしたユイは涙目になる。コウイチは彼女のメッセージを痙攣したかの様に笑いながら受け取った。

「はは…とまあ置いといて、今日はその記念に飲み会をしようと思っただがどうだね？」

「「喜んで…！」」

コウイチの景ティフル入賞祝いに飲み会を開くと言うダイスケの提案に快く賛同するコウイチとミホ。



「それじゃあ今日は定時までにしようか。」

「おっし！！今日は飲みまくって…！！ん？」

飲み会を楽しみに喜ぶコウイチだが、突然彼は何らかの違和感を感じ出した。

「（そっぴい俺、何しようと思ったんだろ…？何か大事な用がある気がしたんだが…）」

「どうしたんだコウイチ？」

「わ、私また何かしちゃ…いました…？」

「（…ま、いつか。）いや、何でも無え。」

ミホとユイに声を掛けられるが、コウイチはその違和感を気にせず何でも無いと言って返す。

「あゝ今日は本当に楽しかった」

一方黒深子達は、早苗の家で寛いでいた。あれからショッピング、ゲームセンター、カラオケと様々な所で暗くなるまで遊びまくり、共働きで両親が居ない早苗の家で泊まる事となり現在に至る…。

「うん！私も黒深子とこうしてまた遊べて本当に楽しかったよ！！」

「ああ。私も本当に嬉しいさー！」

黒深子は久しぶりに級友と出会えた事をとて嬉しく思い、瞳と鞘華もまた同じ気持ちでありその思いを口にした。

「ところで…皆もう高校で彼氏とか出来た？」

「「ぶっ！！？／／／」」

すると早苗が突然、三人に高校で彼氏が出来たのかを聞き出した。その質問を受けて黒深子と鞘華は食べていたお菓子を嘔き出した。

「なっ！？何聞いてるんだ！？／／／そんな事…！！」

「鞘華あ…こついうコイバナは女の子にとって一番大事な話なんだよ？ぶっちゃけそれが聞きたくて集めたんだからね」

「はあ…。」

早苗が今日黒深子達を集めた本当の理由は、彼女達の恋の進展についてを聞き出す為であった。それを聞いた鞘華は後悔したかの様に頭を頂垂れる。

「ねえねえ！黒深子はどう？」

「えっ！？わ、私から！？／／／私は…／／／ま…だそんなんじや無いけど尊敬している人なら…／／／」

最初に聞かれた黒深子は顔を赤くしながら、好きかどうかでは無く尊敬はしていると言いながら闇影と自分が写った写真を皆に見せた。

「おっ！黒深子の彼氏、だ〜い発表〜！！！」

その写真が出るや否や、早苗は即座にそれを筆るかの様に取り上げで目にするが、一瞬だけ目が今までとは違う感情の籠ってない鋭い目付きをし…

「え？どうしたの…って、瞳、鞆華？」

「……………」

「……………」

黒深子は早苗のそんな様子を伺うが、瞳と鞆華も同じ目付きをして早苗にアイコンタクトで合図をし出した。すると…

「うわっ…メツチャイケメンじゃん！！！」

「あ、ああ…ここまで良い顔付きをした男性は初めてだ…！！／／／」

「本当ね…この人とはどんな関係？」

直ぐ様元の表情に戻った三人は、黒深子に闇影とはどんな関係なのかを尋ねる。

「（何だ…ただ驚いただけか…。）う、うん…家庭教師の先生で…今ウチに居候してるの…／／／」

「……ええええつつ！！！？一緒に住んでる！！！？あの男嫌いの

黒深子が！！！！？」「」

黒深子の話を聞いた三人は目を大きく見開いて大声で驚いた。中学時代の黒深子は、元々男性は皆スケベである為あまり関わりたくない人種らしく、告白されてもそれを全部蹴る程だった様である。その彼女が家庭教師とは言え、男性を住み込ませていたのだから驚くのは無理も無かった。

「まさか黒深子がそこまで進んでたなんてねえ…もうエッチとかはしちやった？」

「ぶっ！！／／／な、な、何言ってるのよ早苗！！／／／私先生とはそんな関係じゃ無いわよっ！！／／／（まあ…ちよっとして見たいけど／／／）」

早苗が急にブツ飛んだ質問をした為、黒深子は顔を真っ赤にして全力で否定した。とは言え、心中ではそれを多少期待はしているが。

「照れてる所があゝやゝしゝ…あ、もうお菓子無いや。ねえ、黒深子に彼氏が出来たパーティーも兼ねてお菓子買いに行かない？」

「うん おめでたい事だしね 行こう行こう！！」

「だな。黒深子は残ってる、私達だけ行くから。」

黒深子に彼氏が出来た記念のパーティーを開くべく、お菓子がなくなつた事も相俟つて早苗達は黒深子を残して新しいお菓子を買いに出るつもりである。

「え？ちよっ、ちよっと待って。私も行くよ！」

「駄目駄目。黒深子は主役なんだから残らないと！」

「そうそう。何かいるやつがあつたらそれ全部買ってくるから。」

黒深子も行くこととしたが、主賓である彼女は残るよう引き止める三人。

「…分かったわ。じゃあお言葉に甘えて任せるわ。」

「んじゃ、行ってくるね」

その言葉に甘える事にした黒深子は残り、三人はお菓子を買いに出る為家を後にした。

居酒屋・具理羅酢（ぐりらす）

「え〜それでは。赤竜コウイチ君の景ティフル賞入賞を祝って…乾杯！！」

『かんぱ〜〜〜〜いっつっつ！！！！』

一方此方では、コウイチの景ティフル賞の入賞祝いにORESAMA Aジャーナル馴染みの居酒屋で社員全員が飲み会を開き、ダイスケの乾杯の音頭により皆が酒を一杯煽りテンションを上げた。

「おめでと〜コウイチ！！！」

「お前はORESAMAジャーナルのエースだ！！ほれ！もう一杯！！」

「あざっす！！んぐんぐ…ぷはあっ！！／／／」

「「おおっっっ！！」」

先輩達から祝いの印として、空になったジョッキにビールを大量に注がれそれに感謝しながら一気に飲み干すコウイチ。そのせいで既に顔が真っ赤である。

「いや〜ホントに凄いやコウイチは。ここでよく枝豆摘まみながらミホさんと一緒に資料やら書類とにらめっこしてたあのコウイチがね。はい、これも食って！！」

同じコウイチを誉める、青いエプロンを着た頭にバンダナを巻いた髪を寝かせた様にペタンとした黒い短髪の男性、この店主である二島（にとう）ゴロウはコウイチの前に料理が載った小皿を置いた。この店でコウイチとミホがよく料理を食べながら仕事をしている為、ゴロウとは顔馴染みである。

「サンキュー、ゴローちゃん！おっ！これは俺が好きな海老餃子！はむっ…んんっ！美味えっ！！」

大好物の海老餃子が来たため、コウイチは満面の笑みを浮かべながらそれを口にする最高に上手かったのか顔を大きく綻ばせた。

「せきだつさ〜ん…のんれまふか〜／／／」

そこへ顔を真っ赤にして何時もかけてる眼鏡を外しおさげ髪を解き別の雰囲気を持ったユイが、完全に酔っ払った状態でコウイチに絡み出してきた。

「うおっ!!? / / / ちよっ、ちよつとユイちゃん!! 出来上がりが過ぎ…ていうか君、酒飲めん筈でしょ…!?!」

コウイチの言う様に、本来ユイは酒の類等一切飲めず普段の飲み会では烏龍茶くらいしか飲まない。その彼女が異性に抱き付く程酔っているという事は、誰かが無理矢理飲ませのかもしれない…。

「わくくたひがおひゃけのんらだえなんてほくりふ…いつれきたんれひゆか!! / / / ヒツク…!! / / /」

「わ、分かったから離し…!! (うおっ!?! / / / む、胸が当たって…しかも…かなりデカイ…!! これは思わぬダイヤの原石を見つけたかも…!!!)」

完全に呂律が回らないでいるユイは、更にコウイチに抱き付く。その時、彼の身体にユイの胸が当たる。意外に大きいらしく、その感触を少し楽しむ。更に…

「もくうあつくらってきたからわたしぬぎま…!! / / / しゅく…zzz」

「わーわー!! ちよつと待て!!…って、何だ寝ちゃったのか…。(ちよつと惜しい気が…)」

ユイのテンションは最高潮に達し、遂には着ている衣服を全て脱ぎ出そうとしたが、その寸前に彼女は突然倒れそのまま深い眠りにつ

いた。コウイチはそれに安心するも、内心残念がっていた。

「やれやれ…コウイチ、ユイちゃんは少しここで休ませるからもうそろそろ二次会に行きなよ。」

「悪いなゴローちゃん…って、えっ!? もう二次会!？」

酔い潰れたユイを介抱するゴロウに感謝するコウイチは、何時の間にか二次会の時間になっていた事に驚く。泥酔したユイの豹変ぶりに翻弄された為にここまで時間を掛けていた事に気付かなかったのだった。

「どうすっかなあ…。」

泥酔したユイはゴロウに任せるとして、コウイチは二次会に行くかどうか迷っている時…

「コウイチ、お前はどうするんだ？」

「おっ、ミホか。俺はまだ飲めるけど、二次会だと色々めんどい事させられそうだからあんま行きたくねえんだな。お前は？」

やや顔が赤くなってるミホが、二次会に参加するのかどうかを尋ねて来た。まだ飲めるのだが、会社の二次会で余興だの恋愛話だの、自身の過去を掘り葉掘り聞かれる事が好ましくない故に参加を渋るコウイチ。

「そうか…だっ、だったら…//私の…家で…二次会をひ、開かない…か…?//」



「え…？」

それを聞いたミホは赤くなっている顔を更に赤くし、急にもった口調で自分の家で二次会を開く事を提案した。普段のミホなら家に泊めると迫れば、息の根を止められる程首を締められるのだが、その彼女が逆に自分の家に招くのだと聞きコウイチは口をポカンとしながら呆ける。

「い…嫌か…？／／嫌なら良いんだ！無理に誘ってすまん！！／／」

「い、いや…そうじゃねえけどよ…お前、何かおかしいぞ？何時もならそんな事言わな…！！」

コウイチは何時もとは違うミホの様子を伺おうとしたが…

「っ痛！！うううっ！！な…何なんだよ…この頭痛は…！？…ミ…ミ…ホ…！？」

突然頭に強烈な痛みが走り出しその場で悶絶しながら、焦点の合わない濁った目をしたミホを見たのを最後に、意識を失い倒れてしまふ。

「コウイチ…大丈夫か？」

「う…ん…ミ…ミホ…こゝ、此処は…？」

「私の家。急に頭を抱えて倒れたから家まで運んだんだ。具合はど

うだ？」

コウイチが目を覚ますと、一台のベッドの上で仰向けになっておりミホがその横で座っていた。どうやら此処は彼女の家の様だ。

「そうか…悪りいな…。」

「まだ寝てる。もうちょっとしたらお粥が出来るからそれまで横になってる。」

起き上がるうとしたコウイチを寝かせたミホは、粥を作る途中の様でありリビングへと向かった。

「（そっぴや俺、あいつに聞きたい事があつたんだけど…何だっけ…?）」

コウイチは、自分が倒れる直前にミホに聞きたい事があつたのだが、それが何なのかをいくら考えても思い出せないでいた。

「ほら、出来たぞ。玉子粥。」

そこへ熱々の玉子粥が入った器が乗ったおぼんを持ったミホが現れた為、一度この話は切り上げる事にした。

「おっ、美味そうだな。いただきます。ふーっ、ふーっ、ふーっ…はんむ…ん…!!美味えっ!!」

れんげで掬った玉子粥をフーフーしながら口に運ぶコウイチ。味はとても美味いらしい。

「ほつ、本当か！？／＼／」

「ああ…けど何かちょっと味は濃いけど問題無く美味しいぜ。身体もちよっと元気になってきたかな？」

「それは良かった。何せ…私の『モノ』や媚薬とか色々混ぜてるからな。」

「は？何言つて…！？な…何だ…！？身体が痺れて…おまけに…熱い…！？」

ミホの奇妙な言葉を聞いたのと同時に、コウイチの身体全体に痺れが走り、体温も異常に上がりだした。

「ふふ…本当に早く効く物なんだな媚薬って。」

「ミ…ホ…お前…どういう…つもりだ…！？」

「どついつ事も何も…男ならこの場合どついつ展開が待ってるか予想出来るだろ？」

ミホの異常な行為を弱りながらも睨み付けるコウイチ。しかしミホは、突然着ている衣服を脱ぎ出し下着姿となって髪をほどくと…

「お前が好きだからだ。だからこうして今からお前と『アレ』をするんだよ。」

「……………！！」

コウイチの身体に跨がり、彼の耳元でそう囁く。しかしコウイチは

その時の彼女の顔を見て恐怖した。何時もの勝気で優しい顔では無く、今まで見た事の無い、先程一瞬だけ見た焦点の合わない濁った瞳をし妖艶な笑みを浮かべた彼女の顔を…

森の中

「はあ…はあ…何なんだこの世界は…!!」

「先程まで静かだったのに、突然闇影さんを有名人と言って騒ぎ出しましたからね…。」

一方闇影とツルギは、あの後何とか闇影を追い掛けるファンから逃げ切りこの森の中へと姿を隠し、騒ぎが収まりかけたの見計らい一旦休み現在に至る…。

「一体ここは何の世界なんだ…!?!」

「随分な有名ぶりね闇影君」

「安心しな。もう連中は追ってこねえよ。尤も、『初めからそんな奴等は居ねえ』けどな。」

「巡、周…。どういう事だ?」

一本の木陰から巡と、煙草をくわえた周が現れた。闇影は、自分を追う連中は「初めから居ない」と言う周の言葉がどどういう事なのかを尋ねた。

「ここは『有現夢の世界』…人の内在する夢や願っている幸福を現実に変える世界…。」

「有現夢…！？」

「ま、簡単に言やあ自分の望んだ夢が現実になるって言うファンタジーな世界さ。」

「夢が現実に…！！まさか、黒深子さんとコウイチさんが居なくなつたのは…！？」

「その夢となつた現実空間に囚われているからか！？」

この「有現夢の世界」の特徴を聞いた二人は黒深子とコウイチが突然消えた理由を理解した。彼等は、普段は言わない心の内に秘めた願い…夢が現実の物となつた空間に囚われているのだつた。

「よう、どうだこの世界は。楽しめたか？」

そこへ再び巧が現れ、この世界の居心地について闇影に尋ねた。

「楽しいも何も、こんなまやかしの世界で楽しめる訳が無いだろ！  
！黒深子とコウイチは何処だ！？」

当然、たった今この世界の仕組みを知つた闇影が喜ぶ筈も無く、黒深子とコウイチの居場所を怒号の如く尋ねる。

「ああそうか…ま、そんな事より、今からお前に一個だけテストを出すぜ。」

「テストだと…！！そ、それは…！？」

「ああ。」

巧は闇影の質問には答えず、彼にテストを出すと言いながら何時の間にか腰に銀色のベルトを巻いており、手元には携帯電話の様な物を持っていた。そして、「5」のボタンを三回押し「ENTER」のボタンを押すと…

【555】【STANDING-BY…】

「お前が『アレ』を持つ資格があんのか、試させて貰うぜ…変身！」

【COMPLETE!】

警告音が鳴り響く携帯を閉じ、右手で持ったそれを上に掲げてベルトにセットすると、巧の身体に赤いラインが纏い、赤い光を放つと同時に銀色のアーマーに赤いフォトンストリーム、そしてギリシヤ文字の「」を模した黄色の複眼が特徴のライダー、夢の守り人「仮面ライダーファイズ」へと変身した。

「ファイズだつて…！？」

『俺だけじゃ無えぜ。おい。』

巧の正体「ファイズ」に愕然する闇影を余所にファイズが声を掛ける  
と、瞳、鞞華、早苗、そしてゴロウとユイが現れた。彼等は初めからファイズの仲間だったのだ。しかし、絶望はまだ終わらない…。

「「「変身…。」」」」

「響鬼…。」

【TURN・UP!】

【HENSHIN!】

瞳は赤い縁取りに紫色のスーツの戦士・響鬼。

鞘華は紺色のスーツに銀色のヘラクレスオオカブトを模したアーマーに赤い複眼の戦士「仮面ライダーブレイド」。

早苗は赤いカブトムシを模した青い複眼の戦士「仮面ライダーカブトライダーフォーム」。

ゴロウは騎士の兜を模した銀色のバイザーに緑が基調の牛を模したライダー「仮面ライダーゾルダ」。

ユイは嘗て闇影を苦しめたオーデインのだが、通常のそれとは違い「サバイブ 無限」の力を得ておらず、角や肩の突起が小さく金色の部分が黄色となっている「アンスキル・オーデイン」にそれぞれ変身した…。

「熱盛大歓迎って奴か…。巡！周！…って居ない!?!」

計六体のライダーを前に状況が悪いと判断した為、巡と周は何時の間にか姿を消していた。

「あゝいゝつゝ等ゝゝつっ!?!」

こんな時だと言つのに…と、そんな二人に怒りを募らせて拳を握る闇影。

「こうなったら私達だけで戦いましょう！闇影さん！」

「…そうだね。行くよ！！」

「変身！！」

【KAMEN - RIDE… DELIGHT!】

【HENSHIN!】

已む無く二人だけで戦う事を決めた闇影とツルギは各々、ディライ  
トとソード・マスクドフォームに変身した。

『キャストオフ！！』

【CAST - OFF!】

【CHANGE - SCORPION!】

そしてソードはキャストオフをし、ライダーフォームにフォーム  
チェンジした。

『さて…ここは最後のダークライダーの力を披露するか！』

【SHADOW - RIDE… RIKUGA!】

そう言うとディライトはドライバーにカードを装填し、自身の影を  
リクガ・ベヒモスフォームへとシャドウライドさせた。

『更に…忍法・影分身の術！…何てね。』



【ATTACK・RIDE…ILLUSION・SHADOW!】

デイルライトは、何故か師・マバユキや何処その火影を指す青年の様な台詞を言いながら、イリユージョンシャドウのカードでSリクガBFを三体に増やした。

『そして…遥変身!』

【FORM・SHADOW・RIDE…RIKUGA!NAGA! UNICORN!GIGAS!】

更にその三体は各々ナーガフォーム、ユニコーンフォーム、ギガースフォームへとフォームチェンジした。

『君達とツルギちゃんは響鬼とブレイドとカブトを、俺はファイズと残りを倒す。』

『闇影さん、私もあの二体と戦いますから貴方はあのファイズと戦って下さい!私なら大丈夫です。』

デイルライトは響鬼・ブレイド・カブトをSリクガ達とサソードを任せ、残りを自分が引き受けると提案するが、サソードはデイルライトの負担を減らすべくゾルダとUオーデインと戦うと言い、彼にファイズと戦う様言う。

『ツルギちゃん…分かった。君の健闘を祈るよ!!行くぞっ!!』

デイルライトの言葉を皮切りに、十一体のライダーが戦いを繰り広げる。三体のSリクガは各々の特殊武器を構えて響鬼・ブレイド・カ



『……………!!』

一方サソードも、サソードヤイバーでUオーデインの持つ一振りの黄色のゴルトセイバー「ライトソード」で斬り結びを行っていた。互いにはぼ互角の戦いを繰り返しているが…

【SHOOT - VENT】

『ギガキャノン…』

『…っ!!クロックデュアル!!』

【CLOCK - UP!】

そこにゾルダがシュートベントを発動し、マグナギガの両足を模した巨大なビーム砲「ギガキャノン」で強力な銃撃を仕掛けるが、サソードはそれに勘付きクロックデュアルによりそれを難なく回避した。

『何て威力…!!』

上手くかわした物の、それにより森の一部が大きく抉れてしまったのを見てギガキャノンの威力に息を飲むサソード。そこへ…

『きゃあっ!!』

『余所見厳禁…!!』

その隙を付かれ、Uオーデインのライトソードの斬撃を受けてしま

う。

『はっ！やっ！せいっ！！』

一方ファイズは、デイルイトとの斬り結びでやや押され気味であった。が…

『くっ…！！剣も結構やるな…けどな…！！』

【106】BURST・MODE

『うわあっ！！』

『戦いは剣だけじゃ無えんだよ。』

片手でファイズギアを取り外してフォンブラスターに変形し、慣れた手付きで専用コードを入力し、ファイズギアのアンテナからレーザーを三発デイルイトに放つ。

『その通りだ…戦いは剣だけじゃないんだ…ね！！』

『があっ！？』

攻撃を受けて怯んだデイルイトは、その反撃としてライトブッカー・ガンモードから緑色のユニコーンの角を模した銃撃をファイズに放った。

『俺は今、三つのリクガの力を共有しているからね。更…につ！！』

『ぶあっ！！！？』

『そして…はっ！！』

『うぐあっ…！？』

更にデイルイトは、ファイズに走って近付きダークパープルカラーの封印エネルギーを纏ったパンチで殴ると彼を大きく吹き飛ばし、すかさずライトブッカーをスピアモードに変形し、その刃先からダークブルーカラーの蛇型のエネルギーを放ち、ファイズを拘束した。デイルイトが三体のリクガの力を使えるのは、その三体を同時にシヤドウライドし、その力を共有している為である。

『さてと…ちょっと卑怯かもしれないけど、このまま止めを刺させて貰うよ！！』

【FINAL - ATTACK - RIDE…DE・DE・DE・DE  
LIGHT！】

『はあああ…はあっ！！』

『く…くそっ…！！』

デイルイトは自身のFARを発動すると同時に大きくジャンプすると、十枚のカードビジョンが斜めに並び、それをすり抜けてデジョンレグを拘束されたファイズに叩き込もうとした。が…

『これで…終わ…！！』

『…りだと思ってるのか…？ふんっ！！』

『なっ…何っ！！？だけど…この距離なら…！！』

『だから…それで終わりだと勝手に決めんな…。はあっ！！』

『なっ…何だこの光は…！！？』

突然ファイズは蛇型エネルギーの拘束を解除した為デイルイトは動揺するが、構わず攻撃を続ける。しかしファイズは全身から赤とは対称的な白い光をデイルイトに放ち出した。すると…

「こ…攻撃の威力が勝手に止まった…！？しかも変身まで…！？」

謎の光を浴びたデイルイトのFARは本人の意思とは無関係に停止し、変身まで解除されてしまう。だが、「異変」はそれだけでは無い…。

「カ…カードが全部真っ白に…！！？」

闇影の手元にあるカードが、全て真っ白な物に変わってしまったのである…。

『形勢逆転だな…。』

「くっ…！！！」

『闇影さん！！』

カードが全て使用不可となり形勢が逆転してしまい、ファイズエツ

ジを突き付けられる闇影…。

「うぐん…皆と…ずっと一緒…zzz」

「はっ…!!はっ…!!／／／」

「夢」に囚われた黒深子とコウイチは、このまやかしから目を覚ませるのか？

巧の言う「アレ」とは…？

そして、闇影の運命は如何に…？次回、仮面ライダーディライト！

この世界は夢を現実に変えるまやかし…偽りの世界…。そして…

「この世界に『本物』は何一つ無いの…。そして、この世界を『現実』と完全に享受した人間は…」

黒深子の前に現れたのは何と…!？

「夢は叶えて貰う物じゃない…あらゆる困難を乗り越えて自分で叶える物なんだ!」

この偽りの光を破る為、ディライトは新たなる「力」を手にする…。そして…

『あのボクちゃんからも潮の香りの様に嘘の匂いがぶんぶんするよ

…。

乾巧こと仮面ライダーファイズの正体…それは…!!

次回、「偽りの光を破れ！混沌纏いし死神」

全ての闇を、光へ導け！



### 第23導 訪れた日常 有現夢の守護者達（後書き）

闇影「おい作者！黒深子とコウイチは無事なんだろうな！？」

今んところはね…。

ツルギ「それにしても、夢が現実になる世界だなんて…。」

もし今回の様に自分の望んだ夢が現実になった時、貴方はどうしますか？

闇影「難しいよな…皆例え夢だと分かっているとしてもそれから目覚めるのは嫌なのかもしれない…って、違う！！二人はそんな『夢』に取り込まれる程弱くはない！！必ず目覚めると俺は信じている…。黒深子、コウイチ、早く目覚めるんだ！！」

そして今回現れた黒深子の友人三人と、今まで蔑ろになっていた「リユウガの世界」の人物を登場させました。彼等のイメージキャストはこんな感じ。

火室瞳…皆口裕子

刀道鞘華…浅野真澄

甲田早苗…桃井はるこ

小久保ダイスケ…西村知道

二島ゴロウ…檜山修之

凰神ユイ…能登麻美子

ツルギ「…九割がテイルズシリーズの声優さんですね…。」

ああ、特に黒深子の友達三人はそのキャラをイメージした感じにしてるからな。

んで、ゴロウは08小隊の「シロー・アマダ」をイメージしたよ。  
ゾルダ時はテイルズオブリバーズの主人公「ヴェイグ・リユングベル」の性格をイメージした。

闇影「作者はそのゲームが好きだからな…。」

ツルギ「次回は闇影さんの新しい力と巧って人の正体が明らかになります。楽しみにして下さい…！」

## 第24導 偽りの光を破れ！混沌纏いし死神（前書き）

えー、読者の皆様。今回は書きたい事を色々ふんだんに書いてしまった為かーなーり長くなってしまう事がありました事を今の内に謝っておきますm( \_ \_ )m

闇影「文は長いくせに内容がスカスカだからな。」

ツルギ「こつこつこのを駄文って呼ぶんですね…。」

orz

巡「んで今回は、以前私達の作品とコラボしてくれた仮面ライダー大好きさんの『仮面ライダーディライド』から一人登場するみたいね。」

周「ライダー大好きさん、協力感謝するぜ。」

何はともあれ、今回はエロあり、涙あり(?)、驚きありの内容ですので御覧になって下さい!!!どうぞ!!!

## 第24導 偽りの光を破れ！混沌纏いし死神

「カードが…全部使えない…!!」

『これで形勢逆転だな…。』

「くっ…!!」

ファイズの放った謎の光により全てのライドカードを使用不可となり、ファイズフォンを銃型に変形させたフォンブラスターの銃口を向けられる闇影。このままレーザーを放てば彼は確実に死んでしま  
うのだが…

『…やめた。』

「何…!?!」

『テストはここまでだ。取り敢えずは合格って所だな。「あの宝」  
を手にするのに…な…。』

止めは刺さずに「テスト」の終了とその結果が合格と言いながら  
ベルトを外して変身を解除する巧。

「まあ、その内お前は自分からこの世界を受け入れる…。それまで  
気長に待つとすつか。お前等、もういいぞ。」

『『『『はっ…!!…!!…!!』』』』

巧の戦闘終了の命令を聞いたブレイド・響鬼・カプト・ゾルダ・ア

ンスキルオーデインはソードとの交戦を中止しその場から忍者の如く颯爽と消えた。

「……………っ！…！はあ…！はあ…！…！み、闇影さんは…！？闇影さんが危ない…！…！」

多勢に無勢なのか、五体ものライダー達戦った為、息を切らして変身を解除するツルギ。そして、膝を付いた闇影を見て彼の元へ駆け付ける。

「そう簡単にこの世界を受け入れると思っているのか？」

「その内したら、そんな台詞吐けなくなるぜ…『その内』したら…な。あばよ。」

闇影が何れはこの世界を受け入れると宣言しながらその場から立ち去る巧。

「待て…！…！…！…！…！…！…！…！…！…！」

「闇影さん…！大丈夫ですか…！？」

「ああ…。だが、カードが使えなくなってしまった…。」

「そんな…！…！」

駆け寄ったツルギは闇影の無事を確認したが、ライドカードが全て使用不可になったと聞き愕然した。

「ふん、お宝ねえ…それは耳寄りな情報ね」

「けどよ、あの野郎間違ってるぜ。その資格はこいつじゃなくて俺様達なのによぉ…。」

「お前達…!!」

多勢の敵ライダーを見て姿を消していた巡と周が、巧の「宝」と言う言葉を聞き付けて今頃になって現れた。闇影はそんな二人の行動に腕を震わせながら静かに怒る…。

「どんなお宝なのか私達が見に行つてあげる　じゃあね」

「あばよ」

【ATTACK・RIDE…WARP!】

巧の言う「宝」がどんな物なのかを知る為、巡と周はワープを使いその場から消え去った。

「……………っ!!もういい…!!今は黒深子とコウイチを探すのが先だ。行くよ、ツルギちゃん。」

「はい!」

黒深子とコウイチを探すのを優先した闇影は踵を返し、ツルギと共に再び彼等を探しに走り出した。が…

「なっ、何だこれはっ!?!」

突然二人の前に謎の亀裂が現れ、それが大きく裂けるとブラックホ

ールの様な物が発生し、強力な吸引力で闇影とツルギを吸い寄せようとする。

「くっ…!!このままじゃ…うわあああっつ…!!」

「み…闇影さ…きゃあああっつ…!!」

必死の抵抗も空しく、二人はブラックホールに吸い込まれてしまい同時にその亀裂は完全に閉ざされてしまった…。

世界の光導者、デイルイト！9つの影の世界を巡り終え、その瞳は、何を照らす？「ん…ん…ぷはあ…!!はあ…!!／／／」

「あ…うう…!!／／／」

一方、ミホにより媚薬を盛られたコウイチは、彼女に唇を貪るかのようになられていた。気付くと何時の間にか自分は下着一枚になっ  
ており、手足は彼女のベッドに拘束されている。本当に目の前の人物は自分の知るミホなのか…その疑問がコウイチの頭から離れない  
でいた。

「ほらコウイチ…お前が揉んだせいで私の胸はこんなに大きくなっ  
たんだぞ？好きだったんだろ？今擦り付けて…あっ…ん…／／／」

「うっ…!!くあっ…!!／／／」

ミホはブラを外し上半身裸となり、自らの胸の尖端とコウイチのそ  
れにくっ付き、ゆっくり擦り付ける。その感触が快感なのか、ミホ

は小さく声を出す、コウイチは逆にその快感を歯を食い縛り極力耐えていた。

「も…もう止めるミホ…俺はお前とこんな形でしたくは無い…！！  
／／今止めて解放すれば…許してやる…だから…！！」

身体の麻痺がある程度弱まり喋れる様になったコウイチは、ミホに今の行為を止める様に言う。確かに自分はこういうシチュエーションが嫌いでは無く寧ろ喜ばしい事なのだが、互いの合意無しでする程愚かでは無い。そもそもこんな事が自分や彼女の為になる筈が無い。だからこそミホには目を覚めて欲しい。しかし…

「…うぐうっ！！？」

「他の女か…？他に女がいるから私を受け入れ無いのか！？間違いだろ？お前には私しかいない筈だ。お前は私の為、私と共に生きる為に生まれた！！そして私もお前と共に生きる為に生まれたんだ！！これは運命なんだ…お前と私はずっと一緒なんだ！！」

ミホはコウイチの首を優しく手で撫で回すと、突如その手に力を入れて彼の首を締め付ける。先程までの妖艶な笑みから強い憎悪の籠った顔付きをしており、それが彼に強い恐怖心を抱かせていた。

「うぐっ…！！止め…ろっ！！はあ…はあ…！！お前…さつきからやってる事がおかしいぜ！？何でこんな馬鹿な真似…を…！！」

コウイチは、苦しみながらも自分の首からミホの腕を力づくで何とか無理矢理剥がし、呼吸を乱して彼女を叱咤する。あまりのミホの異常ぶりに混乱や恐怖よりも、それに対しての怒りか強く恐怖心は無くなっていた。だからこそ彼女に対して強い態度で臨むコウイチ。



しかし…

「…れた…ない…。」

「え…？」

「もう…二度と離れたくない…から…！！やつとまたお前に会えたのに…お前が別の奴と何処かへ行ってしまつかと考えると怖かった…だからこうするしか無いと思って…すまない…ううっ…！！」

「ミホ…。」

ミホの目から涙の粒が零れたのを見てコウイチは思った。自分と彼女は一度、二度と会う事の無い永遠の別れをしていた。何が原因かは不明だが、それがこうして実現された。正直な話、自分は普段は平然を保っていたが実の所、ミホを失った事がとても辛かった。そして彼女もまた自分と同じ気持ちだった事を知り、切なくも嬉しくなり心が揺らぎ出した。

「分かったよ…お前はずっと辛かったんだよな…。俺も、お前が居なくなつてからとても胸が苦しくて…死ぬ程辛かった…！！なのにお前を拒否しちまつて…ホントにすまない…！！」

「いや…私が悪かったんだ…お前の意思を無視して強引に交わろうと考えた私が…！！」

ミホの気持ちを理解したコウイチが彼女を拒否した事を詫びると、ミホもまた自分勝手な行為をしてしまったと詫びる。そして…

「だから…そのお詫びとして…私の『初めて』を貰ってくれない…

か…？／／／」

その非礼の詫びとして、自分の処女を捧げると言いながら最後の一枚を脱ぎ完全に一糸纏わぬ姿となった。

「き…綺麗だ…！！／／／」

「で…でも…ちょっと怖いからコウイチ…『享受する』と言って私に踏ん切りを付けさせて欲しいんだ…！！／／／」

自分の美しい肢体に見惚れるコウイチにミホは、いくら自分から求めたとは言え「この手の行為」は初めてで少し怖く、その踏ん切りを付ける為、彼に「享受する」と言って貰うよう上目遣いで頼む。

「い、今更だけだよ…本当に俺なんかで良いのか？／／／」

「勿論だ…だから言ってくれ…お願い…。」

「ミホ…。」

コウイチを選んだと決めたミホは、優しい表情の顔で彼の身体に抱き着く…。コウイチも、そんな彼女の表情を見て穏やかな笑みが浮かべながらミホの背中に手をやる…。

彼女の顔に、一瞬のみ白いヤゴを模した怪人の顔が浮かんだ事に気が付かずに…。

「ん…此処…は…つつ…!!?」

一方あのブラックホールに吸い込まれて意識を失っていたツルギが目覚ますと、何故か手術用の大きなベッドの様な物に手足を拘束されている事に気付く。

「これは一体…!?はっ…!!」

突然、十数人の黒い軍服を来た男性達が現れ、ツルギの周囲を囲み出した。まるでゴミを見るかのような冷たい視線を彼女に送りながら…

「（この光景って…まさか…!?…誰か来る…えっ!?）」

「さて皆さん。我々NEO-ZECTが日々戦うワームの生態、特性を良く知る為に、このネオタイプの身体を隅々まで調べる事となりました。」

「銀城…ヒデナリ…!!なら此処はダークカブトの世界…!?」

現れた人物とは何と、嘗てデイトである闇影と黒角ソウタ/仮面ライダーダークカブトが協力して倒した筈のNEO-ZECTの総帥・銀城ヒデナリ/仮面ライダーヘラクレス…に擬態したヘラクルヴァームであった。つまり此処は、自分の居た「ダークカブトの世界」のNEO-ZECT本部であると悟るツルギ。

「何故貴方が此処に!?それに…これは…きゃあぁっつ…!!」

「中途半端なネオタイプ風情が私を呼び捨てにするな…!!何時から人間らしい口が利けたのかは知りませんが、どうやら何時もの」

日課』を忘れた様ですね…皆さん、その身体に叩き込むのと同時に『解析』しなさい!!」

『はっ!!!!!!』

ネオタイプであるツルギが自分に口を利くのが気に食わないヒデナリは彼女の頬をひっぱたき、「日課」であるネオタイプの「解析」をする様黒い軍服の男性達、ゼクトルーパーの隊員達に強く命令した。

「嫌っ!!!止めて!!!止めてください!!!」

その命令を聞き隊員達は一齐にツルギの身体に触りまくり、彼女の着ていた衣服を無理矢理破き始めた。当然ツルギは抵抗の意を唱えるが…

「何が『止めて…』だよ?」

「お前は俺様達、NEO-ZECTの道具でしか無いんだよ!!!」

「フヒヒ…ロリワームを好き放題にレイ…ゲフンゲフン!!!調べられるんだから最高」

「どんだけやってても、ワームだから罪になんね〜しラッキーだぜ! !これがもうちよい成長したらな〜…まっ、総帥のご命令とあらば…さっさとヤっちゃまおうぜ!!!」

「い…嫌ああああっつっつ!!!!!!」

その訴え等全く耳を貸さず、ネオタイプ…ワームであるのを良い事

に「ネオタイプの生態調査」に託つけてツルギを欲望のまま蹂躪する隊員達。彼女がどれだけ泣き叫ぼうがツルギが人間では無いのを良い事に、その行いを止める事は無かった…。

「此処は何処なんだ…？おーい！！ツルギちゃーん！！…やっぱ居ないか…。」

一方、ツルギと同じくブラックホールに吸い込まれた闇影は、空が暗い荒れ果てた荒野へと飛ばされていた。ツルギの名を大声で叫ぶが、返事は返って来なかった。

「しかし、此処って『あの時』の光景を思い出すなあ…。」

闇影はこの荒野を見て、「あの時」を思い出し始めた。七年前、謎の組織「ダークシヨッカー」の幹部として、「世界の灰塵者」仮面ライダーディシエイドとして、組織の命により幾つもの罪無き人々を抹殺してきたおぞましい過去を…

「ん？な、何だ…！？身体が勝手に…動く…！？」

すると、闇影の足が本人の意思とは無関係に勝手に前に出て、そのまま歩き出す。しかし、異変はそれだけではない…。

「服と髪が『あの時』の物に…！？それに、この人達は一体…？はっ…！！」

着ていた衣服が何時もの格好ではなく、黒いローブに金色のポニテール、右耳には金色の太陽のピアスと、ダークシヨッカーの幹部

としての姿へと変化していた。気付くと何時の間にか、数十人の人々がいる場所まで辿り着く。これらの奇妙な現象に、闇影は巧の言っていた言葉を思い出す…。

まあ、その内お前は自分からこの世界を受け入れる…。『その内』したら…な。

「くそっ!!そういう事か!!」

闇影は巧の言う「その内」の意味を漸く理解した。この「有現夢の世界」は、その世界に踏み入れた人間の内在する夢や願いを現実の物にする世界である。しかし、内在する夢や願いが実体化する為には、その者の「記憶」を読み取られるという事となる。つまり、「叶えたい夢や望んだ願い」とは逆の…

「くっ…!!」

「忘れられない悪夢や望まない願い」をも実体化するという事になる…。

「あなた…何者なんだ…!？」

一人の男性の問い掛けを聞くと、闇影の手が勝手に動き「ある物」を構えた。それは…

「死に逝く貴様に答える義理は無い……！！（……！？口が勝手に……！？よせ！！止める！！）」

「があっ！！？」

紫色の本の様な形をした銃・シェイドブッカーであり、男性の頭をそのまま撃ち抜く……。

「き……きゃあああっっ！！！」

「に、逃げる！！うわあああっっ！！！」

「逃がさん……！！！」

それを見た一人の女性の悲鳴を皮切りに、人々は恐怖を抱きながら一斉に走り出す。しかし闇影も、その人々達を追う為に走り出した。無論、本人の意思とは無関係に……

「た……助け……あがつ！！？」

「死にたくない……死にたくないよおっっ！！ぎゃっ！！！」

「子供だけは……子供だけは助けて……きゃああっっ！！！」

「（止める！！止めるんだ！！止めてくれ……止めてくれ！！）」

闇影は逃げ行く人々の命乞いや悲鳴を聞いても、それを一切聞き入れずにシェイドブッカー・ソードモードで無表情のまま無慈悲に殺害していく。しかしそれは本意では無く、闇影は心の中で止める様





「もう…何処まで買い物に行ってるのよ…!!…繋がらないし。」  
半分怒りながら心配しつつ彼女達に携帯で連絡を取るが、三人共電  
話に繋がらないでいた。

「…「ただいま」!!」「」

そこへ、早苗達が大量の袋を持って漸く帰ってきた。

「あ、黒深子。今起きたんだ。」

「何処行ってたのよ…!!」

「ゴメンね黒深子。ちょっと用事が出来てね。」

「その用事が長引いてしまって、それが終わって帰るついでに朝マ  
クを買いに行ってたんだ。」

「それならそうだと連絡ぐらい入れてよ…。」

「ゴメンって。さっ、朝マク食べよ。」

「もう良いよ。こうして帰ってきたし私も転た寝してたのが悪かつ  
たし、許すわ。」

黒深子は自分も転た寝していた事も差し引いて三人を許し、朝食に  
朝マクの袋からマフィンを取り出し頬張る。

「ねえ。今日は何処行く？」

「そうだな〜。今日は最新のゲームが発売してるからそれ見に行きたいんだけど!!」

朝食を済ませた黒深子達は、今日も遊びに出掛け出す。早苗が今日は何処へ行くかを三人に尋ねると、瞳が最新のゲームが発売していると言い、ゲームショップに行く事を提案した。因みに彼女が一押しของเกมは人気RPG「テイルズシリーズ」であり、その最新版の「テイルズオブエクシリア」を欲しがっているようだ。

「ふ〜ん。私まだPS3版の『ヴェスペリア』までしか持ってないけど、興味はあるわね」

黒深子もそのシリーズをヴェスペリア（PS3）までしか持っていないらしいが、最新版のエクシリアにも興味を持っているようだ。余談だが、彼女に似た声で「イノセンス」のアンジュ・セレーナがいたり、初代の「ファンタジア」の主人公のクレス・アルベインが闇影の声に似ている様だが一切関係無い。

「んじゃ、今日はゲームショップから行くっか」

「賛成」

最新のゲームが買えるかもしれない期待を抱く黒深子達は、意気揚々とゲームショップに向かおうとした時…

『はい！今日のゲストは何と！あの有名な「アイドル教師」・煌闇影さんです！どうぞ!!』

『どうも皆さん、初めまして!!! 煌闇影と申します!』

「ぶっ!!!? せ、先生!？」

巨大なビルのモニターテレビに、何らかの番組に闇影がゲストで写っているのを見た黒深子は、盛大に吹き出しながら驚いた。因みにこの闇影は「本物」では無い…。

「黒深子…もしかしてあれがあんたの彼氏…?」

「か、彼氏じゃ無いわよ!!! / / 皆、ゴメン…私、用事が出来たわ!!! また遊びましょ!!!」

「ちょ、ちょっと黒深子!!!」

闇影の顔を見て「大事な用」を思い出した黒深子は急遽早苗達と別れ、闇影の下へと走り出す。

「ふ…予想通りの行動だな…。」

その直後に、早苗は最初に闇影の写真を見た時と同じ、冷たく感情の籠っていない目で遠くまで走る黒深子を睨み付けた…。

「はあ…はあ…!!! 先生…何処なの…!?! 携帯にも繋がらないし…!!!」

あちこち闇影を探す黒深子だが、何処を探しても全く見付からず携

帯に連絡しても繋がらなく、途方に暮れていた。

「見つからなくて当然よ…だってその人は『別の夢の世界』に居るんだから…。」

「貴方は誰…?!?」

「私は貴女…この『有現夢の世界』の白石黒深子よ…。」

闇影が見付からないとぼやいている黒深子の疑問に答えたのは、何と自分と同じ顔をした灰色のコートを着込んだ少女であり、この世界の白石黒深子だと名乗った。しかし、コートに付いたフードを深被りをし、左目には何故か包帯を巻いていた。

「この世界の…私…?!?有現夢…?!?別の夢ってどういう事!?!」

この世界の自分、Y黒深子の言葉に黒深子は混乱しつつも彼女に尋ねた。

「この世界で起きる都合の良い現実とは、現実の様であって現実ではない、されど夢の様であり夢でない…。それがこの『有現夢の世界』の『真実』よ…。」

「この世界が…夢…?!?」

「その現実（ゆめ）から逃げ出そうとした人間は皆、夢の守護者や管理者によって粛正、若しくはその人にとっての『悪夢』を見せ付けて心を壊し、『夢の世界』に幽閉するの…永遠にね。」

「そんな…そんなのって…?!?!」

「この世界に『本物』は何一つ無いの…。そして、この世界を『現実』と完全に享受した人間は…心が完全に無くなり生きてたまま死に絶える…!」

「嘘よ!…嘘言わないで!…もしそれが本当なら私の…いいえ、貴女の友達はどうなるのよ!?それならこの世界は危ないって知らせる筈じゃない!?それをしないって事…は…!」

黒深子はY黒深子の言葉を全否定した。もしそれが真実ならば、この世界の早苗達はどうかと怒りのまま尋ねようしたが…

「ま…まさか…!」

「そう…此処にいる人間達は皆怪人が化けているの…そして、あの子達は…さっき言った守護者達に化けているの…本人達を殺してね…!」

「嘘よ…嘘よ!…嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘…嫌あああつつつつ!」

この世界の人間達が全て怪人が早苗達は夢の守護者達に殺害、成り代わられてしまったと言う事実を知り、発狂したかの様に泣き叫ぶ黒深子。

「私もあの時、一緒に居て守護者達に凌辱されて酷い暴行を受けたの…!」

「ひっ…!」

そう言うとY黒深子は頭に被ったローブのフードを取り包帯をほどくと顔のあちこちに守護者達に殴られた痛々しい痣があり、一番酷いのはくり貫かれた左目の周りに火傷の様な傷跡であった…。あまりの酷い傷に目を背ける黒深子。

「でも足掻きとして、奴等から『ある物』を奪って逃げ出したわ…。

」

Y黒深子はローブの懐から、巧達守護者から足掻きとして奪った「ある物」を取り出した。それは、ライトオレンジカラーのタッチパネルの様な機械だった…。

「これって…ディライトの顔っぽい形をしてるわね…まさかこれって…!!」

黒深子はそのタッチパネルの形状をディライトの顔に似ていると気付き、「一つの答え」が頭に過った瞬間…

「黒深子、やっと見つけたよ」

「さ、早くそれを私達に渡してくれないか？」

「あたし達、友達でしょ？」

瞳・鞘華・早苗の三人が現れ、黒深子にタッチパネルの機械を渡すよう何時もの笑顔で要求するが…

「あんた達には渡さない…渡してたまるもんか!!」

「そうかよ…なら力づくでぶんどるだけだよ!!」

当然、Ｙ黒深子は断固拒否の意を唱えた。すると、本性を表した早苗はドスの利いた低い声で力づくで奪うと言い出し、二人の黒深子に詰め寄る。

「逃げるわよー!!」

「えっ!?!う、うん…。」

彼女達から逃げる為、Ｙ黒深子は黒深子の手を引き走り出した。

「コウイチ…早く言ってくれ…。ふう…!!」

「ううう…!!／＼／」

一方、ミホはコウイチに「享受する」と言わせる為、彼の下着越しに「分身」を擦り出し耳元に息を吹き掛ける。その驚異的な快感に身悶えするコウイチ。ここまでされればどんな男でも全て墜ちてしまっ…。

「お…俺は…この光景を…きよ…!!」

筈なのだが、コウイチはミホの身体を見て「ある事」に気付き始めた。

「ミホ…一つ聞きたい…『傷』はどうしたんだ…?」

「え…!?!」

「俺とお前が仕事に慣れて半年後、取材途中にナイフ振り回した通り魔事件の事は覚えてるか？その時お前、俺の制止を振り切ってその通り魔をとっちめたけど、そのナイフが誤って右の脇腹に刺さつちまつて病院で治療したけど、その傷は思つた以上に深くて一生残つたんだ…。だけど、今のお前にはそれが無い！！」

そう。ミホの脇腹には通り魔による傷がある筈だが、目の前の彼女の身体にはそれが無い事にコウイチは疑問に思つたのだ。

「で…でもそれは…！！」

「それにだ…お前は早合点はし易いけど、こんな他人の意思を無視するやり方は間違つてもしないし、何より…お前料理下手だつただろ？」

疑問を指摘されてしどろもどろになるミホとは裏腹にコウイチの指摘はまだ続く。彼女は早合点はするが、他人の事を思いやれる性格であり、その意思を無視する真似は絶対にしない。そして、決定的なのは料理の腕でありその腕は黒深子とほぼ同等であるらしいようだ。

「だから今更ながら気付いたよ…お前はミホじゃない！！いい加減正体を現したらどうなんだよ！！このっ！！」

『ぐっ…！！人間風情が…良い気ニナルナヨ！！』

このミホが偽者だと知つたコウイチは彼女を蹴飛ばすと、ミホ（？）は怒りの表情でその姿を揺らめると、白いヤゴを模したミラーモンスター「シアゴースト」に変化した。



「ちっ…道理で何もかもが上手すぎると思ったぜ…ってヤベッ!! デッキ、ズボンのポケットの中だった!!」

リュウガに変身しようとするコウイチだが、デッキがズボンの中にある事に気付き、いきなり窮地に追われてしまう。

『アノママイレバ永遠ノ快樂ニ酔イシレタ物ヲ…死ネエエツツ!!』

シアゴーストの鋭い爪がコウイチに振り降ろされるその時…!!

『ウゲウツ…!?ナ…何故…ダ…!?グアアアツツ!!』

何者かの攻撃により、シアゴーストは何が起きたのか理解出来ずに消滅した…。

「いつ、一体誰が…!?」

コウイチ…。

「えっ…!?その声は…!!」

すると何処からか、白い光が発生しコウイチを呼ぶ謎の声が聞こえ始めた。その正体は…

「コウイチ…久しぶりだな…。」

「ミホ…!!」

その光は剣を持った白鳥を模した女騎士のライダー・ファムへと変わり、変身が解除され羽鳥ミホの姿となった…。

「お前：本当にミホなのか…！？」

このミホも実は偽者では無いのか、そう疑問に思ったコウイチは…

「……！！／／／」

ミホの胸を揉み出した…。

「いきなり…何やってるんだああっつ！！／／／」

「ぎゃあああっつ！！痛い痛い痛い！！すんません！！マジですいませんでした！！」

いきなりのセクハラ行為に、ミホは顔を真っ赤にしながらコウイチの両手首を千切ってしまうかの様な勢いで力強く握り潰そうとする。その痛みのみならず、コウイチは何度も彼女に平謝りした。

「痛つつ…ま…間違い無く本人だ…！！でも、良かった…。」

自分への制裁を忘れていない事を確認したコウイチは、それを受けながらも少しだけ嬉しい表情をする。やっと本来の彼女を見る事が出来たから…。

「お前がピンチになっているのを見兼ねていたら、何故かこうして力を貸せたんだ。」

「あの時間こえた声は、やっぱり幻聴じゃなかったんだな…。」

あの時…嘗て「リクガの世界」で自分にだけ聞こえた彼女の声はやはり幻聴では無かったのだ。

「コウイチ、お前はこんな所で終わるつもりは無いだろ？なら早く煌や黒深子達の所へ戻るんだ。私が案内する。」

「たりめえだ。んなとこでくたばる程俺の命は安くねえからな！」

「その前に良いか…？」

「ん？何だよ？」

「早く服を着ろ！！／／何時までそのままにいるつもりだ！！／／」

元の世界に戻ろうとするコウイチだが、顔を真っ赤にしたミホから服を着る様に怒鳴られた。それもその筈、今の彼の姿はトランクス一丁と確実に警察にお縄に着いてしまう格好だから…。

「ったく…脱がせたのはお前の偽者なんだけどな…。」

ぶつくさ言いながら着替え終えたコウイチがミホの手を握ると、二人の全身がああ白い光に包まれて宙に浮き出す。

「うおっ！！？」

「行くぞ…仲間の下へ！！」

「頼むぜ！！」

二人を包む光が更に大きく輝くと、コウイチとミホはこの空間から消えて脱出した…。

「はあ…はあ…！！／／も、もう…止めて…！！／／／」

一方、あれから隊員達に数時間に及ぶ凌辱を受けたツルギは全裸のまま息絶え絶えになり、目も虚ろとなり涙も枯れ果てていた…。

「へへへ…なかなかいい『名器』を持つてるじゃねえか…もう一発いくか？」

「あつ、ずりーぞてめえ！！次、俺が犯す…いや、調べる番なんだからよ！！！」

「その次はドウフ…拙者がするでござるよ…今度は『上』の方を…ドウフフフ…」

「ひっ…！！？」

あれだけ蹂躪したにも関わらず尚もツルギを犯そうと下品な言葉を口にしながら、じりじりと彼女に触れようとする隊員達。が…

「消える…ゴミ共…！！！」

「ンガアッ！！？」

「グギャアツツ!!?」

「ひ…ひいつつ!!?た、助け…ギャアアツツ!!」

突然何者かが現れ、彼等の首をはねたり喉を突き刺し、真つ二つに斬り裂いて虐殺を行った。その人物とは…

「み、闇影さん…!!?」

現在、自身の過去を見せ付けられ錯乱していた筈の闇影だった。そして、ゼクトルーパー達の首無し死体を蹴飛ばし拘束されたツルギを解放する。

「可哀想に…でも、もう安心だよ…。」

「あ…あの…闇影さ…!!!//」

闇影は、解放したツルギを優しく抱き締め安心させようとする。ツルギも闇影の突然の抱擁に顔を赤くしながら戸惑う。今自分が全裸である事も忘れて。しかし…

「もう君が戦う必要が無い世界に連れてってあげるから。」

「え…!?!」

巧が言っていた台詞と同じような事を口にした闇影の言葉に絶句した。すると、闇影の背後に黄色に輝くオーラが現れた。それと同時に、ツルギの破かれた衣服が元の状態に戻る。やはり、先程起きた現実(まぼろし)だったのだ…。

「服が戻った…！？いえ、それより闇影さん…！これは一体…！！」  
「この光の向こうには、君を苛めたり利用する人達が居ない世界が待ってるよ。さあ、早く行こ？」

ツルギの疑問に答えない闇影は彼女の手を強引に引つ張り光の中へ招こうとするが、ツルギはその手を振り払う。

「嫌っ…！！」

「ツルギちゃん…！？」

「貴方は…私の知ってる闇影さんじゃない…！！本物の闇影さんなら人の質問を無視したりしない…まして、この世界での幸せは嘘だと言ふ事に気付いている筈です…！！」

ツルギは、今此処に居る闇影は偽者だと強く断言した。自分の知る彼は、仲間の事を大事にする性格の持ち主であり、他人の意思を無視する言動や行動は決して取ったりはしない…そう信じている為である。

「何だと…折角助けてやったのに…幸せな世界を用意してやったと言ふのに…！！」

「…！！」

すると闇影(?)は、激昂してシアゴーストへと変化しツルギに襲い掛かりその首を締め付ける。

「…！！」

『ヘエハハハ…！！俺ヲ受け入レナイ奴ハ死ンデシマエエツツ！！』

「くっ…こ…このおっ…！」

『グアツ…！？ジ…ジネエエツツ…！！』

ツルギは苦しみながらも何とか力を振り絞り、足で蹴飛ばした。それにブチ切れたシアゴーストは再び彼女を襲い掛かるうとするが…

「闇影さんへの侮辱は…！！！」

『エツ…！？コ…コレハ…！？グアアアツツ…！！』

「死を以て償いなさい…！！！」

闇影に化けた事に対する怒りを内に秘めたツルギのサソードヤイバの一太刀により、胴体を真っ二つにされ爆死した。それと同時に、ツルギの身体がコウイチやミホの様に白く光り出した。

「私は信じています…闇影さんも必ずこの空間から脱出出来る事を…！！！」

ツルギは、闇影の脱出を信じながら宙に浮きこの空間から脱出した…。

「……………」

一方、辺り一面が闇で統一された空間で「自身の過去」を強制的に再現させられた闇影は、その場で膝を付いて呆然としていた。目の色に光は無く涙も枯れ果てている等、彼の精神は崩壊寸前だった。

「嫌な過去を再現した気分はどうだ？」

「(ダレダ…？コノヒトハ…？)」

そこへ目の前に巧が現れた。しかし、今の闇影は精神が崩壊しかかっている為巧である事を認識出来ないでいる。

「な？人は皆何かしら思い出さたくない過去や都合の悪い記憶を持っている…だからこそそれから逃げたいが為にこの世界での幸せにすぎる。それが例え、夢でしかなくてもな…。お前はどうか？この過去から逃げたいだろ？嫌な記憶を忘れなくなっただろ？」

「(ナンダ…？イツテルコトガヨクワカラナイ…！？タスケテ…クレルノカ…？)」

人の心理を長々と語る巧の言葉を聞いても、内容がよく理解出来なくなってしまうっている闇影。

「だからよ、この光の中へ入れ。この中に入れれば色んな幸せが待っているぜ。どんな物でも手に入るし、どんな願いも簡単に叶う…そんな夢の世界がな。」

巧が指を鳴らすと、先程ツルギが見たあの黄色いオーラが現れた。そしてこの中に入るよう闇影を唆す。



「(アノムコウニ…シアワセガ…!!!)」

「ああ、そつだ。」

「(ナラ…イコウ…。コノカナシイキモチヲナクシタイ…!!!)」

巧の言葉を完全に鵜呑みにした闇影は、彼の言われるがままオーラに足を運ぶ。この世界での「幸福」を受け入れない者にはその者にとつての「悪夢」を強制的に見せ付ける、或いは実行させて精神を崩壊させた所に再度「幸福」をちらつかせる…それが「有現夢の世界」の仕組みである。闇影がオーラの一歩手前まで近付いたその時…

「ん？」

オーラが発生している場所とは別の場所にそれと同じ色の光が輝き、その中から前髪がストレート、後ろ髪にパーマがかかった黒髪、首には黄色のトイカメラ、左手首に黄色のブレスレットをした黄色いシャツの上に黒い上着を着たジーパンの青年が現れた…。

「俺の親友(なかま)に随分なもてなしをしてくれたな、巧…。」

「何で…何でお前が此処に来れんだよ…。近藤渚…仮面ライダーデ  
イライド…!」

巧は謎の青年・渚の姿を見て声を荒げる。近藤渚、「世界の破壊者」と呼ばれる門矢士/仮面ライダーディケイドとは別の次元戦士「もう一人の破壊者」仮面ライダーディライドである。彼と闇影が出会うのは実はこれが初めてではない。一度目は新たなる9つの世界の一つ「ネオ電王の世界」、二度目はライダーの居ない「スパー戦隊の世界」の一つの「ボウケンジャーの世界」、そして三度目は現

在…。

「さあな。俺にもよくは分かんねえ…だがな、大事な仲間が危ない目に遭ってんを見過ごす程人間出来ちゃいねえんだよ!!」

「面倒臭え真似させんじゃねえよ…!!」

【555】

「変身!」

【STANDING - BY…COMPLETE!】

『はあっ!』

「うおっと…!」

巧は渚に余計な真似はさせまいと、面倒臭がりながらファイズに変身した。そしてその勢いのまま渚に殴り掛かるうとするが、あっさりかわされる。

「そつちがそつ来るなら俺も…!!」

そして渚はデイライトドライバーに似た金色のバツクル「デイライトドライバー」を取り出し、腰に装着し…

「変身!」

【KAMEN - RIDER…DERIDER!】

ドライバーにカードを装填すると、外見はディライトに酷似しているが体色はディープイエロー、複眼は青、シグナルポインターは薄ピンク、ライドプレートが右目に斜め右上に三本、左目に斜め左上に三本、真ん中と右目と左目に一本ずつ装着されたもう一人の破壊者、または「輝く光の戦士」の名を持つライダー「仮面ライダーディライド」へて変身した…。

『闇影、今回だけお前の台詞を使わせて貰うぞ…輝く道へと導きますか！…ってな。』

ディライドは左手首を握りながら、ディライトが変身後に言う決め台詞を言った。

『ふざけんな！…！』

当然それに腹を立てたファイズは、片手にファイズエッジを構えてディライドに斬り掛かっていく。対してディライドも金色の本型の武器「ライドブッカー」をブックモードからソードモードに切り替えて応戦する。

『はっ！ふっ！おらっ！…！』

『よっ！せいっ！はあっ！…！』

ディライドとファイズは、互いに僅かな隙を見極めながら武器で斬り結びを行なっている。

『くっ…くおおおっ…！…！』

『お…押されてしまっ…っあっ…！…！』

『今だ!!』

【ATTACK - RIDER SLASH!】

『せいやつ!!』

『ぐあああつつ!!』

暫くするとファイズの方が徐々に押されて気味になり、デイルイドはそれを見逃さずに力を更に強めて押し出しファイズエッジを弾いた。更にカードを装填し、デイルイドスラッシュでファイズを後退させた。

『未だだぜ近藤!!』

【106】BURST - MODE

『ぐあああつつ!!』

しかしこのままファイズが簡単にやられる筈もなく、ファイズフォンをフォンブラスターに変形させて赤いレーザーをデイルイドに連射した。

『ちっ…ファイズにはこいつでいくか!変身!』

【KAMEN - RIDER EPSILON!】

ファイズに対抗するべくカードをドライバーに装填すると、デイルイドの身体に青いフォトンブラッドが纏わり、黒いスーツに緑の複

眼にEを横倒しにした青いラインが入った緑の複眼に銀の装甲と、ファイズに酷似した姿の新たな9つのライダーの一人「仮面ライダーイプシロン」にカメンライドした。

『何だ！？カイザやデルタとは違うライダー…！？』

『ま、そういうこつたな。』

【ATTACK - RIDE : EPSILON - SHOT!】

『はあっ！！』

『んぐああっつ！！』

ファイズやカイザ、デルタ等「守護のベルト」、オーガとサイガ等「帝王のベルト」とは違うライダーを見て困惑するファイズを他所に、ディプシロンはデジタルカメラ型の武器「イプシロンショット」を右手に装着してファイズを殴り飛ばした。

「……………」

暫く傍観していた闇影は、そんな二人の戦いを無視してオーラに入ろうとする。

『なっ！？おい闇影！！その中に入んな！！俺だ、渚だよ！！おいっ！？』

「……………」

それを見たディプシロンは闇影の下に駆け寄って彼の身体を掴み、

オーラに入るのを阻止した。しかし、闇影はDイプシロンの姿を見ても全く無反応だった。

『お前…俺の事まで忘れちゃったのかよ…があああっつ！！？』

『そいつの夢を邪魔した落とし前、つけてもらうからな…はっ！うらっ！せいっ！！』

『があっ！！ぎっ！！ぐあああっつ！！』

「他人の夢を邪魔した」事から、Dイプシロンの背後にファイズエツジを幾度も斬り付けるファイズ。しかし、Dイプシロンはそれでも闇影から一切離れようとしない。

『ぐっ…！！聞け闇影…人は各々何かしら忘れたい記憶（やみ）を持っていて、叶えたい夢や希望（ひかり）も持っている。だが、その闇から逃げて光だけにすぎる事が本当に正しいのか！？自分の中の闇と向き合って戦い、光を得る事が「闇を光へ導く」事だろ！』

「……………」

『つまんねえ講釈たれてんじゃねえよ！！』

Dイプシロンは、ファイズからの攻撃を受けながらも必死に闇影に呼び掛ける。「闇を光へ導く」と言う言葉の真意を語りながら…。

『ぐうっ！！はあ…はあ…！！闇影…お前が闇の中で得た物は悪い記憶だけなのか？お前はこれまでの旅で沢山の世界を巡り、何を得たんだ？』

「…ナ…カマ…？」

『そうだ…そして仲間達はお前が戻って来る事を信じている。勿論俺もだ。だから、お前も自分を信じる！！闇影！！』

「（…そ…うだ…俺は忘れていたよ…闇の中で得た仲間が居る事を…コウイチ…ツルギちゃん…黒深子、そして…！！）」

『いい加減に…！！ぐあつ…！！』

突然ファイズは何らかの攻撃を受けて、Dイプシロンから大きく離れた。その攻撃の正体は…

「渚も居た事もね…！！」

ライトブッカー・ガンモードを背後に構え、完全に自分を取り戻した闇影である。カードは使えなくてもライトブッカーは武器として使用する事が可能であり、それによってDイプシロンをファイズの攻撃から守ったのだ…。

『やっと目が覚めたか、闇影。』

「ああ。すまない渚、君に迷惑を掛けてしまつて…。」

『気にすんな。俺もやつとあの時の恩を返せたからな。』

闇影はDイプシロンに自分のせいで彼に傷を負わせてしまった事を詫びるが、Dイプシロンも「ネオ電王の世界」で自分の窮地を救ってくれた恩返しが出来た為、然程気にはしなかった。

『さつきから気色悪くくつちゃべりやがって…お前等は一体何なんだよ!?!』

「お節介教師な仮面ライダーと…」

『輝く光の戦士だ!?!』

「『頭に叩き込んで!?!』」

【FINAL - ATTACK - RIDE...E・E・E・EPSILON-!】

「『はあああああつつつつ!?!?!?!』」

『ぐあああつつ!?!?!』

闇影とDイプシロンは、イプシロンショットを装備した右腕に青いフォトンブラッドを集中させたパンチ「グランインパクト」とライトブッカー・ソードモードでの一太刀をファイズに向かって走り出し、同時に繰り出す事で青い「」の文字を浮かばせ爆発させた。  
が…

「ちっ…!!まだ終わってねえからな!?!」

『しづとい奴だな…!?!』

変身が解除したのみであり、巧は舌打ちしながら現実世界へと帰還して行く。それを見計らったDイプシロンは変身を解除した。



「ありがとう渚、君のお陰で俺は大切な事を思い出したよ。あらゆる闇に負けず、それに立ち向かい乗り越えて光を手にする…それが『闇を光へ導く』って事をね。」

「そうだ。そしてお前は闇の中で得た仲間達と共に、これからも全ての世界を光へ導いて行くんだろ？」

「ああ!!」

闇影は、改めて自分の使命を思い返した。どんな闇にも負けず、立ち向かい乗り越えて光を手にする事が「闇を光へ導く」事だと。そして渚が左手で闇影の手を握ると…

「これは…!？」

「今度は俺がお前を救ってやる…。」

「渚…本当にありがとう…!!」

「しっかりと掴まれよ!!」

二人の身体が白い光ではなく、金色に輝き出すと、コウイチヤツルギの時の様に同じく宙に浮き出す。そして二人が更に輝くと、この空間から姿を消した…。

「やっと捕まえたよ 手間掛けさせんじゃねえよ…!!」

「くっ…!!」

一方、二人の黒深子はあれから自分の友人に化けた守護者達から逃走したが、黒深子が途中で足をつまづいてしまい早苗に捕まってしまう。

「助けたかったら…」

「我々から盗んだ『宝』を返すんだ…。そうすれば二人共命は助けてやる。」

そして、黒深子を解放したいのならばあのタッチパネルを返還する様、黒深子に要求する。

「渡しちゃ駄目！！そんな事してもこいつ等が約束を守る筈が無いか…きゃっ！！」

「何勝手に口動かしてんだよ…死にたいのか？ああ？」

守護者達の要求を呑む事を拒否する様、黒深子に叫ぶ黒深子。それに感に障った早苗は黒深子を殴った。

「…分かったわ…要求は呑むからもう一人の私を解放して！！」

「賢明な判断だね…さあ、早く渡せ。」

それを見た、黒深子は彼女等の要求通り、タッチパネルを返還する。要求が叶った事を確認した早苗は、突き放す様に黒深子を解放した。

「ふん…！！」

「きゃあっ!!」

「どうやら、何とか宝はこっちに戻った様だな…。」

「仰せの通り、この『カオスタッチ』を無事返還しました。」

それと同時に灰色のオーロラから巧が現れ、早苗達がライトオレンジカラーのタッチパネル「カオスタッチ」を取り戻した事を確認し、それを受け取った。その時…

「なっ!?!」

「ふうん、これがこの世界のお宝なのね」

「中々のお宝じゃねえか。」

「お前等…!!」

【555】STANDING・BY…【】

「変身!」

【COMPLETE!】

巡と周が、超スピードで巧の手元からカオスタッチを掠め取った。それが気に食わない巧はファイズに変身した。

「悪いけど、一度手にしたお宝を手放す程…」

「俺様達は優しくねえぜ…。」

【【KAMEN・RIDE…】】

「「変身!」!」

【【DISHIRF!】】

【【DISTEAL!】】

巡と周も、一度手にした宝を手放すまいと宣言し、ディシーフとディステールに変身した。

『お前等!…!やれ!…!』

「「「はっ!」!」!」

「響鬼…。」

「「変身!」!」

【【HENSHIN!】】

【【TURN・UP!】】

「黒深子の友人」に化けた守護者達もそれぞれの変身ツールを取り出し、瞳は響鬼、鞘華はブレイド、早苗はカブトへと変身する事で各々本来の姿へを戻った。そしてそのままディシーフとディステールに襲い掛かる。最初はそれなりに戦っていたが、三対二とやや此方が不利な為攻撃を受けてしまい、カオスタッチが弾かれ黒深子の前に落ちていった。

「初めから…私を騙っていたのね…!!私…一体何を信じれば良いの…!!分からない…分からないよ…先生…!!!」

目の前のカオスタッチに目もくれず、自分がこの世界で味わった日常や幸福、そして嘗ての友人達が全て偽物であった事を知り、うちひしがる黒深子。自分は一体何を信じれば良いのか分からず声を殺しながら涙を流す…。

自分を信じられる自分を信じれば良いんだよ、黒深子…。

「えっ…!?!」

黒深子の前に黄金色に輝く光のオーロラが発生し、そこから己の使命を再確認した闇影が現れた。

「せつ…先生…!!!」

頑張れよ闇影…此処からは、お前達のターンだからな…!!

「渚、ありがとう…。俺はもう…闇を恐れない…これからも光へ導く為に…戦い続ける…!!」

渚の何処ぞの「星を清める宿命の騎士」の様な励ましの言葉を目を閉じながら聞いた闇影は、彼に感謝しつつ二度と闇に負けず光へ導き続ける事を決意し、黄金色に輝く両目を開眼した。更に…

「いよつと…!!闇影、黒深子ちゃん。やっと会えたな。」

「私も居ます…!!」

「コウイチ…ツルギちゃん…!!」

闇影の両サイドに白い光のオーラが発生し、そこからコウイチとツルギも現れた。これにより今まで散々になっていた仲間が漸く集結した…。

『これが最後の警告だ、煌。この世界の幸福を受け入れるよ。さつきみたいな目に遭いたくしなければ…!!』

ファイズは、この後に及んで闇影にこの世界での幸福を受け入れる様最終通告をした。しかし、今までとは違い半ば脅迫めいた口調だった。

「もうお前の言葉には惑わされない…!!お前の言う通り、人は逃げ出したい現実や都合の悪い嫌な記憶、闇から逃げる程弱い…。だけど、それから逃げずに立ち向かって光を手にする強さも持っている…!!そうだろ?皆。」

闇影の言葉を聞き、黙って強く頷く三人。人は皆、生きている限り「闇」を持っておりそれから逃れたい弱さを持つが、それに立ち向かい「光」を手にする強さも持っている。闇影達もまた、各々辛い経験を受けてきたが、それ等乗り越えたが為に今の絆を築く事が出来た…。

「夢は叶えて貰う物じゃない…あらゆる困難を乗り越えて自分で叶える物なんだ!!その思いや努力を汚したり、邪魔する権利は誰にもない!!」

『お前…一体何なんだよ!?!』

ファイズの問い掛けに答えようとした瞬間、ライトブッカーから十枚のカードが闇影の手元に飛び出た。内十枚は、元の色に戻った九枚のシャドウライドカードとデイライトのカード、そして最後の一枚は、それらのライダーの紋章が記された「コンプリートカード」である。

「さつきも言っただろ…俺は、お節介教師な仮面ライダーだ!!変身!」

【KAMEN - RIDER... DELIGHT!】

復活したデイライトのカードをファイズに見せ付けるかの様に突き出しながら何時もの決め台詞を叫んだ闇影は、デイライトに変身した。

『舐めんなよ…おいつ!!!』

ファイズもまた、カブト達「夢の守護者」とは別のライダー、ゾルダとアンスキルオーデインを呼び出した。

「闇影、こいつ等は俺等に任せな!!変身!」

「あのライダー達は私達が食い止めます!!変身!」

【HENSHIN!】

【SWORD - VENT】

コウイチとツルギは、ゾルダとUオーディンの相手をするべくリュウガとサソード・マスクドフォームに変身し、ドラグセイバーとサソードヤイバーを構えて彼等に向かって行く。

『お前等！！』

『『『はっ！！！！』』』

カオスタッチが黒深子の前に飛んで行ったのを見たファイズは、それを奪う様カブト達に命令をした。するとカブト達は、攻撃の矛先をディシーフとディステイル達から黒深子に変更した。そしてファイズは指を鳴らし、灰色のオーロラから無数のシアゴーストを呼び出しディシーフ達を襲わせた。

『黒深子には指一本触れさせないよ……！！うおおおっ！！』

しかしそうはさせじとライトブッカー・ソードモードを片手に響鬼・ブレイド・カブトから黒深子を守ろうとするディライト。しかし、いかに彼と言えども、三体ものライダーを相手に苦戦を強いられてしまっ。

『くっ…くそっ…！！』

『はあっ！！』

【BEAT】

『ウェイッ！！』



『ふっ…!!』

『ぐあああっつ!!』

響鬼の炎を灯した音撃棒・烈火の打撃、ブレイドがブレイラウザーでラウズしたスピード3「ライオンビート」の打撃、そしてカブトのカブトクナイガン・アックスモードの斬撃を諸に受けてしまい後退するディライト。

「先生!! そうだ…これがあつた…!! これ、受け取って!!」

戦況を見兼ねた黒深子は、目の前のカオスタッチを拾ってディライトに投げ渡した。

『これは…!?!』

カオスタッチを受け取りまじまじと見つめるディライトだが、迷わずそれに先程のコンプリートカードを挿入し、画面に浮かび上がった9つのライダークレストを特定の順番にタッチしていく…。

【RIKUGA! ANOTHER - AGITO! RYUGA! OR  
GA!

CULLIS! KABUKI! DARK - KABUTO! NEGA  
- DEN - O!

DARK - KIVA!】

カオスタッチから警告音が鳴り響くと、すかさずディライトのライダークレストにタッチする。

【FINAL - KAMEN - RIDE… DELIGHT!】

すると、ディライトにある「変化」が起きる。身体の色がライトオレンジから金と白、複眼の色はライトオレンジに変わり、胸には9つのダークライダーのシャドウライドカードのヒストリーオーナメント、頭部には自身のカードが額に貼り付き、最後にディライトドライバーを右にスライドさせて代わりにカオスタッチをバックルに装着する事により、9つのダークライダーの闇の力とディライトの光の力が融合した最終形態「仮面ライダーディライト カオスフォーム」へと変化した…。

『さあ…光へ導くぞ!!』

『『『うああああつつつつ!!!!!!』』』

ディライトCFはライトブッカー・ソードモードを構えてカブト達に向かってゆっくり歩き出し、それに対してカブト達はディライトCFに走って襲い掛かる。

『ふんっ!はあっ!せいっ!やあっ!!』

『『『きゃあああつつ!!!!!!』』』

しかし、ディライトCFは無駄な動き無く攻撃を回避し、的確に攻撃をしてカブト達を後退させる。戦闘能力が格段に上がったディライトCFの前には、カブト達は手も足も出なかった。

『音撃打・火炎連打の型!!せええいつ!!』

響鬼は音撃棒・烈火に灯した炎を幾度も飛ばす必殺技、音撃打・火炎連打の型をディライトCFに仕掛ける。すると、ディライトCF

はバツクルのカオスタッチを取り外し…

【KABUKI! CHAOS - RIDE… ARMED!】

歌舞鬼と「F」のマークをタッチして再びバツクルに装着すると、デイトライトCFの胸のヒストリーオーナメントが全て歌舞鬼の最強フォームのシャドウライドに変わり、両サイドに九体の黒い歌舞鬼のシルエットが現れてそれらが彼に集結すると、胸に黄金色の消炭鴉を象った装甲、両方の角に小さな金色の角が生え、全身が翡翠色をした歌舞鬼の最終形態「仮面ライダー装甲歌舞鬼」へカオスライドした。

『すううう… 喝ああああつつつ…!!!!』

『……つつ!!』

そしてDA歌舞鬼が大きく息を吸い込み大声で喝を飛ばすと強力な衝撃波が生まれ、無数の炎弾を全てかき消した。

【FINAL - ATTACK - RIDE… KA・KA・KA・KA  
BUKI!】

『本鬼（き）で斬り裂く！鬼神覚声！翡翠桜（ひすいざくら）!!』

『きゃあああああつつつつ…!!』

DA歌舞鬼はFARのカードを装填したドライバーをタッチすると、実体化させた装甲声刃を構え刀身に翡翠色の炎を灯し、響鬼目掛けて一気に降り降ろして斬り裂く必殺技「鬼神覚声・翡翠桜」を放ち爆発させた。上空には翡翠色の桜が美しく散る。それと同時にDA

歌舞鬼は元のデイルイトCFへと戻る…。

【KICK・THUNDER・MACH】

『オオオオ…!!』

【LIGHTING・SONIC】

『ウエエエイツ…!!』

ブレイドはブレイルラウザーにスピード5の「ローカストキック」、6の「デアースUNDER」、そして9の「ジャガーマツハ」の三枚をラウズし、右足に雷の力を宿し高速ダッシュのスピードを上乗せしたライダーキック「ライトニングソニック」をデイルイトCFに仕掛ける。

【CULLIS!CHAOS・RIDE!WILD!】

デイルイトCFがカオスタッチのカリスと「F」のマークをタッチすると、ヒストリーオーナメントがカリスの最終形態のシャドウライドカードに変わり、両サイドに黒いカリスのシルエットが現れて一体化すると、全身が赤く、胸には緑色のパラドキサンデッドの紋章が刻まれたハイグレイドシンボル、緑のハートの複眼が特徴の十三体のアンデッドと融合したカリスの最終形態「ワイルドカリス」にカオスライドした。

【FINAL・ATTACK・RIDE!CU・CU・CU・CU  
LLIS!】

『撃ち抜く切札!ワイルドサイクロン…!!』

『うあああああつつつつ！！！！！！』

DWカリスは、赤い二振りの鎌「ワイルドスラッシュャー」がセットされたカリスアローを弓矢の様に構え、強力な赤い衝撃波「ワイルドサイクロン」を放ち、突撃するブレイドを滅殺した。そして、元のデイルイトCFへと戻る。

『はあっ！えいつ！ふん、あれがあのお宝の威力なのね…。』

【FINAL - ATTACK - RIDER: DI・DI・DI・DI SHIRF!】

『せええいつつ！！！！』

『グアアアツツ！！！！』

デイスリーフは、デイルイトCFの驚異的な強さを見てそう眩きながらデイメンションスライサーでシアゴーストの集団を撃滅した。

『うつらうつらうつら！！さて、嘘の世界には「嘘付き」で行くか…。』

【FORM - RIDER: DEN - O! ROD!】

デイスティールもドライバーでシアゴーストを撃ち抜きながら、この「有現夢の世界」に因み、カードをスラッシュしてライダーを召喚した…筈だがその姿は全く見えない。デイスティールが辺りを見回すと…

『あれ？何で出て来ねえんだ…？ああっ！！』

『お嬢さん、僕と貴女が此処で会えたのは何かの運命だろう…僕に釣られて見…グボツ！！？』

『てめえ！！何巡ちゃんを軟派してんだよ！？』

青い亀の甲羅を模した電仮面に青いオーラアーマーが特徴のライダー「仮面ライダー電王 ロッドフォーム」は、事もあるうにディシーフの手を握り、「釣り」と言う名の軟派をやらかしていた。当然ディスプレイにとって気に食わない状況であり、彼に拳骨を見舞った。

『痛いなあ…この嵐波の様に騒がしい状況で漸く見つけた人魚姫を見つけて感傷に浸っていたのに。』

『あら、人魚姫だなんて嬉しい事言っじゃないの』

『それより、気をつけた方が良いよ。』

『????.?』

電王RFは頭を擦りながら、「人魚姫」であるディシーフの軟派を邪魔されて少し不貞腐れる。しかし、直ぐ様真剣な声で何らかの忠告をする…。

『この世界もだけど、あのボクちゃんからも潮の香りの様に嘘の匂いがぶんぶんするよ…。』

『えっ！？／何っ！？』』

この世界は言わずもがな、ボクちゃん…ファイズから「嘘の匂い」  
がすると二人に告げる。電王RFは、話術に長ける「詐欺師の品格」  
をも持ち合わせている為、その勘からファイズが怪しいと睨んだ。

『まっ、用心するに越した事は無いけどね。とりあえず、あの敵を  
何とかするよ。』

そう言いながらデンガツシャー・ロットモードを構えて、シアゴ  
ストの群れに特攻する。

## 【FINAL・VENT】

一方ゾルダは、自身のファイナルベントを発動し「マグナギガ」か  
らミサイル等の火器を一斉射撃する必殺技「エンドオブワールド」  
をリュウガに繰り出そうとするが…

『遅せえんだよ。来い！ブロッカー！！』

## 【FINAL・VENT】

『グオオオオオンッ！！』

発動には少々時間がかかる為、その隙にリュウガもファイナルベン  
トを発動してドラグブロッカーを召喚し…

『はあああっっ…！！』

『グアアアツツ!!』

黒い炎を身体に纏い、ドラゴンライダーキックでゾルダを撃破した。

『はいつ!やあつ!せいっ!!』

『くっ…!!』

一方サソードMFは、Uオーデインのライトセイバーによる連撃をサソードヤイバーで防御していた。何故直ぐにキャストオフをしなのか、その疑問は次の動作で明らかになる…。

『はあああ…!!』

Uオーデインがライトセイバーを持った右腕を大きく振り上げた瞬間…

『キャストオフ!!』

【CAST-OFF!】

『きゃあああつつ!!』

【CHANGE-SCORPION!】

サソードMFはキャストオフをし、弾き飛ばしたアーマーはUオーデインに直撃した。

敵の攻撃の隙を付き、そのタイミングでキャストオフをし確実にダメージを与える、これがサソードの作戦である…。そして…



【RIDER - SLASH!】

『ライダー Slash… はああっつ!』

『きゃあああっつ!』

Uオーデインが直撃したアーマーのダメージに怯んでいる隙にライダー Slash を放ち、遠くまで吹き飛ばした…。

【ONE! TWO! THREE!】

一方、最後に残ったカブトはゼクターのスロットルボタンを押して必殺技、ライダーキックの準備をする。

【DARK - KABUTO! CHAOS - RIDE! HYPER!】

デイルイトCFもカオスタッチでダークカブトと「F」のボタンをタッチすると、ヒストリーオーナメントがダークカブトの最終形態のシャドウライドカードに変わり、両サイドのダークカブトのシルエットと一体化すると、姿はカブト・ハイパーフォームと酷似しているが、黒銀色のアーマーに特殊装甲「カブテクター」が装備され、金色の複眼が特徴の、ダークカブトの最終形態「仮面ライダーダークカブト ハイパーフォーム」へとカオスライドした。

【RIDER - KICK!】

『はっ!』

カブトはゼクターを操作して、タキオン粒子を凝縮した右足でキックするライダーキックを放つが、従来のカウンター型ではなく、ジャンプしてキックする方法でDダークカブトHFを倒そうとするが…

【FINAL - ATTACK - RIDE : DA・DA・DA・DA  
RK - KABUTO!】

『天駆ける蹴撃！ハイパーキック！！』

『くっ…うああああっっっ！！！！』

DダークカブトHFも、カブテクターを展開して右足にタキオン粒子をチャージして飛び上がってキックする「ハイパーキック」を放ちカブトのライダーキックと激突するが、スペックの差でカブトをあっさり押し返して撃破しつつ着地すると、元のデイルイトCFへと戻る…。

『ヒッ…！？…うわああっっ！！た…助け…！！』

Uオーデインは、デイルイトCF達の圧倒的な強さを前に恐怖し、逃げ出した。しかし次の瞬間…

『…えっ…！？』

『役立たずには用は無えよ…！！』

突然ファイズがUオーデインの近くに現れ、その身体を真っ二つにして爆発させた。但しその方法は自身の武器ではなく、オーデイン本来の武器、ゴルトセイバーを用いた物だった…。

『貴様…!!』

デイルイトCFは今のファイズの行動に怒りを露にする。しかしファイズは悪びれる様子もなく、何故かそのまま変身を解除した。

「お前の戦いぶりは十分に見させて貰った…流石は『死神』と呼ばれるだけの強さだな…俺も嬉しいよ。」

『乾巧…お前は一体何者なんだ？今使ったのはクロックアップとオーデインのソードベントだろ…？何故使える…？何が目的だ!!』

デイルイトCFは、先程ファイズがオーデインを始末する際に、クロックアップとゴルトセイバーを使用したのを見て巧の正体に疑問を抱き、目的や素性を尋ね出す。すると…「ウクク…まだ僕の正体に気付かないみたいだね…。」

『なっ！その口調は!!』

巧は今までとは違う口調や不気味に笑い方に変わる。しかし、デイルイトCFはその口調や笑い方に聞き覚えがあった。すると巧の姿が揺らめき出し、長い黒髪に黒のスーツの下にはだけたワイシャツを着た緑色の瞳に縁無し眼鏡をかけた青年へと姿を変えた…。

「ウクク…久しぶりデイルイト、いや煌闇影。七年ぶりだね…。」

『貴様は…貴様のその顔と名前だけは死んでも忘れないぞ…!!創士傀斗（つくし かいと）!!』

デイルイトCFは謎の青年・創士傀斗の姿を見て更に声を荒げる。

彼こそが今回の首謀者であり、ディライト（闇影）にとって因縁の相手だった。

『貴様のせいでマバユキさんは…!!』

「おや？違うだろ。奴が死んだのは僕のせいじゃなくて、君が殺したんだろ？自分の闇を暴走させてね…。」

『黙れ!! 貴様が発端で起きた事だろ!!』

創士はマバユキが死んだのは自分のせいではなく、ディライトが原因だと笑いながら返す。しかしディライトCFにとってはそんな事は関係無い。

「先生!!」

『闇影!!』

『闇影さん!! 大丈夫…夫…!?!』

そこへ、黒深子・リュウガ・サソードの三人が駆け付けた。しかし、サソードが創士の顔を見ると昔の記憶が脳裏を過った…。

『あ…貴方は…!!』

遂に完成しましたか…!! 人間とワームの融合生命体「ネオティ  
ブ」が…!!

「どうしたのツルギちゃん？」

『あの男は…私をネオタイプに改造した研究者なんです…!!』

『「!!!!何だつて!?!何ですつて!?!」』

ツルギをネオタイプに改造したのは創士だと知り愕然とする三人。  
その事実を知り更に激昂するデイライトCF。

『責様ああつつ!!!!』

「ウクク…何を怒ってるんだい闇影？元はと言えば、この研究は君が発案した物じゃないか。」

『何!?!どういう事だ!?!』

「解らないか…まあ仕方ないね。なら、少しだけ披露してあげるよ。君の研究がどんな物なのかね。」

しかし、ネオタイプの研究の発案者が闇影だと言う創士。それを証明すると言い出すと、彼に「異変」が起きた…。

『なっ!?!それは…!!!!』

「これはゴルトフェニックスの力…そして…!!!!」

創士の背中に黄金色の鳳凰の翼が広がり、空中を浮遊する。これは仮面ライダーオーデインの契約モンスター「ゴルトフェニックス」

の力を得た物らしい。彼がゴルトセイバーを使用した理由が判明した。しかしこれだけでは無い…。

「これがグリラスワームの擬態能力だよ…。」

創士の身体がワームの擬態能力の様に揺らめき、巧の姿へと変わった。これは最強のネイティブ「グリラスワーム」の力を得た物であり、この力で巧に擬態しクロックアップも使用出来たのである。そして再び元の姿へと戻る。

『何故だ…何故人間の身で怪人の力を使えるんだ！？まさか…！？』

「そう。これは昔、君から奪ったカイジンライドのカードの力を僕が取り込んだんだ。これが君が発案した研究、異なる細胞同士の融合させる『セルフフュージョン』。そして、僕のように人間の身で怪人の力を使う者を『混ざり合う悪意』<sup>ミクリス</sup>と呼ぶのさ。」

創士が怪人の力を生身で使えた理由、それは闇影が発案したとされる異なる細胞同士を融合させた「セルフフュージョン」による物であり、創士はこの方法で嘗て闇影から奪ったカイジンライドのカードの力を取り込んだのだ。それにより力を得た者を「混ざり合う悪意」<sup>ミクリス</sup>と呼ぶ…。

『セルフフュージョン…ミクリス…！！』

「全く、これを思い付く君は凄いよ。でも、君がダークシヨッカーを裏切るかもしれないと知り、君の記憶を幾つか抜き取らせて貰ったよ。『セルフフュージョンの研究』と…『ある目的』の記憶についてね。まあそのお陰で僕は君の後釜になれたけどね。」

『ある目的…？それはどういう事なんだ！？言え！！』

「さてね。今日は挨拶に来ただけだからね。」

デイトライトCFは自身の記憶についてを尋ねるが、創士は挨拶に来ただと言い彼の質問には答えずゴルトフェニックスの力で翼を広げて宙に浮く…。

『まつ、待て！！』

「僕は創士傀斗！！ダークシヨツカー幹部兼技術開発責任者さ！！次の世界で会える事を楽しみにしているよ…最高の『シナリオ』が思い付いたらね。ウクク…アッーハッハッハ！！」

そして灰色のオーロラを生み出しその中へと入り、消えて行った…。

「本当に…大丈夫なのかい？」

「……。」

闇影はY黒深子の身を案じる様に心配する。この世界の現実にいる人間は巧…創士達により殆ど抹殺され、生き残りは数える程度しかない様だ。しかし彼女は、それでもこの世界で生き抜く事を決意していた。

「私も、闇に負けずに乗り越えて光を手にします…。何時か必ず…！！」

「そつか…頑張れよ、もう一人の黒深子…!!」

「…はい!!!／／／」

闇影はY黒深子の肩を掴み激励の言葉を贈り、Y黒深子も何故か顔を赤めながら力強く返事を返す…。

「あら、黒深子が二人いる…?」

影魅璃は黒深子とY黒深子が握手をしているキャンバスを見て、自分の娘が二人いる事に首を傾げる。

「そつか…渚さんに会ったんだ。」

「ああ。彼が居なかったら俺はあの世界の幸せとやらに取り込まれる所だったよ…。(渚…本当にありがとう。俺は戦うよ、全ての闇を光へ導くまでね…。)」

闇影は、心の中で自分の窮地を救ってくれた親友に感謝した。そしてカオスタッチを握りしめてより一層戦う決意を固めた。

「しかしよお…前に行った『ボウケンジャーの世界』と言い、今回の世界と言い、色んな世界があるもんだなあ…。」

「世界はまだまだ沢山ある…と言う事ですね。」

「その通りだ。世界は無限にある、だからその世界の闇を俺達は光へ導いていく…!!」



「『ええ！／おう！／はい…！！』」

世界は無限にある…つまりその世界の数だけ「闇」も存在する…。  
闇影達はこれからもそれらの平行世界を「光」へ導く事を改めて決  
意する…。その時…

「絵が変わったわ…えっ！？この世界って…！？」

次の世界を表す絵がキャンバスに浮かび出す…それは、デイシーフ  
の指名手配書が無数に散らばり、中央には金色の十字架を模した仮  
面をした白い戦士が剣を構えた絵だった…。これを見た闇影は…

「巡…？」次回、仮面ライダーデイライト！

「七年ぶりね…私の世界。」

「デイシーフの世界」に辿り着く闇影達。しかし、その世界は何処  
かおかしかった…。

「何でファンガイアが交番に？」

その世界の人間は全て礼儀正しく親切であり、何故かラットファン  
ガイアが法の秩序を管理している…。

「私は彩盗啓介、彩盗巡の弟です。」

「この世界はラット達が法に則った支配をしているの…。」

しかし、それはラット達により支配で成り立つ偽りの平和だった…。  
そして、巡がその世界の敵になった理由とは…！？

次回、『デイシーフはお尋ね者？ 縛られた正義』

全ての闇を、光へ導け！



コウイチ「ま…またハブラレルヤ…orz」

闇影「あ、はは…。そして仮面ライダー好きさん。「仮面ライダーデイルイド」より主人公の近藤渚ノ仮面ライダーデイルイドを登場許可を頂き本当にありがとうございます！！」

黒深子「次は巡さんの世界だね、先生。」

闇影「ああ、あいつの世界にどんなライダーがいるかは作者より勘の鋭い読者の皆さんならお分かりですよ？次回も楽しみにしててください！！ノシ」

デイルイトカオスフォーム&ダークライダーの最終フォーム紹介(前書き)

闇影「今回は俺の最強フォーム、カオスフォームとコウイチ達ダークライダー達の最強フォームの詳細を説明致します!!」

コウイチ「まだ未登場のフォームは???にして明かしません…」

巡「話が進むにつれて追加していくわよ」

周「んま、とりあえず現段階で出ているダークライダー達の最強フォームの詳細だけを書いてるから適当に読みな。」

ツルギ「それでは、どうぞ!!」

## デイルイトカオスフォーム&ダークライダーの最終フォーム紹介

仮面ライダーデイルイト カオスフォーム

デイルイトが特殊アイテム「カオスタッチ」を使用する事で変身する、彼の真の姿でもある最終フォーム。デイルイトの「光」の力とダークライダー達の「闇」の力が融合したライダーである為、別名「混沌纏いし死神」。

特徴はディケイド・コンプリートフォームと酷似しているが、体色は金と白であり、複眼はライトオレンジ。胸部には左から歌舞鬼・ダークカブト・ネガ電王・ダークキバ・リクガ・アナザーアギト・リュウガ・オーガ・カリスのシャドウライドカードが貼り付いており、9つ全てのダークライダーの力を使う事が出来、戦闘能力も格段に上がっている。

最大の特徴は、自身をダークライダー達の最終フォームの影の姿に変える「カオスライド」を使用する事である（要はダークライダーの最終フォームにファイナルカメンライドする事）。

例：リュウガのボタンと「F」のボタンを押す。

【RYUGA!CHAOS-RIDE::SURVIVE!】

すると、胸のオーナメントカードが全てリュウガサバイブのFSRカードとなり、デイルイトCFの周囲に9体のリュウガの黒いシルエットが現れ、彼と一体化しリュウガサバイブの姿に変わる。（ゴークライジャーのOPPのゴークシルバーがゴールドモードに変身するシーンをイメージ。）

更に、そのライダーの武器も具現化させる事も可能。その際カードは不要である。

但し、F A Rを発動後は強制的に元の姿に戻ってしまう。

また、シャドウライドも使用出来るが通常のそれとは違いそのライダーをF F Rさせる事が可能。

必殺技は通常のデイルイトと同じだが名前の上に「カオス」と付く。しかし、このフォームの本質は…

カオスタッチ

カオスフォームに変身する為のタッチパネル型のツール。手順は、ケータッチと同じで9つのダークライダークレストが入ったカードを装填し、リクガ・アナザーアギト・リュウガ・オーガ・カリス・歌舞鬼・ダークカブト・ネガ電王・ダークキバのマークを順に押し、最後にデイルイトのマークを押す事で変身。

外見や機能はケータッチのそれだが、色はライトオレンジと黄色。

また通常の携帯電話の様に通話も可能である。

更に…

ダークライダー達の最終フォーム

仮面ライダーリクガ フォビドウンフォームリクガの最終形態。五本の稲妻の形を黒い角に、複眼の色はダークレッドの複眼に、アルティメットクウガに似た黒いラインが入った金色のアーマーが特徴。チダムの色は金。別名「正しき禁断の闇」。

アルティメットクウガ同様、超自然発火能力を使用出来るが炎の色は金色。戦闘能力はライジングアルティメットと同等である。

必殺技は超自然発火能力により金色の炎を纏ったライダーパンチ「フォビドウンナックル」、同じくライダーキックの「フォビドウンレック」。

アナザーアギト ????

仮面ライダーリュウガサバイブ

リュウガの最終形態。黒龍の顔を象ったアーマーを纏い、あらゆる部に金色の装飾品が付いているのが特徴。簡単に言えば黒い龍騎サバイブのアーマーが龍の顔に象った様な物。

「SURVIVE 黒炎（こくえん）」のカードを黒い龍の顔を象った拳銃型バイザー「ブラックドラグバイザーツヴァイ」にセットする事で変身。

必殺技はバイク状に変形した黒いドラグランザー「ブラックドラグランザー」に乗り込み、黒い炎を纏って突撃する「ドラゴンファイヤーストーム」。

仮面ライダーオーガ グリッターフォーム

オーガの最終形態。アーマーが金色でフォトンストリームが黒色と、オーガのアーマーとフォトンストリームを入れ替えたカラーリングで複眼と胸のコアはライトオレンジで両肩にはオーガストランザーの尖端を模した黒い装飾が特徴。フォトンブラッドは金と黒のマーブルカラー。

ファイズブラスターに酷似した特殊武器「オーガグリッター」により変身。

ファイズ・ブラスターフォーム以上に強力なフォトンブラッドを放出しており、その威力は上級オルフェノクを一瞬で灰化させる程。必殺技はオーガグリッター・グリッターズブレイドモードをエクシードチャージし切っ先から放たれる強力な刃型のフォトンブラッドで敵を斬り裂く「グリッターズブレイド」と、グリッターズブライトモードをエクシードチャージしフォトンブラッドのエネルギー砲



を放つ「グリッターズブライト」。更に、オーガストラッシュのミッションメモリーをセットしたフラッシュブレイドモードをエクシードチャージし巨大な大剣型のフォトンブラッドで敵を斬り裂く「アルティメット・グリッターズストラッシュ」。

#### オーガグリッター

外見はファイズブラスターと酷似しているが、色は赤い部分が金で銀の部分が黒のトランスボックス型トランスジェネレーター。ファイズブラスター同様、オーガギアをセットすると「AWAKENING」の音声が鳴り【000】のコードを入力する事により変身。

#### グリッターズブレイドモード

【103 ENTER】とコード入力し【BLADE-MODE】の音声と共に変形。その斬り具合は強固な物質でも薄い紙を切るかの様に鋭い。刃の型をしたフォトンブラッドを「撃つ」かの様に飛ばす事も可能。

【0032 ENTER】とコード入力する事でグリッターズブレイドが発動。

#### グリッターズブライトモード

【143 ENTER】とコード入力し【BRIGHT-MODE】の音声と共に変形。金と黒のマーブルカラーのレーザーを放ち、その威力は並のオルフェノクを一発で灰化させる程。

【0032 ENTER】とコード入力する事でグリッターズブレイドが発動。

#### 仮面ライダー装甲（アームド）歌舞鬼

歌舞鬼の最終形態。全身が翡翠色で、胸に金色の消炭鴉を象った装甲を纏い、両方の角に付いた小さな金色の角が特徴。

変身方法は音撃増幅剣「装甲声刃」を構え、「歌舞鬼、装甲！」の掛け声により変身する。肉声が清めの音と同じ波長となり、大声で叫ぶだけで並の魔化魍を倒す事が可能。

必殺技は装甲声刃に翡翠色の炎を纏い、振り上げると無数の緑色の桜の花弁と共に敵を斬り裂く「鬼神覚声・翡翠桜（ひすいざくら）」。

仮面ライダーダークカブト ハイパーフォーム

ダークカブトの最終形態。外見はカブト・ハイパーフォームと酷似しているが、カブトで青い部分が全て黄色であり、黒い部分もやや銀色がかっている。

変身方法は銀色のカブト虫型の特殊コア「ハイパーゼクター」をライダーベルトの左部分にセットし、ゼクターホーンを倒す。

無論過去と未来を行き来する程の速度を持つ「ハイパークロックアップ」、全てのゼクターの力を集結させる特殊武器「パーフェクトゼクター」も使用可能。

必殺技はハイパーゼクターのゼクターホーンを倒しそのエネルギーをゼクターに送りチャージしたライダーキック「ハイパーキック」、パーフェクトゼクター・ソードモードを使用した「マキシマムハイパータイフーン」、ガンモードを使用した「マキシマムハイパーサイクロン」。

仮面ライダーネガ電王 ????

仮面ライダーダークキバ ????

## デイルイトカオスフォーム&ダークライダーの最終フォーム紹介(後書き)

闇影「デイケイドとは全く真逆の能力だな…。」

巡「そうね。通常フォームはデイケイドコンプリートフォームの能力だけど、カオスフォームでは通常のデイケイドなのよね」

ツルギ「9つの平成ライダー達の最強フォームもシャドウライド出来る上…。」

周「それをもFFR出来るんだから、チート能力この上ねえな…。」

リュウガサバイブ「だけどよ…それでも未だ完全には明かせてねえよな?」

闇影「そうらしいな…って、何でサバイブ化してるんだよ!?!」

リュウガS「いや、俺等の最強フォームを紹介してんだからついノリで…な。」

巡「ふ〜ん…ねえコウイチ君、そのフォーム格好良いわね…ちょっと写真撮らせてくれない?」

リュウガS「勿論ツスよ!!! (ポーズを取る)」

巡「はい、チーズ (コウイチのカメラで撮る) 良いわね…じゃ次はファイティングポーズを撮らせて」

リュウガS「OKツスよ!!! (ファイティングポーズを取る)」

巡「はい、チーズ」

リュウガ「うっし！！決まったな！！って、あれ？何で戻ってんだ？あとドラグバイザーツヴァイは…あああっつ！！」

周「このお宝は俺様達が頂くぜ（逃走）」

巡「カメラと写真は返すわ よく撮れてるから良いお宝になるわよ。じゃあね（逃走）」

リュウガ「あ~~~~っつっつ！！！！待てえええっつっつ！！！！（バイザーが無いのでアドベント出来ず走って追い掛ける）」

ツルギ「馬鹿…ですね。」

闇影「全くだ…今回は『ディシーフの世界』です。期待せずに楽しみにして下さい！！」

第25導 デイシーフはお尋ね者？ 縛られた正義（前書き）

最初に言っておく！今回は周は出ません！！

周「おい！！そりゃどついつ事だ！？」

今回は巡メインの話だからな。お前はお呼びじゃない。

周「んだとてめえ…！！！」

まあ落ち着け。その代わり…ゴニョゴニョゴニョ…。

周「何…！？ちつ、そういう事なら仕方ねえな。」

と言つ訳で、デイシーフ編スタートです…！！どうぞ…！！

## 第25導 デイシーフはお尋ね者？ 縛られた正義

「これって巡さんの世界…だよな？」

「はい…ですが、どうして指名手配されているのでしょうか…？」

キャンバスに描かれたデイシーフの指名手配書の絵を見て、何故巡が指名手配されているのかを考える黒深子とツルギ。

「あいつが今までやってきた事を考えたら別に不思議じゃないさ。

いや、もしかしたら余罪もあるかも…強盗や窃盗の他に殺人、恐喝、暴行、逆痴漢、強姦、未成年略取、監禁…とかね。」

「お前、相変わらず巡さんや戴問さんにはきついいな。」

しかし闇影は、今まで彼女がしてきた事を思返せば指名手配されてもおかしくないのだと然程気にはせず、「冗談混じりに有りもしない余罪を推測する。」

「もう！真面目に考えてよ先生！！」

「あゝごめんごめん、冗談だよ。ただ、あいつが何をしてこの世界で指名手配されるのか気にはなるな…。」

その冗談を黒深子に叱責されて軽く詫びる闇影は、巡が何故この世界で指名手配されたのかを真剣な顔付きで考え出す…。

「ふう…七年ぶりになるかな 私の世界。」

同時刻、巡もこの世界に到着…いや七年ぶりに帰還した。しかし、何故か何時も居る筈の周の姿が見当たらなかった。その理由は…

「周には無理言っつて、今回は私用で戻つて来たただけなんだけどね。」

今回この世界に戻つて来たのは何時もの宝探しでも、単なる里帰りでも無く「私用」で戻つて来たのだった。その為、周には先に次の世界に行く様に言い現在に至る…。

「さてと…このまま目的実行したいけれどその前に…!!」

「彩盗巡…世界の敵めえ…!!」

すると、巡の背後に鉄パイプや金属バット等殺傷力のある道具を構えた十数人の人々が殺意の籠もった目付きで彼女に迫る…。

「この人達を何とかしないと…ね。」

それを見た巡は、右脚に巻き付けたホルダーからディシーフドライバーを取り出して、刃の部分を舌でペロリと舐めながら人々に向かって行く…。

世界の光導者、デイルイト！数多の平行世界を巡り、その瞳は、何を照らす？「先ずは情報収」こんにちは。「こんにちは…情報収集する事だけど…」

闇影達は这个世界についての情報収集の為に街を歩き回っている。  
しかし彼は何故か表情を暗くしている…

「何で俺だけこんな格好をしてるんだあああああつつつつ！  
！！！！／／／」

「くくく…くくく…！！！！」

自分の格好に嘆き絶叫する闇影。それもその筈、家を出た瞬間に彼の服装が、警帽に紺色のサスペンダー服を着た虹色の鼠のマスコットの姿となっているからだ。その姿を見た黒深子達は歩きながら笑いを堪えている。

「…それ確か、警察のイメージマスコットの『ニジマスくん』だったよな…くく…！！」

「え、ええ…そうだったわ…ね…ふふ…！！」

「そんなに笑わなくて良いだろっ！？けど、これで俺達の行く場所が警察なのが分かった。あそこなら指名手配犯の情報があるからな。」

今回の闇影の役割「警察のイメージマスコット」である「ニジマスくん」とは、正義の赤、希望の橙、勇気の黄、安全の緑、平和の青、愛の藍、友情の紫を意味した七つの色をした愛らしい「鼠のお巡りさん」である。その格好を見て笑いながら説明する黒深子とコウイチに憤慨する闇影だが、皮肉にもこれが切欠で彼等の行き先が警察関連の場所に確定した。警察署や交番ならば指名手配犯の情報を自分達以上に把握している筈…。



「でも問題は「こんにちは。」「こんにちは。問題は私達一般人に情報をくれるかどうかよね…。」

「とりあえずは行って」「こんにちは。」「あつ、はいこんにちは…行って見るのが一番だと私は思います…。」

「そついう事。」

「…なあ、さつきから気になってんだけどよ…何で行く人行く人が挨拶してくるんだ?」

「良い事じゃないか。寧ろそれが当たり前にならない方がおかしいだろ。」

コウイチの言う様に、先程から通り過ぎる人々がすれ違い様に挨拶をしてきているのだ。しかし闇影は、他人と挨拶するのは当然だと思っっている為全く不審がらないでいる。

「お嬢ちゃん達、煎餅でも食わんか?ほれ。お茶も持ってけ!」

「あ、ありがとうございます…。だけど…何か変なのよね…。」

「はい…。」

とは言え、何処か不気味な雰囲気を漂っており不安になる黒深子とツルギ。中には菓子やお茶等を差し出す者も。その時…

「退いて下さーいっつー!」

「「「「!」」」」

反対側から自転車に乗った少年が猛スピードで自分達の方へ向かって来る。そして…

「「「うわあっ!!? / きゃああっ!!?」「「「

突っ込む勢いで向かって来た為慌てて両側に避ける闇影達。一歩間違えば大怪我になっていたのかもしれない…。

「おいコラッ!! 危ねえだろっ!?!」

「ごめんなさい!! 急がないと塾に遅れてしまいそうだから!! あの! 今のは通報しないで下さい!!」

「通報?」

コウイチの怒号に少年は去り際に何度も平謝りする。自転車を飛ばしていた理由は「塾に遅れそうだった」為である。しかし、その後の彼の怯えた様に「通報はしないで欲しい」と懇願する言動に、闇影は首を傾げる。その時…

「うっ…うわあああっっ!!!」

「「「「!!!!?」「「「

『貴様…決められた速度以上のスピードで自転車に乗ったな?』

「「「ごめんなさい!! ホントに急いでたので…あの…!!」

『言い訳無用!! 定められた法律を守れない貴様は…悪だ!!』

『法律違反は悪だ！！悪は許されない！！』』

「たっ助けてええつつ！！」

少年の目の前に黒い鼠とカラスの嘴を複合した様な姿をしたステンドグラスの怪人「ラットファンガイア」が二体現れ、「自転車のスピード違反」と言う、良い事ではないのだが「悪」と言う程では無い罪により彼を捕獲しようと襲い掛かる。

「先生！！あれってオトヤさん達がいた世界の…！！」

「ああ、ファンガイアだ。でも、あの世界にしかない筈のファンガイアがどうして…！？」

ラットFを目撃した闇影は、本来ならばオトヤ/仮面ライダークキバのいる「ダークキバの世界」等キバ系統の世界にしか存在しない筈のファンガイアが何故この世界にいるのか疑問を抱く。

「考えるのは後だ！！今はあの子を助けないと！！」

しかし今は考えている暇は無い、このままでは目の前の少年が危険な目に遭ってしまふ…そう思い直ぐ様現場に駆け付けようとする闇影。だが…

『『グワアッ！？』』

「え…！？」

突然ラットFに謎の銃撃が襲う。闇影達が銃撃が放たれた方向に目

を向けると、オールバック状にした黒髪のポニーテールをした黒いジャケットに同じ色をしたホットパンツの女性と逆立った短い黒髪に黒い服と同じ色をしたブーツの男性が銃を構えていた。

「早く逃げて!!」

「はっ、はい!!」

『貴様等…!!』

「せやせや。お前等の相手は俺等や!!早よ来いや!!」

女性の指示を聞いた少年はそのまま急いで逃げ去っていき、それに憤慨するラットFは二人の男女を睨み付ける。そして関西弁で話す男性はラットF達に自分達の方へ注意を引き付けるかの様に中指を立てて挑発する。

「さてと、こいつ等を片付けるわよ襟立君!!」

「おっ!!」

ラットFを片付けると宣言する女性と襟立と呼ばれた男性は何処からか機械型のベルトを腰に巻き付けて装着し懐から黒いナックル型の機械を取り出し…

「「変身!!」」

【【F I · S · T · O · N】】

それをベルトにセットすると、二人の姿は女性は頭部が赤色の十字

架、襟立は緑色の十字架を模したバイザーをした全体が白いアーマーが特徴の「仮面ライダーイクサ セーブモード」に酷似したライダー「イクサトルーパー」へて変身を遂げた。

「あれはイクサ…！？でも、微妙に違う…？」

『行くわよ！！／行くで！！はああ…！！』

『ギャツ！！ギツ！！ギャアツ！！』

『ガツ！！グツ！！ベエアツ！！』

女性に変身したイクサトルーパー・レッドクロスは専用武器「トルーパーカリバー・ソードモード」でラットFを素早く斬り付け、襟立のイクサトルーパー・グリーンクロスは先程のナックル型の機械「トルーパーナックル」でパンチを繰り出してはキックをするという格闘スタイルでラットF達を徐々に後退させる。

『はい。後は止めね』

『終いや…！！』

【R・I・S E・U・P】

『はああ…はあっつ…！！』

『ギイヤアアアツツ！！』

イクサトルーパーRCが金色の笛「カリバーフェッスル」を、イクサトルーパーGCが銀色の笛「ナックルフェッスル」をベルトに読

み込ませると、RCは刀身に赤い光を纏ったトルーパーカリバーで斬り裂く。「トルーパージャツジメント」を、GCはトルーパーナックルに緑色のエネルギーを籠めた強力パンチ「トルーパーブロウクン」を放つと、二体のラットFは全身に罅が入りガラスの様に砕け散った。

『どうにか片付いた…って、貴方達まだいたの!? 逃げなさいって言った筈でしょ!?!?』

「君達は一体…!?!?」

『『『『へエヤアアツツ…!!!!!』』』』

『恵の姉ちゃん!! 今度は四体来よつたで!?!?』

恵と呼ばれたイクサトルーパーRCは、未だにこの場に留まっている闇影達を目にして再度逃げる様怒号を飛ばす。しかしその時、別個体のラットFが今度は四体現れた。

『やはり貴様等か!! 我が同胞を殺した平和を脅かす愚かな無法者共…!!?!?』

『こんな堅つ苦しいルール作って何が平和よ!!?!?』

『黙れ!!?!? 絶対正義』の名の下に貴様等を肅正する!!?!?』

「絶対正義」の題目に「無法者」であるイクサトルーパー達を始末するべく、ラットF達は彼等に襲い掛かるうとした。四対二と、数の上ではこちらが勝っている為始末するのは容易い、そう確信していた。しかし、その考えには一つ誤算があった…。

「悪いけど、多勢に無勢な戦いを見逃す程俺は甘くない。変身！」

【KAMEN - RIDER... DELIGHT!】

『ふっ!!』

『ギヤアッ!?!』

目の前の危機を見逃せない闇影はディライトに変身すると同時に、ライトブッカー・ガンモードの銃撃をラットF達に放った。

『貴方...何者...!?!』

『お節介教師な仮面ライダーです、宜しく。』

『貴様も仲間か!?!ならば死ぬがいい!!』

イクサトルーパーRCは突然現れた自分達とは違うライダーの存在を知り彼に何者かと尋ねた。その質問にディライトは、何時もの台詞で自己紹介する。一方ラットF達は、自分達にとつての誤算ディライトの存在を見てイクサトルーパー達の仲間だと推測し、始末する為彼に一斉に襲い掛かる。

『ファンガイアにはこれでいくか。絶滅タイムだ...何てね』

【SHADOW - RIDER... DARK - KIVA!】

ディライトはキバットバット二世の決め台詞を言いながら、ラットFの相手に相応しいライダーとして自身の影をダークキバにシャド

ウライドさせる。

『何！？影がキバに！？』

『あれ…「渡」の金ぴかのキバに似とる！？』

【ATTACK - RIDE… BASSHAA - MAGNUM!】

シャドウライドの能力に啞然とする一体のラットFとイクサトルーパーIGCを余所に、デイルイトはドライバーにカードを装填し、Sダークキバに緑色の海魔を模した銃「魔海銃バツシャーマグナム」を実体化、装備させた。

『これだけ未だ使っていないから使わないと可哀想だからね。ふっ！はっ！やあっ！！』

『『『グガアアアアツツ！！！！』』』』

意外にどうでもいい理由でバツシャーマグナムを選んだデイルイトだが、Sダークキバと共にライトブッカーで素早く水の銃弾「アクアバレット」を連射してラットF達を迎撃する。

『さて…止めといくか！！』

【FINAL - ATTACK - RIDE… DA・DA・DA・DA  
RK - KIVA!】

『バツシャーバイト…ってね これ以終わりだああっっ！！』

『『『グギアアアアアアアアツツツ！！！！』』』』



ディライトが止めとしてFARのカードを発動すると、彼等とラットF達の周囲のみ全体が薄暗い水の空間「アクアフィールド」と化し、その水を全て巻き上げて作り出した巨大な水流弾を放つ「バツシャー・アクアトルネード」をSダークキバと共に射出するとラットF達は全身に罅が入り砕け散った…。

『ふう…それにしても、今のファンガイアは何だったんだろう…?』

『貴方こそ何者なの!? 突然変身したと思ったら、影をキバに変えちゃうなんて…!!』

戦闘を終えたディライトは、ラットFが何故先程の少年を襲おうとしたのかを疑問に思っている時、イクサトルーパーRCが彼の素性を声を荒げて尋ね出す。

『俺は…!!』

「ライダーめえ…!!」

「法を犯す無法者共めえ…!!」

ディライトが自分の素性を明かそうとした時、十数人の人々が殺意の籠った表情で道具等を持って突然現れ、彼とイクサトルーパー達にじりじりと近付き出す…。

『ちっ…やりづらいなあ…!!』

「な…何…!? さっきまで優しくかった人達が急に…!!」

「あんた等大丈夫か！？あのライダー達に何もされて無いか！？」

「わ…私達別に何もされてないですよ？それにあのオレンジのライダーは私達の…！！」

道具を持った連中の中の一人の男性が黒深子達の身を案じる言葉を掛ける。黒深子は、先程まで親切だった人々の豹変ぶりに戸惑いつつデイルイトは自分達の仲間だと告げようとした時…

『ちっ…折角上玉が二人も見つかったのに…！！ここは退くぞお前等。』

『はあっ！！！？』

「えっ…！？」

突然デイルイトがまるで悪人になったかのような台詞を言ったり、イクサトルーパー達のリーダーを気取り出した為、イクサトルーパー達はすつとんきような声で呆れ驚き、黒深子も目を見開いて驚く。

「やっぱりかあ…！！ライダーは平和を乱す無法者だ…！！」

「三人共捕まえるぞ…！！」

『おっ、おいあんた…！！一体何のつも…！！』

『分かったわリーダー。襟立君、退くわよ…！！』

『は！？ええっ！？何のこっちゃ！？』

「逃がすな！！追えええつつ！！」

イクサトルーパーGCはデイルイトの突然の行動を問い質そうとしたが、イクサトルーパーRCはその言葉の真意を汲み取ったのか、デイルイトを「リーダー」と呼びGに退く様促しその場から立ち去って行き、人々はそれを逃がすまいと彼等を追って行く…。

「あいつ、一体どういいうつもりだ…？急にさっきの人達の仲間だと言い出して…。」

「私もよく分かりません…。」

「もしかしたら先生、私達を守る為にあんな事を言ったのかも…。」

「え？」

「考えて見て。もしさっき私が先生の仲間だと言ってたらどうなっていたのかを。」

「あ…！！」

黒深子は先程のデイルイトの不可解な行動を推測した。もし彼女が彼の仲間だと言ってしまえば、自分達まで「無法者」の仲間だと見なされてしまう…。それを瞬時に察したデイルイトは、イクサトルーパー達の仲間だと名乗り、黒深子達からその矛先を自分に向ける為にあのような行動を取ったのだと…。

「ん？先生からメールが来たわ…！！」

「何て送って来たんだ？」

「『後で合流しよう』だって。」

「なら、取り敢えず安心ですね…。」

その時、黒深子の携帯に闇影からメールが届いた。「後で合流しよう」と言う内容を見て彼の無事を確認して一安心する三人。

「（先生…気を付けて戻って来て…！！）」

### 神社境内

「成程な、あの嬢ちゃん達から守る為に俺等の仲間のふりをしたんか…。」

「うん…彼女達にまで危ない目に遭わせられないからね。」

「それより！あんた一体何者！？そのライダーシステムは何なの！？」

黒髪の青年・襟立健吾は先程の闇影の行動の真意を漸く理解するが、ポニーテールの女性・麻生恵は改めて彼の素性を矢継ぎ早に問い詰める。

「先程も言ったでしょ？お節介教師な仮面r…」「余計な事しないで…！！」

再び何時もの台詞で自己紹介をしようとする闇影だが、「余計なお節介」だと怒号を飛ばし中断させる恵。

「所で、あのファンガイア達の目的は何ですか？さっきの子が自転車のスピード違反をしたのを理由に襲おうとしてましたけど…。」

「それは…!!！」

「いたぞ!!無法者共!!！」

「誘拐犯共め…!!！」

「ヤバいで!!追い付かれてしまった!!！」

「あゝもう!!あんたのせいで変な余罪まで付けられたじゃない!!！」

恵が闇影の質問に答えようとした時、先程の人々がここまで追い付いて来た。恵は、黒深子達を危険から遠ざける為に言った嘘のせいで自分達に余計な罪を増やした闇影に憤慨しながら、健吾と共にこの場から立ち去っていく。

「一体全体どついう事なんだ…!!？」

彼等から具体的な話を聞けないまま、闇影も急いでこの場から立ち去る。それを追い掛けて行く人々も居なくなりガランとした神社の境内の中央に灰色のオーロラが発生し、その中から紅蓮が現れ…

「デイルイト…貴様はこの世界の『正義』により断罪される運命にある…!!！」

そう言うと再びオーロラの中へと入り消えていった…。

白石家

「ただいま。」

「先生！！大丈夫だった！？」

「ああ。あの着ぐるみを脱いで帰って来たから取り敢えず狙われる事は無いよ。」

「良かった…。」

あれから合流場所はここだと連絡があり先に戻った黒深子達は、着ぐるみを脱いだ闇影が無事に帰って来たのを見て安心した。

「で、結局あの人は何者だったんだ？」

「それを聞こうとしたらさっきの人達が追い掛けて来て聞けず終いになったよ…。」

「やはり警察関係の人に合って話を聞くしかありませんね…。」

「そうだね、行くぞ。」

ツルギの言葉通り、闇影達は当初の目的の場所・警察関連の場所へ

赴く事にした。

「ふう…生身で戦った後の水浴びは最高よね」

同時刻、巡は先程の人々との戦闘を終えて汗をかき、川原に入ってゆったりとしていた。尤も、戦闘と言ってもドライバーの柄で殴って気絶させたただけだが。

「彩盗巡…無法者には罰を…!!」

「あらら…困まちやったわね」

そこへ殺意の籠った表情をした人々が川原を取り囲み、巡がそこから出るのを防いだ。衣服は全て川の外、しかしそこは人々が居て取りに行けない。更に一人の男は川原に入って彼女に近付き出す。通常の女性なら自身の裸体を人前に晒す様な真似は気恥ずかしくて出来はしないが…

「しょうがないわね…超特別大サービスよ!!ふっ!!」

「何…!!ブゴゴゴ…!!ノノノ」

何と巡は、自らその男に近付きドライバーを片手に柄で殴って気絶させ川に沈めた。何故丸腰の身で武器を持っていたのか…その答えは彼女が川原から上がる事で判明した。

「生憎、普段は右足のホルダーにドライバーをしまっているのよ  
因みにカードホルダーは左にね」

よく見ると、巡の両足には黒い帯が付いたホルダーが巻かれていた。彼女は通常、デイシーフライバーとカードホルダーは肌身離さず持つ為にこの様な処置を取っていたのだ。と、ウインクしながら答える。

「かつ…構うもんか！！／＼全員で襲い掛かれえつつ！！」

『うおおおおおおつつつ！！！！！！』

「あら、随分正直な行動よね　で・も…」

全裸になった女性が相手でもお構い無しに再び襲い掛かる人々。それに対して妖艶な笑みを浮かべて笑う巡は…

「うぶっ！！」

「そう簡単にヤラれる程私は甘くないわよ！！」

襲って来た男にその豊満な胸を揺らしながら長い右足で顔面に蹴りを叩き込む。その後も足を大きく開いた蹴りや、胸が当たるのを承知で抱き締める形でプロレス技を掛けたりと、今自分が全裸である事をまるで自覚していないかの様な攻撃を繰り返す…。

「あゝあ、こんなに汚しちゃって…どっかから服を調達しないとね。」

彼等を全て気絶させた巡は、今の騒動で汚れてしまった衣服を拾っ



て愚痴を溢しながら、代わりの衣服を調達するべくこの場から立ち去った…。

## 交番

「すみません。ちょっとお尋ねしたいんですが…」

『へヤアア…何の用だ…!?!?』

「……!!?!?!?!?」「……」

「な、何で交番にファンガイアが居るんだ!?!?」

一方、交番に訪れた闇影達一行。しかし、中には誰も居ない為奥にいるかもしれないと、声を掛ける闇影。すると、奥から警察帽を被ったラットFが現れた為一行は大きく驚く。

「（いや…見た目だけで判断しちゃ駄目だ…。）じ、実はあの…指名手配犯の彩盗巡についてお尋ねしたい事があるんですけど…。」  
予想外の存在に驚きつつも、闇影はラットFに巡の情報について尋ねる。すると…

『何!?!?彩盗巡だと?!?!?こうしては居られん!?!直ぐに「あの方」に連絡だ!?!!』

「え、え…?何事…?」

巡の名前を聞いた瞬間、ラットFは急に慌て出し机にある電話で「あの方」なる人物に連絡し出した。突然の慌てぶりにただただ困惑する闇影達。そして…

「凄つごいな〜…!!」

「うん…何せリムジンで送迎してくるくらいだからね…。」

「如何にもって感じのどこだな…。」

「ええ…。」

十数分後、彼等は今「あの方」なる人物が住んでいる真っ白な豪邸の屋敷内にいる。その後、黒深子の言う様にリムジンが交番に走ってきて闇影達を特別な客としてもてなし出したのだ。案内されるまま屋敷に入ると、ありとあらゆるゴージャスな家財が装飾されておりまるで高級ホテルにでも来たかの様な内装だった。

「ようこそお越し下さいました。こちらへ御案内致します。」

「あ、はい。こちらこそどうも…。」

そこへスーツを着た中年の男性が現れ、闇影達を責任者の元へ案内する。その途中に…

「いらっしやいませお客様。」

「えっ…あ、うっ…こ、こんにちは…／＼／」

「うおっ…凄えモンが見れたぜ…!!」

首にタオルを巻きエアロビ用のレオタードを着た二人組の女性とすれ違い、その姿にどきまぎした闇影は顔を赤くしながら挨拶をし、コウイチは彼女達の姿を見て鼻の下を伸ばす。

「彼女達はここのトレーニングルームで無法者達と対抗する為に日々訓練をしている戦士なんです。」

「そうなんですか…。ん？さっきの人達の胸の所の…」

「何だ闇影。お前もやつと普通の男として目覚め始めたか？まあ、スタイルは良いけど胸はあまり形が良くねえけど…」

「お前と一緒にするな！そうじゃなくて、さっきの人達が着ていた服の胸に書いてあった数字だ。確か『31103』って書いてあったよな…まあ特に意味は無いけどね。」

意味不明な事を言ってからかうコウイチを注意する闇影。彼が気にしていたのは先程の女性二人が着ていた服の胸元に書いてあった「31103」と言う数字である。しかし、あまり意味の無い事だとその話題を終わらせた。

「此方でございます。少々お待ちを…。お客様をお連れ致しました。」

気が付くと、責任者の部屋の前に辿り着いた闇影達。男性は彼等を連れて来たと言いながらドアをノックする。しかし、いくら叩いて

も返事が返って来ない。その代わりに何やら大きな音量で音楽が聞こえて来る。

「もしや…。」

男性は責任者が返事をしない理由を考えながら、合鍵を使いドアを開けた。すると…「イクササアアアイズツツ…！」

「……はい？」「」「」

「やはり…!!！」

闇影達が目にした物、それは耳がつんざく程の大音量で音楽を流しながら白い文字で「31103」と書かれた青いTシャツと黒い半ズボンが特徴の、端正な顔立ちをした黒髪の二十代の男性がハイテンションで歌いながら何やら謎の体操をしていると言う、何とも言い難い光景だった。そして、音楽が鳴り終わると…

「その命…神に返しなさい…!!！」

指を差して、謎の決め台詞を自信満々にほざく。これを見た闇影達の思った第一印象は…

「……（変人だあああつつつつ!!!!）」「」「」

「（変人ですね…!!!!）」

と、散々な物である…。

三十分後

「待たせて申し訳ない。トレーニングに夢中になり過ぎてとんでもない所を見せてしまったよ。本当に…申し訳ない。」

「い、いえ…お構い無く…。(あれトレーニングだったんだ…)」

先程の男性はさっきの様な簡素な服ではなく黒いズボンと、黒いジヤケットの下にネクタイを締めたワイシャツと身形を整えた姿となり、三十分間も待たせてしまった事を闇影達に詫びた。闇影は先程のそれを「トレーニング」だと聞き、少し眉をひくつかせながらも「気にはしていない」と返す。

「それで、彩盗巡の事について何か聞きたい事があると伺ったけど…君達は彼女とどういう関係で？」

「実は……」

男性の質問に闇影はこれまでの経緯を話した。巡が度々自分達の近くに現れては宝を奪う「仕事」をし続けていた事を…。無論、念の為自分がライダーである事は伏せて…。

「成程…君達の行く先々で彼女が宝を奪う為に彷徨っている…。彼女らしいと言えば彼女らしいな…。」

「あの人って…何をしたんですか？」

「彼女は、何が気に入らないのか…この平和な世界を破壊しようと



男性の名前を彩盜啓介と聞いた闇影達は絶叫して驚いた。

「まさかあいつに姉弟がいたなんて…!!」

「意外だよね…。」

「でもあんま似てねえな…。」

「お二人のなさっている事が見事に対称的ですからね…。」

盗賊である彼女の下に秩序を守る事に勤勉な弟がいると言う、ここまで対称的に割れた姉弟の存在に各々思う事を口に出す四人。

「こんな事を赤の他人である君達に頼むのは変なのかもしれないが、もし何か情報を入手しましたら連絡して欲しい。」

「は…はい…。」

再びリムジンに乗り、家に戻ろうとする四人だが、何故か闇影だけ乗ろうとせずにいる。

「どうしたの先生？」

「ごめん、ちょっと用事があるから先に帰ってきてくれないか？」

「それは困ります!!元帥からはお客様を御自宅まで丁重にお送りする様仰せつかりましたので…!!」

用事がある為黒深子達だけを帰させようとする闇影だが、運転手の男は啓介の命に背く様な真似は出来ないと困り顔で呼び止める。

「ああ、大丈夫です。用事がてらに買い物にも行きますので、この子達をお願いします。」

「え、あ…ちよつと!!お客様!!」

「闇影の奴、どうしたんだろ?」

「用事というのが気になりますね…。」

「(本当にただの用事なのかしら…?先生がああいう行動をする時は必ず何かありそうな気がするわ…。)」

しかしそれでもやんわりと断り、黒深子達を任せてその場を後にする闇影。黒深子は彼の後ろ姿を見て「彼の用事には何かがある」と推測する…。

「さっきのお節介男、何者なのかしら?」

「せやな、俺等とは違うライダーに変身して影を真つ赤なキバに変えよるしな…。」

一方人々から逃げ切った恵と健吾は、小休止しながら闇影の素性について話している。突如自分達とは違うライダーに変身し、影を真つ赤なキバ、即ちダークキバに変えるディライトの能力について…。



「あのおっちゃん、どっか『師匠』に似てるところがあると思うんやけど…恵の姉ちゃんはどない思う?」

「まあ、ちよつと無駄にお節介な所がそうかな。『あの人』と…。」

そして闇影が「師匠」や「あの人」等、「とある人物」と似ている所があると言い出す。すると恵は、その人物の事について思い出し始める…。

行くぞ!! 恵!! 健吾!!

良いわよ!! 啓介君!!

何時でも行けるで!! 師匠!!

変身!!!

【【F I · S · T · O · N】】

とある人物…啓介は恵と健吾を率いて、トルーパーナックルで白いアーマーにデイープライエローカラーの十字架を模したバイザーが特徴の「イクサトルーパー・イエロークロス」に変身し、恵のRC、健吾のGCと共に複数のラットFを率いている人物に向かっていく…。

ふふ…。

【R E A · D · Y】

変身…。

【F I · S · T · O · N】

イクサナツクルを構え、左目が隠れる程腰まで届く銀色の長髪に紺色のスーツを着た巡が変身した金色の十字架を模した赤い複眼に白いスーツが特徴の戦士・イクサに…。

「師匠は…ホンマの平和を取り戻す為に全力で戦ったんや…俺やかみさんになる恵の姉ちゃんと一緒に…！！それをあの女が…！」

「……………」

啓介は元々彼等のリーダーであり共に戦う仲間であり、健吾はその弟子に当たる存在、そして恵は彼の婚約者であったのだ。それをその姉である巡によりラットF達に奪われてしまった事を掌に拳を叩き付けて憤慨する健吾と静かに怒る恵。その時…

『見つけたぞ！！無法者共…！！』

八匹のラットF達が彼等に銃撃を仕掛けながら現れた…。

「さっきより多なつとるな…！！」

「何匹来たって関係ないわ…全部叩けばいいのよ…！！」

先程より二倍の数でラットFが現れた為ややたじろぎながらトルーパーナツクルを構える健吾だが、恵はそれを気にせず同じ動作をする。

「変身!!」

【F・I・S・T・O・N】

恵はイクサトルーパーRC、健吾はイクサトルーパーGCに変身しトルーパーカリバー・ソードモードとガンモードでラットF達に立ち向かう。最初は一匹ずつ倒す等優勢に見えるが…

「へエヤアアツツ!!」

「きゃあつ!!」

「ぐわあつ!!」

やはり数的に不利なのか、一匹のみに集中していると他の個体がその隙に攻撃を仕掛けて来る為、直ぐ様追い詰められつつある…。そこへ…

「はあつ!!」

「グアアアツツ!!」

胸元が大きく目立つ赤いタンクトップに素足が見える程極端に短いショートパンツと、異常に露出度の高い格好をした巡が、ディシーフドライバーでラットF一匹を斬り付けると、罫が入り砕け散った。



戦闘を終えたデイシーフにイクサトルーパーGCは彼女の肩を掴み  
勢い良く突っ掛かるうとした時…

『ジ…ジネエエツツ！！』

『！！しまった…まだ一匹生き残って…！！』

内一匹生き残っていたラットFは、息絶え絶えになりながらも黒い  
銃でデイシーフ等を撃ち殺そうとした。が…

【ATTACK-RIDE…LASER!】

『グアアアツツ！！』

別方向からデイライトのデイライトレーザー三発がラットFに直撃  
し、今度こそ完全に撃破された。

『詰めが甘いぞ、巡…。』

『闇影君…。』

『お節介男！！/影のおっちゃん！！』

『おっ、おっちゃんって…俺まだ23だよ！？…って、そんな事よ  
り色々聞きたい事があるんだけど…。』

イクサトルーパーGCの「お節介男」はともかく、イクサトルーパーGCに「おっちゃん」発言にズッコケながらも、自分はまだそんな年齢ではないと反論するデイライトは彼等の事情について聞き出

す…。

「啓介は何処にいるの？」

「お前…あんな事しといてよくもぬけぬけと師匠に会おうするなんてええ度胸しとんな…!!」

一旦人気の無い場所に移動した四人。巡は啓介の居場所を尋ねたが、健吾は答えるつもりは無いと彼女に突っ掛かる。

「あんな事…? どういう事だ？」

「闇影君には関係の無い事よ。」

「関係無くは無いな。俺はお前の弟さんに会って来たぞ。」

「えっ!?!? じゃ、じゃあ啓介が何処にいるのか知ってるのね!?!? 何処にいるの!?!?」

闇影に事情の説明を尋ねられた巡は関係無いと一蹴するが、啓介に会ったと言つ話を聞くと一変してその所在を尋ね出した。その様子は普段の冷静な彼女らしくなく、何処か焦っている様に見える…。

「はあ…人の質問に答えず一方的に質問するな。先ず何があったのかを言え。」

自分の質問に答えず逆に質問して来た巡に不快感を感じ溜め息を吐く闇影は、最初の質問に答える様ドスの利いた声で尋ねる。

「ここまで関わったのならあなたに話すわ…。この世界はラット達が法に則った支配をしているの…。」

「ラット？あのファンガイア達の事か。」

「そう。あいつ等は人々に徹底した正義や規則を無理矢理守らせているの。僅かな悪事も全て厳しく取り締まったりしてね…。」

「そうか、だからあの時の子はあんなに怯えていたのか…。」

恵からこの世界のルールを聞いた闇影は、あの自転車のスピード違反を犯した学生が異様に怯えていた理由を理解した。

この世界の「平和」や「正義」は全てラット達による支配によって成り立っており、例え一寸足らずの悪事も彼等にとっては「重罪」に値するのだ…。

「そして、その『重罪』を犯した人間は皆ラット達によって操られて絶対正義を遵守させられるの…。」

「なら、啓介さんもラット達に操られているかもしれないな…。」

白石家前

「うん…ああ…堅苦しかったなあ…。」

「そうですね、少し息苦しく感じました…。」

一方、家に到着した黒深子達。コウイチとツルギは啓介達の過剰なもてなしが堅苦しかった為か、大きく背伸びをしたり肩を動かしたりして身体を解している。

「にしても闇影の奴何処にいった？まさか一人で軟派しに行ったりとか？」

「あんたじゃあるまいし…携帯にかけて見たら？」

「そだな。え〜と携帯はと…あつたあつた。」

コウイチは、闇影が今何処にいるのかを知る為にズボンのポケットから携帯を取り出して連絡しようとした時…

『貴様！！家の前にゴミを捨てたな！？』

「えっ、えっ！？俺ゴミなんか捨てて…」

『とぼけるな！！なら貴様の足下にある物は何だ！？』

突然ラットFが三匹現れ、コウイチがゴミを捨てたのだと言い出し彼に詰め寄る。しかし、当の本人はゴミを捨てた覚えは無いと言うが、ラットFはコウイチの足下にあるポケットティッシュに指を差す。恐らく、先程携帯を取り出した時に一緒に落ちたのだろう。

「ちょ、ちょっと待てよ！？今のは偶々落ちただけで別にゴミをポイ捨てした訳じゃ…！！」

『黙れ！！僅かな過ちは臆て大きな過ちへと繋がる…！！』『完璧な



人間」への再教育の為、貴様を連行する！！』  
確かに、ゴミをポイ捨てしたのはならいざ知らず、ポケットティッシュを、それも落としたのは偶然である為それを罪と問うのは無理のある話なのだが、ラットF達にとっては「町を汚す」愚行である様で、コウイチを「完璧な人間への再教育」の為彼を捕獲しようとする。

「はっ…離せよっ！！！」

『抵抗する…グアツ！？』

「コウイチさんから離れて下さい！！！」

無理矢理コウイチを連れ去ろうとするラットFに、ツルギはサソードヤイバーで斬り付けて阻止をする。が…

『貴様：我々に武器を向けたな？我々の正義を邪魔する貴様も重罪だ！！おい！！』

今の抵抗がかえってラットF達の逆鱗に触れた為、ツルギも「反逆罪」と見なした。今の彼女の行動こそ、理不尽な「罪」で連れ去られようとするコウイチを助ける為の正当防衛に当たるのだが、ラットF達にとっては「反逆」に値するのだった。そう息巻くと…

『へエヤアアツツ…！！！！』

「なっ、何なんだよこれは…離せ！！離せよ！！！」

「急に数が増えて…っ痛…！？」

突然二十匹のラットFが一斉に現れ、コウイチとツルギを囲み出し彼等に抵抗の隙を与える事無く拘束し連れ去って行った。

「コウイチ！！ツルギちゃん！！早く先生に連絡しないと…！！」

唯一ラットF達に反抗しなかった（と言うよりする間が無かった）為無事だった黒深子は、急いで今起きた事を闇影に連絡するべく携帯に電話を掛ける…。

WONDERSKY本部兼？？？邸

「ふうむ…奴等が別世界の人間か…。」

「はい。残念ながら彼等はラット達に反抗する等間違った道を行んだ哀れな迷い子ですが、直ぐに真人間へと更正しますでしょう。」

青いウエーブのかかった髪に青いスーツを着た褐色肌の男性は、巨大なモニターに写っている別室に鎖で拘束されたコウイチとツルギを見て、彼等を「別世界の人間」だと言い興味深い目で眺め、啓介はラットF達に反抗した彼等を「哀れな迷い子」だと言い放つ。

「我等WONDERSKY総帥・アークス・ヴァルヴァロス様に忠誠を誓う正義の使徒として。」

「フッフ…全ては我が理想郷、絶対正義の世界の為に…！！」

「はっ…。」









うとするデイルライトは、自身の影をブレイド・キングフォームへとFSRさせた。

『皆、離れる！！』

【FINAL・ATTACK・RIDE…B・B・B・BLADE  
ー！】

『はあああ…ロイヤルストレートフラッシュー！』

『グギャアアアアツツツ！！！！』

デিশーフ達に離れる様指示を出しつつFARのカードを発動すると、デイルライトとSブレイドKFは黒と金、二つのロイヤルストレートフラッシュを放ちラットF達を全て殲滅させ、役目を終えたSブレイドKFは元の影に戻った。

『これでー安心…何っ！？』

『へエヤアアツツ…！！』

敵を全て倒しー安心するデイルライト達だが、またすぐに別のラットF達が現れた。それも、今度は今の倍の六十四匹で…

『そんな…あれだけ倒したのにまだ来るなんて…！！』

『無駄よ…ラット達は普通のファンガイアと違って一個体じゃなく複数で一匹なの…。』

『お前が呼んだんちゃやろな…？』

『は?』

あれだけの数を倒したにも関わらず、先程の倍の数のラットFが現れて嘆き出すイクサトルーパーRC。基本的にラットFは、通常のファンガイアとは違い一匹で一体ではなく、複数の群れが集まって一体なのである。そう淡々と答えるディシーフにイクサトルーパーGCは彼女が呼んだのでは、と疑い始める…。

『お前の事やから、裏切ったふりして俺等をあぶり出して一気に叩く真似は平気でやりかねへんからな!!』

『おい、今はそんな事言ってる場合じゃ…!!』

『へエヤアアツツ!!!!』

『『『『ぐあああつっ!!!／きやあつっ!!!』』』』

イクサトルーパーGCがディシーフを捲し立ててる隙を狙われ、ラットF達に一斉射撃を諸に喰らってしまう四人。

『くっ…!!』

立ち上がったディライトはカオスタッチを取り出し、コンプリートカードを挿入して操作する。

【RIKUGA! ANOTHER - AGITO! RYUGA! ORGA!

CULLIS! KABUKI! DARK - KABUTO! NEGA - DEN - O!



DARK - KIVA!】

【FINAL - KAMEN - RIDE... DELIGHT!】

デライトドライバーを右腰にスライドさせカオスタッチをバックルにセットすると、デライトはカオスフォームへと変化する。

『あなた...まだこんな力を持ってたの...!?!』

『さあ...導くよ...!』

デライトCFはライトブッカー・ソードモードを構えて走り出し、ラットF達を素早く斬り裂いて行く。

『はっ! やっ! ふっせいっ! だああっ!』

『ガアアアツツ!』

『鼠には猫で行くか...!』

デライトCFはラットF、即ち鼠に対抗するべく天敵の猫をモチーフとしたネガ電王・クローフォームの特殊武器・ペルクローを実体化、装備した。

『必殺! 猫まつしぐら...! にゃにゃにゃにゃにゃにゃにゃああっつ!』

『ガアアアツツ!』

『ニヤめんなよっ!...! てね』



イライトCFに戻った…。

『ふう…今度こそ何とか終わっ…!!』

六十四匹のラットFを殲滅し、今度こそ一安心したディライトCFがディシーフ達の方に目をやると…

『なっ、何をするの健吾君!!』

『ちよつと!!止めなさいよ襟立君!!』

『やかましい!!この落とし前はお前の命で償って貰うで!!』

イクサトルーパーGCがディシーフに「落とし前」を付けさせるべくトルーパーカリバーで彼女に斬り掛かっている光景だった…。次回、仮面ライダーディライト!

「変わってしまいましたね姉さん。嘗ては正義を信じていた貴女が泥棒になってしまつとは…」

「貴方も変わったわね、啓介…。」

嘗ての立場が入れ替わってしまった巡と啓介…

「お前がライダーの宝に拘っていたのは、弟を救う為だったんだな…。」

「解つたような口を利かないで!!」

明らかになる巡の過去…

「私は…私の正義を信じる…！！本当の正義を…！！」

「行くぞ…巡！！」

そして巡は、本当の正義を自覚し偽りの正義へと立ち向かって行く…！！

次回、『ディシーフ・オブ・ジャステイス』

全ての闇を、光へ導け！

第25導 デイシーフはお尋ね者？ 縛られた正義（後書き）

周「うおっ！！凄えシーンが見れたぜ！！」

今回の見所はオーズ風に例えれば…

一つ、巡は753ならぬ31103の姉である！！

二つ、巡の全裸でのバトルシーン！！

三つ、オーガの最終形態、グリッターフォームの登場！！

って所だ。

周「しっかし、ラット達がウゼエくらい多かったな…。雑魚も群れると始末が悪いとはよく言ったもんだ。」

まあな。さて皆様、今回現れたラットの数は合計で何匹だったでしょうつか！？正解者には商品がプレゼントされます！！（嘘です）

周「じゃあ言うなよ！！まあ良い。次回も楽しみにしてな！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9670k/>

---

仮面ライダーディライト-世界の光導者-

2011年12月11日16時48分発行